目次

母なるシステム、日本
母の王国、楽園としての日本社会
日本近代化と母なるシステム
ウェットな母性的日本社会における新規一括採用の根本的重要性

2．

母性からの解放を求めて －「母性依存症」からの脱却に向けた処方箋－
「お母さん依存症」の日本人
「母性社会論」批判の隠された戦略について －日本社会の最終支配者としての「母性」－
「母」「姑」視点の必要性 －日本女性学の今後取るべき途についての検討－
日本社会における母性支配のしくみ －「母子連合体」の「斜め重層構造」についての検討－
「母性的経営」 －日本の会社・官庁組織の母性による把握－
職場中心視点から家庭中心視点への転換が必要。
空母、充電器、チャージャーとしての日本家庭
日本における母性と女性との対立
姑と「女性解放」
日本家族における2つの結合
日本女性とマザコン
稲作農耕文化とマザコン
2つのマザコン
男性解放とマザコン認定
日本男性の母性化
日本における母子二人三脚
子の業績は、母の業績。
子育ての、社会支配に占める重要性
日本＝「男社会」の本当の立役者は「母」だ。
「母権社会」という呼び名に変えようこと。
母権社会が言われてこなかった理由。
「立てられる」存在としての日本男性と「母的存在」
「日本＝男社会」説は「日本＝母社会」説に修正されるべき。
人間湿布（息子＝男性に貼り付く日本の母）
日本的ファシズムと母性
姑社会、姑支配社会としての日本－日本人の姑根性－
姑思考、姑根性、姑イズム

「一億総出家」状況について
日本人の責任回避、転嫁と女性
アジア的停滞の原因、アジア的生産様式の担い手、東洋的専制主義の原因は、女性、母性にあり。
日本人の守られ願望
ミクロ文化とマクロ文化
原子型社会と分子型社会、原子行動と分子行動、性差との関連
日本の社会集団に働く表面張力と、女性、卵子との類似
欧米における女性の「過剰保護」とフェミニズムについて（「甘え」概念との関連）
先輩後輩制、親分子分制を打倒せよ！
日本社会と女性のパラレルな関係
雌国、牝国日本
日本人の「武装女子」指向
女（母）が強い国＝強国という図式。
日本アニメ女性声優の声の高さについて・・・女性性の原型保持と日本
日本人と国内、海外
表と奥
日本史における女性の地位低下の通説について
一枚岩ではない欧米。
男女闘争史観

２．

「家庭内管理職」論
日本女性と家計管理権限
日本女性と国際標準
日本社会における母性の充満
女性と社会主義、共産主義
日本主婦論争に欠けている視点
日本のフェミニズムの隠れた策略
専業主婦を求めて
日本のフェミニズムを批判すること。
日本のフェミニズムの主張には無理がある。
日本における女性の「社会進出」について
日本女性の経済的自立について
日本女性の「社会」的地位
「女らしさ」はいけないか？ －日本における女らしさの否定についての考察－。
「専業主婦」＝「役人」論

者 -
日本男性が、その本質は女性的にも関わらず、強く（男らしく）見える理由
日本男性の弱さについて
日本男性はなぜダメか？。
今後の日本男性が取るべき途。
日本のメンズリブを批判する　- 今後の日本のメンズリブが取るべき途 - 。
お母さんの息子、お父さんの娘
日本男性＝「母男」（母性的男性）論
日本の男社会は実質女社会。
日本男性はなぜ家事をしないか？。
仕事人間、会社人間になりやすい日本男性
「鵜飼型社会」からの脱却
日本の男性ジェンダー学者について
保守的な日本男性の「背後霊」
母の掌の上の日本男性
母への反抗を恐れる日本男性
女性による支配に対して声を上げない日本男性
日本社会の勝ち組男子は、実は負け組。
伝統的稲作農耕が日本男性弱体化の原因。
真の男女共同参画社会実現を
子育ての男女平等の実現
日本、中国、韓国における男の子優遇の本当の理由
男性が女性に対して抱く矛盾した感情。
欧米マスキュリズムと日本
真に支配力のある男性と、周囲の女性から立てられている男性とを区別するには？。
夫婦、男女の権力の強さを測定する尺度
２．
日本の家族は「家父長制」と言えるか？。
見かけだけの家父長制社会日本
日本における家父長像の誤解について
不在家長
日本の家庭を父権化する計画について
父性が母性に呑まれている。
父性無き「男社会」（だったこと。）
雷親父と母
日本社会への父性的宗教の導入と日本男性解放
日本の自然風土と強い父性の導入の是非

母権社会論

強い母の社会。
事例としての
日本社会。

IWAO OTSUKA

Table of Contents

従来母権制論の問題点
母権と母系、父権と父系の区別の必要性
日本社会における母権の無視、隠蔽
日本人は、母権社会論を読もうとしない。
日本男女の性的役割は「母と息子」。
日本社会で最強の存在
母なるシステム、日本
母の王国、楽園としての日本社会
日本近代化と母なるシステム
ウェットな母性的日本社会における新規一括採用の根本的重要性

2．

母性からの解放を求めて　-「母性依存症」からの脱却に向けた処方箋 -
「お母さん依存症」の日本人
「母性社会論」批判の隠された戦略について　-日本社会の最終支配者としての「母性」 -
「母」「姑」視点の必要性　- 日本女性学の今後取るべき途についての検討 -
日本社会における母性支配のしくみ　-「母子連合体」の「斜め重層構造」についての検討 -
「母性的経営」　- 日本の会社・官庁組織の母性による把握 -
職場中心視点から家庭中心視点への転換が必要。
空母、充電器、チャージャーとしての日本家庭
日本における母性と女性との対立
姑と「女性解放」
日本家族における2つの結合
日本女性とマザコン
稲作農耕文化とマザコン
2つのマザコン
男性解放とマザコン認定
日本男性の母性化
日本における母子二人三脚
子の業績は、母の業績。
子育ての、社会支配に占める重要性
日本 =「男社会」の本当の立役者は「母」だ。
「母権社会」という呼び名に変えようこと。

ジェンダー
日本女性の権力、支配力の源泉と、「女の空気」
ブラックホール＝女社会の解明が必要。
日本社会の解明と、女社会スパイの必要性
日本社会と女社会の特徴例
女社会、男社会と女流、男流
日本の男社会は実質女社会。
女脳の日本人
日本人の欧米指向は女性的。
方向感と性差、社会差
高関心社会と低関心社会
比較好き、相対評価好き
信号文化（暗示的主張文化）、受け取り文化、他力本願文化
日本人の依存体質、単独行動不可能性と迷惑意識の強さ、「一億総出家」状況について
日本人の責任回避、転嫁と女性
アジア的停滞の原因、アジア的生産様式の担い手、東洋的専制主義の原因は、女性、母性にあり。
日本人の守られ願望
ミクロ文化とマクロ文化
原子型社会と分子型社会、原子行動と分子行動、性差との関連
日本の社会集団に働く表面張力と、女性、卵子との類似
欧米における女性の「過剰保護」とフェミニズムについて（「甘え」概念との関連）
先輩後輩制、親分子分制を打倒せよ！
日本社会と女性のパラレルな関係
雌国、牝国日本
日本人の「武装女子」指向
女（母）が強い国＝強国という図式。
日本アニメ女性声優の声の高さについて・・・女性性の原型保持と日本
日本人と国内、海外
表と奥
日本史における女性の地位低下の通説について
一枚岩ではない欧米。
男女闘争史観

２．

「家庭内管理職」論
日本女性と家計管理権限
日本女性と国際標準
日本社会における母性の充満
女性と社会主義、共産主義
日本主婦論争に欠けている視点
日本のフェミニズムの隠れた策略
専業主婦を求めて
日本のフェミニズムを批判すること。
日本のフェミニズムの主張には無理がある。
日本における女性の「社会進出」について
日本女性の経済的自立について
日本女性の「社会」的地位
「女らしさ」はいけないか？ －日本における女らしさの否定についての考察－。
「専業主婦」＝「役人」論
少子高齢化対策と日本女性、専業主婦
家計管理の月番化について
男女の望ましいパワーバランスは50対50。
女性が暴走するとストップが効かない日本社会。
「女性的＝日本的」の相関主張に対する反応
夫婦別姓と女性
姓替わりと夫婦別姓
女社会、男社会と女流、男流
根本的に先進性が欠如する日本村社会、女社会。
日本の主婦利権を追及しようこと。
女社会の実態が分かりにくい理由。
「弱い」女性の立ち位置
女性と甘え
日本女性の専業主婦指向はリーズナブル。
お局と姉御？
女性的生き方の押しつけ
世間、空気と女性
日本を支配する4つの女性類型
日本女性が専業主婦になりたがる本当の理由。
日本女性と仕事と家庭の両立
日本男性による女性蔑視の根源
孤立無援になりがちな日本女性

女性による支配に対して声を上げない日本男性
日本社会の勝ち組男子は、実は負け組。
伝統的稲作農耕が日本男性弱体化の原因。
真の男女共同参画社会実現を
子育ての男女平等の実現
日本、中国、韓国における男の子優遇の本当の理由
男性が女性に対して抱く矛盾した感情。
欧米マスキュリズムと日本
真に支配力のある男性と、周囲の女性から立てられている男性とを区別するには？。
夫婦、男女の権力の強さを測定する尺度

２．

日本の家族は「家父長制」と言えるか？。
見かけだけの家父長制社会日本
日本における家父長像の誤解について
不在家長
日本の家庭を父権化する計画について
父性が母性に呑まれている。
父性無き「男社会」（だったこと。）
雷親父と母
日本社会への父性的宗教の導入と日本男性解放
日本の自然風土と強い父性の導入の是非
擬似家父長制から真の家父長制へ
日本の「名ばかり」家父長、あるいは、教育責任を取らされる学校
湿った父と湿った雪
妻、家族に冷遇される夫、父
会社人間、「男社会」の生成と、（家庭内での）父の居場所の無さ
日本における父性、父権確立の方法
家計管理権限を妻から奪取する方法
父性の母性的吸収に陥らないことが必要。
ジェンダーフリー思想と父性強化
日本社会の父性化革命の方法
日本の男性を子育てさせるには。

３．

自然環境のドライ・ウェットさと、社会のドライ・ウェットさとの関連
男性・女性、どちらの性格がよりウェット（ドライ）か？
日本人は、ドライかウェットか？。
ドライ・ウェットな対人行動と気体・液体分子運動との関連について
男性的，女性的なパーソナリティの認知と気体，液体分子運動パターンとの関係
父性的， 母性的なパーソナリティの認知と気体，液体分子運動パターンとの関係
アメリカ的，日本的なパーソナリティの認知と気体，液体分子運動パターンとの関係
女社会、男社会
付録図表

私の書籍についての関連情報。

参考文献。
私が執筆した全ての書籍。その一覧。
私の書籍の内容。それらの自動翻訳のプロセスについて。
私の略歴。

母権社会論
 - 強い母の社会。事例としての日本社会。

Social Theory of Maternal Authority.
-The society of strong mothers. Japanese society as a case study.-

Iwao Otsuka

要旨

本書では、日本社会において男女の性差がどのような影響をもたらしているか、従来の日本の女性学や日本のフェミニズムに再考を促す形で考察しています。
例えば、従来の日本女性学・日本フェミニズムの通説では、「日本社会は、男性中心、家父長制社会である」「女性は男性に比べ、世界どこでも普遍的に、弱い劣位の解放されるべき存在である」とされてきました。
本書では、こうした通説に疑問を抱いた筆者が、日本社会を調査したり、分析したりした結果をもとに、「ウェットな、液体的な日本社会は女性の方が強い、母性中心で動いている母権社会である」「日本男性こそが、女性、母性による支配から解放されるべき存在だ」などの主張を展開しています。
そうすることで、欧米フェミニズム思想を機械的に直輸入し、何も考えずに強引に日本社会にそのまま当てはめているだけの、現状の日本女性学・男性学、フェミニズムのあり方を批判しています。欧米理論の機械的直輸入ですっかり誤った方向に向かってしまった日本の女性学、フェミニズム、そして男性学が、本来どういう方向に向かうべきなのか、指針としてまとめ、提言しています。
本書では、日本社会における真の男女平等実現のために、日本男性の母性からの解放と父性の強化を提言しています。日本の男女の力関係を50:50に対等化するための施策について幅広く提案していますこと。

文中、各セクションは、それぞれ独立した読み物、エッセイとなっており、どこからでも読み始めることができます。

はじめに

本書の目的

本書の目的は、以下のように説明される。
(1) 欧米で定説になっているBachofen, EngelsらのMatriarchy理論（従来、母権制論と訳されてきたこと。）を打破するのが目的である。母親が権力を握る社会は消滅したとするこの定説をひっくり返し、母権社会は、今でも世界中の稲作農耕民族の間に広く存在し、一大勢力であると主張する。あるいは、Matriarchyの概念が、日本のような母権社会の正しい把握にとって不適切な概念であり、無くすべきと主張する。Matriarchyを母権制と訳すことを止めさせること。

(2)現状の日本フェミニズムを打破すること。すなわち、日本のフェミニズムが、本来、西欧のような父性社会向きの社会理論を直輸入して、機械的に、母親が強い日本社会に強引に当てはめる過ちを犯していると主張し、その是正を求める。日本のフェミニズム、女性学、男性学が本来どういう方向に向かうべきなのか、指針としてまとめ、提言する。

(3)日本社会の最終支配者が母であること、女性であることを明示する。日本社会の女性、母性による支配を打破すること。妻、母や姑からの男性解放を主張すること。日本における母性からの父性の解放を目指し、日本社会における父性を強化して、湿った日本社会のドライ化を目指すこと。日本社会における男女のパワーバランスを50:50へと平等化、対等化することを主張すること。

女性優位社会を形成する、社会の養成者が、強い母である。女性優位社会を形成する力の源泉は、母権である。彼女は、対外的な代表にならずに、社会を支配する。彼女は、社会を女性化する。女性優位社会を生み出す社会は、母権社会と呼べる。母権社会は、支配者

が表に出てこないので、Matriarchyにはなり得ない。従来のMatriarchyの定義は、女家長であり、女性が対外的な代表者になることである。それは、不適切な定義である。母権社会の支配者は、自分は表に立たずに、奥から社会を支配する。彼女は、代行の代表者を立てる。それは、父か夫か息子である。母権社会は、表向きは、Patriarchyである。しかし、母権社会では、父や夫や息子は、人格が未熟な、ただの暴君である。彼は、身体が大きくなった男児である。彼は心理的に、母や妻や娘に依存する。彼は、大人になったお子様である。彼は、心理的に、家父長たりえない。現状のPatriarchyの言葉の定義では、対外的な代表者が男性になると、社会支配者が男性ということになってしまう。それは、不適切である。対外代表者と支配者との概念の分離が、社会学や人類学では、新たに必要である。母権社会においては、対外的な代表者は男性だが、支配者は女性である。

筆者は、以下では、母性と父性の比較を行った上で、母権社会がどのようなものであるかを、日本社会を事例として説明する。そして、母権社会での男性の不利な扱いの是正はどうすれば可能かについて検討する。筆者は、それと同時に、母権社会を世界に広めるための戦略を検討する。

（初出 2012年1月）

母性と父性 - 態度の比較 -

まとめ

母性は、子供を自分の中に包み込んで保護しようとするのに対して、父性は、子供を自分から分離・独立させた上で、子供がうまく自活して行けるように、外からフォロー・援助を加えようとする、といった違いがあると考えられます。

簡単な要約：母性と父性

[要旨] 母性と父性の違いを一言で言えば、母性は「内部に閉じた」世界＝自分の子宮胎内相当の世界に子供を置こうとする、子供を親に「癒着・依存させる」性であり、一方、父性は「外部へと開かれた」世界に子供を置こうとする、子供に対して親からの「分離・自立を促す」性である、と言えます。

母性と父性の態度面での違いは、以下のような簡単な図で表すことができる。

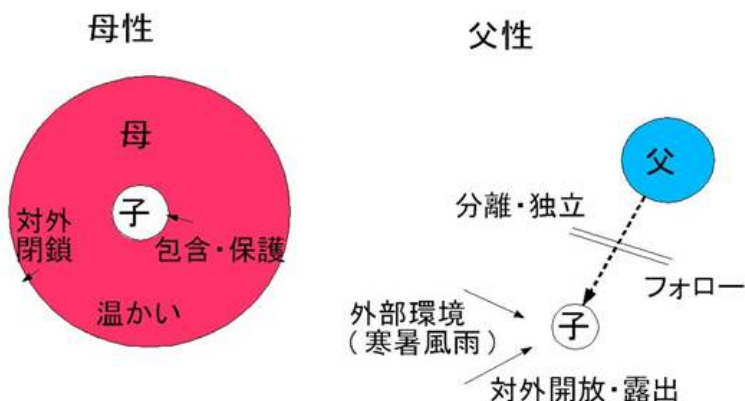



図　母性と父性の比較説明

上記の図では、母性は、相手(子供など)を自分の中に包み込んで保護しよう、守ろうとするのに対して、父性は、相手を自分から分離・独立させた上で、子供がうまく自活していくことができるように、外からフォロー・援助を加えようとする、といった違いがあると考えられる。
母性と父性の違いを一言で言えば、母性は「内部に閉じた」世界＝

自分の子宮胎内相当の世界に相手(子供)を置こうとする、子供を親に「癒着・依存させる」性であり、一方、父性は「外部へと開かれた」世界に相手(子供)を置こうとする、子供に対して親からの「分離・自立を促す」性である、と言える。
この場合、子供の役を取るのは、実の子供とは限らず、学校なら下級生とか、職場なら部下とか、いろいろバリエーションがある。母性、父性の役回りは、血縁でつながった家庭のみに止まらず、学校、職場等広く存在する。
両者の違いを、以下に簡単な表にまとめたので参照されたいこと。

番号	母性	父性
1	［援助・養育指向］	［自立促進指向］
1-1	［サポート・ケア、世話・心配］子供の身の回りを手取り足取りサポートすること。子供のことをあれこれ心配し、助けること。かいがいしく子供の世話を焼くこと。子供の面倒をよく見ること。子供を手厚く看病、介護すること。子供にベタベタすること。	［セルフケア促進］子供が自力で生活できるようになることを促す。子供が自分の面倒を自分で見るように、セルフケア、自立を促進させる。子供を遠くから見守ること。
1-2	［栄養付与］子供に栄養を与える(母乳等)こと。食事を与えること。	［道具・物資付与］子供に、生活に必要な道具、物資を与え、自力で操作、使用できるように教えること。
2	［受容・安心付与指向］	［指令・緊張付与指向］
2-1	［受容・受入］子供のことを「おいで」「いらっしゃい」と温かく迎え入れること。子供が何かいたずら、ミスをしても、「あらあらしょうがないわね」とひとまず受け入れてあげる。	［審判、拒絶、指令］子供に「これをしてはいけない」という法令を教える。法をもとに、客観的な診断に基づいて、悪いことをした子供のことを裁き、罰すること。「お前は私の子ではない」と拒絶する。容赦しないこ

		と。ミスをした子供を叱り、「こうするように」と指示、命令を出すこと。
2-2	［くつろぎ］子供を、自分の懐で安心させ、くつろがせること。子供をリラックスさせること。その場に居させること。子供を甘えさせること。「お疲れさま」と労うこと。	［緊張付与］子供を、ピリッとさせること。子供の目を覚ますこと。子供を甘えたり、油断させないこと。
3	［「内」「閉」指向］	［「外」「開」指向］
3-1	［包容・包含、抱擁］子供を、自分自身の中(子宮胎内)に相当する内部空間に、その全身を包み込む、抱く形で守ろうとする(子宮的思考)。	［切開］子供を閉じこめている閉鎖的な内部空間を切り裂き、子供を外部空間に置こうとすること。
3-2	［閉鎖・排他、内外区別］自分と子供のみからなる、外部に対して閉鎖的な空間を作ること。自分たちのいる空間内部＝「母の胎内」と外部とを峻別し、外部からのアクセスをシャットアウトすること。	［開放、内外非区別］子供を、外界に向かって開かれた、外部へのアクセスが可能な空間に置こうとする。子供に、外界への扉を開くこと。自分たちのいる空間と外部とは直接つながっていると考え、区別をしない。
3-3	［内部隠蔽・保護］子供を自分の中に包含した状態のまま保護し、引きこもって外出したがらない子供がそのまま中にいるのを許容する。内情を外部に漏らさず秘密にしようとすること。	［外部露出・公開］外に不安で出たがらない子供を、強制的に連れ出して、外の空気に触れさせること。外部環境に直接さらさせよう、公開しようとすること。

3-4	［気候一定、温室甘さ］自分の胎内相当の、温度一定で、体温程度の生温かい、ちょうど心地よい「ぬるま湯」的な温度の「甘えた」環境＝「温室」に子供を置こうとすること。	［気候変動、厳しさ］外部気候の変動や風雨に直接さらされ、酷暑、酷寒となることもある、(甘えのない)「厳しい」環境に子供を置こうとする。
3-5	［安全域内滞留］今いる安全の確保された(内部)領域から子供を外に出さないようにしようとすること。子供を危ない目に合わせないように気を付けること。	［冒険・探検］外部の、(危険も含めて)何が待ち構えているか分からない未知の領域へと、子供を冒険・探検に(知的なものも含めて)連れて行こうとする。
4	［接続・癒着指向］	［切断・分離指向］
4-1	［接続］子供と互いに密接につながろうとすること。	［切断］子供を自分から切り離して、一定の距離を置こうとすること。子供と母親との間に入って、両者の関係を切断すること。
4-2	［癒着・一体融合］子供と一体化すること。子供と互いにくっつき癒着するのを好み、相互の一体・融合感を重んじること。	［分離］子供に対して、互いに離れた、別々の存在であろうとすること。子供に、自分独自の世界を大切にするように教えること。
4-3	［依存させ］子供をいつまでも自分になつかせ、依存させたままでいようとする。	［突き放し］子供を、自分から突き放し、自分から離れて、自分一人で自活できるようにすること。自分の身は自分で守る態度を、子供に身につけさせる。
5	［同一指向］	［差異指向］

5-1	［平等］子供の間に格差ができないように、平等に扱おうとする。	［差別化］子供別に、彼らが得意・不得意とする分野を判別・設定し、分野の違いに応じて、各子供に対する扱いに差を付ける。
5-2	［非競争・画一］子供の間で競争をさせず、仲良く横並びさせる(能力を画一化する)ことで、子供同士の心理的な一体感、同一性を確保すること。	［自由競争・個性化］子供同士で自由に競争をさせ、子供間での能力格差の発生を容認すること。子供同士が、互いに異なる個性、能力を持つことを認め合うように誘導する。

一人の人は、母性だけ、父性だけ持っているのではなく、母性、父性を両方持っており、その割合が、女性では母性が多く、男性では父性が多くなると考えられる。
また、人が母性的、父性的というのは、性別、年齢、親子にも必ずしも関係しない。つまり、女性(男性)だからといって母性的(父性的)とは限らず、年齢が高い(低い)から、親(子)だから母性・父性的(子供的)とも言えない。
例えば、日本のようなウェットな雰囲気の会社や政党の派閥では、男性の上司、親分が、部下、手下に対して、一体感を重んじ、包容力のある母性的な態度を取ることが多い。
また、中高生の女の子(本来子供の役を取るはずの、比較的低年齢の人)が、いつまで経っても娘のような感じで依存的で頼りない母親に代わって、母性的な包容力で家族を引っ張っていくケースもあると思われる。
あるいは、日本のように、母性が優勢で、子供と父親の関わりが少なく、父性が不足している社会の場合、母性を担う母親が、父性を実行しない(できない)父親に代わって、ある程度父性の代行をする(子供を外界へと連れ出す、子供を叱るなど)役割をするという面もある。

[参考文献] 河合隼雄、母性社会日本の病理、1976、中央公論社 松本滋、父性的宗教・母性的宗教、1987、東京大学出版会

初出2003年5月-2005年11月

母性・父性と、女性性・男性性との関係

[要旨] 母性・父性は、それぞれ、女性・男性の子供を持つ親としての一側面を表していると考えられます。その点、母性、父性は、女性性、男性性の中に包含される、一部であると見ることができます。

母性、父性は、それぞれ、女性、男性の、自分の子供を持った親としての側面を表している。
その点、母性、父性は、それぞれ、女性性、男性性の、(親としての)一部、一側面として捉えることができる。 母性が女性性に対応し、父性が男性性に対応する。
母性、父性は、それぞれ女性性、男性性の中に包含される、一部であると言える(下図参照)。。

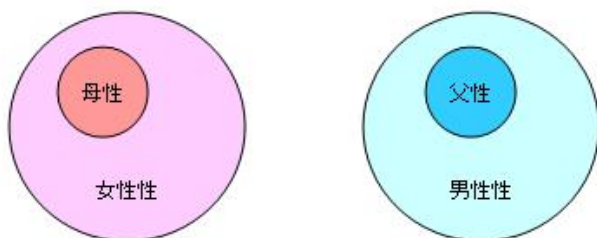



図　母性・父性と女性性・男性性の関係

子供を持った女性が母性を発揮し、同じく子供を持った男性が父性を発揮する。
女性、男性それぞれが、。

（１）庇護者としての側面 無力な子供に頼られる、子供を十分に守るパワーを持つ存在
（２）指導者、教育者としての側面 何も知らない子供に、生きていくのに必要な、有用なノウハウを教える存在。
（３）制御者としての側面 わがまま放題の子供に、きちんと言うことを聞かせる、コントロール、制御する存在
といった、子供を育てるのに必要な大人として成熟した存在となった時、それぞれ母性、父性を持ったと言うことができる。

中には、母親らしい男性、父親らしい女性もいると考えられるが、その場合、そもそも、基盤、出発点として、そうした男性は女性タイプであり、そうした女性は男性タイプであるため、その親としての側面を取り出した場合に、それぞれ母性的、父性的となるのだと考えられる。また、そうした男性、女性は、男性、女性全体の中では、性同一性障害を持っている少数派として位置づけられる。

初出2008年04月

子供と母性・父性関係の３類型

[要旨] 子供と父性・母性との関係は、以下のように分けることができます。（１）母子癒着型＝母親が子供を完全に内包し、その外側を父親が守るか、父親が母親に内包されるタイプ。（２）父介在型＝父親が外周を守りつつ、母親と子供との間に割って入る中間的なタイプ。（３）母子分離型＝父親が母親と子供の紐帯を完全に断ち切り、両者を分離するタイプ。（１）が社会において母性の力が強く(母権制)、日本社会に当てはまると言えます。

家庭における、子供と母性と父性の関係は、以下の図の3類型に分かれると考えられる。

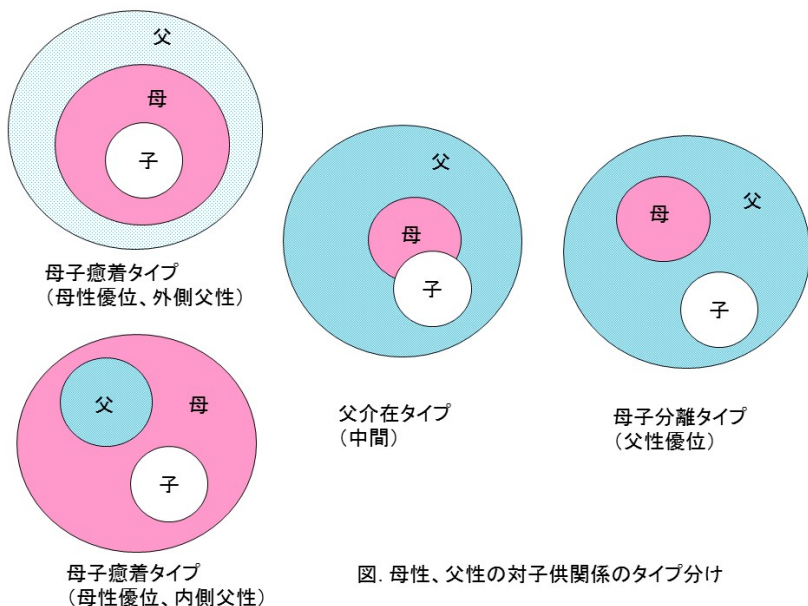



図. 母性、父性の対子供関係のタイプ分け

（１）母子癒着型 母親が子供を完全に包み込んで守り、そのさらに外周を父親が守るタイプ。母親が完全に子供と癒着しており、父親がその間に割って入ることができず、外側から見守っているタイプ。（母性優位。外側が父性。）あるいは父親が子供同様母親に包み込まれて甘えているタイプ。（母性優位。内側が父性。）日本社会では、このうち「母性優位で、内側が父性」の類型が多く見られると考えられる。

（２）父介在型 父親が、母親と子供の間に割って入り、父親が直接子供に接触し、見る割合が高いタイプ。
（３）母子分離型＝父親が母親と子供の紐帯を完全に断ち切り、両者を分離するタイプ。欧米社会では、この類型が多く見られると考えられる。

（１）の母子癒着型は、母親の力が強い、母性支配(母権制)社会のタイプである。（３）の母子分離型は、父親の力が強い、父性支配(父権制、家父長制)社会のタイプである。

初出2006年01月

父性・母性とドライさ・ウェットさとの関連

[要旨] ウェットな社会は、母性の力が強い「母権制社会」と言え、ドライな社会は、父性の力が強い「父権制」「家父長制」社会と言えます。

母性は、親と子が相互に一体化し、依存し合うことを指向する点、親と子が相互にベタベタくっついて離れない「ウェット」な性質を持つと言える。その点、ウェットな社会は、母性の力が強い「母権制」社会であると言える。
一方、父性は、親と子が、相互に分離独立することを指向する点、親と子が相互にバラバラに離れようとする「ドライ」な性質を持つと言える。その点、ドライな社会は、父性の力が強い「父権制」「家父長制」社会であると言える。

初出2003年5月-2004年7月

母性、父性と液体、気体

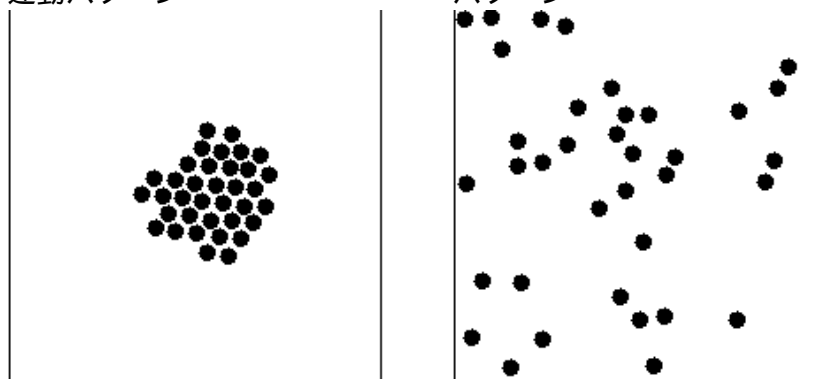
[要旨] 液体分子運動は、母性的に感じられ、気体分子運動は、父性

的に感じられるのではないかと考えられます。

以下に、液体（母性）、気体（父性）の運動、行動パターンを動画で示すこと。

※以下の動画は、池内満さんが作成された、「分子のおもちゃ箱」(mikeさんのサイト)　 http://mike1336.web.fc2.com/の 分子運動Javaプログラムをそのまま借用しています。無断転用を禁じますこと。

母性＝リキッドタイプ＝液体分子運動パターン

父性＝ガスタイプ＝気体分子運動パターン

母性的な行動様式は、液体分子運動として捉えられると考えられる。 液体分子運動では、各分子個体が互いにくっつき、一体化して、静的な受け身の集団を作り、集団が、その中に所属する各個体を包含し、守る形になっている。この点、母性の、自分の成員を一体的に包含し、外部から区別して守る性質に似ていると言えること。
一方、父性的な行動様式は、気体分子運動として捉えられるのではないかと考えられる。 気体分子運動では、各分子個体が、互いに独立、自立して、自分で自分を助け、守る形で、自由に動的に拡散し、動き回る。この点、父性の、自分の成員を積極的に自立、独立させて、未知の領域に進むように働きかける性質に似ていると言えること。

父性は、子供の行動の気体化を行い、母性は、子供の行動の液体化を行う。

初出2008年1月

父性・母性と子供の養育

[要旨] 従来、「子供を産み育てる性」は、専ら女性(母性)である、女性には子どもを養育したいという本能、「母性本能」を持つ、と考えられてきました。しかし、その考えについては、再検討が必要であると筆者は考えます。

従来、「子供を産み育てる性」は、専ら女性(母性)である、女性には子どもを養育したいという本能、「母性本能」を持つ、と考えられてきた。しかし、その考えについては、再検討が必要であると筆者は考える。
（１）「子供を産む性」は、従来は、女性(母性)と考えられてきた。しかし、実際には、子供の誕生には、父親側の遺伝子の存在が必須であり、母親だけで産むことはできない。また、母親が子供を産む際に、父親は、母親と子供の安全を外側から守るという機能を果たしている。その点、子供は、男女(父母)共同で産むものと考えるべきである。
（２）「子供を育てる性」は、従来は、女性(母性)であると考えられてきた。確かに、幼児に対する授乳は、母親でないと不可能な面があり、そういう点では、女性の専権事項である。しかし、授乳の期間が終わると、父親の、育児に対する介入が可能となってくる。

子育てについて言えば、例えば、父性の強い欧米社会では、子供が母親から引き離されて、個室で寝かされる慣習が存在する。これは、父性が、母子間の癒着関係の間に介入して、子供を母親から分離・独立させる働きをしていると考えられ、育児に父性が介入していることを示す好例である。ちなみに、母性の強い日本社会では、母親と子供が「川の字」状にくっついて寝る慣習となっている。
また、欧米社会では、子供の身の回りの世話に父親が関わる時間が、日本のように母親が専ら子供の面倒を見る社会に比べて、より多めであるとされる。（増田光吉「アメリカの家族・日本の家族」1969、NHK出版。）
子育てにおいて、子供と父親(母親)の結びつきが強いことと、社会が父性的(母性的)であることとの間には、大きな関係があると考えられる。日本のように、子供の面倒を母親が専ら見る社会は、母性的(母権制)であり、一方、欧米のように、子供の養育に父親の介入度が大きい社会は、父性的(家父長制)である、と言える。
そもそも、自分の子供に大きく健康に賢く育ってほしい、そのためにできる限りの支援を子供に対してしたいという子育ての衝動は、父親も母親も、親として共通に持っていると考えられる。あるいは、自分の子供と心の触れ合いを持ちたい、自分の持っているノウハウや価値観を子供に伝えたい、子どもと共有したいという考えは、親なら男女を問わず、同じように内蔵している。
こうした子育て、子供との触れ合いを求める衝動は、「親(としての)本能(parental instinct)」とでも呼べるものであり、それが、親が男性であるか、女性であるかによって、「父性本能」「母性本能」に分類されるものと考えられる。
従来は、子供と近接して触れ合うタイプの接し方をする母性が、傍目からは子供にぴったりくっついているため、子供の世話を、よりかいがいしくしていると見られ、それゆえ、子育ては全世界において母性の専権事項と考えられやすかった。
しかし、欧米社会のように、父性の持つ、子供に対する独立、自立心の涵養を目指した子育てへの積極的介入が、育児における母子分離という形をとって、実際に行われている社会が存在するのも事実である。
欧米社会のような父性的社会の場合は、父親の管理、主導下で、母親が、子供の世話を家事雑事の一環として、父親(夫)に従属する形で行っているというのが実情であると考えられる。その点では、子育ては、少なくとも父性的社会においては、必ずしも母親の専権事項とは言えず、むしろ、子育てに対して父親の心理的な影響力が大きく働いていると言える。
日本のように母親と子供が癒着するタイプの、母性の力が(父性に

比べて)優勢な社会では、もともと子育ては母親が独占するもので、父親は関係ないとされてきた。それゆえ、子育ては母親の専権事項であるとする「母性本能」イデオロギーがより受け入れられやすかったと言える。
しかし、子育ては母親が行うものだと言っても、父性の支配下で家事労働の一環として行う欧米社会(父性的)と、母親が子育て上の意思決定を独占する日本社会(母性的)とでは、同じ母親による子育てといっても、「母性」の子育てに影響する度合い、濃密さに、相当の格差、違いがあることは否めない事実である。
日本における女性の地位保全という観点からは、母親は、従来通り子育ての権限を手放さないのが得策と言える。そのことに、無頓着なまま、欧米流の、母性の薄い社会、ないし、母性が子育てにおいて主導権を握れない社会の「母親は子育ての雑事から解放されるべきだ」とする論調を機械的に日本社会に当てはめようとする人たちが多すぎるのではないか。
ただし、日本においては、従来は、子育てのためいったん会社を辞めると、満足な形での再就職が難しいという問題があり、それが、会社での仕事に生きがいを見出してきた女性たちには不満となっており、それが女性の子育て回避(例えば出生率の低下)につながっているのは事実である。
今後は、日本社会においては、「子育てか、会社の仕事か」という二者択一ではなく、一定期間は子育てに集中し、その後、会社の仕事に全面的に復帰するという、「子育ても、会社の仕事も両方追求する」という生き方が、母親にとって望ましいものとして求められると考えられる。そのためにも、会社における母親の育児休業期間の延長とか、母親の再就職における育児退職前のキャリアの正当な評価とかがよりなされやすい労働環境を作り上げることが必要と思われる。
もっとも、これは、日本社会において今後も、従来通り子育てを母親が独占するという仮定での話である。日本社会における父性と母性との影響力の均衡という点からは、日本の父親はもっと積極的に子育てに参加するのが望ましいということも一見言えそうである。
しかし、そもそも日本の父親には父性が欠如しており、母親と子供との癒着構造の間に割って入れないため、例え子育てに参加したとしても、母親(妻)の主導下で、便利な労働力提供者としてこき使われるだけに終わる可能性が大きいのが実情であろう。それを避けるには、日本の父親には、何らかの形で、外部から父性の注入(輸入。）が必要であり、例えば、父性的な欧米社会の父親をモデルにするということが考えられる。

初出2003年5月-2004年7月

母性、父性スキルの世代間伝達

[要旨] 母性、父性は、女性性、男性性をベースにしつつ、子育て機能、スキルとして、新たに別途上乗せで後天的に習得、獲得、世代間でバトンタッチすべきものですが、場合によっては消失し、バトンミスの世代間連鎖が起きてしまいます。その際の対策について述べていますこと。

いつまでも実質的に女のままで母になれないのが、欧米女性であり、いつまでも実質的に男のままで父になれないのが、日本男性である。要するに、子供を生むだけで、積極的に育てようとしない、子どもと直接向きあおうとせず、もう一方の性に子育てを任せて、自分は子育てから逃げようとするのである。
母性、父性は、女性性、男性性をベースにしつつ、子育て機能、スキルとして、新たに別途上乗せで後天的に習得、獲得、世代間でバトンタッチすべきものであるといえる。
日本女性のように、強い母性を持つ女性が母親の場合、母性のバトンタッチが娘に対してはスムーズに行く。ところが一方では、息子の父性を消して、弱めてしまう、紛失してしまう副作用がある。
一方、欧米男性のように、強い父性を持つ男性が父親の場合、父性

のバトンタッチが息子に対してはスムーズに行く。ところが一方では、娘の母性を消して、弱めてしまう、紛失してしまう副作用がある。
欧米女性のように、父性の影響力が強く、母性消失の女性が母親だと、次世代の子供である娘が母性を受け取れず、バトンミスが生じる。その結果、母性消失の世代間連鎖が起きる。
日本男性のように、母性の影響力が強く、父性消失の男性が父親だと、次世代の子供である息子が父性を受け取れず、バトンミスが生じる。その結果、父性消失の世代間連鎖が起きる。
こうしたバトンミスが起きたら、誰か他に母性的女性、父性的男性をそれぞれモデルにして、母性、父性を受け取る必要が生じる。
母性を消失した欧米女性は、母性の強い日本の母から母性を受け取れば良い。
父性を消失した日本男性は、父性の強い欧米の父から父性を受け取れば良い。
受け取り方は、フィクション、ノンフィクションの映画、アニメ、書籍とかから学ぶのでも良いし、実際に生身の母性的女性、父性的男性から、講師、コーチになってもらって、学校形式で教えてもらうのでも良い。
母性、父性学習用のコンピュータソフトとかがあっても良いかもしれない。
要するに、母性、父性スキルのモデル学習が必要だということになる。
その際、何のスキルをどのように習得すれば良いのかが問題となる。また、例えば、母性の強い日本では、母性スキルについては作れるが、父性スキルについては作れない。

初出2012年8月

母性と「かわいさ」指向

[要旨] 母性は、自分より小さいか弱い存在を、自分の子供同様に、

守ってあげたい、抱きしめたい、一体化したい、包み込みたいという、「かわいさ」指向と関係があります。その際、抱きしめるのに心地よい丸い、ソフトな存在を求める傾向があります。
一方、父性は、対象(子供、ロボットなど)を、外部環境がもたらす困難を切り裂き、打ち破ることができ、広大な環境空間の中を幅広く活躍できるだけの、スケールが大きく、強力で堅固な存在にしようとする、「強大な鋼鉄」指向と関係があります。

母性は、自分より小さいか弱い存在を、自分の子供同様に、守ってあげたい、抱きしめたい、一体化したい、包み込みたいという、「かわいさ」指向と関係がある。その際、抱きしめるのに心地よい丸い、ソフトな存在を求める傾向がある。
一方、父性は、対象(子供、ロボットなど)を、外部環境がもたらす困難を切り裂き、打ち破ることができ、広大な環境空間の中を幅広く活躍できるだけの、スケールが大きく、強力で堅固な存在にしようとする、「強大な鋼鉄」指向と関係がある。

	［母性的態度］	［父性的態度］
全般	［かわいさ(pretty)指向］かわいいもの(赤ん坊、小さなペットなど)の保育に興味がある。	［強大な鋼鉄(mighty steel)指向］対象を、頑丈で鋭さを備えた強大なものに育てることに興味がある。
1	［小ささ(little)指向］小さいものを好むこと。	［大きさ(big,large)指向］スケールの大きい、壮大なものを好むこと。
2	［か弱さ(delicate)指向］か弱いものを好むこと。	［強さ(strong)指向］強いものを好むこと。
3	［細やかさ(detail)指向］物事のきめ細かな把握を好む 手先の器用さを大事にすること。	［粗さ(rough)指向］物事の大まかな把握を好むこと。
4	［円形(round)指向］先の丸いものを好むこと。	［鋭角(sharp)指向］先の尖った、鋭いものを好むこと。
5	［柔らかさ(soft)指	［硬さ、固さ)(hard)

	向］柔らかいものを好むこと。	指向］硬い(固い)ものを好むこと。
→ 派生1	［特定(specific)□限定(limited)指向］枝葉末節にこだわるのを好むこと。	［大局・一般(general)指向］大局的なものの見方を好むこと。

「かわいい」ものとは、そのもの、対象に接することで、自分の中に母性を見る、母を感じるもののことである。自分がその対象、相手の母になったかのような感じを抱く対象、相手のことを「かわいい」と称することになる。
例えば、女子高生たちが中高年男性のことを「あのおじさん、かわいい」と言う時、彼女たちは、自分の中に「母」を見ているのであり、無意識のうちに、母になって「おじさん」を包含し、抱きしめたい、守ってあげたい気分になっているのである。

女性（日本女性のような母性的女性）は、「かわいい」という概念を発明した立役者であると言える。日本のアニメ、コミック、フィギュアとかに見られる「かわいい」、「萌える」（いわゆる「美少女」「美少年」）キャラクターデザインの発明に大きく貢献していると考えられること。これは、「かわいい独創」という言葉で表現できる。

初出2003年5月-2004年7月

母性的組織と父性的組織

[要旨] 母性的組織は、組織によって成員が「抱かれ、守られる」感覚を重んじます。組織が母であり、成員は子である。父性的組織では、組織に属する各成員が、互いに他者とは分離、独立した形で、父親代わりの管理者によるコントロールを受けながら自由に目標を

達成しようとします。

会社や官庁といった、社会組織についても、他項で述べた、母性と父性の区別が当てはまる。
母性的組織は、それ自体が、一つの大きな「母的存在」として成員の前に現れる。母性的組織に入ることは、「母の胎内」に入り込み、その中に抱かれるのと同じ感覚を、成員に与える。
母性的組織は、組織によって成員が「抱かれ、守られる」感覚を重んじる。組織が母であり、成員は子である。どこまでが「母の胎内」に相当するか、範囲に明確な境界線を引こうとするため、組織の内と外を峻別しようとする。内部の一体感を重要視し、外部に対して閉鎖的であること。内部では、互いの温かい、時として「体温＝ぬるま湯」的な一体融合、和合感を維持するため、同調・協調性、組織全体への奉仕が重んじられ、成員への干渉の度合いが著しい。
母性的組織の成員は、母としての組織に自身を完全に呑み込まれた状態となり、組織に対して、全ての精力、エネルギーを吐き出し、組織に吸い取られる。この場合、成員は完全に組織に一体化し、成員の全人格が組織に帰属、没入するかのように捉えられる。いったん、組織に入ると、組織から不要と見なされて排出される以外抜け出ることが難しい。
父性的組織では、組織に属する各成員が、互いに他者とは分離、独立した形で、父親代わりの管理者によるコントロールを受けながら自由に目標を達成しようとする。組織は外部に向かって開かれており、内外の区別は緩い。成員は、組織の一員である前に、一個の独立した自由な個人であることを保証される。組織から抜けることが簡単である。

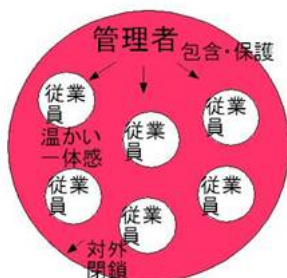
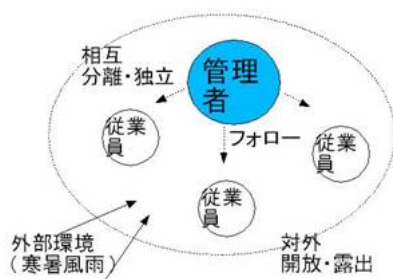
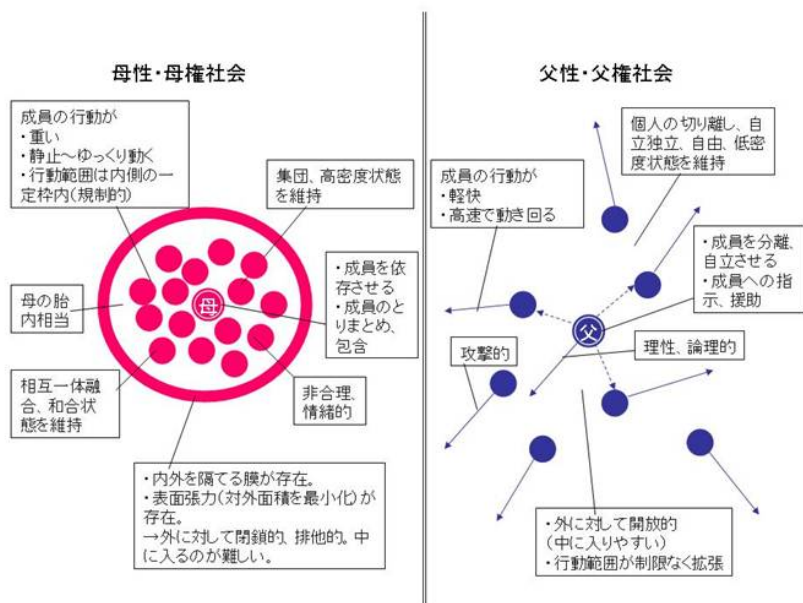



図　母性的組織と父性的組織

母性的組織では、組織の管理者は、(例え男性であっても)母親代わりの役割を成員に対して果たし、一方、父性的組織では、管理者は父親代わりとなる。
ちなみに、日本の会社や官庁は、組織のあり方が母性的であり、欧米のそれは父性的であると考えられる。
この他、特定の目的を達成するための組織以外の、地域社会(例えば集落)のような、成員の要求を包括的に叶える社会集団であるコミュニティに対しても、「母性的コミュニティ」（例えば日本のムラ）、「父性的コミュニティ」（例えば欧米の村落）というのを想定可能であること。
あるいは、全体社会に対しても、「母性的社会。（母性社会。母性優位社会。母性支配社会。）」（例えば日本社会）、「父性的社会。（父性社会。父性優位社会。父性支配社会。）」（例えば欧米社会）というのを想定可能であること。
それらの性質は、母性的組織、父性的組織と共通である。

初出2003年5月-2007年7月

母性・母権社会と父性・父権社会

[要旨] 母性・母権社会は、内外を区別し、内部の一定枠内で相互に一体化し、和合することを指向します。母は成員全体の取りまとめ、包含を行います。父性・父権社会は、対外的に開かれており、個々の成員が相互に自立独立して、高速で動き回ることを指向します。父は成員への指示、援助を行います。

母性・母権社会は、内外を区別し、内部の一定枠内で相互に一体化し、和合することを指向する。成員は母の胎内に抱かれて、守られている。母は成員を依存させ、全体の取りまとめ、包含を行う。
父性・父権社会は、対外的に開かれており、個々の成員が相互に自立独立して、高速で動き回ることを指向する。父は成員を（母胎から分離して）自立させ、必要な指示、援助を行うこと。

初出2008年07月

父の掟、母の掟

「父の掟」で動く社会が欧米社会であり、男社会である。
「母の掟」で動く社会が日本村社会であり、女社会である。
社会的掟の供給源は、父だけのものではない。
母由来で作られたものが多く存在する。例えば、和合や所属の重視、排他性であること。
母の掟を子供に埋め込むのが母のしつけであり、母性的母、母性的父によって行われる。父の掟を子供に埋め込むのが父のしつけであり、父性的父、父性的母によって行われる。
河合隼雄は、こうした母性的母、母性的父をそれぞれ土壌を扱う農耕社会由来とみなして、土の母、土の父と呼んでいる。一方、父性的母、父性的父を、天空と結びつきのある遊牧社会由来とみなして、天の母、天の父と呼んでいること。
従来のフロイト、ユングのような西欧流の父の掟によって動く社会の考えでは、父が母子一体感を壊して、社会的規範を教えこむのであるとされているが、これは、全世界的に通用する考えではない。
日本社会のように母の掟によって動く社会では、母が、自ら社会的規範を握っており、知っており、メインの役割で子供に教え込むことが行われている。そこでは、父の役割は副次的なものとなってしまっている。

初出2014年04月

母性的国家と父性的国家

[要旨] 外部から何をやっているか「カーテン」を引かれたように見えにくい鎖国・内閉的な国家、国民同士の一体感、和合、一致団結を偏重し、規制・社会統制を好む国家は、母性的です。一方、国民の自立、バラバラさを許容し、個人の自由を尊重するとともに、外部に対して開かれた国家は、父性的です。

組織における母性と父性との対比を国家のレベルで考えれば、国家が一人の巨大な母として立ち現れる母性的国家と、父として立ち現れる父性的国家が存在すると言える。外部から何をやっているか「カーテン」を引かれたように見えにくい鎖国・内閉的な国家、国民同士の一体感、和合、一致団結を偏重し、規制・社会統制を好む国家は、母性的である。一方、国民の自立、バラバラさを許容し、個人の自由を尊重するとともに、外部に対して開かれた国家は、父性的である。

1980年代まで続いた、個人の自由と権利を重視する欧米の自由主義陣営と、国家集団全体の利益を優先するロシア、中国といった社会主義陣営の対立も、自由主義陣営＝父性優位の陣営、社会主義陣営＝母性優位の陣営と見ることが出来、それゆえ、父性と母性の対立として見ることが可能である。
ちなみに、日本は、表向きは父性的な自由主義陣営に属していたが、その実態は、国家による統制の行き届いた、官公庁や企業集団の存続を第一に考える、社会主義陣営に近い母性的な体制であった。そのため、欧米から「日本異質論」を唱えられ、対応に苦慮することになったと考えられること。
かつての社会主義国のうち、中国やロシア、現在の北朝鮮は皆、母性的な方に入る。そして、強く欧米先進国の仲間入りを指向し、欧米と精神的に一体化したかに見える日本も、その国民性をよく調べると実は、「ムラ的」「浪花節的」人間関係が根底に色濃く存在しており、母性的な方に入ると言える。母性的国家としての日本は、父性的な欧米国家の一員とは決して言えず、むしろ中国、ロシア、北朝鮮の仲間に入る。

初出2003年5月-2004年7月

愛国心の違いと父性、母性

ドライで気体的な父性的な欧米の国は、国民各自が自由にバラバラ

に独立して飛べる状態を、これまで通り保持してくれるようにするために、いわば国が、自分たちの自由を確保してくれる状態を失わないようにするために、国の維持に協力する、命を投げ出そうとするのであり、これが愛国心の源となっている。
一方、ウェットで液体的な母性的な日本の国は、国民各自が、その内部に入る形で所属して完全に一体融合化した対象の国と運命を共にする、自分たちを規制する国のために命を投げ出そうとするのであり、これが愛国心の源となっている。

初出2014年4月

近代的自我と父性・母性

[要旨] 欧米における自由主義、個人とプライバシーの尊重といったドライな近代的自我に合致しているのが父性であり、逆に、相互の一体・融合感を重んじて、個人を集団に従属させるのを好むウェットな母性は、西欧近代的自我に反する、ないし西欧近代的自我を殺す存在です。

欧米における自由主義、個人とプライバシーの尊重といったドライな近代的自我に合致しているのが父性であり、逆に、相互の一体・融合感を重んじて、個人を集団に従属させるのを好むウェットな母性は、西欧近代的自我に反する、ないし近代的自我を殺す存在である。
自立したバラバラな個人が自由に動くのを理想とする近代以降の西欧やアメリカは父性の強さが確立された社会であると言える。一方、西欧近代に見られるような自我が確立しておらず、個人の自立の程度が未成熟、弱いと言われる日本、中国、ロシアといった社会は、個人を集団の中に一体化・埋没させ、全体が一丸となって動くようにするのを得意とする母性が優位であると言える。
そういう意味では、西欧における近代的自我の確立は、母性の抹殺

と女性の弱体化につながるものであったと言える。
女性解放を目指す欧米フェミニズムは、本来なら、母性の回復、強化を求めて、近代的自我が、所属集団の中へと融解し溶けてなくなり、個々人が集団の中に心地よく一体感をもって融合することを目指すべきだったのではないか。要するに、欧米フェミニストたちは、母性の強い、ウェットな集団主義社会である東アジアやロシアなどを模範とすべきだったのである。
現在の欧米フェミニズムのように、西欧近代的な確固とした自我を維持しつつ、女性性や母性を強めることを主張するのは、互いに矛盾しており、本来不可能なことである。そうした矛盾に気がついていないところが、西欧フェミニストの弱いところであろう。
例えば、リベラル・フェミニズムのように、個人の自由を唱えながら、一方で女性の力の拡大を主張するのは、明らかに間違っている。本来、母性は、個人の自由よりもその所属する集団への奉仕、調和を優先するものだからである。個人の自由を重んじるというのであれば、従来通り、ドライな父性の下で、女性たちは抑圧されたままくすぶり続ける他ないのである。
欧米フェミニストたちは、男尊女卑で女性が差別されていると言われながら、実際には、妻＝母が家庭の財布や子供の教育の実権を握って、夫を「濡れ落ち葉」扱いし、姑が息子と嫁を強権的に支配する日本のような母性支配社会の実態をもっとよく知るべきなのではなかろうか。
本来、それを助ける役目を果たすのが日本の女性学者、フェミニストたちであるべきなのに、彼ら自身が、欧米フェミニストの作った理論をそのまま日本に直輸入してして当てはめるのに忙しく、日本社会の母性優位の実態に疎いというのは皮肉な現実である。
何はともあれ、個人の自立を目指す西欧的近代性＝父性中心の価値観と、個我の集団への融解、一体化を目指す母性的価値観とは互いに相反する存在であり、そのままでは共存はあり得ない。この難しい共存の道を何とか考え出すことこそが、性差心理学・社会学の研究者に今後求められる課題であると言える。

初出2003年5月-2004年7月

父性・母性と民主主義

民主主義の基盤をなす、個人の自由、個人の人権の尊重、個人間の平等、といった価値観の生成については、母性と父性とでその担当する役割が異なっていると考えられる。
個人の自由、個人の人権の尊重については、その実現には、個人がある程度自律性を持って、互いに分離して動き回れることが必要である。これは、母性の中には内在しない、母性には生み出すことができない価値観である。個人が全体に温かく包み込まれることを目指す母性は、個人の全体との調和、協調や、全体のための個人の奉仕、犠牲といった価値観に専ら傾きがちだからである。その点、個人間の相互分離、独立を促進するドライな父性の出番となること。
一方、個人間の平等という価値観については、個人間の非差別、同一視を指向する母性が主導権をもっていると考えられる。

初出2003年5月-2004年7月

母性的・父性的住宅・オフィス

[要旨] 日本の住宅、オフィスのように、内部が、仕切りがない大部屋か、仕切りはあっても、ふすまのように薄かったり、すぐ取り外せるようになっており、外部に向かって高い壁を作って外界と隔てられている構造のものは、内部の成員間の一体感を重視し、対外的に閉鎖的である点、母性的と言えます。

日本の住宅やオフィスは、母性的な特徴を、欧米の住宅やオフィスは、父性的な特徴を持っていると言える。 なぜそうなるかと言えば、その中に入居する個人や組織が、それぞれ母性的、父性的であ

るからと言える。
母性的住宅・オフィスは、内部での成員間の一体感を重視する。すなわち、「○○家」「○○会社」の住宅・オフィスの内部が、仕切りがない大部屋か、仕切りはあっても、ふすまのように薄かったり、すぐ取り外せるようになっている。その点「みんないっしょ」の作りとなっていること。各成員は、互いに他の成員の挙動を見ながら、仕事をしたり、居住する。その点、成員間のプライバシーがない。
これに対して、父性的住宅・オフィスは、内部での個々人の分離、独立を重視する。すなわち、住宅・オフィスの内部が、鍵付きの個室になっていたり、机毎に高い頑丈な衝立で仕切られていて、各成員の独立性、プライバシーを重視する構造になっている。

母性的住宅・オフィスは、外部に向かって閉じている。例えば、一戸建ての住宅では、外部に向かって、高い壁や柵が張りめぐらされており、外界から隔てられ、よそ者の侵入を許さない閉鎖的な構造になっている。
これに対して、父性的住宅・オフィスは、外部に向かって開いている。例えば、一戸建ての住宅では、外に向かって庭が柵なしに露出している。
母性的住宅・オフィスは、成員にとってはそれ自体、母の胎内に相当する。住宅・オフィスの内部では、成員相互の温かい一体感に満ちた交流があり、それは、外部に向かって閉じた内輪の世界限定のものである。
ちなみに、日本の神社は、建物、境内を母の胎内に見立てているという説がある。

初出2005年10月

母性的職業、父性的職業

[要旨] 母性的職業では、職員が相手のことを温かく受容し、相手に対して、サポート、ケア、世話を行うのに対して、父性的職業では、職員が相手に対して、相手の自立、独立を促進し(相手を突き放し)、守るべき指針や一人で生き抜いていくために必要な知識を与えるとともに、法を守らなかった相手を処罰します。

母性的職業においては、職員は、相手を自分の子供同様に、温かく受け入れ、手厚く世話、サポート、ケアする。
母性的職業には、次のようなものがあげられる。

（１）子供の世話、サポート、ケアを行うこと。保育士、幼稚園～小学校教諭。
（２）病人の世話、サポート、ケア、介助を行うこと。看護師。カウンセラー。介護福祉士。
（３）乗客の世話、サポート、ケアを行うこと。
（４）家族の世話、サポート、ケアを行うこと。主婦。
（５）顧客に、くつろぎ、安息の場を提供すること。旅館・ホテル職員。
（６）顧客の栄養摂取についてサポート、ケア、設計すること。栄養士。

父性的職業においては、職員は、相手の自立、独立を促進し(相手を突き放し)、守るべき指針や一人で生き抜いていくために必要な知識を与えるとともに、客観的な見地から冷静な診断を下し、法を守らなかった相手を処罰する。
父性的職業には、次のようなものがあげられる。
（１）顧客に生活に必要な道具、物資の操作方法を教えること。教官。
(2a)顧客に守るべき法令を与えること。法律家。
(2b)顧客に、客観的診断、審判を下すこと。医者。審判員。裁判官。
(2b)顧客を切開・手術して直すこと。顧客に懲罰を与え、更生させること。医者。裁判官。保護観察官。

初出2005年11月

密着操作、遠隔操作と母性、父性

母性社会では、相手に対して密着しながら相手を操作しようとする、密着操作がメインとなる。
父性社会では、相手から離れて、リモコン、ラジコンのように相手に指令、命令を行う、遠隔操作を図るのがメインとなる。
初出2013年10月

相互監視社会と父性、母性

父性社会の場合、相手を監視して、相手より優位になろう、相手を支配しようとする動き（アメリカ政府による国民盗聴等）と、相手の監視から自由になろうとする動きとが、互いに拮抗し、せめぎ合う。そのため、一方的な監視社会にはなりにくい。
母性社会の場合、互いに相手を監視しようとする方しか存在しないこと。監視から自由になろうとする動きが余り無い。そのため相互監視、牽制社会になること。

初出2013年10月

慈愛、厳しさと父性、母性

父性と母性は、以下のように分類される。

慈父　慈母　　子供を優しく受け入れ認めること。

厳父　厳母　　子供を厳しくしつけ叱ること。

父　子供を親から切り離して必要な指示を与えつつ自由に自己責任

で行動させること。

母　子供を親の範囲内に癒着させ包含しつつ、子供にしつこく命令して行動を束縛すること。

父親、母親の行動は、それぞれ慈父～厳父、慈母～厳母を兼ね備えたものになっていて、必要に応じて両者を使い分けていると考えられる。
従来は、父親が厳しさを、母親が慈愛を代表すると考えられてきたが、父親にも子供をあまり叱らず、行動の模範を自ら示して子供に提示し、それを受け入れた子供を誉める慈父タイプがおり、一方、母親にも、嫁いびりをする姑と同様に、子供に対して常日頃から厳しく接し、□責、駄目出しを繰り返す厳母タイプがいると考えられる。慈愛、厳しさは、母性、父性の一方のみに存在すると考えてはならず、母性、父性の両方に存在すると考えるべきである。

初出 2018年7月

母権社会としての日本 - 支配者としての母、姑 -

１．

日本社会は母権社会である　 - 行動様式のドライ・ウェットさの視点から - 。

〔１．

現代日本のフェミニズムは、欧米社会で唱えられた女性解放論を、そのまま日本に直輸入して、男尊女卑など、女性が差別されているように見える現象に当てはめて考えようとしている。結果として、「日本は男性中心社会である」「日本の家族は家父長制である」といった解釈を行っている。女性の地位は、男性に比べて、全世界どこでも普遍的に低い（女性は、普遍的に男性より弱い。）ものであると見なし、声高に、「低い」女性の地位を向上させようとしていること。
ところが、一方では、「日本は母性原理で動く社会である」「日本の国民性は女性優位である」といったように、日本の社会が持つ女性優位性格を示唆する言説も、かなりの数見られるのも事実である。（そのほとんどは、一言印象を述べただけのものであるが。）筆者は、以下に、その例をいくつかあげる。
日本社会の女性優位性格については、以下の通りである。
例えば、〔芳賀綏1979〕では、日本人像のアウトラインを、「《おだやかで、キメこまかく、ウェットで、『女性的』で、内気な》ややスケールの小さい人間たちの集団」と述べていること。
あるいは、〔会田雄次1979〕では、「日本社会の伝統的な特徴を一口でいえば昔から『女流』の国だったということに尽きよう．．．．いつの世にも広く文化一般に女性が活躍している．．．日本文化はもとより社会そのものが、『女性的』性格を強く帯びており、男性優位な時代というのは、戦国時代と幕末から明治という外患と変革と動乱が重なった短い２期間しかなかった．．．．この本来的に「女々しい」が平和な国は、男性優位資質を帯びるのは外国から強い危機が感じられたときに限られる。その危機が克服されたり、去ってしまったりすると、またもとの女流の世界になる．．」、と述べていること。
または、〔木村尚三郎1974〕では、「日本人の能力は一般に『女性的』能力であり、いわゆる「学校での頭の良さ」がある．．欧米の学問、科学と技術、芸術をみごとに習得はするが、新しい境地をひらく、学者、思想家、芸術家となると、国際的にまことに数少ない．．．日本人の心的態度はおそらく秩序形成的、『女性的』、あるいは伝統的、農業的であるといえよう．．」と述べていること。
〔佐々木孝次 1985〕では、「女性にとって日本ほど気楽で居やすい社会というのは、他にないと思います。女性が精神的な意味で、すっかりこの社会を支配していますし、別に女性が支配しようと一所懸命になっているわけでなく、男のほうが、自分の幼児性を乗り越えられないで、どこにでもお母さんを作ってしまうからなのです。…男性が無差別に母親を求めるという状態からなんとか自分を解放しないと、一方で女性がウーマン・リブをとなえても、笑い話

になってしまう。」と述べていること。

〔Ben-Ami Shillony 2003〕では、日本の天皇制が、女性優位性格を持っていると指摘していること。
日本社会を母性社会、母権社会と見なす考えについては、。
〔河合隼雄1976〕では、「母性原理は、「包含する」機能で示され、すべてのものを絶対的な平等性をもって包み込む。それは、母子一体というのが根本原理である。．．．日本社会は、『母性原理』を基礎に持った「永遠の少年」型社会といえる。」と述べていること。
〔山下悦子 1988〕では、「家父長的「いえ」制度といわれるものが、・・・「いえ」の王たる家父長が超越的に君臨する西欧的な家父長制と違って、日本の場合は家父長たる息子の母親が実質的な力を持つ」と述べている。
〔山村賢明 1971〕では、日本の女性の地位について、「妻＝嫁と母＝主婦の間には同一にあつかえない差異があることがわかる。前者の地位においては、たしかに低かったかもしれないが、後者の地位においては決してそうではなかったのではなかろうか。かねて筆者は、日本の母はそうとうな高い地位とそれに伴う重要な役割をもっていたはずだ…」と述べている。
〔Kenrick 1991〕では、日本の妻が、家庭で家計管理の権限を握り、夫に対して小遣いを渡すさまを、母権制ではないかと指摘している。
〔Ederer 1991〕では、教育ママゴン等の実例を元に、日本において家庭の中心にいるのは女性であり、日本の社会を母親の権力に基づいたものとして捉えている。日本の母親が教育者であり、夫と子供を業績と出世に駆り立てていると指摘している。
日本社会は、男性・女性、どちらのペースで動いているのであろうか？あるいは、日本においては、実質的には、男女どちらが勢力・地位として上なのであろうか？以下においては、この疑問について、対人感覚のドライ・ウェットさをキーとして、解明を試みている。
〔２．
この項では、行動様式のドライ・ウェットさと、性別・社会・自然環境のあり方との関係について述べる。
行動様式のドライ・ウェットさ（個人の取る行動が、周囲の人にドライ・ウェットな感覚を与えるのはどのような場合か、についての分類。）は、筆者の調査によれば、個人主義－集団主義、自由主義－規制主義．．．など、10数項目からなっていること。これらの項目を全て合わせると、人間の様々な行動様式を、一通り説明するに

足る、十分包括的・網羅的な内容を持っていること。このことから、人間の多様な行動様式を、「ドライ」ないし「ウェット」の一言で総括すること。（ひとまとめにして考えること。）そのことが、可能である。
筆者は今回、。
(1)対人感覚（人がその行動・振る舞いによって、他者に与える感覚。）
(2)自然環境の乾湿（ドライ・ウェット）に対応する社会のあり方（遊牧・農耕）のドライ・ウェットさ
(3)人間の性別（男女）と、取る行動のドライ・ウェットさの面からの性差
について、相互の関連性を検証したこと。
その結果、これら(1)~(3)の間の相関関係を取ると、

対人感覚	自然環境	社会のあり方	当てはまる性
ウェット	湿潤（ウェット）	農耕	女性
ドライ	乾燥（ドライ）	遊牧	男性

という関係が成り立つことを確認した。
調査した結果、行動様式のドライ・ウェットさの次元で、行動様式の男女性差に関する学説の大半をカバーできていることが分かった。
この中から、社会のあり方と、性別との関係を取り出して見ると、
農耕＝女性
遊牧＝男性
という結びつきが成り立つ。
この結びつきについては、。
(1)文化人類学の分野では、例えば、[石田英一郎1956][石田英一郎1967]において、。
竜蛇の形をとった水神が、農耕の神として崇められ、同時にまた原初の女神として人類の始祖となるというのが、大地母神の基本的性格である。植物の採取、ひいてはその栽培に人間の生活が依存するとき、そうした営みの担当者として女性の地位が中心的である。農耕的＝母権的な文化基盤を持つといえること。
馬をめぐるもろもろの文化要素は、内陸草原地帯に由来する、遊牧的、父権的、合理的、上天信仰的な文化の系統に属する。（以上、筆者による要約。）
といった説明がなされている。
石田の説明から判断すると、自然環境と宗教との関連は、。
遊牧＝ 天空の父なる神（男性神）＝ 天空を指向すること。
農耕＝ 大地の女神（女性神）＝ 大地を指向すること。

という関係が成り立ち、「農耕＝女性（＝ウェット）」、「遊牧＝男性（＝ドライ）」の、相互結合を支持する結果が出ている。
石田は、農耕＝母権的、遊牧＝父権的という図式も、同時に提示している。これは、いいかえれば、農耕社会では、女性（母親）が支配し、遊牧社会では、男性（父親）が支配する、ということになる。
(2)地理学の分野では、例えば、[千葉徳爾 1978]で、。
「農耕は、定着して、作物成熟の遅々とした進行を待つ。緻密で倦むことのない繰り返しを必要とするが、女性は、体質・体格ともに男性よりはるかに適している。女性が農耕を主宰することで、作物により高い生産力を期待できる。農耕社会は、女性優位である。農耕のもととなる採集文化は、女から進化した。
「牧畜社会では、軍事行動の必要と、家畜管理上の要求から、体力的に優位にある男子青壮年が重視され、老人と女性・子供の地位が低い。家庭では夫の権力は妻より高い。」（以上、筆者による要約）
といった説明がなされている。
これらの関係が本当に成り立っているかどうかを、性格・態度のドライ・ウェットさを調べるアンケート調査（1999.5～7）で確認したところ、以下のように、予想通り当たっていることが分かった。
詳しくは、著者の湿度感覚と気体、液体に関する著作を参照されたい。

番号	項目内容（仮説＝ドライ）	-ドライ-	どちらでもない。	-ドライ-	項目内容（仮説＝ウェット）	-Z得点-	有意
C12	男性優位であること。	46.154	24.434	29.412	考え方が女性優位であること。	2.863	0.01
A11	一ヵ所に定着せずあちこち動き回ること。	50.450	20.721	28.829	一ヵ所に定着して動かないこと。	3.618	0.01
B10	遊牧生	62.727	20.909	16.364	農耕生	7.733	0.01

	活を好むこと。				活を好むこと。		
C33	天空を指向すること。	45.249	23.982	30.769	考え方が大地を指向すること。	2.469	0.01

結局、アンケート結果では、。
(1)女性＝ウェット＝農耕、男性＝ドライ＝遊牧という結びつきがある。
(2)ドライ/ウェット性格・態度の内容は、社会的性格を捉えるに十分に網羅的である。
ということが確認された。
(a)農耕社会では、女性が社会運営の主導権を握る、ないし、社会を動かす最も基盤の位置を占有する、社会の根本部分を支配する。その理由は、社会が女性向き（女性優位）にできていないと、農耕型の社会を要求する自然条件に適合して行けないからであること。言い換えれば、社会が女性のペースで動くことになる。その点、女性の方が、実質的な地位・勢力が上である。
(b)遊牧社会では、男性が社会運営の主導権を握る。その理由は、社会が男性向け（男性優位）にできていないと、遊牧的社会体制を要求する自然条件に適合して行けないからであること。社会は、男性のペースで動き、男性の方が、実質的な地位・勢力が上である。
以上まとめると、
農耕社会 女性向き（女性が支配する。）
遊牧社会 男性向き（男性が支配する。）
ということになること。

社会において、生活様式が農耕が支配的になり、農耕民が強くなると、社会における女性、母の地位が向上し、男性、父の地位が低下する。一方、生活様式が遊牧、牧畜が支配的になり、遊牧、牧畜民が強くなると、社会における男性、父の地位が向上し、女性、母の地位が低下する。

(2008年5月 追記）父権制・母権制と気体（ガス）・液体（リキッド）タイプ
上記の対人感覚のドライ、ウェットさは、物理的な「気体（ガス）」や「液体（リキッド）」と関係がある。
詳しくは、筆者の湿度感覚と気体、液体に関する著作を参照された

い。

この気体、液体タイプの分類から、農耕社会と女性の支配（母権制）、遊牧社会と男性の支配（父権制）との関係を見ることが可能である。
アメリカは、遊牧社会タイプに属し、日本は、農耕社会タイプに属する。
アンケート調査を行った結果、
アメリカ的パーソナリティと気体分子運動、日本的パーソナリティと液体分子運動が相関することが分かった。
また、男性優位パーソナリティと気体分子運動、女性優位パーソナリティと液体分子運動が相関することが分かった。
このことより、
アメリカ的＝遊牧社会＝気体的（ガスタイプ）＝男性優位＝父権制
日本的＝農耕社会＝液体的（リキッドタイプ）＝女性優位＝母権制
という関係が成り立つと言える。
〔３．
日本社会は、自然環境のドライ・ウェットさの分類から行くと、「湿潤気候＝農耕社会＝ウェット」という相関により、ウェットな社会であると、当然ながら、予想される。
筆者は、日本人の国民性が、どの程度ウェット/ドライかについて、文献調査を行った。
上記の調査結果からは、「伝統日本的」＝ウェット、という結果が出た。
また、筆者が抽出した、「ウェット」な行動様式は、「ウェット」という一言で、日本人の国民性（日本人の行動様式）に関する学説の大半を、カバーできていることが分かった。
一方、「女性優位」＝ウェットであること。
行動様式の「ウェットさ」への当てはまりの有無について、日本人の国民性（行動様式）と、女性優位性格（行動様式）との間の関係を、文献調査結果をもとに、洗い出してみたところ、両者（日本人－女性）の間に正の相関があることを確認した。
したがって、ドライ/ウェットの次元からは、日本的＝女性優位という図式が成り立ち、日本は女性が支配する社会である、ということになること。（女性が優位に立つこと。）
その理由付けは、。
(1a)日本の国民性が、ウェットである。農耕（特に稲作）社会だから、当然であること。
(1b)女性の性格が、ウェットである。

(2)ウェットな性格の内容は、十分に網羅的である（伝統的日本人の国民性についての学説、および男女の性差に関する学説の大半をカバーしていること。）こと。
(3)日本の国民性は、ウェットさを相関軸として考えた場合、女性優位であること。
ドライ - ウェット以外の次元でも、日本の国民性は、女性優位である。すなわち、安全指向、成功例の後追いをすること。（失敗を恐れ回避すること。）。冒険心の欠如。大組織への依存心の強さ。（寄らば大樹の陰。）それらが女性優位であることを示す例である。
女性優位（女らしさを示すこと。）行動様式についてのより詳しい説明は、筆者による、女らしさの生物学的貴重性の視点からの検討を行った文書を参照されたい。
なぜ、日本の国民性が女性化したかについては、次のように説明することができる。日本は稲作農耕を基盤にした社会であり、そこでは、土地への定着性や水利面での他者との相互依存など、行動様式としてウェットさが求められてきた。ウェットな行動様式を生み出す原動力は女性にある。（それは、男性にはない。）稲作農耕に適応するための社会のウェット化には、女性の社会全般への影響力が欠かせない。社会のウェット化に女性の力を利用する副作用として、社会における本来ウェットさとは無関係の領域にまで、女性の勢力が及ぶこと。（自分の取った行動に責任を取るか否か、取る行動の安全性に敏感かどうかなど、生物学的貴重さとは関係があるが、ウェットさとは関係がない領域。）その結果、男性の行動様式の女性化を含めて、日本社会全体が女性優位となったこと。（自分の保身のため、自分の取った行動の責任を周囲の他者に取ってもらおうとする無責任体制。自分の保身のため、安全さが確認されたことしかしようとしないこと。冒険心の欠如。）
社会において、女性の勢力が男性を上回るから、国民性が女性優位となるのであり、国民性がウェットなことは、日本社会において、女性が男性より強いことの証拠である。
日本社会が、男性中心社会というのは誤りである。実は、日本社会は、女性を中心に回っている。言い換えれば、日本社会の仕組みは女性向けにできており、男性には不向きである。
日本において、なぜ女性が強いか？まとめると、農耕（稲作）という，ウェットさ（定着性や対人関係面での相互依存など）を求める、したがって女性優位な行動様式を求める、自然環境に囲まれた社会だからであること。
〔４．
日本は、従来の通説と異なり、実際には、女性の勢力が男性のそれ

を上回る、女性優位＝母権制の社会である。日本を含む東アジアの稲作農耕社会は、対人関係にウェットさを必要とする自然環境であり、その下では、生得的によりウェットな女性が、有利であり、実際に家計管理権限などを掌握しているからである。
母権制は存在しないと言えるか？ 結論から言えば、存在しないとは、とても言えない＝「明らかに存在する」。農耕社会は、基本的には母権制である。
母権制の存在が、これまで認められなかった理由を、以下に、着眼点毎にまとめた。
1)「姓名」の付け方
母系制と混同したこと。男女どちらの姓が、子孫に継承されていくかについて、関心を払い過ぎた。姓が継承される方の性を強いと見なしたため、父親の姓が継承されることがほとんどだったことを、父親の強さと勘違いし、父権制があたかも全世界的な標準であることのように勘違いした。姓は、血縁関係を示す「看板」＝外に向けて掲げるものの役を果たす、いわば、「表」の世界のものである。男性の方が、表面に出やすい＝外に露出しやすいため、男性の方を付けるのが適当とされたと考えられる。これは、父権制とは、直接には、無関係であると思われる。
2）「財産」の所有・管理のあり方
2a)家庭における財産の所有・相続者の性が男女どちらかであるかに、関心を払い過ぎた。財産の名目的に所有する者と、実際に管理する者とが同一でない＝分離している場合があることに気づかなかった。名目的所有者が男女どちらかという方にのみ注意が行って、管理者が男女どちらかということに関心が足りない。ドライな遊牧社会では、両者は、男性ということで一致するが、農耕社会では、前者は男性のこともあるが、後者はたいてい女性である。
2b)財産を単に名目的に所有している者よりも、財産の出入り(財政)の実質的な管理権を握る方が、実質的な地位が上である、ということに気づかなかった。財産管理者(家計の財布を握る者)は、遊牧社会では、男性であるが、農耕社会では、女性である。これは、農耕社会の家庭では、女性の地位の方が実質的に上であることを示している。
3)「地域」毎の事情
3a)欧米では、自分の「家父長制」的な文化基準からは、母親がより強い文化があることを想像できなかった。父権制をデフォルトとみなし、「母権制は、遠い過去に消滅した」とする、欧米の学説(Bachofen、Engels)が主流となってしまったため、全世界的に、母権制の存在自体が考えられないものとされてしまった。
3b)日本など東アジアでは、男尊女卑を、男性支配(家父長制)と

混同したこと。あるいは、自分たちより先進的な欧米学説が母権制の存在を否定したため、それを権威主義的に無批判に受け入れてしまい、本当は自分たちが母権制文化を持つことに気づかなかった。
4)「自然環境」との関連
男女間での自然環境への適応度の違い、という視点が欠如していた。湿潤環境下で成立する農耕社会のように、「ウェットな人間関係が必要→女性がより適応的＝強い」という場合を、想定していなかった。
5)「公的組織上の地位」との関連
女性は、生物学的により貴重な性であるため、失敗を犯したことで責任を取らされて、社会の中で公然と生きていけなくなったり、助けてもらえなくなること、すなわち自己の保身ができなくなることを恐れる。公的組織（官庁、企業）において高い地位につくことは、社会的に大きな責任を伴うため、失敗時のリスクが非常に高いため、女性は、組織上の高い地位につくのを進んで避けようとする。その結果、組織上の高い地位は、男性が占めることになる。女性は組織上の高い地位に能力不足などで「つくことができない」のではなく、自己保身の都合上「自ら進んでつこうとしない、つかない、つくのを避ける」。したがって、従来のように、日本において、官庁、企業といった公的組織の高い地位につく人々の男女比率を見て、女性の数が少ないから、女性が弱い、と簡単に言い切ることはできない。女性は例え社会的影響力が強くても、公的組織上の高い地位を、自らの社会的責任回避、リスク回避を目的として、男性に押しつけている側面があるからである。
日本女性による男性支配は、主に、母＝息子関係を通じて行われる。日本の女性（母親）は、育児の過程で自分の子供との間に強い一体感を醸成し、自分の息子＝男性が自分に対して精神的に依存する、自分の言うがままに動くように仕向けることで、息子である男性に対して強い影響力を保持する。女性は、「教育ママ」として息子＝男性を社会的に高い地位につくように叱咤激励し、高い地位についた息子＝男性を、自分の操り人形、ロボットとして、思うがままに操縦、管理する。これなら、自分自身は社会的責任を負う必要なく、男性＝息子をダシにして強大な社会的影響力を行使できる。
妻と夫の関係も、妻＝女性が、夫＝男性を心理的に母親代わりに自分のもとへと依存させ、夫を高い地位へつくように競争に向かわせたり、高い地位についた夫＝男性の管理者として支配力を振るう点、上記の母と息子の関係に根本的に似ている。そうした点、日本の女性は、男性の生活や意識を管理、支配する＝男性を自分の思うがままに動く「ロボット」化する者として、社会的地位の高い男性よりも、さらに一段高い地位についていると言え、なおかつ、社会

的責任を取ることからはうまく逃れている。男性は、公的組織で例えどんなに高い地位についていても、女性に対して心理的に依存し、管理されている限り、女性に支配されていることになる。
なお、日本の公的組織(官庁、企業の職場)が男性中心であって、そこへの女性の進出が進まないのは、女性の高い地位につくことを避ける性向以外にも理由がある。それは、そこが、男性の自尊心を保持できる最後のとりでであること。(家族を経済的に支えているのは私をおいて他にいない、との誇りを保てること。)男性は、そこに女性が進出してくることを脅威に感じていること。それだからだと考えられる。男性側は、女性には、公的組織における自分の居場所を簡単に明け渡したくない。明け渡すと、せっかく保って来た見かけ上の高い地位からも一挙に転落し、最後の自尊心が消えてしまう。後は(見かけ・実質両面で男性を圧倒すること。)女性のペースに合わせてひたすら従うだけの社会的落伍者に成り果てるからであること。
6)「力の強弱」の見せ方との関連
6a)女性は、自分のことを、自ら進んで強いと、言わない(生物学的により貴重な性であるため、男性に守ってもらおうとして、自らを弱く見せること。)傾向がある。また、強いことを認めると、取る行動に社会的責任が生じてしまう。そこで、取った行動の失敗時に責任を取らなくて済むようにするために、自分のことを(例え実際は強者の立場に立っているとしても。)決して強いと認めず、弱いふりをする必要がある。そのため、自分が権力を握る強者であることを示す「母権制」という言葉を使うのを、好まない。その結果、母権制が存在しないかのように、考えられてしまった。
6b)男性は、自分のことを、進んで強く見せようとする傾向がある。強く見せることで、自分が自立した存在である(1人でいても、他に守ってくれる人がいなくても、十分大丈夫である、やっていける。あるいは、他者を自分の配下において、統率できること。)こと、ないし、女性を守る能力があること、を周囲にアピールしたがる。そこで、必要以上に、父の権力を強調しがちであったこと。その結果、父権制が一人歩きすることになってしまった。
7)「男尊女卑」現象についての解釈の仕方との関連
ある人のことを、他者よりも優先する場合には、「強者優先」と「弱者優先」との相反する2通りが存在する。「男尊女卑」は、男性優位なドライさを否定する農耕社会において、男性を社会的弱者として保護し、その人権・自尊心を保持するための、「弱者優先」の考え方である、と見なすのが正しい。これを、男性を強者と見なす「強者優先」と取り違えたこと。この点についての詳細は、男尊女卑の本質とは何かについてまとめたページを参照されたい。

注）男女間での力の強弱を説明しようとするモデルには、。
1)筋力・武力モデル（男性優位） 男の方が、筋力が強い。
2)生命力モデル（女性優位） 女性の方が、長生きである。
3)貴重性モデル（女性優位） 女性の方が、貴重であり、大切にされる。
4)環境適応モデル 乾燥＝遊牧＝（ドライ＝）男性優位、湿潤＝農耕＝（ウェット＝）女性優位。
5)育児担当者モデル（遊牧＝男性優位、農耕＝女性優位） 社会における男女の強弱は、自分の性に基づく行動様式を、子供にどれだけ多く吹き込めるかによって決まる。例えば女性が子供に対して、男性よりも、より多く自分の行動様式を吹き込めば、社会は女性化し、女性にとってより居心地のよいものとなる。
が考えられる。従来は、1ばかりが取り上げられ、3～5などは、ほとんど考慮されてこなかった。そのため、父権制＝男性優位が全世界的に通用するかの様に捉えられるという過失を招いた。3～5を考慮すれば、母権制＝女性優位という考えも十分成り立つことが分かる。
なお、5)育児は、女性（母性）の占有物とは、世界的には必ずしも言えない。Floidの精神分析論やParsonsの家族社会論に見られるように、欧米（遊牧系）社会では、育児への父親の介入や割り込みの度合いが強く、父親が育児のdirectorの役割をしている。日本のような農耕社会では、女性が育児のdirectorである。
なぜ女性は弱く見えるか？あるいは、自分を弱く見せるか？。
1)「筋力」モデル 筋力が男性よりも弱い。
2)「保護」モデル 男性よりも、生物学的に貴重であること。そのために、男性によって保護してもらいたがること。（男性によって保護してもらおうとすること。）（男性は、より貴重でない、使い捨ての性であること。）その保護してもらおうとする行動が、弱者が強者に保護してもらいたがる行動と混同された。
〔５．
以上述べたことをまとめると、女性の社会的な強さ（影響力、勢力の大きさ）、社会的地位の高さは、その社会のかもしだす雰囲（国民性、社会的性格）が女性優位、ウェットであるかどうかで決めるのが本筋であること。（最も確実であること。）そのように、筆者は考えている。ある社会の国民性は、その社会において最も大きな影響力、勢力を持つ者の色に染まる、一種のリトマス試験紙のようなものである。社会で女性がより強ければ、その社会の帯びる性格は女性優位になるであろう。要するに、国民性は、その国においてメジャーで強大な社会的勢力の色に染まるということであり、日本の国民性が女性優位であるということは、日本社会において女性が

支配的な力を振るっていることと関係していると考えられる。
従来のように、名目的な財産名義を持っていない、公的組織における高い地位についていない、などといった視点だけで、日本女性の地位を低いと決めつけることは、実は、社会のあり方と性差との関係を表面的にしか見ることができない、社会分析能力の低さをさらけ出していることに他ならない。日本社会は、伝統的な国民性としては、ウェット、液体的 = 女性優位であり、それはとりもなおさず、女性の勢力が男性のそれを大きく上回っている、社会において女性が男性よりも強い、社会が女性のペースで動いていることを示している。
従来の日本の女性学、フェミニズムは、性差心理学、すなわち男性女性の社会的性格と、日本人の国民性、すなわち日本の社会的性格との照合を怠っていたため、女性優位性格と日本人の社会的性格との相関に気づくことが出来ず、日本社会を男性優位と見なす誤った結論にはまったと考えられる。
今後、日本における女性の地位の高さを正当に評価する人々の数が少しでも増えることが、筆者の望みである。
注）以上述べた理論が、現在の日本で受け入れられる余地は少ないと考えられる。
1)男性→ 自分が優位であるという観念（優越感）。それが崩れて、不快に感じるため。自分を強者とおだててくれる、既存のフェミニズム理論へと向かうこと。
2)女性→ 自分の強さを認めようとしないこと。（それを認めると、自分を守ってくれる男性がいなくなると考えること。あるいは、認めると、自分が社会を支配している結果の責任を取らなくてはならなくなり、リスクが大きいと考えること。）そのため、弱いふりをしていたいこと。従来のフェミニズム・女性学の「男強女弱」という見解に固執すること。
上記の日本母権社会論の主張は、自分たちの保身、安全確保をしようとする、あるいは、自分たちが日本社会を支配することへの責任逃れをしようとする日本女性たちの退路を断つ、要するにあなたたちが本当の支配者だ、支配責任を取れ、と断じることで、女性たちの心理的急所を突く行為に当たり、女性たちとしては、不愉快であり、無視したいと考えられる。
〔参考文献〕
会田雄次:リーダーの条件,新潮社,1979
芳賀綏:日本人の表現心理,中央公論社,1979
石田英一郎:桃太郎の母,法政大学出版局,1956
石田英一郎:東西抄,筑摩書房,1967
G.Ederer Das Leise Laecheln Des Siegers, Econ Verlag, 1991（増田

靖 訳,勝者・日本の不思議な笑い - なぜ日本人はドイツ人よりうまくやるのか？, ダイヤモンド社, 1992。）
河合隼雄:母性社会日本の病理, 中央公論社,1976
D. M. Kenrick, Where Communism Works: The Success of Competitive-Communism in Japan, Tuttle, 1991（飯倉 健次 訳, なぜ“共産主義”が日本で成功したのか, 講談社, 1991。）
木村尚三郎:ヨーロッパとの対話, 日本経済新聞社,1974
佐々木孝次:母親と日本人，文藝春秋,1985
Ben-Ami Shillony, Enigma Of The Emperors: Sacred Subservience In Japanese History, Global Oriental, 2006（大谷 堅志郎 訳, 母なる天皇―女性的君主制の過去・現在・未来,講談社,2003）
千葉徳爾:農耕社会と牧畜社会（山田英世編 風土論序説 国書刊行会) 1978
山村賢明:日本人と母，東洋館出版社,1971
山下悦子:日本女性解放思想の起源，海鳴社,1988
（初出 1999年08月）

従来母権制論の問題点

母権制論は、従来BachofenやEngelsらによる「母権制は過去のもので、地球社会全体が父権制に既に移行済みである」という主張がそのまま疑いを持たれずに受け入れられている。
しかし、この「母権制は既に消滅した過去の遺産に過ぎない」という主張は、日本や東南アジアのような稲作農耕社会における、人々の国民性や、社会風土が母性優位であることを知らずに、相対的に父性優位のヨーロッパや中東付近の知見だけでなされたものである。
Bachofenらは、母性優位な、稲作農耕民の心理に無知だったし、調査範囲を東南アジアまで広げて考えることも怠ったまま、自分たちの社会が父権優位であることを正当化することを暗黙の目的として、「母権制は過去の遺物」という結論に達したのである。
Bachofenらヨーロッパの人は、遊牧、牧畜系の人たちであり、父権優位の彼ら遊牧、牧畜民にとって、「母権社会が父権社会に敗北し、消滅した」というのは、彼ら自分たちにとってはごく自然な結論であると言える。
しかし、その遊牧、牧畜民向け結論を、スコープの違う今なお母性優位の東アジアの稲作農耕民の社会にまで、適用可能かどうかを確認しないまま普遍化して持ち込もうとするのは、明らかな越権行為

であり、間違いであると言える。
西欧の母権制論者の、母権制は過去のもので、地球社会全体が父権制に移行したという主張は、父権の強い西欧のような遊牧、牧畜社会が自らの正当性を主張するためのイデオロギーであり、遊牧、牧畜民が自らの父権社会の社会タイプを世界標準化し、東アジアのような農耕民側にある母性の影響力を奪い、少なくすることで、農耕民に打ち勝ち、農耕民を支配するための策略の一種なのである。
当然、強い父権のもと女性が弱い立場に置かれ差別されていることを主張するフェミニズムも、西欧母権制論者と同じ戦略で、自らの遊牧、牧畜民の父権社会向け理論を世界標準として、残りの社会全体に強引に適用し、押しつけることで、世界において支配的地位を確立しようとするものである。
そういう背景があることに無知なまま、まんまと西欧遊牧、牧畜民の戦略にはまって、彼らのイデオロギーを一生懸命自分たちの社会に適用しようと宣伝しているのが、従来の日本の女性学者、フェミニストであると言える。
逆に考えれば、こうした西欧の母権制消滅論を日本社会に当てはめ、日本人の間にあまねく広めることで、日本社会における母権の強さを社会から葬り去ることが可能なのかもしれない。そういう点では、西欧の母権制論者の主張は、日本男性をその母親による支配から解放するために役立つとも言える。
（初出 2009年4月）

母権と母系、父権と父系の区別の必要性

母権制が消滅したと言われることは、事実に反する。日本の母親の力は強大であり、その点、日本社会は母権制と言うことが可能だからである。一方、母親を血縁の系譜代表として捉える母系制が消滅したと言われることについても、こちらもインドネシア等に実在するとされており、正しくない。日本社会については、母系制は当てはまらず、母権制のみ当てはまる。
母権制と母系制の混同がなぜ起きたのか？。
それは、Matriarchy（女家長制）の考えを生み出した欧米社会が主に家父長制、Patriarchyであったからと思われる。
家父長制においては、家族の対外代表者（姓、血縁系譜における代表者）と権力者が、両方共、父であり、一致しているのである。その点、代表している者には権力がある、あるいは逆に、権力ある者は代表している、という暗黙の了解が出来上がったと考えられる。
一方、日本社会は、母権制だが父系制であると言える。日本の母親

は支配者であり、権力は振るっているが、一家の代表責任者の役回りは父親にお任せにし、押し付けている。すなわち、自己の保身に支障が出る、対外的に外部露出する危ない大変な役回りは、父、男に押し付け、自分は、奥座敷で守られ、リスクを負うのを免除されているのを好むのである。そこには、自己の保身、安全第一の、より生物学的に貴重な性としての行動様式が見える。
このように、日本社会では、権力者と代表者が一致しないが、これは欧米のMatriarchyの概念では想定されていないのではないだろうか。
要するに、Matriarchyの概念においては、母親が対外的に代表者であり、かつ権力者であることを想定しており、そのため、家族の代表責任者と権力者の概念が混ざってしまっているのである。
これは、従来の「長」Headの概念が内包する問題点であるとも言える。「長」は代表責任者と権力者を兼ね備えた存在であり、「家長」Head of familyに当たる人物が、性別の観点から、父親の場合がpatriarchy、母親の場合がmatriarchyが成立していると呼ぼうとしたのだと考えられる。このpatriarchy、matriarchy両方とも、代表責任者と権力者、支配者の概念が混ざってしまっており、それが、「母権制は存在する、しない」といった、学説上の混乱の原因となっていると言える。
こうした混乱を解決するには、父母の、権力者、支配者としての側面を表す、母権、父権の概念と、代表責任者としての側面を表す母系、父系の概念とをはっきり別々に分けて表現する、世界で広く使用される欧米言語とかによる新たな用語を確立する必要があると考えられる。日本語では、母権制と母系制というように分けて表現可能だが、従来の欧米のmatriarchyの概念では混ざってしまい、分けることが不可能なため、新たな用語が必要になる。例えば、母権社会、母権制は、society of strong, powerful motherとかsociety of strong maternal powerとか言えば良いのであろうか。あるいは、母系社会、母系制は、society of maternal representativeとか言えば良いのであろうか。早急に決定する必要がある。
要するに、母権制の英語とかでの対応訳語は、従来のmatriarchyではマズいのである。新しい英語表現が必要である。Matriarchyは最近では女家長制と訳されるようになってきているようであるが、母権、母系を両方兼ね備えた時に成立する言葉であり、日本みたいに、母親の力が強い母権社会であるが、母親が家族を代表しない、すなわち母系社会ではない社会を表すには適当でない。
母親が家庭内で権力を振るう、支配する母権社会は、日本のような稲作農耕社会で普通に見られる。一方、母親が一家を代表する社会、一家の責任を取る母系社会は、日本では、ほとんど無いと考え

られる。この現状を、例えば英語で一言で簡単に言い表せるようになればと考えること。
（初出 2012年1月）

日本社会における母権の無視、隠蔽

なぜ、これまで日本社会は、母権社会でありながら、母権社会と言われてこなかったのか？あるいは、母権が無視、隠蔽されてきたのか？。
日本社会全般のあり方からは、以下の理由が考えられる。
(1)日本にとって権威筋に当たる欧米の言論が、母権制を過去のもので、もう存在しないと断定したため、とかく欧米の権威によりかかって物事を考える日本人は、日本社会は母権制ではない、家父長制だと、そのまま、きちんと確認を取ることなく思いこんでしまったためである。
日本男性のあり方からは、以下の理由が考えられる。
(1)これまで男尊女卑で、「自分は女より立場が上なのだ」として高いプライドを持って威張って生きてきた日本男性が、自分の社会的立場が、実際は女性に比べて決定的に弱いことを認めたくないためである。
(2)日本男性が自ら母の支配下に入っていること、マザコンであることを、女性に認識されると、恋愛対象として見てもらえなくなり、性的に値打ちが下がってしまうことを嫌うため、母の支配を公式に認めたくないためである。
日本女性のあり方からは、以下の理由が考えられる。
(1)日本女性が、自分のことを「お母さん」と呼ばれたくないためである。
女性は、一般に「お母さん」と呼ばれると、良い気分がしない、気分を害する傾向がある。
その理由は、。
・「お母さん」という言葉が、既婚で子供がいることを表すので、もう男性の恋愛対象でなくなっていること、。
・子供がいるほどに結婚年齢を重ね、歳を取っていて、もう若くなく、男性から女として見てもらえなくなっている、女の魅力が見てもらえなくなっていること、。
の確認がなされてしまうため、自分が性的に値打ちが下がっていることを否応なく認識させられ、性的意識の側面で喪失感を感じることによると考えられる。
その結果、日本女性は、自ら母として大きな権力を振るっているにも関わらず、「母であること」「母と呼ばれること」を良しとしな

い。そして、「母権」「母性」が強調されることを、ことさらに避けよう、無視しようとする。
(2)日本女性は、自ら母として社会を支配していることを認めてしまうと、そのことに対する社会的責任が生じてしまう。自己保身、安全第一を指向する女性にとっては、社会運営失敗時のリスクを取らねばならなくなるのが都合が悪くて、社会を支配していることを認めたくないため、母権という言葉を避けようとする。
(3) 自身の保身、安全の確保に人一倍敏感な日本女性は、対外的に代表となることを避けて、奥様でいようとする。日本女性が、自ら母として社会を支配していることを認めてしまうと、本来奥にいることで外から見えないはずの、その存在自体が外部に透けて見えて、表面から知られて、分かってしまい、「真の支配者が奥に潜んでいる」として、奥に踏み込まれる追撃の対象となってしまう。自己保身、安全第一を指向し、外に透けて見えない、より安全で温もりに満ちた奥の院に留まって社会を支配し続けようとする女性にとっては、支配者としての自身の存在が外部に明らかになってしまうことで、自身の身の安全が脅かされるのが都合が悪くて、社会を支配していることを公には認めたくないため、母権という言葉を避けようとする。
これらが、日本社会が実質母権社会でありながら、そう言われてこなかった大きな理由であると考えられる。
（初出 2012年3月）

日本人は、母権社会論を読もうとしない。

日本社会を母権社会の事例として扱う場合、以下の問題を予め把握しておくことが重要である。それは、日本人が母権社会論に対して取る態度の問題である。

日本人は、母権社会論を読もうとしない。日本人は、母権社会論を無視する。日本人は、母権社会論に反応しない。その理由は、以下の通りである。
日本人が、しきりと自分たちの社会を家父長制だと主張するのは、欧米諸国の仲間入りをしたいからである。日本社会の実態は、家父長制には、少しもなっていない。日本人は、欧米諸国を、自分たち同様の女流の定住集団のように見なして、その中に加入しよう、加入した状態を続けよう、異質と見なされて追放されないようにしようと必死である。その行動の裏には、日本人が持つ、中韓に対する

屈折した感情がある。日本人は、東アジアの圏内で、中韓から除け者にされてきたという不快な感情を、中韓に対して抱いている。日本人は、心の奥底では、自分たちは、中韓と同類だという無意識の認識がある。しかし、日本人は、それを認めたくない。日本人は、それを隠そうと懸命になっている。日本人は、自分たちは、欧米諸国の一員であって、東アジアの一員ではないと、必死に主張する。
日本人は、見かけだけでも家父長制になろうと必死である。日本人は、盛んに日本女性の弱さを強調し、男性優位を主張する。日本人は、その証拠として、日本女性が企業に進出しないことや、日本女性が役職に就かないことを、盛んに持ち出す。しかし、誰かが、日本女性が、日本男性に小遣いを与えている支配者の立場にいることを指摘すると、日本人は、それを無視する。日本人は、そのことを、学校の教科書に決して載せない。
日本男性は、女性や母親への依存心を告白すると、日本女性から、結婚してもらえなくなるので、告白することが出来ない。日本女性は、姑による支配を恐れるので、姑との同居の発生を断固拒否する。日本男性が母親への依存心を見せると、姑との同居発生確率が高いことが判明する。日本女性は、それが不快である。一方、日本女性は、自分の息子をいつまでも手元に置いて、愛でていたい。日本女性は、息子と同居したい。そうした矛盾した心理が露見することを回避するため、日本女性は、このことを話題にしたがらないし、この話題を避ける。

日本社会の正しい解明と認識を得ることが、本書の到達すべき目標である。
そのためには、日本人を、強引に母権社会についての議論の場に引っ張り出すことが必要である。本書は、それを目的とする。

（初出 2020年9月）

日本男女の性的役割は「母と息子」。

日本男女の性的役割は、「母と息子」として表される。
女性は、母の役割で、息子の役割を担う男性を大きな力でやさしく包み込み、かいがいしく世話をすると共に、男性を彼女の自己実現の手段と見なし、稼いだり、出世するように男性を動機付け、尻を叩く。
男性は、息子の役割で、母の役割を担う女性の意向を実現すべく、稼ぎや出世に励み、必要に応じて女性を頼もしく助けると共に、女

性に心理的に依存し、甘え、母たる女性の支配下に入る。永遠の息子として、心理的に父親になれない、父性未満の存在であること。
（初出 2012年2月）

日本社会で最強の存在

日本の最終支配者は、。
家庭では、母、姑であり、職域では（数は少ないが。）姉御であること。
職場で姉御で、家庭で母、姑である女性が日本社会では最強である。
従来彼女らは、表に出てこない奥まったところに居て、そこから表だった見せかけの代表者である息子である男性たちをコントロールしてきた。表に出ない裏、闇の存在なので、従来の表層的なジェンダー研究では、支配者と気づかれなかったのである。
これからのジェンダー研究においては、こうした最終支配者の女性を奥座敷から表へ引っ張り出す作業が必要である。
（初出 2010年7月 ）

母なるシステム、日本

K.ヴォルフレンが、日本社会を解明する上で、謎である、不明なシステムであるとしたものこそが、「女性、母性社会システム」であり、日本社会の中核をなしている。
日本の社会システムは、母なるシステム、女性システムで動いているが、どのような動きをするか、まだきちんと研究されていない。今後、解明が必要である。
（初出 2011年3月）

母の王国、楽園としての日本社会

日本社会は、母の王国、楽園として捉えることができる。
母の、重たく、しつこく、うるさく、パワフルな本性が、日本社会全体を覆っていると言える。

（初出2012年6月）

日本近代化と母なるシステム

液体的な、女性、母性システム社会＝母なるシステムは、本来、退嬰的であり、自分からは近代化を行う芽を持たない。
一方、男性、父性システム社会＝父なるシステムは、自分から進んで危険に立ち向かい、革新的な知見を得ようとする点、近代化への芽を内蔵している。
母なるシステム（日本）は、父なるシステム（欧米）から、新しい技術とかの輸入を行い、そうすることで近代化を実現すること。

（初出2011年3月）

ウェットな母性的日本社会における新規一括採用の根本的重要性

既存の日本社会の顕著な特徴として、会社や官庁における新卒一括採用の原則が上げられる。
これは、学年初めの新入生同士のように、人間関係が最初何も形成されていない状態、まっさらの更地状態から始めないといけないという「更地開始」原則である。新入生同士の友人、人間関係は、最初の一瞬が肝心で、そこで以後のほとんどが出来上がってしまう。
そして、部活とか、人員が固定化されていて、新陳代謝、人の出入りが少ない条件下では、最初の一瞬でどこかの人間関係、集団に潜り込めなかった人間が、既に出来上がった友人、人間関係の中に後から割って入るのが大変であり、友達が新たにできない、作れない原因となる。
いったん開通した人間の絆、コネ、コミュニケーション回路を、再びスパッと切って、他にさっさと移動できるのが、ドライな父性的欧米社会であり、できないのが、ウェットな母性的日本社会である。
ウェットな日本社会においては、いったん生成した対人関係はweb、蜘蛛の巣のような感じで作用する。すなわち、ベトベトと絡み付くのであること。そのため、既存の対人関係を壊して、再び構築し直すパワーや能力に欠けることになること。

そのため、先祖や先輩といった先人や、既に同じグループとなった同士が張り巡らした既存のコネクションをひたすらそのまま流用するだけとなる。人々の関係、コネの線を追加で引くことしかできないこと。切断、消去して、仕切り直すことができない。いわば、「初期化」ができないため、コネの線がどんどん増えて、複雑にこんがらがって、どんどん身動きが取れなくなって行く。これは、自分の力では治せない一種の病気である。既存のコネクション、コネの前例維持の力が強すぎて、柵でどんどんがんじがらめになっていって、社会の自由な流動や活気が失われていくのである。世代間で柵が連鎖して、重層化して、新たな仕切り直しの機会がほとんど消滅しているのが、日本の地方の農村とかの伝統的村社会である。抜本的なコネクションの新規形成は、最初の1回のみ可能であり、そのことが、日本の会社や官庁が、新規一括採用に根本的なところで依存する大きな理由である。
（初出 2011年10月）

２．

母性からの解放を求めて　-「母性依存症」からの脱却に向けた処方箋 -

[要旨] 日本の男性たちは、「母性」に完全に支配されており、また「母性的な女性」に強度に依存しています。日本の男性たちが、本来あるべき父性を取り戻し、こうした母性への依存状態から脱却するための処方箋を述べています。◇
従来より、日本社会は、母性が中心となって動く、「母性型社会」であると言われてきた(例えば[河合1976])。筆者としては、その際、母性の担い手である女性だけでなく、男性までもが、母性的態度を取っている、という点に問題があると考えている。
日本の男性たちが、職場などで実際に取る態度は、いわゆる「浪花節的」と称される、互いの一体感や同調性を過度に重んじる、対人関係で温もりや「甘え」を強く求める、内輪だけで固まる閉鎖的な対人関係を好む、など、ウェットで母性的な態度が主流である。
（母性的態度、父性的態度についての説明は、著者の他著作を参照して下さい。）
彼ら日本男性は、一応男性の皮をかぶっているが、実際には、母性

的な価値観で行動していること。（それ自体、女性優位な価値観の一部であること。）これは、日本社会における母性の支配力の強さを見せつけるものであり、日本社会の最終権力者が、実際には、彼ら男性たちの「母」（姑）ないし「母」役を務めている妻であることを示していること。
こうした母性的行動を取る日本男性は、母に包含され、母性の麻酔を母によって打たれ、「母性の漬け物」と化している。その点、自分とは反対の性である母性の強い影響のもと、自分たちが本来持つべき父性を失っている。
要するに、日本社会を支配していると表面的には見える男性たちは、実際には、「母」によって背後から操縦、制御される「ロボット」「操り人形」なのであり、「母」に完全に支配されているのである。日本の男性たちは、「母」によって管理・操縦されているため、集団主義、相互規制、閉鎖指向といった、男性本来の個人主義、自由主義、開放指向とは正反対の、ウェットで母性的な振る舞いをするのである。
日本社会は、その全体像が一人の「母」となって立ち現れるのであり、男性は、母性の巨大な渦の中に完全に呑み込まれ、窒息状態にある。
日本男性を、こうした、自分とは反対の性の餌食になっている現状から救うには、「母性からの解放」が必要である。
今までは、日本における「母性」は、男性にとっては、自分たちを温かく一体感をもって包み込んでくれるやさしい存在として、肯定的、望ましいものとして捉えられることが多かった。日本男性がその結婚相手の若い女性に求める理想像も、「自分が仕事から疲れて帰って来た時に温かく迎えてくれる」「自分のことをかいがいしく世話してくれる」といったように、母性的なものになりがちであった。
また、「母性」の行使者である「母」「姑」といった存在が権力者として捉えられることはなかった。日本の女性学においては、権力者は、「家長」としていばっている男性であるという見方がほとんどである。彼ら「家長」たる男性が、その母親と強い一体感で結ばれ、母親の意向を常に汲んで行動する、言わば、「母の出先機関・出張所」みたいな意味合いしか持たない存在であることに言及した書物はほとんどない。
例えば、一家の財産の名義は、「家長」である男性が持つとされ、それが日本は男性が支配する国であるという見解を生んでいる。しかし、実際のところ、母親との強い癒着・一体感のもと、「母性の漬け物」と化した男性は、実質的にはその母親の「所有物」であり、その母親の配下にある存在である。彼は、独立した男性という

よりは、あくまで「母・姑の息子」であり、母親の差し金によって動くのである。
だから、男性が財産の名義を持つといっても、それは、「母」が息子＝自分の子分、自己の延長物に対して、管理の代表権を見かけだけ委託しているに過ぎず、実際の管理は、「母」が行うのである。その点、財産権は、実質的には、息子の母のものである。ただ、母親は、女性として、一家の奥に守られている存在であることを望み、表立って一家を代表する立場に立つことを嫌うので、その役割が息子に回ってくる、というだけのことである。母は、息子に対して、財産の名義を単に持たせているだけであり、実際の管理権限は母（姑）ががっちり握って離さない。
このように、母親に依存し、女性一般を母親代わりに見立てて甘えようとする、「母性依存症」とも呼ぶべき症状を起こしている日本男性に対しては、母性支配からの脱却を目指した新たな処方箋が必要である。日本男性にとっては、本来母性は、決して望ましいものではなく、脱却、克服の対象となる存在となるべきなのであるが、それをわかっていない、母性に対する依頼心の強い男性が余りにも多すぎるのが現状である。
筆者の主張する、「母性依存症」への対処方法は以下の通りである。
(1)まずは手始めに、取る態度を、本来男性が持つべき、個人主義的で自由や個性を重んじる、ドライな「父性的」態度に改めるべきである。言わば、自らの心の中に欠如していた父性を取り戻すのであること。これについては、例えば「家父長制」社会＝遊牧・牧畜中心社会の立役者である、父性を豊富に備えている、欧米の男性が適切なモデルとなると考えられる。欧米のような家父長制社会を実現しようとなると極端になってしまうが、今まで母性偏重だったのを、母性と父性が対等な価値を持つところまで、父性の位置づけを向上させることは必要であろう。
（付記）なお、従来も「父性の復権」が言われたことがあった（例えば[林道義1996])が、その際言われた「父性」とは、全体を見渡す視点、指導力、権威といったことを指しており、筆者が、上で述べた、個人主義、自由主義、対人面での相互分離、独創性の発揮といった、ドライさを備えた父性への言及が全くない。その点、従来述べられてきた復権の対象としての「父性」は、今までの母子癒着状態をそのまま生かしながら、従来の母性で足りない点を補完する「母性肯定・補完型」の父性であって、筆者の主張する、母性に反逆して、母性の延長線とは正反対の父性を築こうとする「母性否定・対抗型」の父性の復権とは異なると考えられる。
(2)また、「母」的価値からの逃走、ないし反逆を試みるべきである

こと。今まで、自分が一体感をもって依存してきた母親に対して反抗とか独立を試みるのは、非常に難しいことであるのは確かだが、これを実行しない限り、永遠に母性の支配下に置かれることになる。そのためにも、相手との一体感や甘え感覚がなくても自我を平静に保てるように、相手からのスムーズな分離や独立を目指す、「母性からの脱却」「父性の回復」訓練を、自ら進んで実践することが必要である。女性一般に対しても、心の奥深くにある彼女たちへの依存心を克服すること。（自分の母親みたいに、温かく世話して欲しいなどと思わないようにすること）。「自分のことは自分で世話する」という自立の精神を持つこと。それらが必要があること。
(3)子育てに父親として積極的に参加し、母子の絆の中に割り込んで、彼らを引き離すことが必要である。従来、日本の男性は、「仕事が重要である」として、子供との心理的な交流をほとんどしてこなかった。それが、男性が子供と自分とを切り離し、子供から無意識のうちに遠ざけられるようにすることで、母親と子供の間にできる、強固な、誰も割って入ることのできない絆を生み出し、それが、母性による子供の全人格的支配を生み出してきた。（この状態にある母子を、筆者は、「母子連合体」と仮に名付けています。詳細な説明は本書の他セクションを参照して下さい。）
男性が子供との交流をしないのは、自分自身の子供時代に、父親との満足な交流の経験がないというのも影響している。一つ前の世代の父親が子供と心理的に隔離された状態に置かれることが、「母子連合体」の再生産を許してきたのである。
従って、子供が母親と完全に癒着した、母性による子供の支配が完成した状態である「母子連合体」の再生産を阻止するには、父親が、母と子供の間に割って入って、自ら主体的に子供との心理的交流を図る作業を実行することが大切である。今まで日本男性が子育てを避ける口実としてきた「仕事が忙しいから」というのは、子供と父とを近づけまいとする、母による無意識の差し金によるものであることを自覚し、それを克服すべきである。外回りの仕事を女性により任せるようにして、その分、自分は家庭に積極的に入るべきなのである。
[参考文献]
河合隼雄、母性社会日本の病理、1976、中央公論社
林道義、父性の復権、1996、中央公論社
（初出 2003年05月）

「お母さん依存症」の日本人

日本の人たちは、お母さん、お袋さんに強度に依存している。お母さんがいないと何も出来ない、生きていけないと感じている人が多い。皆が精神的に、お母さんに頼り切りになっており、「お母さんの子供」状態を続けている。太平洋戦争時、敗戦で死に行く日本人の兵隊たちが、「お母さん」と叫びながら死んでいったという話は有名である。母に単に身辺の世話をしてもらうだけでなく、社会で生きていく力それ自身を供給されている感じであること。母である女性が、家族や社会全体の精神的な支柱になっていて、真に強大な存在である。これは、母である女性が、社会の真の支配者であることを示している。

一方、男性は、母に依存した、父親未満の単なる子供に留まっていることが問題であると言える。

（初出2012年06月）

「母性社会論」批判の隠された戦略について　- 日本社会の最終支配者としての「母性」 -

[要約] 「日本＝母性社会」論は、その本質が、日本社会を最終的に支配している社会の最高権力者が母性（母性の担い手である女性）であることを示すものだと筆者は捉える。日本の女性学による「母性社会論は、女性に子育ての役割を一方的に押しつけるものだ」という批判は、女性たちが日本社会を実質的に支配していることを隠蔽する、責任逃れのための「焦点外し」だと考えられる。また、女性たちが従来の「我が子を通じた社会の間接支配」に飽き足らず、自分自身で直接、会社・官庁で昇進し支配者となる、言わば「社会の直接支配」を目指そうとする戦略と見ることもできる。
◇

従来の日本女性学では、臨床心理学者などが提唱している日本を「母性社会」とする見方について、「日本社会が、子供を産み育てる役割を一方的に女性（母親）のみに押しつけていること。それをを示していること。それは有害である。それは修正されなくてはな

らない。」という反応が主流である。
これに対して、筆者は、日本を「母性社会」とする見方は、本来、「日本社会における母性の影響力、権勢が強い。日本社会において、母親が社会の支配者となっている」ことの現れであると見る。要は、日本社会において「母」が社会の根底を支配しており、万人が母親の強い影響下で「母性の漬け物」になっている社会であることを示すのが、「母性社会」という表現だと考えている。
日本の母親は、例えば「教育ママゴン」みたいに、その力の強さを怪物扱いされるような、巨大で手強く、誰もが逆らえない存在なのである。
日本の女性学による、「臨床心理学者たちは、母性社会という言葉を使って、「母」としての女性のみを称賛し、子供を産み育てる役割を女性に押しつけている」という批判。それは、「日本社会の根幹を支配しているのが母性（母性の担い手である女性）である」という現状から人々の目を外すこと。自分たち女性が社会の支配責任を負わなくて済むようにすること。支配側にある女性に対して、被支配者（男性、子供）の批判、反発が集まらないようにしようとすること。そうした「焦点外し」の巧みな戦略、策略。筆者には、そのように思えてならない。彼らは、自分たち女性（母性）が社会の実質的支配者であることを、人々に気づかせまいと必死なのである。
また、「子供を産み育てる役割を女性に押しつけるのはいけない」みたいな論調が広がっているが、本来、日本の女性が社会で支配力を振るってこれたのは、彼女らが、子育ての役割を独占することで、自分の子供を、自分の思い通りに動く「駒」として独占的に調教できたから、というのが大きいと考えられる。日本の女性たちは、自分の子供を「自己実現の道具」として、学校での受験競争、会社での昇進競争に、子供の尻を叩いて駆り立て、子供が母親の言うことを聞いて必死に努力して社会的に偉くなった暁には、自分は「母」として、一見社会的支配者となったかに見える子供を更に支配する「最終支配者」的存在として、社会の称賛を浴び、社会に睨みを効かせることができる。
要は、子供の養育を独占することで、自分の子供を完全に「私物化」できることが、日本の女性たちが社会で大きな権勢をこれまで振るってこられた主要な理由である。「自分の子供を通した、日本社会の間接的支配」というのが、日本の女性たちが社会を支配する上でのお決まりのパターン、手法であった。要は競走馬（我が子）のたずなをコントロールする騎手として、日本女性は、社会をコントロール、支配してきたのである。
「子供を産み育てる役割を女性に押しつけるのはいけない」という

論調に日本女性が同調していること。それは、彼女らが今まで築き上げてきた、「子供を通じた社会支配」という、彼女らによる日本社会支配手法の定石を自ら捨て去ろうとしている。それは、その点、実は、日本女性にとってはマイナスであると言える。それは、むしろ男性にとって、子供を女性の手から取り戻す機会が増える点、プラスであると言える。
ただ、日本男性にとって一番恐ろしいのは、日本女性が、従来の「我が子を通じた、社会の間接支配」に飽き足らず、自ら社会を「直接支配」する者になることを開始することである。従来の我が子を私物化することでの「我が子経由での社会支配」を維持しつつ、自分自身も、会社・官庁で昇進をして偉くなることで、「直接・間接」の両面で日本社会支配を完成させること、これが、本来なら日本のフェミニスト（女権拡張論者）の最終目標となるはずのものであり、日本男性としては、これが実現しないように最大限努力する必要がある。幸い、日本のフェミニストは、この最終目標にまだ気づいておらず、我が子を通じた間接的な社会支配権限を自ら捨て去ろうとしていること。これは、日本男性にとって、女性から我が子を取り戻す絶好のチャンスである。
「子育ては女性がするもの」という固定観念は、日本女性による我が子の独占と、我が子を通じた社会の間接支配権限を助長する考え方であり、女性を利する点が多く、男性にはマイナスなのであるが、日本の男性は、そのことに気づかないまま、自分の母親の「自己実現の駒」として、会社での仕事にひたすら取り組み、それが「男らしい」と勘違いしている。
日本の男性は、もう少し、自分の子供に対する影響力を強化することに心を配るべきなのではないか？自分の子供に自分の価値観をきちんと伝えて、自分の後継者たらしめる努力をもっとしないと、いつまで経っても、子供は女性の私物のままである。そして、女性たちが、子供を自分にしっかりと手なずけつつ、自分自身、会社での昇進を本格化させると、心の奥底で、母性に依存したままの男性たちは、寄る辺もなく総崩れになってしまうであろう。そうならないように、自分と母親との関係を見直し、「母からの心理的卒業」と「子供をコントロールする力の確立」を果たすべきなのであること。
（初出 2005年10月）

「母」「姑」視点の必要性 - 日本女性学の今後取るべき途についての検討 -

[要旨] 従来の日本の女性学は、自分たちの立場を「娘」「嫁」といった、弱い立場の女性に限定して捉えてきました。そのため、同じ女性でも、極めて強大な権力を持つ「母」「姑」の視点が欠けているように思えます。今後はより正しい日本社会の把握のために、「母」「姑」の視点をより大きく取り入れるべきであると考えます。

◇

既存の日本のフェミニズム、女性学は、社会的弱者である「娘」「嫁」の立場の女性ための学問であり、社会の支配者、権力者である「母」「姑」の立場からの視点が、決定的に欠落している。
今までの日本の女性学の文献を調査すると、「嫁」「妻」「女(これは未婚の女性である「娘」に相当することが多い。)」という言葉は頻繁に出てくるが、「母」となると急速に数を減らす。(それもほとんどは、女性と「母性」の結びつきを批判する内容のものであり、「母親」の立場に立った内容の記述はほとんど見られない。)「姑」に至っては、全くといってよいほど出てこない。要するに、「母」「姑」の立場から書かれた女性学の文献は、今までは、ほとんどないというのが現状だと考えられる。要するに、日本の女性学は、「娘」「嫁」の立場でばかり、主張を繰り返しているようなのである。
既存の日本の女性学は、「日本社会の男性による支配=家父長制」を問題視し、批判の対象としてきた。
例えば、日本の若い女性は、結婚相手の男性を選ぶ際に、長男を避けて次男以下と結婚しようとしたり、夫の家族との同居を避け、別居しようとする傾向がある。こうした行動を彼女たちに取らせる核心は、「婆(姑)抜き」(「お義母さんと一緒になりたくない」という一言に尽きること。
要するに、彼女たちにとって一番怖いのは、夫となる男性ではなく、夫の母親である「姑」(女性!)であること。なぜ、彼女たち

が「お義母さん＝姑」を恐れるかと言えば、姑こそが、夫を含む家族の真の管理者(administrator)であり、彼女には家族の誰もが逆らえないからである。結婚して同居すれば、夫も夫の妻も、等しく彼らの「母」ないし「義母」である「姑」に、箸の上げ下ろし一つにまでうるさく介入され、指示を受ける。従わないと、ことあるごとに説教されたり、陰湿な嫌がらせを受けたり、といった、精神的に逃げ場のないところまでとことん追い込まれてしまうのであること。また、経済的にも、「母」「姑」に一家の財布をがっちりと握られるため、どうしても彼女たちの言うことを聞く必要が出てくる。

こうした点、「母」「姑」こそが、その息子である男性にとっても、「嫁」「娘」の立場にある女性にとっても、等しく共通に、乗り越えるべき「日本社会の最終支配者」なのである。特に、母子癒着こそが、「母」「姑」が自分の子供（特に男性＝息子）を、強烈な母子一体感をもって、自分の思い通りに操る力の源泉となり、「母性による社会支配」の要となっている考えられること。

日本の女性学が、そうした「母」「姑」のことを、今まで取り上げてこなかったのはなぜか？。

[1]日本の女性学は、社会的に不利な立場にある女性の解放というのを、主要な目的として掲げてきたが、日本社会の支配者としての「母」「姑」という存在は、「弱小者としての女性を解放する」という目的に反する、厄介なものだったからであろう。いったん強大な権力者である「母」「姑」の視点を取ってしまうと、「女性＝弱者」という見方は実質的に不可能となるからである。

[2]日本の女性学は、女性同士の連帯・団結を重要視して発展してきたと考えられる。従来は、「娘」「嫁」「妻」の立場を取ることによって、広く女性全体がまとまりを作りやすかった。しかるに、そこに「母」「姑」の立場を持ち込むと、(a)子供を持つ「母」の立場の女性と、未だ持たざる女性、および(b)「姑」の立場の女性と、その支配を嫌々受けなくてはいけない「嫁」の立場の女性との間に亀裂が生じ、女性同士の連帯感、一体感が大きく損なわれると考えられる。そのため、女性全体の一体性を保つために、あえて「母」「姑」を無視してきたと考えられること。

これら[1][2]は、いずれも「臭いものにはふた」「自説を展開する上で都合の悪い事象は無視」という考え方であり、日本の女性学が、説得力のある内容を持った「科学」として発展していく上で、大きな阻害要因となると言える。

(1)「女性＝世界のどこでも弱者」という見方を根本からひっくり返して、「日本社会においては、女性＝強者である」として、女性に関する社会現象を正しく取り扱えるようにする。

(2)女性同士の表面的な連帯感・一体感の深層にある、「母」と「未だ母ならざる女性(娘、妻)」、「姑」と「嫁」との対立を、連帯感・一体感が損なわれることを恐れずにとことんまで明らかにして、もう一度見つめなおすことで、今までの表面的なものではない、女性同士の真の、心の底からの新たな連帯の可能性を見出す。といったことが必要なのではあるまいか?。
一方、日本の女性学が、「母」「姑」を軽視してきたのには、以下のような理由もあると考えられる。
[3]日本の女性学は、視点が、男性が活躍してきた社会組織(すなわち企業、官庁)における女性の役割や地位向上に向いており、その分、家庭の持つ、一般社会に対する影響力を過小評価してきたからであること。要するに、家庭において「母」「姑」が権力を握っていることを仮に認めたとしても、その影響力はあくまで家庭内止まりであって、社会には影響が及ばないと考えているため、「母」「姑」を無視してきたと考えられる。
これに対しては、家庭こそが、社会における基本的な基地、母艦であり、そこから毎日通勤、通学に出かける成員たちが、いずれはそこに帰宅しなくてはいけない、最終的な生活の場、帰着地である、とする見方が考えられる。この見方からは、社会の最も基礎的なユニットが家庭であり、企業や官庁といった社会組織の活動も、家庭という基盤の上に乗って初めて成立するということになる。要するに、「家庭を制する者は、社会を制する」ということになる。
こうした見方が正しいとすれば、「母」「姑」は、企業や官庁で活躍する人々(その多くは男性。)の意識を、根底から支え、管理、制御、操縦する、「社会の根本的な支配者、管理者」としての顔を持つことになること。要するに、家庭は、一般社会に対して大きな影響力を持つ存在であり、その支配者としての「母」「姑」を無視することは、日本社会のしくみの正しい把握を困難にする、と言える。そうした点でも、「母」「姑」を女性学の対象に含めることが必要である。
なお、日本女性学で「母」「姑」が無視されてきたのには、次のような推測も可能である。
[4]日本の女性学での主張内容は、そのまま女性たちの不満のはけ口となっていると考えられる。彼女たちにとって不満なのは、弱者としての「娘」「嫁」としての立場なのであって、「母」「姑」となると、社会的にも地位が高止まりで安定し、それなりに満足すると考えられる。女性たちは、自分たちにとって不愉快な「娘」「嫁」としての立場に異議申し立てをする一方、「母」「姑」については、その申し立ての必要がなくなり、そのため、日本女性学の主張内容から外れたと考えられる。

日本の女性学が、社会現象を正しく捉える科学として成立するには、上記のように女性自身にとって不満な点のみを強調するだけでは、明らかに片手落ちであり、何が不満で何が満足かという、両面を把握する必要があるのではないか？。
以上、述べたように、今後の日本の女性学は、自らを「被支配者」「下位者」「弱者」として扱う、「娘」「嫁」の視点から、自らを「支配者」「上位者」「強者」として扱う、「母」「姑」の視点への転換を行うべきである。そうすることで、日本女性たちは、今まで正しく自覚できてこなかった、社会の根本的な管理者、支配者(administrator)としての自らの役割に気づくことができるはずであり、そこから、新たな社会変革の視点が見えてくると考えられる。
そういう点では、今後の日本女性学では、「姑」の研究、ないし「母」の研究が、もっと活発になされるべきであろう。
あるいは、従来の日本史のような歴史学においては、姑が日本社会の真の支配者である可能性が高いのに、今まで殆どその存在が言及されて来なかった。
今後は、歴史の分野においても、新たに姑の研究が必要である。
（初出 2003年05月）

日本社会における母性支配のしくみ　-「母子連合体」の「斜め重層構造」についての検討 -

[要旨] 日本では女性が息子・娘と強力に癒着することで「母子連合体」を形成して、社会の最もベーシックな基盤である家族を支配しています。従来の日本の家族関係に関する「夫による妻の支配＝家父長制」という現象も、実際は、上世代の母子連合体（姑 - 息子）による、次（下）世代の母子連合体（嫁とその子供）支配として捉えられ、「母性による（母性未満の）女性の支配＝母権制」の一つの現れとして説明することができる、と筆者は考えます。
◇
１．
一般に、「日本の支配者」というと、表立っては、政治家とか官僚、大企業幹部といった人々が思い浮かぶのが普通であろう。しかし、実際には、彼ら支配者を支配・監督する「支配者の支配者」と呼び得る立場にいる人々が、表立っては見えない、隠れた形で確実に存在する。
そうした、日本社会の根底を支配する人々、すなわち日本社会の最終支配者は、実際には、一般に「お母さん。（母ちゃん。）」「お

袋さん」と呼ばれる人々であること。彼女たちには、日本人の誰もが心理的に依存し、逆らえない。日本男児は、肉体的には強くても、「お袋」には勝てないのである。日本は「母」に支配される社会である。従来、日本の臨床心理の研究者たちは、日本社会を「母性社会」と呼んできたが、この呼称は日本社会における「母」の存在の大きさを示していると言える。
当たり前のことであるが、「母」「お袋」と呼ばれる人々は、言うまでもなく女性である。しかし、従来、日本社会において女性の立場はどうかと言えば、男尊女卑、職場での昇進差別やセクシャルハラスメントの対象であるといったように弱い、差別されている被害者の立場にあるという考えが主流であった。
この場合、「女性」と聞いて連想するのは、若い「娘さん」とか、「お嫁さん」といった立場の人が主であると考えられる。「女」という言葉には弱い、頼りないイメージがどうしても先行しがちである。従来の日本の女性学やフェミニズムを担う人たちが「女性解放」の対象としたのは、「娘」「嫁」といった立場にある女性たちであった。
しかし、同じ女性でも、「母」という呼称になると、一転して、全ての者を深い愛情・一体感で包み込み呑み込む、非常にパワフルで強いイメージとなる。「肝っ玉母さん」といった言い方がこの好例である。あるいは、「姑」という呼称になると、自分の息子とその嫁に対して箸の上げ下ろしまで細かくチェックし命令を下すとともに、夫を生活面で自分なしでは生きていけないような形へと依存させる強大な権力者としての顔が絶えず見え隠れする存在となる。
「母」「姑」の立場にある女性は、強力な母子一体感に基づいた子供の支配を行うとともに、夫についても、自分を母親代わりにして依存させる形の「母親への擬制」に基づいた支配を行っている。家庭において、子供の教育、家計管理、家族成員の生活管理といった、家庭の持つ主要な機能を独占支配しているのが「母」「姑」と呼ばれる女性たちの実態である。
言うなれば、「母」「姑」は社会にどっしりと根を降ろし、父とは重みが段違いに違う存在である。そういう点で「母」「姑」には、日本社会の根幹を支配するイメージがある、と言える。しかるに、日本女性のこうした側面は従来の日本の女性学やフェミニズムでは、自分たちの理論形成に都合が悪いとして「日本女性には、母性からの解放が必要だ」などという言説で無視するのが一般的であった。要するに日本の女性学やフェミニズムの担い手たちは、自分たちをか弱い「娘」「嫁」の立場に置くのが好みのようなのである。
確かに、日本の夫婦・夫妻関係では、日本のフェミニストたちが「家父長制」という言葉を使うように、夫が妻を抑圧する、夫優位

の関係に少なくとも結婚当初は立つことが多いように思われる。夫による妻に対するドメスティック・バイオレンス問題も、この一環として捉えられる。これは、「男性による女性支配」というように一見見えるのであるが、実際は、直系家族の世代連鎖の中で、夫の母親である「姑」が、我が息子を「母子連合体」として自分の中に予め取り込み、自らの「操り人形」とした上で、その「操り人形」と一体となって「嫁」とその子供を支配する現象の一環に過ぎないと取るべきであると、筆者は考えている。
つまり、一見、妻を支配するように見える夫も、実は、その母親=「姑」の「大きな息子」として「母性」の支配を受ける存在であり、「姑」の意を汲んで動いているに過ぎない面が強い。その点、彼は、母親による支配=「母性支配」の被害者としての一面を持つ。
「妻に対する夫優位」の実態は、「嫁に対する姑の優位」のミニチュア・子供版(姑の息子版)=つまり、「嫁に対する『姑の息子』の優位」に過ぎないと言えること。夫が妻に対して高飛車な態度に出られるのも、「姑」による精神的バックアップ、後ろ楯のおかげである側面が強く、「姑」の後ろ楯がなくなったら、夫は妻を「第二の母性(母親代わりの存在)」として、濡れ落ち葉的に寄りすがるのは確実である。
要するに、「母性による(母性未満の)女性の支配」というのが、日本のフェミニストたちによって批判されてきた「家父長制」の隠れた実態であり、そういう点で実際には、日本における「家父長制」と呼ばれる現象は、女性同士の問題として捉えるべきなのである。この場合、「母性未満」の女性とは、まだ子供を産んでいないため、母親の立場についていない女性(未婚の娘、既婚の嫁)を指していること。
２.
日本社会においては、母親と子供との間は非常に強力な一体感で結ばれている。これは従来、「母子癒着・密着」という言葉で言い表されて来た。この、父親を含めた他の何者も割って入ることを許さない母親と子供との癒着関係をひとまとめにして表す言葉として、ここでは「母子連合体(ユニオン)」という言葉を使うことにすること。この場合、子供は、性別の違いによって息子・娘の2通りが考えられるが、「母子連合体」は、そのどちらに対しても区別なく成り立つと考えられる。言うまでもなく、母子連合体の中で、母は、息子・娘を親として支配する関係にある。
日本の直系家族の系図の中では、「母子連合体」は、複数が重層的に積み重なった形で捉えられる。世代の異なる「母子連合体」の累積した「斜め重層構造」、より分かりやすく言えば「(カタカナ

の）ミの字構造」が、そこには見られる。新たな下（次世代）の層の「母子連合体」の生成は、家族への新たな女性の嫁入りと出産により起きる。この場合、より上の層に当たる、前の世代の母子連合体が、より下の層に当たる、次の世代の母子連合体を、生活全般にわたって支配すると捉えられる。上の世代の母子連合体に属する成員の方が、下の世代の母子連合体に属する成員に比べて、その家庭の行動規範である「しきたり・前例」をより豊富に身につけているため、当該家庭の「新参者」「新入り」である下の世代の母子連合体の成員は、彼らに逆らえない。この「母子連合体の斜め重層構造」を簡単に図式化してみたこと。

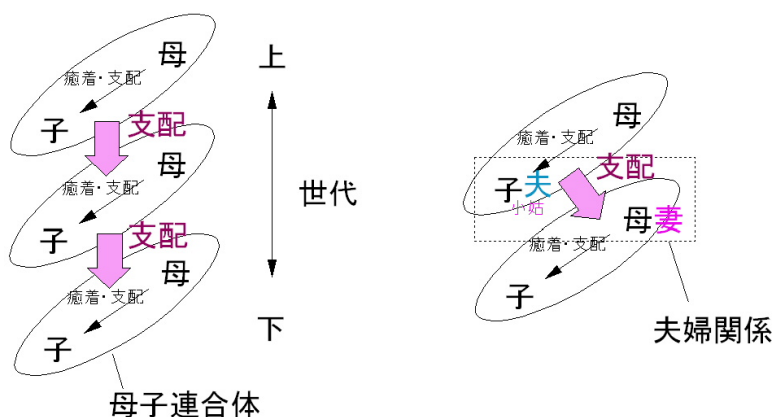
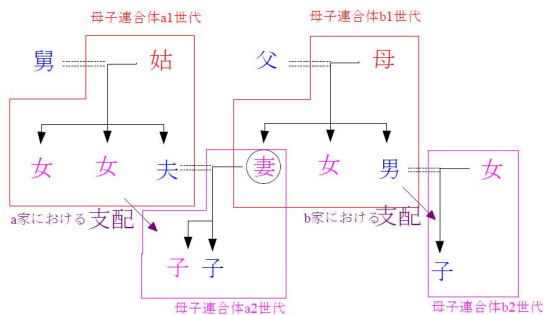



図　日本家族における母子連合体の斜め重層構造

ここで着目すべきことは、家族の系図において、夫婦関係のみを取り出して見た場合、夫＝姑の息子は、上の世代の母子連合体に属し、妻＝嫁（あるいは姑の息子にとって自分の妻になりそうな自分と同世代の女性。）は、次の世代（下の世代）の母子連合体に属すること。（あるいは、属する予定であること。）夫婦間で夫が妻を抑圧・支配しているように見える現象も、実際は上の世代の母子連合体の成員（姑の息子）が、次の世代の母子連合体の成員（嫁）を抑圧・支配しているというのが正体であると考えられる。
要するに、姑が、息子を自分の陣営に取り込む形で嫁を抑圧しているというのが、夫による妻抑圧のより正確な実態と考えられる。この場合、夫は、自立・独立した一人の男性と捉えることは難しい。（従来の日本女性学が「家父長」と称してきたような男性と捉えることは難しい。）むしろ「姑の息子」「姑の出先機関・出張所」と

して、姑（母親）に従属する存在として捉えられること。嫁にとっては強権の持ち主に見える夫も、その母親である姑から見れば自分の「分身・手下・子分」「付属物・延長物」であり、単なる支配・制御の対象であるに過ぎない。
母子連合体の支配者は母親であるから、家族という母子連合体の重層構造の中では、実際には母である女性が一番強いことになる。これは、日本社会が、見かけは「家父長制」であっても、その実態は「母権制」であることの証明となる。
日本男性は、母子連合体において、母によって支配される子供の役しか取れない（母になれないこと。）ため、家庭～社会において永続的に立場が弱いこと。（上記の母子連合体説明図において、「父」の字がどこにも存在しないことに注目されたい。これは、日本の家庭において、父の影が薄く、居場所がないことと符合する。日本の家庭では、男性は、その母親の「子」としてしか存在し得ないこと。）
この辺の事情を説明するのが、「小姑」と呼ばれる女性の存在である。つまり、嫁として夫（の家族）に忍従してきた女性が、一方では、自分の兄弟の嫁に対しては、「小姑」として高圧的で命令的な支配者としての態度を取るという、矛盾した態度を引き起こしている、という実態である。要するに、女性は、2つの異なる世代の母子連合体に同時に属することができるのである。「小姑」として威張るのは、上の世代の母子連合体に属する立場を、「嫁」としてひたすら夫（の家族）の言うことを聞くのは、次の下の世代の母子連合体に属する立場を、それぞれ代表していると考えられるのである。
要は、上の世代の母子連合体の成員である、姑、夫（姑の息子）、小姑が一体となって、自分たちの家族にとって異質な新参者である夫の妻＝嫁（下世代の母子連合体成員）を、サディスティックに支配しいじめているのであり、それは、企業や学校における既存成員。（先輩）による「新人（後輩）いびり」「新入生（下級生）いじめ」と根が同じである。これらのいじめを引き起こす側の心理的特徴は、共通に「姑根性」という言葉で一つにくくることができる。
ここで言う「姑根性」とは、要は、相手を自分より無条件で格下と見なすこと。（相手を自分より格下であるべきとすること。）相手の不十分な点を細かくあら探ししたり、相手の優れた点を否定する形で、相手を叱責・攻撃し、相手の足を引っ張り、相手を心理的に窮地に追い込んで、自分に無条件で服従、隷従させようとする心理であること。
日本の若い男性が、同世代の女性に対して、高圧的で威張った態度

に平気で出るのは、単に「男尊女卑」の考え方があるというだけではない。自分たちが、未来の家族関係において、結婚相手の候補となる同年代の女性たちよりも、一つ前の世代の母子連合体に属することが決まっているため、母子連合体の「斜め重層構造」から見て、「嫁」となって一つ下の世代の母子連合体を構築するはずの同年代の女性を、自分の母親と一緒になって、一つ上の母子連合体の成員として支配することができる有利な立場にあるからである。
夫による妻への暴力であるドメスティック・バイオレンス(DV)は、夫による妻の暴力を利用した支配、いじめということで、一見、男性による女性支配に見えやすい。しかし、実際には、日本の家族の場合においては、妻＝嫁を支配したり、いじめたりしているのは、夫だけに限ったことではなく、夫の母親である姑や、夫の姉妹である小姑も、夫の妻＝嫁をサディスティックに支配し、いじめている。
この点、夫によるドメスティック・バイオレンス(DV)は、実は、上世代の母子連合体成員（姑、夫、小姑）による、下世代の母子連合体成員（嫁とその子供）の支配、いじめの一環に過ぎないと言えること。要は、日本における夫による妻へのドメスティック・バイオレンスは、嫁いびりをする姑のいわゆる「姑根性」と根が同じというか、その一種なのである。家風、その家の流儀を既に身につけた成員（姑、夫、小姑）＝先輩による、家風をまだ身につけていない新人、後輩（＝嫁）いじめの一種とも言える。
この場合、男性が高圧的になれるのは、男性自身に権力があるからでは全然なくて、心理的に（一つ上の世代の）母子連合体を一緒に形成する自分の母親という後ろ楯があるからであり、そこに、日本男性の母親依存（マザーコンプレックス）傾向が透けて見えるのである。
夫が妻に対して、高飛車で命令的で、乱暴な態度に出られるのも、夫がその妻よりも、一つ上の世代の母子連合体に属することで、妻とその子供が形成する次の下位世代の母子連合体を支配することができるからである。
この場合、見かけ上は、夫は妻（嫁）よりも常に優位な立場にいることができる訳であるが、だからと言って、それが日本社会において男性が女性よりも優位である証拠かと言われると、それは間違いであるということになる。つまり、夫は男性だから優位なのではなく、「姑の息子」だから＝妻よりも1世代前のより上位の母子連合体に属するから、妻よりも優位なのである。
要は、夫（姑の息子）による妻（嫁）の支配は、小姑による嫁の支配とその性質が同じである。夫も小姑も、嫁よりも一つ上世代の母子連合体の成員＝嫁にとっての先輩だから、嫁を共通に（嫁を後輩

として）支配できるのであること。この場合、言うまでもなく、夫は（小姑も。）、その母と形成する母子連合体の中で、母である女性の支配を受ける存在であること。
要するに、夫は、母親である姑と癒着状態で、その支配下に置かれており、その点、日本社会において本当に優位なのは、「母＝姑」である女性であり、その息子として支配下に置かれる男性（夫）ではない。この点、日本は女性＝母性の支配する社会であり、男性社会ではない。
日本の家庭においては、先祖代々、夫が威張って、妻が服従的な態度を取ることが繰り返され、それが、日本の家庭は、男性優位という印象を与えてきたわけであるが、実際には、その高飛車な夫が、その母親である姑の全人的な密着した支配下に置かれた「姑の付属品、出張所」に過ぎない存在であることを考えれば、日本の家庭は、実際には先祖代々恒常的に、母性＝女性優位である、と言える。
おとなしく夫に従属しているかに見える妻も、実際のところ、その子供と強力に癒着して、何者も割って入ることのできない強烈な一体感のうちに、自分の子供を支配している。妻の子供（息子）は、大きくなっても、その母（夫にとっての妻）と強い一体感を保ち、母に支配された状態のまま、結婚をすること。そして妻は、その息子を通して、新たな結婚相手の女性とその子供を支配することになる。
要するに、母子連合体においては、母はその子供（息子、娘）の全人格を一体的に、息苦しい癒着感をもって支配する存在であること。日本の直系家族は、その母子連合体が、上世代の連合体が下世代の連合体を支配する形で積み重なって形成されてきた。日本の直系家族は、「母による子供の支配」の連鎖、重層化によって成り立ってきたと言える。
こうした母子連合体重層化の考え方は、「日本の家族において、夫婦関係が希薄で、母子関係が強い」、という家族社会学の従来の見解とも合致する。日本の家族では、各世代の母子連合体に相当する母子関係が非常に強力で家族関係の根幹をなしており、夫婦関係は、異なる世代の母子連合体同士を単にくっつけるだけの糊の役割を果たしているに過ぎないため、影が薄く見えるのである。
以上述べた母子連合体重層化のありさまを、家系図の形で表した図を作成したこと。

左図は、a家の第２世代の妻（○印）（＝同時にb家の第１世代に属する）を中心に眺めた図である。

母子関係にある＝母子連合体を形成している者同士が実線と矢印で結ばれている。

a家の第１世代母子連合体がa1、第２世代がa2であり、第１世代母子連合体a1が第２世代a2を支配している。

b家の第１世代母子連合体がb1、第２世代がb2であり、第１世代母子連合体b1が第２世代b2を支配している。

図　母子連合体重層構造の家系図による説明

母と複数の子供との関係は、母子連合体の重層的なクラスターとして捉えられる。以下の図を参照されたいこと。

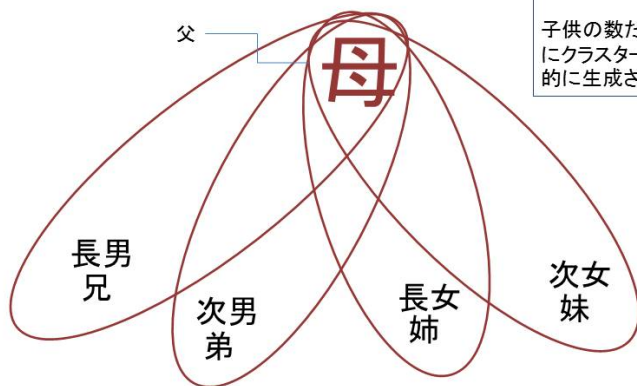



図　母子連合体クラスター

以上述べたように、日本では女性が「母子連合体」を形成して、社会の最もベーシックな基盤である家族を支配している。従来の日本の家族関係に関する「夫による妻の支配＝家父長制」という現象も、実際は、上世代の母子連合体による、次世代（下世代）の母子連合体支配として捉えられ、それは、母子連合体の中における母による息子・娘の支配という関係を視野に入れることで、「時系列的に上

位の世代（前の世代）の女性（母性＝姑）とその配下の子供（息子＝夫、娘＝小姑）による、下位（後）の世代の女性（嫁またはその候補）の支配＝母権制」の現れとして説明することができる。
以上は、日本の家族について説明したものであるが、この「母子連合体」の概念は、育児における母子癒着の度合いが強い他の東アジアの社会（中国、韓国．．．）における家族関係にも応用可能と考えられる。
（初出 2002年04月）

「母性的経営」　- 日本の会社・官庁組織の母性による把握 -

[要旨] 日本の会社や官庁は、その性質が母性的と捉えられます。筆者は、その際、成員の母親が、自分の子供(主に息子、男性)を組織へと没入させ、完全帰属させる心理を生み出しており、組織を「母性的」たらしめる原動力・エネルギー源となっていると考えます。
母性的組織としての日本の会社・官庁を成立・維持させているのが、成員の母親たちであり、従来「日本的経営」と言われてきた経営のあり方の特徴は、「母性的経営」と呼ぶことができると捉えます。

1.母性的組織と成員との関係
日本の会社・官庁といった組織は、成員同士の温かな全人格的一体感、包含感を重んじ、組織の「ウチ」「ソト」を厳しく峻別して閉鎖的な態度を取ること。成員の組織への依存心を育むこと。（「寄らば大樹の陰。」）成員に対して母親のように接する、母性的な性格を色濃く持っていること。そうした組織のあり方は、例えば「母性的組織」と呼ぶことができる。
母性的組織に属するのは、その成員にとっては、あたかも実際の「母の胎内」に抱かれているのと同じような温かい一体感をもって捉えられる。
日本の会社・官庁組織は、それ自体が、一つの大きな「母的存在」として成員の前に現れる。日本人にとって、会社、官庁に就職することは、「母の胎内」に入り込み、その中に抱かれるのと同じ感覚である。
日本の会社・官庁組織の成員は、組織と全人格が完全に一体化しており、自分と会社を、ドライに切り離して考えることができない。

日本の会社は、母性的組織なので、成員は全人格を拘束され、捧げなければいけない。成員は、自分の周囲を、母性的組織としての会社・官庁に完全に包囲されており、逃げ場がない。
日本男性は、会社・官庁で全てのエネルギーを使い果たす。会社が、自分の人生にとって100％である。その点、母性的組織は、成員の全てを包み、呑み込み、吸い取る、と言える。
全てのエネルギーを会社で使い果たした男性は、自宅に戻って、母や妻に対して「自分の世話をしろ」と寄っ掛かってくる。母の場合は、自分の子供だからその態度を十分許容できるが、妻の場合は、元は赤の他人なので、男性（夫）の態度に、気遣いが足りないと感じ、不満に思う。
組織で働く男性たちは、そもそも疲れていて気遣いする余裕がない。もともと、「自分のことを世話してくれて当然」と思っているので、思わず横柄な態度に出てしまうこと。
組織の成員が、組織に全人格を束縛されても、何ら意に介さず、むしろ満足感を得ているようなそぶりを示すのは、成員の持つ、組織に温かく一体感をもって抱かれたいという欲求が根底にある。それは、母親を求める欲求と根が一緒である。母性的組織の持つ温かい一体感が、成員を仕事から抜けにくくさせている。
成員にとっては、会社の組織目標に自己の人生目標が一致している。と言うよりは、会社の目標に自己を没入させている。組織目標に自分を合わせていること。合わない面を無意識のうちに殺していること。これは、一種のマゾヒズムである。
日本の会社、官庁のような母性的組織は、成員の全人格を呑み込み、掌握・管理し、成員の全エネルギーを吸い取る。成員に全エネルギー、全時間を自分のために費やさせること。
日本では、所属する組織に全時間を費やすことが理想的な男性像とされている。遅くまでサービス残業をして組織に尽くさせるような心理的な仕組みが出来上がっている。所属組織のための労働を最優先に考える「労働至上主義」、自分の所属する組織のことを何をさておいても第一に優先させる「所属組織第一主義」が、母性的組織のイデオロギーである。
成員は、組織の中で、自分の全てを消費・燃焼させる。残りは、もぬけの殻状態である。
一方、成員にとっては、母親に対するのと同じ、周囲との一体感を求める要求を、会社・官庁組織に属することで満たすことができるというメリットがある。会社・官庁組織が、母親の温もりと同じ快感を成員に対して与えている。成員は、自分が心の奥底で求めている温かな相互一体感を満たすために、積極的に、会社・官庁組織に入ろうとする、という側面もあることを忘れてはならない。

2.母性的組織と「専業主婦」
組織のために100％働いた成員は、自分で自分のことを世話する余力、余裕がない。そのため、組織の外側に成員のサポートをする役目の人間、成員の管理・世話役の存在が必須となる。それが、従来「専業主婦」と呼ばれてきた人々である。彼らは、母性的組織の外側にいながら、実は、母性的組織の申し子、協力者なのである。
専業主婦が家を守らずに外に働きに出ること。（兼業になること。）それは、組織成員の心理的バックボーンとしての役割がおろそかになること。組織成員のサポートが十分でなくなること。成員が不安を覚えて十分な働きができなくなること。そのように、組織で働く側からは見なされ、非難の対象となる。専業主婦がいないと、母性的組織は、成員のサポートが不十分になり、維持ができなくなるのである。
専業主婦は、組織成員を心理的に支えるために「100％専業」でなければならない。日本において女性一般の職場進出を阻んでいる理由が、実は日本の職場組織が母性的だからであって、成員に組織に対して100％の一体化・献身を求めるからだということになる。この現象は、キャリア指向の「女性」と「母性」的組織との対立として捉えられる。
日本において、女性に学歴が求められず、会社でも昇進差別があるのは、女性が劣った存在と見なされているからでは全くない。それは、若い女性に対して、「専業主婦」という、母性的組織の維持に非常に重要な役割を果たすことを受け入れる方向へと進路を取るように、「専業主婦」以外の道をわざと魅力なく見せるというやり方で社会的誘導が行われている証拠である。
専業主婦業の内容と学歴とは今のところあまり関係がないので、わざわざ高い学歴を取ってもあまり意味がない。また、母性的組織にとっては、大勢の女性たちに会社に居残られることで、成員の組織外サポート役としての「専業主婦」の供給が不足するのも困る。（成員の結婚相手が「専業主婦」でないせいで、成員が組織のために全力投球してくれなくなるから。）なので、わざと待遇を悪くしていること。
ちなみに、専業主婦は、組織成員の全人格的な管理・制御を行う「管理者administrator」として、振るうことのできる実質的な権力は、管理される立場である男性を上回る。それは、特に、専業主婦が成員の母親である場合に言えることである。
母性的組織の成員が女性の場合、組織外のサポート役、世話役に異性の男性を見つけることが難しい。男性は、組織で働くことがデフォルトとして考えられているからである。組織外の世話役は同性の女性が想定されてしまう。そのため、組織で働き続ける、組織内

で出世しようとする女性は、結婚出来ず、独身を貫く事になってしまいやすい。
そうかといって、結婚すると、男性に、組織の外でサポート役になることを求められ、組織内で働き続ける事を止めなくてはいけなくなる。これは、江戸時代の御殿女中以来の、母性的組織で働く女性が抱える根本的な課題である。
もちろん、組織外でのサポート・世話役（専業主婦）の役目には、家計管理の元締め、子供の全人格的統制・教育といった重要でうま味のある役得がある。特に、「母」になると、自分の子供（特に息子）を完全に「子分」にして操縦でき、会社や官庁に好きなように再投入できるようになるため、そのうま味が格段に上昇する。
3.母性的組織と成員の「母親」
従来は、専業主婦というと、妻の立場ばかりがクローズアップされ、関心を集めてきた。しかし、実は、母の立場の方がより重要である。つまり、自分の息子・娘を、組織に送り込む存在としての「母」であること。
成員を、母性的組織の一員として、組織内での自己のエネルギーを完全燃焼へと向かわせるのに、成員の母親の果たしている役割が非常に大きい。母親こそが、自分の子供（主に息子、男性）を組織へと没入させ、完全帰属～全エネルギーを燃焼させる心理を生み出していること。また、組織を「母性的」たらしめる原動力・エネルギー源となっていること。母性的組織を成立・維持させているのが、成員の母親なのである。
母性的組織の主役は男性であり、母性の本来の担い手である女性ではないという、逆説的な現象が起きている。男性が母性的な行動を取っている。彼らは、母なる組織に一体感・甘えを求めて、没入・帰属している。そうした母性的な行動を取らせているのが、男性たちの母親である。彼女たちが母性的組織の本当の生みの親なのである。
母親がなぜ息子を組織に強く一体化させるかと言えば、母親が息子を自分の自己実現の駒、道具として使っているからである。母親は息子を組織へと駆り立て、組織内での出世競争に邁進させる。息子が組織内で偉くなる事が、すなわち、自分にとっての自己実現ということになる。妻も、母親と同じ考えを継承する。
母親は、また、息子以上に「（息子の会社の人間。）会社人間。」である、という側面を持つこと。彼女らは、息子の勤めている会社の業績や社会的なステータス。（どの位、格が高いかなど。）の上下に、まるでわがことのように一喜一憂すること。母親自身が、息子の所属する組織と心理的に一体化したかのように振る舞うのである。

母親は、息子に組織に全人格的に一体化させて、息子が「自分（息子自身）⊆組織」と見なすように仕向けること。そして、息子に、「会社人間」として、所属組織の中で全エネルギーを出して組織の業績向上・格上げに寄与させ、他の成員との間で昇進競争をさせることで、息子の組織の格上げ＝母親自身の格上げ、息子の昇進＝母親自身の昇進、のように見なすこと。組織の社会的格式の上下は、組織成員の母親の社会的格式の上下と連動している。組織成員同士の昇進競争は、実はその背後に、彼らの母親同士の競争という側面を隠し持つと言える。
（注）この場合、上記の官庁・会社に入った息子を昇進に駆り立てる母親の行動は、「教育ママ」の取っている、自分の子供を少しでもいい学校に入学させるために、子供を叱咤激励する行動と共通する。
こうした母親による息子（＝組織成員）の私物化やコントロール。それは、母親と息子が、相互に癒着し、強い絆で結ばれる「母子連合体」を形成していること。（「母子連合体」の概念の説明は、本書の他セクションを参照して下さい。）息子が、程度の差はあれ、自然と母親の意を汲んで自発的に行動すること。それだからこそ可能となる。
母親にとって自分の子供、特に息子を活躍させるのに望ましい組織像を実現したのが、母性的組織としての日本の会社、官庁である。息子の組織での活躍が、そのまま母親の自己満足につながる。言わば、母性的組織は、組織成員の母親にとって、主要な自己実現の場なのである。一方、組織にとっては、成員の母親は、成員（自分の息子）に一生懸命組織のために働くように仕向けてくれる、組織活動のエネルギー源として欠かせない存在であること。
日本の会社、官庁の性格が母性的なのは、成員がその母親の意を汲んで行動するため、相互の一体感や相互依存を重んじるなどといった、成員の母親の意向・価値観を反映した、母親好みの性格を持つように至ったと言える。その点、日本の会社・官庁の真の主役は、表面的に主役として振る舞っている男性成員ではなく、彼らを自分の自己実現の駒として、より上位の地位を目指して働くようハッパをかけている母親たちであると言える。母性的組織の真の支配者は、成員（社長、管理職～平社員）の母親であること。
日本の会社、官庁は、自分の母親たちによって母性色＝真っ赤な赤色に染められた「真っ赤な戦士」「赤色兵士、兵隊」（それは、男性のことが多い。）の着ぐるみのキャラクタが表に出て活躍しているさまを思い浮かべて貰えると分かりやすいかも知れない。活躍しているのは確かに男性メインなのかも知れないが、彼らは自分たちの母親によって、完全に赤い母性の色に染まり、その行動は、母性

的、女性優位色彩の強い、集団主義、和合、協調性の重視、年功序列、リスク回避メインのものになっている。この場合、男性自身が活躍しているというよりは、男性を母性色に染め上げた大本の母親、女性が実質的に活躍していると捉えることができるのではないだろうか。こうした、上辺だけの男性の活躍の場である会社、官庁。（それらは、実質母性に支配されている。）それらを、男社会だと呼ぶのは不適当である。
また、母親は、組織のために100％エネルギーを尽くす自分の息子に対して、彼をサポートする次世代の世話役、専業主婦を、自分の嫁として求める。その点、キャリア志向の若い女性を邪魔する「専業主婦」「良妻賢母」イデオロギーは、実は、男性の「母」「姑」の要請に基づくものである、とも言える。要するに、フェミニストや女性学者によって批判されてきた、女性は専業主婦であれとする「専業主婦」イデオロギーは、実はキャリア志向の女性と同性である、（男性たちの）「母」「姑」＝女性によって担われてきた側面があるのである。
また、会社で働く女性の中には、「男性が仕事に専念して、会社の重役とか偉い地位を独占している。自分たちは偉くなれない。」と男性を批判する人たちがいる。実際のところ、そうした、会社の仕事ばかりを一生懸命やって、家事をほとんど手伝わず、会社で昇進することに必死な男性たちを作り出しているのが、彼らの母親や、母親代わりの専業主婦指向の妻たちなのである。彼らの母親たちが、彼らに、もっと仕事をしてもっと偉くなりなさいとハッパをかけているのであり、彼らを必死になって働かせる影の原動力となっている。会社で働いていて、男性たちのせいで昇進できないと不満をもらす女性たち。彼女たちは、自分たちの本当の敵が、以下の女性たちであることに気づいていない。自分たちと同性の女性たち＝（男性の）母親たちであること。あるいは、それは、（男性の）母親代わりの専業主婦指向の妻たちであること。
会社の中で女性たちが昇進するようになるには、男性たちの母親や妻たちが、自分の自己実現の駒として男性たちをあてにするのを止めさせるしかない。つまり、男性たちの母親や妻たちが、自分の自己実現を、男性経由でなく、自分自身で行おうと決心させるしかない。彼女らが、男性を昇進へとせき立てるのを止めれば、男性は、必死になって家庭を省みずに働くのを止めて、自ずと仕事以外にも生きがいはいろいろあることに気づくだろう。そうすれば、従来男性にかかっていた仕事への圧力が弱まり、昇進へせき立てられる気持ちも弱まり、女性に道を譲るようになる。その分、女性が活躍して、昇進する余地がどんどん開けてくる。
要は、男性たちの母親（妻）が、息子（夫）の昇進を自分の生きが

いとすることを止めさせるのが、日本の会社・官庁組織において、女性たちが（男性並に）昇進するようになる一番の早道と言えること。このことは、今までほとんど誰も言及して来なかった重要事項である。
その他、自分では給与を稼ぐことをせず、息子（夫）の経済的稼ぎをあてにしてATM（現金を女性側で一方的に勝手に引き出せる、自動現金預け払い機）扱いし、少しでも多く稼いでくるように、尻を叩いて働かせ、昇進をせき立て、かく言う自分は、家庭の財布の紐をがっちり掌握しているのをいいことに、息子（夫）に最低限の小遣いしか渡さない一方、自分は握っている家計の弾力的運用で自由に高い買い物を楽しみ、なおかつ「三食昼寝付き」の生活を希望し、息子（夫）の稼ぎが悪くて、自分も働かなければならなくなったら、「甲斐性のない息子（夫）だわね」と悪態をつきながら、仕方なく働きますか、というところが本音の、専業主婦指向の女性たちが未だに数多く存在すること。（彼女たちが、未だに社会で主流であること。）、彼女たちが、男性を精神的余裕なく、給与稼ぎや昇進目当ての仕事に没頭させるのに多大な貢献をしているのである。こうした女性たちをなくすのも、日本の会社・官庁組織において、従来男性にかかっていた仕事への圧力が弱まり、女性たちが（男性並に）昇進できるようになる上で極めて重要であると言えること。
ちなみに、日本において、従来、性別役割分業を支持し、妻に対して、「専業主婦になって欲しいこと。仕事して欲しくないこと。」と宣言する夫は、たいがい、上記の母親の欲求を、そのまま汲んで妻に対して反映しているのが実情であると言える。
4.母性的組織の持つ隠れた罠
母性的組織には、母親の視点から見ると、もう一つの隠れた側面がある。それは、息子を嫁から切り離すため、息子を嫁に奪われないようにするため、息子を嫁の待つ家庭に帰らせずに、組織（会社、官庁）に没入させる、という側面であること。それは、母親自身と息子との母子連合体（相互癒着関係）を維持するとともに、嫁の世代における母子連合体を再生産すること。
夫は「家族（妻子）のため一生懸命働く」と言うこと。彼らは収入を得て、家族の経済的な支えとなろうとして、仕事に自分の全時間を注ぎ込む。しかし、そのことが、夫の思いとは裏腹に、家族（妻子）とのコミュニケーション不足をもたらし、家庭内での妻子からの疎外につながっていること。
実際のところ、夫の注意・関心は、自分の働く組織に全面的に絡め取られている。と言うのも、夫は、関心・注意を、自分の属する会社・官庁組織に専ら向けるように、母親によって無意識のうちに仕

込まれているからである。夫の家族（妻子）とのコミュニケーション不足や、家庭内孤立。それは、夫の母親によって暗黙のうちに仕組まれた事態であること。（息子に自己実現の夢を託すこと。息子と嫁を切り離そうとすること。）
そうした、（自分の所属する会社を一次として）自分の家庭（妻子）を二の次にしてしまう後ろめたさが、「自分は家族のために一生懸命自分を犠牲にして働いているんだ」という言い訳になる。そして、家族のために働いているという言説の正当化のために、自分の家庭に対して及ぼす力を最大限に見積もろうとし、それが、自分自身を家父長と強迫的に見なそうとする原動力となる。
単に、夫-妻のラインを見ただけでは、夫妻のコミュニケーション不足、夫によるコミュニケーション能力の欠如としか見えない現象が、実は、母 - 息子（＝夫）のラインに注目する事で見えてくること。なぜ、息子＝夫が一生懸命会社勤めをするか、なぜ妻とコミュニケーションしないかが見えてくる。
緊密な母子一体感のうちに、母親が息子（自分の子分）に対して、母親自身の自己実現の手段として、組織で一生懸命働いて出世・昇進するようにハッパをかけること。組織で働く息子は、母の自己実現のための手先である。それとともに、母は、息子に組織で全ての力を吐き出させ、妻＝嫁との間でコミュニケーションを行うためのエネルギー余力が残らないようにして、夫妻。（息子と嫁）間を分離させようとすること。
5.母性的組織と白紙採用・終身雇用
母性的組織は、内部で強固な（成員相互の）一体性・同質性を保持する分、対外的には閉鎖的であり、集団内と外とを厳格に区別し、よそ者に対して門戸を閉ざす。
例えば、日本における中央官庁や大企業では、成員の採用の機会は新規学卒一括採用がほとんどで、白紙状態でまだどの社会集団の色にも染まっていない若者に対してのみ門戸を開く。（「色」とは、しきたり、組織風土などである。）この慣習は「白紙採用」という言葉で言い表すことができる。そこでは、本格的な中途採用の道は閉ざされている。純血性を保った自集団（「ウチ」）内で他集団に対抗する形で強固に結束し、内部に縁故（コネ）の糸をはりめぐらすこと。
日本における母性的組織は、強固な閉鎖性、純血指向性を持ち、基本的に新規学卒一括採用の際しか外部に対して採用の門戸を開こうとしない、中途で所属する社会集団を変更することを許さない。学生は事実上一生に一回しか、中央官庁、大企業といった、社会的に大きな影響力を持つ組織に入れるチャンスがないので、そこでうまく希望の組織に入ることができるように、学歴や、学閥のようなコ

ネの獲得に躍起となるのである。
また、いったん集団に入ると、「定年やリストラなどで用済みになるまでその中にずっとい続けること。（浮気をしないこと。）」＝「終身雇用」が要求される。
白紙採用や終身雇用がなぜ必要か？組織内成員の同質性を確保し、成員間に強固な一体感を持たせることを可能とするために必須である。
いったんある組織に入った成員は、全人格的にその組織固有の色に染まることになる。この場合、「色」とは、その組織固有の規範、しきたり、慣習、心理的風土といったものを表している。
成員は、「白紙」の場合のみ、その組織固有の「色」に染め上げることができる。同じ「色」を持つ成員同士は、互いに同質であり、強固な一体感で結ばれる。こうした組織内の同質・一体性を強く求めるのが、母性的組織の特徴である。そうした点から見ると、組織成員を同一の色で染め上げる上での前提条件となる「白紙採用」は、組織成員の同質性・一体性を確保しようとする母性的組織にとって必須であることが分かる。
成員が既に「他の色付き」の場合には、既に付いている色がじゃまをして、組織本来の色に染め上がらないため、「色」の面で他成員との間の一体性、調和を乱すこととなる。母性的組織では、「他の色付き」は、そうした点で、本質的に忌避されることになる。
白紙状態の若者は、一回ある組織に入ると、その組織固有の色に染まった「色付き」になる。そうなると、他の組織にとっては既に「他の色付き」となり、忌避すべき存在となる。そのため、いったんある組織に入ってその組織固有の色が付いた者は、他の組織に移ることができず、一生、最初に入った組織で過ごさなければならない。
母性的組織においては、自分たちとは違う「他の色付き」のよそ者は、自分たちとは異質な分子であり、自分たちと行動様式が異なり、何を考えているか分からないので安全でない、一緒になると自分の属する集団のしきたりや風紀を乱すことを平気でされるのではないかと不安で、安心できないと考える。「他の色付き」のよそ者を中に入れることが、組織成員相互の一体感の保持に悪影響を与えるという母性的な心配が、気心の知れた安全な身内だけで身辺を固めようとする、閉鎖的な風土を生み出す要因となっている。
なお、この「他の色」付きの忌避は、身内集団内部の一体感を保つため、よそ者が入るのを防いでいるという点、母性が好む互いの一体融合性を維持しようとする働きに通じるものがある。
成員は、ある組織の色に染まると、他の組織には、「既に、他の色付きである（白紙でないこと。）」と見なされ、自分たちとは違う

「色」を持つ者＝組織の同質性、調和を乱す者として疎んじられ、移ったり入ったりすることができない。そのため、よくも悪くも最初に入った組織に「飼い殺し」になり、一生をその組織で過ごすことになる。これが母性的組織において「終身雇用」現象が起きる真の原因である。
成員の「終身雇用」は、成員の「白紙採用」と表裏一体の関係にある。この両者は共に、母性的組織における成員の出入りを決定する慣習であり（「白紙採用」が組織への「入り」、「終身雇用」が組織からの「出」に関わる。）、互いに切り離せないものであること。その点、「白紙採用」も「終身雇用」も、両方とも組織の母性性を保つ上での根幹に関わる重大な特徴である。
こうした、「組織内＝同一色への染め上げ」へのこだわりが、日本の中央官庁・大企業のような母性的組織において、成員の中途採用を妨げる大きな要因となっている。
また、ある組織にいったん入ってその組織の色に染まると、他組織への転進が効かないという現象は、「どの組織に入るか」という最初の選択で失敗した若者にとって、そのままでは人生のやり直しが効かないことを意味する。最初の組織選択で失敗した者は、一生後悔しながら、その組織に「飼い殺し」になる他ない。組織から出て、「ベンチャー起業家」として自分で一旗上げる途も存在するが、困ったことに、日本のような母性的な（女性優位の）風土の社会では、「ベンチャー」は、冒険的過ぎる、危険すぎるとして嫌われ、十分な社会的サポートが得られないのが現状である。
こうした「組織選択における、やり直し不能性」は、母性的組織の抱える大きな問題点の一つである。
こうした「終身雇用」「中途採用の忌避」といった性質は、成員間の全人的一体感を重んじる閉鎖的な母性的組織において本質的、不変的なものであり、欧米流の父性的組織（それは、成員の出入り流動性、組織の開放性を重んじる。）が優勢になった際に一時的になりを潜めるだけで、その本質は変わっていないので、時流の変化に伴い、再び不死鳥の如く生き返ると考えられる。
6.「母性的経営」 - 組織分析における「母親中心」視点の重要性 -
日本の会社・官庁の組織が母性的となるのは、組織成員が母親の色に強く染まっているためであり、成員の母親たちの力が強く作用している証拠である。組織成員は、母親の意向を汲んで仕事をしている側面が強い。日本の会社・官庁組織は、男性たちが主に活躍しているので、男性中心と一見間違えやすいのであるが、実際は、彼らの母親の強い息がかかった、彼らの母親の意向によって左右される、実質的には母性中心の組織であること。（それは、ある意味、女性中心とも言える。）

要するに、男性が彼ら自身の母親の支配を受けているため、いくら要職を男性が占めていても、組織は母性的となるのである。
欧米のように、ドライな父性的社会では、父親＝男性を、社会の中心に据えて、社会を分析するのが有効である。しかし、それを、今まで日本の学者たちがしてきたように、欧米生まれの「家父長制」社会の理論を、日本のようなウェットな母性的社会にそのまま当てはめようとすると、社会はうまく分析出来ない。
日本のようなウェットな母性的社会では、母親役の女性を、社会の中心に据えて、母親の社会に及ぼす影響を常に念頭に置きながら、社会を分析すべきである。すなわち、母親を分析対象となる社会の中心に据えて考える、「母親中心の視点」が求められるのである。
それは、母性的組織の分析においてもそうであって、組織の外にいて、組織とは一見関係ないはずの、組織成員の母親の持つ、組織に対する影響力の巨大さを、今後はもっと重視すべきであろう。
従来言われてきた「日本的経営」は、その経営のあり方が、組織構成員の母親の息のかかった、母性の影響下にある「母性的経営」であり、その特徴（集団主義、年功序列、終身雇用、護送船団、規制と談合・・・）は、総じて女性優位・母性的な価値観に基づくものである。一方、バラバラに独立した個人の自由競争に基づく「欧米的経営」は、「父性的経営」と呼ぶことができる。今後は、日本的経営の分析において、その女性優位・母性的性格により重点を置くことで、経営組織のあり方をより的確に把握できる、と言える。
日本の官庁・会社のような、成員相互の一体感、対人関係や協調性を重んじるウェットな組織は、もともと、個人主義的で互いにバラバラなのを好む、その本質がドライな男性にはとうてい作れない。こうした日本的経営組織の実現には、ウェットさを備えている女性、母性の強い力が必要なのであって、その点、日本的経営組織の真の作り手、創造者は、成員たちの母親であるということができる。
7.会社マザコン
日本の男性は、所属する会社や官庁に、心理的に強力に帰着、癒着していること。そこには、会社との強力な一体化、会社への甘えが見られ、会社に対して、強い紐帯を感じていると言える。というか、所属する会社無しには、何もできない、自我が成り立たない感覚がある。
例えば、日本男性では、定時後に彼女とデートの約束をしている時に、会社から追加の仕事を命じられると、デートをキャンセルして会社の仕事をこなすということが、まだ多く見られる。この場合、男性は、彼女よりも、会社を、心理的に優先させており、会社が最終的な心理的帰着の対象となっていると言える。

日本男性が、会社で働くことをひたすら優先し、家庭を省みない、育児に参加しないのも、彼が、会社に心、魂を完全に奪われ、支配されているからだと言える。
この場合、一体化、甘えの対象である会社は、当の男性にとって、母親と同じ役割を果たしていると言える。対象との一体化、甘えは、父性ではなく母性につながるものであり、マザコン男性における母親の役割を、会社が果たしているのである。こういう日本男性の会社に対する、会社を母親代わりとしてその中に帰属しようとする、根本的な心理的依存は、「会社マザコン」といった言葉で呼ぶ事ができる。
8.会社母艦説
日本男性は、会社で働く、給与を稼ぐことに専ら心を奪われ、家庭を省みない、重んじない。それは、彼にとって、家庭ではなく、会社が「母艦」だからである。
専業主婦の妻とかからの見方だと、会社は、自分の運営する家庭から会社に出かけ、仕事をして、また自分の家庭に帰ってくる存在だと考えられている。これは、夫を、家庭という「母艦」から、飛行機として飛び立って、また舞い戻ってきて、休息する存在と捉えるものであり、こうした考え方は「家庭母艦説」と呼べる。
しかし、日本男性の会社への癒着ぶりを見ていると、上記の「家庭母艦説」は、彼には当てはまらないと考える方が理に適っている。この場合、日本男性が実際に取っているのは、「会社母艦説」（ないし職場母艦説）であると考えるべきであること。
「会社母艦説」とは、会社こそが、自分の本質的に帰着、癒着する対象であり、家庭は、仮の帰着場所、立ち寄り場所に過ぎないとするものである。要は、自分が、会社という母艦に直接つながっている一級の主要構成員であり、一方、自分の家族は、そこに依存的にぶら下がる、厄介になっている二級の、劣った構成員と見なす考え方である。自分が主である家庭を、自分が所属する会社という母艦に結びつけ、その配給管、パイプ役を担い、会社という主要な幹から、家庭という従属的な枝に、養分を供給する元締めの役割を担っている、という高いプライドが、そこには存在する。
まず会社があって初めて自分がある、という「まず会社ありき」という見方を取ると共に、自分の家庭は、自分という会社からの養分を供給するパイプ役無しには成り立たないんだという強い自負、自分の家庭に対する優越感が、日本男性には見られる。
生きていくための養分をくれる会社を最も重要な存在と考えて、そこにしがみつくと共に、自分の家族をそのおまけと考え、自分の役割を、会社から配給される養分を家族に与える主要なパイプ役と捉える「会社母艦説」こそが、日本男性が、会社に対してやたらとへ

コヘコすると共に、自分の家族に対して、何事も会社優先で、高圧的に接し、尊大な態度を取る理由である。
この場合、日本男性とその家庭に対して、生きていくための養分をくれる会社は、ちょうど、胎児にへその緒を通じて養分を与えてくれる母親と同じ存在であると言える。この点、日本男性とその家族にとって、「会社＝母」なのである、と言えること。会社のために我を忘れて一生懸命に会社の発展のために尽くそうとする、何事も会社、職場第一の日本男性は、「母なる会社」にどっぷり浸って生きているのである。
9.母性的組織からの男性解放
以上見てきたように、日本の男性がよりどころとしてきた会社・官庁の組織のあり方は、実は、彼らの母親（母親代わりの妻）の意向に沿うものとなっていること。日本の会社・官庁は「母性」によって牛耳られている面が強い。男性たちが、そうした会社組織の「母性による支配」を終わらせ、会社組織からの自立を図るには、根本的には、組織成員である男性自身が、自分の母親との間の強力な癒着を何とか断ち切って、「母子連合体」を解消させることで、母親によって所有され、母親によってもっと働け、先へ進めと尻を叩かれる「ダービー馬」のような立場から自由になるしかない。
10.母性的組織への女性進出
従来の日本では、女性は、自らは組織の内部に止まらずに外に出て、「専業主婦」として、男性（息子、夫）を組織に送り込んで業務に邁進するように仕向け、管理することに専念してきたこと。
しかし、専業主婦の仕事は、家事の省力化や、教育機能の学校への委託が進むにつれて「空洞化」が進み、女性たちにとって、次第に「やりがい」が薄れた魅力のない仕事となりつつある。また、専業主婦たちは、彼女たちの居場所が「家庭内」という、外界から遮断された密閉空間となっていることに息苦しさを感じている。
日本の女性たちは、息子や夫を自らの操りロボットとして操縦して組織で活躍させる、従来の「専業主婦」になることによる「間接的な自己実現」のやり方よりも、自分自身が直接会社や官庁に乗り込んで、そこで自ら活躍し、自分の手で業績をあげる、「直接的な自己実現」に、より生きがいを感じるようになっているのは確かである。女性たちは、その生涯を、男性たち同様、組織人として過ごすことを求めている。
彼女たちは、子育てで主導権を握ることにより、従来の専業主婦同様、自分の子供を自らの操りロボットとして出世競争に邁進させて自己実現を図るとともに、自分自身も組織で働いて業績をあげることで自己実現を行うという、「二重の自己実現」を狙おうとしている。

しかるに、従来の日本の官庁・会社組織で活躍しているのは専ら男性であり、女性は男性の補助的作業に回ることが多かった。それは、女性は「専業主婦」になることを求められていたからであり、女性の業務は、女性が「専業主婦」になって退職するまでの間の短期間の腰掛け業務と捉えられていたため、重要視されなかったのである。
日本の女性たちは、既に本腰を入れて、官庁・会社業務への進出を始めているが、官庁・企業組織のあり方は、依然として旧来の「専業主婦コース」を推奨するものとなっている。このミスマッチを是正するため、ごく近い将来、日本の経営組織のあり方を、女性が一生組織人として働き続けることができるように根本的に見直すことが必要となる。
母性的性格・風土を持つ「母性的経営体」である日本の官庁・会社組織は、本来、男性よりも女性により適した組織であり、現在組織の中で大きな顔をしている男性が働くよりも、女性が働いた方がより優れた業績をあげることができると考えられる。
今まで、日本の会社・官庁の風土を、「村社会（日本の伝統的な農耕村落共同体）的」として、不愉快だとして批判をしてきたのは、ほとんど男性であり、女性は批判していない。これは、女性にとって、「村社会」が、女性にとって居心地のよい、女性、母性向きの社会であることを意味している。
従来男性が仕切ってきた日本の官庁・会社組織で、スムーズに女性が主導権を握り、男性を凌ぐようになるには、女性が単に組織内で男性に負けない業績をあげるだけでなく、女性が、組織の中で「母親」「姑」「姐御」的存在になることで、男性たち（上司も部下も。）を、母親代わりに心理的に依存させ、自分の言うことを聞かせるように仕向ける、精神的・心理的戦略が重要である。
母性による支配下で成長してきた日本男性は、年配、年下を問わず、「母親」「お袋」「姐御」的な、自分たちを強い一体感で包み込んで依存させてくれる存在に弱い。そこで、女性たちが男性たちを、自分たちの「大きな子供」扱いすることで、男性たちは簡単に女性の軍門に下り、組織上の重要ポストを女性たちに譲ると予想される。これは、女性の年齢が男性よりも年下である場合にも当てはまり、彼女たちは、母性的態度を男性たちに対して取ることで、「リトルマザー」「小さな姐御」として自分よりも年上の男性を精神的に支配可能である。
こうした、組織における、女性による男性の「母性」を通じた支配は、女性が専業主婦を止めることで、男性が感じる心理的バックアップ感の不足を補う効果を持っている。要するに、男性が従来専業主婦である自分の母親や妻に潜在的に求めていた心理的依存、甘

えの感情を、職場の（特に上司の）女性に向けるように仕向けることで、女性たちが専業主婦でなくなっても、男性たちが心理的支えを得て困らなくなるようにすることができる。
従来、会社・官庁組織で自己実現を図ろうとする女性たちにとってネックだったのが、出産・育児に忙しくて、いったん退職・休職せざるを得ないことであった。
女性が生涯を組織人として業績をあげることに注力できるようにするには、この退職・休職がもたらすハンディをなくすことが必要である。それには、女性に中途採用、再雇用の道を幅広く用意することが、会社・官庁の経営上メリットとなることを本格的に実証する必要がある。つまりいったん出産・育児のために退職した女性たちも、社員・職員として組織中枢部で再雇用すれば、従来の男性同様の重要な業績をあげ得るのだ、ということを実例で示す必要がある。
女性たちは、いったん出産・育児で退職した女性を経験者待遇で再雇用した方が、一から新卒採用者に業務を覚え込ませるよりも、即戦力の正社員として使えることを、自ら示すことが必要である。あるいは、同じフルタイムで働いてもらうなら、男性社員より、女性社員を雇った方がより有能であり、より会社・官庁の業績向上に役立つことを示す必要がある。
こうしたことを実証するには、実際の官庁・企業の組織を使った「実験」が必要である。実際にいったん出産・育児のために退職した女性社員・職員を再雇用して組織の中枢で数多く働かせる官庁・企業を「パイロットケース」として数多く用意して、そうした「パイロットケース」組織の中で彼女たちがあげる業績が、従来の男性中心組織があげる業績に見劣りしないことを、実証データとして示せれば良い。こうした実験には、行政による費用・制度両面での援助もある程度必要となって来よう。
あるいは、女性たちがそもそも出産・育児に伴って退職・休職をしなくて済むようにする手も考えられる。そのためには、働く女性たちが、組織人、会社人間として組織で働きながら、なおかつ子育てができる環境を、女性主導で用意する必要がある。例えば、各職場とインターネットでつながった、24時間利用可能な保育所、幼稚園、小中学校を設け、そこに自分の子供を通わせ、インターネットを介して子供たちとコミュニケーションを取ることで、女性たちが職場にいながらにして、我が子へのフォローを可能にすることが考えられる。そうすることで、女性たちは、従来我が子との間形成してきた「母子連合体」を維持したまま、組織人として仕事に打ち込むことができる。
女性たちが、育児にも、仕事にも両方打ち込める環境を作り、女性

の自己実現を支援することで女性の力を引き出すことが、日本の経営組織の体質強化には必要である。日本の「母性的」な経営組織には、従来の男性よりも、母性の担い手である女性の方がより組織の体質にマッチしており、女性主導で組織運営が進む方がより生産性が上がることが予想されるからである。母性的体質を持つ日本の官庁・会社では、いったん女性の組織中枢への進出が進めば、男性が女性たちに経営権限を譲らざるを得ない事態は、比較的短期で訪れると考えられる。
そのためにも、女性たちは、従来のように、単に結婚しない、子供を産まないなどといった消極的・受動的な抵抗ばかりするのでなく、自ら積極的に、官庁・会社に対して、「保育所の充実、24時間保育の実現」「組織中枢での再雇用」などを、社会運動の形で働きかけると共に、「自分たち女性を組織で使えば、確実に業績が向上しますよ」という証拠を見せる必要があると言える。
社会運動をするに当たっては、従来、家庭の中でくすぶっている専業主婦たちを取り込めるかどうかが鍵となる。「組織人として働き続けることで、今までのように家庭の中にとどまるだけよりも、こんなに、よりよい生活と自己実現が得られますよ。」という明るい青写真を、彼女たち専業主婦に対して、実例を示して説得する必要がある。
また、日本の女性学には、従来のように「性差別はいけません」といった、男性たちを責め続けるネガティブなキャンペーンを張るばかりでなく、「自分たち女性は、組織の中で、男性に負けないor男性にできない高い業績をあげる能力がありますよ。それは、出産・育児による退職後の再雇用時にも有効ですよ。私たちを、組織の中で積極的に利用しないと損しますよこと。」ということを実証するポジティブな姿勢が、今後求められると言えよう。
なお、女性の負担となっていた食事作りや掃除、洗濯のような家事についても、例えば、栄養士の監修による弁当をコンビニで安価で販売するようにしてそれを購入すればよいようにしたり、洗濯・掃除ロボットを導入することで、家事雑用をできるだけなくすようにする必要がある。そのためには、「家事雑用をしない主婦は主婦にあらず」という考え方をなくし、主婦の仕事を、家計管理、子供の教育といった根本的に重要なものへと集約することが必要である。この場合、男性は今まで専業主婦をデフォルトとして育ってきているので、家事をしない女性（妻）に対して違和感を感じて「もっと家事をしろ」と文句を言うことが考えられる。それについては、男性の母親である姑の世代の女性が、積極的に外に働きに出て、家事をアウトソーシングする姿勢を見せれば、母親の子分である男性たちも従うようになると考えられる。このためには、姑が、専業主婦

がメインだった世代から、職業人、組織人がメインである世代へと、世代交代をする必要がある。姑が外働きをすることが当たり前となっている状態への世代交代には、あと10～20年位かかるかも知れない。
日本の男性にとって、女性たちが上記のような戦略に出て、どんどん組織内で昇進して、自分たちを追い抜くようになっていった場合、どういう対応をしたらよいであろうか？これは、難しい課題と言えよう。一つ言えることは、日本男性は、従来のような「お母さんの手下」的存在でいるままでは、いつまで経っても社会的に浮かばれないということである。「母との精神的決別」こそが、日本男性を新たな精神的段階へとステップアップさせるための鍵なのではないか？要は、母への親孝行のために働くのではなく、自分自身のために働くのである。そうしたドライな風を心にまとうことが、日本男性が働き手として真に成熟して、女性に対抗していくために必要である。それは、「浪花節的」「ムラ的」と言われた従来の日本の会社組織風土を、ドライに塗り替えることにつながっていく。男性たちによる「会社組織風土のドライ化」こそが、真に日本男性を会社組織の中で、女性と互角に渡り合っていくことを可能にするための条件と言える。
（初出 2003年06月、2013年12月追加）

職場中心視点から家庭中心視点への転換が必要。

欧米も、現在の日本も、女性の社会への関わりの強さの指標として、職場進出の度合い、職場で管理職に就くことの度合いで図ろうとする傾向がある。

しかし、実際には、社会への影響力の度合いとしては、より基礎に当たる家庭における女性の影響力の行使の度合いを優先すべきである。日本女性は、家庭における影響力が、欧米とは段違いに強い訳であり、そういう点では、日本女性の強さを測るのに、従来の職場中心視点から家庭中心視点への転換が必要であると言える。

（初出2015年3月）

空母、充電器、チャージャーとしての日本家庭

日本の家庭は、そこから戦闘機が整備を受けて飛び立つ「空母」としての役割を負っていると言える。

あるいは、各種機器を接続して充電させる「充電器」「チャージャー」、燃料等の補給と整備の施設と言えること。

戦闘機としての男性や子供の活躍のみ見るのではなく、空母としての女性の働きも見ないと片手落ちである。

（初出2015年3月）

日本における母性と女性との対立

[要旨] 日本では、以前から母性が父性よりも優位にあると主張する「母性社会論」が存在します。母性は女性性の一部であり、母性が父性よりも強いとする母性社会論は、日本における女性優位を示すと考えられます。しかし、日本のフェミニストたちは、なぜか、女性が優位であるという結論を決して導き出そうとしません。筆者は、その原因について、嫁姑の対立という、女性内部の対立があると考えます。

◇

日本では、母性の父性に対する優位を主張する日本＝母性社会論が、松本滋や河合隼雄らによって、以前から唱えられて来た。
母性は、女性性の一部であり、母性が父性よりも強いとする母性社会論は、女性優位を示すと考えられる。
これに対して、日本のフェミニズムは、女性が強いという結論を導き出そうとしない。むしろ、母性は、女性への育児の押しつけとなり、会社とかでの女性の自己実現を阻む、有害なものであるといっ

た主張を展開している。いわば、女性と母性を互いに敵と見なす、対立させて捉える見方が横行しているのである。
実際のところ、日本社会を強い母性の力で牛耳る子持ちの年長女性、特に姑においては、女性と母性はスムーズに統合されているのであり、対立は特に見られない。
日本の女性学者やフェミニストによる母性の敵視は、実際のところ、母性を肯定し、日本女性の強さを表す日本＝母性社会論が、女性が弱い立場に置かれていることを前提として発展してきた日本のフェミニズムの存在理由を根本から脅かすものであり、日本の女性学者やフェミニストたちは、触らぬ神に祟り無しということで、日本＝母性社会論を無視したり、わざと歪曲した見方をして、正面切って扱うのを避けているのである。
そのため、母性社会日本をリードしている姑の権力の強さとか、今までほとんど日本の女性学で取り上げられないという、異常事態を来しているのであること。
（初出 2000年07月）

姑と「女性解放」

日本女性による家族制度批判が行われる場合、女性は、自分を嫁の立場に置いて、制度を批判する。
姑の立場に自分を置いて、家族制度を批判する女性を見たことがない。
姑の立場では、家族制度は、それなりに心地よい、批判の対象とはならないものなのではないか？。
同じ女性なのに、姑と嫁という立場が違うと、協同歩調が取れない。
従来の日本のフェミニズムは、嫁の視点ばかりで、姑の視点は取ったものは見当たらない。
同じ女性なのに、姑は、解放の対象からは外れている？解放できない＝十分強くて、する必要がない、というのが本音であろう。
そこには、根底に、嫁姑の対立という、同性間の対立がある。一方、同性間の連帯意識というのが建前として存在するので、対立を公にできない。
嫁の立場の女性から見ると、姑と、その息子＝夫が、一体化して、嫁に対して攻撃をしかけてくる。
姑は、その家では、しきたり・慣習に関する前例保持者、先輩としての年長女性である。
姑は、嫁や息子に対して、先輩、先生である。家風として伝えられ

て来た前例を教えるとき、威張ること。威圧的になること。
嫁の立場に立つ女性は、本来は、男性＝息子も支配している、姑を、自分を抑圧する者として、批判の対象とすべきなのではないか？。
女性は、自分と同性の姑の批判ができない、しにくいから、代わりに、男性（姑の息子）を批判するのではないか？。
同性間では、見かけだけでも仲良いことにしておきたい、複雑な事情があるのだろう。
日本のフェミニストによる「日本家族＝家父長制」攻撃の本当の目標は、夫＝男性ではなく、姑＝同性である女性の権力低下にあるのではないか？本当は、「日本家族＝（姑＝）母権制」攻撃の方が当たっている。でもそれでは、女性の地位を高めようとする、フェミニズム本来の目的と矛盾すること。
「日本＝母性社会」は、女性を母性の枠内に閉じこめる、いけない考え方であるとするフェミニストによる攻撃も、まだ子供を産んでいない嫁の立場からは理解できるが、子供を産んで自らのコントロール下に置くことに成功している姑の立場からは理解不能である。
同じ女性なのに、嫁の立場と姑の立場とで、まるで連携が取れていない。
フェミニズムは、弱い立場にある女性しか対象にできない限界がある。
（初出 2000年07月）

日本家族における2つの結合

姑は、血縁（親子関係）による結合に基づいた家風の先達者として、嫁を支配し、嫁は姑に服従する関係にある。
「日本家族＝家父長制」論者は、。
(1)この姑との間の支配服従関係を、夫による支配と勘違いしたこと。
(2)女同士の対立を表に見せようとしないこと。女同士（嫁・姑）が結束しているように見せかける。
夫婦は、異性間の結合により互いに引きつけ合う。一方、母子、親子は、互いに共通な遺伝子や価値観の共有による一体感により、互いに引きつけ合う。
血縁による結合（親子関係）と、異性間の結合（夫婦関係）とが互いにライバル・拮抗し、互いに強さを強めようとする。強い方が主導権を握る。

夫は、どちらにも深くコミットする、付くことができず振り回される。ただし、時には、漁夫の利を得ることもある。
（初出 2000年07月）

日本女性とマザコン

マザコンは、母親による子供の一体支配を、子供が母親の意を汲んで自発的に受け入れている状態のことである。母性の力が強い日本では、結構メジャーな現象であると思われる。
日本においては、マザコンは、女性の立場の違いから、同一の女性にとって否定的にも肯定的にも捉えられる。
これから結婚する、あるいは結婚した嫁の立場の女性にとって、マザコンは、望ましくない、否定すべきものである。
自分の彼氏や夫が、姑と親密にくっついて、姑の同盟軍となって、自分のことをあれこれ批判したり、支配しようとするのに反発したり、彼氏や夫がそうなるのを避けようとして、「マザコン男はダメ」と、マザコンを必死になって批判する。
ところが、そのようにマザコンを批判していた同じ女性が、自分の子供、特に息子を持つと、子供が可愛くて、子供との一体感を楽しみにするようになり、子供を自分の思い通りに動かしたいという支配欲も働いて、子供がいつまでも自分の元にベタベタ愛着を持ってくっつく状態＝マザコンを肯定的に捉えるようになる。「マザコン歓迎」となるのであること。
自分の姑や夫に対しては、「マザコン反対」で、自分の子供に対しては「マザコン賛成」という、相反する立場を、両方場合に応じて便利に使い分けて、矛盾に気づかないか、気づいても開き直っているのが、日本の女性の現状であると言える。
（初出 2007年05月）

稲作農耕文化とマザコン

稲作農耕文化は、マザコン製造機である。社会において、女性、母性の力を強め、子供たちが皆その影響を受けるからである。
一方、遊牧、牧畜文化は、ファザコン製造機である。社会において、男性、父性の力を強め、子供たちが皆その影響を受けるからである。
（初出 2011年9月）

2つのマザコン

マザコンは、従来、マザー・コンプレックスという言葉の略語として用いられてきた。
しかし、それとは別に、マザーズ・コントロール（母親による制御、母親による支配）という言葉の略語としても使用することができる。
（初出2012年6月）

男性解放とマザコン認定

男性が、母権社会からの男性解放に賛成することは、男性自身が現状マザコンであることを表明するのと同じである。母からの男性解放をしようと言うと、女性からマザコン（状態であることを）認定されてしまい、結婚とかしてもらえなくなること。

恋愛市場において、マザコン男性は、女性からの評価が低い。それは都合が悪いので、表明のブレーキになる。

男性が、女性に対して良い格好をしたいので、自分がマザコンであることを認めず否定しようとする。

そのため、男性解放論、母権社会論自体を認めないこと。

それゆえ、（母からの）男性解放運動は必要ではありながらも広まりにくいのである。

男性解放運動は、息子の母に対する反乱である。それゆえ女性は、将来自分の息子に、自分に対して反乱を起こされると思って心配になり、抑えこもうとする。

その点、男性解放運動は、男性が、女性に対して、自分がマザコンから自主的に脱却しようとしているというメッセージも同時に送っていると言える。これは、これから結婚しようとしている女性にとってはプラスであり、女性からの評価は高まると言える。

（初出2011年8月）

日本男性の母性化

日本の著名な教育評論家である尾木直樹は、そのオネエ言葉から、「尾木ママ」と呼ばれ、社会的に親しまれている。彼は、本来男性なのに、母性の体現者となり、そのことがごく自然なこととして、日本社会に受け入れられているのである。これは、日本社会で母性が強く、男性に対して強く影響していることの証拠である。あるいは、日本社会において、男性が母性化しやすいことの証拠であるとも言える。
（初出 2011年9月）

日本における母子二人三脚

日本では、母子が二人三脚で進むのが伝統的で望ましいやり方であると考えられている。母子連合体、母子ユニオンを形成して、母子

が共同歩調で進むのが良いとされている。

欧米みたいに、母と子を切り離して、それぞれ違う世界を目指すのではなく、母子が一緒になって同じ世界を目指すのが、教育とかで望ましいとされている。

欧米のように、母と子が（父によって）切り離されると、母子の結びつきが弱くなり、母は子を支配できなくなる。それを回避するのであること。

生計を立てる職業を持った母親は、そのままでは子供が自分の生業のじゃまになるとして、子供の存在を好まない傾向があると考えられるが、その場合、子供が聞き分けの効く年齢に達するまで辛抱強く待って、母子二人三脚で、母の生きるノウハウを子供に伝え、一緒に目標を目指すのが良いということになる。

母親にとって子供は、母親自身の自己実現のための有効な手段と見なす。子供を自分の自己実現にとってじゃまだとは考えないのが望ましいということになる。子供をじゃまだと考えると、母と子供が切り離され、母の力が弱くなるのである。子供が自分に応えてくれる年齢になるまで辛抱強く待つべきということになる。

女性が社会に影響力を行使するには、母として、子供から離れる

な、子供を手放すな、子供を邪魔者扱いするなということに尽きる。子供が自分になついて、自分の後を付いて来てくれるようにするのである。

日本女性が社会で、母として、力を振るおうと思ったら、子供を掴んで離さないこと、子どもと絶えず一体でいることが望ましい。

逆に言えば、この母子二人三脚状態を破壊することが、日本男性が父として、社会に真の影響力を行使できるようになるための前提となる。

（初出2012年4月）

子の業績は、母の業績。

日本社会のように、母が子を包含し、母子連合体、母子ユニオンを形成している状態では、子供の業績は、すなわち母の業績というこ

となる。日本社会において、表面上男性ばかりが活躍しているように見えても、実際の所、彼ら男性は、一人ひとり、社会で活躍中、その母によってずっと包含され続けており、それゆえ、彼らの活躍は、彼らの母の活躍と同義ということになる。

あるいは、日本における、男性による会社や官庁といった社会組織を支配する活動（社長や首相就任とか）は、すなわち、男性の母による、その社会組織の支配活動として捉えることができる。男性が母に完全に取り込まれた状態で、活動しているからである。

それゆえ、日本社会では、表面上男性ばかりが活動しているようでも、実際は、その母である女性が、それ以上に社会的に活動していると言うことができる。子供が業績を上げげて、高い社会的地位に上り詰めるほど、彼らを包み込む母の業績や、社会的地位も上がるのである。

（初出2012年9月）

子育ての、社会支配に占める重要性

子育てこそが、日本社会を女性が支配するための最重要キーワードである。あるいは、子育てを女性が担っていることが、女性が日本社会を支配することができる根本理由である。
欧米女性は、子育てを軽視して、子育てよりも自分のキャリアを大切にせよと主張するが、これが、社会において、欧米女性が弱い根本理由である。
日本では、女性が、子育ての役割を独占している。日本の女性たちは、子育てに多くの時間を割いて、母親、教育ママとして、自分の時間を惜しみなく投下している。
日本では、女性と、その子供（特に息子）が一体となって、自己実現に取り組んでいる。子供（息子、娘）の自己実現が、すなわち母親の自己実現となる。例えば、息子が成功、出世すれば、それがそのまま母親自身の成功となる。
日本の母親たちは、こぞって、自分の子供を、自分の思い通りに操縦するのに必死となる。自分の思い通りに操縦することで、子供が母親の意のままに動くことにより、母親の意思決定を社会全体に、全面的に反映させることに成功している。そこには、母親が子供の独占的支配者となっている実態があり、母権社会の表れとみることができる。

（初出2012年6月）

日本＝「男社会」の本当の立役者は「母」だ。

お母さん（実母ないし妻）に、食事や服装の用意、洗濯まで、身の回りの世話一切をやってもらっている日本の男性は、マザコンだ。
いくら、自分の稼いだ給与を実家に入れているからと言って、お母さんに、炊事洗濯から家計管理も含めて生活全般を依存しているのは、お母さんに生活全体を握られ、包含され、支配されている訳で、実質マザコン状態なのである。
重要なのは、職場が男中心で動くという、いわゆる「男社会」の立役者が、実は、そうした男性の母親（男性の妻）＝女性だということだこと。

男性の母親が、男性の身の回りの世話をかいがいしく全部してあげて、男性が生活面で母親無しで暮らしていけないように依存させることで、男性が母親に精神的に支配される事態が生じている。
男性がやたらと会社でやたらと仕事熱心なのも、自分の母親に「頑張って昇進しなさい」とハッパをかけられていることと関係がある。
男性は、その母親の自己実現の道具、操りロボット、愛玩対象となるペット、奴隷なのだ。
「母の奴隷」、それが、日本の男性の実像だ。
男性が勉強や仕事に専念して、それ以外に関心を向けさせないようにわざとし向けているのが、日本の母親だ。
日本の母親にとって、自分の息子は、受験競争、会社での昇進競争にまい進させる「ダービー馬」と一緒だ。息子が、そうした競争に勝って出世して社会的勝者となることが、すなわち自分の自己実現が果たされることと一緒だと考えて必死に息子の尻をひっぱたく。
そのため、息子は勉強人間、仕事人間と化すのだ。
会社はそうした「ダービー馬」と化した息子たちで溢れている。
「男社会」の出現だこと。ひたすら会社の仕事に専念する男性=ダービー馬たちの集まり=「男社会」を生み出しているのは、その母親たちなのだ。
日本の母親は、炊事、洗濯といった家事や身の回りのことに対して息子が余計な気をかけることで、本来の受験競争、会社での昇進競争に遅れてしまうことを防止するため、必死になって、息子の身の回りの世話をかいがいしく焼こうとする。
そうした母親の姿勢が、息子が、勉強、仕事以外のことをやらなくなり、身の回りのことを、財布とかも含めて全て母や妻にやらせようとするあり方をもたらす原動力となっているのだ。
息子に競争に打ち勝てとハッパをかける日本の母親は、会社で、部下に成績を上げろとハッパをかける上司と同じだ。母親が上司、息子が部下だ。
そうやって必死に息子=「母親が自分の生涯を賭けたダービー馬」の身の回りの世話をする母親の姿が、息子から見ると、自分に無償の愛を提供する理想的な恩人に見えるのだから皮肉なものだ。
妻と対比させる形で、やたらと実母を理想化して捉えるのは、思考がマザコン化している証拠だ。
母は、息子にとっては、高齢の存在であり、やがて死んでしまう。そこで、仕事以外何もできない息子が頼るのが次に妻だ。そこで起きるのが、妻=専業主婦の「お母さん」化だ。
専業主婦を実母代わりにして、彼女に精神的に依存する現象が起きる。

財布も子供も、家庭の実権も、全て専業主婦に握られてしまい、男性は、自分自身はただ会社人間としてひたすら労働して家庭に給料を入れるのみ、それしか出来ない、依存的で自立できない人間となってしまう。
男性が、妻は、実母同様自分の身の回りの世話をしてくれて当たり前、妻は自分の身の回りの世話を十分するように、それ以外の外仕事はするな、専業主婦でいろと、横柄な、妻を束縛する態度に出るので、妻には嫌われる。これが熟年離婚の原因だ。その原因の源は、自分の息子を自分のダービー馬に仕立てた、夫の母親にある。
また、日本の女性が、家事負担のため、外での仕事を諦めて専業主婦にならざるを得ない状況を作り出しているのも、息子を仕事人間に仕立てた、男性の母親だ。
そうしてやむなく専業主婦になった妻が、夫や息子を新たに自分の「ダービー馬」と仕立てて、受験、会社での昇進競争に向けてハッパをかけるとともに彼らの身の回りのことを全部かいがいしく行ってあげて仕事、勉強に専念させることで、妻＝母が自分の自己実現の道を見いだすようになるという「専業化への世代間連鎖」（夫は、仕事専業になる。妻は、家事専業になる。）が起きている。これが、日本において、いわゆる「男社会」がちっとも解消されない一番の原因だ。
日本のフェミニストや女性学者らが批判する「男社会」を作ったのは、ほかならぬ女性たちなのだ。もっとそのことに注意を払うべきだこと。
（初出 2008年05月）

「母権社会」という呼び名に変えようこと。

従来、臨床心理の分野とかでは、母親の心理的影響力が強い日本のような社会のことを母性社会と呼んでおり、世の中ではこの呼び方がなされることが多い。
しかし、この母性社会という呼び方は、どちらかといえば社会の静的な性質を表した呼び方で、日本社会において母親が動的に行使している社会的影響力、支配力の大きさを実感するには物足りない。
筆者としては、従来の母性社会という言い方に代えて、「母権社会」（ないし母権制社会）という言い方にすることで、日本の母親の強大さを少しでも実感できるようになるのが望ましいと思っている。
筆者は、同時に、欧米のように父親が強い社会は、父性社会と呼ぶよりは、父権社会（ないし父権制社会）と呼ぶのが望ましいと思っ

ている。
（初出 2008年07月）

母権社会が言われてこなかった理由。

母権社会が言われてこなかった理由は、男性の面子を潰さないための女性による配慮の結果である。女性は、自分が強いとあえて言わない。
男性は、自分自身が女性より弱いと感じると、ペニス同様、小さく、弱々しくしぼんで、女性を引っ張る強い行動力を失う。あるいは、女性を守る盾として活用することが出来なくなる。そうなると女性が困るので、女性は、必死で弱い振りをするのである。
男性がマザコン呼ばわりされるのを避けるという問題もある。日本男性が、他国の男性に比べて弱く見える、魅力無く映るのが、国防上とかで嫌だというのもある。

(初出2012年04月)

「立てられる」存在としての日本男性と「母的存在」

日本男性は、わがままな暴君、専制君主である。腕白で威張るのが好きで、いい格好しがちな存在である。
日本男性は、精神的には、永遠に母の懐に抱かれた「息子」としての存在であり、母の手のひらの上に乗って威張っているが、心の奥底では、母に甘え、深く依存した、未成熟な子供のままである。
日本男性は、結婚しても、実質としては妻のもう一人の子供として、妻に心理的に依存し、父になれない、父未満の存在であり続ける。
未成熟な子供のまま、力任せにわがままに強引に振る舞うので、見かけは、強大な支配者のように見え、それが「家父長」であるかのように見えるのである。
彼ら日本男性は、「皆の面前で」格好よく目立ちたい、威張りたい、皆を代表したいとか、上に立って指示、指図、命令したいとか、周囲に有能、できると思われ、周囲よりも早く出世、昇進したいといった、周囲の視線を前提とした「見栄っ張り」の性質を持っ

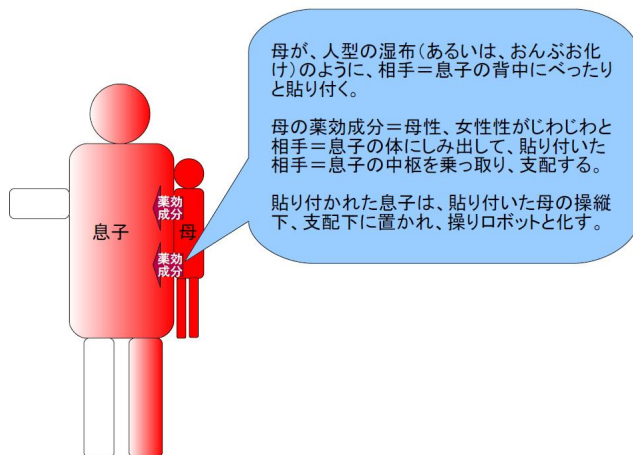
ている。
日本男性は、こうした見栄を張るために、少しでも格好良く皆の前でぴしっと決めたいという欲求を持ちつつ、それを自分一人の力で実現していくだけの心の強さを持ち合わせず、無意識のうちに周囲の自分を包み支えてくれる母的存在に心理的に頼ろうとするのである。それが自分の一人の足では立てない、ひ弱な張りぼてのような「立てられる人」状態を生み出しているのである。
日本男性は、基本的に背後から「立てられた」存在である。会社とか社会の表面に立って威張っているが、その状態を維持するには、支えが必要であり、何らかの「母的存在」が彼を立たせ、支えている。この場合、「母的存在」とは、実母であったり、妻であったり、居酒屋のママであったり、所属する会社であったりと、多種多様である。
立てられているとは、自分を立ててくれている存在に依存していることを意味する。そこら辺の、自分一人では何もできず、周囲に「立ててもらっている」という自覚がなく、まるで自分一人で自立していると思いこみ、社会の表だった支配者みたいに威張っている点が、日本男性の痛いところである。そのくせ、立ててもらわないと、優秀な社員が逃げ出した会社のように、すぐ不格好に倒れたり、潰れたりしてしまう。
日本社会の実際の支配者は、見かけ上威張っている男性たちを立たせてくれる、支えてくれる、依存させてくれる、大きく温かく包んでくれる、甘えさせてくれる側の存在であり、先に述べた「母的存在」がそれに当たる。「母的存在」こそが、日本社会の奥まったところに座る真の支配者であるということができる。
こうした「母的存在」が、「立てられる人」である日本男性を行動させる、つき動かす原動力、モーター、エンジンとなっている。それは、「母性エンジン。（お母さんエンジン。）」「母性モーター。（お母さんモーター。）」とでも呼べるものであること。そうした母性（母的）エンジン、モーターに基づいて行動するために、日本男性の行動様式は自然と、所属組織との一体化や集団行動を好む、母性的なものとなるのである。
（初出 2008年07月）

「日本＝男社会」説は「日本＝母社会」説に修正されるべき。

日本の職場は、女性の管理職の割合が、他の国に比べて少なく、昇進とかも男性より遅れる等、男性中心で動く「男社会」だ、という

社会学者の研究結果が、半ば社会の公式見解になっている。
しかし、そうした見解は、職場とかで表立って支配者みたいに威張って活躍する日本男性の背中に、男性の母親が、男性が子供の頃からぴったりと密着して貼り付いて、男性と心理的に一体化して、男性を自分の思いのままに操縦しているという事態を想定していない。
日本男性は、表立っては社会の支配者であるが、実はその男性の背中に更に真の支配者である男性の母が貼り付いて、男性を依存させ甘えさせると共に、男性にあれこれ指図、命令を下して支配している。そのため、日本社会で表立って活躍するのが男性でも、日本社会の性質は、相互の一体感、包含感、集団行動を重んじる母性的なものになる。こうした構図に、「日本＝男社会」論者は、気づくことができていない。
その点、「日本＝男社会」説は誤っており、「日本＝母社会」説に修正されるべきである。
（初出 2008年07月）

人間湿布（息子＝男性に貼り付く日本の母）

図による説明を設けていること。

人間湿布（息子＝男性に貼り付く日本の母）

日本の女性が、男性を支配するやり方は、男性の母親としての立場を最大限に利用するものである。

（段階１）母が、人型の湿布（あるいは、おんぶお化け。）のように、相手＝息子の背中にべったりと貼り付くこと。
（段階２）母の薬効成分＝母性、女性性がじわじわと相手＝息子の体にしみ出して、貼り付いた相手＝息子の中枢を乗っ取り、支配する。
（段階３）貼り付かれた息子は、貼り付いた母の操縦下、支配下に置かれ、操りロボットと化す。
日本の男性は、精神的、心理的に、常に母親を背中に背負っていて、半ば無意識のうちに、背中の母親の意向に沿うように行動していると言える。
（初出 2008年09月）

日本的ファシズムと母性

太平洋戦争中の日本社会の心理は、その女性優位、母性的性格をむき出しにした、相互一体感、包含感に基づくヒステリックな精神的高揚として捉えることができる。
すなわち、日本の女性解放運動においては、太平洋戦争時、。
・高群逸枝に代表されるように、天皇＝（女神であること。）天照大御神と見なすことが行われた。日本社会の中枢である天皇制を、女性化して捉えていたこと。
・また、母が息子に対して、お国のために死ねと命令することが平然と行われた。これは、母として、自分と非独立で一体化している、自分の命令を聞いてくれる息子に対して、絶大な心理的影響力を行使していたことを示している。
こうした、いわゆる日本的ファシズムと呼ばれる社会的風潮は、女性、母性の強い影響下で作り出されたものであり、日本社会における女性、母性の強さとして捉えることができると言える。
（初出 2012年03月）

姑社会、姑支配社会としての日本 - 日本人の姑根性 -

日本社会で一番力が強いのは、表面に出て威張っている男性ではなく、その母親の姑である。
姑は、息子との間で、強力な母子一体、癒着状態を作り出し、その中で、親→子供の支配従属関係を利用して、息子を精神的に支配するのである。
姑は、普段は、表に出ずに奥に収まって「いつも息子がお世話に

なっております」みたいに頭を下げて言っているので、家庭で強権を振るっている実態が、なかなか表に出にくいのである。
日本社会全体が、姑の価値観、姑根性に染まっていて、重箱の隅をつつくようなやり方で、社会の中で嫁相当の立場にある弱者をチクチク陰険にいじめているのである。
姑根性は、。
「何事も、「～しなさい」の上から目線の命令、指示口調で行う」。
「上位者である姑に対する精神的な絶対服従を、相手に要求し、言挙げは一切許さない」。
「細かい所まで隅々まで監視の目を行き届かせ、箸の上げ下げにまで口うるさくヒステリックに文句を言う」
「自分の気が済むまで、ひたすらペラペラ相手に一方的に説教しまくり、話している最中に、次から次へと新たな説教の種を連想して思い出しては説教を続けることで、相手を心理的に窒息させ、逃げ場がないところまで徹底的に追い込む」。
「既存の家風（とか社風）、しきたりへの一方的な帰依を相手に求め、新たな変革の試みをことごとく前例に反するとして、握りつぶす」
といった特徴を持つ、相手を支配する際に姑が見せる態度である。
これが、日本人の、特に弱者に対する態度の基盤になっているように思われる。先輩の後輩に対する態度とかが、この姑根性の典型である。
（初出 2008年12月）

姑思考、姑根性、姑イズム

日本において、広く社会の上位者、支配者が持つ思考様式、イデオロギーである。
全ての人は、何らかの形で姑の立場、嫁の立場に二分される。
日本では、親会社、職場の上司、学校の先輩、地域の本家が姑相当の立場にいる。
下請け会社、部下、後輩、分家、小作が嫁相当の立場にいる。
姑は、自分の子供や孫への世話が行き届かないのを嫌う。
嫁が、自分の子供や孫を放って、働きに出ることはもっての他である。
姑は、嫁の手抜き、怠けを一切許さない。
嫁が子供を保育所に入れるのは、嫁による育児放棄であるとして、許さない。保育所の増設を嫌うこと。待機児童の解決が進まない、

主な原因となっている。
姑は、嫁の落ち度をくまなく探し、指摘し、延々とエンドレスに説教する。
嫁の反抗、嫁の自分からの逃避、自主独立、嫁が自身の縄張り構築をするのを許さない。
姑思考は、以下の通りである。
嫁を細かく、漏らさず監視、干渉すること。
嫁に、自分の価値観を押し付けること。
上から目線で、嫁をうるさく注意すること。
姑思考は、以下の通りである。
マイナス点ばかりに注目する減点主義であること。
責めるばかりで、褒めようとしないこと。
批判、ダメ出し、潰し、否定するばかりで、肯定や積極的提案が無いこと。
目上から目下への一方的で長時間の説教、自説展開を行うこと。
反論すると、根に持って、いじめる、いたぶること。反論自体を許さないこと。
説教の内容が、感情的、情緒的であり、客観性に欠けていること。
姑思考は、以下の通りである。
我慢を強要すること。
辛さの回避を甘えと判定して批判すること。
自分への完全服従を求めること。
上から目線であること。
サディストであること。
姑思考は、以下の通りである。
些細なことに姑息であること。細かいこと。
漏れがないこと。嫁にとって閉塞感があること。
姑は、以下のことを行う。
嫁が考えた新しい知識、アイデアを否定すること。自分の知識が無効化するのを拒否すること。
いわゆる無縁社会の発生と、嫁の姑からの独立達成とは、深い関係がある。
個々の日本人にとって、外部社会、世間は、姑の役割を果たしている。彼らは、それを嫌って、内々に閉じこもって、外部社会、世間との連絡を最小限へと絶とうとするのである。
姑の影響力低減こそが、本当の日本のフェミニズムのねらいであると言えるのかも知れない。
（初出 2010年7月）

母思考と姑思考

母権社会日本における、日本人の思考の原型は、母であり、その思考様式は、母的思考、母思考と呼べる。
身内というか、同じ血縁内、派閥、グループ内、内輪に対しては、母思考であり、相手への慈しみと、惜しみない愛情の投入、甘えの受容が見られる。
一方、よそ者、血縁外、グループ外、派閥外に対しては、姑思考であり、相手に対する辛口の評価、批判、説教が先行する。
母思考、姑思考のいずれにおいても、相手を包み込み、呑み込む感じが強く、相手にとっては、一体感、閉塞感、窒息感、逃げ場のない被支配感が感じられる。
（初出 2010年7月）

日本の家庭における姑の弱体化

最近の日本においては、夫の妻＝嫁が、夫の母親である姑と同居しなくなったことにより、姑の、息子の家庭への影響力が低下しつつある。
嫁が姑との同居を嫌い、姑と同居しなくて済む男性ばかり選んで結婚している。あるいは、嫁が夫との結婚条件として、姑との非同居を求めることが当たり前になりつつある。
姑の同居しない日本の家庭は、すっかり妻＝嫁の独立王国となり、夫が妻＝嫁の言うことを聞くようになり、母である姑のことを避ける、付き合わないようになりつつある。
夫は、妻＝嫁の言うことを聞かないと、離婚されてしまい、慰謝料の請求とかで自分の財産を身ぐるみ剥がされた上、ひどい時には、家から追い出されてしまう。
また、夫は、マザコンだと、妻＝嫁にとって、離婚する格好の理由になる。したがって、夫は、母である姑とくっつき続けることができず、母子連合体の破壊につながる。
こうした点から見て、従来筆者が主張してきた、日本において姑が家庭を支配するという構図は、やや改められなくてはならない。かといって、日本の家庭が母性中心、女性中心であることを止めたかと言えばそんなことは全然なく、子供を出産して母親となった嫁が、母子連合体の形成で、夫を圧倒、疎外する構図は変わらず、また夫が嫁に対して母親代わりに精神的に依存する傾向が強くなることで、従来の姑中心が、新たに嫁中心に変わっただけであるといえる。日本の家庭が母性、女性に支配されていることは、今までと何

ら変わりない。
すなわち、従来は、嫁姑同居により、母、姑が子供（息子、娘、孫）を大人になっても、結婚後も、母、姑が存命する限り一生支配し続ける、「一生支配」の世代間連鎖が起きていた。それが、嫁が強くなって、姑との同居を避けるようになり、嫁姑別居が起きることで、母（姑）が、息子の前半生、結婚するまでを支配し、妻（嫁）が結婚後の後半生を支配する、母（姑）と妻（嫁）による「時分割支配」に変わってきていると言えること。
日本男性は、前半生は母にすがり、後半生は妻に頼る、という構図になってきていると言える。

（初出 2012年2月）

女系社会化した日本

現在の日本は、母と娘のつながりが強い、母と娘のつながりで持っている社会である。
従来、娘は、結婚して夫の家に入り、元の家族とは断絶すると見なされてきた。
それが、結婚しても、母と娘との絆が切れなくなった。
メール、電話、ネット、交通の発達により、絆が保持されるようになってきた。
母親にとって、息子は異性な分、どうしても手を付けられない、よく分からない領域が出てくる。一方、娘は、自分との同質性がより強く、よく分かる存在であり、それゆえ絆が強くなる。
また母親にとって、息子は自分と同性のライバルである嫁に取られてしまうが、娘は取られることがなく、いつまでも親密な友達でいられる。
また、年取った母の世話をするのが、赤の他人の嫁よりも、血のつながりのある娘がする方が心理的に順当であるという点もある。
嫁が心理的に夫の家に入らなくなり、姑との付き合いや世話を嫌だという傾向が強くなってきており、それに代わる存在として、娘がクローズアップされてきているのである。
結婚した女性の場合、姑の嫁としての立場と、実母の娘としての立場の両方が同時に存在し、今までは姑の嫁としての立場が主だったのが、実母の娘としての立場に転換しつつあるということである。
あるいは、昨今の日本経済の景気悪化と雇用空洞化の深刻化により、結婚相手の男性の収入だけでは生活して行けず、女性も働きに出ざるを得ない状況が生まれているが、その際、子供をどこに預け

て働くかが問題になる。
困ったことに、日本の保育所の数は、こうした現状を想定しておらず、子供の収容人数が少なすぎるため、そのままでは入所待機になってしまい、女性は働きに出ることができない。
そこで、そうした困った状況を解決するとしてクローズアップされる存在が、女性の母親である。子供を自分の母親に預けることで、女性は働きに出ることが容易になるのである。
こうして、母 - 娘のライン、連鎖が社会的に優勢になることで、日本の女系社会化が進んでいると言える。
というか、結婚する夫婦と、その母親との関係において、姑（夫の母）から、妻の母（これは何と呼ぶのであろうか。）への権力移転が起きていると考えられる。
これは、嫁が姑と同居しなくなったというか、そもそも同居しないことが結婚条件になることが多くなってきて、姑の嫁に対する権力行使の場面が減っていることが大きい。
もっとも、夫の母から、妻の母へと、権力の持ち主が変わっただけで、同じ母という存在による支配であることには変わりない。日本は、姑による支配が弱くなっても、引き続き母権社会のままであると言える。
（初出 2010年7月）

姑による全面支配から嫁の独立へ

日本の家庭は、かつての姑による嫁の全面支配から、姑による嫁の部分支配を経て、嫁の姑からの独立と自由の確保の状態に移りつつあると考えられる。姑と夫の同居が当たり前だったのが、たとえ長男であっても別居するように変わりつつある。
これは、以下のような3段階の図にまとめることが出来る。

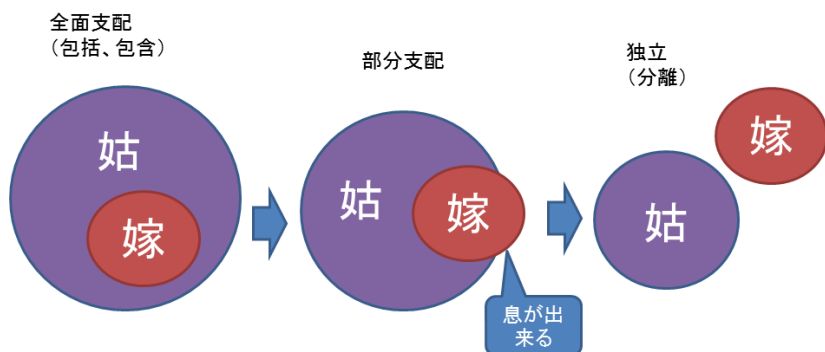



図　姑と嫁　支配の3段階

かつては、姑が嫁を包括、包含し、全面的に支配していたのが、嫁が姑のもとから表面上に頭を出して独自の息が出来るように変化し、更に、嫁が姑から分離して、独立するようになってきている。

（初出2014年1月）

日本女性による非難の対象が姑から実母に変わってきている。

日本では、最近、女性がバッシングする対象が、姑から実母に変わってきている感じがする。
それは、「母が重い」とか言った表現で、自分の母親をウザいと捉え、批判するものである。本や雑誌で、実母をバッシングする内容のものが売れているようだ。
先年までは、女性は嫁として、姑と同居する生活をしていたが、それが嫌なので、姑との別居を前提とする結婚を夫に求め、それを実現させてきたのだと思う。
その実現がようやくかなったと思ったら、今度は、実母がうざったく感じるようになったので、ストレスのはけ口を求めてバッシングを始めた感じがある。
女性の業は深いなと思わせる出来事である。

（2015年2月）

独裁者としての日本の母

日本の母親は、一人で子育てを独占的に行う。
その結果、日本の母親は、子供にとって、自分を支配する独裁者となる。
子供は、母親に絶えず密着されて、逆らうことができず、母性の漬物と化すことになる。
この現状を打破するには、強い父性を備えた父親の介入が必要である。
そうした強い父性を日本男性が得るためには、日本男性の母からの引き離し、解放が必要である。
（初出 2011年10月）

母子上下関係の永続化と、母権社会の発生

日本においては、母親が主体となって、育児、子育て、子供の教育を行なっているが、その際、幼少の時に見られる母と子との間の濃厚な精神的上下関係、支配依存関係が、そのまま小学校、中学校、高校、大学、社会人と、子供が成長していくにつれても、維持され続け、更には、子供が大人になって、結婚し、子供を設けてからも、引き続き維持され続けるのである。母による子の永続的支配がそこには見られる。
こうした、日本における、幼少時からの母子間の上下関係、支配依存関係が、永続的に維持されることが、日本社会の母権社会化と大きな関係を持っていると考えられる。すなわち、日本社会の人々が、子供として母の支配を、子供の時からの習慣、慣性で、引き続き大人になってもそのまま受け続けることが日常化していることが、社会が母権社会になること、母権社会発生の原因であると考え

られる。

（初出2012年07月）

姑視点で物を見る日本男性の女性批判

日本の男性は、母親との一体化の度合いが強く、他の女性を見るときなど、自分の母親＝姑の視点で、あたかも格下の嫁を見るかのように見下して見がちな傾向がある。これが、日本において、男性＝格上、女性＝格下とする男尊女卑の考え方の元になっている。
後は、日本の男性が女性を批判するとき、自分の母親はその批判対象の女性には含まれておらず、別腹扱いとなり、自分の母親のことは肯定的に見がちである。同じ女性でも母親は格上の存在として捉えがちである。

（初出2014年4月）

母艦としての存在

日本のようなウェットで母性的な社会では、男性は、巨大な母艦、母胎である女、母の元から飛び立ち、帰ってくる、矮小な存在である。
一方、欧米のようなドライで父性的な社会では、男性は、母艦なしに自由に飛び回る、ある程度大きな存在であり、女性はその男性にしがみつくだけで何も出来ない無力な存在である。
（初出 2009年11月）

母への甘え、女性への甘えで成り立つ日本社会と、男女共同参画社会モデル導入の欠陥

日本社会は、母への甘え、女性への甘えで成り立っている社会である。

日本社会の基盤部分（家計管理、子育て、ウェットな対人関係・・・）を女性（特に母親）が支配している。男性は、生育の過程で、彼女らに足首をつかまれ、支持され、立たせてもらって、やっと活動できている状態であり、女性たち（特に母親）に心理的に深く依存し、甘えていること。しかし、同時に社会的な行為責任を女性たちから負わされて、各種の責任者、会社・官庁の管理職とかをやっているので、表面的には、そうした男性たちが、日本社会の支配者のように外部者の目に映るのである。

そうした点を無視して、社会を父が支配する西欧流の男女共同参画社会モデルを日本社会に導入した結果、女性への作業負荷が大きくなりすぎてしまい、機能不全に陥っている。要するに、女性たちが、男性に甘えられて、男性の面倒を全面的に見ながら、かつ自分も、会社や官庁で男性並みに働かないといけないみたいな感じになっており、作業面で完全にオーバーフロー化している。

日本の少子化が指摘されて久しいが、日本の少子化の原因は、こうした感じで、社会進出を求められる余り、男性の面倒を見たり、子供を産み育てたりする余裕が、女性の側に無くなってきているのも一つの要因なのではないだろうか？。

日本の少子化を解決するためには、一つは、。
・男女共同参画社会モデルを日本にこれ以上導入するのを止めること。旧来の、男性が女性に心理的に依存し、女性が男性を心理的に全面的に支えるモデルに戻る。
ことが上げられる。

一方、男女共同参画社会モデルを日本に導入し続ける場合、
・女性に一方的に甘え放題の男性の意識改革が必要である。女性に甘えずに、一人で何とかやっていくことで、女性に負荷を掛けないようにすることが求められる。あるいは、母、妻以外に甘えられる対象＝「代理母」（のカウンセラー、ソーシャルワーカー）を社会的に用意することが求められる。
・女性の家事負担、育児負担を軽減するため、母性的人工知能、母性的情動を持った家事、育児ロボット（人肌のような温かいロボット＝「人肌ロボット」）等の導入を図る必要がある。例えば、子供の様子を観察、監視して、母親の声で「いけません！」と警告を発するカメラの導入とかが必要である。

（初出2014年12月）

日本の少子化の原因としての男女の中性化

日本社会の少子化の原因として、男女共同参画社会の政策との関連が挙げられる。

男女共同参画社会の政策では、「男らしさ、女らしさより自分らしさを追求すべき」ということになり、互いに異性を意識したり誘引することを抑制された結果、男女の結合の発生が抑制され、男女が中性化を余儀なくされ、それが少子化につながっていると言える。
（初出2015年2月）

不妊の日本女性と権力

日本の女性が権力を握る、支配者になるには、母親になる必要がある。不妊の女性は、母になれないので、そのままでは権力からは疎外されると考えられる。
そこで、彼女らは、教師とか、企業の管理職、NPO代表とか、集団、組織成員にとって母親代わりの役に就くことで、権力を握ることになる。
（初出 2011年8月）

外観になりふりかまわぬ権力者としての日本女性

日本の母親は、髪を振り乱していて、美しくない、みっともなくて良くないという意見がある。
権力者は、他人に、自分の言うことを聞かせるために、必死になって主張したり、子供に手を上げたりする。見かけに構っていられない、取り繕っていられない、権力者であることの現れであること。
そういう点では、身なりに構わない、生活感にあふれた日本の母親は、権力者の姿そのものであると言え、社会的に力があることの表れであるとも言え、そういう点では望ましいと言える。
（初出 2011年8月）

反論不可社会とソフト、デリケートエリア

映画監督やタレントとして世界的に有名なビートたけしは、自分の弟子筋に当たる人たちに対して、自分のことを殿と呼ばせ、ハハッと平伏させて、自分に対しては絶対服従、反論を許さないかのように振る舞っている。
ビートたけしの場合、上記の振る舞いは単なるギャグなのかもしれないが、実際のところ、親分、子分関係に代表されるような、日本の上位者-下位者関係は、この上位者に対する下位者の反論を一切許さない、専制的な対人関係になることが多いように思われる。しかもその場合、下位者が上位者に対して母親代わりに心理的になつき、甘えたり、わがままをする姿も見られるのである。
上位者に直接冷徹に刃向かう反論は許されないが、上位者になついていれば、ある程度のわがまま、いたずら、自由は許されるという構図になっている。
それでは、なぜ上位者に直接刃向かう反論がいけないのか？。
その理由は、それが、上位者の心にある、以下の心理を破壊するからである。
(1)自分は下位者より上位におり、かつ下位者は自分になつき、自分を慕ってくれ、心理的一体感を持って付いてきてくれる、同意してくれるはずであり、それだけの人間的度量が自分にはあるのだという高いプライド。
(2)下位者への間に培われた心理的な密接な一体感、安心感。
その両者が予期せず一度に破壊され、切り裂かれること。上位者の心の中の柔な領域（ソフトエリア、デリケートエリア）に直接大きな切り傷ができて、上位者にとって心理的ダメージが大きいこと。それは、そうした理由で、禁止である。それは、寝首をかかれるのと同じ効果がある。
この場合、ソフトエリア、デリケートエリアとは、以下のような領域である。あたかも人間の柔肌のような、温かく、柔らかで、ナイーブで、繊細で、敏感で、粘膜で覆われた、無防備で、傷つきやすく、いつもは、固いガードの領域（ハードエリア、ガードエリア）で覆われて、外部の侵入を容易に許さない領域であること。
上位者が、下位者と心理的に一体になること。（親分、子分の関係になること。）その時点で、上位者は、心理的なデリケートエリアを下位者に対して直接さらすことになる。むろん、下位者も同様に上位者に対してデリケートエリアを直接さらすことになる。両者のデリケートエリア同士が直接、一体で間を割るものなしに密着したときに、上位者と下位者との間の主従関係、親分子分関係が完成するのである。
人間にとって、自分の本音、自分の本当の気持ちは、このデリケートエリアにこそ存在するのである。相手と互いに自分のデリケート

エリアをさらすことは、相手と本音の付き合いをすることである。その関係を結ぶための特別な儀式（盃交わしとか）が必要となることが多い。
こうした、上位者と下位者との間のデリケートエリアの相手への露出、一体化をすることの原型は、母子関係にあると考えられる。というか、日本におけるヤクザとか体育会系の親分＝上位者は、下位者にとって、包容、愛着、一体化の対象であり、母親代わりの存在であると言える。
互いのデリケートエリアに直接アクセスして、密着するのは、相互の心理的一体感、密接感を重んじる女性優位、母性的な傾向であり、それゆえ親子関係としては、母子関係に特徴的に見られると言える。また、女社会での上下関係に特徴的と言えること。こうした相互の密着、一体感は、上位者と下位者との間にウェットな感触を呼び起こすのである。
一方、欧米のような、男性優位、父性的上下関係、父子関係を基盤とする社会、男社会においては、上位者と下位者が直接デリケートエリアを互いにさらし、密着させ合うことは原則として無く、ガードエリア越しでの対応となる。互いの自主独立、自由を保ったまま、ある程度相互の距離を置いたまま、相手の動きを観察して、相手の取る進行方向や考え方、イデオロギーを相互に見極め、最終的に相互を信頼する形で、いわば相互にドライに離れた形で主従関係を完成させるのであること。相互に離れたまま、相手の人格の根幹を信頼し合うのであること。
日本のような母子関係を基盤とする社会では、母や母代わりの上位者は、下位者にとってクッションとして立ち現われる。クッションは、互いに柔軟にフィットし、一体化が可能な存在であり、メンタルなデリケートエリアを直接具現化した存在である。この場合、下位者も上位者に対して、相互の柔らかな一体感を保持するため、小さなクッションであることを求められる。固いビー玉ではダメなのである。上位者、下位者共に、人間としての体質がクッション体質になる。
あるいは、日本社会自体が、国民に対して大きなクッションとして立ち現われるのである。クッション社会、クッション国家の出現であること。
クッションは、それ自身に対して、あるいは相手先に対して、どうしても自然と柔らかくフィットして、迎合してしまう存在である。それと同様に、女性、日本人のようなクッション体質の人間は、物事を掘り下げたり、切れ味鋭く分析するのに根本的なところで向いていないと言える。
クッションとしての上位者に、べたべたくっつき、体を預けたま

ま、一体化して離れようとしないのが、なつきである。
優れたクッションは、ぐいぐい押しても、それを吸収して元の形に戻る。クッションをぐいぐい押す行為が、下位者による上位者に対するいたずらや甘えである。
女社会、日本社会のようなクッション社会においては、このクッションとしての度量が大きいほど、人間としての度量が大きいと見なされ、理想的な上位者と見なされる。
（初出 2010年7月）

３．

本書の要約、まとめ

※この項目は、書籍「日本社会の女性優位性格」と共通です。
家庭、家族関係は、大きく分けて、。
（１）夫婦関係 家庭の基盤となる男女関係
（２）親子関係 父子、母子、義理の父子、母子関係
から成ると言えること。
日本の家庭、家族の中の男女の勢力関係は、。
（１）夫婦関係に着目すると、日本では、夫＝男性が強く見えることが多い。
・嫁が夫の家に嫁入りし、夫の家の言うことを聞く必要がある。
・男尊女卑で、夫が威張っている。
・稼ぐのが主に夫であることが多く、妻、嫁はあまり稼げておらず、経済的に夫に依存せざるを得ない。
こうした点を強調して、日本の家族は家父長制だという主張が、日本の社会学者の間では主流になっている。
一方、妻＝女性が強く見える側面もある。
妻が家計管理の権限を独占していることが多く、小遣いを夫に渡す場面が多く見られる。小遣いは渡す財務大臣役の方が、もらう方より地位が上である。
（２）親子関係に着目すると、日本では、母＝女性が強い。子育ての権限を独占し、教育ママゴンとか呼ばれ、怪物扱いされていること。子供を自らの母性の支配下で動く操りロボットにすることにすっかり成功していること。一方、父は、子供と関わりをあまり持とうとせず、影が薄い。
こうした母親の影響力の大きさを考慮して、日本社会は母性社会だという主張が、日本の臨床心理学者の間で主流になっている。

このように、夫婦関係を見た場合と、親子関係を見た場合とで、日本の男女の勢力に関する見方が分裂しているのが現状であり、両者の見方をうまくつなぎ合わせる統合理論が必要である。
筆者は、両者の見方をうまく統合させる契機として、「夫＝お母さん（姑）の息子」と見なして捉えることを提唱すること。
家父長として強い存在と思われてきた夫が、実は、母、姑の支配下に置かれる操りロボットとして、実は父性が未発達の、母性的な弱い存在であることを主張する。
日本において、子育てを母が独占し、子供の幼少の時から、強力な排他的母子連合体（母子ユニオン）を子供と形成すること。（母が支配者で、子が従属者、母の操りロボットであること。）この母子一心同体状態が子供が大人になってからもずっと持続し、この既存の母子連合体が一体となって、新入りの嫁を支配するという構図になっている。このうち、「母の息子＝夫」と嫁の間のみを取りだして見ると、夫が嫁である妻を支配するという従来、日本＝家父長制社会論で主張されてきた構図が見える。しかし実際には、夫は、母である姑に支配されており、その姑と一体となって、嫁を抑圧しているに過ぎない。
日本の夫婦における勢力関係を正しく把握するには、夫婦（夫妻）だけを見るのではなく、夫婦（夫妻）のうちの夫側に、母のくさびを打ち込むことが必要である。あるいは、母や姑が一家の実質的な中心であり、真の支配者であるとする「母」「姑」中心の視点を持つことが必要である。
夫婦だけを見るのでなく、
・母～息子（夫）←（何人も割って入ることを許さない母子連合体、ユニオン。）
・姑～嫁（妻）
・夫（母の息子）～妻（嫁）
の3つを同時に見る必要がある。夫の父（舅）は、一世代前の母の息子のままの状態であり、影が薄い。夫の姉妹は、小姑として、夫同様、姑中心の母子連合体の一員として、嫁を支配する、姑に準ずる存在である。
夫は、妻にとっては一見強い家父長に見えながら、実際のところは、いつまで経っても母の大きい息子のまま、母に支配され、精神的に自立できない状態にある弱い存在であるという認識が必要である。
母の息子である夫、父は、一家の精神的支柱である母と違い、家父長扱いされながらも、母に精神的に依存し続けて一家の精神的支柱になれない、ともすれば軽蔑され見下される存在と成り下がっているのである。

夫は、仕事にかまけて子供と離ればなれになっているが、実は、この仕事が、夫の母の代わりに行っているというか、母の自己実現の代理になっている。会社での出世昇進とか、一見、夫が自分自身のために頑張ってしているように見えて、実は、夫自身が母の中に取り込まれ、母と一心同体となって母のために頑張って行っているというのが実情である。母が息子の出世昇進に一喜一憂し、夫にとって、自分の人生の成功が、そのまま母の人生の成功になっている。また、夫が会社で取る行動は、会社人間のように、会社との一体感、包含感を重視する、とかく母性的なものになりがちで、彼を含めた会社組織の男性たちが大人になっても母の影響下から脱することが出来ていないことを示している。
筆者は、こうした、。
・母（姑）による息子＝（妻にとっての夫）の全人格的支配
・妻による家計管理の権限独占に基づく夫の経済的支配
の両者を合わせることで、日本の家庭~社会全体において、母性、女性による男性の支配が確立しており、日本は、実は、母権社会、女権社会である、と主張する。一家の中心は、母、姑である。
欧米の権威筋の学説（Bachofen等）は、母権社会の存在をこれまで否定してきており、筆者の主張はこれに正面から反対するものである。
日本人の国民性と男女の性格との相関を取ると、日本人は女らしい（相互の一体感、所属の重視。護送船団式に守られること、保身安全の重視。リスク回避、責任回避重視。液体分子運動的でウェット・・・）で動いているという結論が出る。これは、日本社会が、女権、母権社会であることの動かぬ証拠と考えられる。日本人は、姑根性（周囲の、後輩などの嫁相当の目下の者に対して、口答えを一切許さず、妬み心満載で、その全人格を一方的、専制的に支配すること。）で動いている。このこと自体が、日本社会における母、姑の影響力、支配力の強さを表している。それゆえ、日本の社会、家族分析に、姑中心、母中心の視点を取ることが必要であると言える。
従来の日本男性は、母や妻による支配を破ろうとして、がさつな乱暴者、あるいは雷親父となって、ドメスティックバイオレンスとかで対抗してきた節が見られるが、暴力を振るうだけ、より家族から軽蔑され、見放される存在になってしまう結果を生み出している。あるいは、家庭の外の仕事に逃げようとするが、仕事に頑張ることがそのまま母の自己実現になるという、母の心理的影響、支配を振り切ることはそのままでは不可能である。
こうした女性、母性による日本社会支配は、日本社会の根底が、女向きの、水利や共同作業に縛られた稲作農耕文化で出来ているため

に生じると考えられる。そこで、筆者は、日本男性は、従来の伝統的稲作農耕文化から脱却して、新たに、家父長制の本場である欧米やアラブ、モンゴルといった遊牧、牧畜民の父親のようなドライな父性を身につけることで、母と妻に対抗できるようにすべきだ、母と妻の支配から解放されるべきだと主張する。これが、日本男性解放論である。要するに、子育てと家計管理において父権を確立することで、父親として真に社会で支配力を持った、尊敬される存在になろうと呼びかけるものであること。筆者は、その際、稲作農耕を、伝統的な日本方式から、よりドライなやり方のアメリカのカリフォルニア方式に改めることで、稲作農耕を維持しながら、ドライな父権を社会に実現できると予期している。
筆者は、最終的には、男女の力関係は、対等の50：50が望ましいと考えている。これが、究極の男女平等であると主張する。欧米みたいに、男性、父性が強くなり過ぎても、日本みたいに、女性、母性が強くなり過ぎても良くない、適度なバランスが必要と考える。家計管理を、夫と妻が1月交代で行う月番制導入とかである。
（初出2012年6月）

日本社会の女性的性格

１．

日本社会の女性的性格40ヶ条 - 女々しい日本村社会 -

日本社会、村社会は、以下に述べるように、女々しさにあふれている。社会が女の色に染まっている。
これは、女性の、日本社会に占める勢力、影響力の大きさの現れである。男性の勢力を上回る女性優位の証拠であること。
日本社会、日本的村社会は、女流社会、女社会（女性優位社会）と言うことができる。女性は、皆、村人である、ということも出来る。
日本社会の女性的性格は、以下のようにまとめられる。

○A.「対人関係重視」
(1)「対人関係を重視すること。つながりを指向すること。
(2)「コミュニケーション、話し合い、打ち解け合いを重視すること。
(3)「対人関係が累積する。リセット出来ないこと。転身が難しい。
(4)「対人関係が長期持続する。対人関係が癒着、粘着しやすい。談合体質であること。
○B.「所属、同調重視」
(5)「一緒、群れを重視すること。仲良しグループ形成、護送船団方式を好むこと。巻き込み、連帯責任が生じやすい。
(6)「所属を重視すること。包含感覚、胎内感覚を重視すること。心中を好むこと。
(7)「定住、定着、根付きを重視すること。継続を重視すること。専門家を重視すること。固執すること。
(8)「同調性が強い。画一、横並び、流行、トレンドを重視すること。嫉妬心が強い。
(9)「同期意識が強い。年功序列、先輩後輩制を好むこと。追い抜き、競争を嫌うこと。天下りを好むこと。
○C.「和合、一体化重視」
(10)「物真似、コピー、合わせが好きである。
(11)「和合、一体感、共感を重視すること。
(12)「小グループ同士がバラバラ、無関係、無連携、無関心、縦割り、不仲である。
○D.「被保護、高不安」
(13)「守られたい、頼りたい、養ってもらいたい、甘えたい、寄生したい心理が強い。
(14)「権威主義であること。批判、反論を許さないこと。
(15)「安全、保身第一であること。不安感が強い。臆病であること。退嬰的であること。リスク、チャレンジを回避すること。独創性が欠如する。
(16) 「前例、しきたり偏重であること。前例の小改良、磨き上げが得意である。先輩後輩関係がきつい。
○E.「停滞」
(17)「後進的、現状維持的」
(17-1)「思考が伝統的、封建的、後進的である。
(17-2)「無競争、無風、停滞、（既得権益とかの）現状維持が好きである。不変を好むこと。
(17-3)「外部からの先進的考えの流入に抵抗するが、いったん突破されると諾々と受容、丸呑みするものの、流入が止むと元に戻る。

○F.「視線敏感性」
(18)「恥、見栄を重んじること。内部問題を対外的に隠蔽すること。真実を隠蔽すること。綺麗事、美辞麗句を好むこと。公式、公開の発言の場で沈黙すること。
(19)「配慮、気配りを重視すること。遠慮、引きこもりがち、孤立しがちであること。
(20)「清潔さを好むこと。みそぎをする、洗い流す、総取り替えするのを好むこと。
○G.「責任回避」
(21)「責任を回避すること。決定、判断を停止、回避、先送りすること。無責任であること。匿名行動を好むこと。
○H.「情緒」
(22)H.「可愛がり、なつき、情けを重視すること。
○I.「根回し」
(23)「事前合意を重視すること。いったん合意した流れ、方針の変更が困難である。慣性で進もうとすること。
○J.「高プライド」
(24)「プライド（良い格好を重んじる度合い）が高い。失敗恐怖症であること。
○K.「閉鎖性」
(25)「閉鎖性、排他性が強い。内外感覚が強い。入試がある。白紙採用を好むこと。思考が内向きである。閉塞感が強い。対内融通、配慮が効く。自前で済ませようとすること。
○L.「受動性」
(26)「受動性が強い。行動主体が非明確である。主体性が欠如している。他者のリードを求めること。静止、不動状態が好きである。
○M.「プライバシー欠如」
(27)「相互監視、告口を好むこと。他人の噂話を広めるのを好むこと。プライバシーが欠如している。
○N.「ソフトな対応」
(28)「対応が間接的、ソフト、遠まわしである。
○O.「場当たり対応」
(29)「対応が近視眼的、場当たり的、個別、局所的である。
○P.「ヒステリック、感情的」
(30)「対応がヒステリック、情緒的、非科学的である。感情的に反応すること。
○Q.「高精細、高密度」
(31)「スケールが小さい。高精細であること。
(32)「高密度、詰め込み、集中を好むこと。
(33)「厳格、正確であること。

○R.「減点主義」
(34)「正解、正論、完璧、無難、無傷指向、減点主義であること。
○S.「自由の欠如」
(35)「一体行動、一斉行動を好むこと。管理主義、統制主義であること。相互牽制を好むこと。長時間拘束を好むこと。自由行動を許さないこと。
(36)「上意下達を好むこと。従順であること。
○T.「標準指向」
(37)「総花式、オールインワン、万能、八方美人を好むこと。
(38)「突出を回避すること。目立たないようにすること。標準、普通を指向すること。
○U.「中心指向」
(39)「中心、周辺を区別、差別したがること。中央、中心、都心を皆で指向すること。
○V.「ネガティブ」
(40)「他人の陰口、悪口を好むこと。他人の欠点探しや粗探し、足を引っ張るのを好むこと。思考、やり口がネガティブ、マイナス、陰湿、陰険である。

以下、個別に説明すること。
(1)「対人関係を重視すること。つながりを指向すること。
対人関係を本質的に重視すること。無機的な物質よりも、人間の方に興味が行く。人間関係、縁故、コネ、人脈の構築に注力し、得意とすること。人と人とのつながり、絆を重視すること。政党とかで、明確な目標論争やビジョンの相違によってグループができるのではなく、「あの時、○○先生に○○でお世話になったから、○○先生の門下に入ろう」といったように、人物、対人関係本位で縁故関係を作り、それが派閥、学閥等となって、社会を動かしている。他人の気持ちに敏感で、人の心の動きを読むこと、心理学やカウンセリングに関心を持つ人が多い。無機的な機械、ロボットをも、ヒューマノイドとして人間化してしまう。小さいときから、男の子のように無機的な機械や物質ではなく、人形や周囲の人間に興味を惹かれて、気に入られるように行動する女の子と、考え方が一緒である。（vs男性的性格：対人関係は、何か目標を実現するための手段に過ぎず、一時的なものである。つながることよりも、独立して自由に動けることが重要である。）
(2)「コミュニケーション、話し合い、打ち解け合いを重視すること。
対人関係構築、維持のために、会社とかで、コミュニケーション、通信をやたらと重視すること。周囲の親しい他者と対話、会話をす

る、しゃべる、打ち解け合うのを好むこと。ペラペラおしゃべり可能な電話を好むこと。親しい相手との手紙、メールの、間を置かない頻繁なやり取りを望むこと。対人関係維持のために、要件が無くても、長話するのを好む。直接対面でのコミュニケーションを好むこと。

（vs男性的性格：コミュニケーションは、何か目標を実現するための手段に過ぎず、それ自体が目標になるものではない。）

(3)「対人関係が累積する。リセット出来ないこと。転身が難しい。
対人関係が、世代を重ねてどんどん累積していく。対人関係、コネの切断、リセット、初期化が出来ない。一度できた関係やコネをそのままずるずる続け、保持していくこと。ある分野、領域で一度できたコネを気軽に切って、別の分野、領域に転身することを嫌い、一度入った分野、領域にずっと居続けることを要求すること。友人関係とか、学校、職場に入った最初の一瞬で、その後がずっと決まってしまう傾向がある。別の領域、組織集団に転身しようとしても、既にその領域に既存の対人関係が累積して出来上がってしまっているため、後から入り込む、入れてもらうことが容易には出来ない。あるいは入れてもらったとしても、身分、立場の低い新入り扱いになってしまう。

（vs男性的性格：対人関係は簡単にリセット出来て、次の新天地への転身が可能である。）

(4)「対人関係が長期持続する。対人関係が癒着、粘着しやすい。談合体質であること。
いったん出来た対人関係が長期にわたって延々と持続する。対人関係が粘着的であり、しつこい。一度始まった会話や説教が延々と長引き、なかなか終わらない。日本社会は人間関係が納豆みたいにネバネバ、ベタベタしており、「納豆社会」と呼べる。対人関係が癒着しやすく、談合とか起こしやすい。

（vs男性的性格：対人関係は短期的なもので、淡白で、あっさりしたものである。）

(5)「一緒、群れを重視すること。仲良しグループ形成、護送船団方式を好むこと。巻き込み、連帯責任が生じやすい。
皆で一緒にいようとすること。群れるのを好むこと。集団、団体での行動、共同作業を好むこと。集団主義であること。一人では行動できない、行動するのを好まない。互いにべたべたくっつき合おう、一緒になろうとすること。派閥を作り、互いに主流になろうとしていがみ合うこと。一人では気が弱くて何もできないくせに、徒党や集団を組むと途端に気が大きくなって、「数の力」を頼りに大声で騒ぎ、傍若無人なことを行う。あるいは一人~少数を集団で寄って集っていじめるのを許容すること。（多勢に無勢。）集団内の一体感、愛情を何よりも重んじること。「全社一丸となって取り組もう」みたいに、集団の一体感の強さ、一心同体であることをやたらと強調すること。皆で一斉に集中して何かするのを好むこと。互いの安全、保身を確保するため、皆で一緒に群れて、つるんで、周囲と互いに守り合う形で行動するのを好む「護送船団方式」社会であること。皆が分け隔てなく処遇されることを求める。食事もトイレも皆、仲良しグループでつるんで行動したがる女性と根が一緒である。一人が何か行動を起こすと、当人で自己完結せず、周囲を否応なく巻き込んで大事、騒動になる可能性が高い。起こした行動の責任が、当人一人の責任にとどまらず、グループとかの連帯責任になりやすい。周囲と無関係でい続けることが難しい。

（vs男性的性格：グループよりも一人で独立、自立しているのを重視する。互いに訴訟し合うのを好むこと。責任は、個人で動く結果、自分一人で取る結果になる。）

(6)「所属を重視すること。包含感覚、胎内感覚を重視すること。心中を好むこと。
所属を重視すること。必ずどこかの集団に所属しようとすること。どこかに所属していないと不安であること。所属する集団から排除されるのを何より恐れること。集団に属さずに、一人で独立、自律するのを根底で嫌うこと。どこの集団にも所属していない自由な人を、フリーターとか言って軽蔑し、信用しない。どこの集団に入ったか、所属しているかを重視すること。入ること。（入ったこと。）所属すること。（所属している、したこと。）その学校、会社の名前、ブランドを重んじること。
成員が、所属集団のために、我が身を犠牲にして、汗を流すことを賞賛する。成員が、所属集団に身も心も完全に包含、吸収され、所

属集団と常に一体化して、自分があたかも所属集団を代表する一人であるかのような心意気で行動することを重視する。成員が所属集団の身体の一部として動くことを重視する。所属集団に、成員一人ひとりが完全に溶解、融解しきって、所属集団それ自体がひとまとまりの人格を持って動くような印象を外部に与えようとする。
所属集団が成員に対して、夫の浮気を疑う奥さんのように嫉妬深い。所属する成員は、会社、学校とかの所属集団のために、休日、残業時間も含めて、全ての時間を浮気せずに100パーセント入れあげて、捧げることを強いられ、要求される。あるいは、所属集団との、可能な限り長時間の生涯にわたる付き合いを要求されること。自分のプライベートの全てを削って、所属集団に合わせること、自分の時間の全てを所属集団のために使い切ることを要求されること。成員が所属集団に、時間的にも、空間的にも、完全包含されることが望まれる。所属第一主義であること。
会社のリストラみたいに、所属集団側で、その成員の所属を維持できなくなったら、所属集団側によって、一方的に関係が破棄され、成員は所属集団から自己都合で脱退することを強いられる。一方、所属集団側では、いったん成員を集団の中に入れると、その成員を外に出すことがなかなか出来ない。
成員は、自分の所属集団の存続を第一に考え、その存続のために死力を尽くして、集団の全員が一丸となって最期まで戦おうとすることを要求される。最後まで戦ってそれでダメだった時は、所属集団丸ごと滅びようとする。集団自決を好むこと。集団への所属は、その集団限りで完結させよう、終わりにしようとする。成員が他集団に、捕虜とかで生きたまま拾われるのを好まない。所属集団は、成員が一つの所属集団にのみ終生忠誠を誓うことを望み、成員が2つ以上の集団に、同時あるいは逐次に所属することを嫌う。所属集団の存続が行われれば、自分はその犠牲になってどうなってもよいと考えることが求められる。集団の成員が、所属集団のために、特攻隊のように、進んで犠牲になることを尊ぶ。所属集団は運命共同体であり、成員が所属集団と最後まで運命を共にすること、「死なばもろとも」、心中を求める。
学校（大学とか）を卒業すると同時にどこかに入社する内定を予め取って、所定の日にきちんと新卒で入社しないと、所属集団から外れた、放り出された既卒扱いされて、どこの会社にも入れてもらえなくなってしまうこと。（既卒差別。）学卒だけでなく転職の場合でも、今までの所属集団から時間的に切れ目なく次の所属集団に入らないと行けないこと。所属において、どこにも所属しないフリーの期間があると、あるいは履歴にブランクがあると、会社でなかなか採用してもらえない。

中の一員で有り続けること、外に出されないことを望むこと。転職を、所属（集団）からの排出と見なし、嫌うこと。転職を、スキルアップではなく、前にいた集団で、他の成員とうまくやっていけなかったため、外に出されたか、自分から外に出たとネガティブに捉える。所属集団を出て行くことが、元の意図、意思に関わりなく、マイナスポイントとみなされ、非難される。
所属集団に自分が包含された感覚、所属集団が自分の母代わりとなって、あたかも自分が母の胎内にいるかのような感覚を好む。
所属集団との一体感が極めて強い点、相手との一体感を重んじる女性的な性格である。

（vs男性的性格：どこかに所属するよりも一人で独立、自立してベンチャーするのを重視する。所属することによって生じる束縛を避け、フリーを好むこと。）

(7)「定住、定着、根付きを重視すること。継続を重視すること。専門家を重視すること。固執すること。
村落での居住する土地とか、勤め先の官庁、会社とか、一箇所に定住、定着して長期間根付くのを好むこと。土着を好むこと。転出して、出ていく人を裏切り者呼ばわりして嫌うこと。定住しない浮き草、根無し草のような人たちを軽蔑すること。あるいは、転職を繰り返したり、一つの職場に定職を持たない人を信用しないこと。住居でも職場でも、一箇所に腰を落ち着けて、その場で居心地の良い、長期間居着くことを目的とした巣作りをすぐ始めようとする。
重心の低い、腰の重い、一箇所に腰を落ち着けてそこから動こうとしない女性的な性格であること。
学者とか、役者とか、早いうちから一つの分野を専攻して、そこに腰を落ち着けて、根付いて、浮気せずに、その専門の一本道をずっと継続して歩むことを重視すること。専門家を重視すること。継続は力なりという言葉を重んじる。数多くの専門外のことに多様な関心を持って首を突っ込む人、専門を持たない、決めない人のことを信用せず、軽んじること。
自分の代々住んでいる土地のことや、あるいは、自分の専門分野に付いては何でも知っていて、答えられないことが無いのを当然とする。専門知識面での百点満点を指向すること。知らない、質問に答えられない、他の人が答えられると恥ずかしいと考える。自分が回答可能な範囲を狭く決めておいて、その範囲内では何でも答えられるようにすることで、専門家としての自分の高いプライドを維持し

ようとする。知っていること、知識があることを第一と考え、知識を学習すること、暗記することにエネルギーを集中する。学殖のある知識人、学者を重んじること。
国会の議論とか、外交とか、自分が根を下ろした今までの意見に、固執して、柔軟に譲ろう、意見を変えようとしない。自分が譲ったら、変えたら負けと考えがちである。譲歩の契機となる対話や審議を拒否し、会議を欠席しようとすること。話し合いがいつまでも平行線で、押し問答となり、強行採決を繰り返す。

（vs男性的性格：どこかにずっと定着するよりも一人でどんどん新天地へと移動していくのを重視する。新分野への新規参入能力、新規アイデア、知見を生む能力を重視すること。）

(8)「同調性が強い。画一、横並び、流行、トレンドを重視すること。相対評価を好むこと。嫉妬心が強い。
同調性が強い。流行、協調性を重んじること。周囲の流行に敏感であり、流行に振り回されること。映画やアニメとか、メジャーな流行に皆で追随しようとすること。付和雷同を好むこと。トレンドに合わせて動くのを好むこと。
互いの間の気配り・足の引っ張り合いが得意である。みんな一緒に、横並びでいること、分け隔てなく同じであることを強要されること。授業とか一斉に行うのを好むこと。周囲について行けない「落ちこぼれ」を嫌うこと。周囲との協調性や気配りをやたらと重視し、「出る杭は打たれる」みたいに、遅れてお荷物になる人間、周囲に歩調を合わせない独立独歩タイプの人間を、寄って集っていじめる。自由、フリーを本質的に嫌うこと。嫉妬心が強く、誰かが一人だけ上に行こう、いい思いをしようとするのを許さない。人間や組織の成績評価を、偏差値を利用して、周囲との相対評価で決めること。自分に対して気分を害する人が出ないように、誰に対してでも八方美人的に平等に配慮する。嫉妬深く、他の人が自分より上位に行くこと、良い思いをすることを全力で阻止しようとする。常に他者、他社と自分との立ち位置を相対的に比較し、上位を行く他者、他社に必死で追いつこう、追い越そうとして、互いに自らを鍛錬し、向上させようとすること。こうした嫉妬心の強さが、日本社会、日本企業業績向上の原動力となっている。他人が自分と結果的に平等であること、同じであること、格差が無いことを指向し、その結果、社会が均質化する。互いの処遇上の一体感を求める女性的な性格であること。

（vs男性的性格：周囲と同調するよりも、各自が強い個性、独自性を持ってバラバラに、自分の能力を発揮できることをしようとする。新規のトレンドを生み出し、それに真っ先に乗って、追随者を多く生み出すことに心血を注ぐこと。）

(9)「同期意識が強い。年功序列、先輩後輩制を好むこと。追い抜き、競争を嫌うこと。天下りを好むこと。
入社とかのタイミングを年一回とかに一斉に合わせ、同期させるのを好むこと。一緒のタイミングで同じ集団に入った人を、同期と見なして、互いに格差の無い同一、均等の待遇を求めたがること。同じ入社年次、同期の人たちが、揃って同期して昇進し、昇進に格差が生じないのを好む。年を取るに従って、役職が上に順調に昇進していく、あるいは、組織内で年を取った先輩格の人が後輩格の人よりも常に上位者扱いされる、年功序列、先輩後輩制を好む。
官庁や大企業で、同期の関係にある人同士が、役職で上下に格差が生じた状態で互いに顔を合わせるのを嫌い、役職の低い方の人が、外局に落下傘降下する形で、顔を合わせないように組織の外に出ていくのを好むこと。（天下り。）あるいは、先に組織に入った先輩格の人が、後から組織に入ってきた後輩格の人に、昇進とかで追い抜かれること。（後輩格の人が先輩格の人を追い抜くこと。）それを嫌うこと。追い越しの伴う競争を根本的に嫌うこと。後輩格の若い人が、先輩格の年取った人の上司になるのを、互いに扱いにくいとして双方で嫌う。中途採用で高齢者の就職口が限られる一因となっている。
学校での昇級や会社での昇進で、飛び級を嫌い、用意された階段を一段ずつ順次登っていくのを好むこと。いったん登った役職から降格されるのを嫌うこと。
互いの処遇上の時間的な揃い、一体性を求める女性的な性格であること。あるいは、身の安全性を担保する前例や知識の習得を重視し、先に入社した人が、前例蓄積の度合いが大きく、無条件でいつまでも上位になると考える、女性的な性格である。

（vs男性的性格：同期にこだわらないこと。若い人が年取った人よりも役職が上なのが当たり前。追い抜き、競争が日常茶飯事。）

(10)「物真似、コピー、合わせが好きである。
他人の物真似を好む、物まね、コピー、パクリ文化であること。周囲の動向、流行に必死になって付いて行こう、同調、同期しようとすること。周囲とは別の独自の途を一人で歩むのを好まず、周囲に合わせようとする。個人のオリジナリティ（独創性）を、一人だけ周囲と違ったことをするのは好ましくないとして根本的に嫌う。周囲の他者の真似をすることで、周囲との一体感の持続を確保すること。周囲と離れて一人ぼっちになるのを恐れる、皆で一緒に群れて行動するのを好む「護送船団」社会であること。自分の保身に人一倍気を遣う女性的な性格であること。

（vs男性的性格：独自性を好むこと。個人のアイデアに基づく独創性を好むこと。）

(11)「和合、一体感、共感を重視すること。
集団内で、相互の一体感、共感、調和、和合を好むこと。「和」の社会、仲良しクラブ社会であること。互いに同質で同じ考えを持つことを良しとして、集団の和を乱す個人個人のバラバラで異質な強い自己主張を許さないこと。集団の和を乱す突出した考え、行動の持ち主を、皆で寄って集って袋叩きにして潰そうとしていじめる社会であること。集団の存続それ自体がいつの間にか自己目的化し、集団内が喧嘩別れをして割れることを嫌う。互いに、集団の和が保たれる方向へと、自分の行動を合わせる「迎合」「媚」社会である。相互の体温、温もりの感じられる、互いの距離感の無い、親近性のある、親しい相手に対してプライバシーの欠如した対人関係を好むこと。相互の間で距離を取って、対象となる相手を客観的、冷静に見ようとする科学的な行き方を、相手との関係が冷たいとして、根本的に嫌う。相互の一体感、融合感を重んじる女性的な性格であること。揉め事とか、何事も丸く収めようとしがちである。訴訟、裁判を嫌い、なるべく和解しようとすること。物事の形状で、円形、丸型、柔軟なクッションを好むこと。円満解決、大団円を好むこと。争いごとを好まない丸腰体質であること。
女性は、生まれついての（生得的なこと。）集団主義者＝collectivist、同調主義者＝conformistであること。いずれも、個人主義的な欧米では価値が低いが、日本社会ではメジャーである。日本の国民性が集団主義となるのは、女性が強い証拠である。

（vs男性的性格：意見の対立や訴訟、戦争を厭わないこと。人と意

見が違っていて当たり前である。）

(12)「小グループ同士がバラバラ、無関係、無連携、無関心、縦割り、不仲である。
互いに一体感の持てる交遊の範囲を個別に狭く限定し、互いに独立した、外に向かって閉じた小さな集団、サークル、派閥（クラス女子高生の生成する仲良しグループとか）を沢山作りたがること。学校、会社とかで、メンバーの形成する社会集団が、小さく固まり、個別に小さく互いにバラバラになりやすい。複数の小さな仲良し集団同士が、互いに閉鎖的、排他的、不仲なため、各々独立、孤立した個別小集団同士の意思疎通がそのままでは不足になり、全体集団、全体組織がバラけたままで統合されにくく、統制が取れない、互いに無関係で動く状態になってしまいがちである。中央官庁とかで、より小さなグループのまとまりが、より大きなグループのまとまりより優先されること。（国益より省益、局あって省無し。）あるいは、政党で、派閥がそれぞれ独自に勝手に動いて、政党全体のまとまりを欠きがちなこと、がその現れである。集団の下位グループが、互いに連携しようとせずに、勝手にバラバラに重複して動いて、その集団や社会全体の利益を損なう、縦割りの弊害が発生しやすい。そうした閉鎖的個別小集団間の間を取り持って、相互の意思疎通を図り、何とか互いに一体感を持たせ、全体の統率を持たせることが課題になる。
個人ではなく、自分たちのグループが独自と言われるのを好む。個人が周囲からかけ離れて突出するのは好まないが、グループごと突出するのは、存在を強く主張でき、グループのイメージを強くすることにつながり、自己の保身に有利となるので良いとする。他所のグループや国と違う、他に無い独自、独特の文化を持つと言われると喜ぶこと。

（vs男性的性格：グループは一時的なもので、個人単位でバラバラ、無関係である。自分の利益のために、互いに関心を持ちドライに連携しようとすること。）

(13)「守られたい、頼りたい、養ってもらいたい、甘えたい、寄生したい心理が強い。
一人では不安を感じる度合いが強く、保護されたい、守ってもらい

たいという気持ちが強い。依存心が強い。甘えの心が充満している。官庁や大企業といった、大組織への依頼心、帰属意識、甘えが大きい。一人で自立するのは不安であり、誰かに助けてもらいたがる。あるいは、誰かに寄生して養ってもらいたがること。「寄らば大樹の陰」ということわざが、この辺の事情を明示している。就職のとき、大きな会社を選びたがるのもこの一例である。ひとりで外部に露出するのが不安であり、アメリカのような強い国に頼ろう、守ってもらおうとする。強いもの、お金のあるものからおこぼれを頂戴しようとする、集り根性が強い(例えば、政府から公共事業費を少しでも多く分配してもらおうとする等)こと。自己保身に気を遣い、何事も優先して守られる、エスコートされるのを好む女性的な性格である。

（vs男性的性格：自分の身は自分で守る。自助を基本とすること。）

(14)「権威主義であること。批判、反論を許さないこと。
権威、ブランドに弱いこと。権威主義であること。媚の文化、迎合の文化であること。自らの保身のため、少しでも権威ありそうな、主流派を形成している人、大学、病院のような知的権威のある機関に属する教師や医師を、「先生」と呼んで、その後を追従し、ペコペコすること。自分も権威ある者の後ろを歩めば、安全であり、威張っていられると考える。あるいは、権威ある人の言う事を聞いていれば、大丈夫、間違いないと考えること。自分の身の安全や、自分の判断の正しさを保証してくれる、外部のより大きな存在を求めたがること。自分より強そうな者に対しては、ひたすら媚を売り、ペコペコするが、ちょっと弱そうだと、途端に強気に出て、イヤな仕事の押しつけや、恐喝まがいのことをする。自分を権威付け、高く見せるために、評価の定まったブランド品を進んで身に付けようとすること。欧米列強の文物を、権威があるとしてやたらと崇拝する。これを信じておけば間違いない定説とされる学説を、宗教のように信仰し、それに対して異を唱えることを認めないこと。自分を押し倒し、圧倒した強大な存在に対して、進んでその色に染まること。あるいは、盲目的に追従し、お伺いを立てること。先生や先輩とかに対する口答え、批判、反論を、相互の一体感が損なわれ、言われた方の威信に大きな傷が付くとして許さず、絶対服従を強要する。自らの保身のため、権威に寄りすがろうとする点、女性的な性格であること。

（vs男性的性格：権威に盾付き、批判、反論の自由を求め、行使するのを好むこと。）

(15)「安全、保身第一であること。不安感が強い。退嬰的であること。リスク、チャレンジを回避すること。独創性が欠如する。
安全第一、自己保身第一で、不安を感じる度合いが強く、臆病で退嬰的である。冒険しない、ベンチャーを嫌うこと。失敗を怖がること。前例がないと何もできない。独創性が欠如している。例えば、人文社会科学分野では、欧米学説の後追いばかりやっている。既存の学説を乗り越えて、新たな学説を作ろうとする気概に乏しいこと。既存学説との、同化・一体化の力が強過ぎる。未知の分野はどんな失敗をするか分からないので、怖い、として、手を出したがらない。先頭に立たず、欧米の先駆者の後を追う方が安全である。危ない、リスキーなこと、未知の新しいことはしない。モルモット（実験台）になるのはいやである。より危険で風当たりの強い一番手を嫌い、より安全で楽な二番手で行こうとすること。皆を先んじて率いる必要がある、より大変なリーダーであるより、ただ付いて行くだけで良いフォロワーであろうとする。チャレンジを心の底で嫌うこと。一度失敗すると、敗者復活戦、再チャレンジが難しい。新卒で大会社とかに入れないと、既卒扱いになって、二度と入ることが出来なくなる仕組みになっている。
日本の科学技術が欧米より常に遅れる、後進性のくびきは、不安の強さ、安全指向、退嬰性、前例指向といった、女性性と関係があり、日本社会で女性が強い証拠である。

（vs男性的性格：安全、保身にこだわらず、リスクに積極的にチャレンジすること。独創性に富んでいること。）

(16)「前例、しきたり偏重であること。前例の小改良、磨き上げが得意である。先輩後輩関係がきつい。
前例となる知識、ノウハウの急速な学習、消化、吸収に長けている

こと。明治維新の時とか、欧米の新知識を素早く吸収、学習し、程なく我が物にすることに成功した実績がある。学校や学習塾、予備校とかで、前例となる知識、ノウハウの学習にとかく熱心であること。
自身への前例、しきたりの蓄積の度合いに応じて上下関係が決まる。前例、しきたりを自身の中に豊富に持っているほど集団や組織の中で上位者になれること。年功序列、先輩後輩関係がきつい。集団や組織で、局のような古株が威張っている。新人いじめが当たり前に行われ、いずれの組織においても、新入りの地位が低い。家庭における嫁姑関係（家風習得の度合いの面で、姑が先輩、嫁が後輩、新人。）に通じること。前例となる知識や技能を持っている者が、理屈抜きで偉いとされ、一方、若い新人の方が豊富にあると考えられる独創性は評価されない。安全性を第一と考え、未知の危ない道を通ることを避けて済ませるには、取るべき行動の前例となる経験知識を豊富に積んでいることが求められるからであり、そうした前例としての経験知識は、年功の上の人たちがより多く持っている。
既に誰かが先行して成し遂げたオリジナルの前例を吸収、学習して、その小改良を着実に重ね、磨き上げを重ねて、競争力を付けることで、オリジナルを凌駕し、競り勝つこと、打倒することに長けている。
未知の危険を避け、前例のある道のみを行こうとする点、女性的な性格であること。

（vs男性的性格：前例、しきたりにこだわらず、積極的に破壊、批判して、自分の力で新しい知見を生み出し、それを普遍的に普及させようとすること。）

(17)「後進的、現状維持的」
(17-1)「思考が伝統的、封建的、後進的である。
(17-2)「無競争、無風、停滞、（既得権益とかの）現状維持が好きである。不変を好むこと。
(17-3)「外部からの先進的考えの流入に抵抗するが、いったん突破されると諾々と受容するものの、流入が止むと元に戻る。
考え方が伝統的、後進的、遅滞的、封建的である。姑、局のような古株が偉くて、新入りが古株を超えることができない。古い伝統に縛られ、前例やしきたり、現状維持をひたすら重視すること。集団内部での内発的な進歩的な新たな試みを危険であるとみなして皆潰

してしまうこと。これは「姑根性」という言葉で表現できる。新参者が古参者を後から追い越す可能性のある競争を嫌い、既存の安寧秩序を守ろうとする。波風が立つのを嫌い、無風、凪、停滞、事なかれを好む。既得権益とかの不変、維持を好むこと。
外来の新しい文化の流入に抵抗しつつ、圧倒、突破されると無条件で受容、追随すること。欧米とかの進歩的な文化、制度が外部からやってくることを黒船来襲と見なして、警戒し、攘夷で抵抗するが、いざ圧倒、突破されると、手のひらを返したように、その進歩的な考え方にほとんど盲目的に追随し、丸呑みしようとする。
iPhoneのように、外部から入ってくる優勢で抵抗しがたい、自らの力では生み出せない、新たで進歩的な考え方、アイデア、製品に、無条件、無批判で我先に追随し、取り入れよう、真似しよう、小改良しようとする。率先して取り入れたこと、導入した結果を、周囲に対して箔付けして自慢すること。外部からの（先進的なこと。）考えが入り込むことに抵抗しつつ、いったん突破されると諾々と受容、丸呑みするのが、男性的な（欧米的な）精子に対する、女性的な（日本的な）卵子の受精関係に似ていること。（卵子的行動様式。）

しかし、そのように進歩的で新しい、競争的な態度を取るのは、外部から優勢な新しい考えが存在、流入していて、それに対処する必要が生じている間だけに止まる。外部からの新規文化の流入が止まると、元の無風の凪状態、現状維持的、既得権益維持的な気風に戻る。天皇制のように、ずっと不変なもの、永続するものを好むこと。変化を嫌うこと。日本社会の、遅滞や封建制の本質。それは、危険やチャレンジを避けて安全な前例をひたすら守ろうとする女性、母性にある。それは、進歩的な欧米社会に比較して、顕著である。

（vs男性的性格：思考が、伝統に囚われず、先進的である。競争、変化を好むこと。外部から先進的な考えを当初から積極的に歓迎し、発展させせようとすること。）

(18)「恥、見栄を重んじること。内部問題を対外的に隠蔽すること。真実を隠蔽すること。綺麗事、美辞麗句を好むこと。公式、公開の発言の場で沈黙すること。
自分に対して向けられる他者の視線や評価を非常に気にする「恥の

文化」であること。自分が周囲にどう思われているか盛んに気にして、周囲によく思われようとして、いろいろ気を遣ったり、演技をしたりする。八方美人であり、周囲の国にいい印象を与えることに懸命であること。周囲から自分がどう思われているか、自分が気に入られているかどうかが気になって仕方がない。自分が周囲に気に入られるように、盛んに媚びたり、いい子ぶったりする。自分の周囲に対する印象をよくするために、やたらと気配りをしたり、外面的な見かけを整えたりすることに忙しいこと。面目、体面をとても気にすること。常に人の目が気になって仕方がない。他の人に見られているという感じが強い。他人の視線を前提とした見栄張りの行動を行うこと。「見栄の文化」であること。自分が他人にどう見えるかについて自意識過剰である。他人の視線を前提とした化粧や服装チェックは、女性の方がより行う。

自分や自分たちのグループが内部に問題を抱えていることを、外部に対して必死になって隠そうとする。問題が無い振りをしようとする。良い格好をしようとすること。対外的に良い子でいようとすること。「ぶりっ子」をすること。自分についての良くない噂が広まる、騒ぎが起きるのを何よりも恐れる。対外的に自分が良く見られたい、受け入れられたいとして、問題を隠すなど自分の印象操作するのは、女性の方がより行う。
本当のこと、真実、内実を、知られると騒ぎになると考えて、隠蔽して語ろうとせず、真実からかけ離れた、当り障りのない、表面的に都合の良い、綺麗事のみを強調した建前の議論でお茶を濁そうとすること。感覚的に美しい快い美辞麗句、スローガンを使うのを好むこと。リアルな真実を語ることが、社会として出来ない。太平洋戦争時の大本営発表や、福島第一原発事故の際の情報隠蔽、精神障害者の子供を持った親による子供の病気の対外隠蔽が好例である。陰湿な女社会の内実を隠蔽してきた女性たちと根が一緒である。
公式、公開の場で発言せずに沈黙すること。あるいは、建前上の、無難な、その場の大勢に迎合した良い子、ぶりっ子の発言のみ行うこと。積極的に自由に発言するのは、ある程度非公式、非公開の場に限られる。衆目の監視の中で発言すると、発言内容に公の責任が生じるため、保身のため、何も発言しないで、黙って含み笑いしているのみである。あるいは、親しくない人が大勢いる中で自由な発言をするのに抵抗がある。親しい内輪の中でないと自由に発言できないこと。大勢がいる中で発言することで、皆の注目を集めてしまう、失笑を買うのが恥ずかしくて、他人の目が気になって発言できない。シャイであること。プライベートな小グループの中だと発言できること。

（vs男性的性格：人目を気にせず、自分の良かれと思うことを恥も外聞も無く堂々と行う。セキュリティのために内部プライバシーを重んじる反面、情報のオープンな提示に積極的であること。公開の場で歯に衣を着せない発言をして物議を醸すこと。）
R.Benedictが、「菊と刀」の中で唱えた、罪の文化・恥の文化との関連では、。
男性は、「罪の性（罪のジェンダー）」であること。誰かに見られていなくても、悪いことをしたとして罪悪感を感じ、償いの行動を起こす。周囲の動向とは独立して、独りだけで罪悪感を感じる点、ドライであり、罪の文化（男らしい文化）の基盤をなすこと。
女性は、「恥の性（恥のジェンダー）」であること。「赤信号、皆で渡ればこわくない」といったように、罪悪感を感じるかどうかが周囲の視線の有無や動向に左右される点、ウェットであり、恥の文化（女々しい文化）の基盤をなすこと。他者に「見られている」感が強く、他者の視線を前提にした自己アピールである化粧・服装・ファッションを好む。
日本が「恥の文化」に基づく社会となったのは、「恥のジェンダー＝女性」が、社会の根幹を支配しているからである。
(19)「配慮、気配りを重視すること。遠慮、引きこもりがち、孤立しがちであること。
周囲の他者に対して、心情的に細やかな配慮、気配りをすることを重視すること。周囲に対して温かい思いやりの気持ちを持って接することを重視すること。温もりに満ちた社会の実現を目指そうとすること。互いに、周囲の他者に迷惑をかけないようにと遠慮して考えるあまり、個人、家族単位で、周囲との交渉を避けて、各々引きこもりがち、孤立しがちになりやすいこと。社会の統合が弱い。無縁社会を招きやすいこと。周囲への細やかな気配りは、女性のほうが得意である。
（vs男性的性格：直接的な物言いを好み、配慮、気配りに欠けること。遠慮をせず、どんどん物を言うこと。積極的に交渉すること。）
(20)「清潔さを好むこと。みそぎをする、洗い流す、総取り替えするのを好むこと。
自分の心身を、洗い流して清めるのが好きである。汚れ、穢れを嫌うこと。清潔、きれい好きであること。河川とかで清流を好むこと。自分の吐く息等が他の人に臭ったりしないかどうかのエチケットにやたらとうるさい。自分の（他人の）汚れ、穢れが他人に（自分に）回らないか、転移、伝染しないか、影響を及ぼさないか、とても気にすること。他人に対して、汚れていない、綺麗な、清らか

な、良い印象の自分を見せようとして、やたらと自分の髪や身体を洗うのを好むこと。綺麗な水流に入って心身の汚れ、穢れを洗い落としたつもりになる「みそぎ（禊）」をするのを好むこと。風呂に入るのを好むこと。失敗や過去を「水に流して」済まそうとすること。汚れのない白装束を、正月の巫女衣装みたいに神事等で着るのを好むこと。自分の身体の汚れに対して自意識過剰になって毎朝シャワーやシャンプーを繰り返すのに余念が無い女子中学生と考えが一緒である。互いに、女性的に、自己の保身を図るために、護送船団方式で互いに密集して一体感を持って共同生活することを指向するため、互いに近場の他人の（自分の）身体とかの汚れが自分に（他人に）付かないか、伝染しないか敏感になっていること。

新しい導入物に感化されやすいこと。新たに外から圧倒的な力を持って入ってきた、あるいは国内から新機軸を打ち出して成功した新興勢力の文化に社会全体が一瞬のうちに簡単に感化されてしまう。そして、今まで自分たちが大切にしてきたはずの古来の文物を、新しいものと総取り替えで簡単に二束三文で投げ捨ててしまう。明治時代初期の西欧文物崇拝と廃仏毀釈や、Apple社のiPhone導入が好例である。新しい権威やカリスマが生み出した、新たな力ある文物に、各自が自分だけ乗り遅れないように必死で追随しようとする。その結果、社会全体が一斉に新たな文物に乗り換えて、古い殻を脱ぎ捨てる現象が起きる。
各自が周囲の動向に敏感で、少しでも遅れて仲間はずれになるまいと必死で同調する、また力あるものに我先に順応して我が身の保身を図ろうとする、いずれも女性的な性格である。

（vs男性的性格：汚れに寛容であり、シャワーの回数が少ない。新文物が導入されても、古いよりオリジナルな思想に基づくものは捨てない。各自、互いに一人我が道を行くのを許容すること。）

(21)「責任を回避すること。決定、判断を停止、回避、先送りすること。無責任であること。匿名行動を好むこと。
責任回避、責任転嫁の傾向が強い。自分の取った行動の結果生じる責任を一人で負うのをいやがり、皆で連帯責任にして、一人当たりが負うリスクを軽くしようとする。「赤信号皆で渡れば怖くない」という格言が流行したり、太平洋戦争の敗戦責任を「一億総懺悔」して取ったつもりになっていることがその現れである。そうすることで、以下のことを避けることができる。失敗の責任を取らされて

危ない目に会うこと。（社会的生命を失うこと。）あるいは、物事の決定にできるだけあいまいな玉虫色の態度を取ることで、責任の所在を不明確にして、責任逃れができるように逃げ道を作るのが上手である。あるいは、そもそも責任が生じる意思決定、判断すること自体を回避、停止、保留する。自分からは決断せず、誰かに決めてもらおうとする。他の責任を取れる人に判断を一任して、その判断が下るまで自分からは決定せず、待ちの姿勢を取り、判断対象を体良く無視し続ける。判断を他人に決めさせることで、決めた他人に決定責任を押し付けること。自分から進んで動くと、行動責任を問われるので、自分からは進んで動かず、誰か他の人がモルモットになるのを待つ。自分では責任を取りたくないので、誰か自分の行動に責任を取ってくれる指導者の存在を望む。決定、決断を先送りすること。無責任であること。
自分が取った行動について、後々まで自分がやったという証拠が残って責任追及されるのを避けるため、自分が誰かを、他者に特定されるのを恐れ、匿名でいようとしたがる。証拠が残るのを好まない。SNSとかで、個人情報や実名、顔を出すのを好まないこと。
失敗時、潔く責任を取ろうとせず、責任逃れの言い訳をするのを好むこと。
社会的に、責任を取るのを免除されやすい女性的な性格であること。
（vs男性的性格：個人行動基本のため、責任は回避できない。決定、判断を急ぐこと。責任感がある。実名行動、顔出しを好むこと。）

(22)「可愛がり、なつき、情けを重視すること。
成員が、その中枢に深く入り込んだ所属集団内で、上位者に可愛がられること、上位者になつくことを重視する。旧日本軍将校に見られるように、失敗しても、責任を問われず、仲間内で内輪でなあなあで、もみ消し、穏便に済ませようとする。失敗した当人を冷たく切り捨てることができず、情けをかけようとしたがる。情状酌量で処分が甘くなる。冷徹さを嫌い、情緒的な対応を好む点、女性的であること。可愛い部下や生徒に対して、えこひいきをすること。

（vs男性的性格：冷徹な能力主義を貫徹し、失敗に容赦しないこと。）

(23)「事前合意を重視すること。いったん合意した流れ、方針の変更が困難である。慣性で進もうとすること。
予め、利害関係者同士で、内密に議論して、落とし所＝事前の合意点を決めておくのを好むこと。関係者への事前の根回し、談合を好むこと。前もって、事前合意を取らずに、突然新たな話を進めよう、決めようとすると、反発、拒否されること。国会とかで、その場その場の即興の公開討議を嫌い、事前の密室での利害関係者を集めた交渉と合意形成を好むこと。予め互いの合意、賛成を取り付けておくことで、互いに和合することを好む女性的な性格であること。
既に、皆で合意、決定した内容、方針や流れを、後から変更する、覆すことが根本的に難しい。太平洋戦争で、戦局が不利になるという分析結果が政府内で後から出ても、既に戦争をやることで首脳部で合意ができていたので、方針を変えることが出来なかった。いったん決めた方針にとって有利な数字合わせを後付けで行うこと。
いったん進むと決めた流れの方向に、不都合が起きても、そのまま慣性の力でずっと進もうとする。いったん形成した合意による皆の一体感、仲良し状態を後から人為的に壊してしまうのを怖がる女性的な性格であること。

（vs男性的性格：リアルタイムの討議による合意形成を好むこと。方針変更をあっけなく大胆に行うこと。）

（24)「プライド（良い格好を重んじる度合い）が高い。失敗恐怖症であること。
プライドが高い（皆の前で良い格好をしようとすること。）こと。失敗して、皆の前で自分のプライドが傷つくのを何よりも恐れる。英語とかの語学の授業で顕著であること。他人が失敗するのを見ると馬鹿にして総攻撃を加えて袋叩きにしたり、陰口を叩いたり、触れ回ったりするが、本当は自分が公衆の面前で失敗するのが怖くて仕方がない。失敗を、誰でもする可能性のある日常的なことと許容することができず、失敗者を日頃の鬱憤晴らしの対象として、ひたすら責め立てる。試行錯誤による失敗の繰り返しを避けて、誰か成功した事例はないかとひたすら探し回り、見つかったと見るや、一斉にその真似をする。その成功事例を究極の正解、侵すべからざる信仰対象として、それにひたすら改良の磨きをかけ、そこから少しでも外れた者を、エラー、間違いを犯したとして直ちに叱り飛ばすこと。自らを大切で貴い存在と見なし、自らに少しでも傷が付くの

を嫌がる女性的な性格である。

（vs男性的性格：失敗を恐れないこと。自分は有能だというプライドが高い。）

(25)「閉鎖性、排他性が強い。内外感覚が強い。入試がある。白紙採用を好むこと。思考が内向きである。閉塞感が強い。対内融通、配慮が効く。自前で済ませようとすること。
形成する社会集団が閉鎖的、排他的である。集団内と外とを厳格に区別し、よそ者に対して門戸を閉ざすこと。例えば、中央官庁や大企業では、成員の採用の機会は新規学卒一括採用がほとんどで、白紙状態でまだどの社会集団の色（しきたり、組織風土など）にも染まっていない若者に対してのみ門戸を開き、本格的な中途採用の道は閉ざされている。純血性を保った自集団（「ウチ」）内で他集団に対抗する形で強固に結束し、内部に縁故（コネ）の糸をはりめぐらすこと。よそ者を入れずに内部だけで強固に結束する鎖国社会であること。親しい、付き合い上の安全が保障された身内、内輪だけで固まろうとする。よそ者に対してとても冷淡であること。オープンさが欠如している。内輪の会話、なれ合いに夢中で、外界について関心が薄い。思考が内向きである。女子中学生、女子高生の仲良し集団が原型である。内輪での仲の良さを外部に向けてアピールすると共に、内輪で浮いているメンバーを外部からは分からないように、陰湿にいじめ、差別する。内輪から外れる、村八分にされると、他に行くところが無い社会の仕組みになっているので、皆、外されないように必死になって、他の集団メンバーに配慮する。
いったん集団に入ると、定年やリストラなどで用済みになるまでその中にずっとい続けること（浮気をしないこと。）ことが要求される。よそ者は自分たちと行動様式が異なり、何を考えているか分からないので安全でない、一緒になると自分の属する集団のしきたりや風紀を乱すことを平気でされるのではないかと不安で、安心できないと考える。中途採用者に対して、いじめを行ったり、新人と同じような屈辱的な扱いを強制したり、あるいは、そもそも外部から入ってくる者を、派遣社員のように、一時的、部分的にしか、自分たちの組織にタッチさせず、締め出そうとすること。この場合、よそ者の許容が自身の保全に悪影響を与えるという女性的な心配が、閉鎖的な風土を生み出す要因となっている。なお、この閉鎖性は、自分たちの所属する身内集団内部の一体感を保つため、よそ者が入るのを防いでいるという点、女性の好きな、他者との一体融合感維

持指向に通じるものがある。
人々が、あらゆる物事に内と外があると考える、「内外感覚」を持っている。そして、外から内に移行する「入る」という意識（エントランス）を重視すること。とにかく何でも入ろう、入れてもらおうとすること。「入る」という意識は、相手、対象が閉鎖的な場合にのみ生じるものである。日本人が、何かと「入る」ことにこだわるのは、社会や集団が閉鎖的であることの現れであること。（欧米のようにオープンな社会のもとでは、人々の「内外感覚」「入る意識」は弱いと考えられること。）あらゆる物事に、入ることが大変な入試を求める。卵子に例えられる、外部に比べてよりリッチな栄養のある内実を持つ閉鎖空間（公務員、大企業、名門学校等）に何でも良いから入ることが、人生の目的になる。入れてもらうこと。（一員になる、溶け込む、一体化すること。）それにより、優遇され、リッチな気分を味わえる仕組みになっていること。そのように入れたことを周囲に向かって何かと自慢しがちであること。

白色無垢の者のみ加入を許すこと。色付きの者の採用を嫌うこと。（その人物は、どこか別の集団に長いこと加入していた。）嫁入りで白無垢の装束を着たり、会社や官庁で、特定の組織の色の付いていない新卒学生の白色、白紙採用を好むこと。色の付かない無垢の状態のまま、あるいは今まで付いた色を全てご破算にして（社会的に一旦死んで）、一から所属先の新たな色に染まります、という態度を見せないと、集団（会社、官庁、嫁入り先の家族・・・）の中に新たに入れてもらえないこと。新入りの者が、集団の既存の色を乱さないこと。新入りの者と、集団の既存の色との調和、融合を重んじること。付いた色の濃い人物が先輩で、薄い人物が後輩であるとすること。集団に居続けるに従って、自らに染み付く色が徐々に濃くなっていくこと。それに伴って他集団への転出が難しくなっていくこと。そのように考えること。

学校の入学試験や、企業、官庁の入社試験のように、部外者が集団に入るために、やたらと厳しい入試を設けたがる。集団の中に入れてもらうのが大変である。ところが、厳しい入社試験とかを突破していったん集団の中、ウチに入れてもらうことができると、途端に母の胎内にいるかのような、融通が効く、クッション感のある、柔軟な動きが取れる、温かい、利便性に満ちた、優遇された扱いを受けることが可能になる。役所とかで、親しい身内、内部者に対しては柔軟で融通が利く、配慮に満ちた態度を取り、部外者に対しては、杓子定規で利便性を考慮しない硬直した配慮に欠ける態度を取る。自分の本当の気持ち、意見（本音）は、親しい身内に対しての

み開示する。部外者に対しては、見かけの表面上取り繕った、上辺の気持ち、意見（建前）のみを示すこと。

国外や、社外といった、外部に対して関心の薄い、所属グループ内のことに専ら関心が行く、内向き思考が蔓延している。
閉塞感が強い。グループの中に閉じこめられている、外に出にくいという感じが強い。
人材の調達とか、外部に頼らず、自前で（自分たちのグループ内で）全て揃えよう、済ませようとすること。互いに、他グループに任せず、自分たちのグループでやろうとすること。その結果、似たような内容の組織やアウトプットが、国とかで、重複して発生、生成しがちである（文部科学省の幼稚園と厚生労働省の保育所とかの二重行政がその例である。）こと。自分たちのグループ以外の他グループをライバルと見なして、頼ろうとしないこと。（互いに閉じているため、頼ることが出来ないこと。）自分たちのグループ内で自活、自給自足、自己完結しようとすること。家電製品や携帯電話とかで、機能とか全部入りのオールインワンの機種を好むこと。

演習飛行をする米軍機が自分たちの領空を飛ばないと分かった場合とか、自分たちの領域に侵入してくるもの以外の、外部の動向に対しては、どうなろうと知ったことではないと考え、無関心である。自分の領域、領空を直接侵犯してくる以外の他者、他グループの存在に対して、徹底的に無関心であり冷たいこと。あるいは、税金を、自分たちの会社や家庭から、国とかに支払うと、自分たちの管轄外に拠出されてしまったと考え、その使い道に無関心になること。

（vs男性的性格：開放的であること。開かれた空間内にいるため、内と外との区別があまり無い。転出、転入が日常茶飯事である。アウトソーシング、買収と売却が得意である。）

(26)「受動性が強い。行動主体が非明確である。主体性が欠如している。他者のリードを求めること。静止、不動状態が好きである。取る行動が受動的である。受け身であること。自分からは積極的に行動を起こさず、意思決定を先送りし、周囲からの働きかけや外国からの外圧があって初めて「仕方なく」行動を起こし、周りに引きずられる形で意思決定をする。自主性に欠けること。退嬰的であること。「お不動さん」の信仰に見られるように、静止、不動状態を

好むこと。行動を起こした原因が自分ではないとして、責任逃れをする。男女の恋愛において、結婚のプロポーズやセックスへのアプローチといったリードを、ほとんど男性側が行うのと根が同じである。
主体性が無い。待ちの文化であること。自分からは動かず、誰かにやらせよう、やってもらおうとする。
誰が行為責任を負うかが明確になってしまうのを避けるため、行為主体をはっきりさせない。主語を省略して表現すること。主体をはっきりさせないことで、周囲との一体同調の強さ、心理的な凪、和合、静止状態の心地よさをアピールすること。
相手が急所を突いてきたとき、そこが急所であることを気づかれないために無反応だったり、わざと取り繕ってお茶を濁したり、茶化したり、ことさら無視したり、話題を関係ないものに変えようとする。

（vs男性的性格：能動的であること。行動主体が明確で、主体性がある。他者を進んでリードすること。動きまわるのが好きである。急所を突かれると直ちに猛反撃を開始すること。）

(27)「相互監視、告口を好むこと。他人の噂話を広めるのを好むこと。プライバシーが欠如している。
相互監視が行き届いていること。互いに、周囲の他者が何をしているか、チェックするのに忙しいこと。プライバシーが無いこと。他人について、噂を広めたり、陰口を叩くこと。そのことが好きであること。あるいは、権威者や当局に対して、密告をするのを好むこと。（学校の教室で「先生、○○さんが隠れて○○しています！」と告げ口すること。）自分は、そうした噂や陰口の対象にならないように、絶えず保身に気をつかい、安全地帯にいようとすること。
（vs男性的性格：互いに他者が何をやっているかに無関心であること。自分のことに忙しいこと。プライバシーを重んじること。）

(28)「対応が間接的、ソフト、遠まわしである。
対応が間接的であり、陰湿である。相互の一体感、和合をできるだけ維持するため、他人に対して批判をする際にも、直接的な、明らさまな表現を嫌う。意見を口に出さず、相手に直接直言せず、以心

伝心で伝えようとすること。表現をソフトにしようとして、間接的な遠回しの表現を好むこと。そうした遠回しの表現の真意に気づかない他者を、鈍いとして陰口を叩いて批判し、無視したり、陰で他人に分かりにくい形でいろいろ寄ってたかっていじめたり、意地悪すること。ソフトだが、真綿で首を閉めるような陰険なやり方をする。相手に直接言わず、間接的に陰湿なやり方で相手の足を引っ張ること。

（vs男性的性格：対応や物言いが直接的であり、ハードである。直接進言すること。）

(29)「対応が近視眼的、場当たり的、個別、局所的である。
対応が、近視眼的、場当たり的である。自分にとって身近な目先の場所や、時間的に目の前の事柄に注意が専ら行き届き、ずっと先の未来や、世界全体規模をコントロールしようとする長期的、遠大な計画性や視点に欠けている。自分のいる周囲の動向のみに注意を払うこと。自分のところの狭い個別の事例、利害に囚われて、物の見方が局所的になりやすい。「～の説は、自分のところとは違うので、正しくない」という言説がまかり通る（「～の説は、全体の○パーセントが当てはまらない、あるいは論理的に～なので、正しくない」というふうになりにくい。）こと。自己中心で周囲が見えない。全体を鳥瞰して判断するのが苦手である。道路の用地買収とか、全体の利益を考えず、個別の利害をゴリ押しすること。

（vs男性的性格：対応が長期的、計画的、普遍的である。）

(30)「対応がヒステリック、情緒的、非科学的である。感情的に反応すること。
取る対応が、ヒステリックで感情的、情緒的である。相手からの刺激に対して、冷静に分析する事ができず、思わずキーッとなって集団全体で感情的に激昂し、前後の見境がなくなって、予想外の飛んでもない行動に出ること。（太平洋戦争時の真珠湾攻撃とか）相手との一体感の有無、好き嫌いを目安にして行動すること。相手に対して、客観的に突き放す形で向き合う事ができず、感情的な好き嫌いをむき出しにして対応すること。（太平洋戦争時のアメリカ、イギリスへの鬼畜米英呼ばわりなど。）対象との一体感を重んじ、対象と距離を置いて物事を見ることができず、物の見方が非客観的である。冷静、客観的に物事や状況を捉える科学を嫌い、何事も気合

を入れて努力して行えば不可能なことは無いとする、精神論、根性論、努力万能論を振り回すのを好む。教師とかの熱血指導を好むこと。学説のような、本来冷静に突き放して評価すべき対象に対する主観的、情緒的な思い入れ、こだわりを強く持ち続け、批判されると感情的に反応すること。

（vs男性的性格：対応が冷静、客観的、科学的である。）

(31)「スケールが小さい。高精細であること。
やることのスケールが小さい。小さな精密部品の設計、組み立てのような、微調整や、神経の細やかさが必要な、高精細、高い正確性を要求される事項に、世界で並ぶ者のない強みを発揮する。重箱の隅をつつくような、細かい視点が、大学の入学試験とかで要求され、それに適応した若者を次々と生み出している。小さくか弱い柔らかい「かわいい」、それでいて色気のある「萌える」存在を、アニメやコミック等で次々生み出すのが得意である。天地を駆け巡る壮大なスペクタクル叙事詩を著述するのが苦手であり、俳句のように、小さく凝縮した箱庭のような小さい世界を著述するのを好む。小さい可愛いものは、女性がより好み、生み出すのを得意とする。

（vs男性的性格：スケールが大局的で、細かいところには神経が行き届かず、大雑把になってしまう。）

(32)「高密度、詰め込み、集中を好むこと。
高密度、詰め込み、集中を好むこと。個人のスペースの空きをできるだけ詰めようとすること。ゆとりを嫌うこと。満員電車を当たり前のものと考えること。重箱に寿司や料理を詰め込むのを好むこと。教育で、子供への知識の詰め込みを重視すること。東京を中心とする首都圏への一極集中、密集を好むこと。女性の方が男性に比べて、過密状態をより好むとされている。

（vs男性的性格：低密度で、空間的に余裕、自由がある、空きがあるのを好む。分散、拡散を好むこと。）

(33)「厳格、正確であること。
厳密、厳格、厳正さを好むこと。日本の社会、政府や企業は、医薬品の許認可とか、国際基準に比べてやたらと厳しい（厳密、厳格なこと。）検問や検査数値設定を行いがちであること。
これは、より安全、安心になるためには、より厳しい審査をしなければならないと考える、ちょっとでもリスクがありそうだとやたらと不安になって、安全、安心を過剰に求める女性の心理が強く働いているためと考えられるのである。あるいは、検査数値設定が甘かったということで、いざリスクが発生した時の責任を取りたくないと思う余り、誤り、落ち度、突っ込みどころ、隙、減点箇所が無いことを過剰に求める、女性的な責任回避の心理がなせるものであると言える。嫁のすることにうるさく、厳しくチェックを入れて嫁を叱る姑と根が同じであり、姑根性と呼べる。
正確さを好むこと。時間に対して、やたらと正確であること。定時性、定刻性を重視すること。鉄道が、ラッシュ時でも定時発車が当たり前のことのように行われている。あるいは、首都圏の路線バスが、1秒も狂わない電波時計の導入で、発車が、発車時刻の00秒ジャストに行われるのが普通になっている。もしくは、テレビ放送のニュース番組とか、秒刻みのスケジュールで番組が構成されている。
（vs男性的性格：コンピュータ設計のような論理的な、理屈面での正確さ、厳密さにこだわること。父性的な正確さ、厳密さの指向であること。）

(34)「正解、正論、完璧、無難、無傷指向、減点主義であること。
物事には正解がある、完璧、完全な状態があることを最初から自明視する。正解と見なされることのみ行おうとすること。正しい、批判されにくい正論を主張すること。間違うことを恐れること。完全であること、テストの点数とかで百点満点であることを目指そうとすること。自分に傷、瑕疵が付くことを恐れ、嫌がる。人や物事の評価を、百点満点の完璧、無傷な状態から、どの位下方に離れているか、差分があるかで判断しようとする。人や物事の評価を、百点満点からの引き算で行う減点主義であること。無難であること、欠点が無いことを重んじる。評価対象に目立った長所があっても、同時に見逃せない欠点、粗があると、直ぐに否定的な評価を下す。完璧な状態に少しでも近づくことを目指し、ひたすら修行すること。
物事に失敗したり、正解が直ぐに見いだせない状況になると、道に迷ったとして、途端に怖くなって混乱し、それより先には進もうとせず、元来た道をすぐ後戻りしようとする。正解とされる定説を習得すべき前例と見なして、その奥義習得にひたすら励むこと。ひた

すら正しい、安全が保証された道のみを、奥義を求めて極めようとする、自己保身第一の女性的な心理が元になっている。

自分の心や、自分の持ち物に少しでも傷が付くのを恐れる。自分の買ったスマートフォンの液晶とか、傷が付かないように、保護ケース、保護シートとかで、万全、完璧に対策しようとする。マイカーとか、無傷でピカピカに洗い上げ、磨き上げるのを好むこと。自分に心の傷が付かないように、自分の心に傷を付ける可能性のある他者との交流、対人関係を避け、引きこもりがちになる。自分自身や自分の大切なものを傷つけるという、自らの保身に取ってマイナスとなる行為を嫌う女性的な心理であること。

（vs男性的性格：他人の長所を短所よりも積極的に見出し評価し、活用を図ろうとする加点主義である。難点が見つかっても、長所がそれを上回れば採用する。）

(35)「一体行動、一斉行動を好むこと。管理主義、統制主義であること。牽制、長時間拘束を好むこと。自由行動を許さないこと。
集団とかの所属者が、一体となって動くことを要求される。集団内での個人の自由で勝手な行動が許されない。教育とかで、成員の管理、統制、締め付け、縛りを行うのが好きである。個人が自由に行動しようとするのを、自分勝手であると決めつけ、束縛、制限しようとする。あるいは、集団から外れた行動をしたことを個人責任として、行動した本人が助けを求めても、勝手な行動をしたとして冷たく突き放し、助けない。学校とか、団体行動での統率、一斉に揃った行動をするのを好み、みんなでお揃いの制服、バッジを着用するのを好むこと。役所とかで、相手の行動を自由に許可、禁止できる許認可権限を得たり、行使するのを好むこと。周囲の他者が思い通り自由に振る舞うのを妬み、他者の振る舞いを規制、牽制、長時間拘束して不自由にしようとしたがる。自由が与えられることを、どう行動すればよいか分からず途方に暮れるとして怖がり、不自由であること、他人に指示されること、他人に行動を合わせることを心の奥底で望んでいる。奴隷根性であること。統制されることで集団メンバー間に生まれる一体感を大切にする点、周囲との一体感を重んじる女性的な性格であること。

（vs男性的性格：バラバラの個人行動を好むこと。他人による管理統制を制限すること。自由行動を許すこと。）

(36)「上意下達を好むこと。従順であること。
上意下達を好むこと。上位者、下位者間の一体感を重んじること。上位者、下位者間の一体感を損なう、下位者による上位者への言挙げを嫌うこと。上位者、上官の言うことを、異を唱えずに素直に聞く人間、上官の命令をそのまま誠心誠意、忠実、誠実に守る人間、上官の指示を守って動く人間、上官の意を自主的に汲んで動く人間を好むこと。上位者に素直に従おう、従順であろうとすること。国とかの上位者の決めた規則を忠実に守ろうとすること。上位者、下位者間に生まれる一体感を大切にする点、相互の一体感を重んじる女性的な性格であること。

（vs男性的性格：反逆、反抗、異を唱えること、自分流を好むこと。）

(37)「総花式、オールインワン、万能、八方美人を好むこと。
総花式を好むこと。偏りや、特定面でのみ優れているのを好まないこと。何でも出来る万能さを好むこと。製品とか、あらゆる面で平均以上に優れているのを好むこと。製品の機能がオールインワンで、機能が万遍なく入っているのを好む。八方美人で、誰からも好かれるのを好む。医薬品とかの製造、販売で、どんな症状にも効くことを指向して、例えば、相反する働きを持つ制酸剤と消化剤を一緒に混ぜた胃腸薬を製造、販売する。女性が、絵を描く時の色遣いで、特定の色に偏らず、万遍なく使おうとするのと根が一緒である。全てを満たそうとすること。何でもこなせるジェネラリストを、役所とかで重んじること。つぶしの効かないスペシャリストを嫌うこと。

（vs男性的性格：製品とかが特定機能に優れていて、ライバルがいないのを好む。鋭い判断が出来るスペシャリストを好む。）

(38)「突出を回避すること。目立たないようにすること。標準、普

通を指向すること。
ネットとかで、目立ったことをした他者について、すぐその身元を特定し、プライバシーを暴露することに情熱を注ぐこと。逆に、自身が外部に目立って危険な目に合いやすくなったり、自身のプライバシーが暴露されたりすることにつながる、あるいは周囲との協調、和合を乱す、突出した目立った行動を取るのを極力控えようとする。普通、標準でいようとすること。オタクのように、特殊扱いされるのを嫌い、一般人（一般ピープル）でいようとすること。一人だけ目立つのを嫌うこと。目立ちたい時は、宴会の隠し芸とかで周囲の他人と一緒、同時に目立とうとする。何か一人で行動を起こすと何かと突出して目立ち、叩かれるので、自分からは何も行動を起こさず、無為でいようとする。誰か他の人が勇気を出して行動すると、それに便乗する。突出することで集団から浮くことを恐れる女性的な性格であること。

（vs男性的性格：突出しようとすること。強烈な個性で目立とうとすること。特異性を求めること。）

(39)「中心、周辺を区別、差別したがること。皆で中央、中心、都心を指向すること。
（ウェットな液体分子群のように、）中心、中央の概念、中心形成の度合いが強い。中心、中央と周辺、地方との差が大きい。（ドライな気体分子群のような欧米では、バラバラ、散り散りで中心、中央の形成が弱い。中心があまり無い。中心と周辺の差があまり無い。）皆が一カ所に集まろうとする。中心部に集中して存在しようとすること。都心が過密状態になりやすい。通勤とかで、皆が都心に集中するオフィスを一斉に目指そうとする。皆で集まった方が、護送船団と同じで保身に有利である、中心に近いほど外部環境露出が少なくて保身に有利であるとする女性的な考え方である。自分が皆の中心に位置して、皆の注目を集めたいと考える。中心、周辺視が強い。中心、中央と周辺とを区別、差別する考えが強い。首都東京と、地方との格差が大きい。都心に住んでいる人とか、自分たちが世界の中心である、自分たちが世界の中心にいて偉い、中心部が偉くて周辺部は劣っているとする中華思想を持ちやすい。日本軍による沖縄戦対応のように、中心、本土を守るために、周辺の人々を捨石扱いすること。

女性、母性、ウェットな人、個体、集団は、自分や自国が、より大

きなグループ、世界の中心、中枢、中央になろうとする。中枢で周囲から温かく守られると共に、周辺に向けて命令できるのを好むこと。中心に集中すること。中央、中心を目指そうとすること。

（vs男性的性格：あまねくグローバルに普遍的に拡散して分布しようとすること。男性、父性、ドライな人、個体は、自分や自国の文化や指令の、中心の不定な、普遍、グルーバルな感染、拡張、拡大、広がりを目指す。気体の空気やガスのように、あまねく世界中に広がる、普及する、拡散することを指向すること。空気に乗って伝播、伝染するインフルエンザのウィルスと同じ行動を取ること。）

(40)「他人の陰口、悪口を好むこと。他人の欠点探しや粗探し、足を引っ張るのを好むこと。思考、やり口がネガティブ、マイナス、陰湿、陰険である。
他人のマイナス面に関心が行き、他人の欠点や失敗、粗探しをひたすら行おうとする。他人に対して駄目出しをすることを好む「駄目出し社会」であること。他人が自分の上を行くことに我慢が出来ず、足を引っ張るためのネガティブ要素を探すのに夢中になる。学校や会社で、自分が気に入らない、その場にいない他人の陰口を叩く、悪い噂話を広めるのを好む。そうすることで、当人のマイナス評価を周囲に広め、足を引っ張り、当人に大きなダメージを与えようとすること。思考、やり口がネガティブ、マイナス、減点主義である。宴席とかで、その場にいない人の悪口を言い合って盛り上がり、その場に居合わせた一同が、悪口を叩かれた不在者をダシにして一致団結しようとする。一方、当人がその場に居合わせる時は、面と向かっては当たり障りの無いことを言ってごまかしたり、見かけ上褒め合ったり、迎合したりして、裏表が激しい。気に入らない相手を直接攻撃せず、周囲から、からめ手で間接的に足を引っ張ること。やり口が陰湿、陰険である。相手の欠点、粗ばかりを探そうとする、減点、マイナス思考の姑根性のような性格であること。

（vs男性的性格：他人の長所を見出し積極的に褒めて、勇気づけること。ライバルと正々堂々と勝負すること。）

（リストアップはここまで。）

日本社会と女社会の相関、類似性は、日本的パーソナリティと女性的パーソナリティが、資料文書編における説明のように、双方共通して液体分子運動パターンに当てはまっていることに示されている。
この液体分子運動パターン（リキッドタイプ）で、従来日本的とされてきた社会の特徴の大半を説明可能であること。
女性（リキッド、液体的な行動原理で行動するジェンダー）が支配する日本社会の中で生活するのは、液体の中、言うなれば水中に潜って生活しているのと同じである。息が出来ない窒息感が著しい。
日本の人々がこうした行動を取る背景として、日本の人々が自分の保身に敏感であることがあげられる。
生物学的に貴重な性である女性の取りがちな行動は、根源的には、安全第一、危険回避、失敗が怖い、不安が強いという点に尽きる。女性は、言わば、生ける宝石のような、貴重品として、護衛(の男性)に守られる形で、自分の保身を最優先にして行動するのである。
女性の持つ「貴重な、守られる性」としての性格についての説明は、著者の他著作を参照されたい。
こうした、生物学的に貴重な性＝女性的行動が、社会全体に及んでいるのが、日本社会の特徴である。つまり日本人は、自分の保身に不安で敏感であり、安全第一、危険・失敗の回避を最優先にして行動する点、女性的である。自らは危ない橋を渡らず、ベンチャーとか冒険を嫌がる。日本の銀行のベンチャー企業への貸し渋りがこの典型である。
上記リストの各内容が、貴重な性としての女性に支持されるのは、みんな一緒に、集団でいれば、孤立して、他者の助けが得られなくなる、という事態から逃れることができて安全だからである。集団、護送船団を作って相互牽制し合う方が、ひとりぼっちの孤立無援状態になりにくい。生物学的に貴重な性として、安全な群れの中心部にとどまる女性に向いていること。
上記リストの各内容は、何らかの形で、女性の持つ、自分の身を守ろう、安全第一で、危険を回避しよう、誰かに保護してもらおう、不安を回避しようとする自己保身傾向に合致している。
以上で見てきたように、日本社会は、女性に都合よくできている、女性的価値観で動く社会であると言える。日本は、母親の力の強い母性、母権社会であり、欧米は、父親の力の強い父性、父権社会である、と見ることもできる。
日本と欧米とで権力者の行動様式が違うのも、日本で主流を占める女性の権力行使パターンが、欧米で主流を占める男性の権力行使パ

ターンと違うからではないだろうか？（上位者としてのあり方が違うこと。）
日本では、。
権力の行使のあり方が、。
(1)集団主義的であること。
(2)人格そのものを重視する(上位者に可愛がられることが重要。上位者への甘え・なつきを重視すること。
(3)(流行への)同調競争に勝ち得た者が、上位へと昇進する。
(4)前例を多く蓄えた年長者が威張る。
(5)上位者への権威主義的な服従を好むこと。
(6)一人の犯した失敗も周囲との連帯責任とする。
というように、ウェットであり、女性的であること。
なぜ、日本社会が女性的性格を持つに至ったか？それは、日本が典型的な稲作農耕社会であることと関係する。
稲作農耕社会を構築する過程で、集団による田植え・刈り取りなどの一斉行動、一カ所への定住・定着、農業水利面での周囲他者との緊密な相互依存関係の樹立、集約的農業による高密度人口分布、といったウェット、液体分子な行動様式が求められた。
ドライ・ウェット、気体的・液体的な行動様式についての説明は、著者の他著作を参照されたい。
ウェット、液体的な行動様式を生まれながらにして身につけているのは女性であり(男性が生得的に身につけているのは、個人主義、自由主義といったドライ、気体的な行動様式)、社会のウェット化、液体化には、女性の力が強く求められた。
女性の強い影響下で社会のウェット化、液体化を推し進めた結果、その副作用として、自己保身や安全第一といった女性的な行動様式が、男性にも強く感染して男性の「女性化」を引き起こした。このようにして、女性的行動様式が日本社会全体を包み込むような形で、支配的になり、「日本＝女性的性格を持つ社会」という構図が成立した。
日本社会全体、ないし国全体を1人の人格として擬人化して捉えるならば、それは1人の女性、女の子として捉えることができると考えられる。
(1)自ら明確な意思決定をせず、あいまいな態度を取り続け、決定をずるずる先送りすること。
(2)自分からは行動を起こさず、受動的、退嬰的である。
(3)その時々の雰囲気に流されて、周囲のメジャーな流れに追従すること。
(4)ヒステリーを起こす(太平洋戦争などで、思わずカーッとなって、残虐行為を繰り返すなど)

(5)意思決定のあり方が情緒的で、非合理・非科学的、精神主義的である(根性論を振り回すなど)。
(6)身内だけで固まり、外国人や難民などのよそ者に対して門戸を閉ざす(閉鎖的、排他的)
(7)周囲の国々に自分がどう思われているか、やたらと気にする、八方美人的態度を取る。
(8)先進国に追いつき追い越せというように、自らは先頭に立たず、二番手として絶えず先進諸国を後追いする。
(9)アメリカなどの外圧がかかって、初めて重い腰をあげる(外圧がないと、動かない)。
(10)長期的視点を持たず、目先の短期的な動向に関心が行って、場当たり的な対応に終始する。
など、日本の国ないし社会全体が、ウェットな女性的人格をもって行動していると言える。 日本の国家・社会は、「女社会」「女流社会」「女性優位社会」、「大和撫子国家、社会」と呼べる。
(これに対して、欧米各国は、男性として捉えることができると考えられる。
日本では男性も、女性の色に染まっている。日本の男性は、自分の保身に敏感であり、親分子分関係や浪花節といった、ベタベタ・ジメジメしたウェットな人間関係を好む、女性的な中身を持っている。さらに、それに加えて、女性を守る役割を取らせるため、女性によって植えつけられた、表面上の専制君主的な「強さ」「強がり」とが、一緒に同居していると考えられる。
以上をまとめると、日本社会は女性的な性格が強く、女性のペースで動く社会であり、「(日本的。) 村社会=女社会」と捉えることが可能である。
（初出2000年07月~）

日本の教育システムの女性性

日本の教育システムのあり方は、総じてウェットであり、その点、女性的であると言える。
以下に、どのような点がウェット、女性的と言えるか例示してみたい。
1.日本における受験勉強とウェットさ、女性性
日本における受験勉強は、。
(1)前例となる知識をひたすら要領よく詰め込む暗記型であること。

その点、前例指向的であり、ウェットであること。独自の創造性を伸ばすチャンスがない。未知の分野へと、思考を拡大する機会を制限すること。未知の領域は、何があるか（起きるか）分からず、怖いから、避けたいとする女性的な心理の現れであること。
(2)問題を解くために、重箱の隅をつつくような細かい知識暗記を求められること。木目の粗い暗記しかできない男性よりも、細かい暗記のできる女性に適している。
(3)現役合格偏重であること。試験における失敗（不合格）を許さない点、失敗を怖がる女性的な感じがする。
(4)学校に入るのが大変である。学校組織の持つ、外部から入ろうとする者に対する表面張力、すなわち、閉鎖性が大きい。
これは、学校組織が、内部での一体・同質性を重んじ、外部に対して門戸を閉ざす母性的な性質を持つことを意味する。
(5)学校名による選抜が主流である。
どの学校集団に所属するかが大事である。 受験合格学校名で、その人となりを判断すること。
個人の属性ではなく、所属集団がどこであるかで、人となりを見る。その点、集団主義的であり、ウェットであること。何かに付けて団体行動を好む、女性的な匂いがする。
(6)相対評価、偏差値を重視すること。
集団の中の自分の位置を絶えず確かめようとすること。他者との成績比較が根本にある。そこには、他人の目・恥の感覚がつきまとう。成績面で他者との牽制し合いをすることが標準であり、その点ウェットである。
2.日本の学校とウェットさ、女性性
教科書、制服など、みんなと一緒に揃えることが好まれる。画一・同質・悪平等指向が強い。これらはいずれも、ウェットであり、互いの一体感・同質性を好む女性向けである。
校則など、生徒を細かく束縛することが好きである。自由主義に反し、ウェットであること。
以上の1.と2.において、ウェットとされた、集団主義、閉鎖性、前例指向などは、男性/女性のどちらの性格に近いかとアンケート調査で問うたところ、いずれも、女性らしい、女々しいとされる結果が出ている。
3.日本の学問風土
日本の学界は、学説面での欧米模倣と、独創性の欠如、権威主義の横行、流行へ同調する事への敏感さ、師弟間の家族的な上下関係といったキーワードにより特徴づけられる。
こうした特徴を生む根本原因は、自ら冒険をしようとしない、前例のない危ないことをしない、未踏分野に進んで足を踏み入れようと

しない安全・保身への指向にあると考えられ、ことごとく女性的な（女性由来の）価値に基づくものであること。
彼ら学者は、欧米学者が既に足を踏み入れた開拓地を、自分たちも欧米学者の後を追う形であわてて巡って、それで知的冒険をした気になっている。こういうのは、正確には知的探検などとは呼べない。
4.日本における学業の最終目的
日本では、学校での勉強が、知的好奇心を充足させるとか、社会の生活水準を向上させるのに役立つ知識を得るといった、本来の目的から逸脱して、中央官庁や大企業に将来就職する人員をふるいにかけて選別するための手段となってしまっている。
こうした日本の受験競争のもたらす教育上の歪みの根本的な原因は、最終的には新規学卒一括採用の際しか外部に対して採用の門戸を開こうとしない、中途で所属する社会集団を変更することを許さない、日本の中央官庁や大企業といった社会集団の持つ閉鎖性、純血指向性、純粋培養性にあると考えられる。学生は事実上一生に一回しか、こうした社会的に大きな影響力を持つ組織に入れるチャンスがないので、そこでうまく希望の組織に入ることができるように、学歴や、学閥のようなコネの獲得に躍起となるのである。
日本の大規模な社会集団における、こうしたよそ者を中へ入れようとしない閉鎖性がなぜ出てくるかと言えば、よそ者を自分たちとは異なる未知のしきたりに染まっている者だとして毛嫌いし、気心の知れた安全な身内だけで身辺を固めようとする安全・保身への指向が強いからと考えられ、これは、自己の保全を最優先する女性的な（女性由来の）価値に基づくと言えること。
（初出2000年07月～）

日本の学校教育と女性的、母性的行動様式

日本の学校教育、例えば小学校の運動会とかは、日本の子供に、稲作農耕の村社会に適した、ウェットな女性的、母性的行動様式を刷り込む場となっている。

それは、クラス、班や部活といった、どこかに所属して活動するという（集団）所属行動の重視であり、所属集団への強い一体感の生成、所属集団成員への思いやり、気配り、所属集団への自発的な献身、所属集団を進んで引っ張るリーダーシップの養成であること。

その根底として、所属集団から外れたら、あるいは外に追い出されたら大変、自分は生きていけないという感覚を生徒に植え付けるのである。

小学校とかで、そうした女性的行動様式を子供に指導し、子供の基本的人格部分を女性的なものへと決定づける上で、女性教員の果たす役割が大きいと言える。

（初出2012年06月）

性別分業と男性社会、女性社会

世界的に著名な組織国際比較の著書（G.Hofstedeとかの）では、社会の性別分業の度合いの高さが、その社会が男性社会か、女性社会かの指標となると考えられており、性別分業の度合いが高いと男性社会、低いと女性社会という見解になっているようである。そして、性別分業の度合いが高い日本社会は、男らしい社会の筆頭に上げられているようである。
しかし、これは正しいのだろうか？。
性別分業の度合いが高いとは、男性が働いて稼ぎ、女性は外で働かずに家事や育児に専念する度合いが強いことであり、そうした社会は、女性側からは「あなた稼ぐ人、私使う人」の社会であると思われる。
恐らく、そうした性別分業が、女性が強くなるとなくなるという見解は、欧米のように家庭において女性の権限が弱く、例えば家の財布を管理する権限が、男性（夫）側が占めていて、女性（妻）が月々決まった小額を男性（夫）からもらって家事をこなす社会にのみ当てはまるのではないだろうか。そうした家計管理とかの家庭内権限が、女性が弱い場合、家庭は女性にとって居心地がよい場所だとはとても言えず、少しでも自分の経済的自由を得るために、家庭の外に出て働こうとし、それが、性別分業がなくなる方向につながっているのだと言える。
一方、日本のように家庭における女性の権限が強く、例えば家の財布を管理する権限が女性（妻）側が占めていて、女性（妻）が月々決まった小額を男性（夫）に渡す社会では、家庭は女性にとって居心地がよい場所であり、「あなた稼ぐ人、私使う人」を地で行く、女性が好きなように家のお金を使い放題、使い道を決め放題の経済的自由を謳歌できる場所である。そのため、自分の経済的自由を得るために、自分からわざわざ外に働きに行く必要がなく、いつまでも実質的な家庭の奥まった主である専業主婦の「奥さん」でいたいと思う訳である。
そこで、日本では、夫の稼ぎがよほど悪くて妻も働きに出る必要がない限り、妻は外に出て働こうとせず、それが性別分業が温存される方向につながっているのだと言える。
この日本の場合、性別分業が強いことは、男性の強さとはほとんど関係なく、むしろ、女性の強さと関係があるように思われ、性別分業が強いことは、むしろ女性社会の現われであるように思われる。
したがって、性別分業が強い社会は男性社会だとする説は、日本社会を見る限りは誤りだと言えるのではないだろうか。
（初出2008年07月）

日本における男性差別の根源

日本の男性は、女性によって女性的な生き方、考え方を取ることを強制されており、そのことが日本社会における男性差別の根源となっている。
すなわち、伝統的な日本の村社会では、男性は、以下のような女性中心の生き方を強制されるのである。
・和合、調和の偏重（男性的な、集団の和を乱す強い自己主張は受け入れられない。）
・護送船団のように集団で固まって安全、保身第一で行動する生き方の偏重（男性が本来好む、チャレンジ、冒険は、危険とみなされ、受け入れられない。）
・閉鎖的な仲良し集団を形成し、よそ者を排除する生き方の偏重（集団内部の人間にコネが無いと、外部からの直接談判が叶わない。）
・どこかの集団に正規に所属していないと、人間扱いされない生き方の偏重（フリーを嫌うこと。）
・親密で、プライバシーをさらけ出す人間関係の偏重（そのままでは他人のプライバシーを覗き放題で、自他をきちんと隔てるプライバシーが存在しない。）
・相互の一体化、情緒的、感情的結合の偏重（男性のように、相互に距離を取って、冷静、客観的、科学的に物を考えるのを本質的に嫌うこと。）
伝統的な日本の村社会は、実質的に女社会であり、その中で生きる男性たちは、自分が本来持っているはずの男性性を殺して、女の道に一方的に合わせて行かなければならない。その点、伝統的な日本社会は、本質的に男性差別、男性抹殺の社会であると言える。男性の人権が抑圧されているのである。
この延長で、家庭において、女性が家計の財布の紐を握り、本来給料を稼いでいるはずの男性が経済的に女性に従属する事態。（頭を下げて小遣いをもらうこと。）あるいは、男性が自分の子どもから女性によって引き離される事態。それらが起きていると言える。
これらは、日本のみならず、中国や韓国、東南アジアといった他の稲作農耕民族の男性が共通に抱えている課題であるとも言える。
こうした現状を打破するには、日本の男性に、欧米、アラブ、モンゴル系の遊牧、牧畜民の持つ自由で、客観的、科学的的な思考を導入する必要がある。もっとも、これも行き過ぎると、今度は、女性の人権が抑圧されてしまうのであるが。

これとは別に、女性の方が生物学的に貴重であるために、女性の生存が男性の生存より優先されるというのが、日本における、もう一つの男性差別の根源である。
すなわち、女性の生存を優先するため、男性自身がより危険な目に会ったり、余計なコストを払ったりするという側面である。
具体的には、例えば、以下のことが当然と見なされている。
・道路で、男性が、より自動車にぶつかりやすい車道側を歩き、女性が内側を歩くこと。（男性が、生命的負担を負うこと。）
・男性が、女性の荷物を持つこと。（男性が、身体的、運動的負担を負うこと。）
・食事や生活費を、男性が、女性の分も負担すること。（男性が、経済的負担を負うこと。）
・より心理的に負担のかかる異性の勧誘やプロポーズを、男性の側から行うこと。（男性が、心理的負担を負うこと。）
・より責任の重大な社会的地位、役割（代表、リーダー役）を男性が負担すること。（男性が、社会的負担を負うこと。）
その他、レストランの食事メニューで女性のみが優遇されるレディースデーがあったり、ラッシュ時に女性だけが楽ができる女性専用車両があったりというのがこれに当たる。要するに苦しく辛いことを男性が引き受け、女性は楽をするのが当然だという考え方が広く行き渡っているのである。
上記のような様々な要因を合わせて、本質的に日本の女性は上から目線で、男性に接しやすくなっており、容易に男性差別が生じる状態となっている。これをいくらかでも緩和するために、日本においては、かつては男尊女卑の考え方があったのであるが、フェミニズムの台頭により口にすることもはばかられるようになってしまった。また、男尊女卑は、表面的に男性は立てられ優先されるようになるものの、男性が女流の生き方を強制される男性差別それ自体の根本的な解決にならないと考えられる。
（初出 2010年12月）

日本社会と女社会

日本社会を知るには、女性や女社会を知らないといけない。日本社会を支配するのが女性（母）だからであること。
しかるに、従来、女社会の内実は、ほとんど社会学の研究対象となって来なかった。
その理由として、女性たちが、女社会のドロドロ、ベタベタ、ネチネチ、ジメジメした、陰湿な雰囲気の悪い内情がばれると困るの

で、わざと隠してきたというのがあるのではないだろうか。
これは、きれい事の大好きな女性にありがちな行き方がもたらした結果であると言える。日本社会を男社会だと必死に主張して、女社会であることへの言及を避けてきた女性学者たちの深層心理、本音も案外そんなところにあると考えられる。
（初出 2010年7月）

日本のデフォルト・ジェンダー、スタンダード・ジェンダー

日本社会では、暗黙の了解として、男女のどちらが、日本を代表するジェンダーとして選択されるか？あるいは、日本社会の標準、基準となるジェンダーは、男女のどちらか？。
これについては、日本社会の基盤をなす、稲作農耕により適合した女性が選択されると考えられる。日本が、お母さんの力が強い母性、母権社会であり、日本人の国民性が女性的であることが、その根拠となる。日本は、女性として表されるのが、より適切である。
（初出 2012年2月）

日本女性の権力、支配力の源泉と、「女の空気」

日本社会で、女性が強いのは、日本で必要とされる社会的性格に、心理的、社会的性差における女性的性格が合致しているためである。
すなわち、稲作農耕が要求するところの伝統的な日本村社会の社会的性格が、女性の性格と合致しており、社会的雰囲気において「女の空気」を要求するものとなっているため、男性はその中では呼吸がしにくくて力を発揮できず、一方、女性は、水を得た魚のように、自分に合った空気を思う存分呼吸して、社会の中で活躍できるからである。
（初出 2012年2月）

ブラックホール＝女社会の解明が必要。

女社会は、ブラックホールとして捉えられる。
自分たちからは、何も外に出さない。
受け身、退嬰、閉鎖的で、受信一方であること。

周囲の眼を気にして、恥ずかしがって、なかなか内情を漏らさないこと。
内情を漏らすと、仲間から非難されて、仲間はずれにされてしまうので漏らせないこと。
それ故、女社会は、中々内情が分からず、解明が遅れている。
その間に、より開放的で、発信的で、内情が分かりやすい男社会が、社会一般を解析する上での標準的な基準になってしまっており、女社会は、そこから外されてしまっている。
それ故、日本社会が、女社会とあり方が似ていること。（液体分子的でウェットなこと。）同じように、受信一方で発信の無いブラックホールとして捉えられること。それら自体が、ほとんど気づかれていないこと。
日本社会と女社会とが同質であることは、日本社会が広く女性の強大な影響下にあり、女性が支配していることを示すものであるが、そのこと自体、気づかれていない。
社会学者は、もっと女社会の解明に力を入れるべきだ。
（初出 2010年7月）

日本社会の解明と、女社会スパイの必要性

日本社会を理解するには、ジメジメ、ドロドロ、ベタベタした女社会の内実を明らかにすることが早道である。日本社会と女社会とは、根本的なところで相似だからである。
ただし、女性たちは、きれいごと、表面的な一致結束のデモンストレーションが大好きで、そのままでは、女社会の陰湿な内実を決して見せようとはしないため、なかなか女社会の真実が分かりにくくなっている。
そこで必要なのが、女性内通者というか、女社会の内偵者、スパイである。
ある程度、男社会と女社会との違いが分かる、男社会、女社会共に客観視できる公平な視点を持った男性社会学者が、女社会内偵者に対して、こっそり女社会の実情をインタビュー等で聞き出してまとめるのが、女社会の内情を解明する一番の早道である。
（初出 2011年3月）

日本社会と女社会の特徴例

女社会は、男社会に比べて、解明されていない。
なぜ、解明されないのかと言えば、女社会を構成する当事者の女性たちにとって、解明されると都合が悪いからであろう。臭いものには蓋をすること。女社会そのものに化粧を施して、すっぴんのドロドロ、ジメジメ、ベタベタした中身が、外部から見えないように必死になっていること。（特に男性に対して、隠すこと。）それらが現状であろう。
以下に、そのままでは見えにくい女社会の分かりやすい特徴を、いくつか上げてみようと思う。これら女社会の特徴は、そのまま日本社会の特徴になっており、日本が女社会であることの証拠であるとも言える。
（１）日本社会においては、会社において、正社員の入社が原則として新規一括採用に限られ、最初に入った会社に永続的に所属することを暗黙のうちに求められる。これは、従来、終身雇用という呼び方で捉えられてきたが、雇用だと、会社の業績が悪くなると、本来の建前を崩して首にせざるを得ないので、永続性の観点からは、むしろ先ほど述べたような終身所属という言い方のほうが、本来の会社の建前に適っていると言える。
前の今までいた集団に永続的に所属したままで、次の新しい集団に別途加入するためのお墨付きを得る行為が、「卒業」である。
これと同様に、女子高生とかの女社会においては、学年とかの初年度に最初に生成したグループ、仲間集団がそのまま外部に対して閉鎖した排他的な形で永続化する傾向が強い。最初に生成したグループから外れたり、どこにも入れて貰えないと、そのままずっと孤立無援の状態が続く。
これは、次のように捉えられる。一度加入した同一集団への終身所属。
（２）日本の国、県、市町村レベルで頻繁に見られる現象として、原発事故で出た放射能の影響を判定したり、住民避難を優先させたりするための基準を作るのに、県や市町村レベルで独自に判断、決定しようとせずに、国に判断を預けてしまう姿勢が頻繁に見られた。国は、更にアメリカに判断を参考として求めるのも見られるようである。
それと同様に、学校や職場での女社会においては、個人レベルで判断しないで、先輩とか上位者の判断が無いと動けない、上位者から指示されないと動こうとしない傾向がある。上位者に対して助言とかはするが、判断はあくまで上位者で、自分たちはその指示をひたすら待つという、指示待ちが広範に見られる。
（３）戦前の日本で頻繁に見られた現象として、官尊民卑の風潮が根強く、中央官庁、お上の言うことは絶対で、少しでも反抗の姿勢

を見せると容赦なく投獄された。今も、表面的には、欧米流の民主主義が信奉されているが、実際は、地方とかに行くと、公共事業の選定とかで、この「お上絶対主義」が幅を効かせている感じである。
これと同様に、学校や職場とかでの女社会においては、先輩とか、先生とか、上位者の決めた決まりとかを、無条件で守るのが当たり前で、疑問を差し挟むことさえはばかられれる風潮がある。一見、従順で良い子のように見えるが、その実態は、自分のレベルで責任を負いたくない、上位者に責任を被せたい、無責任、自己保身の態度である。また、後輩のような下位者の反抗は、心理的に体面を潰されるので一切受け入れられないという高いプライドのなせる技でもある。
（４）日本社会においては、年功序列という呼び名ですっかり定着している。前例を保持する年長者が常に偉くて、威張っており、若年者がペコペコ従うという保守的な構図が頻繁に見られる。
これと同様に、家庭の嫁姑、学校や職場の女社会においては、すでにある過去の前例や伝統を何かにつけて、「おばあちゃんの知恵」みたいな感じで持ちだして、先輩が後輩に押し付け、その通りにしないと怒り出したり、否定しようとする、あるいは、後輩による目新しい試みを否定することが当たり前のように行われている。
（５）日本の教育制度では、テストとかで100点満点が強く指向され、欠点、傷の無い完璧を目指す完璧主義、無傷主義、無難主義が横行している。これは、官庁とかに見られる事なかれ主義と強く結びついている。プラスの長所を積極的に見つけ出そうとせず、退嬰的な態度に終始するのであること。
これと同様に、嫁姑とかの女社会においては、何かと相手のマイナス点をあら捜しして、減点主義で、見つけた欠点について陰口を叩いて、足を引っ張ることが頻繁に起こる。
（６）日本のインターネット掲示板とかで頻繁に見られる現象として、他人に自分のことが晒されるのを避けるために、極力、匿名であろうとして、匿名掲示板を利用したり、実名を名乗らずにハンドルネームをSNSで使用したりする。一方、そうした匿名掲示板では、他人のプライバシーを興味本位で晒す行為が頻繁に見られるのである。
これと同様に、女社会においては、例えば女性週刊誌に見られるように、他人に自分のことを晒されるのを嫌がると共に、他人のプライバシーを好奇心丸出しで、噂話の形で暴く、晒すのを好む傾向が見られる。
（７）日本の会社とかで頻繁に見られることとして、誰かが世間を騒がせると、当人だけでなく、当人の所属する会社や官庁の上司と

かにまで、監督不行届として責任が及ぶことが頻発である。
日本は、1人の行動が周囲の関係者に影響しやすく、連帯責任になりやすい「連鎖型社会」であるといえる。一方、1人の行動が周囲と切れていて、連帯責任になりにくいのが「独立型社会」であり、欧米とかがそうであると言える。
同様に、学校、職場の女社会においては、何か騒動を起こすと、当人だけでなく、当人と関わり合いのある周囲の縁者にまで責任が及ぶ連鎖制、連座制、連帯責任の傾向が見られる。
このように、日本社会の特徴は、女社会の特徴そのままであることが多く、日本社会が女社会であることの証拠になっているといえる。こうした現状は、男性解放のために打破しないといけない。
例えば、江戸時代の大奥とか女性メインの職場の社会的雰囲気、慣行や、現代日本における女子校や生命保険外交員みたいな女性主体の学校、職場の社会的雰囲気、慣行のあり方を、従来日本人の国民性と比較、検討することにより、それらが共通、同一の、自己保身、安全第一指向から来る退嬰的で、事なかれ的、護送船団で対内和合重視な女性的な行動様式をルーツとしていることが判明するのではないかと思われ、今後の研究課題として捉えることができる。
（初出 2011年10月）

女社会、男社会と女流、男流

同じ男社会と言っても、日本と欧米とでは、性質が違うと考えられる。
日本の男性は、母性の影響が強いため、女流の男社会になっていると言える。
一方、欧米の男性は、父性の影響が強いため、男流の男社会になっていると言える。
同じ女社会と言っても、日本と欧米とでは、性質が違うと考えられる。
日本の女性は、母性の影響が強いため、女流の女社会になっていると言える。
一方、欧米の女性は、父性の影響が強いため、男流の女社会になっていると言える。
男社会、女社会、いずれにおいても、男流、女流の区別が必要である。
女流の女社会、男流の男社会が一番優れている。女流の女社会を形成している日本女性は、一番優れている。日本女性は、良い意味でも悪い意味でも、「真に女らしい女性」「女性的女性」（ないし、

母性的女性）である。日本のフェミニストや女性学者が女権拡張の手本にしているはずの欧米女性は、男性化した女性、「男性的女性」（ないし、父性的女性）であり、劣った存在であること。
一方、女流の男社会しか形成できない、女性化した男性、「女性的男性」（母性的男性）である日本の男性は劣っている。優れている、真に男らしい男性、「男性的男性」は、父性が確立されている、男流の男社会を形成している欧米やアラブ、モンゴル等遊牧、牧畜民の男性（父性的男性）であること。
（初出 2010年7月）

日本の男社会は実質女社会。

日本の男社会は、実質女社会である。
日本の男性は、母親の強い影響で、女並みに、ウェットできめ細かく、陰湿になっている。
例えば、同僚の昇進とかで、嫉妬心が強く、同僚の足を陰湿な手段ですぐ引っ張ろうとする。要するに、自分は自分、他人は他人と切り分けることができないのである。
父性の強い欧米社会において、自分は自分、他人は他人と冷淡に切り分けて、殺伐、ドライな雰囲気に満ちるのとは対照的である。
（初出 2011年10月）

女脳の日本人

日本人の行動様式が、集団主義、退嬰的等、女性的なものになっていることは、その根底の日本人の脳の仕組み、構成が女性的になっていることの表れであると言える。
遺伝的側面としては、長いこと稲作農耕民族として女性、母性優位で生きてきた結果、日本人の脳が、女性的な脳構成へと遺伝的に淘汰されてきたことが考えられる。
後天的、文化的側面としては、脳のニューロン回路や、脳内伝達物質のあり方の構成が、学習により女性的に構成されているということが考えられる。子供の教育の権限を母親が独占したり、人格形成期の幼稚園、小学校における教育を女性教師が独占する結果、子供の脳が女性的に形成されているということが考えられる。
（初出 2010年7月）

日本人の欧米指向は女性的。

日本人の欧米指向は、最先端のものを身につけて、良い格好をしたい、格好を付けたいというものであり、見栄の一種であり、周囲の他人の視線を前提とした女性的な考え方であると言える。

（初出 2014年4月）

方向感と性差、社会差

進行方向に方向感のある人が、気体分子的な男性、欧米人である。
一方、方向感のない人が、液体分子的な女性、日本人である。
それは、例えば地図が読めないといった点に現れてくる。
なぜ、女性、日本人に方向感が欠けるかと言えば、周囲の近場の他者と行動を合わせること自体に注意が集中して、自分たちがどこに進んでいるか気づかないというか、どうしても注意が疎かになるからである。
（初出 2010年7月）

高関心社会と低関心社会

世界の社会は、他人が何をしているか、他人のプライバシーが気になって仕方がない社会である高関心社会と、他人に無関心な低関心社会、無関心社会に分かれる。
日本社会や女社会は、高関心社会であり、欧米社会や男社会は、それと比べると相対的に低関心社会であると言える。
日本人や女性は、他人に関心が強く、覗きや他人のうわさ話、当局、上位者への知人の内情通報が好きである。
あるいは、他人の個人情報を流出させることが好きであり、他人の内情に絶えず探りを入れている。他人の内情を暴露することが好きである。
他人（のプライバシー）に関心がありすぎる人たちの集まりが、日本社会、女社会である。
（初出 2010年7月）

比較好き、相対評価好き

女性や日本人は、何でも周囲の他の人と比べようとする、比較好き、相対評価好きである。
学校での成績評価が偏差値でなされるところとか、会社での成果主義ベースの評価が相対評価であるところとか、その典型である。
（初出 2010年7月）

信号文化（暗示的主張文化）、受け取り文化、他力本願文化

女性は、信号を出して、誰かが気づいてくれるのを待つ、信号文化ないし待ち文化の持ち主である。
自分からは明示的に言わず、主張せず、誰かに気づいて欲しいと考えるのである。
これは奥ゆかしい態度だが、気づかれないと、そのままでは放置になってしまう危険性がある。
自分では手を付けず、誰かに察してもらい、何かやってもらおう（させようこと。）とし、その成果をひたすら受け取ろうとする、受け取り文化の持ち主であること。
これは、日本社会にも当てはまる。
例えば、中国人民元に対して円高なため、貧乏になって、巨額の財政赤字を抱える、といった困った問題が発生したとき、自力で最後まで解決しようとせず、誰か他の人（アメリカなど）にやってもらおう、助けてもらおうとする、他力本願が、女性～日本人の特徴である。
また、困った問題が発生したことをアピールしたいときに、自分からは明示的に主張せず、信号、サインを出して、気づいてもらおうとする。気づいて貰えないと、相手を鈍感だと感じて不機嫌になって、怒り出してしまうこと。こうした暗示的主張が、女性～日本人の特徴である。
（初出 2010年7月）

日本人の依存体質、単独行動不可能性と迷惑意識の強さ、「一億総出家」状況について

女性や日本人は、とかく誰かに頼ろうとする依存、寄生体質を持っ

ている。
男性や欧米人は、自分のことは自分で助けるしかないと考える、独立、自立、自助体質を持っている。
女性や日本人は、このように周囲の他者に依存することで、周囲に迷惑をかけながら生きていると感じ、そのことを気にして、周囲にできるだけ迷惑をかけないように、関係を切って閉じこもろう、引きこもろう、出家しようとする性質を持つ。
これが、現代日本で、人と人との結びつきが切れた「無縁社会」と呼ばれる現象につながっていると言える。言い換えれば、皆が出家して、社会との縁を切った「一億総出家」みたいな状況が出現しているのである。
こうした女性や日本人にみられる迷惑意識は、液体中の各分子同様に、自分一人の行動が周囲にどうしても影響を与えてしまう、いわば単独行動が不可能なために起きるとも言える。
一方、男性や欧米人は、周囲に迷惑をかけずに自分だけで生きているという意識を持っていると考えられる。それは、気体分子同様に、自分一人の行動が、強く自己主張しない限りは、そのままでは周囲に影響を与えず、単独行動可能なためである。
要するに、「単独行動可能性」の大小が、迷惑意識の強弱と逆相関すると言える。
（初出 2010年7月）

日本人の責任回避、転嫁と女性

女性は、自分が責任を取らなくて済むように行動する。あるいは、自分で判断しなくて済むように行動すること。
そのため、女性は、より責任を取ってくれる人、判断してくれる人や集団や組織を、自分の周囲に求めたがること。
そして、責任を取ってくれる人を上位者とおだてて、その言う事をひたすら聞く、隷従すること。そこに、上意下達社会が出現するのである。
なぜ隷従するかと言えば、自分自身が、責任を取ってくれるはずの人が言う事から外れたことをすると、責任を取ってくれるはずの人へと責任転嫁できず、自己責任になってしまうからである。
結局、上位者への隷従のように一見見える現象も、実は隷従する本人が、自己保身、安全確保、リスク回避をしたいがために、上位者をダシに使っているのである。
日本社会では、こうした女性の力が強いため、権力者、あるいは会社や官庁のような上位集団、組織への隷従が起きやすい、と言え

る。
この場合、同時に、上位者も保身の権化になりやすく、責任の下位者へのなすりつけ、とかげの尻尾切りを好むのである。
その結果、誰も責任を取りたくない無責任社会が生じるのである。
（初出 2011年5月）

アジア的停滞の原因、アジア的生産様式の担い手、東洋的専制主義の原因は、女性、母性にあり。

日本や中国、韓国、ベトナム、フィリピンといった東アジア諸国では、女性や母親が、家計管理の財布の紐を握り、子供の教育を独占して、子供に女性的な思考、物の考え方を注入し、国民性が女性化している。

こうした女性的な東アジア諸国では、考えが女性的であり、リスクを取らずに、闇には入らずに、光の当たっているところで安全なことばかりしようとして、西欧や北米、ユダヤ諸国のように、未知の闇の中から新しい考えを生み出すことが無く、その新しい考えの導入、後からコピーに終始しており、それが、新しい知見への接触の遅れにつながり、「アジア的停滞」を招いていると言える。言わば、女性が「アジア的停滞」の原因となっている。

アジア的生産様式は、「稲の生産様式」といえる。東アジアで女性が強くなれたのは、K.A.Wittfogelの言うところの大規模灌漑で農耕を行う「水力社会」であることが大きい。大規模灌漑は稲作農耕にとって不可欠であり、灌漑は、集落間の緊密な一体協調による共同作業を必要とし、また先祖代々定住するため、住民間で意見が割れるとまずい。そのため、相互一体感の重視、仲良し、和合の重視といった、女性的な心理が、そうした作業に携わる人々を支配するのである。その結果、東アジアの国民の心理、国民性は女性化したのである。稲の生産が、社会を女性化するのである。

東アジアは東洋的専制主義であるということが言われてきたが、それが全体主義的に見えるのは、下の者による上の者への甘えや懐き、わがまま、素直な従い、あるいは逆に上の者による下の者への可愛がりみたいな女性的心理が、彼らの中に同時に存在し、それ

が、上下関係を和合、一体化に満ちたものにして、社会全体に強力なウェットな一体感、全体感を与えるからである。

異論を許さない独裁的な専制主義に見えるのは、トップが強力だからという訳では特に無く、成員が互いに周囲と仲良く、和合しないと行けないと考えて、周囲への気配り優先で、なかなか異論を唱える訴訟をしなかったり、自分から何かを起こしてその結果責任を取ることのリスクを考えて、とりあえず上の言っていることに従っていれば良いや（責任は上の人に取ってもらおう。）という事なかれ主義による従順が充満しているからである。皆、自分の保身、安全確保が最優先で、危ない橋を渡ろうとしないのであり、リスクを追わない女性的態度が、独裁的な専制主義と関係がある。その点、東アジア諸国の専制主義は、女性的専制と言える。

M.Weberは、中国のような東アジア諸国を家父長制と捉えたが、確かに表面的には男性が威張っているものの、男性は生育過程で、子供の教育を独占する母親から女性的な相互一体感の重視、リスク回避・・・の考えを心の中に強力に注入され、父性を失い母性化して、母性の色（赤色）に真っ赤に染まった「赤色の兵士」と化して活躍していること。なので、東アジア諸国を家父長制と捉えるのは表面的で思慮が足りない結論付けと言え、実際には東アジア諸国は、男性に父性が欠如する母権社会と言えるのである。

（初出 2013年12月）

日本人の守られ願望

日本人は、外部に守って欲しい、もらいたい、「守られ願望」を強く持っていると言える。
やたらと日米同盟を重んじるのも、根底にアメリカに守って欲しいという気持ちがあることの表れである。
いわしの群れみたいな護送船団を好むこと自体、個々の日本人が、自分ひとりだけで自立するのが不安で、誰かと一緒に守られた状態でいたいことを願っていることの表れである。
その点、日本人と女性には共通点が多い。
（初出 2010年7月）

ミクロ文化とマクロ文化

女性や日本人は、細かい点に注意が行き届く反面、大局的な判断が苦手であり、ミクロ文化の持ち主である。
男性や欧米人は、とかく大雑把で細々としたことが苦手な反面、大局的な判断が得意であり、マクロ文化の持ち主である。
日本は、細かいミクロレベルの一つ一つでは成功しているが、マクロ、大局を見ると失敗していることが多い。あるいは、大きな新しい今までにないトレンドを作るのが苦手である。
欧米は、細かいところでは、いろいろ粗や難点が見られるが、マクロ、大局的、大まかには成功していることが多い。IT分野のパソコン、クラウド、スマートフォン等の大きなトレンドの生成は、ほとんど欧米産である。
（初出 2010年7月）

原子型社会と分子型社会、原子行動と分子行動、性差との関連

原子型社会とは、粒子一つ一つがバラバラに自由に独立した原子となっている社会である。
分子型社会とは、各粒子が、何かしらの集団に所属し、構成要素となっている社会である。
欧米社会、男性社会は、どちらかというと原子型社会であり、日本～東アジア社会、女性社会は、分子型社会である。
原子行動は、粒子が互いに独立して、1個のままで動き続ける行動であり、分子行動は、粒子が、他の粒子と手を組んで、同盟して、構成要素となって動き続ける行動である。
欧米人、男性は、原子行動を取りやすく、日本～東アジア人、女性は、分子行動を取りやすい。
（初出 2011年3月）

日本の社会集団に働く表面張力と、女性、卵子との類似

日本の官庁、会社、学校組織は、女性ないし卵子として捉えられる。

日本の官庁、会社、学校に入ろうとするのは、女性を強姦しようとする男性と同じである。あるいは、卵子に挑む精子と同じであること。
日本の官庁、会社、学校は、女性が精神的に支配する、女性の原理で動いていると考えられる。
女性が支配する集団は、ウェット、液体的な性質を持つ。女社会がウェット、液体的だからである。
ウェットな、液体的な集団には、実際の液体、水滴同様に、表面積を最小限に押さえようとする表面張力が働いており、あたかも表面に膜が張っているかのような状態になっている。
それゆえ、液体的な集団である日本の官庁、会社、学校組織、集団には、外に対して表面張力が働いており、表面膜みたいなのが存在すると見て良い。
日本の官庁、会社、学校にそのまま入ろうとすると、男性にセックスを申し込まれた処女の女性同様、イヤイヤをされたり、激しく抵抗されたりすること。あるいは精子にアタックされた卵子同様、精子をシャットアウトし続けようとすること。しかし、いったん処女膜、表面膜が破られ、中に入ると、うって変わって歓迎され、もっとして、ということになる。
これは、日本社会全体についても言えることで、日本社会自体が女性原理、液体原理で動いており、それゆえ、強大な表面張力を持っているのである。これは、鎖国体質として現れる。
先の太平洋戦争では、日本が女性、アメリカが男性として立ち現れており、アメリカが日本の中に入ろう＝占領しよう＝強姦しようとすると、激しく抵抗されて、表面膜を破って中に入るのが大変であった。結局、アメリカが日本社会の膜を破って、中に本格的に入り込むには、原爆投下が必要であった。
このように、表面膜を強引に破ることをせずに、そのまま自然に、スムーズに日本社会の各種集団の中に入れてもらえる条件は何であろうか？。
それは、あたかも母の胎内から、別の母の胎内へ、いわば「内から内へ」の原則で動くことである。互いに内部同士がつながった集団の間を渡り歩くことが必須である。いったん集団の外に出ると、よそ者扱いとなり、再び入ろうとしても表面張力が働いてしまい駄目である。よそ者でなく、ウチの者扱いで集団間を移動することが求められる。
こうした「内から内へ」の原則に適うのは、。
・新卒採用
・2つの集団に同時にコネを持つ仲介人を通して、一方から他方へと綱渡りをする形の、集団外に出ない形での転職（ウェットな転

職）
・2つの集団同士の吸収、合併（個人単位でなく、あくまで集団単位での成員を内部に丸抱えした状態での、一方から他方への合体、もらわれこと。）
だけであること。
日本の会社は、経営危機になると、外部から経営トップ等の幹部を起用したりする。あるいは、極端な人手不足になると、コネ仲介以外の一般外部者に門戸を開放することもある。しかし、これらは、あくまで集団の存亡に関わる非常事態であって、そうでない平時は、外に対して門戸を閉ざしているのである。
それでは、なぜ新卒採用だと、スムーズに中に入れてもらえるのであろうか？それは、新卒内定者は、学校という「ウチ」に所属したままの「内部者」状態でいるからである。一方、既卒者が駄目なのは、学校の外にいったん出てしまい、よそ者、「外部者」扱いとなってしまっているからである。
新卒者がスムーズに会社とかの中に入れてもらえるのは、「内部者」状態を維持していること以外にも理由がある。
それは、これから入ろう、所属しようとする会社集団に比べて下位者であり、会社の言うことを反抗せずに何でも聞く、会社にとって「使える」ことが保証された存在だからである。
また、他のどこも手を付けていない「白紙状態」（処女状態）であり、会社の好きな色に染め上げ、調教することのできる存在だからであること。
さらに、集団そのものの新陳代謝という側面もある。そのままだと成員がどんどん年を取って老いていくので、新しい若い成員が必要であり中に入れたいという強い動機付けが集団側にあるのである。
こうした集団は、一見利益追求のように見える会社であっても、実際のところ多かれ少なかれ生活共同体としてのムラの性格を持っており、内部に入った人間にとっては、仕事が忙しくなければ、そこそこ居心地の良いコミュニティ、サロンのように機能することが多い。本音で言えば、企業として利益を出すことは二の次になっていると言える。その点、「会社」と、利益を出すことが何よりも最優先で、バリバリ仕事できないと人間失格となる「企業」とは本質面で異なっていると言える。
日本の集団は、また、学校の体育会系部活によくあるように、いったん中に入ると、用済みになるまで外に出られないという体質も持っている。（例えば、入社すること。）いったんプールとかの水中に入った虫が、身体に水がまとわりついて離れないため、水の外に出て来られないことと同じである。これは、液体原理で動く集団組織への「終身所属」と呼べる現象である。日本的雇用の特徴とさ

れた終身雇用もこの一環である。出身学校の同窓会とか抜けたくても抜けられないのが実情である。
一方、一見、集団内にいながら集団に入れてもらえない、内輪に入れないよそ者、「集団内部の外部者」とも呼べる人たちが存在する。それが、契約社員、派遣社員、といった外部からの一時的助っ人である。明治時代の外国人教師や、プロ野球の外国人選手と同じ扱いであること。新卒で入社できずに学校の外に出てしまった既卒者が、こうした非正規扱いを受けるはめになる。
こうした、集団内のよそ者＝非正規社員は、液体中のバブル、気泡として表現されるのであり、集団とは一体になれず隙間があり、集団側の用が済めば、あぶくの形で一方的に排出されてしまうのである。
（初出 2010年12月）

欧米における女性の「過剰保護」とフェミニズムについて　（「甘え」概念との関連）

アメリカとかは、本来の支配者である父神相当の男性が、弱者～永遠の子供である女性を、度を超えてオーバーに助ける社会である。
日本は、本来の支配者である母神相当の女性が、弱者～永遠の子供である男性を甘やかす社会である。
欧米社会でも、日本における甘えの概念の裏返しに相当するもの＝「過剰保護」が存在する。
特に女性（そして男性も内心では。）が、父なる神、パトロンに対して心理的に依存し、わがままであり、何かあるとすぐに安直に「パパ」に対して「助けの依頼」をする。「パパ」も直ぐに大げさに過剰に保護をしようとする。
女性が、少しでもキャーキャー叫ぶ、騒ぐと、社会全体が立ち上がる仕組みになっている。
女性解放を叫ぶ欧米のフェミニズムの女性たちの背後には、そうした娘たちを助けようと一生懸命な「父」的存在がいる。そうした「父」の精神的なバックアップがあって初めて、欧米フェミニズムは成り立っているのであり、その点、欧米フェミニズムは、父と不可分な存在である。
そもそも欧米社会で、女性解放を言い出したのが、女性ではなく、男性（J.S.ミル辺り）だったことが、この辺りの事情を説明する。
欧米フェミニズムは、皮肉にも男性によるバックアップ前提のイデオロギーになっている。

なぜ、欧米社会で「甘え」の概念が無いのか？。
行動を起こす主体が男性であること、女性は自分からは行動を起こさないことと関係がある。
日本では、男性が女性に依存する。その際、男性（被保護者）が、女性（保護者）に対して自分から頼ろうとする行動を起こすこと。それゆえ、男性による女性への甘えが発生する。
欧米では、女性が男性に依存する。女性（被保護者）は、自分からは行動を起こさず、その場で「助けて」と叫ぶだけである。それゆえ、男性（保護者）が自ら先んじて行動を起こして、女性（被保護者）を保護してあげる必要が出てくる。
被保護者が自発的に保護者の懐に飛び込んで庇護を求めるのが「甘え」である。
欧米では、被保護者が保護者のところに来ようとする前に、保護者が先回りして被保護者を保護する行動に出てしまうため、「甘え」が発生しない。
欧米とかのドライな父性的社会では、大いなる存在が能動的であり、大いなる存在が先んじて弱者を助けてくれる。（能動的保護、庇護。）
日本とかのウェットな母性的社会では、大いなる存在が受動的であり、弱者は、大いなる存在に対して、こちらから働きかけて寄りかかっていく必要がある。（受動的保護、庇護。）寄りかかる行為が「甘え」である。
（初出 2011年3月）

先輩後輩制、親分子分制を打倒せよ！

日本社会において、先輩は、単に少し前から既に集団、団体に加入しているというだけで、あるいは、学年とかで1年上だというだけで、後輩に対して、全てにおいて上から目線で、偉そうにして、支配者ぶり、優遇されることを当然のように求めて来る。あるいは、集団、団体に入って年季の入っている古株格だったり、局だったりすると、新参者に対して、自分への絶対服従を強制して来ること。後輩格の人は、先輩に対して無条件で、犬みたいに屈辱的に服従し、媚びて、なつき、仕えないと行けない。マゾヒスティックな態度であること。特に体育会系の組織で著しいこと。かつ、自分にとって後輩に当たる人に対して、上記のような先輩風を吹かせるサディスティックな態度を取ること。このマゾ、サドの両者が矛盾せずに同居している。
この先輩後輩の関係は、親分子分、師匠と弟子、姑と嫁の関係と似ている。かつての中国、韓国と日本との関係も似たようなものだっ

たのではないだろうか。
後輩は、先輩の心理的植民地である。先輩の後輩に対する制度化された人権侵害が見られるのである。
年取った人は、先輩になりやすく、その点、年齢が既得権益として作用する。
大抵の人は、後輩であると同時に、先輩でもあり、2つの立場が切り離し難く1人の人格の中に共生している。そこにサド、マゾの支配関係の連鎖が見られる。
学校時代のカリキュラムが、先輩による社会支配の一つの原型になっている。すなわち、1年早い人が遅い人より、学んでいる量が段違いに多く、覆しにくい、覆せないことから、先輩は覆せないものだという強い信念が生まれ、そのままいつまでも大人になっても続くことになるのである。
これは、植物と同じである。先に生えたものほど大きく育って優位に立っており、先に生えた地点のものが優先される先住権がある点が、先輩の後輩に対する優位とそのまま一緒である。日本の田舎で先住民が新住民に対して威張るのも一緒である。
先輩後輩制は、見るところ、女社会において、より厳格に守られている感じであり、後輩は先輩に対して絶対服従が原則化されているようである。先輩は、後輩に対して威張る代わりに、後輩に対して母親がわりになって、後輩を包含して守るべきとされているようである。日本社会の先輩後輩制は、もともと行動する上での安全が確保された前例をたくさん保持する人間を優遇する女社会の特徴であると見るのが妥当ではなかろうか。
こうした先輩の永続的優位は、各人の学んだ前例、ストックが未来永劫有効であることが前提となる。学んだ前例、ストックは、先輩がより多く持っているからである。しかし、現代のように変化が大きく、新しい発明発見が絶えずなされて前例が無効化することが多発する現状では、先輩の永続的優位は、実は成り立たないのだと言える。
それゆえ、先輩による後輩の人権の侵害を絶えず生み出している先輩後輩制は、打倒すべき根拠が十分ある。
同様に、親が子供より偉い、親が上位で子が下位だと考える、日本社会にはびこる親分子分の考え方も打倒すべきである。
親が子供より偉いとされるのは、親が生存に必要な前例となる知恵や設備を、子供に対してより多く持っているからである。これも、身に付けている前例が多い人間を上位者と考える、女性にありがちというか、女性ルーツの考え方だと言える。
しかし、基本的に、親子関係は、代々のバトンを受け渡しする先行世代と後続世代の関係に過ぎず、両者は対等なのではないだろう

か。遺伝的にも、子供は、父親と母親から半分ずつそっくりそのままコピーして受け継いでいる訳で、親と全く対等であり、親に対して上下の関係は成り立たない。親が子を養うにしても、子が自分の形質、ものの考え方を自ずと受け継いでくれることを望んで育てているのであり、親にとって子供は育ってくれないと困るのである。その点、親は子供の意思を絶えず尊重する必要が出てくる。また、親は年老いてくると、身体の自由が効かなくなり、子供の世話にならざるを得なくなり、子供の支配下に入ることになる。
日本の親は子供を育ててやったと、子供に対して恩着せがましい態度に出るが、子供にしてみれば、そもそも産んでくれと頼んだことは一度もない、親が自己都合で勝手に産んで、辛い、苦難の多い人生を子供である自分に勝手にプレゼントしてくれただけ、かえって迷惑だ、親は自己都合で自分のことを産んだのだから自分を育てて当然、というのが真情であろう。
親の子に対する優位の根拠となる、親が持っている前例は、いつまでも有効なものとは限らず、時代の変化に伴って新たな考えが出てくると共に無効化する。そして、親の持つ前例を無効化する新たな考えを生み出すのは、往々にして子供の世代なのである。その点でも、親の子に対する優位は保証されないと考えるべきである。
先輩後輩制も親分子分制も、ルーツは女性にあると考えられるので、無くすには、まずは、日本社会における女性の力を弱めなくてはならない。
（初出 2011年10月）

日本社会と女性のパラレルな関係

日本社会と女性とはパラレルな関係にある。

「ドライで先進的な」欧米に並ぶ、追いつくことを目指してきた、「ウェットで後進的な」日本と、「ドライで先進的な」男性並になることを目指した「ウェットで後進的な」女性とは、同時並行的な関係にある。

ちなみに、女性や農耕民は、遊牧民文化を取り入れて、改良を加え、コストダウンをして販売し、富を蓄えることで、男性や遊牧民を逆転できる。

（初出 2011年3月）

雌国、牝国日本

女性の力の強い日本、韓国、中国、ロシア等は、生物の見地からは、「メスの国、雌国、牝国」と呼べる。
一方、男性の力の強いアメリカ、西欧、北欧、アラブ等は、生物の見地からは、「オスの国、雄国、牡国」と呼べる。
メスの国は、オスの国に比べて、必ずしも弱いとは言えない。生物においても、クロアリやアシダカグモのように、メスがオスに比べて強大である例は、いくらでも存在する。
（初出 2011年11月）

日本人の「武装女子」指向

日本人は、太平洋戦争敗戦後、ずっと、アメリカの支配下、影響下で暮らしてきた。
首都東京から数十キロのところに、大きな米軍基地があり、いつでもアメリカに攻められるので、言うことを聞くしか無かった訳である。
一方、アメリカの庇護下にあるということで、緊張ある軍事、地政学的懸案事項は、全てアメリカ任せでOKということになり、平和憲法下で経済的発展にのみ専念すれば良くなり、事実、一度は世界第二位まで上り詰めた。
ところが、頼りにしていたアメリカ（模範としてきたヨーロッパ）が、だんだん弱くなってきてしまった。（借金まみれ。）代わり

に、かつては弱かった中国が経済的に強くなってきた。
力が弱くなったアメリカに今までのように頼れそうもなくなってきた日本は、その事態に気づいてだんだんあわて始め、すっかり強くなった中国やその下僕の朝鮮の連合に飲み込まれないように、急いで自己の軍事的、地政学的自立を図ろうとしているのが現状であり、その一環で、日本では国家主義、国粋主義が強くなってきているのである。（いわゆるネトウヨの横行。）
日本が軍事的、地政学的自立を図るには、日本は、中国に飲み込まれない程度に国力が強くなる必要がある。軍事的、経済的な攻撃力、防御力が必要であり、そうした武力は、通常丸腰の女性でなく、男性が担うものである。
それゆえ、今後の日本では、そうした男性性を表面に押し立てて、「男性的国家像」というか、かつての武士道精神の復活が求められるようになると言える。
もっとも、日本社会の、個人間、組織内の一体感、和合、協調性を重んじて、小集団で排他的にまとまろうとするウェットな女性的な性格の本質は、そのまま温存されると思われ、そういう意味では、日本社会は、「武装女子」「武装の麗人」という感じで進むのではなかろうか。
例えば、武装戦艦が女性キャラクタに転化した「艦隊これくしょん」あるいは「武装神姫」みたいな位置づけが現に日本人の若者の間で好まれており、日本社会では、これからこういった感じの表面的には男性性、武装性を押し立てつつも根幹では女性的な文化がますます進展していくものと思われる。
もしくは、「プリキュア」「結城友奈は勇者である」「ガールズアンドパンツァー」みたいに、女性が肉弾戦、砲撃戦をやる感じの、やり手の手強い武人的な女性像が今後次々と創造される方向に行くかも知れない。
現状では、日本は、対米従属、精神的依存から、まだまだ抜けきっていない感じというか、むしろ沈み行くアメリカと一緒に心中しようとしている感じがあるのが、個人的に気がかりである。
後は、日本の国の財政状態があまりに悪そうなので、いったん経済破綻は免れないかなという気もする。昭和恐慌の再来であること。
昭和恐慌の際は、日本は軍事政権化して、勝てない太平洋戦争に突き進んでいったが、今回も、上記の武装指向があることから、同じ轍を踏みそうな気がする。
（初出 2014年11月）

女（母）が強い国＝強国という図式。

日本の右翼は、強い日本社会を希望する。そして、日本社会のことを強い男の国でありたい、強い男の国と見られたいと考えていること。日本社会のことを女々しく思われたくないと考えていること。その考えの底には、女は弱いという考えがある。つまり、女性は、なよなよしていて、柔弱で、筋力が弱く、やろうと思えば強引にレイプできてしまう頼りない存在だ、という考えがある。

この考えは、間違いである。日本では、同じ女性でも、母は別格で強い、手強い存在であるという考えが以前から存在する。すなわち、「肝っ玉母さん」「おふくろさん」「オバタリアン」といった、既婚の子持ち女性への呼び方がそれである。

日本の男性は、女性は叩くが、母は決して叩かない。同じ女性でも母は別格扱いをするのである。

日本の母は、以下の強力な力を持つ。

・一体化の力、包容力。

・対人面でのコネを作り活用する力。

・ズケズケ物を言う強い心臓。

・連想力の駆使による相手への詰問、問い詰め、小言の絨毯爆撃を行う力。

・重箱の隅をつついて、あら探しをする力。

日本の母は、以下のことを実現する。
それらの力によって、家族ひいては社会を支配すること。特に、家庭の家計財務管理、子供の教育の権限をほぼ独占していること。

母が強い社会は、同性の女性が強い。

日本社会の推進力の源はお母さんであり、日本の強さの源はお母さん＝女性である。

「強い」日本男性は、実際は、母から力を貰っている。見かけは父からでも、実質、その父の母（祖母）から力を貰っていること。
日本男性は、母の力で母色に染まる。日本社会は、母である女性の力によって、母色に染まっている。

一方、欧米社会は、父である男性の力によって、父色に染まっている。

欧米女性は、一見自己主張、押しが強く、強力な存在の様のように見える。日本男性は、それにたじたじとなっている。

しかし実際は、欧米女性は、強力な家父長制、父権制の下、父の色に染まっている。

欧米女性は、以下のような存在である。
「出来損ないの男性」「不完全、不十分な父」みたいな存在であり、母性喪失者であり、社会的に劣った弱い存在なのであること。
その証拠に、彼女たちは、家庭の家計管理や、子供の教育において、副次的な役割しか果たせていない。

一方、日本の男性は、父性喪失者であると言える。

日本社会のように、母の十分強い社会、国は、国際的に十分強力である。あるいは、母が十分聡明な社会、国、子供の教育を独占する母がいる社会、子供に良いしつけ、教育を与える母がいる社会は十分に強力である。

かつての中国、韓国は、母が中華思想に染まって、聡明でなかったため、弱かった。

日本の右翼は、日本を後進的な中国の一員ではなく、先進的な欧米の一員と思いたがる。

日本を女性的とすると、日本は中国の一員になってしまい、男性的な欧米とは異質になってしまう。日本の右翼は、そこで、日本は男性的であると思おうとする。

子育てを独占する日本の母は、子供、特に息子を欧米の色に染まらせることを考え、欧米追随を強力に指向、推進した。息子が強い男に見えるのを指向した。それは、見かけ、理想は、欧米流の家父長であったが、実際は、日本流の侍であった。

日本の母は、「侍の母」として、子供に対して厳しく接することで、子供を強くしようとした。それは、一見姑根性と近いが、実子への愛情あるしつけである点が違うといえる。

それは、誠実さや勇気を強調したものであり、戦前であれば、「お国のために立派に死ぬ男」を育成しようとした。それは、一般化すれば、自分の所属集団（ムラ、会社、所属官庁・・・）のために立派に死ぬ男、自分を犠牲にして、所属集団本位で、所属集団と死ぬまで一体で行く男の育成であり、その点、女性的な男性の育成であったこと。

侍の国＝母の国（母が強い国。）であり、両者は矛盾しない。

強い、厳しい母（厳母の精神）が、強い侍、日本男児の生みの親となっている。日本の侍、日本男児は、武術、戦術は強いが、根本が女性的である。すなわち、思考が、他人の視線、眼差しを前提としたものとなっており、見栄っ張りで、ヒステリックで、強がりであり、恥を重視する。所属組織への一体融合感が強く、所属組織に包含される、甘えるのを好む。見栄を張った結果に対して責任を感じ、見栄が実体を伴うように必死で努力するため、そこが、真の強さ、成果、競争力につながる。これらは、女性的と聞いて即座に連想しがちな、なよなよした柔弱性とは異なる、別の女性的側面であるといえる。

その点、女性的＝力が強い、という図式が十分成り立つのであり、日本社会、日本の国が女性的であることは、日本社会、日本国が力が強いことの裏付けとなっていると言える。

女（母）が強い国＝強国という図式が成立するのである。

（初出 2014年4月）

日本アニメ女性声優の声の高さについて・・・女性性の原型保持と日本

欧米のフェミニストは、日本のアニメの女性声優の声が甲高いので、子供みたいだと言って馬鹿にする。

しかし、実際の所、出す声の高さは、通常女性の方が男性よりも高いのが普通である。

欧米で声が低いことがデファクトスタンダードであることは、男性の力が強くて、女性が男性化していることの現れである。すなわち、欧米女性では、女性性の原型が男性の影響で失われ、男性的な方向に変質しているのである。

日本のアニメの女性声優の声が甲高いのは、日本社会では、女性性がそのまま原型のまま保たれており、女性が強いことの現れであると言える。

なので、日本のアニメの女性声優の声が甲高いことは、女権拡張を支持する人たちにとっては、本来望ましいことなのである。欧米のフェミニストにとっても、本来女性の声が高い日本の方がデファクトスタンダードになるべきなのである。

（初出 2014年11月）

日本人と国内、海外

日本人は、相当違う、異質な者同士（中国とアメリカ）を一緒にして、外人としてひとまとめでくくってしまう。

また、日本人は、海外からの自分たちへの反応、評価には敏感だが、海外の人々への関心が薄い。

それは、「思考が内向きなこと」であり、自分たちの所属グループにしか関心のない女性たちと、考え方が一緒である。

（初出 2013年10月）

表と奥

従来の日本史や日本社会論においては、男性と女性の見方が、表と裏という形で表現されることが多かった。中国古来の陰陽の物の見方にとらわれて、男性を日の当たる明るいメインの表側、女性を日の当たらない暗いサブの陰の裏側に例えて来たこと。これは、男性の優位、女性の劣位というように捉えられてしまう問題を含んでいる。
筆者は、これと異なり、日本の男性と女性の見方を、表と奥という形で表現すれば良いのではないかと考えている。表札に名前の出る表側にいるのが男性で、家の中枢の奥の院に入っているのが女性であると捉える訳である。これにより、家の周辺部に留まり中枢に入れないのが男性で、家の中枢部の奥の院を占有しているのが女性というように捉えられ、男性の劣位、女性の優位として捉えられる。
外からは様子がうかがい知れず、その存在を隠すことで、身の安全を図ることができるのが、女性が奥の院に留まるメリットである。
歴史書のような公式記録、表に出た記録は、「表の人」である男性中心になりがちであり、表に出ることを避ける「奥の人」である女性の行動記録は奥にしまわれ、表沙汰にならず、表の公式記録に残らない。そのため、女性があたかも活躍していないかのように見えてしまう。それが、女性の思う壺なのである。すなわち自分自身の活躍した結果の後世への責任を取らなくて済むからであること。
「歴史的責任の回避」が、女性が歴史の表舞台に出てこない真の理由である。女性は、何事も被害者面して押し通し、責任を取らなくて済むようにしているのである。女性は、自分たちを支配者と見せないことで支配責任を回避する。実行犯にならないのであること。
女性は、きれいごと、きれいな建前しか歴史に残そうとしない傾向がある。自分たちのドロドロ、ベタベタ、ジメジメした陰湿で醜悪な内部抗争劇を、外部に対して封印し、きれい事で済まそうと懸命になること。そのため、外部に対して、女性が活躍しなかったことにして、男性のみ歴史的に活躍したかのように見せかけるのであ

る。

（初出 2012年03月）

日本史における女性の地位低下の通説について

日本史においては、室町時代から江戸時代にかけて、女性の地位が低下し、現代に至るまで余り回復していないとされる。
女性がそれまでの時代で持っていた所領を持たなくなったり、公文書に登場しなくなるのがその理由とされている。要するに財産権を失い、公の活動から締め出されたと捉えられていること。
これは、果たして正しいのであろうか？。
筆者は、女性の地位が低くなったのではなく、単に女性が今までに比べて「奥の院」の住人になる度合いが強まったのがその原因であると考えている。「奥の院」にいることで、所在が直接露出しない、外部から振る舞いが分からないようにして、身の安全をより強固に図ろうとする度合いが強まったと考えている。
姑とかの女性は、この時代、自らは直接社会に手を出さず、自らの内に一体化、包含し、精神的に乗っ取った息子を自らの操りロボット、代理として、日本社会の間接支配の体制を創り上げたと考えられる。要するに「母権」「姑支配」体制の完成であること。女性が、自分の息子経由で、家の奥から社会を支配する、「奥様」化が進行したのである。
姑による息子と嫁の支配が確立すると共に、表、公に出てくるのが専ら息子であり、社会の表舞台で活躍するのが専ら息子である男性であるという現象が起きて、それゆえ女性の存在が目立たなくなり、いつの間にか劣位の存在であるというように誤解されるようになったのではないだろうか。
江戸時代とか、夫、男性を独立した存在として見ては駄目であり、彼らは、「母の息子」として見るべきである。要するに、母、姑と一体化し、その支配下に置かれた従属的な存在であると捉えるべきであること。
では、なぜ室町時代から江戸時代にかけて、女性が「奥の院」に入る度合いが強まったか？。
それは、この時代、社会が戦乱期、戦国時代に入って、女性にとって、表に出ると身の安全がより危険になったことが大きいと考えられる。

戦乱期や武家政権時代は、女性は、身の安全が脅かされたり、丸腰のままであるため、そのままでは立場が悪くなり、弱くなる。一方、社会が平和になり、安定化すると女性は、身の安全を図りやすくなり、立場が良くなると考えられる。
戦国の世になって、身が危険にさらされる度合いが強まったため、姑とかの女性は、より安全な「奥の院」に移動し、入って、そこから家族をコントロールし、ひいては外部社会を支配するように、戦略を改めたと言える。要するに、女性は、奥座敷で守られることを指向するようになったのである。
例えば、所領の名義とか、今までのように、女性のままにしておくと、外部にそのまま自分の存在が露出してしまう、分かってしまうことになり、それでは危ない、身の安全を保てないと考えて、名義だけ夫や息子の名義に変えたと考えられる。名義を男性にすることで、対外的には、表面上男性が存在することになるため、女性は内側で守られることになる。
名目上は、息子が所有者だが、その息子は、母親との結びつきが強く、心理的に母親に乗っ取られた状態であり、母親の言うことに逆らえないようになっているため、実質的には、母親である女性の所有であると言える。
家計管理とかの、所領の実質的な家庭内での管理権限は、今まで通り女性が握ったまま、男性を表名義に据えることで、男性のガードがあることを対外的に明示するようにしたと考えられる。これが、女性が表に出てこなくなり、所有権を失ったように表面的には見えたため、女性の地位が低くなったと誤解されたのではないだろうか。
これが、そのまま江戸時代以降、現代まで持ち越されてきたと考えられる。
（初出 2012年03月）

一枚岩ではない欧米。

欧米は、フェミニズムにおいて一枚岩ではない。
今まで、筆者の文章では、欧米をひと括りにしてまとめるかたちで言ってきた。
しかし、欧米も、西欧、北欧と、南欧、東欧とでは、父性、母性の強さ、弱さが違う模様である。
イギリス、フランス、ドイツの西欧は、父性が強いことが確実である一方、イタリア、スペインの南欧になってくると、社会における母親の影響力が強くなって来て、日本と似てくる印象がある。

イタリア南部とか、マンミズモ、コネ万能で、オペラに見られるようなドロドロした愛憎に満ちた人間関係が主流であり、女性的、母性的になってくるのである。
欧米でも、純粋に家父長制なのは、西欧、北欧辺りのみであり、そのうち西欧を代表させて、北米と合わせて、WENA (West Europe and North America) という造語を作り、WENAにおいては、家父長制を前提とする既存のフェミニズムが有効であるが、南欧では母性が強いことを前提とする新たなフェミニズムで捉えた方が良い、とする見方が成立しうると言える。
（初出 2011年10月）

男女闘争史観

世界の歴史は、男性（男性的国家、社会）と女性（女性的国家、社会）との勢力争い、覇権をかけた抗争、闘争の歴史と捉えることが可能である。
先の東西冷戦は、男性的社会、国家である、欧米西側と、女性的社会、国家である中国、ロシア、東側との対立、闘争であった。
社会主義と自由主義とのイデオロギーの対立の根底には、女性と男性の力の対立が内包されていた。
鉄のカーテンで閉鎖、排他戦略を取った女性的国家には、男性側からの新規アイデア、物資が入ってこなくなり、社会の発展が止まり、劣勢に立たされた。女性的国家は、自分だけでは、既存の枠組みを壊す新規アイデアを生み出すことができず、どうしても社会の仕組みが古く、後進的になりがちで、競争力の点で劣りがちになるのである。
その結果、東西、男女闘争の第一幕は、西側、男側が勝利した。
東側の女性的国家は、そこで思い切って、ある程度国を開いて、西側の男性的国家の文物、アイデアを受け入れ、そのコピーと小改良で、圧倒的に安いコストで製品を作り、大量輸出した結果、西側の男性的国家の雇用や富を大幅に奪い、西側男性的国家の財政危機や高失業率をもたらし、崩壊寸前にまで追い込んでいる。その結果、東西、男女闘争の第二幕は、東側、女側が勝利を確定的にしたと言える。
日本は、アメリカのような西側、男側国家陣営の中に取り込まれた、実質東側、女性的国家という位置づけであった。そのため、欧米西側の中で、一人異質な位置づけであったこと。
日本は、中国、ロシアが鎖国中に、西側、男側陣営の生み出した成果を独占して輸入、コピー、小改良し、その成果としての製品を大

量にばらまいて世界第2の経済大国にのし上がった。
その点、日本は、中国、ロシアの先鞭を付けた訳であるが、実際のところ、日本は、中国、ロシアと同じ同じ女性的国家で、中国、ロシアと比べて社会の内情において大きな違い、差が見られない。
そのため、現状の日本は、中国、ロシアと上手く差別化を図ることができず、通貨が円高のままであることも相まって、製造業を中心に大苦戦中であり、巨大な財政赤字と相まって、沈没は免れない情勢となっている。
将来的に、日本は、中国、ロシアといった女性的国家群の側に統合される可能性が高いと言える。
このように、世界の歴史的な動きは、男性的国家と女性的国家との対立、闘争として捉えることができると言える。
これは、長年続いてきた、女性優位の農耕民と、男性優位の遊牧、牧畜民との世界的な対立、闘争の一環として捉えることも可能である。
それらの根底には、男性と女性との果てしない力比べ、勢力争い、闘争、対立が内在していると言え、男女闘争史観と呼べる。
従来、男女は、互いに性的に惹かれ合って、協力して家庭を作り、子育てをして、次世代へと遺伝、文化を受け継いでいく歴史を紡ぎ続けてきたし、これからもそうあるべきだという、男女協力、協調史観が主流であった。
しかし、実際のところ、男女の持つ性質、行動様式は互いに、気体的、液体的というように、対照的、正反対で対立的なものであることも確かである。それゆえ、そうした互いに対立する性質を持つ男女同士、外部環境の変化に応じて、どちらが主導権を握るか、支配力を得るかで、絶え間なく小競り合い、抗争、闘争を繰り広げることは、家庭の中でも、社会の中でも不可避であり、そこに男女闘争史観の考え方が出てくると言える。

その一環として、将来的に、日本社会において、男性側の男性解放、父性確立への流れと、女性側の母性的フェミニズム推進の流れとが、共に隆起して、真正面から衝突することになると筆者は予想する。

（初出 2012年8月）

２．

「家庭内管理職」論

日本社会は、政治家や官僚によって支配されている、とされる。
しかし、実際には、その官僚を支配するさらなる支配者がいる。
政治家・官僚の「生活管理者」「さらなる上司としての家庭内管理職」=主婦であること。
日本の専業主婦=無給家事労働者論は、打破されるべきである。日本の女性は、家庭において、実際は、単なる労働者ではなく、家族成員の生活をコントロールする、家庭内管理職とでも言うべき地位についている。
日本の女性が男性の給料(労働の対価)を全て召し取って、自分の管理下に置くこと。その点、労働者たる男性を支配していること。
男性が、自分が被支配者の立場にあることに気づいてしまうと、男性が女性に対して反乱を起こしかねないので、一家の大黒柱とか、家父長とか言って、わざと崇め奉って、必死に、気づかれないように取り繕おうとする。
フェミニズムは、女性の弱い面、被害者の面にのみスポットを当てて騒ぎ立て、女性の強い面=既得権益(家計管理、子供の教育)については、知らんぷりするか、ことさらに無視し否定する。この女性の占める既得権益こそが、「家庭内管理職」としての側面なのである。
家庭内管理職の概念について整理すると、「家族員の生活を、管理・制御する者」と定義されること。
1)夫を管理する妻
2)子供を管理する母
として立ち現れること。
一方、欧米では、男性が、この家庭内管理職の地位についていると考えられる。
日本→妻の監督・管理下で、給与稼ぎに従事する夫
欧米→夫の監督・管理下で、家事労働に従事する妻
という図式が成り立つ。
女性が家庭内管理職の地位についていることは、日本の家庭における実質的な女性優位を示す。
日本における家父長制は見かけだけと考えられる。
女性が、家父長制をやたらと持ち出すのは、妻と姑という同性同士

の対立や権力闘争が根本の問題である。
女性は、同性間の相互の一体感を重視する。
同性同士の結束が弱い（仲が悪い、バラバラである。）と見られるのをいやがって、異性の夫（息子）のせいにすること。
日本女性の勢力が、「内」＝家庭内限定であった理由は、戦闘や戦争状態を前提とした社会である、武家社会の名残と考えられる。戦前の日本社会も、陸海軍の発言権の強い、「武家」社会の一種であったと考えられる。戦闘や戦争が多く起きる状態では、外回りに危険が多い。したがって、生殖資源として貴重品たる女性を外に出すわけには行かないからである。
日本男性（例えば、九州男児）は、威張って、身の回りの細かいことを妻にやらせることが多い。彼らは、自分からは何もやらず、動こうとしない。その根拠は、「怠け者＝上位者」理論として整理できる。すなわち、仕事をしないでのんびり怠けて過ごせる者が、そうでない者よりも上位にある、という考え方である。
しかし、これでは、妻がいないと、自分一人では何もできない。言わば、妻に生活上の生殺与奪を握られていること。妻に対して頭が上がらず、結局、弱い立場に追い込まれることになる。
日本女性は、家庭に入ることを求められる。職場で昇進しにくいこと。肩たたきで会社を辞めざるを得ないこと。
それは、職場で無能だから、という訳ではない。
日本女性が、社会から家庭に入ることを要請されている本当の理由は、家庭内管理職、すなわち、職場で働く者の生活を管理する者の方が、社会的に重要で、地位も高いから、そちらになってもらいたい、ということなのではないか。
日本の男性は、本当は、女性に家庭に入ってもらわない方が幸せである。
日常の生活を管理されないで済むこと。気の進まないことへと追い立てられなくて済むこと。（賃金）労働や、組織での昇進競争をしないで済むこと。
しかし、女性への心理的依存があるから、入ってもらわずに済ますのは無理である。
性別分業は、女性差別とされている。
しかし、必ずしも、女性に不利な差別がされている訳ではない。
「女は内、男は外」という場合、「内」の方が、家庭内管理職の役割を持つことが出来、地位が高い（欧米とは逆。）こと。
「内」の方が、苛酷な自然環境に直接さらされないで済み、生存条件としては良好である。
日本では、妻が母艦の役割を果たし、夫は、母艦から飛び立って、職場で労働し、給与と共に帰って来る飛行機である。

母艦は、飛行機に出発や給与渡しなどの指示を出し、管理する。
母艦は永続的な場なのに対して、飛行機に乗るのは、一時的である。
職場は、一時的な滞留の場であり、最終的には母艦に帰らなければならない。
最終的な居場所である母艦たる家庭を支配する女性こそが、社会の強者である。
日本の父は、子育てに関わろうとしないと非難される。しかし、日本の父は、例え子育てに参加しても、補助労働者としてこき使われるだけであり、子育ての主導権は握れない。主導権は、女性＝母の手にある。日本の父親には、子育ての権限がもともとなく、子育てから疎外された存在である。家事についても同様で、決定権が妻の側にある以上、夫は補助労働力に過ぎない。夫が家事にやる気を出さないのもうなずける。一方、欧米の父親が、家事や子育てに積極的に関わるのは、彼が、家庭内管理職として、家事や子育ての内容について、最終的な決定権を持っているからだと考えられる。次に何をすべきか決定する権限を持っていれば、当然、やる気が起きるであろう。
専業主婦は、社会的地位が低いと見られがちである。しかし、その様相は、欧米と日本とで大きく異なると考えられる。
欧米の主婦は、夫の管理下で下請け的に働く、家事労働者に過ぎず、その地位は、本当に低い。
日本の主婦は、もちろん、家事労働者の側面もあるが、実際には、家庭内管理職として君臨し、管理される夫よりも常に1ランク上に位置する。日本の主婦は、家族の生活を、隅々まで、制御・規制して、収入管理・分配権限、子供の教育支配権限を一手に握る。家族の健康な生活を守る、生活管理者、監督としての役割を担っていること。
日本家庭では、買い物の順番として、「子供のもの→妻のもの→余ったら、夫のもの」という優先順位が付いていると言われる。妻のものが夫のものより優先される点に、女性支配の現実が見える。
（初出2000年07月）

日本女性と家計管理権限

1.小遣いと大蔵大臣
日本では、自分で他人を養うだけの給与を稼ぐ役割を男性がもっぱら担っていることが、男性優位（家父長制）の証拠と見なされること。

女性の立場が弱いのは、自分で給料を稼がないからだとされる。
上記の意見は、おかしいのではないか？。
給与を稼ぐ立場にあることが、強い立場にあること（家父長であること）の証拠とは必ずしも言えない。
日本では、男性が稼いだ給与は、一昔前の給料袋から、現代の銀行振込に至るまで、男性によってほとんど何も手をつけられずに、女性の下に直行する。
日本では、女性が、家計を管理し、家計における、最終的な、予算配分決定の権限を握っている。彼女は、大蔵大臣と称される。
総務庁青少年対策本部「子供と家族に関する国際比較調査」1994では、日本において、家計管理を行っているのが、夫と妻とを比較したとき、60％以上妻が行っているとされており、日本女性が家計管理権限を独占的に掌握していることを裏付けている。
男性は、女性から改めて、小遣いを支給される。
男性は、小遣いの額を、女性と交渉しなければならない。額を最終的に決める権限は女性が握っている。
給与の使い道（予算配分）を決定するのが、本当は、家父長たらしめる役割のはずだが、日本では、この役割は、女性に占領されている。
給与を単に稼ぐだけで、稼いで来た給与の使い道配分を決定する権限がないのでは、日本の男性は、家計管理者＝大蔵大臣としての女性の下で働くこと。（女性にこき使われること。）そうした下級労働者に過ぎないこと。
家計管理の権限を最初から剥奪され、小遣いをもらう立場に甘んじるのは、家父長とは言えない。
日本の女性は、女性は男性に養ってもらう被扶養者であるから、男性よりも立場が弱い、とまくし立てる。しかし、それは、男性の自尊心（「自分は偉い。」）をキープして、よりよく働かせることのための口実に過ぎないこと。（給与を稼がせることの口実であること。）
日本の男性は、お金を生み出す打ち出の小槌（大工道具）であり、女性は、打ち出の小槌を使う大工である。女性は、小槌によって生み出されたお金を取り上げ、自分の手元で管理する。男性は、主体的に自らを管理する能力を持たないため、管理者たる女性に頭を下げて、小遣いを恵んでもらわないといけない。
日本の男性は、女性によって、一家の大黒柱と持ち上げられるが、本当は、女性の管理下で働く下級労働者に過ぎない。女性によって、収入を吐き出させられ、ちゃんと仕事をするように監視されること。日本社会は、「鵜飼型社会」であり、男性は、鵜飼である女性の管理下で、魚取りに従事し、捕まえた魚を吐き出させられる鵜

鳥の役割をさせられている。
日本では、夫は、財産の所有権、名義は持っているが、その財産を自分の自由に動かしたり管理する権限は持っていない。一方、妻は、財産の所有権、名義は持っていないが、その（他人名義の）財産を自分の思い通りに、自由に使ったり管理する権限を持っていること。
両者のうち、どちらが強いか？。
性別を伏せて、Aさん、Bさんとして聞いてみたらどんな結果が出るだろうか？。
2.日本専業主婦の地位と財産
専業主婦は、自分の食べる分の給料を稼がないから、地位が低いとされてきた。このことは、今までの日本における男性優位の根拠となってきた。
日本の専業主婦は、家庭における資金の出入りを、最終的に管理し、決定する権限を持っている。家計管理者として、給料の使い道を管理し、何に使うかを決定すること。こうした財産管理・使用権限は、夫に対しても、小遣い支給という形で行使される。
従来、家庭において認められて来た財産形成（生成）と所有の権限（主に夫が保持。）とは別に、財産管理と使用の権限、配分権限というものの存在を、新たに認めるべきであること。いくら、形式的に財産を所有していても、実際に使う権限を持っていなければ、意味がない。その点では、財産管理・使用権限の方に比重を高く置いてみるべきである。欧米では夫がこちらの権限も保持しているが、日本では、この財産管理・使用権限は、妻が保持している。

権限の強さ	欧米	日本
財産形成（生成）・所有権限	夫	夫
財産管理・使用（配分）権限	夫	妻

従来の日本におけるフェミニズムが唱える家父長制についての議論では、財産形成・所有権限の方ばかりに目が行って、財産管理・使用権限について注意が行き届いていない。後者の存在に注意すれば、日本の家族＝家父長制という結論は、絶対出ないはずである。
ただ収入を入れるだけで、自由に使うことができない（再配分の権限を持たないこと。）、小遣いを、妻に対して、頭を下げて、もらわないといけない夫（彼は、妻の管理下で、下請けの給与稼ぎ作業に従事する。）よりも、最終的な使用権限を持っている妻の方が上位である。（妻は、収入の再配分の権限を持つ。）
日本における、「稼ぎ手（一家の大黒柱）がえらい、強い」コール、大合唱は、財産管理権限を握っている＝本当に力を持っている

のが、妻（女性）であることを隠蔽するため、女性によって、意図的に行われていること。隠蔽することで、男性の自尊心を高い状態に保持し、自分たちに有用な働き（強い盾としての防衛者の役割、給与を稼ぐ労働者としての役割）をさせるのが目的である。「男性上位」を信じ込む男性は、女性によって、担がれているのである。
妻に対していろいろ威張って命令するが、妻がそばにいないと何もできない夫、家の中の物がどこにあるか、全て妻に管理されているため、全く分からない夫は、妻によって生殺与奪の権限を握られており、実際には、弱者である。
家計管理権限を、なぜ日本の女性が取れたか？日本のように稲作農耕栽培行動が主流の社会では、態度のウェットさを要求される農耕活動により適するのは女性であり、環境適応力・環境合致度が、男性よりも強いのが原因と考えられる。
日本フェミニズムは、都合の悪い事実を隠す。女性が財布の紐を握ることなど、無視する。臭い物にふたをする、こうした姿勢は改められなければならない。
（初出2000年07月）

日本女性と国際標準

フェミニズムは、男性優位社会での女性解放をうたったものである。
これを、日本社会へと強引に当てはめた結果、
「日本は、男社会である（見かけはそうかもしれないが、きちんと調べれば、実態は違うことがすぐ分かるはずである。）こと。したがって、男性に匹敵することの実現には、男性的にならなければならない。
と考え、女性らしさを捨てようとしたこと。
この際、女性は、誤りを犯そうとしている。
日本は、本当は、女性優位社会＝「女社会」である。日本社会は女々しい。もともと日本の男性は、男性的でないのに、自分は男性的だと勝手に思い込んでいる。
女性は、男性的になろうとすることで、自ら、女性優位という強さの基盤を捨てて、「女社会」を壊そうとしていること。
日本女性が男性に伍するには、ドライ化＝男性化しようとしても限界がある。欧米女性の二の舞になってしまうこと。
女性の本質を生かした方が、強いのではないか。
ウェットさ＝女性らしさを保ったままで、職場・職域進出すればよいのではないか。

日本の職場はもともとウェットなのだから、進出は十分可能なはずであること。（日本の職場には、女々しい性格のままで適合できること。）
現代日本社会は、女性も含めて、ドライで男性の強い欧米社会の規範を真似ている。
筆者が行った、ドライ・ウェットな心理テスト調査結果では、日本女性は、「自分の性格に当てはまるのはどちらですか？」という問いに対して、ドライな項目の方を選択することで、自らの女々しさを否定している。
これは、男性的な欧米先進国に習おうとしたためである。真似すべき成功の前例である、先進国という権威に弱いこと。
日本社会において、ウェットさが否定されることにより、本当は、本来ウェットであるはずの、女性の立場を弱くしている。
見かけは、Lady First ~ 男女平等・同権なので、女性の立場を強くしているように見えるが。
女性は、伝統的な日本社会のように、ウェットな社会では、水を得た魚のように、主流派コースを歩めるはずである。自分たちのペースで社会を引っ張れるはずであること。
女らしさは、欧米主導の国際標準から外れた行動様式である。
日本女性は、自らの女らしさ（女々しさ）= ウェットな行動様式を否定し、国際標準のドライな行動様式に合わせて、男らしくなろうとしていること。しかし、地金がウェットなので、ドライになりきるのは無理であり、「擬似ドライ化」するにとどまる。
日本女性は、国際標準の行動様式を、ドライ = 男性的 = 欧米的と考え、それに権威主義的に同調する。日本も先進国の仲間入りをした以上、当然ドライであるべきと考える。これは、伝統的な、脱亜入欧の考えに通ずる。ドライな社会向けの欧米理論であるフェミニズムを日本に当てはめて、何ら問題を感じないこと。国際標準の理論だから、ぜひ日本にも当てはめるべきと考える。それが正しい研究だと、思い込んでいる。
国際標準の行動様式を、ドライ = 男性的と捉えることは、世界的に、男性優位 = 家父長制が標準だ、と考えることに通ずる。家父長制およびそれを告発するフェミニズムを世界標準とみなし、日本社会へと、機械的に、「上から」権威主義的に導入しよう、合わせようとすること。日本が世界標準に追いついた、とか、標準に合わせている、という考えから、日本は家父長制社会だとする。日本社会は、前近代 = 封建制状態では、その性質はウェット = 女性的で、国際標準からは外れているにもかかわらず、日本のフェミニズムでは、家父長制だとされている。国際標準に合っていても、外れていても、日本社会 = 家父長制という結論を導き出している。伝統（前

近代、封建）日本的＝ウェット＝女性的という結びつきに気づいていないためと考えられること。
日本社会についての国際標準から外れた結論（日本的＝女性的＝ウェット）は、いずれ標準に追いつくと考えるなどして無視するか、国際標準に合わせて曲解する。欧米の研究結果を直輸入し、それにそぐわぬ現象を、無視・曲解するか、日本社会の現象を、欧米理論へと強引に当てはめること。
例えば、女性が握る家計管理の権限（財布を握ること）には、全く言及しようとせず、給与・収入を自らは稼がない点に固執し、無給の家事労働者の側面のみを強調して、女が弱い証拠とする。
あるいは、女性による育児権限の独占については、父親が育児を手伝わないことを、女性への育児労働押し付けとして、自ら進んで育児権限を放棄しようとしている。子供を自分のコントロール・支配下に置くことができる、とか、自分の言うことを聞く子供を作り出し、自分が生き続ける限り支配することができる、というのは、育児権限を持つことの大きな役得であるが、それを自ら放棄しようとしている。これは、権力論からみれば、自ら手に入れた権力を、進んで放棄する、という馬鹿げた行為を平気で行うことである。
ないし、男尊女卑についても、見かけ上の、行動面における男性優先を、その本質である、弱者である男性の保護、男性の人権保障、弱者優先（年寄りにバスの座席を譲るのと同じ発想）という点に気づくことなく、男性による女性支配の現れと決めつけること。
女らしさを世界標準とすることが、フェミニズムの最終目標となるべきである。そのためには、欧米のドライな行動様式は、手本とすべきでない。
（初出2000年07月）

日本社会における母性の充満

日本社会には、母性が充満しているとされる。これに対して、日本の女性学者やフェミニストたちは、母性的であることを、いけないこととして、攻撃する。
しかし、少し考えると、以下のことが言える。
・母性は、女性の、自分の子供に対する態度であり、女性性の一部である。
・日本では、女性が、男性を、自分の子供のように慈しむ態度が広く見られる。
・日本の女性は、母親としての地位は、子供の役回りを演じる男性よりも強大である。

これらの事象は、日本社会における、女性優位・優勢の証拠であるはずなのに、日本の女性学者やフェミニストたちは、なぜかそのことに気づこうとしない。彼らは、女権拡張を目指しているはずであり、母性の社会への充満は、本来望ましい事象のはずなのである。論者が、独身者だったり、若い未婚の女性が多いことが原因なのではないかと思われるが、明らかにミスリードとなっているように思われる。
（初出2000年07月）

女性と社会主義、共産主義

女性には、規制、協調、和合、集団本位の社会主義、共産主義が適合する。

男性には、個人本位の自由主義が適合する。

女性が強い日本村社会は、見かけこそ欧米流の個人主義、自由主義に追随しているものの、実際は、社会主義的、共産主義的である。
（初出 2011年8月）

日本主婦論争に欠けている視点

既存の日本の主婦論争の視点は、。
(1)主婦＝無給の家事労働者、という視点ばかりであること。
家庭の管理者である、男性の生活を管理している、という視点や自覚に欠けていること。
社会で、女性の生活管理下で働く、労働者の役割を担っているのは、男性の方である。
主婦は、むしろ家庭内管理職として、男性の上に立って、その生活ぶりを指示・コントロールする役割を担っている。

女性が、家庭における、生活管理者 Life Managerの立場にあるという視点に欠けている。
無給という言葉にふさわしいのは、稼いだ給料をそのまま主婦の手元に直行させて、自分では配分の権限がない、男性の方ではないか？。
(2)収入を得る場＝職場中心の視点ばかりであること。
「社会進出」の言葉が示すように、家庭を、社会に含めて考えようとしない。
職場を含めた社会の総合的な母艦としての役割を果たす、家庭中心の視点が、なぜか取れない。
(3)家庭の財産の名目的所有者（名義）が誰か、という視点ばかりである。
夫への小遣い額決定など、自分が、強大な家計管理権限を持っている＝家庭の財産の実質的な所有者であることに、目が向いていない。
(4)誰が収入の稼ぎ手か、という視点ばかりである。
彼女たちは、稼ぐのが誰かという方にばかり注意が行って、使う権限を自分たちが独占していることに、ちっとも気づいていない。
彼女たちは、自分たちに欠けている視点に、。
(1)気づこうとしなかった、気づくことを巧妙に避けたこと。気づいてしまうと、日本社会が、自分たちが導入しようとする、フェミニズム理論通りにうまく説明できなくなる。
(2)気づかなかったこと。頭が、欧米理論を消化・吸収することで手一杯になっていて、日本社会の現実に対して、無知であった。
（初出2000年07月）

日本のフェミニズムの隠れた策略

日本のフェミニズムにおいては、男性を、女性を支配する家父長と見なし、日本は典型的な家父長制社会、男社会だと必死になって主張がなされている。
しかし、この日本におけるフェミニズムの主張は、実際には、女性的な性格を持つ日本社会を支配する側に回っている日本女性による、自らの保身、退嬰的体質を温存しつつ日本社会を実効支配するための、巧妙な「支配責任」逃れの口上である、という隠れた側面がある。
女性の本質は、自ら危険な目に遭うことが怖くてたまらず、なるべく男性に危険な役回りを押しつけて、自分は安全、保身が図られる

奥座敷で、のうのうと楽をして暮らそう、とか、あえて既存秩序に身の危険を呈して刃向かい、自力で新秩序を打ち立てるリスクを取るよりも、既存秩序にそのまま柔軟に適応し、既存秩序の教えを、前例、しきたりとして何よりも重んじ、既存秩序を維持した中で自らの安全、快適な居場所を上手に確保しよう、という、保身、安全第一、リスク回避、退嬰性のかたまりである。
女性が、こうした保身、リスク回避、退嬰性の本質を保持しながら、強者として社会を実効支配するには、何らかの形で「支配すれども責任取らず、リスクを取らず」の「無責任支配」「無リスク支配」を実現する必要がある。そのためには、自分たちの支配責任、支配に伴うリスクを何らかの形で逃れたり、誰か他の人たちに押しつけたりする必要がある。人々は、支配者と目される人に対して生活の不満をぶつけたり、政策失敗時の責任を追及したりするため、支配者は批判の矢面に何かと立ちやすく、リスキーなのである。
そのための有効な手段が、ひたすら男性を支配者扱いして、自分たち女性は、男性に支配されている弱者ですと、黄色い叫び声をキャアキャアとヒステリックにひっきりなしに上げて、男性をひたすら支配者として責任を押しつけて責め立てる、支配責任を無理矢理でっち上げて、男性に負わせることである。あるいは、自分たち女性を強者とみなす母権制の存在をそもそも認めない、抹殺、無視することであること。日本のフェミニズムの主張が、まさにこれらにあてはまるのである。
日本女性は、自分たちは支配者でない、男性が支配者だと大声で主張し続けることで、日本社会を実効支配しながら、それに伴う責任は男性に負わせることにいともたやすく成功しているのである。そうすることで自分たちは批判の矢面に立たない、奥まった安全なところに止まりながら、社会を実効支配できるのである。日本のフェミニズムは、日本の女性たちによる日本社会支配の手っ取り早く高い効果が見込めるおいしい道具なのである。
そういう日本女性にとって、日本は母権制社会であるという筆者の主張は、寝た子を起こす厄介な存在であり、彼女たちは、今後も無視を決め込むと予想される。
また、一方的に責任を負わされた、本来無力なはずの日本男性も、彼女らの主張により、あたかも自分が強くなった、支配者になったように錯覚して快い気持ちになり、やたらと威張るようになっているのである。そうした状態で、あなたたちは本当の支配者でないと指摘されるのは、面子を潰された気分になり、受け入れがたいことであろう。
そういう日本男性にとって、日本は母権制社会であるという筆者の主張は、支配者扱いされていい気分に浸っているのを打ち壊す不快

な存在であり、彼らも、今後も無視を決め込むと予想される。
（初出2009年5月）

専業主婦を求めて

１．
仕事で家を離れる女性は、家庭内での発言力・支配力が低下する。男性にとっては本来喜ばしいことのはずなのに、妻には家にいて欲しいとする男性が多いのはなぜか？女性への依頼心がそうさせる。女性を、母親がわりにして頼ろうとすること。本来ドライであるべき男性の中に、ウェットさや女々しさが蔓延している。
女性は、伝統的な性役割からの解放を唱えている。伝統的な性役割では、自分たちの支配力が強いにも関わらずである。その理由は、ライフコースに従って変化する。
(1)結婚してからしばらくの間は、特に育児の面で、負わされる負担が大きい。とても忙しいこと。子供の都合に合わせて、自分のしたいことを我慢しなければならないこと。家事の面でも、家電製品の導入など省力化が進んでいない頃は、大変だった。
この場合、女性が。
(a)家政面での主導権を引き続き維持しつつ、握りつつ、補助労働力として、男性に期待するのか？
(b)家政面での主導権も、夫婦で分担する。
によって、男性の取るべき態度が変わってくる。補助労働力としてこき使われるのは、拒否すべきである。できるだけ、男女平等の主導権分配を行うべきであること。
(2)結婚して大分経って、子育てが一段落し、家電製品の導入で家事の省力化が進むと、ひまになり、生きがいがなくなる。子育て後は、やりがいがなく、時間の空白ができやすい。専業主婦が価値ある職業と映らなくなる。専業主婦以外の職業をメインにしてみたくなること。男性の占める職域に進出する機会が欲しくなる。
日本の会社・官庁は、もともと、女性向きと言えるウェットな雰囲気の職場なので、女性は、本来、結構有利なはずである。
日本の組織のウェットさならではの問題点は、。
同質性や閉鎖性が高く、最初に白紙状態で入った者＝新卒者にのみ心を許し、組織風土を覚え込ませること。（白装束を着る嫁入りと同じこと。）組織の外部に一度去った者や他の組織に属していた者が、もう一度入り込むのが難しい。女性の場合、子育てに忙しく、就業にブランクができてしまうので、いったん組織を去る必要があるが、組織の閉鎖性は、これと矛盾する。育児休業制度は、組織に

連続雇用してもらうことを前提としたものであり、組織内でのキャリアアップを目指すならば、不十分でも、耐えなければいけないのが現状である。
男性は、自分自身を解放したければ、女性の職場での中途採用への道を開くべきである。
ちなみに、妻が働きに出るのをいやがる夫は、。
(1)自分の稼ぎが少ない、と周囲に映るのが、自分の能力を否定されるようで面白くない。
(2)妻に、自分の家を守っていてもらわないと、不安であること。
(3)自分が帰宅したときに、温かく出迎えてほしい。
といった欲求を持っていること。
しかし、それでは、妻に、家計管理や子供の教育の権限を、いつまでも握られ続けて、被支配者の立場に甘んじることになる。
自分が家を空ける時間が長いため、家族に対する影響力が少なくなる。
子供たちから、じゃまに扱われ、疎外されること。
２．
女性に対する職場での性差別の背景には、女性に家庭にとどまってもらいたいという、「専業主婦願望」とも言うべき、男性側の欲求があると考えられる。
現状を変動させようとする側（女性）は、それなりの、変動しない方向への反発力を受ける。
女性が職場進出してしまうと、男性は、家庭のみならず、職場でも、女性に支配されかねない。男性は、自分たちの居場所がなくなるのを恐れて、女性の進出に反発する。
日本の男性は、現状では、自分の存在理由が、給与を稼ぐ、収入をもたらすことにのみあること。（収入の管理、使用用途別の予算配分などは、女性の手に握られてしまっていること。）女性が進出すると、男性は、自分の存在理由を失ってしまう。
職場での性差別は、男尊女卑で、女を見下して、組織内の重要な地位につかせようとしない姿勢ももちろんあること。（それ自身、日本社会において女性の方が力が強いという実勢を反映しない、空虚な態度である。）
しかし、性差別は、実際のところ、「家庭内管理職待望論」とも呼べる、女性に家庭に入ってもらって自分の事を、自分の母親のように管理してもらわないと不安である、それには、女性に家庭に手っとり早く入ってもらうための方策として、職場に残ってもいいことはないよと女性に示せばよい、という考えによって引き起こされている面が大きい。
そういう点では、職場での性差別は、日本男性の、女性を母親代わ

りにして依存しようとする心と表裏一体のものであり、性差別をなくすには、男性の女性への依頼心をなくし、自立した存在にさせることが必要である。女性側でも、男性（自分の息子など）から自分への依存心をなくし生活面で自立させることが、女性自身の職場への進出を早めることにもっと気づくべきである。そういう点では、女性の職場進出の進展の条件は、日本の家庭における女性（母性）による男性支配を終わらせること＝従来の母性的主婦観の解体でもある、と言える。
（初出2000年07月）

日本のフェミニズムを批判すること。

〔１．
現代の日本のフェミニストの主張は、以下のような問題点を抱えていると考えられる。
1)女性が、男性より、必ず恒常的に弱い、とする偏見がある。19世紀に欧米で出た説である「女性の世界史的敗北（母権→父権への全世界的移行）を、新しい資料と照合せず、無検証のまま、定説として信じ込んでいること。もともとこの母権→父権全面移行説は、遊牧、牧畜主体の父権社会であるヨーロッパ人が、自分たちの社会が父権中心であることを正当化するために提唱したものである。この説の提唱に当たって、東アジアの稲作農耕社会の社会心理的な実態（集団主義などウェット＝女性的であること。）を、提唱者のBachofenやEngelsらが熟知していたとは考えにくい。母権→父権全面移行説の提唱者たちは、ほとんどヨーロッパとその周辺のみを見て母権→父権の全世界における全面移行説を強引に唱えているふしがあるのに、日本のフェミニストたちは、その欠陥に気付かずに、理論の日本社会への直輸入をしているのである。
2)男女の心理的性差についての研究成果を、考慮に入れていないこと。社会のあり方（ドライ/ウェットなど）と、心理的性差のあり方との照合を行わないまま、女性が優位の社会は存在しないと断定している。日本社会については、「日本的＝ウェット＝女性的」という相関が成立する。日本では、女性が男性よりも勢力が強いからこそ、「日本的＝女性的」となるのである。日本社会は、事実上、女性優位の社会という見方が成り立つのであって、このことは、日本のフェミニズムの主張とは相いれない。
3a)再生産過程についている専業主婦を、生産過程についている職業人より劣ったものとみなす偏見がある。
3b)「男は仕事、女は家庭」といった性別分業を、一方的な男性優

位＝家父長制と見なして、性差別と批判する、過ちを犯している。
性別分業は、男女間で、生物学的貴重性が異なる以上、女性が強い社会でも、起こりうること。（男性は危険な外回りの仕事に従事し、女性は安全な内回りの家庭を主な暮らしの場とする、など。）
男女どちらが優勢かは、性別分業が存在するということだけでは決まらない。男女どちらが、社会において、管理者的な重要な役割を果たしているかにより決まる。日本では、女性が男性の生活管理者として、家計管理権限などを全面的に掌握しているので、女性の方が優勢と考えられること。（たとえ男性が首相だったとしても、その妻は、「首相の生活管理者」として、首相よりもさらに1ランク上の存在として君臨している。）
3c)日本では、男性が稼いだ給与の実質的な管理権限を持つのは女性なのに、その事実を無視して、名目的な所有名義のみにこだわっている。
4a)母性の優越（母子癒着）を、女性による社会支配と捉える視点に欠けていること。
4b)女性主導による育児を、本来なら社会の女性化＝女性優位を実現するものとして喜ぶべきなのに、「社会（職場）進出のじゃま」としてnegativeに捉えていること。（それによって、男性の育児への介入機会が増加する可能性が増える。それは、男性をむしろ利することになる。）
5)日本のフェミニズム・女性学自体が、「女性が弱い、差別されている」と大合唱することで、日本の男性を故意に強く見せようとする日本女性の作為や作戦や策略の現れであること。
男性を強く見せるのは、男性を自分たちを守る強い盾として使おうとする意識の現れであり、日本男性の強さは、そうした女性の意識に支えられて初めて成り立つ、「虚像（虚勢に基づくもの）」であること。日本社会の見かけ上の主人（公）である男性は、本当の主人（真の主人）には、現状のウェット＝女性的な日本社会の体制の下では、永久になれない。ウェットな日本社会の本当（実際）の主人（公）は女性である。
6)女性の社会進出を阻む男性を攻撃する際に、男性側の心理を考慮していないこと。今まで男性が主に占めてきた職場に、自分とは生理的・心理的に異質な者（女性）が、新たに自分の周囲に進出してくるのを、男性側が、不愉快に思い、阻もうとするのは、人間の心理として妥当である。
〔２．
従来、「日本の」フェミニズムで主張されてきたことは、間違っているのではないか？。
欧米で主張されているフェミニズムには正当な根拠が認められる。

（それは、正しい。）しかし、それをそのまま社会のあり方が異なる日本に直輸入して、機械的に当てはめようとするのは、正しくない。
伝統的な日本社会は、むしろ、女性向きにできており、その中で不利益をこうむっているのは、男性の方である可能性が高い（日本人の国民性はウェット＝女性的な方向に偏っている、日本の家庭の財務を管理するのは女性である、．．．といったように、女性が実質的に社会を支配している。）こと。
同じ男女差別でも、欧米と日本とでは、その性質が異なる。欧米では女性の立場が本当に弱いのに対して、日本のそれは、男性に生活面で依存されることによる負担を、女性が一方的に担わされる、というものである。。（男性は、女性向き社会に対して、不適合を起こす。）日本の男女差別は、むしろ女性の立場が強いために起きている。（女性の立場は、男性を上回る。）
「日本」のフェミニストは、こうした現実の（女性が強い。）日本社会のあり方を、新たな枠組みで捉え直す試みを行うことで、自らが犯した、欧米理論の日本社会への強制的当てはめによる誤りを認めるべきであること。（日本における、男女の力関係について、男性が強いという、誤った説を流したこと。それを認めるべきこと。）
現在の、欧米（遊牧系社会）生まれの理論を、機械的に日本社会（農耕社会）に当てはめるだけの、日本のフェミニズムは、以下のような視点を取り入れて、新たな段階に脱皮を図るべきである。
(1)女性が弱いと見なす、欧米直輸入の部分を全て取り外し、削除する。そうして、女性が強いことを前提とした理論構成に組み換えるべきである。例えば、女性が強い社会において、「強者の負担」が不合理なほど重いので、男性の、自分たちのところへ寄り掛かってくる度合いを、もう少し減らしてもらうには、男性にどのような形で協力を求めていけばよいかを、議論するなどである。
(2)強いのは見かけだけで、本当は、女性よりも立場が弱い、男性への配慮をもっと示すべきである。単純に、（欧米フェミニストのように）男性を強者と見なして攻撃するだけでは、日本の男性は、違和感を感じて心を閉ざしたままであろう。
(3)男女平等を説くのなら、女性に対して、家計管理権限の男性との共有（今までみたいに男性が稼いだ収入の全額を男性から取り上げて、小遣いだけを渡すやり方の廃止。）の他、男性も育児に積極的に参加させて、女性向けに大きく偏った国民性をより男性向きの形に変化させること、などを、女性の側も受け入れるよう説得するべきであろう。
（初出1999年08月)

日本のフェミニズムの主張には無理がある。

従来の日本のフェミニズムの主張が、無理があることを以下に示す。

女性の経済的自立をうたうことは、職場で女性が男性社員化を目指すことになる。しかし、出産とかで男性社員並みになるのは無理だと判明し、辞めてしまう。

女性管理職、幹部の増大は、女性幹部が責任を取らない、無責任体制を生じさせてしまい、組織崩壊につながる。

セクハラの根絶は、男女のつながりが出来にくくなる副作用があり、恋愛の減少や、少子化につながる。

（初出 2013年10月）

日本における女性の「社会進出」について

１．はじめに（家庭は「社会」ではないのか？。）
現在言われている、女性の「社会進出」とは、従来、家庭に囚われている女性を、そこから解放して、男性が占有してきた「社会」（官庁、企業．．．といった家庭以外の場所）に進出させる、ことを指すものと思われること。
まず、女性の「社会進出」を唱える人たちは、家庭を社会の一部と見なしていない節がある。
家庭は、誰もがそこから出かけ、仕事などをしたあとで、必ず帰着するところの、社会の「空母」のような意味合いを持ち、社会の根幹部分を形成するといえること。その意味で、家庭を社会とを別々に捉える、「社会進出」という考え方は、誤っていると思われる。
家庭を支配するものこそが、社会全体の根本を支配すると言ってもよいのである。
２．
なぜ、日本の女性が家庭に囚われてきたか？女性が、家庭に縛られる現象がなぜ起きているか？これについては、(1)生物学的な見地に

由来する問題と、(2)日本など、農耕社会固有の問題とに分けて考えるべきである。
(1)まず、生物学的側面について考えること。女性の方が、男性よりも、担うところの生殖細胞（卵子）の数が少なく、作りがリッチであり、生物学的貴重性が高い。その点、人間の種としての存続をはかるためにも、女性は、貴重性が低い男性よりも、より安全が確保されたところに常時とどまり続ける必要があった。それが、「巣」「内」としての家庭であった。一方、家庭から切り離されたところの職場は、より危険性の高い「現場」「外」の世界であり、男性により向いた場所であった。
しかるに最近は、ほとんどの職場では、安全性が高くなった。コンピュータ化が進んで、危険な作業は、みな機械が行い、人間は安全なところにいたままで、職務を遂行できるようになった。その結果、職場は、生物学的貴重性の低い男性が占有する必要がなくなってきた。女性の「職場進出」は、十分可能な状態にあると考えられる。
ただし、現状では、職場は、あくまで、日中、家庭から、出かけていって、作業をするだけの場所に限定されており、職場で働いた人間は、家庭に再び帰って、食事をする、寝る．．などのことをする必要がある。
今後は、職場にも、家庭同様の「巣」としての機能を持たせること。（一日中占有することのできる、睡眠や食事を取ったりできる、ないし育児の設備が整っている、自分専用の安全な居場所。）すなわち家庭と職場との同一化が、恒常的に安全な場所を求める女性が、職場に完全に進出する根本的な条件となる、と考えられる。
(2)次に、農耕社会固有の問題について考えること。家庭は、社会の基盤部分を支配する「空母」としての役割を担っていること。日本のような農耕社会においては、そこは、女性が支配している。従来、外働きしていた日本の男性は、女性に対して、心理的に依存して（甘えて）おり、母親代わりの女性に家庭にいてもらわないと不安であること。そのため、女性が家庭から外に出ることに反対する。
したがって、日本社会において、女性がスムーズに「社会進出」するには、家庭が男性による心理的依存の場である状態を止めればよい。具体的には、女性が、男性の母親役から降りればよいのである。より根本的には、男性が女性に心理的に依存する元となる、女性による男性支配をやめて、男性を自立させることが必要である。これには、例えば、育児時に、母親や祖母が子供（特に息子）に、心理的な一体感をあまた持たせないように、自分にあまりなつきすぎないように、甘えないようにすることが必要と考えられる。

日本の男性は、フルタイムの過酷な条件で働けるが、女性は、家事・育児があるからパートタイムでないと働けない、それゆえ、社会進出が遅れているとする見方があるが、これも、家庭において、男性が女性に対して、心理上、全面的に依存しており、それを女性も許容しているため起きる現象である。すなわち、男性が家庭を省みないで働けるのは、女性に、家庭の全てを、心理的に任せているからである。より正確には、家庭は、女性に全面的に支配されているので、任せざるを得ないからである。男性がフルタイムで勤務しようとする強迫感から逃れさせるには、女性が家庭を全面的に支配する状態を改め、男性にも、家庭に心理的な居場所を設けてあげる必要がある。（心理的な居場所とは、自分の存在を明確化・肯定する場。）
３．
日本のフェミニズムでは、女性が家庭に縛りつけられることは、欧米の基準から見て、遅れている、として否定するする考え方が強い。しかし、女性が、家庭に留まることを否定すること自体、欧米的な家庭観を、強引に日本社会の家庭に当てはめようとするものであること。（欧米的な家庭観では、家庭が男性主導のものであり、女性はそこから出たがっている。）（日本的な家庭観では、家庭が女性主導のものである。女性はそこから出る必然性は特にない。むしろ女性にとっては、皆を心理的に支配できて居心地がよい。）これは、日本のフェミニストの、浅慮による日本社会の現状把握失敗の現れである。なぜならば、家庭こそが、日本において、女性によって、社会全体を支配するための効果的道具として使われてきたことに気づいていないからである。
社会のあり方を職場中心に見る、日本のフェミニズムは、日本社会が男性中心に動いているとする、誤った見方に囚われている。これは、この説を見て、「自分も『社会進出』しなければ」と考える女性による、家庭の放棄をもたらし、かえって家庭を、男性を含めた社会全体の管理・コントロールの基地として利用して来た、女性の力を、皮肉にも弱めていること。（家庭は、社会を支配する力の源である。）（それは、日本男性にとっては、都合のよい事態である。）
欧米の女性にとっては、家庭は自分たちの居場所ではない（男性に支配されている場であり、女性たちはそこから疎外されている。）から、家庭からの脱出を求めたこと。日本では、家庭は女性の支配する場であり、男性はそこから疎外されているからこそ、家庭の外である職場に、逃げ出して、そこに安住の地を求めているのである。日本における女性の職場進出は、男性にとって安住の地を脅かされる行為に他ならないこと。（欧米の男性にとっては、そうでは

ない。彼らは、ちゃんと家庭を押さえている。彼らは、家庭を、自らの支配下に置いている。）
女性の「社会進出」は、日本の男性にとっては、社会のあり方全般を女性的なものに支配される中で、自尊心（「一家の経済を支えるのは私だ。」．．）を保つためのの最後の拠り所・牙城を切り崩される由々しき事態に他ならないこと。女性の「社会進出」をスムーズに行われるようにするには、職場が、男性にとって、自尊心を保つ最後の切り札として働く性格をなくすことが必要である。
女性が従来占有して来た特権を、男性にも明示的に開放すること。（特権とは、家計管理による収入・支出決定の権限、育児権限などである。)それが、男性が、官庁・企業などの組織における地位に強迫的に固執する心理から解放させる、一番の手であること。（男性が、女性を排除しようとする心理。そこから、男性を解放させること。）日本において、女性の「社会進出」を進めるには、こうした男性の「全面的に女性に支配される」という恐怖心を取り除くことが必要である。
４．
女性の「社会進出」の遅れと関連して、女性が組織（官庁、企業．．）で高い地位に就くことが少ないことが、「男性が女性を支配している」ことの恰好の証拠として、日本のフェミニズムでは、取り上げられている。
なぜ、女性が高い地位に就かないかについては、(1)生物学的側面と、(2)農耕社会特有の「女性が男性を持ち上げる」側面の２つから考えることができる。
(1)高い地位への就任を、組織において、役職に就くことと捉えるならば、高い地位に就くことは、失敗したときの責任を取らされる度合いがそれだけ重くなることを意味する。これは、成功している時はよいが、失敗時には、真先に批判の矢面に立たされることになる。責任を取るには、社会的な制裁（懲戒処分、刑罰、悪い風評．．）を受け入れなければならないが、その際、自らの生活が脅かされる危険が大きくなる。これは、生物学的に貴重な、それゆえ、自らの保身に敏感な女性には、耐えがたい事態である、と考えられる。女性が大事にする、生活上の「安全性」が保たれないのである。男性は、その点、自らの保身に、女性ほど敏感ではないため、役職について、失敗した結果、責任を取ることにも平気である、と考えられる。
あるいは、女性は、男性に比べて、人間関係の維持を重要課題とするが、地位相応の業務に失敗して、周囲の、自分が依存している皆から、後ろ指を指される状態（疎外される状態）が、耐えられない。それゆえ、高い地位を、そういう事態も受け入れる男性により

任せるようになる、とも考えられる。
自ら直接は高い地位には就かず、男性に就かせて、その男性を、自分を母親代わりにさせるなどして、自分に心理的に依存させることで、社会全体を間接的に支配するのが、伝統的な、女性による男性支配、社会支配のやり方である、と考えられる。これならば、社会を支配しつつ、なおかつ責任を取る事態からは免れることができる。
(2)女性の地位の低さは、「男尊女卑」がもたらしている現象でもある。日本のような農耕社会では、社会が女性のペースで動いている。（社会は、女性向けにできている。）男性の地位は女性に比べて低い。これをそのまま放置すると、男性は、「自尊心」をなくし、やる気をなくす。（仕事をしないこと。）こと。
そこで、農耕社会では、男性を、組織において、肩書のある「高い」地位に優先的に就かせて、「自尊心」を満足させ、仕事に打ち込むようにしむけることが必要になる。女性が就く地位は、男性の補助となり、低めになること。（男性を立てること。）これは、男性の地位が実は低いことを自覚させないことで、男性の力を引き出すために必要である。働けば、自分の地位が高くなると男性に思わせることが、社会の発展の原動力となる。この場合、高い地位は、あくまで、見かけだけのものである（本当に社会をコントロールしているのは、女性である。）が、そのことを隠して、男性を「偉い！」とほめそやすことにより、男性は、女性が支配する社会の中で、「自尊心」を何とか保持できる。
５．
女性が自ら社会的に高い地位につくことを積極的に追求するようにするには、失敗時に取らなくてはいけない責任を小さくすることが求められる。失敗時に、その責任を上下左右の地位へと分散させること、責任を周囲との連帯責任とすることで、本人の取らなくてはいけない責任を軽くすることが必要である。
例えば、女性が責任者のプロジェクトチームで作業を進めている場合、作業が失敗したら、従来のように上司（女性）一人が責任を取るのではなく、チーム員全体で責任を取るようにする。（上司に責任が集中することを避けること。）責任をチーム員各員に分散させる。そういった仕組みを作る必要がある。そうすることで、上司の女性の取らなくてはいけない責任が軽くなり、責任を取ることへの心理的圧力が少なくなるため、女性は、より上司の立場に気軽に立つことができるようになり、高い地位につきたがるようになると考えられる。
また、日本のような農耕社会では、女性が、「男尊女卑」でわざわざ男性を心理的に持ち上げて仕事をさせることをやめ、自分で職場

進出を果たすことで、今よりも男性が頼りなくなり、自分に対してより依存的になってしまうことを受容しつつ、自力で、職場での仕事と育児などを両立させていく方向に進むことが考えられる。その際は、女性が、部下の男性に対して、母親のように接することで、日本男性の持つ母親的な存在への依頼心を満足させ、男性はスムーズに上司の座を女性に譲ると考えられる。
なお、従来、日本男性が女性に対して生活面で依存的で、食事、洗濯などいろいろ世話を求めることが、職場で働き、高い地位を追求しようとする女性の負担を一方的に増している点は見逃せない。対策としては、例えば、男性に対して、従来のような「妻」「嫁」ではなく、「母親」の態度を取ることで、男性をスムーズに自分に従わせることが考えられる。つまり男性を自分の配下にある「子供」のように扱って、男性自身がそうした自分の世話を自分でやらせる方向へと、男性の母親のような態度を取って絶えず「しつける」「命令する」のである。あるいは、男性が必要とする世話を、家庭外にアウトソーシングすることが考えられる。食事は、コンビニエンスストアの弁当をあてがうといった対処をするのである。その際は、男性の健康をきちんと気をつけていることを男性に対して示すために、例えば、事前に、コンビニ弁当に栄養士の監修が付いていることが当たり前となるような運動をコンビニエンスストアや外食産業などに対して起こすべきであろう。
（初出1998年08月）

日本女性の経済的自立について

日本において、女性の経済的自立が達成されていないと言われてきた。収入を得るのが専ら男性で、女性は収入を自ら得る機会が閉ざされており、その点女性は差別されている、とされてきた。こと。
しかし、実際には、必ずしも収入を得ることが、経済的自立につながらないと言えるのではないか？いくら、収入を得る力があっても、その最終的な使い道を自分で決められず、管理者を他において、使い道の決定をその管理者にゆだねているのであれば、彼は、管理者に経済的に従属しており、自立していない、と考えられないであろうか？。
日本の女性は、自分は収入を得なくても、収入供給源となる男性の動作をコントロールする主体として現れることにより、家庭における経済活動の主体であることで、自立を果たしているのではないか？。
日本の女性は、収入供給者たる男性に対するコントロールを、隅々

まで行き届かせている、と考えられる。日本の女性は、収入供給者のメンテナンス（世話）~収入供給者への指示（よく働いてきなさいと命令）を行う管理者（収入管理者、家庭内管理職）としての役割を果たしていること。男性は自分が稼いできた収入を管理する権限を持ち合わせていない。給料袋の中身は手を付けずに女性のもとに直行する。そういう意味では、家庭における経済行為の主体は、決定権を持つ女性であり、その主体たる女性こそが、経済的に自立しているといえる。
女性（妻）から小遣いを配給されること。（家計上の最終決定権を持たないこと。）男性（夫）は、経済的には女性の従属者であり、自立しているとは言えない。（男性は、女性の配分決定に従うだけである。）
以上の女性と男性との関係は、大工道具と棟梁との関係と同じであること。大工道具が、男性に当たること。棟梁が、女性に当たること。その関係と同じであること。経済的主体は、管理者たる棟梁であり、大工道具はその従属物。（自らは経済的に主体性を持てない。）これを男女の関係に当てはめて考えると、経済的主体は、管理者である女性であり、男性はその従属物に過ぎないこと。（主体性がないこと。）そういうことになること。ただし、大工道具がないと棟梁は生活の手段を奪われるため、生活できなくなる恐れがあり、その意味で、道具に頼りきることはリスキーである。それと同様に、収入を生み出す打出の小槌である男性がいなくなると、女性は、収入をもたらしてくれる生活の手段がなくなるため、管理者としての手腕がいくらあったとしても、そのままでは自活できなくなる。
収入供給者たる男性が都合で（死別、離婚など）いなくなったときに自活できるようにすることを求めるのが、日本における女性のいわゆる「経済的自立」への動機である。
こうした、女性の「経済的自立」は、あくまで、収入保険としての意味合いが強い。たいていの場合は、男性は定年までは生きつづけるので、収入は確保されることがほとんどであり、女性の収入管理者としての地位は安泰である。家庭に収入を入れる者がいる限り、女性は、収入の使い道を最終的に決定する家計管理者としての地位を確保できるので、自ら収入を得ることの必要ないしプレッシャーは弱い。収入供給者側の世界への進出は進みにくい。これが、日本で女性のいわゆる社会進出が遅れる一つの理由であると考えられる。
収入供給者（男性）のたまり場たる官庁・企業における生存環境が厳しいのは、家庭における管理者（女性）による収奪が激しいから、と考えられる。（女性による収奪とは、給与を男性から取り上

げて自分の配下に置くとともに、よりよい収入高を求めてのプレッシャーを男性に対してかけつづけること。）男性は、稼いでこないと、もっと稼いでこいという批判やプレッシャーを女性から受ける。男性は、生活面で女性に全面的に依存しているので、働くのがいやと断れない。（男性は、一人で生活して行けない。男性は、自分自身の生活の面倒を見ることができない、男性は、女性によって生殺与奪を握られている。）男性は、その結果、全力投球で働かざるを得ない。そのことが、男性の家庭内での不在をもたらし、家庭内の居場所がなくなり、存在感がますます薄くなるという悪循環に陥る。
女性が、男性に比べて、パートタイマーのような補助的な仕事にしか就かないこと。（就けないこと。）それは、家庭における、収入・支出額のコントロールを含めた、総合的な「管理職」の仕事が女性の本分であり、最も重要な主たる任務であり、それをおろそかにしてもらっては困る、という社会の要請があったからである、と考えられる。家庭が、社会全体の「空母」としての役割を果たしていることと関係がある。（あるいは、果たしていたこと。）
現代日本の女性が、自ら収入を得る立場につこうとするのは、以下の理由に基づく。
(1)男性と一緒でなく、一人で生活する自由を確保したいこと。（ないし、一人で生活することになっても困らないようにしたいこと。）そういう傾向によること。従来の、収入管理者としての職務を遂行するには、生活面で、男性との二人三脚が必須であったのを、忌避すること。（男性と一緒に生活することが必須であったのを忌避すること。）すなわち、男性がいなくても、収入面で困ることがないようにしたいこと。女性が、そう考えるためである。
日本の男性は、農耕社会においては、弱者の立場にある。日本男性は、女性に対して生活面で依存的であり、食事、入浴など生活上のさまざまな面で、いろいろ女性に世話をしてもらうことを要求するのを当然とする気風がある。そのため、それが、生活面で自立を果たしている女性には、うっとうしく、煩わしく感じられる。そこで、男性と一緒でなくて、一人でいる場合でも、十分な収入を得られるようになる状況を予め確保することで、心理的に男性から自由になること、を望むこと。これは、社会における待遇面での男女平等、すなわち社会的負担の大きさにおける男女格差をなくそう、という考えにもつながっている。（女性の方が、社会的に強い分、負担も大きいこと。それを無くすこと。）
(2)「家庭内管理職」の職務が、電化製品やコンピュータの普及、ないし子育ての保育園や学校への委託、すなわち、家事・育児の「アウトソーシング化」により簡易化され、時間的な余裕が生まれたの

で、その分を、自らの生きがいとなることをしたり、探したりすることに充当したい、という考えによる。収入を得る仕事自体が、自分自身にとって、生きがいを生み出す、積極的な意味合いを持つものとして感じられるから、仕事をしたいこと。（その結果として、収入を得たいこと。）そう考えること。
今後、女性の、自ら収入を得たいという傾向は、一層強まると考えられるので、その点、今まで主婦が担ってきた、社会の「母艦」的役割を、公共的な役割を担う機関に「アウトソーシング」（外部委託）することが普通になるようにする体制を整えることが、より必要となる。。（食事、洗濯、育児．．など家族の面倒を見る機能の負担を、外部委託すること。）
（初出1998年08月）

日本女性の「社会」的地位

日本の女性は、より安全な「内」＝「家庭」にとどまるのを好み、「外」＝「社会」に進出しようとしなかったため、「外」なる「社会」における地位が低かった。地位が低いと弱く見える。「内」での地位は、外部観察者からは見えにくいため、たとえ本当は高くても、過小評価されやすい。
注）「社会」という言葉の使い方に、注意を払っておく必要がある。それは、以下のように分かれている、と考えられること。
1)農耕「社会」という場合のように、広く全体社会を指す場合（広義）
2)「社会」進出という場合のように、企業・官庁などの職場、つまり家庭の「外」の世界を指す場合（狭義）
2)の場合、「家庭」は「社会」とは言えないことになること。（社会には、含まれないこと。）
1)では、家族「社会学」といった言い方が存在することから、「家庭」といった「内」なる世界も、「社会」に含まれること。
「社会的地位」という場合の、「社会」は、2)の「外」の世界を指していると考えられる。
女性の「社会」（あくまで狭義）的地位は低い。あるいは、女性は、自ら高い地位につこうとしない。
その原因は、。
1)男性に、自分を弱く見せて、守ってもらおうとすること。地位の低い者が、弱く見えることを、逆に利用している。
2)「（狭義の）社会」的地位は、従来、職場＝「外」の世界のものである。家庭という「内」なる世界から出かけて（離れて）、外敵や危険に対して直接我が身を露出させながら、働く場＝職場が、

「狭義の社会」=「外」であったこと。職場は、危険な外回りをしなければならなかったり、寝床がなかったりして、究極的には、安全な「内」なる家庭に帰ることが前提となる。たとえ働く場が（しっかりした建物の中などで）安全だったとしても、そこにたどり着くまでに、危険な目に会う可能性が、少なくとも過去には、大いにあった。要するに、「外」は危険であり、「内」は安全である。
なぜ女性が「内」の世界を指向するかと言えば、生物学的に貴重であるため、外敵からより効果的に身を守る必要があり、安全な「内」なる世界は、「外」の世界に比べて、その要求を満足させやすいからであること。女性の「社会」進出（社会的に高い地位につくこと）が遅れたのは、「社会」が「外」なる世界だったからである。女性の「社会」進出が起きるようになったのは、1)「外」なる世界が、交通・通信の便や治安がよくなって、「内」並に安全になってきたので、外出しやすくなったから、2)「内」なる世界（家庭）での作業（家事）が省力化され、時間的余裕が生まれたため、である。
3)高い「（狭義の）社会」的地位につくことに伴って生じる責任や、失敗時の制裁・刑罰の増加などを回避しようとすること。高い社会的地位につくことで増すところの、危険な目に会いたくないこと。自己の保身のため、男性に責任を押しつけること。
4)人間に対する指向が強く、周囲の意向を気にすること。（性格がウェットであること。）そのため、失敗して、恥をかいたり、嘲笑されるのを恐れること。高い地位につくほど、失敗時にそうした機会が増えるため。
5)(ウェットな社会のみ）男性を優先して高い地位につけようとすること。（男尊女卑。）男性は、農耕社会への適応の過程で、女性によってドライな性格部分を殺された結果、無能になって、社会的重要性の低い。そうした男性に、見かけ上高い地位を与えることで、男性に自尊心を起こさせ、より効果的に働かせること。（自分から進んで働くようにさせること。）こと。モラールを高め、勇気や意欲を奮い立たせて、筋力・武力などの能力を発揮させること。
女性が、高い「狭義の社会的地位」（企業・官庁の管理職ポスト）につくことを、そのまま女性解放の度合いを示す指標とは見るべきではない。女性が、失敗時に全責任を背負わなければならない条件のままで高い社会的地位を目指すことは、上述のように、女性の本来的な保身性向に反する面が強いからである。
女性が自ら「狭義の社会的に高い地位」につくことを積極的に追求するようにするには、失敗時に取らなくてはいけない責任を小さくすることが求められる。失敗時に、その責任を上下左右の隣接する

地位の成員へと分散させること、責任を周囲との連帯責任とすることで、本人の取らなくてはいけない責任を軽くすることが必要である。このように、責任分散がはかられた状態で女性が高い地位を目指すのは、女性の本来的な性向に照らし合わせて自然なことである。その際は、女性が高い地位につくことが、女性解放の度合いを示す指標とし得る。
あること。広義の社会における、本当の女性解放の度合いを示す指標は、女性本来の性向を示す、行動面でのウェットさが、その社会で、どれだけ高い価値を与えられているか、認められているか、である。。（例えば、以下の内容について高い価値を与えること。集団主義、同調指向、前例指向...)ウェットさの価値が高いほど、認められているほど、その社会における女性の地位は高い。日本は、これらの価値を高く設定しており、見かけとは裏腹に、女性の「広義の社会での地位」が高い。
日本の職場（生産する場、賃金を稼ぐ場）が男性中心であって、そこへの女性の進出が進まないのは、女性の高い地位につくことを避ける性向以外にも理由がある。それは、そこが、男性の自尊心を保持できる最後のとりでであること。（家族を経済的に支えているのは私をおいて他にいない、との誇りを保てること。）男性は、そこに女性が進出してくることを、脅威に感じているからだ。男性側は、女性には、簡単に明け渡したくない。明け渡すと、せっかく保って来た見かけ上の高い地位からも一挙に転落し、最後の自尊心が消えてしまう。後は女性のペースに合わせてひたすら従うだけの社会的落伍者に成り果てるからであること。（女性は、見かけ・実質両面で男性を圧倒すること。）
（初出1999年12月）

「女らしさ」はいけないか？　－日本における女らしさの否定についての考察－。

現在の日本では、男性が女性に「女らしくあれ」を口にすると、性差別だとかセクシャルハラスメントにつながるとして女性から責められる。しかし、そんなに女性が「女らしい」ことが悪いことなのかどうかと言えば、筆者は大きな疑問を抱かざるを得ない。
「女らしさ」を悪く言うのは、。
1)人々が取るべき態度についての現在の世界標準が、欧米社会のドライな男性的態度にあり、ドライな男性的態度がより望ましい、好ましいと、人々に映るからである。
2)日本女性による、今まで男性の拠点だった職場への進出＝社会進

出指向にあると考えられること。
従来、「女らしさ」= 家庭の中にとどまって、外に出ないこと (外に出て働く男性に対して、母艦の役割を果たすこと) 、と短絡的に捉えられてきたこと。この観点からは、それが女性が新たに進めようとしている職場進出へのじゃまになるとして敬遠されているのであろう。
女性が家庭の中にとどまる必要があったのは、家の中の方が外で働くより安全であったからというのと、もう一つは、乳児の養育や世話で両親のどちらか片方が家に残る必要が出た場合、母乳が出たり、子供が産まれる以前に子宮で子育てをしていたのが女性だということから、女性の方が子供の養育に対して親和的であるということで、女性 = 家庭という結びつきが自然とできたと考えられる。
現代日本では、以下の理由から、女性が職場進出 (社会進出) を図ろうとしていること。
1)治安がよくなって、家の外でも安全になったこと、保育園などの子供養育施設が整備されつつあることから、女性 = 家庭の結びつきは弱くなりつつある。女性は、家の中に必ずしもいなくてもよくなった。
2)従来、日本の女性は主婦として、家事と子供の教育を通して、自己実現を図ってきた。しかし学校制度の充実により、子供の教育に手がかからなくなった。また家電製品の普及により、家事に割く時間が大幅に減った。これらの理由のため、何もすることがないアイドリング時間が増える結果となり、自己実現のターゲットを家庭以外に求める必要に迫られた。
※なお、従来、女性の社会進出の理由として、女性自身の、男性の収入に頼らない経済的自立への指向というのが散々言われてきた。しかし、もともと日本の家庭において、経済 (家計) 面での管理権限は女性が握っていることから、経済的に依存・従属関係にあるのは、女性に給与をいったん全て取り上げられ、取り上げられた金額の中から改めて小遣いをもらう男性なのではないかと考えられる。すなわち、女性 = 経済的支配、男性 = 従属の関係が成立していると考えられる。支配している側と従属している側とがどちらが自立しているかと言えば、明らかに支配する側の女性であろう。
従って、「女らしさ」= 家庭的という見方に囚われている限り、女性は、「女らしさ」を排撃したくなると考えられる。
筆者は、真の「女らしさ」は、もともと家庭的なことそのものではないと考える。「女らしさ」とは、自分のことを貴重な大切なものとして他者よりも優先して守ろうとする「自己保身」にある。
家庭以外の場所が安全になり、そこでも活躍できることが分かれば、そこに進出しようとするのは女性にとって当然のことである。

今までは家庭においてなすべき仕事＝家事はたくさんあったが、今は家電製品などの導入で省力化が進み、女性たちの活躍の場は狭まっている。家庭は自己実現の場としては物足りなくなったといえる。
ただし、女性が職場進出しても、男性のように高い地位につくことを指向するとは必ずしも言えない。
なぜなら、女性は、自己保身のためには、失敗の責任を取って危ない目に会うことをできるだけ避けようとする「安全第一」「責任回避」主義者だからである。女性は、自分からは受動的に行動することで、能動的に行動した結果生じる行動に対する責任を取らないようにする。また、社会的に高い地位につくことに伴って生じる意思決定上の責任を取ることを嫌って、自分からは責任ある高い地位につくのを避けて、男性にその役をやらせようとする。
日本女性が社会的に高い地位についていない現状を見て、女性差別だと唱えるフェミニストは多いが、実際のところ女性は高い地位から男性などの外的圧力によって遠ざけられているために高い地位につけないのではなく、むしろ「高い地位につくことによって生じる社会的責任やリスクを回避するために」「社会的に高い地位につくことを自ら進んで回避している」のである。欧米社会のフェミニストのように、失敗時に大きな責任を取らされ、社会的生命を失うことを前提として、女性を高い地位につかせることを奨励すること自体、保身、安全第一で退嬰的な、女性の本性に反する異常な考え方であること。
女性が社会的に高い地位につくことを自然なものとし、女性が社会的に高い地位を積極的に追求させるようにするには、失敗時にその責任を上下左右の隣接する地位のメンバーへと分散させること、責任を周囲との連帯責任とすることで、本人の取らなくてはいけない責任を軽くすることが求められる。
社会的地位が高くない、責任を取る立場にいないからと言って、女性の社会における支配力が小さいとは見なせない。特に日本などの農耕社会では、女性は、自らは男性の母親役を取る。（息子の母親となる、妻として夫の母親代わりとなること。）女性は、そのことで、男性を自分に対して心理的に依存させた上で、自分の思うままに操縦して社会的に高い地位を目指させる。（競争させる。）女性は、高い地位についた男性に対して自分の思い通りのことをやらせようとすること。日本においては、男性は、どんなに高い地位についていたとしても、女性（特に母親）の、かいらい・ロボットと化しており、女性の支配下にあること。
こうした女性の性格と日本人の国民性とがよく似ていることを 筆者は文献調査で確かめた。日本はもともと女性的な、というか、女性

優位の、男が虐げられている社会＝母権制の社会と言える。
女性が優位の「女らしい」「女々しい」日本社会では、女性は、社会的な責任やリスクは取らず、かつ実質的な支配権は握るという「無責任支配」「無リスク支配」の体制を確立していると考えられる。すなわち、「支配すれども責任取らず」「支配すれどもリスクを取らず」という言葉が、女性による社会支配の特徴を言い表すと考えられる。
そういう点では、女性自身による「女らしさ」の否定は、せっかく自分が社会の中で支配力のある有利な状態にあるのを進んで止めようとすることであり、馬鹿げた自己否定以外の何者でもないという感じがする。
特に問題なのは、女性が、男性を「強い」「頼りになる」とおだてると同時にその裏ではしっかり、男性の生活全般を母親の如く隅々まで支配・コントロールする。（家計管理の権限掌握などはその代表例と考えられる。）「アメとムチ」の使い分けを行っている点であること。
男性が家庭に帰らないで、職場に長くい続けるのも、家庭が女性の支配する場であり、自分とは異質の雰囲気になっているのが不愉快だからと言える。
家庭における女性（母親）支配が男性を家庭から遠ざけて職場に固定化し、それが家庭の外に出て職場進出しようとする女性の行く手を阻むという、女性にとっては複雑な仕組みになっている。
その点、女性がスムーズに職場進出するには、家庭における自分の主導権を放棄して男性と対等化すること、家庭において男性の居場所を確保することを容認することが求められる、と言える。
なお、日本における職場の雰囲気自体は、集団主義、プライバシーの欠如、対人関係面での調和や前例・しきたり偏重といった女性向きのものとなっており、本来は男性よりも女性の方が、能力を発揮しやすい環境にある。
確かに職場に数の面でたくさんいるのは男性だが、彼らは母親や妻によって、男性本来の個人主義、自由主義、独創性の発揮といった行動様式を骨抜きにされ、すっかり女性化した「母親臭い」存在と化している。そういう点で、男性のたくさんいる日本の職場は、もともと女性とは相性がいいのである。
（初出2001年11月）

「専業主婦」＝「役人」論

日本の主婦、特に専業主婦は、役人と性質が似ていると考えられ

る。
この場合、役人とは、中央省庁、地方自治体の職員、すなわち国家、地方公務員を指す。
日本の役人と専業主婦との共通点は何か？2つあると考えられる。
(1)自分ではプラスの入金をしなくても、自動的に自分の使えるお金が自分の手の中に入ってくる点である。
(2)その入ってきたお金をどう使うかというのを決める権限をがっちり握っている点であること。
(1)に関して言うと、専業主婦の場合、自分では何も生活に必要なプラスの入金をもたらさなくても、夫の給与の振込先銀行口座に、毎月自動的に、自分が自由に使えるお金が、夫の労働によって、入ってくる。
役人の場合、自分ではプラスの入金を何ももたらさなくても、予算を組むのに必要なお金が、毎年、民間企業や労働者から、自分たちの自由に使える税金の形で、何もしなくても、自動的に上がってくる。
日本の専業主婦や役人は、「僕稼ぐ人、私使う人」と言う表現をするとすれば、「使う人」を地で行っていると言える。
本来、自分の属する組織（これは、家庭でも、会社でも何でもそうだが。）にプラスの入金をするためには、何かしら、余所から利益を上げないと、儲けないといけない。それに必要な、才覚、知恵、忍耐力が求められる。
会社だったら、顧客、取引先、上司、同僚から、絶えず文句を言われ、辛い、しんどい大変な思いをして仕事をすることで、やっとそれと交換にお金が入ってくる。楽して利益が上がることはほとんどなく、仕事の中身についても選択の余地がないことがしばしばである。
ところが、専業主婦や役人は、自分ではこの辺の苦労を何もしないで（夫や民間企業の労働者にやらせて）、プラスの入金を自分の手元にいとも易々と手に入れているのであること。
官民格差の本質は、給与水準の差がどうのこうの言う以前に、この辺にあるのではないだろうか。要は、自分の手でプラスの入金を確保しなければならず、しかもそのうちのいくらかを自動的に巻き上げられてしまう立場の民間労働者と、自分の手ではプラスの入金を確保するために働く必要がなく、民間労働者から入金を巻き上げれば済む気楽な立場の役人との差が官民格差の本質である。
こうした格差は、給与稼ぎをする夫とその専業主婦との間にも当てはまる関係であると言える。一生懸命働いてプラスの入金をしなければならない役回りの夫と、何もしなくても自分の使うお金が自動的に銀行口座に入ってくる専業主婦との間には、官民同様の大きな

格差があり、これは立派な男女差別である（女である専業主婦が上で、労働者の夫が下。）こと。
要は、自ら苦労せずに、必要なお金を他から巻き上げる搾取者、寄生者としての体質が、専業主婦にも、役人にもあるのである。
次に(2)についてであるが、日本では、家庭の家計管理の権限を主婦が独占しているという状況がある。夫の銀行口座から入金されたお金を何に使うか、最終的に決定して、お金を配分するのが、主婦である。家庭のお金を配分する権限を主婦である女性が握っている。夫は、少額の小遣いを、主婦から頭を下げて出してもらわないといけない。
この実態を示すのが、百貨店売り場での女性向け売り場がやたらと大きく広く、男性向け売り場が貧弱なことである。例えば、JR京都駅の駅ビルの百貨店の売り場案内パンフレットとか見れば、この辺の事情は一目瞭然である。家庭のお金の割り振りの権限を女性、主婦が握っているからこそ、女性向けの売り場が立派なのである。
税金についても同じことが言える。税金の使い道を決めるのは、建前上は国民主権となっているが、実際には、役人が自分たちのために決めている。彼らは、縦割りの行政組織の中で、自分たちの部署の取り分、ひいては自分自身の取り分が最高になるように、予算折衝を繰り返しているのである。
この点でも、専業主婦と役人は似ていると言える。
専業主婦は、家事が大変だとか表面上言われながらも、その実態は、「三食昼寝付き」の気楽な稼業であることは確かである。個人的意見としては、今後、専業主婦には、家庭への入金のための労働を夫ばかりに押しつけるのではなく、子供の育児が終わって暇になったら、入金の主要な役回りを、夫としっかりワークシェアリングしてもらいたいと思う。また、家計管理の権限を夫と分け合うこともしてほしいと思う。それが、日本の家庭で真の男女平等が実現するきっかけになればと思っている。
上記のお金関係以外に、役人と専業主婦とは、もう一つ似ている側面がある。支配者、権力者としての性格であること。
役人は、戦前から「お上」「官」として、民間の人々を支配する、言わば「天皇家の直参、直属機関」としての権力者の性格を持ち続けている。「官尊民卑」という言葉がこの辺の実態を表す言葉である。官庁や地方自治体は、許認可や法律規制の権限を盾に、民間企業や国民を意のままに支配している。戦後は、天皇家の上にアメリカが来たので、それに迎合して、「民主的になりました」という顔を一見しているだけである。
専業主婦も、子供としての息子や娘を「自分の自己実現の駒」として支配、コントロールする「母」（夫を子供扱いする妻もこの同類

である。）、嫁や婿を支配する「姑」として、子供を通じて社会を間接的に支配する、社会の最終支配者、権力者としての顔を持っていること。
多分、日本社会で現在一番強い立場にあるのは、役人（公務員）の専業主婦（例えば高級官僚を夫に持つ専業主婦）ではないだろうか？。
（初出2005年10月）

少子高齢化対策と日本女性、専業主婦

現在の日本では、お金を、夫婦共働きで稼がないと生活して行けない。
どちらか一人では、給料が高い要件、雇用が無い。

今まで、日本社会の真の支配者は、女性、それも家の財布と子供をがっちり握り、経済的に恵まれ優遇された環境にあった専業主婦であった。ウェットで母性優位な社会の雰囲気、国民性がその表れである。

今までの日本社会、日本女性の価値観が「専業主婦は勝ち組で、働く女は負け組、惨め、恥ずかしい」だったのを、「働かない女、稼がない女は負け組、専業主婦だと恥ずかしい。働く女、稼ぐ女は勝ち組」に変える必要がある。

しかし、母の仕事と、母子一体感の維持の両立が難しい。母子一体感を重視すると、女性は働きに出られない。母子一体感の保持により、我が子を精神的に支配し、自分の子供を通じて、社会に強い影響力を及ぼし、社会を支配するのが、日本女性による社会支配のやり方の常套手段であり、それを奪われるのは、女性は嫌がる。上記と対立すること。

また、母親が育児のため、会社を一旦辞めると、非正規雇用化してしまい、正規に採用してもらいにくくなる。パート採用になってし

まうこと。

白紙採用へのこだわりを捨てることと、白紙から自分の職場の色に新人を徐々に染めることによってもたらされる職場一体感の維持とが対立する。

日本の職場は、生え抜き重視、偏重からの脱却が必要である。一旦辞める、抜けると駄目という感じだと、母親が育児休業出来なくなってしまう。

相互の一体感を重んじる文化、ウェットな母性的文化を維持したまま、「働く女、稼ぐ女＝勝ち組」にするのが、実は難しい。

また、なぜ男性ばかり働くのかこと。それは、日本社会で、家庭が母子、妻子の占有物であり、家庭内に父、夫の居場所が無く、職場にしか父、夫の居場所が無いからである。

夫、父は、職場に逃げて会社人間になるが、お金を稼ぐだけしか出来ない。ATMになることしか出来ないこと。お金を使う主体は財布を握る妻と子供になってしまう。夫は、自分の稼ぎから疎外されている。

日本の夫は、自分の妻、女性が働きに出ると、自分の稼ぐ能力が足りない、能力不足と感じ、自分がみっともない、恥ずかしい、自分のATMとしての存在意義が失われると感じる。その結果、父、夫が、妻が働きに出るのを妨害する。

もう一つ、日本の通貨高、円高が、非婚、晩婚、少子化の原因になっている。

通貨高、円高のそのままでは賃金が高くなる。
国際競争力が減って、企業が国内で従業員を雇いにくくなる。
企業が海外移転をして、国内雇用が減る。
国内で、低賃金の非正規雇用社員が増える。
安定した、高い収入が得られなくなる。
経済的安定を必要とする結婚がしにくくなる。

結婚しないので、子供が生まれない。

既存の日本の国の改革は、。
・家族、ファミリーを重視しよう、見直そうと言うが、実際には、男性が女性を養えないので、そもそも結婚できない、子供が出来ない。
・子育てを支援しようと言って、経済的に育児手当を出したり、機会的に託児所待機児童の数を減らそうとしたり、子育てをする夫をイクメンと言って推奨したりするが、大元の子供がそもそも生まれない。
・女性の社会参加を促そう、働く女性を支援しよう、女性管理職を増大させる政策を取ろうとしているが、そもそも現行の日本の価値観では、働く女は、働かなくて良い女よりも、地位、ステータスが下位である。
・結婚を促進しようとして、自治体が婚活支援とかしているが、夫が妻を養えないため、結婚できない。

国の政策は、全て空回りして、上手く機能していない。
・専業主婦、働かない女が、働く女よりも地位、ステータスが上だと考えられ、女が働かなくて済むのが良いことだとする社会モデルが続いてしまっているため。
・男が女を養う、夫が妻を養うのが有能な男、夫の印、証だと考えられ、男性、夫が家庭に居場所を作れない状態が放置され、妻子のATMと化すことが男性、夫の唯一の存在意義だと考えられてしまっているため。
であること。これを何とか変えないと、今のままジリ貧になってしまうこと。

黒船来航とかアメリカ占領とか、外から強制力が働かないと自分からは変われないのが、日本社会であり、女性。（と女性化している日本男性）であること。

日本の伝統的農村、村社会ではどうだったか。
働きに出なくて良い、働かなくて良い、会社勤めとかの出稼ぎをしなくて良い、自給自足なのがベストであり、これが専業主婦至上主義の原型になっている。

大地主が理想像であり、働きは下男、下女、小作人、奉公人にやらせて、自分からは働かないのが良いという考え方が、伝統的に蔓延

している。

ムラの中に、女性的雰囲気が蔓延しており、社会的に男の居場所が無い。
みんな一緒に行動しないと行けないこと。単独行動を許さないこと。周囲への気配り、一体感が重視される、女性的雰囲気に合わせないと行けない。
男性は、無理して母性化しないと、ムラの中にいられない。ドライな男性的な生き方が許されない。稼ぎ手、ATMとしてしか生きられないこと。

母子が強力に癒着して、男性、夫が割って入れない。母による子供の独占支配が行われ、それが、女性による、子供を通した日本社会全体の支配につながっている。
父の子育てからの疎外が生じ、父は精神的にすさんで暴君になるしかない。暴れてDVをする状況が、男性による社会支配と勘違いされている。

社会関係がウチウチ、内々で自己完結している。外部からの成員加入が、嫁入りとかの白紙採用しか手段が用意されていない。中途加入が難しい。いったん別の会社を辞めてパートで働く女性が途中から別の会社の正社員になれない。
先祖代々同じところに住み、ずっと動かずに住んでいること、生え抜きを重視すること。いったん抜けると根無し草扱いされ、まともに人間扱いされないこと。会社を辞めると、根無し草のフリーター扱いされ、非正規的な非人間的な扱いに甘んじなければならないこと。無論、そのままでは生活が無理な低賃金生活になってしまう。

子供が増えない、少子高齢化から抜け出せない社会の原型は、みな伝統的な日本のムラに元からある。ムラが原型なので変われない。ムラ茹でガエル状態になっていること。

変わるには、少子高齢化を解決するには、。
・専業主婦の解体と、稼ぐ女のステータス向上が必要である。働かない、稼がない、稼げない女は恥ずかしい存在だ、社会の恥だとするキャンペーンを日本全体で行うことが必要である。アメリカやヨーロッパに言ってもらうことも必要である。
・夫、男の家庭内、社会内での居場所を確保することが必要であ

る。夫、男のATM専用状態からの脱却が必要である。夫、男がATM以外の存在意義を見つける旅に出ることが必要である。社会において、個人の自由独立が可能なドライな領域を、社会や家庭の中に確保することが必要である。それは、ドライで遊牧的な父性を自らの内部に新発見することであり、伝統的なムラ的な農耕民的価値観からの脱却である。これを社会全体でキャンペーンを打つことが必要である。
・相互一体感、新規成員の白紙採用、加入、生え抜き重視を断念することであること。

こうしたことを実現するには、家庭内の居場所を男性に譲る、自ら働きに出る、といった感じで、女性の大幅な社会的譲歩が必要である。
女、母による既得権益の返上が必要であること。それは、母性的な大政奉還に例えられること。

現状維持のまま、少子高齢化を防ぐ方法もある。
根本的な通貨安、円安が到来するのを待つことである。それは、日本国の財政破綻を早期に実現することである。日本国債の日銀引受や円札の刷りまくりを行うことであること。
そうすることで、いったん経済的に貧しくなるが、国際競争力が回復し、昭和時代の高度経済成長をもう一度実現でき、伝統的日本社会のままでいられる。

日本で豊富な水資源を海外に売る、ことも考えられる。

（初出 2014年6月）

家計管理の月番化について

家計管理を月番制にしたらどうか？
現状では、日本の家庭においては、家計管理の権限は、妻や母が独占している。夫は、自分で稼いできた給与を、彼女らに取り上げられ、別途頭を下げて、小遣いを貰わないといけない。
一方、欧米においては、これと逆の状況となっており、家計管理の権限は、夫が独占している。妻は、家事に必要な小遣いをその都度

夫から貰っている。
日本の事例も、欧米の事例も、両方とも、家庭内における男女差別であり、解消の必要があると考えられる。
要は、家計管理の権限を、男女平等に受け持つようにすべきではないかということである。
その一つの方法として、家計管理の仕事を、月番で、毎月、夫と妻の間で代わりばんこに交替してやるようにすればよいのではないかというのがある。
要は、奇数月は妻が管理し、偶数月は夫が管理するというようにすればいいのではないか。
これによって、男女の片方が家計管理を独占することがなくなり、男女平等が促進されると言えよう。
また、一人が家計管理を独占することがなくなり、もう一方の他人のチェックが絶えず入るようになることから、いい加減な家計管理をすることが難しくなり、家計管理の透明性が高まると言える。
問題があると言えば、夫妻どちらかが浪費家で、お金をみんな無駄遣いしてしまう場合である。その場合は、しっかりと管理できる片方にずっと任せざるを得ない。要は、一方が能力的に欠けている場合は、男女どちらかにこだわらず、家計管理能力のある方に任せればよいということになる。
（初出2006年01月）

男女の望ましいパワーバランスは50対50。

男女のパワーバランスは、50対50で、男女対等なのが望ましい。現代の日本のように、女性、母性にパワーが偏っている社会は、男女平等の観点から言って望ましくない。逆に言えば、男性、父性にパワーが偏っている欧米社会も、男女平等という点では望ましくない。

男女のパワーバランスを50:50にすることを実現するためにも、例えば、男女で役割を固定するのでなく、交代制で行くのが望ましい。 すなわち、責任を取るにしても、家計管理にしても、育児にしても、稼ぎにしても、男女交代制を取って、できるだけ偏りが無いのが良い。例えば、家計管理において、妻に任せっぱなしにするのでなく、夫婦で月番制を実現するとかが考えられる。あるいは、共働き子育ての夫婦で、主に仕事に出る側と、主に育児を担当する側を、週交代で担当するとかが考えられる。
あるいは、社会のメジャーな雰囲気が、母性的、父性的のどちらか

一方に偏り過ぎないために、母性的雰囲気を醸し出す産業群と、父性的雰囲気を醸し出す産業群を、社会においてバランス良く配置することが求められる。ウェットで母性的雰囲気を社会に与える産業としては、農業分野では、稲作農耕が代表的であり、ドライで父性的雰囲気を社会に与える産業としては、遊牧牧畜であると考えられる。今後は、農業以外の、工業、商業等の分野においても、どういう仕事が、社会にウェットで母性的な雰囲気を与え、どういう仕事が、社会にドライで父性的な雰囲気を与えるかを分析する必要がある。あたかも管理栄養士が、栄養バランスの取れた食事献立を考えるように、母性、父性のバランスの取れた産業構成を考えるコーディネーターが社会において求められると言える。
（初出 2011年8月）

女性が暴走するとストップが効かない日本社会。

日本社会は、女性が「こうだ」と主張すると、その通りにいくらでも通ってしまい、歯止めが効かなくなる社会である。
いい例が、日本のフェミニズムであり、本来女性、母性が強いはずの日本社会において、女性が「自分たちは弱いんだ、差別されているんだ」と叫ぶと、「日本は女性が弱い、差別された、女性解放の必要な社会だ」ということに社会全体が洗脳されたかのように、その意見を諾々として受け入れるようになってしまう。ファッションに限らず、社会のトレンドを決定しているのが女性なのである。
会社とかでも、大和撫子よろしく控えめな感じの女性社員だと害はあまりないのだけれど、押しの強い、キャアキャア自分の主張をどこまでもわめき散らすタイプ、女帝タイプの女性社員が出てきたり、古株で一番威張っていて誰もが彼女の言うことに従わざるを得ないお局タイプの女性社員が出てくると、彼女たちの暴走を止められる存在がいなくなってしまうのである。今はまだ男性社員を表に立てて自分は背後にまわるタイプの控えめな女性社員が多いので問題は顕在化しにくいのであるが。
日本では、社会や集団に、女帝、グレートマザー、お局タイプの女性支配者が出現すると、女性に対して甘えや依存心を強く持っている日本の男性は彼女たちに太刀打ちできない。今のところは、女性が自分から支配しようとせずに、男性を表面的な支配者として立てているために、男性は自分が一番強いと思わされているだけだ。
「男社会」は、見かけ倒しであることに気づく必要がある。日本の男性は、本来自分たち女性が一番強い社会の最終意思決定者であるにも関わらず、そのことをおくびにも出さず、黙って男性を立て

て、「日本は男社会です」と言ってくれる日本の女性たちに感謝すべきだろう、というか、その隠れた強大さに恐怖すべきだ。
（初出2008年04月）

「女性的＝日本的」の相関主張に対する反応

筆者は、「女性的＝ウェット＝日本的」という行動様式や性格面での相関を、インターネット上でのアンケート調査等に基づき主張している。
これについての反応は、以下の2通りが考えられる。
(1)何ら驚くべきことではない、当たり前である。
既に、豊富な前例がある。石田英一郎の「農耕-遊牧」社会論や、河合隼雄の「母性」社会論などこと。
(2)とても驚くべきことである、信じられない、間違っているのでは？。
フェミニストによる日本「男社会」論が大手を振ってまかり通っている現状からは。女性が、日本社会を支配しているという結論を導き出すものだから。
従来は、上記の2つの見方が、互いに何ら交流を持たず、別々にバラバラに唱えられて来た。そうなった根底には、日本社会における、「女性と母性」との対立が、要因として存在する。
「女としては弱いが、母としては強い。」これは、女性の弱さを強調したがるフェミニストの逃げ口上として、使われる文句である。
しかし、これはおかしい。母性は、女性性の一部であるはずであり、分けたり、対立させて捉えるのは変である。
母は、女性ではないのか？常識から考えて、そんなはずはない。
このことは、家庭内での立場に、結婚して子供ができるまでと、子供ができてからとで、大きな格差が存在することを示している。女性の立場は、前者は弱く、後者は強いということだろうか。
大学研究者、特に若い大学院生や、結婚していない、子供のいない大学教授などは、前者の結婚していないか、結婚していても子供のいない女の立場を取るであろう。自分たちの境遇にとって、前者（女性は弱い。）のウケがいいから、女性が強い日本社会には適用不可能なはずのフェミニズムが、学説でまかり通る。
このように、日本女性の地位を考える上で、弱い方の嫁ばかりに焦点を当て、強い方（姑の立場）に焦点を当てないのは、不公平であり、間違っていないか？。
日本のフェミニズムでは、女性≠母性、ないし女性と母性を対立するものとみなす。姑と嫁との家庭内での対立が、この捉え方の源と

なっている。
そうした、女性と母性の対立は、世代間での対立(20～30代の嫁世代と、50～60代の姑世代との。）とも言える。
(1)の日本的＝女性的の結びつきを当たり前とする見方は、母性の立場に立ったものであり、一方、(2)の、両者の結びつきに意図的に気づこうとしない見方は、若い女性の立場に立ったものと見ることができる。
姑は、家族の後継者としての子供を産むと共に、家風を一通りマスターし、家風を伝える正統者として、家庭内で揺るぎない地位を築き、強い立場に立つ。
一方、嫁は、子供がまだ生まれないし（生まれるかどうかも分からない。）、家風にも習熟していないので、家庭内での地位は不安定である。赤の他人である、姑の言うことに、一方的に従わねばならず、ストレス・反発心がたまる。
この立場の差が、女性同士での世代間支配・抑圧をもたらす。ひいては、相互間の反発・対立を招くこと。これが、日本のフェミニストに、女性性（嫁の立場）と母性（姑の立場）とを、統合して捉えることを止めさせる原因となっていること。
包含関係としては、母性は、女性性の中に含まれる。女性性は、本来姑も持っている性質である（女なのだから当たり前）こと。しかるに、日本フェミニストは、女性性を持つ者を、嫁の立場の者に限定して捉えようとしていないだろうか？これは、日本における女性の地位を正しく測定する上で、見逃せない、偏向である。嫁の立場は弱いので、フェミニズム理論に当てはまる。しかし、姑は、強いので当てはまらない。だからといって、姑をあたかも「女性でない」ようにみなして、検討の対象から外すのは、普遍的な女性解放をうたう、本来のフェミニズムの精神からして問題あるのではないか？この辺りに、女性を弱者としてしか捉えられず、理論の対象にできない、現在の日本フェミニズムの限界があるように思われる。
無論、中には、家族制度が廃止されて、嫁の発言権がより強まった、姑がより弱くなった、から、現代の日本フェミニズムは、姑も理論の対象に加えているのだと反論する向きもあろう。
しかし、フェミニズムは、本来、男性支配からの女性解放を提唱するのであって、同じ女性同士の支配からの解放＝姑からの嫁の解放を、フェミニズムで取り扱うのは、おかしいのである。
フェミニズムが成り立つのは、女性が、男性に支配されている場合だけである。日本では、男性は、夫婦関係のみを取り出してみれば、家風の習得度において、妻＝嫁を上回っており、優位な立場に立っている、と言えるかも知れない。しかし、日本の男性は、姑とは、「母→息子」の関係で、心理面では、姑によって、自分の子供

として、一方的に支配・制御される立場にある。解放されるべきなのは、強い姑＝母ではなく、支配下にある息子の男性の方なのではないか？こうなると、日本では、女性のみの解放を進めようとするフェミニズムは、成り立ちがたくなる。また、嫁が、家風をすっかりマスターし、姑から家計を切り盛りする権限を譲ってもらった時点で、家庭内の勢力としては、夫＝男性を抜きさって、より上位に立つということも十分考えられることである。
姑と嫁は、さらに、男性（夫であると同時に、息子であること。）を自分の味方につけて、対立において、自分が有利に事を進めようとして、男性の取り合いを引き起こす。
姑は、嫁に自分の言うことを聞かせたいと考えて、息子に対して、嫁にこう言えと指図する。（親子関係の利用）こと。嫁は、姑の支配からの防波堤として、夫を利用しようとすること。（夫婦関係の利用。）
親子関係（母→息子） と、夫婦関係（夫＝妻）の力比べは、最初は、血縁に裏打ちされた親子関係（母→息子）が強いと考えられるが、姑側の老齢化により、段々拮抗してくると考えられる。
親子関係は、垂直な支配-従属関係なのに対して、夫婦関係は、本来対等であるはずである。しかし、日本では、家風学習のレベルの違いと、姑の介入により、夫が有利となる。従って、夫は妻を支配する、家父長だという説が生じる。しかし、ここで注意すべきことは、夫は、自力で有利さを勝ち取ったのではないことである。家風学習レベルの（妻との）差も、姑の存在も、予め外から与えられた条件である。また、妻には、家風先達者として、偉そうなことを言えても、母たる姑には、口答えできないのであれば、女性（母親）に支配された男性（息子）ということになり、家父長制とは言えない。
日本のフェミニズムは、この水平面の夫婦関係のみに焦点を当て、親子関係による垂直支配（女性による男性支配、母＝姑による息子＝夫支配）に目が向いていない。
舅は何をしているのか？影が薄い。舅は家父長と言えるか？姑と嫁との間の対立を抑えられない以上、家父長失格なのではあるまいか。
日本の女性学、フェミニズム、ジェンダー社会論は、「嫁」の立場にたった学問である。
「姑」の立場に立った学問は、作れないものか？それは、権力者としての日本の主婦を、特に姑の視点から解明するものである。
日本の女性は、妻・母の両方の立場を兼ねると、矛盾が生じる。
母の立場としては、息子が自分の言うことを聞いて欲しい。
妻の立場としては、夫が自分の言うことを聞いて欲しい。妻とし

て、夫に自分に同調して欲しいと思うこと。（嫁の立場。）
子供が産まれると、母として、息子に、自分に同調して欲しいと思うこと。（姑の立場。次の世代にとって。）
すなわち、嫁の立場と姑の立場を、同一人物が兼ねていること。
（それらが、同一人物の中で共存していること。）
嫁姑の対立では、嫁も姑も、夫＝息子を自分の味方に付けようとする。
立場の矛盾を男性に押しつけること。
男性は、どっちつかずの立場に立たされて困る。
母性による支配からの解放を！という主張への賛同者は、。
1)男性
2)女性 結婚していない、子供がいない。
となる、と考えられること。
この点、日本では、女性と母性とが切り離されて捉えられている。
（母性は、以下の内容である。結婚したこと。子供を産んだこと。）
日本女性にとって、家父長制からの脱却は、名目のみである。姑支配からの脱却が、本当の目的である。
核家族化（親と同居しない、独居老人の増加）も、姑支配からの脱却と関連がある。
それぞれの核家族が、ウェットなまま、自閉、孤立するのも、嫁姑関係の暗さを払拭しようとする努力の現れと見てよい。
日本の子供は、母親のしつけにより、コントロールされ、父親の影が薄い。
父親－息子のラインはあまり強くない。
日本男性は、「若くしては母に従え。老いては妻に従え。」というように、一生を、女性の支配下で暮らしていること。
女性は、「老いては子に従え」のはずが、実態は、逆に子供（特に息子）を支配していること。
家庭内の実権は、祖母にあって、祖父にはないのでないか？。
父ないし夫が優位に立てるのは、姓替わりをしなくて済む、家系の跡継ぎ＝本流でいることを保証されている、財産所有権限を持つ点にある。
母ないし妻が優位に立てるのは、財産管理権の把握、子供に自分の言うことを聞かせる育児権限の把握にある。
家庭における支配には、世代間支配と、世代内支配とがある。世代間支配とは、母親が息子に、自分の言うことを強制的に聞かせることであり、世代内支配とは、夫が妻に自分の行動様式を強制することである。
日本では、夫が妻に、自分が正統の家風継承者・先達者として、妻

に教える立場から、妻を支配して来た。これが、日本における男性による女性支配の典型とされてきた。これは、世代内支配に当たる。ところが、家の中で、夫は母親の息子という立場にあり、母親＝姑によって、夫＝息子は、絶えずコントロールされ、言うことを聞かねばならない。これが、世代間支配である。これは、女性＝母親による、男性＝息子の支配であると言える。一方、母親＝姑は、夫の妻＝嫁にも同時に、自分の行動様式を押しつけ、支配している。姑＝母親こそが、息子と嫁の両方を支配する、世代間支配の主役であり、影の薄い舅に代わって、家族の中の支配の頂点に立っているのである。図式化すると、母（姑）→息子（夫）・嫁（妻）の支配が、世代を超えて繰り返し量産されている。父（舅）は、子育てに介入しないので、父→息子ラインは、母→息子ラインに比べて、あまり強くない、目立たないのが現実である。
しかるに、従来のフェミニズムでは、母－息子の世代間支配の存在を無視し、姑による支配を、夫による支配と混同している。あるいは、姑（家庭内強者）の立場に立った理論構築を放棄し、いつも嫁＝家庭内弱者の立場に立とうとすること。
姑→嫁、姑→息子（夫）という、2つの支配のラインについてその存在を無視していること。
（初出2000年07月）

夫婦別姓と女性

夫婦別姓に賛成する人、夫婦別姓で得をする人は、自分の姓を捨てて、相手の姓に入る人、すなわち嫁か婿である。
夫婦別姓に反対する人、夫婦別姓で損をする人は、自分の姓を変えずに済んでいた人、すなわち、姑とその息子である。
姓を変えて自分のところに入って来る新入りに比べて、古株として優位に立てるからであること。
同じ女性でも、姑、小姑の立場と嫁の立場とで、賛成、反対が異なる。姑、小姑の立場では、夫婦別姓に反対であり、嫁の立場では賛成である。
女性が全て夫婦別姓に賛成という訳では無いことに留意する必要がある。
（初出 2011年3月）

姓替わりと夫婦別姓

現代の日本女性がいやがることは、。

(1)姑との同居 対応策として、次男との結婚を好むこと。
(2)姓替わり 対応策として、夫婦別姓を好むこと。
であること。原因は、夫の家風を強制されるのが嫌なことである。強制するのは、同性である姑である。
日本の家庭では、男性が保護されている。
(1)男尊女卑 男性が優先して、いろいろな身の回りの世話をしてもらえる。
(2)姓替わりしなくて済む 家風習得の苦労をしなくてよいこと。新しく入った家族先で、ストレスがたまったり、既に構成員となっている人たちからいばられたりする体験をしなくて済む。
こうした点は、日本の女性が弱く見える理由ともなる。
姓替わりする方（嫁、入り婿）は、「イエ」の、ないし家風の新参者として、弱い立場に立つ。
強い立場に立つのは、元からその姓を名乗っている、姑＋息子（夫）ないし娘（小姑）であること。
嫁の弱さは、そのまま女性の弱さと見なされがちだが、嫁にとって敵役の姑は、女性である。
夫婦別姓は姓替わりによる、古参者と新参者との間に勢力面での差別が生じるのを是正しようとするものである。
それは、以下の問題を解決する。
(1)男女（夫婦）間の問題 男＝夫が、家風の先達者として、妻に対して、威張ったりなど振る舞えなくする。
(2)女同士の問題 姑-嫁間の主導権争いを回避すること。姑が嫁を、同姓だからということで支配できなくする。
夫婦別姓でメリットがあるのは、夫婦同姓で弱い立場に置かれている嫁だけで、姑や夫にはメリットがあまり感じられないのが、夫婦別姓が日本社会においていまいち賛同者が広がらない原因となっているのではないか。同じ女性でも、嫁にはメリットがあるが、姑にはないのである。
（初出2000年07月）

女社会、男社会と女流、男流

同じ男社会と言っても、日本と欧米とでは、性質が違うと考えられる。
日本の男性は、母性の影響が強いため、女流の男社会になっていると言える。
一方、欧米の男性は、父性の影響が強いため、男流の男社会になっていると言える。

同じ女社会と言っても、日本と欧米とでは、性質が違うと考えられる。
日本の女性は、母性の影響が強いため、女流の女社会になっていると言える。
一方、欧米の女性は、父性の影響が強いため、男流の女社会になっていると言える。
男社会、女社会、いずれにおいても、男流、女流の区別が必要である。
女流の女社会、男流の男社会が一番優れているのであり、女流の女社会を形成している日本女性は、一番優れている。
一方、女流の男社会しか形成できない日本の男性は劣っている。
（初出 2010年7月）

根本的に先進性が欠如する日本村社会、女社会。

日本村社会や、その基盤をなす女社会では、リスクを冒すことを根本的に嫌うため、新しい知見に到達することが、リスクを冒すことを好む欧米社会に比べて、どうしても遅くなってしまう。その点、根本的に先進性が欠如していると言える。

そこで、日本社会は、その欠陥に対処するため、欧米社会が先んじて手に入れた新しい知見を猛スピードで取り入れる、コピーすることで先進性を獲得し、それに小改良を加える事で「日本の技術は、世界最先端！」と売り込むのである。

（初出 2015年2月）

日本社会で一番楽をしている存在は？。
日本社会で、一番社会の中で楽をして、優雅に暮らしているのは誰か？。
それは、専業主婦である。
彼らは、嫌な思いをして、自ら稼がなくてよい。稼ぎは夫から入ってきて、そのお金の財布を、彼女自身でがっちり握って、財産管理の権限を握って、好き放題に買い物をするのである。それゆえ、デパートとか、婦人物の売り場ばかりになっていること。
また、教育ママゴンとして、子供を完全に自分の所有物と化して、受験競争にまい進させる、子供の教育権限の私物化に成功していること。

毎日、通勤地獄を味わわなくても良い点も、優雅である。というか、彼女たちが優雅な生活を送るためのマンション立地とかが、夫にとって満員混雑電車生成の主要な原因となっているのである。
次に楽をしているのは、役人である。自ら稼がなくても税金で食べていけて、かつ、自分たちが雇われている天皇家の威信をフル活用して、国民の生活の生殺与奪を握り、親方日の丸で威張って生活できるからである。通勤も、通勤先の近くに官舎があって、通うのは楽である。
（初出 2010年7月）

日本の主婦利権を追及しようこと。

日本の主婦は、家の財布を管理する権限や、子供を自分の操り人形として自由に調教できる権限を、結婚して家に入るのと同時に手に入れ、独占している。

これは、家庭においてのみならず社会全体から見ても大きな利権であり、そんな大きな利権を女性が占有していることに、社会的関心がもう少し高まるべきだと思う。

まるで、男性を、会社で働くのに専念させ、家庭にはノータッチでいるのが望ましいみたいな感じの利権である。

日本男性の家庭への関与を高めるためには、これらの主婦利権をもう一度見直すべきである。夫との権限共有をもっと進めるべきだこと。
（2015年2月）

女社会の実態が分かりにくい理由。

自分たちで、自分たちのことが、冷静、客観的に分析、批判できないのが、ウェットな女社会の特徴である。 女性学を標榜しているくせに、女社会の実態分析に無知な日本フェミニズムを生み出していること。 女社会の特徴は、今まで誰も分析して来なかった、来られなかった。それだけ分析しにくいということの表れでもある。 女社会の住人である女性たちは、自分たちからは、自分たちの社会の特性を解明できない。 女社会の特徴は、日本社会の特徴でもある。

なぜ、女社会が、今まで正しく分析されてこなかったかと言えば、

女性たちは、いつも周囲と一体、一心同体であり、互いに近い、親しい距離にあるためである。絶えず互いに感情移入、共感し合うため、互いに相手を冷静に分析、批判しにくいのであること。 女社会においては、所属集団の他者と一つになること、一丸となること、協調、同期、和合、溶け込み、排他を強制される。 女社会においては、成員は、周囲と距離を置くことができない。自分の所属集団、仲間から距離を置くと、付き合いが悪いと見なされ、すぐにいじめられたり、迫害されたりするため、自分の所属集団、仲間を客観視するのが難しいのである。 その点、女社会は、冷静、冷淡な客観視を必要とする科学の敵である。

女 同士、表面的に良い外面を見せるために内部で一致結束しようとする結果、女社会は、どうしても排他的、閉鎖的になり、密室政治になりやすい。ある女性が、 女社会内部のことを外部に漏らすと、誰々のことをこういうふうに批判していると当事者に特定されてしまい、親密な内情をばらしたとして陰湿な報復が待って いるため、漏らせない。日本で会社員が会社の内情を暴露、内部告発すると、退職強要されるのと根は一緒である。
（初出 2011年8月）

「弱い」女性の立ち位置

女性は、筋力のなさとかを、自分たちの弱さの根拠として主張するが、実際のところ、筋力、武力では、社会を支配できない。日本女性の、社会を支配する力は、稲作農耕の自然環境に適応するために必要な、心理社会的なウェットさであり、心理、社会力である。 日本女性のように、自らを弱者だと主張する、あるいは自ら弱者の立場に立つことは、社会を支配できて、かつ自己保身できる絶好の立ち位置である。
（初出 2011年8月）

女性と甘え

甘えの根源は、女性にある。
楽したい、守られたい、養われたい、といった生物学的貴重品に当たる個体としてのもてなしを女性は、周囲に要求しがちであり、それが甘えと直結していると言える。
日本社会が甘えが目立つ社会になっているのは、女性の力が強いからである。

（初出 2012年6月）

日本女性の専業主婦指向はリーズナブル。

日本で、専業主婦になりたい若い女性が多いのは、リーズナブルである。

それは、家の中にいて、養ってもらえる、守ってもらえる、楽ができるからである。

また、家計管理や子育てといった、経済的権力や教育面での権力を持つことができて、実質的な家の主になることができるからである。家そのものが自分の生きがいになるのである。

日本の主婦は、経済、防衛面で、寄生者でありながら、権力者になれるのであること。家庭内役人、家庭内公務員と呼べること。

これに対して、欧米の女性は、家で権力を持つことができず、家から疎外されている。それゆえ、家の外に、生きがい、キャリアや仕事を探そうとすること。日本男性と同じであること。

日本の家族においては、女性の保身が確保されやすい。奥さんとして、完全に奥の人でいることができ、奥で守られるからである。それゆえ、女性に有利であること。

欧米の家族においては、女性の保身が確保されにくい。それは、女性に対しても個人の自立を要求する結果、女性が十分に守られず、表に露出してしまうからである。それゆえ、女性に不利であること。

（初出 2012年6月）

お局と姉御？

職場での女性の権力を考えた場合、従来のいわゆるお局というのは、独身高齢で、仕事ができなくて昇進無しで、それにもかかわらず権力者として威張るというネガティブな存在として捉えられている。それとは別に、恋愛・結婚していて、仕事ができて、昇進していて、しかも自分で威張らず、周囲が自然と自発的に後を付いてくるタイプの女性社員も相当いると思われる。

日本の職場のお局は、女性の高齢独身で、ヒラ社員で、仕事ができないのに、彼女が威張るのを誰も止められないのであり、圧倒的なパワーを持っている存在だと言える。彼女が管理職だったり、仕事が出来る社員、すなわち局型上司、上役局であれば、もっと声が大きくなると考えられる。そうした存在がなかなか見られないのは、本来そうなるべき存在の女性たちが、結婚して専業主婦とかになって、家庭でパワーを振るっているためと考えられる。

（初出 2010年7月）

女性的生き方の押しつけ

日本の女性は、女性的な生き方を男性に押しつけている面がある。
女性的な生き方とは、ウェットで、安全第一、退嬰的な生き方である。
具体的には、集団主義とかになって現れる。
（初出 2009年11月）

世間、空気と女性

日本の「世間」「空気」を作っているのは女性である。
「世間」は、女性の作り出した女流の相互監視、相互牽制社会である。
「空気」は、液体分子のように、互いに身を寄せ合って一体となっている集団＝「世間」内の人々の間に共通に漂う、その場の雰囲気、暗黙の了解である。
いずれも、互いに一体化するのを好む女性由来である。
（初出 2009年11月）

日本を支配する4つの女性類型

日本社会を支配する女性は、4つのタイプに分かれると考えられる。
(1)ヒステリータイプ いつもピリピリしていて、キャーキャー金切り声を上げげて、自己の正当性を主張すること。ハイミスの、フェミニストがこれに当たる。
(2)パワフルタイプ　腹が据わった行動力のある、肝っ玉母さんがこれに当たる。
(3)クッションタイプ　あらゆることを呑み込む、包容力に満ちた、優しい、慈しみに溢れた、慈母がこれに当たる。
(4)キャリアタイプ　会社とかで仕事をそつなくこなす、できる有能なキャリアウーマン
、やり手がこれに当たる。
（初出 2009年11月）

日本女性が専業主婦になりたがる本当の理由。

日本女性が専業主婦になることにこだわる本当の理由は、従来言われてきたような、単に賃金労働をせず、働かずに楽をしたいとか、優雅な生活を送ることにあこがれるためだけではない。
自分が子育て専従者になりたいからである。
日本の女性は、子供を独占、占有しようとする欲求がとても強い存在である。「この子は私のもの」という感じで、子供の私物化が行われている。そうした日本の母親による「この子は、私が育て上げる」という教育者としての自負が、子育て専従者になることを求めさせるのである。要は、子供を自分の思うままに操りたいのであること。
子育て専従になる場合、家庭外の会社とかでの仕事を掛け持ちだと、子育てに十分な時間が割けない。そうかといって、子育てだけをして、会社とかでの仕事をしないと、自身の収入が途絶えてしまう。この問題を解決するために、自身では会社とかで仕事をせずに、子育て専従でも、暮らしていけるように、夫には高収入でいて欲しいと考えるのである。
また、子供を保育園に預けると、子供が自分と一緒にいる時間が短くなり、自分との一体感を喪失するので、良くないと考える。
夫婦が共働きをすると、妻が夫に対して、子育て上のアドバンテー

ジを持てなくなるので、良くないと考える。
自分の子供を自分が独占したい、子供を夫に渡したくない、自分の子供に自分の息吹をできるだけ吹き込みたいという思いが、日本女性を子育て専従の専業主婦になることへと駆り立てているのである。それは、日本社会の成員が母親である女性に支配され、その思うままに動く母権社会の成立に不可欠である。
逆に言えば、夫婦共働きが、妻による子供独占を阻止できることにつながり、父親の育児への介入の機会を増やし、ひいては母からの子供の解放を可能にすると言える。日本男性は、夫婦共働きを目指すべきである。
（初出 2011年11月）

日本女性と仕事と家庭の両立

現代の日本の女性は、仕事と家庭との両立に苦しむ例が多いとされる。
ただし、日本女性は、経済的に困窮しているので無い限り、社会的にわざわざ外働きする必要が無い。好きで働く分には構わないけれど。
家庭内に居場所の無い、それゆえ外に仕事に出る必要のある、欧米女性や日本男性と異なり、日本女性の居場所は、母、姑として、家庭内に十分確保されていると言える。彼女たちは、実質的に家庭の中心であり、家計管理や子育ての権限を握り、家庭内の既得権益を独占している。
日本女性が、家庭の外の社会で仕事をするには、自分の分身、付属物である自分の息子を使って、自分の代わりに思う存分外働きさせれば良い。事実、今まではそうやってきたのである。
ただし、日本で女性自身が外の仕事に強い興味がある場合、仕事か家庭かの二者択一ではなく、仕事も家庭も、貪欲に、どちらも実現し、主導権を握りたいと考えるのが自然の成り行きである。
それゆえ、本来、日本の女性は、仕事も家庭も、両方十分楽に、50:50で、やって行ける形に、日本の社会を自ら改造すべきであると言える。
ところが、日本女性は、その改造を、自己の保身のため、自らは手を出さず、汚さず、男性にやらせようとする。自分からは、なかなか社会を変えようとしないのである。
しかるに、日本の男性は、仕事オンリー、仕事100パーセントで生きる存在である。それは、家庭から疎外されていて居場所が無いから、外仕事に専ら情熱を傾けるというのもあるし、自分の母である姑の自己実現の手段となっているから、というのもある。

なので、日本の男性は、家庭に対する配慮が足りず、社会改造は上手く行かない。
現状、日本社会において、仕事と家庭の両立を図る社会改造を、本格的に実行する人がいないのが現状である。
一つは、現在、外仕事ばかりしている日本の男性に、家庭内の居場所を作り、家庭内の権益を分け与えることである。これは、家庭内において、男性の発言権が強くなり、家計管理、子育て、家自体の管理といいった女性の既得権益が脅かされることにつながる。男性の家庭内地位の向上であること。
もう一つは、姑役の女性が、息子以外に、自ら社会を変革する、社会に働きかける自己実現の手段を持つことである。ないし、息子を自己実現のダシに使うのを止めることであること。
そもそも、日本女性による母、姑としての社会支配、社会に向けての自己実現が、男性としての息子がいないと始まらない側面があるのは事実である。これは、根本的なところで男性頼みであると言える。
ただし、母、姑は、子どもとしての息子、男性を命令、支配するより格上の存在であり、それゆえ日本社会支配の主体は、あくまで母、姑であると言える。
母、姑としての日本女性と、息子としての日本男性との関係は、大工と大工道具との関係に似ている。
大工は、大工道具が無いと、生計を立てることができず、自己実現ができず、生きていけない。大工道具は、そういう点で、大工の生殺を握る存在である。
しかし、大工道具は、所詮は、只の道具である。上位にいるのは、大工である。
大工が日本女性、大工道具が、その息子として捉えられるのである。

（初出 2012年8月）

日本男性による女性蔑視の根源

日本社会において、母、姑は、嫁や、同世代の若い女性を、自分の可愛い母子連合体、母子ユニオンの仲間である、自分の息子の世話をする道具、下僕、メイド、奴隷として、目下の存在として捉える見方が根強いと言える。自分の息子が、母、姑自身の自己実現のために、仕事に100パーセント打ち込めるようになるための道具、支

え、下世話役となることを、嫁に対して望むのである。

この考え方を、息子である男性も、母、姑からそのまま継承するのである。すなわち、同世代の女性を、自分の世話をする道具、下僕として、目下の存在と見なすのであること。これが、日本男性による女性蔑視の根源であると言える。結局、根源は、息子の親玉、親分の母、姑による、嫁への蔑視にあると言え、子分の息子である男性がそれに従った結果が、日本社会における男尊女卑であると捉えることができる。

これは、上の世代の上位母子連合体、母子ユニオンによる、下の世代の下位母子連合体、母子ユニオンの絶対的支配と蔑視の結果として捉えられる。

嫁が、母、姑の立場に転化して、同じことが世代を越えて繰り返されるのである。すなわち上世代、下世代母子連合体の上下関係の世代間連鎖として捉えられること。

これは、日本社会において、先輩に当たる人間が後輩のことを、自分の世話をする道具、下僕と見なしがちなのと、根が一緒であると言える。後輩が先輩の立場に転化して、同じことが繰り返される。

また、目下の嫁となる、娘である女性も、小姑としては、嫁に対して目上の存在であり、嫁を蔑視する存在であると言える。

（初出 2012年8月）

孤立無援になりがちな日本女性

日本人女性は、液体分子的であり、あまり積極的に動かない、待ちの姿勢が顕著である。
そのまま一人放っておかれると、いつまでも一人ぼっちのままで、助けが得られなかったり、知り合いができない。
互いに出会う、意気投合するきっかけとなる、誰か他の人がセッティングした会合への出席、同席が、どうしても彼女たちには必要になる。そういう点では、仲人頼みである。
子育て転勤族の母親がそのままでは孤立しがちで、放っておかれると孤立無援になってしまい、個人～家庭レベルで閉鎖的な密室育児を行いがちになりやすいのが、事例としてあげられる。

一方、ドライな気体分子的な欧米人は、布教者、伝道師のように、自分から積極的に動いて、どんどん知り合いを作っていく。

（初出 2012年6月）

日本の主婦利権を追及しようこと。

日本の主婦は、家の財布を管理する権限や、子供を自分の操り人形として自由に調教できる権限を、結婚して家に入るのと同時に手に入れ、独占している。

これは、家庭においてのみならず社会全体から見ても大きな利権であり、そんな大きな利権を女性が占有していることに、社会的関心がもう少し高まるべきだと思う。

まるで、男性を、会社で働くのに専念させ、家庭にはノータッチでいるのが望ましいみたいな感じの利権である。

日本男性の家庭への関与を高めるためには、これらの主婦利権をもう一度見直すべきである。夫との権限共有をもっと進めるべきだこと。

（初出 2014年2月）

主婦、姑の院政

日本社会は、主婦、姑の院政下に置かれている。
表立った支配者である男性には、実は実権が無く、主婦や姑が持っているのである。
（初出 2009年11月）

院政と女性による社会支配の類似点

共に、実質的な権力を握りながらも、保身のため自分からは直接手を下さず、自分の操り人形に手を下させることで、自分は責任逃れをするところが似ている。

共に、自ら表舞台に出ることを避け、奥からその実態が見えにくいようにして、介入するところが似ている。

（初出 2014年2月）

日本における女性上位

日本の女性は、男性によるクリスマスプレゼントやデートコースのプラン立てを厳しく評価している。クリスマスイブのディナーでファミリーレストランでの食事はダメだとか、ダメ出しをする側に回っている。
その点、女性は、成果主義会社の上司、管理職のような評価者、あるいは学校の先生のような採点者の立場に立っており、評価される側（部下）、採点される側（生徒）の男性よりも立場が上であると言える。
あるいは、女性は、顧客、上客として、接待を受ける側の享受者、消費者であり、基本的に楽である。一方、男性は、接待する側の供給者、生産者、労働者であり、基本的に苦しい。この点でも、女性は、男性よりも立場が上であると言える。
こうした点が、女性による男性差別につながっているのではないだろうか。
（初出 2012年1月）

日本が女性的な社会のままで、中国・韓国上位の東アジア秩序に呑まれない方法。

日本が女性的な社会のままで、中国、韓国上位の東アジア秩序に呑まれないようにするには、どうすれば良いか？。
一つは、欧米の中で、相対的に女性的、母性重視な国に接近するこ

とである。ほんの少しだけだが、ありそうである。
南イタリア、ローマとかのコネ社会、マンミズモの社会に接近することであること。
もう一つは、中国と隣接し、中国と反発し合う、中国と仲の良くない、日本同様に女性的な国に接近することである。
親日の台湾とかが考えられる。
あるいは、大国のロシアとかインドとか考えられること。農耕民主体と考えられること。
あるいは、東南アジア諸国（ベトナム、マレーシア・・・・）が考えられる。日本と同じ稲作農耕民であり、親近性が高い。華僑の経済的支配に悩まされているので、抱える悩みは似ている。

（おまけ）北方領土の上手な返してもらい方
とりあえず二島を返してもらい、同時に、見返りとして、LNG等の経済利権を確保すること。
その後、政権が変わったので、残り二島を返せとしきりにゴネること。（中国のやり方と同じことをすること。）実効支配すること。
（初出 2013年10月）

国策としての日本フェミニズム、ジェンダー論

・・・なぜ日本＝母権社会論は議論の俎上に取り上げらないか？。
日本は、東アジアの中心である中国、その懐刀である韓国に対して、自分が劣位だというコンプレックスがある。中国、韓国は、日本に対して、上から目線で接しており、日本が自分たちより劣位の者として振る舞うべきだというのが東アジアの歴史的認識である。
日本は、中国、韓国にあまり会わないように、なかば鎖国状態であった。
日本がこうしたコンプレックスを打破すべく暴れたのが、日韓併合と中国侵略であり、中国と韓国に対して上位になろうとしたが、太平洋戦争で負けて、結局なれなかった。
日本は、コンプレックスを打破すべく、脱亜入欧で欧米の仲間入りを指向し、強い欧米に認めてもらいたい、中国、韓国を見返したいと思っている。日本人は、映画とかノーベル賞とか、欧米に認められると、有頂天になって喜ぶ体質がある。
日本人は、ドライ・ウェット性格診断テストで、欧米的なドライ、気体分子運動パターンの方を、自分に合っているとして選択する。それは、自由主義の欧米先進国にあやかりたいという気持ちと、不

自由な日本社会の中に暮らしていて、自由が欲しい、本当は自分は自由なんだと自分自身に言い聞かせたいという気持ちがある。
自由の確保と、日本人や女性の好きな安全、保身の確保とは相反する。
日本は、今や欧米を凌ぐ勢いの中国、韓国から将来ネチネチと陰湿に報復される可能性が大きい。それを恐れて、より欧米にしがみつくようになっていること。
ちなみに、中国、韓国の歴史認識は、「自分たちの方がもともと伝統的に上位なのに、日本がその面子を潰してけしからん。当面、戦争で被った損害への謝罪を要求するが、それだけではなく、日本の、中国、韓国上位の伝統的構図への復旧を要求する。中国、韓国上位の伝統的東アジア的秩序への日本の平伏を要求すること。」というものであること。
ここから、脱亜入欧、欧米第一主義と日本におけるジェンダー論との関連について述べること。
日本は、欧米色に競って染まろうとして、欧米理論を直輸入してきた。
欧米ジェンダー理論は、差別された弱い女性の権利獲得のための闘争、フェミニズムメインだった。
日本が欧米色に染まろうとすると、導入するジェンダー理論は、フェミニズムの色眼鏡付きへと、自動的になってしまう。すなわち、日本を欧米同様、あるいはそれ以上に家父長制的だと主張することになること。
これは、母権が強い日本の現状と矛盾する。
日本の母権の強さを強調すると、日本は、欧米家父長制社会の一員では無くなってしまう。日本は、欧米社会の中で異質だということになる。あるいは、中国、韓国の仲間だということになってしまうこと。それは、日本が東アジア秩序の下で生きることになり、日本にとってはまずいことである。
日本は、欧米の家父長制を前提としたジェンダー理論を日本社会に適用させないと、欧米との一体化、欧米化が成し遂げられないので困る。欧米の一員から外されるので困ること。
東アジア秩序を避けるには、イデオロギーで、対欧米一体化、欧米第一主義をどうしても国策で取る必要があり、日本の欧米との一体化で必要なのは、日本社会を、欧米と同質の家父長制社会だと宣言することであった。それが、日本のジェンダー学者の役割だった。
日本のフェミニズム、ジェンダー学者は、日本が欧米の一員として認められる、一員でいるための一種の切り札であった。
日本のフェミニズム、ジェンダー論が、欧米フェミニズム理論をそのまま受容したことは、あるいは受容して日本社会に当てはめ、日

本＝欧米並みあるいはそれ以上の家父長制社会とみなしたのは、日本の伝統的な脱亜入欧の国策に合わせたものであり、その点、日本のジェンダー学者は、御用学者である。
日本は、欧米を先進国と崇めて、高速で追従する、すがりつくために、その文物を見境なく、大量に恒常的に直輸入した。その一環として、欧米産のジェンダー理論、フェミニズムがあった。
欧米にとって日本が自分たちと同質な仲間だということを認証するために、日本異質論の否定の一環として、あるいは日本が欧米に近づいていこうとしていることの証明の作業の一環として、欧米ジェンダー理論の日本直輸入と定着が行われた。
本来日本にあるべきジェンダー論である母性社会論、母権社会論は、日本の東アジア秩序引き戻しにつながる、あるいは、日本の欧米化指向に逆行する、日本の国策にとって都合の悪い理論である。
日本は、本来、自分たちとは異質な欧米社会の理論を、有り難いお経みたいに崇拝、信仰して、そのまま自分たちにも、矛盾、非整合部分を多く抱えたまま、強引に日本社会に適合、普及させ、日本人に自分たちは欧米並みかそれ以上の家父長制社会、男社会だと感化させることに成功した。
家父長制としては、欧米と同類、お仲間だという訳である。日本にとって、欧米の理論は絶対に正しいというか、正しいとして従わないと欧米の一員から外されてしまい、日本劣勢の東アジア秩序に帰って行かないといけない。
日本人は、本来、東アジアの一員なのに、何でも欧米社会の枠組みで考えたがる。思想、科学、テクノロジー、社会把握、全てにおいて、その傾向がある。
欧米フェミニズムを、日本に強制的に導入して、日本が欧米を先生とおだてることによって、欧米をヨイショする、持ち上げることで、自分たちも欧米の一員になって、中国、韓国と差を付けるという魂胆だった。
脱亜入欧イデオロギーと、日本における欧米フェミニズム、ジェンダー論の受容は、日本の欧米と仲良くして、欧米の仲間内から外れないための大きな戦略である。それは欧米追従で、東アジア秩序から逃げるのに効果的であり、今後も続く。
日本が欧米化を引き続き推進していくためには、日本＝母権社会の枠組みを出すのは、せっかく出来た日本と欧米との一体化を否定し、東アジア秩序に戻すもので、到底、日本支配層には受け入れられない。理論としては合っていても、有害として無視して、議論の俎上に乗せることは殆ど無い。
日本は、ノーベル賞にしても、映画賞にしても、音楽コンクールにしても、欧米の賞を貰うことに汲々として、貰ったら、欧米に認め

られた、欧米の一員とみなされたように感じられて大喜びする。そうしたことが、日本国民を上機嫌にさせる。
日本では、国を挙げての対欧米一体化の活動があり、その一つとして、欧米ジェンダー理論、フェミニズムの強引な日本社会への当てはめが行われた。それは国策であった。
日本社会が欧米ジェンダー論のようには動かないことを否定するために、日本は欧米ジェンダー理論通りに動くのだと主張するために、「日本は男社会で、女性は低い社会的地位に甘んじている」と、日本国民を教化して、絶えず啓蒙活動を行っている。
欧米が強ければ、脱亜入欧と、対欧米一体化をそのまま続けることになるが、だんだん中国が強くなり、欧米が弱くなっている。
日本のフェミニズムが日本社会を欧米以上の男社会、家父長制とみなすのは、日本が欧米を世界のスタンダードとして見なし、欧米社会の一員として見られ続けるための故意の手段、出汁にすぎない。
日本＝家父長制論は、欧米追従の国策の一環なので、日本の学者はそれを、検証、否定せず、最初から「それありき」の前提としてジェンダー研究に入った。検証してしまうと、日本＝母性的、女性的となってしまい、対欧米一体化のイデオロギーにとって都合が悪いので、意図的にしない。
日本＝家父長制論は、一種のお経みたいなもので、間違っている訳が無いと信仰せざるを得ない。信心しないと、伝統的な東アジア秩序、中国、韓国の下位国扱いされること、中国の属国扱いされることを甘んじて受けると見なされ、非難されること。
日本の家父長制家族、ジェンダー理論を受け入れるかどうかは、対欧米一体化主義者（欧化主義者）か、東アジア重視、東アジア所属主義者かの踏み絵になると考えられること。
日本母権社会論も、一部では、社会の父性化を目指して欧米指向となっているので、欧化という点では同じだが、欧米産の理論ではない（無名の日本人の個人的な言説であること。）ので、検討すらされず、放置状態であること。
日本＝家父長制社会論は、欧米有名学者のお墨付きで、格式がより高く信用できると見なされる。理論が合っているかどうかはどうでもよい。自分たちが理論を直輸入して、日本が欧米と同質だと主張できれば、それで良い。
日本のジェンダー論、フェミニズムが正しいかどうか、日本社会に適合的かどうかは、そもそも問題ではなかった。どうでも良かった。欧米の学説をそのまま受け入れることで、欧米との同質化、一体化が図れる、進むことが一番重要だった。
国の政策として、国家戦略として、「欧米日本同盟」が理想であり、欧米理論直輸入の、日本＝家父長制社会を主張する日本のジェ

ンダー理論は、その「欧米日本同盟」を実現するための戦略的ツールだった。そのジェンダー論の内容が、日本の現状に即しているかどうかは問題では無かった。
脱亜入欧の存続という、体制維持側の国策として、欧米理論そのままの形でとにかく日本に導入することが求められた。それが脱亜入欧に一番効果的と考えられた。
脱亜入欧できるなら、日本社会の真実を把握することは問題外だった。
とにかく、欧米理論の早期丸ごと無修正での吸収と、一般国民、民衆、大衆への速やかな啓蒙（直接的で機械的で無理矢理なこと。）が必要だった。そうした欧米理論の一つとしてジェンダー論があった。
日本は、欧米と国情が違うのでそれだけ導入し甲斐があり、日本に応用する大義名分になる。
欧米直輸入のジェンダー論を学んだ学者を、社会的影響力の大きい有名大学（東京大学等）の教員に優先的に登用して教えさせたこと。あるいは、男女共同参画社会論を、政府主導で流行らせたこと。
日本のジェンダー論、フェミニズムは、欧米直輸入ということに、そしてそうすることで日本社会を欧米並みに大きく変えることができるということに意義があった（国側として）こと。そこには、日本社会を欧米並みに出来るという読みがあった。
日本社会の現状把握（村社会で、稲作農耕民的で、母性的で女性が強い・・。）は、国にとって、あるいは国民にとってどうでも良かった。日本社会の真実把握はそもそも不要、問題外であった。真実を把握してしまうと、東アジア秩序のことを思い出してしまい、政策的に都合が悪かった。
日本社会の実情で、進んでいると見なす欧米理論に合わない点を、片っ端から遅れているとして否定的に断定し、そこを欧米並みに変えていくことで、欧米並みの先進国の立場を持とうというのが、大元の思想である。
日本社会の欧米化と、東アジア秩序からの脱却こそが、真の目標である。
日本社会にとっては、欧米理論が絶対的な先生で、それに強迫的に合わせよう、従おうとしている。それを疑うと、頭の中で抑えていた東アジア秩序が途端に顔を出すので、疑う訳には行かない。
欧米理論の早期、効果的な導入のためには、日本社会の真実の探究は考慮しない、無視する、放棄するのである。
現状の日本社会は、欧米理論に頼らないで、自分の文脈で掘り返した場合にはどうなるのか、どう捉えられるのかということは、何も

考えられていない。というか、欧米理論導入の邪魔なので、考えてはいけない。
欧米の社会理論という正解と照らし合わせて、日本社会はどうなっているか、どこが間違っているか、足りないかと考えがちなのである。有賀喜左衛門らの日本家族理論とかは例外であるが。
欧米理論を除くと、欧米の後ろ盾を失うと、戦時中の軍部や右翼とかのナイーブな天皇制に基づく神国日本論が再登場するだけである。中国、韓国にそれで直に対応しようとすること。
客観的で冷静な分析視点が持てないのが日本の社会学者の欠点である。
自分の頭で考えず、欧米学者の頭で考えるのが、日本の社会学者である。
日本＝母権社会論は、東アジア秩序を脱却し、欧米化したいと考える日本の国側、体制側にとって都合が悪いので、「欧米日本同盟」指向、欧化主義が続く限り今後も無視されるだろう。ただし、日本が欧米の後ろ盾を失ったり、日本が中国の属国になった暁には、見直される、注目されるだろう。
現在の日本のジェンダー論（というか大元の社会学理論も。）は、脱亜入欧したい、東アジア秩序を脱して欧米に近づき、その一員になりたいという欲求、人為的意図の実現が目的であり、そのための欧米社会理論の学習啓蒙活動となっている。村社会である日本社会の科学的真実を知りたい、探求したいというのが目的ではない。最初から、科学的でない、特定の目的実現のためのイデオロギーとなっていること。
日本の社会学は、日本社会がどれだけ東アジア秩序から遠ざかり、欧米社会に近づいたかを測定、評価する学問、ツールと化している。あるいは、日本が欧米社会に近づけるよう、欧米社会の社会的ノウハウを直輸入して日本社会に提供する学問、ツールと化している。そして、日本社会が欧米社会に近づいたと分かったら喜ぶのである。純粋な科学ではなく、内容に偏りがあるのである。
一応、社会分析をやって、社会を照らしてはいるが、肝心の急所、局部（日本で女性が強い。）を外していること。
日本が欧米の一員と見なすには、欧米学説を何が何でも日本社会に適用可能にする必要があり、欧米社会が家父長制だったので、日本も欧米社会理論が当てはめ可能となるように、家父長制を擬制することにしたのである。
日本国は、自由や民主主義を欧米社会同様に信奉し、女性の活用を提言する。伝統的な日本の母性流ではなく、欧米流の父性的フェミニズム（父性社会、家父長制社会の中での女性勢力拡大）による女性活用であること。伝統的な日本の母性流では、欧米流の自由や民

主主義は当てはまらなくなる。

日本社会のあり方を欧米社会に合わせたこと。欧米は父性社会、家父長制社会なので、日本も同じ仲間で父性社会、家父長制社会だと言いたい。日本が母性社会であることを強調すると、欧米から仲間はずれになってしまう。日本社会で家父長制に似ている所（男尊女卑、父系、職場が男性中心。）をピックアップし、日本も家父長制だと主張する。あるいは、日本は欧米並みの男社会と主張する。

日本社会の特徴は、欧米化にやたらと一生懸命、必死なところ。（もう後が無いみたいな感じで。）それも香港みたいに植民地だからでなく、自発的にやっているところ。それらが、他の東アジアには無い特色だと言える。

（初出 2013年10月）

女性が管理職になりにくい理由。

女性が上に立つ局面が少ない、増えない理由、女性が管理職になりにくい理由は、以下のように考えられる。

女性は、支配すると、失敗しても、責任を取らせにくいし、自らもすぐ周囲に責任転嫁する。卵子数の相対的な少なさや子宮の子育て上の必須性から、女性は生物学的に貴重な存在であり、自ら傷つくのはまずい大切な存在なので、失敗の責任は周囲がかぶる、負担することになる。

その結果、女性は、何をしてもとがめられないことになりやすく、とかく専横しやすい。支配すれども責任取らず、を地で行くことになるのであること。

女性に対しては、処罰しにくい、信賞必罰の原理を貫通しにくい、厳しい態度を取りにくく、問責等の対応がとかく甘くなりやすい、という欠点があり、それが社会的に害毒となるので、それゆえ女性の上位者への登用が回避されてきたと考えられる。

それゆえ、女性による直接支配は嫌われるのである。女性による直接支配は、避けられる傾向があり、代わりに、女性は自分自身の息

子や夫を自分の操りロボットにして、彼らに責任を取らせる間接支配がなされるように落ち着いてきていると言える。

もう一つは、学校や職場などで、女性は、能力発揮を人為的にわざと抑える、控えめにしているということが挙げられる。

女性が上を行くと、男性が能力的に萎えてしまうこと。（稼がなくなる、出世しようとしなくなること。推進力が無くなる。これらは、家庭に経済的安定をもたらすために必要。）それを防ぐためであること。

女性としては、家計管理と子供の教育（子供の私兵化）といった家庭支配の実権が掌握できれば、それで十分である。男性、夫、父は、単に稼いでくれればそれだけで十分である。

家庭支配の実権掌握のプロセスに学歴は余り必要無い。強いて言えば、能力ある男性と出会って結婚できるようにするために必要である、といった程度であること。なので、女性は、高学歴取得に男性ほど熱心でない。

日本女性は、表面上は男を立てて、一方、実権は自分が握る。

日本の子供が、息子も含めて母性的になるのは、母が強いからである。

（初出 2013年10月）

日本における男性と女性の関係は、政治家と役人、天皇の関係に似ている。

日本における男性と女性の関係は、政治家と役人、天皇の関係に似ている。

男性や政治家は、表舞台に立ち、表面的な権力を行使するが、責任を取らされ、容易に首をすげ替えられる。

女性や役人は、裏方である。（政治家の国会答弁内容を書くなど。）しかし、彼らは、実権を掌握し、かつ責任は政治家に取らせて、自分は安泰である。

天皇も女性に似ている。最高権力者ではあるが、表舞台には出ずに、御簾の向こうに隠れている。最高権力を隠れて持ちつつ、かつ普段の政治は政治家に行わせて、自分は責任を取る必要が無く、安泰である。

天皇と、役人は、根本的な所で保身が効くのであり、女性的であるといえる。政治家が肝心な所で地位が必ずしも高いと言えないのは、この辺りに理由がある。

日本において、役人が、政治家でなく、天皇の直属の親衛隊（直参）なのも、この辺と関係有るのではないか。政治家は、所詮は外様なのである。
（初出 2013年10月）

３．

本書の要約、まとめ

※この項目は、書籍「母権社会日本」と共通です。
家庭、家族関係は、大きく分けて、。
（１）夫婦関係 家庭の基盤となる男女関係
（２）親子関係 父子、母子、義理の父子、母子関係
から成ると言えること。
日本の家庭、家族の中の男女の勢力関係は、。
（１）夫婦関係に着目すると、日本では、夫＝男性が強く見えることが多い。
・嫁が夫の家に嫁入りし、夫の家の言うことを聞く必要がある。
・男尊女卑で、夫が威張っている。
・稼ぐのが主に夫であることが多く、妻、嫁はあまり稼げておらず、経済的に夫に依存せざるを得ない。
こうした点を強調して、日本の家族は家父長制だという主張が、日本の社会学者の間では主流になっている。
一方、妻＝女性が強く見える側面もある。

妻が家計管理の権限を独占していることが多く、小遣いを夫に渡す場面が多く見られる。小遣いは渡す財務大臣役の方が、もらう方より地位が上である。
（２）親子関係に着目すると、日本では、母＝女性が強い。子育ての権限を独占し、教育ママゴンとか呼ばれ、怪物扱いされていること。子供を自らの母性の支配下で動く操りロボットにすることにすっかり成功していること。一方、父は、子供と関わりをあまり持とうとせず、影が薄い。
こうした母親の影響力の大きさを考慮して、日本社会は母性社会だという主張が、日本の臨床心理学者の間で主流になっている。
このように、夫婦関係を見た場合と、親子関係を見た場合とで、日本の男女の勢力に関する見方が分裂しているのが現状であり、両者の見方をうまくつなぎ合わせる統合理論が必要である。
筆者は、両者の見方をうまく統合させる契機として、「夫＝お母さん（姑）の息子」と見なして捉えることを提唱すること。
家父長として強い存在と思われてきた夫が、実は、母、姑の支配下に置かれる操りロボットとして、実は父性が未発達の、母性的な弱い存在であることを主張する。
日本において、子育てを母が独占し、子供の幼少の時から、強力な排他的母子連合体（母子ユニオン）を子供と形成すること。（母が支配者で、子が従属者、母の操りロボットとなること。）この母子一心同体状態が子供が大人になってからもずっと持続し、この既存の母子連合体が一体となって、新入りの嫁を支配するという構図になっている。このうち、「母の息子＝夫」と嫁の間のみを取りだして見ると、夫が嫁である妻を支配するという従来、日本＝家父長制社会論で主張されてきた構図が見える。しかし実際には、夫は、母である姑に支配されており、その姑と一体となって、嫁を抑圧しているに過ぎない。
日本の夫婦における勢力関係を正しく把握するには、夫婦（夫妻）だけを見るのではなく、夫婦（夫妻）のうちの夫側に、母のくさびを打ち込むことが必要である。あるいは、母や姑が一家の実質的な中心であり、真の支配者であるとする「母」「姑」中心の視点を持つことが必要である。
夫婦だけを見るのでなく、
・母～息子（夫）←（何人も割って入ることを許さない母子連合体、ユニオン。）
・姑～嫁（妻）
・夫（母の息子）～妻（嫁）
の3つを同時に見る必要がある。夫の父（舅）は、一世代前の母の息子のままの状態であり、影が薄い。夫の姉妹は、小姑として、夫

同様、姑中心の母子連合体の一員として、嫁を支配する、姑に準ずる存在である。
夫は、妻にとっては一見強い家父長に見えながら、実際のところは、いつまで経っても母の大きい息子のまま、母に支配され、精神的に自立できない状態にある弱い存在であるという認識が必要である。
母の息子である夫、父は、一家の精神的支柱である母と違い、家父長扱いされながらも、母に精神的に依存し続けて一家の精神的支柱になれない、ともすれば軽蔑され見下される存在と成り下がっているのである。
夫は、仕事にかまけて子供と離ればなれになっているが、実は、この仕事が、夫の母の代わりに行っているというか、母の自己実現の代理になっている。会社での出世昇進とか、一見、夫が自分自身のために頑張ってしているように見えて、実は、夫自身が母の中に取り込まれ、母と一心同体となって母のために頑張って行っているというのが実情である。母が息子の出世昇進に一喜一憂し、夫にとって、自分の人生の成功が、そのまま母の人生の成功になっている。
また、夫が会社で取る行動は、会社人間のように、会社との一体感、包含感を重視する、とかく母性的なものになりがちで、彼を含めた会社組織の男性たちが大人になっても母の影響下から脱することが出来ていないことを示している。
筆者は、こうした、。
・母（姑）による息子＝（妻にとっての夫）の全人格的支配
・妻による家計管理の権限独占に基づく夫の経済的支配
の両者を合わせることで、日本の家庭～社会全体において、母性、女性による男性の支配が確立しており、日本は、実は、母権社会、女権社会である、と主張する。一家の中心は、母、姑である。
欧米の権威筋の学説（Bachofen等）は、母権社会の存在をこれまで否定してきており、筆者の主張はこれに正面から反対するものである。
日本人の国民性と男女の性格との相関を取ると、日本人は女らしい（相互の一体感、所属の重視。護送船団式に守られること、保身安全の重視。リスク回避、責任回避重視。液体分子運動的でウェット・・・）で動いているという結論が出る。これは、日本社会が、女権、母権社会であることの動かぬ証拠と考えられる。日本人は、姑根性で動いている。（姑根性とは、周囲の、後輩とかの嫁相当の目下の者に対して、口答えを一切許さず、妬み心満載で、その全人格を一方的、専制的に支配すること。）このこと自体が、日本社会における母、姑の影響力、支配力の強さを表している。それゆえ、日本の社会、家族分析に、姑中心、母中心の視点を取ることが必要

であると言える。
従来の日本男性は、母や妻による支配を破ろうとして、がさつな乱暴者、あるいは雷親父となって、ドメスティックバイオレンスとかで対抗してきた節が見られるが、暴力を振るうだけ、より家族から軽蔑され、見放される存在になってしまう結果を生み出している。
あるいは、家庭の外の仕事に逃げようとするが、仕事に頑張ることがそのまま母の自己実現になるという、母の心理的影響、支配を振り切ることはそのままでは不可能である。
こうした女性、母性による日本社会支配は、日本社会の根底が、女向きの、水利や共同作業に縛られた稲作農耕文化で出来ているために生じると考えられる。そこで、筆者は、日本男性は、従来の伝統的稲作農耕文化から脱却して、新たに、家父長制の本場である欧米やアラブ、モンゴルといった遊牧、牧畜民の父親のようなドライな父性を身につけることで、母と妻に対抗できるようにすべきだ、母と妻の支配から解放されるべきだと主張する。これが、日本男性解放論である。要するに、子育てと家計管理において父権を確立することで、父親として真に社会で支配力を持った、尊敬される存在になろうと呼びかけるものであること。筆者は、その際、稲作農耕を、伝統的な日本方式から、よりドライなやり方のアメリカのカリフォルニア方式に改めることで、稲作農耕を維持しながら、ドライな父権を社会に実現できると予期している。
筆者は、最終的には、男女の力関係は、対等の50：50が望ましいと考えている。これが、究極の男女平等であると主張する。欧米みたいに、男性、父性が強くなり過ぎても、日本みたいに、女性、母性が強くなり過ぎても良くない、適度なバランスが必要と考える。家計管理を、夫と妻が1月交代で行う月番制導入とかである。
（初出 2012年6月）

日本男性解放論 - 真の父権確立に向けて -

１．

日本男性解放宣言

[注]●印の付いた文章が、宣言本文である。
宣言の内容は、具体的には、以下の通りとなる。
◇[宣言1]
1-1●その心をもっとドライにせよこと。男性の本分たる乾いた空気を、自らの行動様式の中に取り戻せこと。個人主義、自由主義、契約思想を体得せよこと。親分子分や、先輩後輩関係に代表される、ウェットなベタベタした人間関係から脱却せよこと。自分より大きなもの(会社組織など)に頼ろうとするなこと。
1-2●母親や身の回りの女性によって強いられた、集団主義、同調指向、権威主義、リスク回避指向のくびきから、自分自身を解き放てこと。
1-3●男性が強い欧米をモデルにするので構わないから、真の男らしさとは何かに一刻も早く気づけ。日本社会における、ドライ＝真に男性的な価値の認知、すなわち、個人主義、自由主義、独創性の重視の実現を目指せこと。
[解説1]
国民性(社会の雰囲気)という面からは、「日本的＝(ウェット)＝女性的」である。
日本男性は、「浪花節」に代表される相互一体感、集団主義や、「和合」に代表される相互同調・協調性、「先生」という呼称に代表される権威者を崇め奉る権威主義、冒険や失敗を恐れ、前例やしきたりを豊富に持つ年長者をむやみに重んじる年功序列(先輩後輩)関係を偏重してきたが、それらは本来ことごとく女性的・母性的な価値観に基づくものである。こうした価値観は、男性の生育過程で「母子癒着」関係にある母親の支配・影響下で自然と身に付いたものであり、その点、日本の男性は「母性の漬け物」と化している、と言える。
日本男性が、いかに女性によってウェットさを強いられて来たか、それは、集約的な稲作農耕社会という条件がもたらしたくびきであった。
日本社会では、工業化、都市化、能力主義の浸透により、徐々にウェットさから解放され、ドライ化が進む兆しが見える。この方向が今後も続けば、やがて日本男性は、女性(母性)の支配から解放さ

れるだろう。 日本社会のドライ化に当たっては、社会における欧米化の風潮を追い風にすべきである。ただし、社会を欧米化すると言っても、従来のような欧米への一時的な権威主義的同調で終わらせてはならない。このまま欧米化が進めば、着実に、日本社会のドライ化＝男性化が進む。
◇[宣言2]
2-1●自分が社会的弱者であることに気付け。自覚せよこと。男尊女卑をはじめとする「日本＝男性中心社会」の神話にだまされてはいけない。
[解説2]
「日本＝男社会(男性中心社会)」という言説は、全てまやかしのものである。「男尊女卑」にしても、見かけだけの男性尊重であり、男性の強さである。実際の社会の実権は、女性(母性)に握られているのが現状である。こうした「日本＝男性社会」神話は、日本女性による、本来のドライな男性らしさを一度骨抜きにした(男性をウェット化した)後で、自らの保身に役立つ「強い盾」、および収入を得るための「労働力」として、道具扱いしてこき使おうとする心の現れであり、これが日本女性の毒である。
◇[宣言3]
3-1●女性に生活を管理されるなこと。女性に身の回りのことを何でもやってもらおうとするなこと。蔑称「粗大ゴミ」「濡れ落ち葉」を脱却せよこと。妻に生活面で頼ろうとするなこと。妻に家庭内管理職として君臨されないように、できるだけ生活面で自立せよこと。
3-2●女性に家庭の外に出て働くように促せこと。女性の、家庭における影響力をなくす(女性に支配されないようにする)には、外に出て働いてもらうのが一番である。専業主婦を望む既存の男性は、こうした点で、認識不足である。そのままでは、生活の根幹を女性に支配されてしまうからである。
3-3●女性、特に母親に甘えるなこと。依存しようとするなこと。妻を母親代わりにしようとするなこと。母親から自立せよこと。
[解説3]
今まで、日本の男性は、家庭における生活の根幹を、女性(母、妻)の管理下に置かれて来た。家庭における家計管理、子供の教育といった主要機能は、女性(母)が独占している。その点、「日本の家庭＝家父長制」というのは、実は見かけだけの現象に過ぎない。日本の男性の立場を向上させるには、この現状から脱却する必要がある。
◇[宣言4]
4-1●子育てに介入せよこと。自分の行動様式・文化をもっと子供に

伝えよこと。自らの内に秘められたドライな男らしさをもっと出してこと。子供(特に男の子)を、ウェットに女々しくさせるなこと。育児権限を母親に独占させるなこと。
[解説4]
日本の父(夫)は、大人へと育つ間に、母親(女性)によって、父性を殺されている。日本の父は、力不足で、密着する母と子の間に割り込めない。これは、母子一体性および父性殺しの再生産の原因になる。
日本の父親は、子育てを母親に任せっきりである。結果として、育児権限(育児機会)は母親が独占する。
父親は、母子関係に介入しない~できない。子供(特に息子)の人格のウェット化=女性化をもらたすこと。
このことは、日本男性の育児意欲を、子供のうちに削除し、日本男性の育児機会からの疎外を、世代間で再生産している。これは、子供の社会化において、子供の人格をウェットにするために、ドライな父性の影響を排除する仕組みが、社会的に出来上がっているためと考えられる。
夫婦関係が薄く、母子関係(母娘関係だけでなく、母-息子関係も)が濃いのは、父親を子供から遠ざける効果(父性隔離効果)を持っている。母子癒着は、母親による子供の独占支配の再生産である。こうした現状は、変えられなければならない。
◇[宣言5]
5-1●いばるなこと。男尊女卑から自由になれこと。女に都合のよく作られた、盾として作られた強さを捨てよこと。本当の強さは、個人主義、自由主義といったドライな態度を自分の力で獲得することにある。
日本社会の本当の支配者は、自分たち男性ではなく、女性であることに早く気付け。見かけにだまされてはいけない。
5-2●母親=姑に反逆せよこと。伝統的な家風という前例に従うな、自分で作れ(創造せよ)こと。「家」に頼るな、家を出て自立せよこと。そのためにも、夫婦別姓を積極的に考えるべきである(結婚相手を、自分のイエに巻き込むな。姑と嫁との権力争いに巻き込まれ、姑と嫁の両方から非難されるはめになるからこと。
5-3●家の財布を妻に取られるなこと。収入管理と支出用途決定は、夫婦対等の協同管理に持ち込め。
[解説5]
日本社会が、本当は女性優位、女性的な風土なのに、男性優位、男社会と言われる理由はなぜか?。
そこには、3つの打ち崩されるべき壁・神話がある。
(1)男が威張る。男尊女卑。

(2)男中心の家族制度。父系相続。男性側は姓替わりをあまりしなくて済む。
(3)男が収入を得る。一家の大黒柱として君臨。
それぞれ現実は、。
(1)実際は、女性によっておだてられて、単なる「(女性、母性を護衛する)強い盾」「(女性、母性に対して)給与を貢ぐ労働者」の役割を果たして喜んでいるだけに過ぎない。
(2)日本においては、家庭の実権は母・姑にあり、「粗大ゴミ」扱いされる男性にはない。
それなのに、女性がなぜ「日本の家庭は家父長制だ」と主張するかと言えば、女性は、自分たちが、前例指向的なものだから、家風という前例による支配の序列(姑→嫁)を否定できない。また、同性である姑には反抗できない。女性=嫁は、嫁いじめされる悔しさを夫に向けるので、夫が支配者ということで非難の対象になってしまう。
(3)男性はあくまで収入を家族にもたらすにとどまる。もたらされた収入を実際に管理して、歳出面での配分などの最終権限を握るのは、女性側である。男性側は、一方的に小遣い額を決められるのみである。男性は、「ワンコイン亭主(一日一枚のコイン分の小遣いを支給されるだけの存在)」という言葉に代表されるように単なる労働者であり、一方、女性は、家庭内管理職(大蔵大臣、厚生大臣..)として君臨する。
日本の男性は、女性に強いと持ち上げられて、自分が本当に強いと錯覚し、虚構の強い自分の姿に酔っている。女性も、自分が、男性に比べて弱いかのように錯覚している。ここから、日本フェミニズムの不幸な歴史が始まった。
日本の家庭は、実質的に女性の支配下にある。
男性は、家族制度のもとでの、父系であることの有利さ・気楽さの原因である、姓替わりをしなくて済む(最初から他家の家風を習得しなくてよい)ため、「家」と自分とを一体化しがちである。
家族が父系であることと、男性(父性)支配とを混同してはならない。父系制が多いのは、男が表に出て、女が奥に隠れた方が、女性の生物学的貴重性に対応するために便利だからである。この場合、自分の身の安全を男性によって保障される女性の方が、生物学的地位や価値としては、男性よりも上である。
(付記)日本男性解放論の目新しさ
以下の3つの命題の結びつきに今までの人は気がつかなかった。これに初めて気づいたのが、日本男性解放論である。
(1)日本社会は女性的である。
(2)日本社会においては、女性が強い、優勢である。

(3)日本社会においては、解放されるべきなのは男性である。
上記の結びつきは、理屈から行って自然なはずであるが、「女性が、全世界共通に弱い、解放されるべき存在である」という既成概念に支配され、じゃまされて着想されなかった。
この既成概念は、男性の強い欧米やアラブのような遊牧系社会でのみ通用する概念のはずなのに、いつのまにか国際標準の概念となってしまい、そうした国際標準や権威といったものに弱い日本の学者が、何も考えずに強引に、(本来女性が強いはずの)日本社会に当てはめてしまった。
したがって、そうした既成概念から自由になることで初めて生れた、日本男性解放論は、学説として十分目新しい。
◇(付記)日本で男性解放論が広まらない理由。
男性解放論が、今までの日本で注目されたり、歓迎されてこなかったのは、男性自身が、自分のことを強い者と思い込まされ、自己満足感に浸っているのを打ち壊すため、男性に不快感を与えるからである。
日本では、本来解放されるべき男性が現状に満足し、支配者である女性が現状に不満を持ち、「解放」を唱えている。
男性は、男尊女卑や結婚時の姓替わりなしといった表面的な優遇措置に満足している。
真の男性解放を実現するには、日本男性のこうした表面的な満足感を突き崩す必要がある。これが、上記の日本男性解放宣言の存在理由となる。
(初出2000年07月~)

欧米の常識を否定することの必要性と男性解放論

その本質がウェットで女性的なのに、欧米の立場を導入して、ドライで男性的な振りをしたがるのは、日本人の悪い癖である。

日本社会にとって、欧米社会が、何かを新たにする際の正解供給基地として機能している。欧米の言う通りにすればうまくいくと考えること。日本は、何か自分たちにとって未知のことを判断するに当たって、必ず欧米にお伺いを立てようとする。欧米は、正解判断基準の提供者としての役割を果たしている。

欧米は、世界社会を牛耳ってきた強者、成功者であり、日本はまだ勝てない。欧米の言うことを聞いていれば、従っていれば上手くいく、という考えが日本側にある。

欧米は、今までにない新機軸を出すのに優れており、先導役である、日本は新機軸を出すのが相対的に苦手で、欧米に従おうとする。

欧米の常識をそのまま上様扱いで肯定、取り入れるのではなく、あるいは欧米に認めてもらおうとするのではなく、欧米の常識をひっくり返す、欧米の常識を否定 して、新境地を打ち立てることが必要である。世界的に男性が上位で、女性が下位であるとする、欧米の常識をひっくり返すことが、筆者の日本男性解放論の一つの目的である。

（初出2011年8月）

男尊女卑（男性優先）の本質について

〔１．
男尊女卑は、物事一般を進める上で、男性が(女性よりも)尊重・優先されることを指しており、(欧米における)レディーファースト(女

性優先)の対概念と考えられる。
従来、男尊女卑の概念は、日本など東アジアにおける、男性による女性支配 (家父長制) の実態を示すもの、あるいは、女性の (男性に比較したこと。) 地位の低さを示す象徴として、女性解放の立場を取る人々からの非難にさらされてきたこと。
一方、欧米などでのレディーファーストの概念は、女性の地位の高さを示すものとして、日本のような男尊女卑の社会慣例を持つ社会が、女性解放を進める上で、積極的に学ぶべき手本となるもの、と、女性学者や女性解放論者(フェミニスト)によって主張されてきた。
レディーファーストは、身近な例をあげれば、例えば、自動車のドアを男性が先回りして女性のために開けてあげるとか、レストランで女性のいすを引いて座らせてあげるとか、の行為を指す。この場合、見た目には、男女関係は、女王と従者の関係のように見えること。 (女性が威張っていて、男性は下位に甘んじている。)
しかるに、女性解放を目指すウーマンリブ運動はレディーファーストの欧米で始まっている。
それと同様のことを男尊女卑に当てはめると、女性は男性に対して、見掛け上のみ従属することを示しており、勢力的には女性の方が男性よりも強く、必ずしも女性は弱者ではないと言えるのではないか？。
以下は、こうした疑問をきっかけにして、男尊女卑という概念を、社会を取り巻く自然環境への適応度という観点から、もう一度吟味し直した結果について述べたものである。
〔２．
農耕社会(ウェットな行動様式を要求する)における女性(ウェットな行動様式を生得的に持つ)、および遊牧社会(ドライな行動様式を要求する)における男性(ドライな行動様式を生得的に持つ)は、その環境下で生き抜く上で有益な行動様式(プラスの機能)を持ち、より適応的である。
一方、農耕社会(ウェット)における男性(ドライ)、遊牧社会(ドライ)における女性(ウェット)は、環境下で生き抜く上で有害な行動様式(マイナスの機能)を持ち、適応障害を起こす(不適応である)。すなわち、その環境下で構築された社会の中でマイナスの価値を持ち(存在を否定され)、勢力が弱い(弱者の立場に立つ、影が薄い)。。
上記の内容の詳細については、日本における母権制の再発見についてのページを参照されたい。
男女は、生物として生殖を行う必要上、同一環境下に、必ずペアで存在する必要がある。したがって、当該環境下の社会では、適応的な側の性だけでなく、適応障害を起こす側の性もその場に同時に存

在する必要がある。例えば、農耕社会(ウェット)では、適応的な女性(ウェット)と、適応障害を起こす男性(ドライ)とが、同一の場に共生しなければならない。適応障害を起こす側の性の個体の遺伝レベルでの行動の発現を、そのまま放置しておくと、(1)社会に当該環境下の生存にとって不適切な行動様式をもたらすことで、社会全体の環境適応力を著しく損ない、社会そのものの消滅につながる、(2)適応障害を起こす側の性の個体が、環境不適応の末に死滅してしまうので、当該社会下での生殖活動が不可能となり、ひいては社会そのものの消滅につながる、といった甚大な被害を、社会全体に引き起こす。
こうした被害を未然に防ぐためには、。
(1)適応障害を起こす側の性が持つ不適応な部分を、社会化(育児・教育)の過程で、適応している側のそれに対応する部分によって、打ち消す(パッチを当てて中和、無力化する)必要がある。
(2)適応障害を起こす側の性を、適応している性の側で絶えず、生活全般にわたって、社会的弱者として、大事に保護する(サポートする、面倒を見る)必要がある。
こうした必要性は、農耕社会では、(1)は、育児・教育上の母子癒着(母親主導)として、(2)は、男性尊重(男尊女卑)となって現れる。遊牧社会では、(1)は、育児・教育上の母子分離(父親主導)として、(2)は、女性尊重(レディーファースト)としなって、現れる。
人間の周囲の自然環境への適応は、その自然環境下で必要とされる生活様式(湿潤(ウェット)環境では農耕、乾燥(ドライ)環境では、遊牧)に合わせて、行動様式の「湿度」(ウェット~ドライの度合い)を調節する過程として捉えられる。
行動様式の湿度調節は、環境に適応する側の性が、環境に適応障害を起こす(湿度が逆の)性の行動様式(特性)に対して、一方的に中和するかたちで行われる。各性の持つ中和の役割は、女性(遺伝レベル=ウェット)は、液化(ウェット化)、男性(遺伝レベル=ドライ)は、気化(ドライ化)である。
農耕社会(文化レベル=ウェット)では、女性が男性に対して、一方的に液化を行い、逆に遊牧社会(文化レベル=ドライ)では、男性が女性に対して、中和(気化)を行う。パッチ当てを受けた側は、結果として、本来持っていた行動様式が使えなくなり、無力化されて、社会的弱者の立場に転落する。
文化レベルのウェット~ドライな行動様式の実現には、遺伝レベルでの性差において、ウェット~ドライな行動様式にすでに従っていることを積極的に利用すべく、自分の性に固有な行動様式を、人間の社会化の過程、特に行動様式の可塑性の大きい、育児最初期の段階で、子供に対してそのまま直接流用するのが、効果的であり、現

実に、流用が起きている。
流用のあり方は、例えば[増田1964]では、以下のように描写されている。アメリカ社会(遊牧系:注筆者)では、子供の面倒を見るのはたいてい男性である夫の仕事であり、赤ちゃんは夫(男性)に抱かれているか、ゆりかごに入れて夫(男性)が抱えている。それに対して、日本(農耕系:注筆者)では、母親(女性)が赤ちゃんをおんぶして、上の子の手を引いて、おまけに...といった調子で、育児は母親(女性)の役目となっている。幼少期に自分の性に固有の行動様式を、育児という形で、子供に注入する権限を持つのは、遊牧系の社会では、男性、農耕系の社会では、女性、という図式が成り立つ。
以上の内容をまとめると、次のようになること。
1)女性が主導権を持つ農耕社会では、男性は、女性側がデファクト・スタンダートとする、ウェットな社会的行動様式に、無理やり合わせないと生きて行けない。農耕社会という環境下では、性格がよりウェットな女性のペースで物事が進むため、それに合わせて生活しなければならない、女性の流儀にいやいやながら従わなければならないのであり、それを、幼少から強要され、拒めなくなっているところに、男性の弱さが認められる。男性本来の個人主義的、自律的．．．といった特性を打ち消され、殺され、抑圧されていること。そして、男性本来の特性とは逆の、集団主義的、他律的．．といった、ウェットな女性的特性に従って行動させられるため、社会的不適合者、弱者としての地位に甘んじることになること。
2)男性が主導権を持つ遊牧社会では、女性は、男性側がデファクト・スタンダードとする、ドライな社会的行動様式(個人主義、同調を嫌う．．)に、無理に合わせないと、とりまく自然環境の中で生き延びられないこと。遊牧社会では、性格がよりドライな男性のペースで物事が進行するため、それに合わせて生活する必要があり、女性本来の集団主義的、同調的．．．といった特性は抑圧・消去の対象となる。その結果、女性は、社会的不適合者、弱者の立場に転落する。
〔３．
ウェットな農耕社会（日本）は、男性の表面的な尊重(優先)・女性の実質的支配が生じている社会、ドライな遊牧・牧畜社会（欧米）は、女性の表面的な尊重(優先)・男性の実質的支配が生じている社会、とまとめられる。
ウェットな社会の男性およびドライな社会の女性は、自分とは異質な（反対のジェンダーに適したこと。）原理で動いている社会に、無理やり適応させられているのであること。そうした点で彼ら（彼女ら）には、自分たちとは異質な性の行動原理に合わせる生活上、足りなかったり至らぬ点が生じてくるが、そうした適応不足を補償

するのが、男性優先（男尊女卑）、女性優先（レディーファースト）である、と考えられること。これらは、社会の中でより弱い立場の性の行動を優先する、「弱性優先」という言葉でまとめることができる。
優先(priority)には、1)強者優先(力ある者が優先される。権力者がよりよい待遇を受ける)と、2)弱者優先(年寄りや子供など、弱い者が、優先的に、食事にありついたり、座席を譲ってもらったりなど、よりよい待遇を受ける)との、相反する2種類が存在する。優先されるのが、必ずしも強者だからとは限らない。
あるいは、ウェットな社会では男性が、ドライな社会では女性が、社会に対して不適応であり、社会における存在意義・理由が、そのままでは、欠乏する(社会の中で、じゃま者扱いされ、軽蔑される)。それでは、彼らの人間としての尊厳(人権)が保たれず、モラル(やる気)の維持などに重大な支障が出ることが予想される。そこで、たとえ表面的であっても、不適応者である彼らのことを、尊重・優先して、自尊心を保ってあげる必要が出てくる。そうした自尊心を補完する社会的な仕組みが、男性優先（男尊女卑）、女性優先（レディーファースト）である、と考えられること。
これをまとめると、
男尊女卑＝強い女性が、弱い男性の、農耕(ウェット)社会への適応不足を、補償する。
レディーファースト＝強い男性が、弱い女性の、遊牧(ドライ)社会への適応不足を、補償する。
であること。
ここで、「男尊女卑」の原因をまとめると、以下のようになること。 基本的には「弱性優先」の考え方に基づくものである(1～3)が、「男性優位」の作為的演出(4)、という面もある。
1)「福祉」モデル (農耕社会に向かない)無能者＝弱者である男性の世話・サポートを優先的に行うこと。弱者福祉が目的である。乗り物などで年寄りに優先的に座席を譲るのと同じ考え方であること。農耕社会の男性は、家庭ではゴロゴロして何もしない。それは、自分とは異質なウェットな人間関係に取り囲まれ、それに無理に適応しなければならず、無意識のうちに心が疲れて、何もする気が起きない(無気力となる)からである。それゆえ、女性が、家事・洗濯・炊事などで、かいがいしく世話をする必要が生じる。あるいは、男性に無理を言われても、「はいはい」と聞いてあげる寛容さを持つ(弱い子供をあやすように振る舞う)必要が生まれる。
2)「自尊心・モラール」モデル 自尊心を向上させて、(農耕社会にとって有害なため無力化された)男性に、自らを「有用視」させて、勤労・防衛意欲を出させること。(個人主義、自由主義などの

ドライな＝有害な要素を殺したあと)残った能力(筋力・武力)を有効利用すること。物事を優先的に行ってよいとされれば、自尊心が起きやすい。
3)「人権」モデル 社会的弱者たる男性の人権保全に配慮すること。女性が、男性のことを優先して取り扱ってくれれば、男性の人権がより保たれやすい。(農耕)社会的に有害・無力であることを悟らせず、人間としての尊厳を保たせること。女性に全生活を管理・制御されていることを気づかれないようにすること。
4)「貴重」モデル 生物学的に貴重な女性は、自分を「盾」として守ってくれる者を作り、どうせならなるべく強く見せようとする。その方が、外敵を恐れさせることができるからである。農耕社会のように、女性が優位に立っている場合には、女性には、自分を守る「盾」としての男性が、相対的に弱く見える。それだと、女性が、外敵から自己防衛・保身を行う上で不安であり、不都合である、と農耕社会の女性自身が感じた。そのため、男性に、わざと積極的に恐い態度を取らせたり、威張らせたりする(強圧的な態度を取らせる)。女性に意図的に仕向けられて強がっている男性は、「張り子の虎」のような存在であり、女性の(男性を強く振る舞わせようとする)心理的支えがないと、見かけの強さを維持できず、潰れてしまい、元の、(農耕社会特有の)無能な、頼り無い姿に戻る。
レディーファーストの原因は、上記の「男尊女卑」の原因説明における、男性についての記述を、女性に置き換えたものとなる。
1)「福祉」モデル (遊牧社会に向かない)無能者＝弱者である女性の世話・サポートを行うこと。
2)「自尊心・モラール」モデル 女性を表面的に敬うことで、女性に自尊心を与え、物事を行う意欲をかきたたせて、(集団主義、同調指向などのウェットな＝有害な面を打ち消したあと)残った家事や職業労働能力を、有効利用すること。
3)「人権」モデル 遊牧社会での社会的弱者たる女性の、人間としての尊厳を保つこと。
4)「貴重」モデル 遊牧社会での男性が、生物学的に貴重な女性を、高貴な存在＝「貴婦人」として崇拝し、より守護しがいがあるものとして捉えることにより、自分自身が内蔵する、女性を守ろうとする欲求を満足させる。
男尊女卑・レディーファーストは、共に、社会の中でより弱い性を保護しようとする「弱性保護」の思想(弱者保護の一種)と言えること。依存すること。(寄りかかる、もたれかかること。)そうする方の性(農耕社会の男性、遊牧社会の女性)は、その依存を受け止める方の性(それは、農耕社会の女性と、遊牧社会の男性である。)よりも、力がなく、弱い(自分ひとりでは立てない。)こ

と。
受け止める方の性は、力があり、強いからこそ、余裕を持って、依存する相手をしっかり支えることができる。
男尊女卑（男性優先）は、男性保護の思想である（通説のように、男性の強さを示しているのではなく、むしろ逆である＝弱いから女性によって大切にされる、わがままを聞いてもらえる。）こと。レディーファースト（女性優先）の裏返しであること。（ウーマンリブ運動は、レディーファーストの欧米で生まれている。欧米で女性の社会的立場が弱い証拠である。）
全世界どこでも、（フェミニズムが訴えるように。）女性が弱い、というわけではない。勢力面で、女性の方が男性を上回る社会。（母権社会。）それは、現在でも確実に沢山存在すること。（それが、例えば日本や、東アジアの稲作農耕社会などである。）こと。
従来、母権社会は存在しないなどというのが定説となっているが、それは母権についての議論が不十分なためであること。（母系制との混同。男尊女卑を父権制と混同。）このことの詳細については、日本における母権の再発見についての項目を参照されたい。
男尊女卑（男性優先）の社会では、見かけは男性が強い。男性は、自分が（女性よりも。）強い立場にいると錯覚するため、男性の自尊心が満たされやすく、男性は自己の立場の弱さに気づきにくい。
男性中心社会の神話は、こうして生まれた。この場合、男性には、自分の置かれている立場の弱さ・悪さの自覚がない（男性優先の本当の意味を取り違えて、自分は強いとうぬぼれている。）こと。
男尊女卑が、男性の強さを象徴する行動様式であると見なす、従来の日本フェミニズムの見解は、否定されなくてはならない。男性優先だから、男性が強い、支配的であるとは言えない。男尊女卑（男性優先）は、実質的には、農耕環境に不適合な、弱い立場にいる男性を（強い女性が。）サポート・保護する思想であること。言い換えれば、男性が弱く、環境適応に手間がかかる分を、強い(農耕環境により適合的な)女性に肩代わりさせる思想である。
日本では、封建的とされる第二次大戦前からも、女性の方が強かった形跡が認められる。
[Benedict1948]によれば、一家の財布・事務処理を一手に切り回すのは姑（女性）であったこと。
姑（女性）は、息子の嫁を一方的に離縁させる権限を握っていた（舅は何もしていない。）こと。
家庭の父（男性）は、子供たちがあらゆる義務を尽くしてその恩に報いはするが、ややもすれば「あまり大して尊敬されない人物」であった、とされている。
男女平等が唱えられ、男性の女性に対して当然のように世話や奉仕

を要求できる特権＝「男尊女卑」が剥奪されるようになったことにより、社会の実権を握っている女性の強さが、前面に徐々に出て行き始めた。
〔４．
日本のフェミニズムは、女性の弱さ、性差別（女性が不利。）を訴えること。これは、女性の弱い欧米社会で生れた理論を、女性が強い日本社会へと、何も考えずに直輸入して、強制的に当てはめようとするものである。かえって、男性の、実質的根拠のない自尊心（自分の方が立場が上、女性は哀れむべき存在。）を満足させ、男尊女卑の表面的理解につながっていること。日本社会の本当のあり方（女性主導、女性支配）を見えなくさせる原因となり、有害であること。
男尊女卑は、欧米流フェミニズムによる批判の対象とは、もともとならない。男性の弱さを原点とする、強い女性が弱い男性を保護する(サポートする・面倒を見る...)、という考え方が根底にあるからである。男性の強さを前提とするフェミニズムは、女性の弱い遊牧社会（欧米）向きであり、農耕社会（日本）には馴染まない。
男尊女卑は、男女両者の立場を、少なくとも表面的には対等にするためにやはり必要ではないか。（見かけ・表は男性が強い、実質・裏的には女性が強い、ということで、表裏合わせると、ちょうどバランスが取れる。）女性が支配する社会で、男性の自尊心(人間としての尊厳)を保つために必要と考えられる。
ただし、女性にとっては、男性が一方的に依存しようとして寄り掛かってくる重みを、自ら受け止める必要があり、負担が大きいのは確かである。男性は、女性に負担がかかるのを当然と思っている。この負担面での男女不平等（性差別）は、日本のフェミニズムでも、家事負担が一方的に女性に押しつけられるなどの形で、問題にされてきたが、(欧米直輸入の部分を無視して)この部分だけを取り出せば、それなりに理に適っている、と考えられる。
[参考文献]
Benedict,R. The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture, Boston Houghton Mifflin, 1948 長谷川松治訳「菊と刀 - 日本文化の型」社会思想社1948
増田光吉:アメリカの家族・日本の家族,日本放送出版協会,1964
(初出1999年08月)

日本男性＝「強い盾」論　 - 日本男性の虚像 見せ掛けの強者 -

戦前から、日本の男性は、本当は無力な弱い存在なのに、女性によって強大な者と見せかけられている。「差別される弱い女性」を演出するフェミニズムもこの一環である。
女性は、生物学的貴重品として、男性に守ってもらおうとする。男性に、強い盾となってもらうことを必要とすること。そのためには、男性に自分は強い、役に立つ人間だという自尊心を持ってもらうことが必要である。
日本の女性は、男性の自尊心を保つのに、躍起となっている。
男性が強い、強くなければいけないという神話の起源は、以下の通りである。
生物学的貴重性が強い女性を、外敵から守らねばならない。守るには、襲ってくる相手より、強くなければならない。男尊女卑(男性が偉くなければいけない)とは別である。あくまで、盾、防衛的な役割について、強いことが求められる。それ以外の側面では、強いことは必ずしも求められない。
「強い盾」としての男性の生成過程は、以下のようなものである。
男性は、本来持っているドライさを、稲作農耕社会のようなウェットさを要求される自然風土下では有害であるとして、生育過程において、育児権限を独占する女性によって剥奪され、無力なかたわ者となる。
男性は、そのままでは社会のお荷物となるので、生得的な筋力の強さ、武力指向および、生物学的に生き残らなくても、人間の子孫の継承にあまり影響が出ない点を生かし、(生き残らないと、種の保存に支障をきたす)女性を守る「強い盾」として、もっぱら活用され、訓練される。
日本において、男性が優位に立っているというのは、男性に、強い盾になってもらおうとする女性による、作為的な見せ掛けである。
日本女性は、自分の掌のうえで、男性を泳がせている。日本女性は、その気になればいつでも社会の本当の支配者が誰かを見せつけることができる。ただし、それをすると、男性が、自尊心を失って萎縮してしまい、防衛・強い盾の機能を果たさなくなるので、しないだけである。
強い自尊心、プライドを女性によって与えられた男性は、わがまま・専制君主的になりやすい。
日本の父親(特に戦前)が「家父長的」に見える理由は、。
1)強引であること
2)威圧的・威張ること
3)厳しい、威厳がある、厳格である。

5)専制的、わがまま

6)断定的、責任を取る(取ってくれる)、決断力がある。
といった点にあること。

いずれも、人間的には、決して成熟しているとは言えない。
そこには、女性が望む「強い盾」としての側面ばかりが強化されている。
また、ドライさとは無関係のものばかりである。
個人主義、自由主義、合理性など、ドライさを削除されている点、男性としては、精神的に奇形である。

一方、強さは、確かにある。それは、筋力、攻撃力(怒り)といった、女性を守る道具としての強い盾として用いられる。
日本男性の良く取る行動である、女性に代わって責任を取る、決断をするというのも、女性に欠けており、女性が欲しがる資質である。失敗したときに、責任を男性になすり付けることができる。
女性にとって、自らの保身を行う上で、都合のよい性質であること。
女性が、男性にウェットさを強いて、男性を支配下に置いたまま、自分の保身を図るため、うまく使いこなす際に、上記の性質を男性が持っていると重宝する。
ウェットな男性は、いかに強引、専制的...であって(強く見えて)も、本来のドライさを失っている以上、心理的には奇形、障害者であり、社会的弱者である。
日本男性は、強い盾、ないし、給与を差し出す下級労働者としての、女性に都合よく限定した役割しか果たせない、それ以外の点では無能である。本質的には弱者であり、女性によって搾取される存在である。
日本女性は、自分が社会の支配者であることを、必死に隠そうとしている。
男性の自尊心を傷つけて、強い盾として機能しなくなることを恐れること。
日本における女性への差別待遇も、男性の自尊心を確保するために必要である。
日本社会は、もともと、女性優位なので、そのままでは、劣位にある男性の自尊心が確保しにくく、人権問題となる。
日本女性の男性に対する見方は、男性固有の、個人主義、自由主義など、ドライな側面を、(稲作農耕社会にとっては)有害なので消したいが、かといって、自分たちを守る盾としての存在ではいてほしい、というものである。そこで、根底では、ドライな、本来の男らしさを否定し、男尊女卑といった、見かけ上の男性尊重と、女性に

よって人為的に作られた強さでしのごうと考えている。
日本的な「男らしさ」は、ドライさに基づく男性本来の男らしさとは異なるのである。そのことにほとんどの日本男性は困ったことに気付いていない。
(初出2000年07月)

日本男性が、その本質は女性的にも関わらず、強く（男らしく）見える理由

日本男性が、その本質は女性的にも関わらず、強く（男らしく）見える理由を以下にまとめたこと。

・姑気質で、自分よりも立場が下と思う相手を馬鹿にして、強く、高飛車に出る。
・周囲にどう見られているかがとても気になり、見栄張り、強がりである。
・仲間との運命共同体意識が強く、敵に対して、自分たちが丸ごと滅ぶまで、徹底抗戦し、自害しようとする。

日本男性は、基本的に、腕力、筋力、武力の強い女性相当だと考えられる。
(初出2014年04月)

日本男性の弱さについて

日本男性は、以下の点で、女性よりも弱い立場にあり、女性による支配の対象となっていると考えられる。こうした現状を打破する必要がある。これが、男性解放論の骨子である。
(1)自分の生得的傾向に反する「ウェットさ」を、育児過程で、母によって強制的に身につけさせられていること。男性が本来持つべき、個人主義、自由主義といったドライさを失っている。
(2)女性にあたかも首輪を付けられて職場で給与稼ぎをさせられるかのような「鵜飼型社会」の中で、生活を女性によって全面的に管理されていること。自分の稼いだ賃金の使い道を決定する権限がない。自己賃金からの疎外が起きている。
(3)母性への依存心、甘えがある。すぐに母親やその代わりの存在に頼ろうとすること。
(4)育児から疎外されていること。子供が自分になつかない、子供か

ら馬鹿にされる。自分の持つ文化を子供に伝えられないこと。
(初出2000年07月)

日本男性はなぜダメか？。

日本男性は、総じて、世界的に見て魅力に乏しい存在であるとされている。日本男性が、なぜ魅力に欠けるダメな存在なのか、どうした点を改善すべきなのか、以下に考えられる点を列挙してみた。
(1)所属する組織との一体感を追求し、集団主義、安定指向、年功序列(先輩の言うことを何でも聞き、後輩に対して威張る)意識が強い、といったように女性的な性格を持つ。個人主義、自由主義、未知領域への積極的探検といった男性が本来持つべき性格に欠けている。
(2)本当は社会の中では、女性に従属する下位者なのに、上位者と思って、命令口調で威張る。
女性に比べて優遇されるの(男尊女卑)を当然と思い込んでいて、スポイルされていること。
自分のことを上位者と思っているだけに、プライドが高く、傷つきやすい。相手が自分に対して失礼かどうかやたらとうるさい。気難しく短気で、すぐ暴れたり怒ったりすること。ガサツな乱暴者であり、暴君であること。
なぜ、日本の男性がスポイルされるかについては、母親の影響が大きい。
日本の男性＝息子は、母親によって甘やかされ、かしずかれ、何でもしてもらえる状態に置かれる。身の回りの世話を全部されている、焼かれていること。
息子は、そういう状態が続いているうちに、いつの間にか自分を中心に世界が回っていると思いこむようになり、尊大で、わがままで、それでいて傷つきやすい性格を持つようになると見られる。
しかもその根底には、母親に心理的に頼り切り、甘えきった、依頼心が根強く息づいており、表面的にいくら威張っていても、母親に心理的に支配されきっていると考えられる。
(3)女性に対して、母親代わりに甘えようとすること。女性を、観音様、マリア様みたいなと見なすこと。女性に対して依存的であり、その際、女性に対して当然のごとく寄りかかり、のしかかってきて、それに対してごめんなさいとか、ありがとうとか、一言も言おうとしない。女性に対する思いやりに欠けること。
(4)自活・生活能力に欠けること。身辺の世話を自分で行うことができず、皆、女性にやってもらおうとする。

以上を総括するに、日本の男性は、本来の男性性を失い、女性に頼りきりになっていて、人間的な成熟に乏しい存在であると言える。しかも、そのことを認めようとしない偏狭さを持ち合わせていること。
女性からの解放を唱える以前に、こうした欠点をまず改めない限り、日本男性の明日はない。
◇
（2007.4 追記）
しかし、インターネット掲示板の書き込みとかを見る限り、日本の男性は、今まで通り、母親や、母親代わりの女性（妻とか飲食店の女性とか）、女性代わりの組織（会社、学校等）に対して甘えつつ、威張ったり、わがままを通したりして、好き放題したいと考えているようであること。
つまり、母の支配の枠内にとどまりつつ、その中で好き放題するのが望みのようである。
同じ女性でも、「お袋」「母」~「姉」「姉御」には甘え、頼り、支配されるのを気にとめることもないが、一方、母以外の女や妻は叩いたり、見下す、低く見る、自分の性欲を満たす道具と見るのが通例である。女叩きをする男性は多いが、母を叩く男性は少ないかほとんどいない。
また、自分の甘ったれた現状に対する批判、耳の痛い言葉を、それが建設的なものであっても、全て自分に対する悪意の攻撃とみなして怒り出し、牙をむく、ひねくれた心を持っている。
少しは、父権の強い、欧米やユダヤ、アラブ、モンゴルといった遊牧・牧畜系社会の家父長を見習って、母に対する依存心を捨てて、母から解放されて、男性として成熟してはどうなのだろうか？。
筆者にとって気がかりなのは、実際のところ、日本における「男性解放」は、母からの解放ではなく、女性が社会的に優遇されていることを撤廃するための「解放」になっている点であること。（楽ができる、おいしい思いができること。）
女性ばかり優遇されるのは確かに問題であり、そうした状況から男性一般が解放される必要があるのは明らかであるが、その一方で、自分たちを根底で支配する母なる女性の存在や、そこからの解放に鈍感なのは、どうしたものであろうか？。
(初出2003年06月)

今後の日本男性が取るべき途。

現状の日本男性が取ることのできる途は、大きく分けて2通りあると考えられる。

1つ目は、従来通り、男尊女卑によって、女性によって表面的に立てられ、上座に座って良い思いをすることで満足し、実質的には、ウェットで液体的な社会的雰囲気をかもし出す母や妻の精神的支配下に置かれ、従属的な地位に甘んじる途である。子育てや家庭の財布の紐といった重要な家庭内の権限を妻や母任せにするか、妻や母に取られた状態のまま、自らは、ひたすら働いて家庭に給与を振り込むだけに特化して他は何も機能しない人間ATM（自動預金預け払い機）になるか、都合の良い便利屋扱いで、母や、あるいは妻と子供の母子連合体にこき使われるだけで終わる途であること。

2つ目は、自らドライで気体的な父権を確立し、妻や母を表面的にレディーファーストで立てながら、子育てや家計管理権限といった実質的な家庭の支配権を握る途である。

日本男性の立場を真に強化する観点からは、2つ目が望ましいと言える。そのためには、日本男性は、母や妻によってかもし出される気持ち良い母性の麻酔薬の効果から一刻も早く醒めて、父性に目覚めないといけない。

(初出2012年08月)

日本のメンズリブを批判する　 - 今後の日本のメンズリブが取るべき途 - 。

従来の日本のメンズリブは、今まで男尊女卑の考え方や家父長制的な家族制度、男性による企業・官庁などでの給与をもたらす社会的役職の独占などで、忍従的な役割を強いられて来た、とする女性側の抗議に押されて、男性の従来取って来た性役割をしぶしぶ見直す、言わば、女性に突き上げられた受け身の形で、進展して来たと言ってよい。

もう一つ、日本のメンズリブを特徴づけるのは、女性に対して優位に立っていることを前提として、弱い女性を助けようとする同情心である。劣位の立場に置かれた、解放されるべき女性に対して、自らの優位にある立場を、少し譲ってあげようとする、「強者の余裕」に裏打ちされた親切心がそこには見られる。職業面での役職を女性に明け渡すこと、育児や家事に負われる女性を手伝ってあげること、などが、従来のメンズリブが取って来た方策であった。
日本のメンズリブには、劣位にあるとされる日本女性の解放に自ら歩調を合わせることで、自分は女性に対して優しいのだ、人格者なのだ、と周囲に(特に女性に対して)印象づけるねらいもあると見られる。
しかし、日本のメンズリブを押し進める人々が、こうした男性の優位を前提とした、悠然とした態度を取っていられるのは、彼らが、日本社会の持つ本当の性格に対して無知だからである。
伝統的な日本社会は、実は、ウェット＝女性的な性格を持っている。それは、集団主義、周囲との同調指向などといった、対人的な相互牽制、規制から成り立っている。こうした女性的性格は、日本社会における女性の勢力が、男性のそれを上回る、すなわち、女性が優位に立っていることで成立する。
また、日本女性は、社会の中で、家計管理権限の掌握など管理職的な役割を果たし(男性は単に労働力としてこき使われているに過ぎない)、育児・教育面でも子供を支配し(この間、男性は自動的に、蚊帳の外に置かれている)、子供が成長しても、自分に対して甘えや依存心を持ち続けるように絶えず制御することで、強固な「母性社会」を築き上げている。
日本のメンズリブに関わる人々は、こうした、自分の「男性優位」の価値観を根底から突き崩す社会的事実から、無意識のうちに目を背けてきた。日本のメンズリブの弱さは、まさに実質的な女性優位という、日本社会の現実に対応できていない、その点にある。
これからの日本のメンズリブには、その考え方を、従来の「男性優位」から、「女性優位」を前提としたものへと、180度転換させることが必要である。「強者の余裕」など、もはや存在しないのであること。
日本のメンズリブは、少なくとも、女性と対等な立場に立つために、従来、ウェット＝女性的であった日本社会の性格を、少しでもドライ＝真に男性的なものに変えることを目指すべきである。そのためには、ドライな行動様式、すなわち真の個人主義、自由主義などを、少しでも早く、よりよく、身に付けるための「精神のドライ化」運動を起こすべきだろう。
また、従来、「一家の大黒柱」などとおだてられて来たのが、実

は、単なる労働力として、母や妻の管理下でこき使われて来ただけ、という真実にも、早く気づき、その現状から一刻も早く脱却すべきである。女性の管理下から脱却するには、例えば、家計管理権限を、女性と共同で持ち合う比率を高める運動を進めることなどが考えられる。あるいは、女性が独占して来た、子育てにも積極的に関わり、自分の価値観を、少しでも子供に伝える努力をすべきだろう。また、女性の持つ家庭内での影響力を少しでも少なくするために、彼女らを積極的に、職場という「外の世界」へと進出させるべきであること。家庭の外に出ようとする女性と入れ替わりに、家庭の中に入ればよいのだこと。
最大の障害は、日本男性が無意識に持つ、女性への「甘え」、依存心である。日本のメンズリブは、女性を「母性」の権化として、母親や妻などに、精神的に頼ろうとする現状の日本男性の持つ傾向から、男性を何とかして脱却させる方策を練らなければならない。
(初出1998年08月)

お母さんの息子、お父さんの娘

日本のフェミニストたちが家父長と思い込んでいる日本の男性たちは、只の「お母さんの息子」であり、父性未満の存在である。女性を守る、経済的に稼ぐ等、男性、夫としては機能しているが、一家の家計を管理するとか、子供の教育をするとか、一家の精神的支柱になるといった父親としては、あまり機能していない。

日本の男性たちが、父性を持つ、父権を実現する、真の家父長になるには、自分を包み込み、呑み込んでいる母の懐から脱出すること、母から自由になること、母性からの解放、「お母さんの息子」状態からの脱却が必要である。

一方、欧米の女性は、強い父性に支配された「お父さんの娘」状態から脱することの出来ない、母性未満の存在であると言える。

ちなみに、日本女性は、「お母さんの娘」、欧米男性は、「お父さ

んの息子」として表される、と言える。

(初出2012年06月)

日本男性＝「母男」（母性的男性）論

[要旨] 日本男性は、母性に支配された母性的男性＝「母男」として捉えることができます。これは、欧米女性が父性に支配された父性的女性＝「父女」として捉えられることと対をなしています。なぜ「母男」「父女」が問題なのか？それは、彼らが、両者とも共通に、自分とは異質の異性によって支配される社会的弱者、本来持つべき生物学的特性を異性によってそぎ落とされ、殺された社会的無能者と化した存在だからです。
◇
日本の男性は、個人の独立や自由といったドライで父性的な価値ではなく、相互の一体感、甘え、懐きの重視、集団への所属の重視といった、ジメジメ、ベタベタしたウェットで母性的な価値観に支配されている。要は、父性を失った母性的な男性なのであり、「母男」(母性的男性maternal male)と呼べること。「母男」は、母によって母性の麻酔を打たれた、母性の漬け物と化した男性である。
一方、欧米の女性は、個人の独立や自由、自己主張といった父性的価値観に支配された、相互の一体感、相互依存を重視する母性を失った父性的な女性であり、「父女」(父性的女性paternal female)と呼べる。「父女」は、父によって父性の麻酔を打たれた、父性の漬け物と化した女性である。
それに対して、日本女性は、本来の母性を保った母性的な女性であり、「母女」(母性的女性maternal female)と呼べる。
また欧米男性は、本来の父性を保った父性的な男性であり、「父男」(父性的男性paternal male)と呼べる。
「母女」「父男」は正常であるが、「母男」「父女」は問題である。
では、なぜ「母男」「父女」が問題なのか？それは、彼らが、両者とも共通に、自分とは異質の異性によって支配される社会的弱者、本来持つべき生物学的特性を異性によってそぎ落とされ、殺された社会的無能者と化した存在だからである。

それに対して、「母女」「父男」は、本来の生物学的性の持つ特性をそのまま社会の中で発揮できる理想的な存在であり、社会的強者でいられるのである。要は、「母女」は相互の一体感、協調性を基調とする母性的態度が必要な農耕社会＝母性的社会、「父男」は個人の独立を基調とする父性的態度が必要な遊牧・牧畜社会＝父性的社会の中で、メジャーな支配者として君臨できるのである。
一方、「母男」「父女」は、それぞれ、母性的農耕社会、父性的遊牧・牧畜社会の中で、マイナーな被支配者としての立場に甘んじることになる。
日本は、稲作農耕社会の例にもれず、母性の支配する社会であり、そこでは、男性は「母男」、女性は「母女」となり、女性の勢力が男性を上回っている。
「母男」である日本男性は、母親と強い一体感で癒着したまま成長し、その過程で、本来持つべき父性の発達を母親によって阻害され、精神的に母親に依存したままの状態で大人になる。その点、「母男」は、いつまでも母親の息子の立場から脱し得ない男性の問題を明らかにするマザー・コンプレックスの概念と深い関係があると言える。（同様に、欧米女性＝「父女」は、父親に精神的に依存し、父親の娘の立場から脱し得ない点、ファザー・コンプレックスと関係する。）
「母男」＝日本男性は、会社とかの所属集団に母性的に包容されることを要求する。日本の会社や官庁は、その主要な構成要員が男性なのにも関わらず、相互の一体感、所属感を重視する母性的な雰囲気に包まれているというのが実態である。
彼は、家庭に帰れば、「母女」である妻に対して、母親代わりに心理的に依存する「大きな子供」である。また、家計管理や子供の教育といった家庭の主要な機能は「母女」である妻に独占されていて、家庭の中では居場所がなく、疎外された存在である。
彼は家庭内で子供に対して、精神的な影響力を持つことができず、その子供は再び「母」と癒着し、父性の発達を阻害されることを繰り返す。
「母男」である日本男性は、社会的弱者の立場を脱するためには本来、欧米男性のように、父性を正常に発達させた「父男」となるべきなのであろうが、仮にそれを実現すると、旧来の稲作農耕社会の伝統と対立することになり、社会の混乱を招くことになるという側面もあり、問題はさほど簡単ではないと言える。
(初出2006年08月)

日本の男社会は実質女社会。

日本の男社会は、実質女社会である。
日本の男性は、母親の強い影響で、女並みに、ウェットできめ細かく、陰湿になっている。
例えば、同僚の昇進とかで、嫉妬心が強く、同僚の足を陰湿な手段ですぐ引っ張ろうとする。要するに、自分は自分、他人は他人と切り分けることができないのである。
父性の強い欧米社会において、自分は自分、他人は他人と冷淡に切り分けて、殺伐、ドライな雰囲気に満ちるのとは対照的である。
（初出2011年10月）

日本男性はなぜ家事をしないか？。

日本においても、近年、男女共働きの家庭が増えている。その際、女性の側から問題とされるのが、日本男性が家庭において、炊事、洗濯等の家事をほとんど手伝わず、職場に直行して仕事ばかりしているということである。
それでは、なぜ、日本男性は家事をほとんどしようとしないのであろうか？。
筆者は、その答えは、実は、日本の女性側に原因があると考える。
この場合、女性というのは、男性の母親や、専業主婦の妻を指す。
従来、日本においては、男性の母親は、自分自身では社会的出世を直接行わず、自分の息子を「自己実現の駒」として、学校、職場で、いい成績を取らせて出世、昇進させ、自分自身は彼らの管理者となることで、社会的に偉くなった息子の内側から、日本社会を間接的に支配してきたのである。
そのように、息子を、学校、職場でいい成績を取らせて、ひたすら出世、昇進の道を歩ませるには、息子の母親は、学校での勉強や、職場での仕事以外の、それらに差し支えるような家庭の様々な家事は、なるべく息子にさせず、自分が代わりに全てやってあげようとする。息子の方も、母親のそのような態度にいつの間にか慣らされて、自分は勉強、仕事だけやっていればいいのだ、その他のことは皆母や妻がやってくれるのだと思い込むようになる。
これが、日本において男性＝母親の息子が、勉強、仕事以外の家事をしなくなる一番の原因であると言える。原因は、男性を社会的になるべく効率的に出世、昇進させようとする男性の母親の態度にあるのである。
この男性の母親の態度は、男性の(専業主婦の)妻にも引き継がれ

る。妻は、男性が社会的に出世、昇進して、偉くなり、それに伴って、自分の社会における扱いが例えば「社長夫人」とか言われるようになって向上したり、男性が出世したりするのに伴って収入が増えて、自分もよい暮らしができるようになることを望んでいる。
そこで、妻は、男性を、職場での仕事に専念させて、それ以外のことに神経を使わなくて済むように、仕事以外の家事は全て自分が賄うという姿勢を見せる。それが、男性に、「ああ、自分は家事をやらないでいいのだな、仕事だけしていればいいのだな」と思わせるのである。
最近は、日本の若い女性も、あまり家事をしなくなってきているという話がある。これも、娘の母親が、娘のことを「自己実現の駒」として、勉強、仕事に専念させ、家事は全部自分が代行する態度を見せているからに他ならない。この背景には、男女雇用機会均等法とかの導入で、女性も、職場で一生懸命仕事をすれば、男性と同じように出世できるとする、「女性による社会の直接支配」の道の整備が開始されたことと関係している。
今までは、娘は、自分自身は直接社会的出世を行わず、男性のもとに嫁いで、家事を全部やる代わりに、男性(夫や息子)を職場での仕事に専念させ、ひたすら男性(夫や息子)の尻を叩いて、出世させようとしてきた。言わば、夫や息子を経由した間接的な社会的出世（間接出世）を行っていたのであること。それが、今度は、自分自身が直接出世する道が開けたため、今までのように、家事を女性ばかりする(男性がしない)のが急に不公平に見えるようになって、不満の声を上げているのが実態であろう。
この問題を解決するには、どうしたらいいか？それには、男性を「自己実現の駒」としてその尻を叩いて出世させようとする、言わば「社会の(男性を通じた) 間接支配」をしようとする女性の数を減らすことが第一である。男性が勉強、仕事ばかりして、家事をしないのは、彼女らの態度が根本原因であるからだ。
そういう点で、「男性が家事をしないのは不公平だ」と非難の声を上げる女性たちの本当の敵は、実は男性ではなく、(男性を「自己実現の駒」として極限までこき使うために、家事を男性に代わって全て代行しようとする)男性たちの母親や、専業主婦指向の妻であると言える。そういう女性たちが減らない限り、職場での仕事指向の女性の(男性に対して)感じる不公平感はなくならないであろう。
要は、彼女たちに、男性を通さず、自分自身で、直接社会の中で偉くなるように方向転換させる必要がある。特に、男性の母親たち＋専業主婦指向の妻たちをそういう「自己実現を男性に頼らず、自分自身で行う」方向に持っていく必要がある。
そのためには、そうした女性たちに、家事以外の、職場での仕事を

こなしていくための能力を付与していくことが必要となる。要は、彼女たちに「職業訓練」をさせるのであること。
ここで問題なのが、彼女たちが、家事以外には、余りこれといった職業的能力が身についていないことがあげられる。そこで考えられるのが、家事それ自身の職業化である。要は、各家庭において、家事の全面的なアウトソーシングを行い、家事の外部委託を大幅に増やすのであること。その委託業務に、「家事のプロ」である彼女たちを投入するのであること。要は、炊事、洗濯を外部社員が代行するようにし、その外部社員としての仕事を彼女たちが行うと言う訳である。
それも、家政婦として働く訳ではなく、炊事なら、食事を外部の大規模な給食会社センターで作って配達する。洗濯なら、洗濯物を各家庭に集配に来て、従来のドライクリーニング業と同様に工場で集中的に洗濯を行い、再び、各家庭に済んだ洗濯物を届けるというのを、大きな会社組織として分業して行うのであること。そして、その会社の主要業務を、それらに慣れている女性たちに担わせるのであること。そして、それらの会社で、彼女たち自身が、自ら(従来の男性同様)職場での仕事に専念して、昇進、出世競争を行うのである。
こうすることで、そもそも会社の仕事と、家庭の家事という分け方自体が消滅する(全て会社の仕事に一本化される)ので、従来の、「男性は家事をしないので、一方的に家事の負担が来る女性には不公平」という論調は成り立たなくなる。要は、従来の家庭における家事を、炊事、洗濯会社の職場での仕事として外部委託することで、「男性も女性も、(仕事以外で)家事をしなくて済む」ようにすればいいのである。
これは、子育ても同様であり、手間のかかる作業は、保育園、幼稚園によるアウトソーシングを積極的に活用することで、従来女性に負担が偏りがちだった作業を低減することができ、女性が職場での仕事に専念できるようになると考えられる。
男性にとっても、家事や育児をせずに、今までどおり職場での仕事に専念しても、何ら非難をされる筋合いがなくなることになり、「男は仕事」という価値観をそのまま維持することができるというメリットがある。もっとも「女は家庭」という価値観は放棄しないといけない。
あるいは、男性たちは、女性たち(母、専業主婦指向の妻)による「自己実現の駒」としての役割、プレッシャーから解放されることで、今までみたいに母、妻の(男性自身の社会的昇進に対する)期待という精神的重圧から解放され、より自由に精神的余裕を持って生きることができるようになるメリットもあると言える。

(初出2005年10月)

仕事人間、会社人間になりやすい日本男性

日本男性は、なぜ仕事人間、会社人間になりやすいのか？。
日本の男性は、仕事ばかりに打ち込んで、家庭のことを犠牲にしやすい体質を持っている。
それは、なぜであろうか？。
(1)自分の母親から、仕事に打ち込むようにコントロールされているからであること。母親の自己実現のための道具、操りロボットと化しているためであること。
(2)結婚すると、妻に、家計管理、子育てといった家庭機能の中枢を占領されるためであること。中枢の大事な機能を妻に全部取られる結果、夫の機能は、給料を家庭に入れるだけしか残っていない。それにひたすら専念しないと自らの存在意義が失われると考えるのである。
(3)家庭内で、妻と子に仲間はずれにされるためであること。母と子が緊密に癒着して母子連合体、カプセルを形成し、そこから父親を排除するため、夫は家の中にいても、邪魔者扱いされるか、便利な家事労働力提供者としてこき使われるだけである。それなら、家の外で過ごしたい、家から逃げたい、役所や会社で仕事に打ち込みたい、妻の支配から自由になりたいと考えるようになるのであること。
こうした現状を打破するには、。
(1)男性自身が、母親による干渉、支配から自由になることが必要である。
(2)結婚時に、家計管理、子育てといった家庭機能の中枢部分を、妻と五分五分で公平に分担できるように影響力を強めることが必要である。
(3)父子の心理的絆を、母子の絆に負けないように強めることが必要である。
（初出2012年1月）

「鵜飼型社会」からの脱却

日本のような農耕社会は、優位に立つ女性による、劣位の男性に対する生産管理が行われている、「鵜飼型社会」である、といえる。
男性は、魚(給料)を取ってくる鵜鳥である。一方、女性は、鵜鳥(男

性)を、魚(給料)を取らせるために、船(家庭)から漁場(職場)へと追いやる形で、働かせつつ、鵜鳥(男性)が働いた成果である魚(給料)を、鵜鳥(男性)から、(給与袋まるごと召しあげる、ないし給与振込銀行通帳を我が物にする形で)強引に吐き出させて、取り上げて自分の管理下に置く、鵜匠の役を実行している。鵜鳥(男性)は、実質的には、鵜匠(女性)の下で一方的にこき使われる下級労働者である。
農耕社会におけるメンズリブ＝本当の男性解放は、本来男性が生得的に持ち合わせていたが、ウェットな社会に適応する過程で失った、個人主義、自律・自立指向、非人間(メカ)指向など、ドライな生き方の回復にある、と考えられる。
上記のことが果たせぬまま、家事・育児などに参加しても、下級労働者として、女性にこき使われるだけの存在に成り果ててしまう。育児に参加する場合も、次世代の子供に、自分の生得的に持つドライな行動様式を注入できる場を確保することが条件となる。
女性への職場開放は、従来日本女性が家庭で占めてきた権限を縮小する(女性が、外の仕事に忙しくなって、家庭内の管理に回す時間が少なくなる)。これは、従来、家庭内で影が薄かった日本の男性が、家庭運営の主導権を女性と対等に持てるようになるチャンスである。したがって、「鵜飼型社会」からの脱却のためにも、男性は、女性の「社会進出」に対して寛容になるメリットは、十分あると考えられる。
(初出1999年08月)

日本の男性ジェンダー学者について

現在の日本の社会学、女性学においては、女性のみならず、男性のジェンダー学者が少なからず存在し、日本社会における女性差別の撤廃と、女性の勢力拡大を、女性の学者、運動家と一緒になって声高に叫んでいる。
はっきり言って、彼らは、母が支配する社会としての日本社会の現状を完全に取り違えており、日本社会を女性の立場が悪い社会と誤解しているのである。
これらの男性学者たちは、日本社会において、自分たち男性が置かれている立場の悪さに気付かず、自分たちを社会的強者、優位にある者として、より劣位にあるとする女性たちに慈悲的に接しようとしているのである。
彼らの心の奥底では、男性が女性よりも弱いことを認めることのできないプライドの高さがあり、その点、彼らが表立っては否定して

いる男尊女卑に、彼らは強く染まっていると言える。女性差別撤廃を声高に叫ぶことで、彼らは、日本社会における女性の弱さを再確認したつもりになり、そのプライドを満足させているのである。
こうした、姑や母といった女性たちが強権を握っている日本社会の実情を正しく捉えることに失敗しつつ、そのことに気付かず、女性が弱い社会と見なし続ける彼ら男性学者たちの姿は、滑稽であり、冷笑の対象としてふさわしいものである。
興味深いのは、彼らのような、日本社会の現実の把握に失敗する学者がなぜ次々と輩出するのかということである。
彼ら男性学者は、基本的に、明治時代以来変わらない日本の学者(特に天皇家の御用学者)の伝統的な役割である、先進欧米理論の消化吸収と小改良、日本社会への導入、当てはめの役割にひたすら則っているのである。
彼らは、自らは、独自の正しい理論を生み出す力を持たない。彼らは、欧米を、「正しい」「正解の」理論の供給基地と見なし、「欧米＝先生」という図式に基づいて、フェミニズム、ジェンダー理論のような欧米理論を何も考えずにひたすら導入する。欧米理論から離れて、自ら独自の理論を打ち出して主張することは、先生役である欧米を乗り越えようとする一種の越権行為と見なされ、学者仲間から足を引っ張られることになる。
彼らは、欧米理論を「正解」ないし「権威ある正しい学説」と見なし、その理解と暗記、小改良と日本社会への導入、当てはめに夢中になる。
それは、伝統的な大学入試や学者になるための門になる大学院入試に向けて、手っとり早く既存の「正解」を求める教育を受けてきた彼らにとっては、ごく自然な、疑問の余地のない行き方なのである。
ジェンダー理論のように、その当てはめの対象となる社会領域のあり方が、欧米と日本とで女性の持つ社会的勢力が大きく異なるといったように社会の実情が大きく異なる場合、欧米理論を日本社会に直輸入しようとする行為は、「そもそも元々一定条件下でのみ有効であり、その条件の元で使用されていた化学薬品等を、それらとは性質の異なる条件の現場に対して、その性質や条件の違いを認識しないまま、投入する」ことと同じであり、危険な自殺行為となる。その危険を、彼らは、ほとんど認識しないまま、欧米産の「正解」理論を日本に広める第一人者となって尊敬を受けようと必死になって、欧米理論を日本に導入するのである。
彼らは、自分が真っ先に目を付けてシンパになった先進欧米理論を日本社会に、その理論の第一人者となって広めることができ、それによって自分の名声が上がればそれでよいのであり、ジェンダー理

論も、自分たちの名声を上げるための手っとり早い道具なのである。
彼らにとって、日本社会の現状ははっきり言ってどうでもよいのである。彼らは、自分たちが導入しようとする欧米の理論に合わせた形で、日本社会の現状を曲げて把握する。
これは、ジェンダー理論についても同様であって、彼らは、自分たちが導入しようとする欧米のジェンダー理論、フェミニズム理論に合わせた形で、姑や母が社会的に大きな勢力を持つ日本社会を「正しく」曲解するのである。
欧米のジェンダー理論は、女性の立場が弱いことを前提とした理論であり、彼らはそれを日本社会に導入するに当たって、日本社会において女性が弱いと考えればうまく直輸入でき、理論の日本への第一の最先端の紹介者となれておいしい思いができて好都合だと考える。そこで、日本の女性のことを、自分たちが導入する「正しい」「正解の」欧米理論に合わせて、社会的に弱い存在だということにしようと半ば無意識のうちに考えるのである。
そして、日本女性が弱いことを示す証拠のみを専ら集めようとする。その際、日本社会において、表面的に男性が女性よりも威張っている男尊女卑とかに着目する。男尊女卑は、自分たちが導入しようとする欧米理論に合致した現象なので、それを見て「やはり自分の導入しようとする欧米理論は正しいのだ。自分たちはその先進理論を導入し、日本社会に対して啓蒙者となり、社会改革の最先端を行って皆の注目を集めるのだ。」と自己陶酔に陥ること。
そうして、日本社会において、女性が男性よりも強いことを示す証拠は、意図的というか半ば無意識のうちに無視するのである。
その証拠に、彼らの書く論文や書籍には、日本社会が母子間の紐帯、癒着が強く、子どもが母の意を自発的に汲んで動く動く形で母が社会を支配している母性社会であるとか、日本の国民性がとかく受け身で、相互の和合や一体感を重んじる女性的な雰囲気を強く持っており、女性優位であるとか、家庭の財布の紐を握るのが夫ではなく妻や姑(夫の母)であるとか、家庭において、男性と子どもとの間の結びつきが薄く、子どもを教育する権限は女性が独占しているといった、女性が日本社会を支配する側面は、ほとんど出てこない。
日本の女性(嫁や嫁になる予定の娘さんたち)は、本当は姑を批判したいのだけれど、それができないので、心理的な捌け口を求めて、男性を批判しているという点にも彼らは気付かない。
こうした欧米理論の日本社会への強引な、機械的な直輸入と、輸入に伴う矛盾点の無視を行うこと自体、欧米理論を権威ある正解と見なして、それと心理的に一体化して、信仰の対象とし、この理論に

付いていけば大丈夫だと考え、その理論のシンパとなって、理論を頼りにし、心理的に依存しよう、甘えようとする女性的な態度に基づくものであり、母性に支配されていることの証と言えること。なおかつ、当の理論を直輸入しようとする本人は、そのことに気付かないまま、自分自身に対しても矛盾している欧米理論をひたすら信仰している点、心理的に矛盾、ねじれを内包していると言える。
彼らはまた、自分の性向が受け身であり、自分からは変われない、新たな機軸を生み出せないのを、欧米理論を身にまとって、自ら改革者になった、変わったつもりでいるのである。そして、自分を改革者としてアピールしようとするのであること。
(初出2007年11月)

保守的な日本男性の「背後霊」

日本の男性は、全般に保守的、退嬰的で冒険が嫌いである。
そのことは例えば、学校卒業後の就職先選択で、これから先どうなるか分からないベンチャーではなく、既に安定している、権威がある官庁や大企業をより優先して選択することとかに現れている。
本来、男性は、既存の秩序を破壊、変革し、オリジナルな新境地を打ち立てるのを得意とするはずなのであるが、日本の男性はそれとは逆のコースを進んで、そのことに疑問とか特に持っていないようである。
日本の男性は、日本の大企業とかで、研究開発で、他社にない新製品を作っているではないか、という話もあるが、実際のところ、彼らは、ライバル他社がいるので、ライバル他社との競争に勝って顧客を獲得するために仕方なく新しいことにチャレンジしている、せざるを得ないのだという方が正しいだろう。ライバルがいない寡占状態になれば、彼らも、役人のように、新しいことにチャレンジせずに既存の前例に沿って生きる行き方を選択することになる。
日本男性は、なぜ、こうした保守的で、前例、しきたりを重視する生き方を選択するのであろうか？。
実際のところ、彼ら日本男性の背後に、そうした生き方を取るように仕向けている背後霊のような存在がいるのである。それは、男性の母親であったり、専業主婦の妻であったりといった、日本女性である。
女性は全般に、自らの保身、安全に敏感で退嬰的であり、経済的に安定していて、新しいことに手を出して失敗するより、既存の秩序を守ってその枠内で生きることを指向する。
彼女たちは、男性に、そうした自らの保身、安全、経済的安定が確

保されることを最優先にして要求する。一方、日本の男性は、強い母子一体感の中で育ってきている結果、母親や妻に対して、心理的に依存し、甘えているので、そうした彼女たちの要求に対して、反対することが心理的にできない。というか、知らず知らずのうちに、そうした生き方が望ましいのだと自分でも思うようになっているのである。
日本男性は、本来女性的な価値観である、既に確立された力を持つ中央官庁や大企業に就職して、その中で出世して、経済的に安定し豊かになるのがよいのだ、という価値観に知らず知らずのうちに深く感染し、既存の秩序、権威を破壊して新秩序を打ち立てるというチャレンジングな男性的生き方を回避するようになっているのである。
こうした、日本男性の保守性は、結局、日本男性が、女性的価値に支配されているためにそうなっているのだと言える。つまり、日本女性の社会的影響力の強さの現れであるということができる。
日本男性が本来の男性性を取り戻すには、こうした女性由来の保守性を克服することが求められる。
母親や妻の望む通りに、既存の秩序、権威に適応し、その枠内で生きるのか、既存秩序を破壊して、新境地を打ち立てる男性本来の方向に進むのか、日本男性は問われているのである。
(初出2008年03月)

母の掌の上の日本男性

日本男性のイメージは、お母さん=日本女性の手のひらの上で遊んでいる、腕白でわがままな未成熟な男の子というイメージである。
要するに、母の範囲内、影響内にとどまっており、そこから中々出られないのが日本の男性なのである。
そこには、母に守ってもらいたいとか、抱かれていたいとか、甘えていたいといったように、母の懐の中にいたいという「胎内回帰指向」が見えるのである。所属会社組織が母親代わりになっていたりする。
母にとって息子のような子供は一番大切な存在であり、大事に扱われやすい。それゆえ、日本の男性は、そのように母親に大事に扱われているうちに、自分が一番大切で可愛いと考えるようになり、女性同様、自己保身第一のナルシストになりがちであると言える。
(初出2010年7月)

母への反抗を恐れる日本男性

この文書では、日本の男性に対して、自分の母親との生暖かい一体感を断ち切って、自分の母親の支配から脱却し、独立することを提案している。
しかし、実際のところ、こうした提案に耳を貸す日本男性は残念ながら少ないだろうというのが、筆者の読みである。
一つは、日本の男性が、母親とのぬるま湯のような心地よい一体感、共感に浸りきっていて、そこから自力で抜け出すことが難しいということがある。せっかく母親と一緒に気持ちよい思いでいるのに、何でそこから出てわざわざ寒風に身をさらさなければいけないのか？という拒否反応であること。
もう一つは、上記の「母親の支配から脱却しましょう」という提案は、今まで自分を慈しみ育ててくれた恩人である母親に対して、反抗する、弓を引く行為に出る羽目になるからである。「慈母」「恩人」に弓を引くことなんて、心理的に出来るわけがないということである。
こうした母への反抗を拒否する日本男性の心情は、それだけ、日本において、母親と子供との間の一体感、共感が根強いこと、母と子を一つのカプセルと見なす母子連合体の存在が強力であることの現われである。
日本男性の母性からの解放には、母子一体感、母子癒着の破壊が必要であるが、当の男性が、母の作り出す強烈な母子一体感に心地よく浸りきることによってそれを阻まれているのが現状と言える。
(初出2009年5月)

女性による支配に対して声を上げない日本男性

なぜ日本男性は、女性による支配に対して、声を上げないか？。
(1)男が女によって立てられる、優先される、伝統的な弱者優先の男尊女卑に満足しているためである。
(2)自分、男は強いというプライドを壊されるので、女性によって支配されていることを認めたくないためである。
(3)母親に支配されるのを、気持よく思っているためであること。母との心地よい一体感に満足している、出たくないためであること。
(4)女性による、支配責任回避や被害者意識の充足を目的とした「日本は男社会である」という大合唱に思わず感化され、説得され、呑まれているためである。
(5)性的に惹かれている女性（奥さん、恋人）に怒られたくない、嫌

われたくないためであること。
（初出2012年1月）

日本社会の勝ち組男子は、実は負け組。

日本社会において、収入や地位の面で上位を確保した、いわゆる勝ち組の男性たちは、実際のところ本当に勝ち組なのであろうか？。
日本社会において勝ち上がるには、それなりに日本村社会に適応、適合することが必要であるが、その際問題となるのが、ウェットな日本村社会は、女性的であること。（集団重視、相互一体感、和合の重視・・・）それは、実質母性の支配下にあるということ。
つまり日本社会で成功するには、ものの考え方を女、母に合わせないといけないということである。女流にならないと成功できないこと。
日本社会における勝ち組男性の人生は、往々にして男性当人の人生ではなく、その母の人生になっていることが多いのではあるまいか。一見自分の意志で動いているように見えながら、実は母の意志で動いているのではないだろうか。日本社会のシステムは、母のためのシステムなのである。
要するに日本社会で勝ち上がるには、自らの男性性（個人の自立、自由の確保・・・）を捨てて、女流になり、母の言うことを聞いてその通りに動くことが必要であり、その点、男らしさの喪失という点で負け組になってしまうのである。
これと対比して、女性は、女流の日本社会では、存在するだけで勝ち組であると言える。
（初出2009年6月）

伝統的稲作農耕が日本男性弱体化の原因。

伝統的な稲作農耕が、日本における、母、姑による社会支配をもたらし、男性の立場の弱体化の大きな要因となっている。

稲作農耕は、一箇所に定住し、農業水利とかで相互に強く依存し合い、集団一斉作業を必須にする。その点、成員の自由な地点移動や別の土地への移転、個人主義に基づく独立したペースでの作業、といった、ドライで気体分子的な男性に有利な行動様式がことごとく制限され、周囲の他定住成員との絶えざる和合、同調、協調、集団主義に基づく周囲との一体感の醸成、といったウェットで液体分子

的な女性に有利な行動様式を、稲作農耕に従事する人々は取り入れざるを得ないのである。

その点、男性の立場を強化するには、伝統的な稲作農耕からの脱却が必要である。一つは、牧畜、遊牧をそのまま導入することであり、北海道とかで有望である。 もう一つは、カリフォルニアの稲作農耕のように、遊牧、牧畜的視点から構築された、新たな大規模、自動化稲作農耕を、本州においても実践することである。
（初出2011年8月）

真の男女共同参画社会実現を

真の男女共同参画社会の実現においては、男女が、家庭でも、職場でも参加が対等となる50:50を目指すべきである。男だけの社会、女だけの社会を無くし、男女混同を目指すべきであること。
日本の職場は、男の数が多い、男メインのいわゆる男社会になっており、男女比がアンバランスになっている。これは、勤め人である男性の母親たちが、息子＝男性のことをコントロールして、自己実現の道具として互いに競う場として職場を一斉に利用していることが原因である。あるいは、男性の妻たちが、自分では稼ぎの労働をしなくて良い、楽な専業主婦の立場から出ようとしないことが原因である。要するに、妻たちは、夫に働かせて、その給料をぶん取る剥奪者、寄生者、働かない有閑階級であろうとしてきたのであり、その姿勢が、妻の職場からの退去と、職場における男性の氾濫を招いてきたのである。
しかるに、日本の男性の給料は、中国とかがのしてきたのに伴って、確実に下がってきており、その結果、妻も働きに出ざるを得なくなってきている。これは、稼ぎの労働の男女共同化にとって望ましい傾向であると言える。
一方、日本の家庭は、母や妻の主導する女社会になっている。家計管理や、子供の教育といった重要な家庭の権限が女性へと集中しており、日本男性はそこから疎外されている。今後は、家庭における男女共同参画の実現が必要であり、男性にも、そうした権限を分けるべきである。幸い、日本経済における不況の進行に伴い、男性の勤務が暇になり、家庭に力を向ける余裕が生まれつつある。男性は、この機会を利用して、家庭に積極的に入り、女性が独占している家計管理、子育ての権限を半分奪取すべきである。
（初出2012年2月）

子育ての男女平等の実現

女親が女の子を責任を持って育て、男親が男の子を責任を持って育てるのが、育児の、従来の女親片親に偏らない、男女平等を実現する効果的な方法であるといえる。これは、同時に、育児担当の性による子供支配、すなわち、子供の自分の性への一方的な染め上げを回避させることにつながる。女親がべったり育てると、女の子だけでなく、男の子も、女の色に染まってしまうのである。
（初出2012年1月）

日本、中国、韓国における男の子優遇の本当の理由

日本や中国、韓国においては、男の子供が優遇、優先され、女の子供が冷遇される。 子供の支配者は母親であり（父親は除け者にされている。）、女性による社会支配が貫徹されているのであるが、一見女性に不利な状況が生じている。 婿母の姑の方が嫁母よりも偉そうな態度に出る。 同じ子供でも、男女差別される。 母親自身が女の子を差別している。これは、自分で自分のことを差別しているのに等しい。 な ぜ、男の子供が優遇されるかと言えば、男性の持つ家族代表機能のせいである。男子は、いざというときに家族の前面の矢面に立つ必要があり、表に立つもの、 代表者として日頃の心構えが必要である。代表であることを自覚させるために、周囲がわざと尊重する振りをするのである。 女子は、自分は安全な奥座敷に隠れて、自ら矢面に立つのを避けるのである。男性を矢面に立たせるため、わざと優遇し持ち上げているのであること。 本来奥で保護されるべき女性を、男性並みに矢面に引っ張り出すのが、欧米文化であり、女性にとっては不利である。
（初出2011年8月）

男性が女性に対して抱く矛盾した感情。

男性は、女性に性的に惹かれる。魅力を感じること。あるいは、男性である自分には無い優れた才能を持っていると感じる。
一方で、男性は、女性を、男性である自分はドライに振る舞いたいのに、女性によってウェットさを強制されるとして、自らを抑圧する、自らと敵対する存在として位置づけ、その勢力を押さえ込もうとする。押さえ込みに成功したのが、欧米男性であり、失敗したのが日本男性である。

（初出2012年6月）

欧米マスキュリズムと日本

マスキュリズムは、男性に対する性差別、男性差別の撤廃を目指す思想や運動であり、主に欧米で広まっている。社会において、兵役等、男性のみが不当に不利益を課されていると主張するものである。
これは、男性主導社会、家父長制社会での男性問題を指摘する立場であると言える。男性が、生物資源、生殖資源として女性よりも劣る存在であることがもっぱらクローズアップされることになる。
メスは、カニの漁でみられるように、オスに比べて漁期を短く制限される。メスはたくさん獲ると生物の個体数の現象に直結するため、資源保護のためにメスは獲らないのである。
それと同様に、人間でも女性は貴重な生殖資源とされるのである。
女性を自らの命を張って守らないといけないとか、戦争や水難で、女性の生存を優先させて、自らは死に行かないといけないという不利益が問題とされるのである。
こうした欧米のマスキュリズムに対して、日本のように、男性が社会において主導権を持ち得ない、女性、母性の強い国、社会の存在をアピールすることが、今後必要である。
欧米では、男性が社会において主導権を持てない日本のような社会があることが、きちんと知られていないからである。
今後のマスキュリズムの本場は、従来のような欧米ではなく、日本のように父性がか弱い、頼りない母権社会に移るのではないだろうか。
（初出2011年11月）

真に支配力のある男性と、周囲の女性から立てられている男性とを区別するには？。

真に支配力のある男性と、周囲の女性から立てられている男性とを区別するにはどうすれば良いか？。

それは、男性自身が取っている行動が、ドライかウェットかで判断できる。ドライであれば、男性は自立支配を行うことが出来ている。ウェットであれば、男性が威張っているのは女性が立ててくれているお陰であり、本当は女性が支配している。

（初出2013年10月）

夫婦、男女の権力の強さを測定する尺度

夫婦、男女の権力の強さを測定する尺度は、。

（１）家計管理の権限をどちらがどれ位独占しているかを測定する。家計簿を主に付けているのが夫婦のどちらかを尋ねる。

（２）子供の教育の権限をどちらがどれ位独占しているかを測定する。学校父母会に主にどちらが出席しているかを尋ねる。

（初出2013年10月）

２．

日本の家族は「家父長制」と言えるか？。

１．

血縁は、社会の最も根本をなす相互結合の部分であり、血縁レベルの権力を制する者が、その社会を制するといっても過言ではない。

血縁社会は具体的には家族であり、その生活が営まれる場が家庭である。家庭で実権を握る側の者が社会の根本部分を支配すると考えられる。

「家父長」制とは、父親が、家庭内の権力を掌握している状態であること。（家庭で実権を握ること。）その状態が当該社会に普及して、社会全体において半ば制度化された事実を指す。

従来の家父長制に関する理論は、普遍主義的理論であり、世界中どこでも女性が男性の統率下にあり弱いとするものであった。この考え方は日本でもそのまま機械的に受容され、日本は典型的な家父長制である、とされてきた。

以下においては、家庭において行使される権力の種類をいくつかに分類し、それぞれについて、日本の家庭において、男女どちらが持っているかを明らかにした上で、日本の男性が果たして「家父長」と言えるかどうかについて考察したい。

２．
家庭内権力は、経済的側面と、心理・文化的側面に分けられると考えられる。ここでは、まず、経済的側面について見ていく。
２－１．
２通りの説明が可能である。すなわち、Ａ．収入起源説と、Ｂ．管理起源説との２通りの説明ができる。

Ａ．

これは、収入をもたらす方がより発言権が強い、とする考え方である。

すなわち、「俺が稼いできたんだ。（俺は、一家の大黒柱だぞ。）みんなは俺のことをありがたいと思え。」ということ。収入をもたらしていること。（一家を収入面で支えていること。）そのことを根拠に権力を振るう、というものであること。日本においては、こちらに当てはまるのは、夫（父親）の側が多いと考えられる。

Ｂ．

これは、家計における資金の出入りを管理する方がより発言権が強い、とする考え方である。

すなわち、「つべこべいうと（私に逆らうと）、お小遣いあげないわよ」などと、家計全体のやりくりの決定権を握っていることを根拠に、権力を振るうことを指すこと。日本では、こちらに当てはまるのは、妻（母親）の側が多いと考えられる。

Ａ．収入起源説と、Ｂ．管理起源説とに関しては、欧米では、両方とも夫が掌握していることが多いので、欧米社会の夫（父親）は、すんなり家父長と言える。しかし、日本では、Ｂ．の管理起源に関しては妻（母親）が持つ。

すなわち、日本の場合、夫が得てきた収入が全額妻のもとに直行する。支出だけでなく、収入の管理も、夫がしているのではなく、妻がしているというのが適当であると考えられる。また、単なる生活費だけでなく、預金など家族全体の資産運用も妻が行っている場合がほとんどであると考えられるから、そういう意味で、妻の振るう権力は大きいと考えられる。現に、妻に対しては、「我が家の大蔵大臣」などと呼ばれる事が多いようである。日本の官庁組織で最も権力が集中しているのが大蔵省と考えられることから、そういう点では、妻に「管理者」としての一家の権力が集中しているとも考えられる。

Ａ．の収入起源説においては、夫（父親）がいくら稼いできても、その資金の家庭における出し入れを自分でコントロールできないのであれば、あまり実際の経済面での権力には、結びつかず、結局は、妻（母親）の管理下で働かされて、働いて得た給料をそのまま何も取らずに妻（母親）に差し出す労働者（下僕みたいな存在）にすぎない、とも言えそうである。言い換えれば、妻は働いてきた夫から収入を取り上げて、自分の管理下に置くのであって、夫は、「鵜飼」において、飼い主（妻、母親）に言われて魚（給料）を取ってきて、船に戻ってきたら、その魚を飼い主によって強制的に吐き出さされる。（魚（給料）は飼い主（妻、母）のものとなること。）その点、夫は、「鵜飼の鵜」のような存在にすぎないとも言えそうである。一家の大黒柱ということで、家族の構成員からある程度尊敬はされるかも知れないが、一種の「名誉」職としての色彩が強いのではあるまいか。

これと関連して、日本の家庭において資産の名義は夫（父親）になっていることが多いので、それが日本の家庭内で男性（夫、父親）の権力が強く、女性の地位が低い証拠であるとする見方があ

る。しかし、上でも述べたように、日本の家庭では、男性は、資産の管理権限（家計管理の権限、いわゆる財布）を女性に奪われている場合が多い。資産の管理権限を持たない名目上の所持者（男性）と、資産の出し入れをコントロールする実質上の所持者（女性）と、どちらが権力的に強いかと言えば、財布を握る実質上の所持者である女性であると考えるのが妥当なのではあるまいか。この場合も、男性は表面的に尊敬されるだけであり、実質的な権限を喪失した「名誉」職にとどまっているのが実状ではなかろうか。

土地などの財産名義は夫（男性）である。実際に証書・帳面などを管理すること。（実際に資産を運用していること。）それを行っているのは女性である。

日本においては、母の代用言葉として、「おふくろ」という言葉があるが、その語源は、一家の財産を入れた袋を持つ人の意味という説がある。
この語源が正しければ、一家の財産を管理していたのは、男性ではなく、女性であるということになり、かつ、財産の使用する/しないの権限などを持つ者が、そうでない者よりも、より上の地位にあるとすれば、女性の方が、男性よりも、地位がもともと高いことになる。

日本では、女性が、夫名義で銀行口座を作るなどして、家庭の資産の全面的な運用をする場合がほとんどなのではないか。夫の名前を表面的にせよ名義に利用することで、夫の顔を（一家の代表であるとして）立てること。（面子を潰さないこと。）しかし、実質的な資産運用権限は、女性（妻）がしっかり掌握して、男性（夫）の手には渡そうとしない。

日本の女性フェミニストは、被害者意識ばかりが先行して、いかに自分たちが家庭生活上、強大な権限を振るっているかについての自覚が足りないのではないか？。

いずれにせよ、欧米では、家庭の資産の出し入れ（財布）を一手に握る夫（父親）のもとで、家事に必要な金額をその都度もらって家事を行うだけの妻（母親）は、「家事労働者（家政婦）」に過ぎず、その家庭の中での地位は低いので、「家父長」制を告発したくなる理由は明白で理解しやすい。これに対し、日本においては、妻（母親、姑も含む。）のほうが財布を握っているのだから、その地位は単なる家事労働者ではなく、他の家族構成員の上にたって彼ら

の生活をコントロールする「家庭内管理職」「生活管理者」と見なすのが妥当なのではないか。

日本の女性がみずからが所持する実質的な経済的権力のことに目をつぶり、男性が持つ名目的な権力を「家父長」制だと言って攻撃するのは、アンフェアであると言えないだろうか（それとも実質的な権力と名目的な権力との両方を手に入れたいとの意欲の現われなのか）？

日本においては、女性が一家の財布の紐を握る。（それは、財産の管理をすること。）それは、全国世帯の少なくとも６０～７０％を占めるとされる。家計簿の付録が、男性雑誌でなく女性雑誌（主婦の友とか）に付いてくるのもこのことの現れと見てよい。

妻は、家庭の財政上の支出権限をにぎる。夫自身には自分の稼いできた給料を管理する権限がない。家に給料を入れるだけの存在であること。（単なる給料振込マシンに過ぎないこと。）彼は昔は給料袋をそのまま妻に渡していた。彼の給料は現代では銀行振込で通帳を握る妻のもとへと直行する。彼がせっかく稼いできた給料は、彼自身の手元には残らず、みな妻のもとに直行してしまうのであり、彼自身の自由にはならない。彼は自分の稼いだ給料から疎外されているのである。

なぜ、日本の男性は、自分にとって最低限必要な資金（それは、本来家庭とは関係ないところで自分が使う資金。）まで、みんな妻に渡してしまい、改めて小遣いのかたちでもらうことが多いのか。しかも、夫自身の小遣いの額を最終的に決める権限は妻にあって、夫自身はそこから疎外されている。夫は自分自身のことを自分で決められない（決定の主導権を妻に渡してしまうこと。）こと。日本の男性(夫)は、自分の立場をわざわざ弱くするようなことをするのか？自分がせっかく稼いだ賃金からの疎外現象が起きている。
（「自己賃金からの疎外」）

何故、欧米と日本とで「大蔵省」になるジェンダーに差が出たか、の原因解明は今後の課題である（日本において、夫が妻に対して自分の稼いだ給料をまるごとそのまま渡してしまう慣例がいつどのようにして出来上がったのであろうか？。）が、一つの考え方として、遊牧社会と農耕社会との違いが考えられる。地理学や文化人類学の知見によれば、遊牧社会は男性向きなのに対して、農耕は女性が始めたものであり、女性により向いているという。稲作という、

女性向きの環境適応（食料の確保など）

家庭における支出（小遣いなど）決定（予算編成）の権限を女性が握っているといっても、男性に、予算編成の能力がないのではない（現に日本国の大蔵省では、主に男性が予算編成をやっている。）が、家庭においては、過去（いつかは分からない。）に権力闘争に敗れた結果、ずっと女性のものとなってしまった、と考えられること。

２－２．

(1)夫の妻・母（姑）への心理的依存

日本では、夫に、妻を母親がわりにして心理的に依存する傾向があると言われる。自分の母親が姑として生きているときには母親に甘え、母親亡き後は妻に甘える、というものである。こういった現象を一つの文化と見なして、「母ちゃん文化」と呼ぶ人もいるようである。また、「結婚して、大きな子供が一人増えた」などと言う主婦の声も多い。

また、日本の家庭で多く発生する「嫁姑問題」は、夫（息子）と姑（母親）との絆が強く、夫と妻との絆と拮抗するために起きると考えられている。日本社会が、母性優位で動いている一つの証拠とも見られる。夫が本当の家父長ならば、夫は妻と姑の上に立って、即座に両者間の葛藤を解決できるはずなのであるが、日本の夫は、実際には、妻と姑の両者に振り回されて、どっちつかずの中途半端な態度しか取れない場合が大半なのではないか？また、潜在的にマザーコンプレクスである（自分の母親に対して頭が上がらない。）

女性(妻、母)に心理的に依存し頭の上がらない男性(夫)が、本当の意味での家父長と言えるかといえばはなはだ疑わしいのが現実ではあるまいか？。

(2)家庭における夫の不在

日本の家庭においては、特にサラリーマン家庭においては、夫が仕事人間で、家庭のことを省みないことが多いとされる。その結果、夫の家庭における影が薄くなり、ひいては他の家族成員から疎外される現象が起きている。これは、自分の父親が家庭にいなかったため、自分の父親の家庭人としての観察学習ができなかったことが原

因と思われる。夫は、予め家庭・子供の育児などに興味を持たないように→家庭から自発的に疎外されるように、家庭において妻が経済・教育上の権限を自動的に掌握することが、家族において代々続いて起きるように、社会的に仕組まれている、と考えられる。

家庭に不在な者が、家庭の心理的な面で権力を握るとは考えにくい。結局、妻によって「お父さんはえらいんだよ」とか人為的に立ててもらわない限り、日本の男性（夫）は、力を振るえない。

(3)子供の教育権限の女性への集中

日本の家庭においては、子育ては母親（女性）が独占する割合が、欧米に比べて高いと見られる。そういう点で、日本の男性は、自分自身の子供の教育を行う権限から、自ら進んで疎外されてきた、といってよい。子育てを行う結果、子供が自分になつき、自分の言うことを聞くようにさせたり、自分が持っている価値観を子供に伝えたりできるのは、子育てをする者にとって、大きな役得である。その役得を得る者が、日本では女性に集中し、男性は、「男は家庭に振り回されるべきではない、給料稼ぎに専念すべきだ」とする周囲の、男性を家庭から切り離す価値観によって、自ら子育て・子供の教育を行う権利を失っているのである。結果として、家族内で子供を実質的に統率する役目を、父親ではなく、母親（女性）が占めることが多くなる、と考えられる。

子供の管理者としての妻は、子供の教育面での実権を握る。妻は（女性）は、夫に賃金供給者としてよりよく働くように、プレッシャーを与えて（となりの〇〇さんの御主人は課長になったそうよ、あなたにも一生懸命働いてなってもらいたい、などと言う。）、夫（男性）から、子供を無意識のうちに近づけないこと。（自分が独占すること。）その結果、夫（男性）には、子供からの疎外とも言うべき現象が生じる。（子供の教育の権限を奪われること。子供から無用者、粗大ゴミ扱いされること。）

家庭や自分自身の子供から切り離された存在である日本の男性が、家庭において、自分の子供を思うままに統率できる「家父長」にそのまますんなりなれるとは、考えにくい。実際の権力を握る女性側のお膳立て（「お父さんはえらいんだよ」と子供の前で持ち上げるなど。）

子供と母親の間の一体感や絆が（欧米に比べて）強い、裏返せば子供と父親との間の絆が弱い、ということも、父親が子供にとって一家の中心的存在からかけ離れている。（むしろ母親の方が一家の中心にいる。）

結局、心理・文化的側面においても、日本において、男性（夫）は、女性（妻）に対して依存的でかつ家庭内で影が薄い、ということになれば、日本に家父長制が成立しているという、従来の日本のフェミニズムの論説は、はなはだ怪しいと見るべきではあるまいか？。

３．

家父長制と紛らわしい慣行として、男尊女卑と嫁入りがあげられる。

３－１．

男尊女卑とは、男性が女性よりも尊重される、女性の男性への服従であり、欧米におけるレディーファーストの反対の現象であると考えられる。
従来の日本では、男尊女卑は、女性の、男性に比較した地位の低さを示す象徴として、フェミニストのやり玉に挙げられてきた概念であったこと。

日本で男尊女卑に反対して女性解放運動を起こすという日本のフェミニズムの解釈が正しいのならば、レディーファーストの欧米では、男性解放運動が起きるはずである。（レディーファーストの慣行では、女性が男性よりも尊重される、男性が女性に服従する。）

レディーファーストは、身近な例をあげれば、例えば、自動車のドアを男性が先回りして女性のために開けてあげるとか、レストランで女性のいすを引いて座らせてあげるとか、の行為を指す。この場合、見た目には、男女関係は、女王と従者の関係のように見える。（女性が威張っていて、男性は下位に甘んじている。）

しかるに、女性解放を目指すウーマンリブ運動はレディーファーストの欧米で始まっている。

それと同様のことを男尊女卑に当てはめると、女性は男性に対し

て、見掛け上のみ従属することを示しており、勢力的には女性の方が男性よりも強く、必ずしも女性は弱者ではないと言えるのではないか。

男尊女卑は、女性が男性に対して、見かけ上も、実質上も支配下に置かれる状態をさすので、欧米のレディーファーストよりも、女性にとって問題は深刻であるというのが従来の日本のフェミニストの見方であろうが、日本において、実質的な支配力という点で、女性が男性に服従していると見なすことには、いくつもの反論が可能である。

日本の女性が、経済的に、家庭における家計管理全般の権限（夫への小遣いの額を決める権限など）を握っている点、あるいは文化的な面として、子供の教育の権限を一手に握っており、その影響下で子供（特に男性）が育てられる結果、日本人の国民性（社会的性格）が女性化している(父性よりも母性原理に従って動く、人間関係で和合を重んじる、集団主義的であるなど)点、などが、日本ではむしろ女性が男性を支配しているのではないか、と思わせる証拠には事欠かないと考えられる。

日本人の国民性が女性的であると思われる根拠としては、例えば、以下のような点があげられる。

・人間関係を重要視すること。（女性の方が、男性よりも、赤ん坊の頃から、人間に対する興味が強いとされる。）

・外圧がないと自分からは動こうとしない（外交など）→受動性

・就職などの大組織（官庁・大企業）指向　寄らば大樹の陰→安全指向

・前例のないことはしない（科学分野で、独創的な理論が少なく、欧米理論の追試ばかりしている。）

・理性的というよりは、情緒的である（社会学の家族理論で、情緒面でのリーダーは、女性に割り当てられている。）

・集団主義（女性のほうが、男性よりも、互いに集まること自体を好むとされている。）

日本において、女性（妻）が、家庭内で男性（夫）に従うように見えるのは、見掛け上、夫を立てているからである。（それは、夫の収入供給者としてのやる気を出させるなどのため、必要である。）妻が夫を立てるのを止めると、もともと確固たる足場を持たない夫の権威はたちまち地に落ちてしまうと考えられる。

実際、日本の男性は家庭内では、「粗大ゴミ」とか「濡れ落ち葉」などと称されて、存在感のないことはなはだしい。これらは、男性の実際の家庭内の地位の低さを示す言葉だと言える。

前にも触れたが、日本の一般的な家庭生活においては、女性が、経済面での家計予算編成権限（夫の小遣い額の決定など）だけでなく子供の教育権限（母子一体感の醸成に基づくこと。）を一手に握っているため、日本の家庭は、実質的には男性ではなく女性の支配する空間となっている。（家父長制は表面だけ。）

マードックのいう核家族の４機能のうち、日本では、二つの機能（経済、教育）を女性が独占している。あとの二つは、性と生殖という、どちらが優勢とは言えない項目である。

むしろ、日本の女性は、特に専業主婦の場合は、その権限の強さから、「家庭内管理職」「(家族生活の)管理者」として、夫や子供など他の家族よりも上位にある存在として捉えるのが適当なのではないか？つまり、家庭を官僚制組織のように見なした場合、日本では、女性が男性の生活全般を管理する管理職の立場につき、男性はその下で生活する単なる労働者として、自分が働いて得た給与を、女性に全額差し出す行動をとっているのが、日本の現状であると考えられないか？。

日本においては、女性が官庁や企業などで管理職につく事が（男性よりも。）大幅に少ないとされ、それが日本の女性の地位の低さを示している、と日本のフェミニズムの批判の対象となってきたが、これも、上記の見方を適用すれば、夫が、家庭の外でどんなえらい地位。（例えば首相）に就いても、妻がその「生活管理者」となる。（「首相」を管理する「（家庭内）管理者（管理職）」。）それは、いかなる場合も、女性が男性にとって管理職になるということである。それは、根本的な女性上位を示す。

３－２．
家庭における妻の夫への服従というのは、夫個人への服従というよ

りは、夫の家の家族。（姑とか）への服従と考えるべきであること。

従来の直系家族における（新たに嫁入りしたこと。）
つまり、妻は、「新入り」家族の一員として、外から夫の家へと、影響力ゼロの状態から入ることになる。従って、入り立ては地位が低く、夫他の家族に比べて弱いことになる。しかし、この「新参者効果」というものは、妻が家庭内の慣習などに慣れて実力をつけていくにつれて、やがて消えることになり、妻の力は次第に強くなっていくと考えられる。夫の家に入って間もない時点で地位を測定すると、夫に対して弱いように見えるが、姑から家計管理の権限などを譲り渡された時点では、地位の面で夫を上回っていることが考えられる。また、夫婦別姓になると夫の家への服従がなくなる分、強く見えるようになると考えられる。

夫の家族との同居が妻を萎縮させる原因となる。漫画のサザエさんのように同居しないと強くなること。妻の服従は、夫の家への服従、夫の親への服従であり、特に同性の女性である姑への服従である。その意味では、妻の服従とは女性(姑)と女性(義理の娘)の間の問題になる。夫への服従は、夫の家の家風などへの一連の恭順の一部であり、夫個人に対してのものとは必ずしも言えない。夫が「家父長」だから従っているわけではない、と考えられる。夫個人をその属する家から分離させる形で取り出して、妻と一対一で向かい合わせたとき、夫が優位を保てるかは、甚だ疑わしい。

４．

以上の点を勘案すると、必ずしも女性が弱いとは言えない。 また、日本において正しい意味での家父長制があったと言うことはできない。男性（夫、息子）の方が女性よりも弱く、女性（妻、母）の方が男性よりも強い。

現状の日本のフェミニズム理論は、将来的には、理論の欧米からの直輸入と、日本社会への機械的当てはめが失敗に終わった事例として、後世に汚名を残すのではあるまいか。

日本の男性たちは、仕事のためと称して家庭に遅く帰り朝早く出て行く生活を送っており、家庭における父親不在をもたらしている。なぜならば彼らは家庭の中で自分の部屋が持てないなど居場所がなく、家族成員から疎外されており、家庭にいるのが不愉快だからで

ある。彼らは家計管理や子供の教育についても主導権を持てないでいる。家庭内の実権はすべて女性に握られており、日本の家庭は実質的に母権制なのである。

このように日本の家庭において男性の影が非常に薄いにもかかわらず、女性が男性のことを「家父長」呼ばわりし続けるのには、それなりの理由と戦略があると考えられる。

一般に、組織において「長」の付く役職にある人の果たす役割は、大きく分けて1)代表、2)責任、3)管理の 3 つがあると考えられる。代表機能は、組織の顔として、外部環境に対して自分自身を直接露出する役割、責任機能は、組織成員が失敗を犯したときにその責任を取って社会的制裁を受ける役割、管理機能は、組織成員の行動を強制力を伴って管理・制御する役割である。

日本の家庭では、このうち管理の役割は女性がほぼ独占している。女性(妻、母)は家計管理や子供の教育の権限を持ち、男性(夫、息子)を自分に対して心理的に依存させることで、男性(夫)や子供が自分の思い通りに動くように、自分の言うことを聞くように仕向けている。管理者＝「長」と見なす考え方からは、日本男性は「家父長」の資格を明らかに欠いている。

しかし、代表と、責任の役割については、女性はその役割を遂行することを回避し、男性に押しつけようとしている。女性が家庭管理の権限がない男性のことを意図的に「家父長」呼ばわりするのは、家庭という組織を対外的に代表し、運営がうまく行かなかった時の責任を取る役回りを男性に全部やらせようと策略を巡らしているからに他ならない。ではなぜ女性は、代表・責任役割を自ら取ろうとしないのか？それは、女性が根源的に持つ、我が身を危ない立場に置こうとせず、常に安全な位置にいようとする自己保身の指向に基づく。

女性は、代表者として対外的に表面に出るのを嫌う。それは、危険にさらされる外側よりも内側の世界に留まった方が安全が確保しやすいからである。家庭を対外的に代表するということは、外部に対して我が身を露出することであり、直接攻撃や危害を加えられる立場に立つことである。そのため、女性は、男性を対外的な「盾」となる代表役に仕立てて、自分はその内側で安全を保証された生活を送ろうとする。男性を家庭を代表する「家父長」に仕立てるのは、

男性を家の外の風にさらして、自分はその内側で気楽に過ごそうとする魂胆があるからに他ならない。

女性は、また、失敗時に責任を取らされて社会的制裁を受けるのを嫌う。制裁を受けることにより、社会的生命を失い誰からも助けてもらえなくなり、自分の身の安全を脅かされることを恐れるからである。そのため、自分からは行動上の最終的な決断をせず、決断をする役回りは全て男性に押しつけようとする。

責任逃れの口実として、男性を家庭内の物事を最終的に決断する「家父長」に仕立て上げて「あなたが決めてよ」と言って決めさせ、失敗時には「決めたのはあなたよ。あなたがこうしなさいと言ったから、私はそれに従ったまでよ。あなたがいけないからこうなったのよ。私の責任ではないわ。」と逃げられるようにすること。男性が物事を自分からは決めようとしないと、「優柔不断な男は嫌い」ということで、その男性を非難する。

「家父長」の呼称は、彼が、女性による責任押し付けの標的・対象となっていることの現れであり、その意味で、ありがたい呼称とはお世辞にも言えない。日本の女性は、普段は男性をやっかい者扱いしながら、行動結果の責任なすり付けに都合の良いときだけ男性を頼りにしよう、利用しようとするのであり、それが女性が家庭内での実権を持たない男性のことをいつまでも「家父長」呼ばわりする真の理由なのである。このことを知らずに、女性から「あなたは家父長」とおだてられていい気になっている日本の男性たちは、救いようのない愚かな存在なのかも知れない。

(初出1998年08月)

見かけだけの家父長制社会日本

日本社会が家父長制に見えるのは、見かけだけである。

日本の女性は、失敗したとき、自らの責任逃れをするために、男性に責任ある「長」の地位を押しつけている。その点、女性による、男性優位の演出が行われている。日本男性は、女性の厚意で威張らせてもらっている、と考えておいた方が身のためである。

日本が本当に家父長制の社会なら、国民性が、男性的＝ドライとなるはずである。しかるに、伝統的な日本社会の国民性は、ウェットで女性的である(女々しい)。国民性が女々しくて、かつ家父長制というのは成立しえないのではないか？日本社会＝母権制ではないかと、疑うべきである。

欧米のような真の家父長制においては、。
・父親 - 子供の紐帯が、母親 - 子供の紐帯よりも強い。
・父が子育ての最終的な権限を握っている。子供がドライ＝男性的に育つのは、父親の影響力が大きいからである。
・近親相姦は、父親と娘の間に起こりやすい。

一方、日本のような母権制においては、。
・母親 - 子供の紐帯が、父親 - 子供の紐帯よりも強い。
・母が子育ての最終的な権限を握っている。子供がウェット＝女性的に育つのは、母親の影響力が大きいからである。
・近親相姦は、母親と息子の間に起こりやすい。

日本では、夫が妻に、心理的に依存する程度が、妻が夫に、心理的に依存する程度よりも、ずっと強い。
夫婦の間に子供が生れたとたんに、夫は、妻の事を、「ママ」とか「お母さん」と呼ぶようになり、実の母親に対する甘えを、妻に移行させる、とされる。
妻に対して心理的に依存している夫が、妻を支配する家父長であるというのは、依存される方が、依存する方を支配する、という常識と矛盾している。

(初出2000年07月)

日本における家父長像の誤解について

真の家父長となる条件は何か？。
日本における家父長像は、本来のものとはずれており、誤解されている。

(1)日本の父親のように、自分からは何もしないで、「○○しろ」「○○持って来い」というように、自分は座ったままで何もしないで、妻に、身の回りのことを、威張って命令口調でやらせる(やってもらう)のは、家父長とは言えない。皆妻にやってもらわない

と、自分の力では、何一つできない。本来、家父長は、動的に、自ら進んで体を動かす、家族の手本となる行動様式を示す指導者でなくてはならない。能動性が必要である。単なる怠け者や快楽主義者では、家族は、自分の事を家父長とは見なさず、厄介な「お荷物」としてしか、見ないであろう。

(2)日本の父親が持つ、浪花節的な、ベタベタした親分子分のような関係は、男性的ではない。メンタルな面で母性の支配下にあり、家父長とは言えない。家父長たるには、ドライな合理性、個人主義、自由主義などを、身につける必要がある。

(3)日本の父親は、どっしりとして(どっしり座って)、てこでも動かない、重い存在であることが、理想的であるとされてきた。
一カ所から動かないのは、定着指向であり、静的(ウェット)であり、母性的である。

(初出2000年07月)

不在家長

日本男性は、深夜まで残業するなど、職場に引きつけられて家庭に帰らない。これは、「不在家長」現象と呼べる。

この現象が起きるのは、以下の原因によると考えられる。
1.家庭で、父親の姿を見ずに育った(父親不在の家庭)こと。家庭にいる父親像を学習していないこと。
2.職場で、昇進競争をするように、母や妻から圧力がかかる。夫(息子)の肩書(表看板)が、そのまま管理者たる妻(母)のえらさになる。いかにうまく管理したかの証拠となること。

こうした原因が、男性を、職場に長くい続けさせ、家庭において不在となり、影が薄くなることにつながる。

(初出2000年07月)

日本の家庭を父権化する計画について

従来、母性の支配下にある日本の家庭は、男性の立場からは、少しでも父親の力を取り戻し、父権化、家父長制化することが必要である。

そのためには、まず、最近の、社会進出を優先して、子育てに母性が不可欠とする母性愛神話を打破しよう、子育てを放棄しようとする女性側の動きを利用することが望ましい。

つまり、女性学、フェミニズムによる育児回避・放棄運動に乗じて、「母親たちが育てないならば、父親が育児を一手に引き受けよう」「父性主導の子育てを実現させよう」と運動するのである。

3歳児までの、子供の人格の基盤が固まる時期を、母性を排除し、父性側で押さえる。父性の介入を最大限にして、母性による子供の独占を阻止すること。

従来の日本の子供は、母親と癒着した、「母性の漬け物」と化している。これを改め、子供から母性分を「脱水」し、代わりに、「父性の漬け物」とするのであること。

そのためには、欧米の父権制(家父長制)社会を手本にして、母性偏重の日本家庭に父性の風を持ち込むことが重要である。

父親主導のドライな雰囲気の子育てを行うこと。例えば、川の字添い寝を廃止し、母親と子供の密着を阻止するため、子供を、早期に個室に入れること。子供が、一人で自分自身を律することが早い段階で可能になるようにする。そうすることで、子供もドライな父性的な風を身につけることができ、父親主導の子育てが可能となる。

そうすることで、子供は、父親になつく、父親を頼りにするようになり、今度は、逆に、母親の方が子供たちから疎外される感じになるであろう。そうすればしめたものであること。家庭の中心に、父親が位置するようになる日は近い。

父権制における真の父親は、戦前日本の父親のように、家庭の中で、ワンマンの暴君、専制君主のように、わがままな大きな子供のように振る舞うことはない。父権制の父親は、ドライで合理性を

持った、自由で個人主義で自律的で明確な自己主張を持った、必要な時には危険に直面し、きちんと責任を取り、探検好きで、進取の気性に富んだ、ドライな存在である。

真の父親は、レディーファーストで、表面的には母親を立てるが、裏では、彼女を愛人兼家政婦として、その上に立つ形で支配する。もちろん家計も父親が管理し、母親に、家事労働に必要な小遣いを渡すのである。

日本家庭において、こうした父権制化を実現するためには、何よりも、日本の父親たちが、従来の母親べったりのウェットな存在から脱却して、欧米並みのドライな考え方を取るようになる必要がある。そのために、父親がドライな態度を取れるように訓練する、教育プログラムを、欧米における父親の意見を参考にしながら、日本で開設する必要がある。

特に、キリスト教系の学校では、欧米人の宣教師が、父権的なドライな接し方で、子供や児童に接するので、日本の男子生徒~父親たちは、それを参考にして、早くから父性的な振る舞いを身につけるようにすることが考えられる。

父権モデルは、欧米が白人のため、日本と人種的に離れていて問題だというのであれば、欧米同様遊牧・牧畜民であり、かつ日本と同じ人種であるモンゴルとかでもよい。

日本の家庭を、女性、母性の支配の場でなくすには、家庭を「妻の王国」「母の王国」として、そこに君臨する妻や母たちを、家庭の外に出して、家庭の中での女性、母性の支配力、影響力をできるだけ減らし、その代わりに父性をどんどん注入することで、日本の家庭を女性、母性支配の場から、男性、父性支配の場へと転換させる必要がある。

その意味で、日本において、女性を、家庭の外の、会社などに社会進出させることは、社会の根幹をなす家庭において、男性の影響力をより増やす上で、有効かつ重要な戦略である。

日本女性の家庭における支配力を弱めるため、日本女性が家庭を離れて職場社会進出するのを促進することこそが、現状の日本男性の社会的地位向上のために重要なのである。

現状では、日本の男性は、女性に社会進出されて、給料を稼がれると、自分の経済的な甲斐性、女性を経済的に養う力を否定されるように感じて、女性の社会進出に反対することが多い。

しかし、重要なのは、誰が稼ぐかではなく、誰が財政の紐を握るかなのである。いくら、稼いできても、その稼ぎを妻に取り上げられて、妻から小遣いを渡される「ワンコイン亭主」でいるようでは何もならない。男性が「財布の紐を握る」「財布の紐を女性から奪い取る」ことこそが、日本における家庭ひいては社会全体の父権化、家父長制化(男性による支配の実現)にとって本質的である。その点、日本の男性は、誰が稼いだかには、これまでのようにはこだわらず、むしろ、誰が(家族が)稼いだ金を管理するか、誰が家計を支配するかという点にこだわるべきなのである。

子供の教育についても同様である。子供の教育を母親、妻任せにしていると、子供は母親の言うことを聞いて、父親の影が薄くなる。これが、日本において、父性の欠如した次世代の子供を繰り返し再生産することにつながっており、家庭や社会における父権の強化のために、父親が子供の教育を主導する形へと改める必要がある。その際、父親は、子供を母親から切り離して独立した自律的存在とすることに心を砕くべきである。そうすることで、子供に対する(子供を包含し一体化し、強い紐帯を子供との間で維持しようとする)母親の影響力を弱めることができる。

女性を社会進出させて、家庭内における影響力を低下させ、その間隙を突いて、家庭の中枢をなす機能(家計管理、子供の教育)を奪取することこそが、日本の男性にとって必要である。

(初出2004年08月)

父性が母性に呑まれている。

一見威張っている日本の男性は、母性によるコントロールを受けている。父性が母性の中に呑み込まれ、取り込まれ、弱体化、消滅している。その結果、父性が無いとか、家庭における父親不在の現象を生み出している。
日本では、本来、父性の担い手たるべき男性が母性の担い手となっ

ている。彼は、母親に精神的に呑まれて、父性を失っている。
そこで、ヤクザ、野球の監督、学会ボスといった親分のように、まるで母親のような包容力が重視され、日本の男性に求められるようになっている。これが、浪花節の世界である。
あるいは、日本の男性は、母親代わりの家事労働力としてのみ働こうとする。父親ではなく、第二の母親として、子供に接しようとする。
あるいは、そもそも子育てを避けて、父親の役割から逃げて、母の息子としての役回りのみに留まろうとすること。
こうした現状は、改められるべきである。
例えば、
母性的な包容力では無く、父性的な判断、決断、理屈付け、行動力で動くようにするとか、。
母親と同じ事をするのではなく、冒険、探検のように父親しかできないことをするとか、。
母の息子の役回りから卒業することとか、
が必要なのではないだろうか。
（初出2012年1月）

父性無き「男社会」（だったこと。）

日本は、社会の基盤は母性が支配している、実質女社会である（典型的な農耕民の社会）こと。
日本男性は、経済的な稼ぎ手として重宝するため、女性によって、立てられ、おだてられてきたこと。（プライドを持たせないと、しぼんでしまい、仕事をしなくなるため。）
男性は、父性が欠如し、実権が無いにも関わらず、威張ってきた。見かけの地位が高かった。（実質的地位は低かったが、そのことは隠蔽されてきた。）男社会とおだてられ、それに何の疑問も持たなかった。
ところが、欧米から入ってきたフェミニズムの影響で、男性が威張っている現状を改めるべきという風潮になった。
女性が男性を立てなくなり、代わりに格下の道具扱いするようになった（アッシーとか貢ぐ君とか）こと。
男性が見かけの地位を失ったこと。本来の実質的地位の通り、社会

的弱者になったこと。（本来の弱い地位に戻ったこと。）
この困った現状をどうすれば改善できるか考え始めることが、日本男性が持つべき、共有すべき問題意識である（が、あまり持っている、共有している男性がいないのが現状。）こと。
この問題は、社会的地位の認識において、見かけの地位と、実質的地位とを区別することが必要であることの好例であるといえる。
男女の見かけの地位（apparent status）と、実質的地位（substantial status）が乖離していたのが、一致するようになったというのが、日本社会の変化であると言える。
なお、林道義によって、日本社会における「父性の復権」が唱えられたことがあったが、それは、女性に立てられ威張っていた戦前の男性の姿を父性的であると誤認し、その状態に立ち戻ろうと主張した内容であった。実際には、日本社会には、「復権」するに足る父性はもともとほとんど無かったというのが正しい見方と言えるのではないか。日本社会では、父性の「復権」は成立し得ず、父性の「新規創造」とか「欧米などの家父長制社会からの新規学習、模倣」という言葉がよりふさわしいと言える。

（初出2013年6月～12月）

雷親父と母

ロシアの雷帝、ないし日本で雷親父と呼ばれる存在は、ヒステリックで、怖くて、凶暴で、残虐で、非理性的な存在である。
それは、父性的というよりは、万事に厳しい、すぐヒステリックに怒る姑と体質が同じであり、姑の男性版、母性的存在と言える。
すなわち、母親によって、余計な全能感を植え付けられたガサツな乱暴者の息子であると言えること。
自分は、何でもできるという、オールマイティーな感覚は、母親による、息子の無限の受容、クッションによって植え付けられていると言える。要するに、母親が何でも受容してくれるので、息子は、自分に不可能なものはないと考えるようになるのである。
そういう点では、一見家父長のように見える雷帝や雷親父のバックには、強力な母が付いていると言える。

(初出2012年05月)

日本社会への父性的宗教の導入と日本男性解放

松本滋の著書「父性的宗教、母性的宗教」によれば、キリスト教、イスラム教は、父性の力が強い父性的宗教であるとされる。

この点、母性に支配されてきた日本男性を解放するために、父性的なキリスト教、イスラム教の活用が望ましいといえる。こうした宗教の導入により、社会の父性化が実現できるからである。

既存のキリスト教のように、ミッションスクールを通して宗教心を教育することを日本社会に広げるとかいうのが考えられる。
その際、問題なのは、教具や聖典に登場する人物の外見、デザインが、あまりにも欧米文化に直に依拠し過ぎていて、神道とかに慣れた既存の日本人には違和感が強く、そのままでは受け入れられにくいということである。
教具や教典の表現、デザインを、本格的に、父性を保ったままで、侘び寂びの効いた日本化する努力が必要となると思われる。
あと、注意点としては、聖母マリア信仰に陥るのを防ぐ必要がある。母を敬い慕うことにつながるからであること。母子一体性を強調する聖母子像イコンの信仰とかも避けるべきである。

（初出2011年11月）

日本の自然風土と強い父性の導入の是非

日本の自然風土は、強い母性をもたらす稲作農耕に適している。ただし、北海道は別であり、強い父性をもたらす牧畜にも適しているが。

稲作農耕に適した自然風土の地に、強い父性を導入すると、稲作農耕を前提とした社会の仕組みを根本から変えないと行けなくなること。これは、既存の日本社会を根本から崩壊させる危険をはらむものであり、やっていいのかためらわれるとも言える。

そこで、2つの途が示される。一つ目は、父性導入を見合わせる行き方である。すなわち、今まで通り、伝統的稲作農耕の母性優位で行き、伝統的母性的フェミニズムを更に伸ばす行き方であること。

もう一つは、伝統的稲作農耕とは異質な、強い父性のもとでも日本農業や日本社会がきちんと上手く回る仕組みを考える、という行き方である。筆者としては、こちらを取りたい。強い父性主導で行われていると考えられる北米のカリフォルニア稲作農耕でも、稲作がきちんと行われ、大きな収量と良好な品質を誇っているようだからである。すなわち、カリフォルニア稲作農耕では、飛行機を用いた空中散布による大量直播き、あるいは、粗放的な畦畔の管理が行われており、ドライで気体的な稲作農耕を実現できているのであり、この方式を日本に導入することで、稲作農耕を保ちつつ、社会のあり方をドライで気体的な父性優位のものに変えることができると考えられるのである。

（初出2011年10月）

擬似家父長制から真の家父長制へ

今までの日本は、擬似家父長制であった。男が前面に出て威張っているが、母に操られているのが実態であった。日本男性解放論は、この擬似家父長制を廃して、真の家父長制実現を主張する。
これは、欧米をモデルとしてそれに追いつくという伝統的で陳腐なパターンと見られがちであるが、実際のところ、モデルは欧米でなくても良く、ユダヤやアラブやモンゴルといった遊牧、牧畜社会が広くモデルとなる。
社会を農耕モデルから牧畜モデルへと移行させることが必要である。

（初出2011年8月）

日本の「名ばかり」家父長、あるいは、教育責任を取らされる学校

日本において、子育ての責任は、本来、自分の子供を意のままにコ

ントロールする教育ママの母親、妻が取るはずであるが、実際は、子育て、育児から疎外された父親、夫に押しつけられる。妻によって、家父長の文言が便利に用いられる。
日本の父は家父長でないと、家父長と呼べないと、母は困るのである。それは、子育てがうまく行かなかった時の責任をそのままでは取らされてしまうので、女故の保身のためには、他人、父親に責任を取らせたいというもくろみがある。
子育てはうまく行かなかったからといって、親が無責任で済ますわけにも行かない。無責任な親と批判される対象となるのは確実で、そこから逃げる訳には行かず、父親か母親かのどちらか、あるいは両方が責任を必ず取らないといけないのである。
日本社会が本当は母が強い母権社会なのに、あたかも父親が万能であるかのように、家父長制とやたらと呼ばれる理由は、そこにある。
日本では、名目的にせよ、家父長制の文言が、主に母親によって、社会的に必要とされている。それは、母によって作られる「名ばかり家父長制」ないし名目的家父長制である。名目的なのは、実質は母権社会だからである。日本の父親は、子供と積極的に関わろうとしない傾向が強く、子育ての主体たり得ていないにも関わらず、家父長扱いされるのである。
一方、欧米は、実質的家父長制であると言える。子育てに父親がメインで介入してコントロールして、母親は父親に従属する添え物に留まっているからである。
日本では、子育ての実質遂行者、子供の実質支配者は母親であるが、子育ての結果責任者は、父親となること。（特に子育てがうまく行かなかった時の責任を取ること。）
日本における子育てのもう一つの結果責任者は、学校である。子供が通う学校の教師、校長が責任を取らされる。
日本では、教師がやたらと聖職者扱いされて、ちょっとした行為の落ち度を親によって厳しく責められる傾向がある。教師の責任が過重になっているのであるが、これは本来、母親が取るべき責任の分も負わされているのである。
本来、子供を支配し、子育ての主体となっている、子育ての責任を取るべき母親が、責任を取るのを心の底で避けているので、そこに女性に責任を負わせるのは酷だという社会的な考えも手伝って、母親の周囲（の父親や、学校関係者）に責任が押しつけられているのである。
責任者とは、失敗時に責められる役回りの人のことであり、そこに、女性が責められるのはかわいそうだという社会通念が加わることで、本来、母親が子育てで取るべき責任を、父親や学校が肩代わ

りしていると言える。
責任の所在が不明瞭になりがちで、誰もが責任を取りたがらない無責任社会日本の立役者は、母であると言える。
（初出2012年6月）

湿った父と湿った雪

雪国で、除雪をする時に、乾いた雪だと、作業が楽なのに対して、湿った雪だと、雪が重くて作業が大変になるということをよく聞く。
行動様式がウェットな（湿ったこと。）父親や男性は、ドライな（乾いたこと。）
男性や父親がウェットな行動を取りやすい日本や中国、韓国で、男性や父親が強いと勘違いされる原因になっていると考えられる。
湿った父は、重い父なのである。
一方、西欧や北米のドライな乾いた父は、軽い（軽快なこと。）父なのであること。
（初出2014年11月）

妻、家族に冷遇される夫、父

日本の夫婦においては、夫が、妻に家計を握られ、妻から一方的に少額の小遣いを渡されるだけで、欲しいものが買えないということが起きている。
あるいは、自分の家の中で、居場所が無い、例えば、めぼしい広い部屋とか、母子連合体（母子ユニオン）を形成して仲の良い妻と子供に占領されて、自分たちの家具を置かれて追い出されてしまい、夫である自分は、台所の椅子とかに座って過ごすしか無くなるということが起きている。
日本の男性、夫は、息子としては、姑である母にいろいろ厚遇され良い目を見ることができる。夫は、母である姑がいる間は、嫁である妻に対して威張って好条件でいることができる。しかし、所詮は、母＝姑頼みなのが問題であり、自分の母がいなくなると、立場が悪くなりっぱなしになってしまうのである。
（初出2012年6月）

会社人間、「男社会」の生成と、（家庭内での）父の居

場所の無さ

日本では、昔から「亭主元気で留守がいい」みたいなことわざが存在し、家の中に夫や父がいないのが望ましいかのような言われ方をしてきた。
なぜ、夫（父）が会社人間であること、会社にばかり居て、家にあまり帰ってこないことが妻（母）によって推奨されるのか？
それは、そうであることで、夫（父）が、妻（母）にとって、妻（母）の権力に挑戦してこない無害な存在で居続けてくれるからであること。
夫（父）は家庭内に居場所が無いので、会社にいるしかない。なぜ、夫（父）の居場所が無いかと言えば、家庭内の居場所を妻（母）とその子供が占有、占領しているからである。
日本では、家庭の中で、母と子が強力に一体化しており、そこにはウェットな表面張力が働いており、外から中に割って入れない仕組みになっている。父は、そうした母子ユニオン（母子連合体）に入れてもらえずに、家庭の外に弾き飛ばされる存在であること。（以下の図を参照すること。）

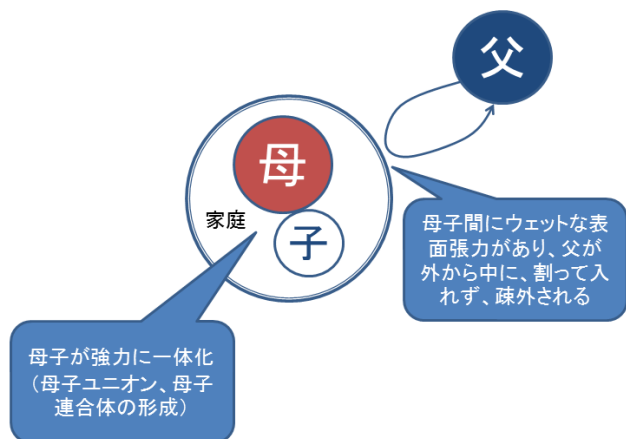



図　母子の間に入れない父

家庭に入れない、中に入れてもらえない者同士の吹き溜まりが会社であり、中に入れてもらえない存在が父である男性であることから、会社はそうした男性たちの集まりである「男社会」となっているのである。

日本では、夫（父）も母性的でウェットなので、表面張力のある閉鎖的、排他的なウェットな「会社」空間を形成する。そこには、別の閉鎖的、排他的なユニットである妻（母）とその子供のユニオンは入れないようになっていること。（以下の図を参照すること。）

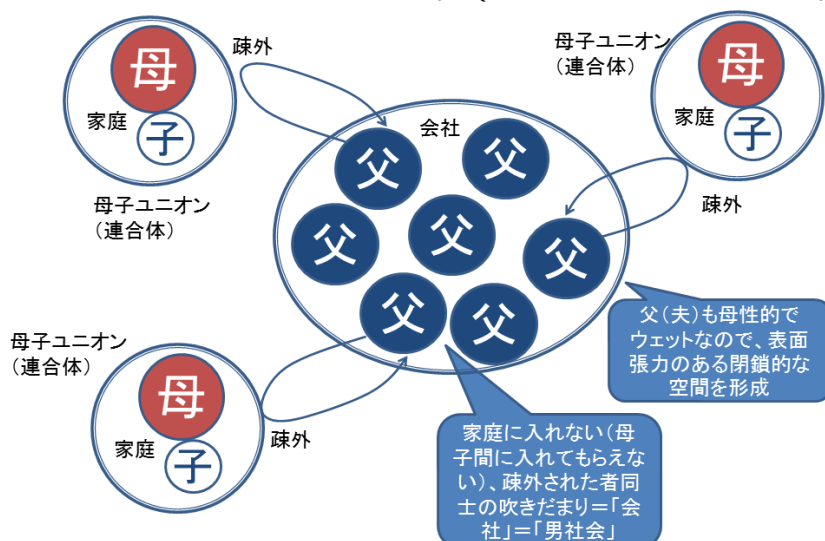



図　日本の会社＝家庭から疎外された者同士の吹きだまり

日本の夫（父）は、会社に24時間所属する。あたかも会社というウェットな液体の中に存在しているかのようであり、会社からリストラされるまで、会社の外には出られない（出ても良いが、他に行く所が無く、生存は保証されない。）こと。

夫は、ウェットな会社に全人格的に取り込まれていて、心理的に会社から脱出できず、朝になるとまた仮の居場所の家庭から、本当の居場所の会社に戻って行く。家庭では、母子の一体性の中に割り込むことができず、家庭に居場所が無いので、仕方なく会社に戻って行く、という見方も出来る。（以下の図を参照すること。）

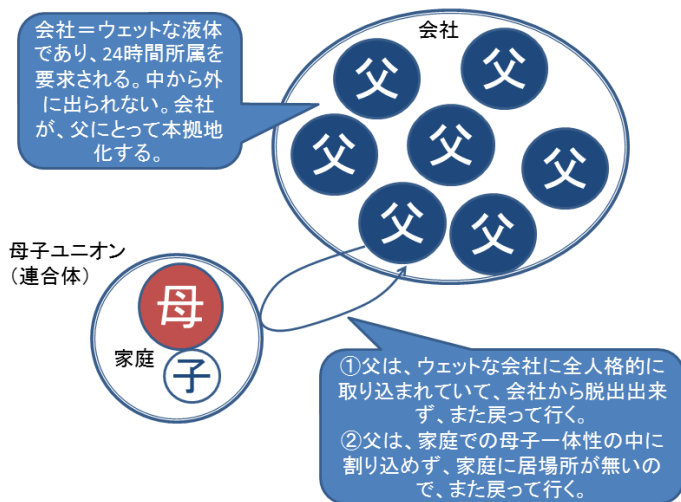



図　会社に居続ける（戻って行く）父

一方、ドライな欧米社会の家庭では、父と子が父から子への命令、指令による強い結びつきを持っており、子との結びつきを父によって断ち切られ、父子関係から閉め出された母の居場所が無い、という状態になっている。これは父の居場所が無い日本の家庭と逆である。父子中心の社会では、父にとっては、会社とかも、仮の一時的な所属の場であり、元来会社から離れたフリーの存在でいることが望ましい、すなわち、父が所属すべきなのは家庭だということになっていると考えられる。

日本の家庭において、もともと夫（父）は、先代の母親（姑）と共に、家庭内の居場所を占有、占領してきたこと。（先代の父を疎外してきたこと。）そういう存在であったこと。しかし、そこに嫁（妻）が来て、嫁（妻）との間に子供が出来ると、夫（父）は、その嫁（妻）と子供同士が作る母子ユニオンから弾き出されてしまう。夫（父）は、とりあえず姑の加勢を得て、家庭内に居場所を確保し続けるのであるが、次第に姑が高齢化して衰えていくのに比例して、姑の加勢を頼みづらくなり、次第に居場所が消えていくのである。姑がいなくなる場合。（あるいは、次男、三男とかのように姑が最初からいない場合。）夫（父）は、家庭内に居場所を持てず、孤立してしまう。そこで、自分と同類の仲間を求めて、会社に足が向き、家庭に居場所の無い者同士つるんで、会社三昧の生活を送るようになるのである。これが日本の「男社会」の生成過程である。

こう見てみると、日本の「男社会」である会社が、実は、お遍路さんの集団と似た存在であることが言える。会社は、家庭から疎外された、はみ出た漂流者同士の寄り合い所帯なのである。お遍路さんが社会からはみ出た漂流者同士の寄り合い所帯なのと根は一緒である。
家庭に居場所が無く漂流する、母（姑）の息子たちは、なのにその割には、嫁や嫁候補になる女性たちに対して上から目線で接するのである。つまり、家には自分が先に入ったのであり、自分は嫁を迎え入れる先輩格の人間であり、姑の子は、息子（夫）も娘（小姑）も、嫁より立場が上であるため、嫁や嫁候補になる女性たちに対して高圧的に接するのである。これが、男（姑の息子、夫）が偉く、女（嫁）が下位だという男尊女卑のように見えて、批判の対象になったのである。
自分自身は、嫁（妻）と子供が作る母子ユニオンに家庭を占有され、居場所が無くなって不利な立場に置かれているにも関わらず、夫（姑の息子）が高いプライドを嫁（妻）と子供に対して示すのは、自分が先代の母子ユニオンで母＝姑から可愛がられ優遇される存在だったからであり、日本の農村で先住民が新住民に対して威張るのと根は一緒である。
一方、夫（父）たちの吹き溜まりとしての会社は、その母親の姑にとって大きな意味のある存在である。会社は、母親の姑にとって、息子の保育園、幼稚園、学校の延長のような存在である。母親たちが息子同士を互いに競わせ、自分の息子が、よりよい会社に入社したり、さらにはその中でより上位になることで、あたかも自分が勝者になったかのように感じ、自己実現を図ることが出来るのである。息子の会社でのプレゼンと、幼稚園での発表会とが同じ位置づけをもって、母親＝姑には捉えられるのである。その点、会社は、姑たちの所有物である。
一方、嫁（妻）とその子供の次世代母子ユニオンにとっては、会社やその所属者である夫（父）は、現金自動支払機（ATM）みたいなそっけない、単なる打ち出の小槌みたいな道具のような存在になってしまうこと。次世代の母子ユニオンの維持にとって居心地の良い環境をひたすらマシーン、労働者のように提供し続けるのが、夫（父）の役目となってしまっているのであること。
（初出2013年12月）

日本における父性、父権確立の方法

日本社会において、これまで実現して来なかった父性、父権確立の

方法は、いくつか考えることができる。
(1)子育てにおける母子分離を実現し、強力な母子連合体（母子ユニオン）の形成と、それによる母権確立を阻止すること。具体的には、欧米のように、子供を乳児段階で、母親から引き離して、一日中別室で独立して過ごさせる。子どもと母親との接触を最小限に抑えること。そうすることで、母子の紐帯を切るとともに、子供自身に自主独立で、個人主義といったドライで気体的な父性的な気風を身に付けさせることができ、父性による子育てへの介入の機会を根源的に増やすことが出来る。
(2)家計管理権限、財布の紐を、母や妻から切り離し、男性（父）に行くようにすることで、家庭内の経済的意思決定を、男性（父）が出来るようにする。少なくとも、月々家計管理を妻（母）と夫（父）とで回り持ちで行う家計管理の輪番制辺りを実施することで、妻（母）による家庭の財布の紐独占状態を徐々に切り崩していくことが出来る。
(3)日本社会の雰囲気、国民性をドライ化、気体化することで、男性が父性、父権を確立しやすくする土台を整備する。社会のウェット化、液体化をもたらす伝統的稲作農耕のスタイルを変えて、稲作農耕スタイルのドライ化、気体化を推進すること。具体的には、アメリカとかで行われているカリフォルニア式稲作農耕とかの方式を研究し、稲作農耕従事者の水利面等での成員間相互依存や団体行動の必要性の度合いを大きく減らす方式を導入することで、従来の母性的稲作農耕から父性的稲作農耕への転換を図る。

（初出2012年8月）

家計管理権限を妻から奪取する方法

今の我が家の家計がどうなっているか、見せてほしいと言う。
見せないと言われたら、隠し事、重大問題を抱えているだろう、ますます心配になったと言うこと。
家計簿を見せられたら、（予め入手したファイナンシャルプランナーとかの模範例と比べて）粗探しをすること。ここが駄目だと、ダメ出しをする。こう直せるはずだと言うこと。
自分ならもっと上手くやれると言うこと。
しばらく1～2ヶ月任せてもらうよと言って、通帳、家計簿を妻からゲットすること。
その間に、家計上の問題を解決すること。
これからも自分に任せた方がずっと上手く行くよと言う。

（初出2014年6月）

父性の母性的吸収に陥らないことが必要。

日本社会における父権社会の確立においては、既に父権を確立している社会（欧米など）の父性的文物を消化吸収することが効果的である。
その際、父性の母性的吸収に陥らないことが必要である。
すなわち、（欧米的なこと。）ドライ、気体的な父性的文物を、（伝統日本的なこと。）ウェット、液体的な母性的精神によって、とりあえず父性的文物が世界的に優勢だから、上位だから導入しようという姿勢で、権威主義的に、愛情みたいなものをもって一体化、受容して、母性化する形で吸収する過程で、本来あったはずの父性が消えてしまう、無効化されてしまう。
日本における欧米文物の母性的吸収においては、一見欧米の価値観に完全に寄りかかっているが、それは欧米が強い間だけの暫定的な姿勢であり、父性的な欧米が弱くなって、母性的な中国が再度台頭すると、吸収対象のあっさり宗旨替えをすることになる。要は、母性的吸収は、その時々の強い者になびいているだけである。
父性を直接吸収するには、吸収する側にも、そこにある程度の父性の素地が無いと難しいと言える。その素地をどうやって母性一辺倒の日本社会に作るかが課題である。

（初出2012年8月）

ジェンダーフリー思想と父性強化

従来、日本において、ジェンダーフリー思想は、フェミニスト(女

権拡張論者)主導で押し進められてきた。それは、性差別をなくし、男らしさ、女らしさの枠にはまらない個々人の個性を重視しましょうという主義主張である。

現に、学校での名簿の男女混合化等、性差をなるべく考慮から外すのが先進的で優れた考え方だとする見方が日本中に広がっている。ここで、立ち返って考えてみると、ジェンダーフリー思想のような、各人が、所属するカテゴリーから解き放たれてバラバラになるのを好む行き方は、気体分子運動パターンに近い、ドライな考え方である、と言える。

それは、個々人の(集合からの)自立独立を好む男性、父性向きの考え方であり、一見、性別からの解放を謳いながら、実際には、男性、父性の力を強めている。個々人の相互一体融合化、共通カテゴリーへの集合、一致団結を指向する、母性、女性の力を弱める考え方であるとも言える。

日本のフェミニストは、ジェンダーフリー思想を導入することで、皮肉にも、日本社会における母性(女性)の力を弱めることに一生懸命になっていると言える。

日本において、父性の力を強めるのに、ジェンダーフリー思想は格好のツールとなると言える。要は、個々人の個性重視、集合からの独立を謳うジェンダーフリー思想は、日本における父性強化、母性からの男性解放に役立つのである。

そこで、日本の男性たちは、フェミニストたちが自分たちの誤りに気づいて、撤回する前に、どんどんジェンダーフリーを推進すべきである。

(初出2005年10月)

日本社会の父性化革命の方法

効果的な日本社会の父性化の方法は何か？。

大きく分けて、対子供対策と、対母親対策がある。以下は、順不同で述べる。

一つ目は、母子分離を行うことである。就寝等で、子供を母親とは別室で、母親から大きく離して寝かせるのである。そうすることで、子供は、人と人とが互いに分離したドライな状態が自然であることを体得することが出来る。それを子供に教えこむのであること。そうすることで、ドライな父性を、子供に行き渡らせることができる。奥さんを丸め込むには、子供はいずれ自立しなければいけない、その時期は、早いほどよりスムーズになる、と主張すれば良い。赤ちゃんの頃から、特に男の子は、自立の味を心と身体に覚えさせる、感覚を染み込ませることが重要であると奥さんに説くのである。

二つ目は、従来母親が握る家計の財布の紐を、ある程度奪うことである。例えば、家の財布は、夫婦相互に代わりばんこで持つことで、内容を互いにチェックし合った方が家庭の財政が健全になると、奥さんを丸め込むのである。そうすることで、夫が家計の財布を持つ機会をより増やすことが出来、家計管理権限を掌握しやすくなり、父性のイニシアティブを発揮しやすくなる。

三つ目は、結婚するときには、男女平等、夫婦平等を宣言し、男女のパワーの比率を、50:50の対等化するように方針を変更することを、夫婦の間で約束し、奥さんにパワーが偏重しないようにすることを、（奥さんに）促すのであること。

※その後、ネット匿名掲示板2ch上の書き込み（「日本人は女性的民族か」スレ。）で別途参考になる内容があったので、要約するとともに、筆者の側で内容拡張して以下に記述します。

四つ目は、父親の家庭での子供の教育に参加する頻度や時間の長さを増やすことである。父親が実際に働いて問題解決を行っている姿を子供に見せたりして、父親としての家庭における存在感を高めるとともに、父親が、学校の父母会、PTAとかに積極的に出席したり、毎日仕事から早く帰宅して子供の根本的な勉強方針、子供が将来就きたい職業の相談への経験者からの助言や子供を理性化する人格教育に直接積極的に関わるとか、子供との接触頻度や接触の質を高めることが必要である。（単なる学習問題の解き方を教える家庭教師では駄目。）

五つ目は、母親の強い影響下で、そのままではとかく感情的、情緒的な好き嫌い中心の女性的思考に偏りがちな自分の子供に対して、論理や理屈に基づく正誤判断、断定による男性的な思考様式を導入し、物事が何故そうなるのかの理屈、原因を自力で考えさせたり、子供が何か物事を実行する際に、なぜ行うかその理由を、周囲が納得するレベルまでしっかり説明させるとかを行うことで、子供の思考様式を論理化、理性化によって父性化していくことが必要である。

六つ目は、子供に自分自身で考えぬいた上で、決断をさせ、その決断とそれに伴う努力を温かく見守り、決断への責任を自身で取ることを教えることである。父性の特徴は、家族を一定の方向に導くための方向、方針の決定、決断をすると共に、その決断が成功に終わるか、失敗に終わるかについて、成功するように最善の努力をし、いざ失敗したとしたら、潔く責任を認めて、自ら責任をかぶり、減給等を受け入れるところにあると言える。このエッセンスを子供に教えこみ、子供を父性化するのであること。

こういうのは特に、父性の本来的な担い手である男の子に対して行うべきであると考えるが、女の子に対しても、そのままでは母親譲りで身についてしまう過剰な母性を切り落として弱体化させるためにも必要であると考える。その結果、欧米の女性のように、男性化してしまい、本来の女性としての魅力が失われることは覚悟しないと行けない。

とりあえず、少なくとも、今の日本の夫のように、父親が子育てから疎外され、参加すらさせてもらえない（すなわち、子育て、子供の教育権限が母親独占になっている。）日本社会の仕組みになっているのを変えなければいけないこと。

（初出2013年10月）

日本の男性を子育てさせるには。

女性、妻が家計管理の権限を男、夫に渡せば、日本の男も自然と子育てするようになる。

日本の男が子育てをしないのは、家計管理権限を妻に独占され、お金を管理できない子供扱いされて、家庭運営の蚊帳の外に置かれているからである。

（初出2013年10月）

３．

本書の要約、まとめ

家庭、家族関係は、大きく分けて、。
（１）夫婦関係 家庭の基盤となる男女関係
（２）親子関係 父子、母子、義理の父子、母子関係
から成ると言えること。
日本の家庭、家族の中の男女の勢力関係は、。
（１）夫婦関係に着目すると、日本では、夫＝男性が強く見えることが多い。
・嫁が夫の家に嫁入りし、夫の家の言うことを聞く必要がある。
・男尊女卑で、夫が威張っている。
・稼ぐのが主に夫であることが多く、妻、嫁はあまり稼げておらず、経済的に夫に依存せざるを得ない。
こうした点を強調して、日本の家族は家父長制だという主張が、日本の社会学者の間では主流になっている。
一方、妻＝女性が強く見える側面もある。
妻が家計管理の権限を独占していることが多く、小遣いを夫に渡す場面が多く見られる。小遣いは渡す財務大臣役の方が、もらう方より地位が上である。
（２）親子関係に着目すると、日本では、母＝女性が強い。子育ての権限を独占し、教育ママゴンとか呼ばれ、怪物扱いされていること。子供を自らの母性の支配下で動く操りロボットにすることにすっかり成功していること。一方、父は、子供と関わりをあまり持

とうとせず、影が薄い。
こうした母親の影響力の大きさを考慮して、日本社会は母性社会だという主張が、日本の臨床心理学者の間で主流になっている。
このように、夫婦関係を見た場合と、親子関係を見た場合とで、日本の男女の勢力に関する見方が分裂しているのが現状であり、両者の見方をうまくつなぎ合わせる統合理論が必要である。
筆者は、両者の見方をうまく統合させる契機として、「夫＝お母さん（姑）の息子」と見なして捉えることを提唱すること。
家父長として強い存在と思われてきた夫が、実は、母、姑の支配下に置かれる操りロボットとして、実は父性が未発達の、母性的な弱い存在であることを主張する。
日本において、子育てを母が独占し、子供の幼少の時から、強力な排他的母子連合体（母子ユニオン）を子供と形成しこと。（母が支配者で、子が従属者、母の操りロボット。）、この母子一心同体状態が子供が大人になってからもずっと持続し、この既存の母子連合体が一体となって、新入りの嫁を支配するという構図になっている。このうち、「母の息子＝夫」と嫁の間のみを取りだして見ると、夫が嫁である妻を支配するという従来、日本＝家父長制社会論で主張されてきた構図が見える。しかし実際には、夫は、母である姑に支配されており、その姑と一体となって、嫁を抑圧しているに過ぎない。
日本の夫婦における勢力関係を正しく把握するには、夫婦（夫妻）だけを見るのではなく、夫婦（夫妻）のうちの夫側に、母のくさびを打ち込むことが必要である。あるいは、母や姑が一家の実質的な中心であり、真の支配者であるとする「母」「姑」中心の視点を持つことが必要である。
夫婦だけを見るのでなく、
・母～息子（夫）←（何人も割って入ることを許さない母子連合体、ユニオン。）
・姑～嫁（妻）
・夫（母の息子）～妻（嫁）
の3つを同時に見る必要がある。夫の父（舅）は、一世代前の母の息子のままの状態であり、影が薄い。夫の姉妹は、小姑として、夫同様、姑中心の母子連合体の一員として、嫁を支配する、姑に準ずる存在である。
夫は、妻にとっては一見強い家父長に見えながら、実際のところは、いつまで経っても母の大きい息子のまま、母に支配され、精神的に自立できない状態にある弱い存在であるという認識が必要である。
母の息子である夫、父は、一家の精神的支柱である母と違い、家父

長扱いされながらも、母に精神的に依存し続けて一家の精神的支柱になれない、ともすれば軽蔑され見下される存在と成り下がっているのである。
夫は、仕事にかまけて子供と離ればなれになっているが、実は、この仕事が、夫の母の代わりに行っているというか、母の自己実現の代理になっている。会社での出世昇進とか、一見、夫が自分自身のために頑張ってしているように見えて、実は、夫自身が母の中に取り込まれ、母と一心同体となって母のために頑張って行っているというのが実情である。母が息子の出世昇進に一喜一憂し、夫にとって、自分の人生の成功が、そのまま母の人生の成功になっている。
また、夫が会社で取る行動は、会社人間のように、会社との一体感、包含感を重視する、とかく母性的なものになりがちで、彼を含めた会社組織の男性たちが大人になっても母の影響下から脱することが出来ていないことを示している。
筆者は、こうした、。
・母（姑）による息子＝（妻にとっての夫）の全人格的支配
・妻による家計管理の権限独占に基づく夫の経済的支配
の両者を合わせることで、日本の家庭～社会全体において、母性、女性による男性の支配が確立しており、日本は、実は、母権社会、女権社会である、と主張する。一家の中心は、母、姑である。
欧米の権威筋の学説（Bachofen等）は、母権社会の存在をこれまで否定してきており、筆者の主張はこれに正面から反対するものである。
日本人の国民性と男女の性格との相関を取ると、日本人は女らしい（相互の一体感、所属の重視。護送船団式に守られること、保身安全の重視。リスク回避、責任回避重視。液体分子運動的でウェット・・・）で動いているという結論が出る。これは、日本社会が、女権、母権社会であることの動かぬ証拠と考えられる。日本人は、姑根性で動いている。（姑根性とは、周囲の、後輩とかの嫁相当の目下の者に対して、口答えを一切許さず、妬み心満載で、その全人格を一方的、専制的に支配すること。）このこと自体が、日本社会における母、姑の影響力、支配力の強さを表している。それゆえ、日本の社会、家族分析に、姑中心、母中心の視点を取ることが必要であると言える。
従来の日本男性は、母や妻による支配を破ろうとして、がさつな乱暴者、あるいは雷親父となって、ドメスティックバイオレンスとかで対抗してきた節が見られるが、暴力を振るうだけ、より家族から軽蔑され、見放される存在になってしまう結果を生み出している。
あるいは、家庭の外の仕事に逃げようとするが、仕事に頑張ることがそのまま母の自己実現になるという、母の心理的影響、支配を振

り切ることはそのままでは不可能である。
こうした女性、母性による日本社会支配は、日本社会の根底が、女向きの、水利や共同作業に縛られた稲作農耕文化で出来ているために生じると考えられる。そこで、筆者は、日本男性は、従来の伝統的稲作農耕文化から脱却して、新たに、家父長制の本場である欧米やユダヤ、アラブ、モンゴルといった遊牧、牧畜民の父親のようなドライな父性を身につけることで、母と妻に対抗できるようにすべきだ、母と妻の支配から解放されるべきだと主張する。これが、日本男性解放論である。要するに、子育てと家計管理において父権を確立することで、父親として真に社会で支配力を持った、尊敬される存在になろうと呼びかけるものであること。筆者は、その際、稲作農耕を、伝統的な日本方式から、よりドライなやり方のアメリカのカリフォルニア方式に改めることで、稲作農耕を維持しながら、ドライな父権を社会に実現できると予期している。
筆者は、最終的には、男女の力関係は、対等の50：50が望ましいと考えている。これが、究極の男女平等であると主張する。欧米みたいに、男性、父性が強くなり過ぎても、日本みたいに、女性、母性が強くなり過ぎても良くない、適度なバランスが必要と考える。家計管理を、夫と妻が1月交代で行う月番制導入とかである。
（初出2012年6月）

母性的フェミニズム - 世界女性の模範としての日本女性 -

要旨

本書では、日本社会において男女の性差がどのような影響をもたらしているか、従来の日本の女性学や日本のフェミニズムに再考を促す形で考察しています。
例えば、従来の日本女性学・日本フェミニズムの通説では、「日本社会は、男性中心、家父長制社会である」「女性は男性に比べ、世界どこでも普遍的に、弱い劣位の解放されるべき存在である」とされてきました。
前書「日本社会の女性的性格」「母権社会日本」「日本男性解放

論」では、こうした通説に疑問を抱いた筆者が、日本社会を調査したり、分析したりした結果をもとに、「ウェットな、液体的な日本社会は女性の方が強い、母性中心で動いている母権社会である」「日本男性こそが、女性、母性による支配から解放されるべき存在だ」などの主張を展開しています。
本書では、そうした日本社会における女性、母性の強力さに着目し、伝統的な欧米流のフェミニズムを180度転回して、母性を軸に女性が社会を効果的に支配する方略としての母性的フェミニズムを、新たに提唱しています。そして、日本女性が、フェミニズムにおいて、欧米を含む世界の女性たちの模範となるべき存在であると主張しています。

文中、各セクションは、それぞれ独立した読み物、エッセイとなっており、どこからでも読み始めることができます。

前置き

本書の議論の背景

家庭、家族関係は、大きく分けて、。
（１）夫婦関係 家庭の基盤となる男女関係
（２）親子関係 父子、母子、義理の父子、母子関係
から成ると言えること。
日本の家庭、家族の中の男女の勢力関係は、。
（１）夫婦関係に着目すると、日本では、夫＝男性が強く見えることが多い。
・嫁が夫の家に嫁入りし、夫の家の言うことを聞く必要がある。
・男尊女卑で、夫が威張っている。
・稼ぐのが主に夫であることが多く、妻、嫁はあまり稼げておらず、経済的に夫に依存せざるを得ない。
こうした点を強調して、日本の家族は家父長制だという主張が、日本の社会学者の間では主流になっている。
一方、妻＝女性が強く見える側面もある。
・妻が家計管理の権限を独占していることが多く、小遣いを夫に渡す場面が多く見られる。小遣いは渡す財務大臣役の方が、もらう方より地位が上である。
（２）親子関係に着目すると、日本では、母＝女性が強い。子育ての権限を独占し、教育ママゴンとか呼ばれ、怪物扱いされているこ

と。子供を自らの母性の支配下で動く操り人形、ロボットにすることにすっかり成功していること。一方、父は、子供と関わりをあまり持とうとせず、影が薄い。
こうした母親の影響力の大きさを考慮して、日本社会は母性社会だという主張が、日本の臨床心理学者の間で主流になっている。
このように、夫婦関係を見た場合と、親子関係を見た場合とで、日本の男女の勢力に関する見方が分裂しているのが現状であり、両者の見方をうまくつなぎ合わせる統合理論が必要である。
筆者は、両者の見方をうまく統合させる契機として、「夫＝お母さん（姑）の息子」と見なして捉えることを提唱すること。
家父長として強い存在と思われてきた夫が、実は、母、姑の支配下に置かれる操り人形、ロボットとして、実は父性が未発達の、母性的な弱い存在であることを主張する。
日本において、子育てを母が独占し、子供の幼少の時から、強力な排他的母子連合体（母子ユニオン）を子供と形成すること。（母が支配者で、子が従属者、母の操りロボット。）この母子一心同体状態が子供が大人になってからもずっと持続し、この既存の母子連合体が一体となって、新入りの嫁を支配するという構図になっている。このうち、「母の息子＝夫」と嫁の間のみを取りだして見ると、夫が嫁である妻を支配するという従来、日本＝家父長制社会論で主張されてきた構図が見える。しかし実際には、夫は、母である姑に支配されており、その姑と一体となって、嫁を抑圧しているに過ぎない。
日本の夫婦における勢力関係を正しく把握するには、夫婦（夫妻）だけを見るのではなく、夫婦（夫妻）のうちの夫側に、母のくさびを打ち込むことが必要である。あるいは、母や姑が一家の実質的な中心であり、真の支配者であるとする「母」「姑」中心の視点を持つことが必要である。
夫婦だけを見るのでなく、
・母～息子（夫）←（何人も割って入ることを許さない母子連合体、ユニオン。）
・姑～嫁（妻）
・夫（母の息子）～妻（嫁）
の3つを同時に見る必要がある。夫の父（舅）は、一世代前の母の息子のままの状態であり、影が薄い。夫の姉妹は、小姑として、夫同様、姑中心の母子連合体の一員として、嫁を支配する、姑に準ずる存在である。
夫は、妻にとっては一見強い家父長に見えながら、実際のところは、いつまで経っても母の大きい息子のまま、母に支配され、精神的に自立できない状態にある弱い存在であるという認識が必要であ

る。
母の息子である夫、父は、一家の精神的支柱である母と違い、家父長扱いされながらも、母に精神的に依存し続けて一家の精神的支柱になれない、ともすれば軽蔑され見下される存在と成り下がっているのである。
夫は、仕事にかまけて子供と離ればなれになっているが、実は、この仕事が、夫の母の代わりに行っているというか、母の自己実現の代理になっている。会社での出世昇進とか、一見、夫が自分自身のために頑張ってしているように見えて、実は、夫自身が母の中に取り込まれ、母と一心同体となって母のために頑張って行っているというのが実情である。母が息子の出世昇進に一喜一憂し、夫にとって、自分の人生の成功が、そのまま母の人生の成功になっている。
また、夫が会社で取る行動は、会社人間のように、会社との一体感、包含感を重視する、とかく母性的なものになりがちで、彼を含めた会社組織の男性たちが大人になっても母の影響下から脱することが出来ていないことを示している。
筆者は、こうした、。
・母（姑）による息子＝（妻にとっての夫）の全人格的支配
・妻による家計管理の権限独占に基づく夫の経済的支配
の両者を合わせることで、日本の家庭～社会全体において、母性、女性による男性の支配が確立しており、日本は、実は、母権社会、女権社会である、と主張する。日本における一家の中心は、母、姑である。
欧米の権威筋の学説（Bachofen等）は、母権社会の存在をこれまで否定してきており、筆者の主張はこれに正面から反対するものである。
日本人の国民性と男女の性格との相関を取ると、日本人は女らしい（相互の一体感、所属の重視。護送船団式に守られること、保身安全の重視。リスク回避、責任回避重視。液体分子運動的でウェット・・・）で動いているという結論が出る。これは、日本社会が、女権、母権社会であることの動かぬ証拠と考えられる。日本人は、姑根性で動いている。（姑根性とは、周囲の、後輩とかの嫁相当の目下の者に対して、口答えを一切許さず、妬み心満載で、その全人格を一方的、専制的に支配すること。）このこと自体が、日本社会における母、姑の影響力、支配力の強さを表している。それゆえ、日本の社会、家族分析に、姑中心、母中心の視点を取ることが必要であると言える。
従来の日本男性は、母や妻による支配を破ろうとして、がさつな乱暴者、あるいは雷親父となって、ドメスティックバイオレンスとかで対抗してきた節が見られるが、暴力を振るうだけ、より家族から

軽蔑され、見放される存在になってしまう結果を生み出している。
あるいは、家庭の外の仕事に逃げようとするが、仕事に頑張ることがそのまま母の自己実現になるという、母の心理的影響、支配を振り切ることはそのままでは不可能である。
こうした女性、母性による日本社会支配は、日本社会の根底が、女向きの、水利や共同作業に縛られた稲作農耕文化で出来ているために生じると考えられる。
そこで、筆者は、日本が母権社会だとすれば、日本女性は、女権の拡張という点では、世界の女性、特に欧米先進国女性の模範、先生となる存在であると言え、日本の女性のような、子育てにおける母子連合体や母子ユニオンの形成、母権を軸にした女権確立、拡張の行き方を、既存の欧米女性が主導してきたフェミニズムと区別して、母性型フェミニズムと呼んで、世界に広めていってはどうかと主張している。
将来的に、日本社会においては、男性側の男性解放、父性確立への流れと、女性側の母性的フェミニズム推進の流れとが、真正面から衝突することになると筆者は予想する。

（初出2012年6月）

本編

日本は、実は、フェミニズムの先進国だった！。

欧米のフェミニズムは、所詮は、女性が弱い社会のフェミニズムである。

欧米の主婦は、だいたいにおいて家の財布も子供も、夫に握られてしまい、単なる下級家政婦に成り下がっていて、それが自ら働きに出る、社会進出することで、意趣返ししようというのが、欧米フェミニズムの原点だと思う。

女性が強い社会のフェミニズムは、こうでなきゃ行けないと試作したのが本書籍の内容である。

従来、日本のフェミニズム学者が日本に導入している欧米産のフェ

ミニズムは、強い女性を未だに実現できていない欧米社会でもがき苦しむ女たちが作った出来損ないのフェミニズムである。本当に女性が強い社会にしたかったら、女性、母性の強い日本が、世界のフェミニズムの模範となるはずである。その点、日本はフェミニズムの先進国であると言える。

家の財布と子供をがっちり握っている日本女性は、世界最強の存在である。

日本村社会は、女社会であり、女性による社会支配の極致である。

逆に、日本を本気で男社会にしたかったら、日本の女性から家の財布と子供を取り上げるべきであること。

（初出2015年2月）

女性解放、女権拡張の最先端を行く日本社会

日本社会では、男性は、子供も家計の財布の紐も女性に奪われており、単なる現金供給機＝ATM奴隷と化している。こうした現状からの男性の解放が必要である。
日本社会で男性解放が必要であるということは、裏を返せば、それだけ社会における女性の力が強く、女性解放、女権拡張が進んでいるということである。当の日本人がそのことに気づいていないだけである。
その点、日本のフェミニストや女性学者は、日本社会を、女性解放、女権拡張の最先端を行く模範ケースとして、全世界に向けて宣伝すべきではないか？。
(初出2008年04月)

女権拡張の先進国、日本～東南アジア

アメリカの国是は、自由、独立、個人主義といった内容であり、いずれも男性性に基づくものであり、女性性に反するもの、女性性を抑圧するものばかりである。

アメリカは、女権拡張、女性解放においては後進国である。
欧米～全世界の女性は、集団行動、相互依存、相互一体化といった女性性を重視する日本～東南アジア社会を目指すべきである。
日本～東南アジア社会は、女権拡張、女性解放において、先進国である。
（初出2011年8月）

世界の女性たちの模範となる日本女性

日本女性は、女権拡張という観点からは、世界の女性たちの模範となる存在である。
日本は、女権拡張という点では、世界の最先端の先進国である。
日本女性は、欧米女性たちに対して、自分たちの方が、女権拡張の面で、先生に当たると言える。
日本のような母権社会は、フェミニストにとっての理想社会であると言える。
日本女性たちは、真の母権社会はこういうものだと、欧米のフェミニストに対して、逆に教えるべきである。
今まで、日本のフェミニストたちは、欧米のフェミニストたちを先生と仰いで、必死にその教えを受け入れてきたが、それは間違いであり、父権社会欧米フェミニストの言動は、既に母権社会化を達成している日本社会にとっては、あまり参考にならない、ということに気づくべきである。
（初出2012年5月）

女権拡張セミナーを開いたらこと。

日本は、女性がスタンダードの社会であり、男性が女性に合わせている。すなわち、気配りや同調協調、集団行動、先輩後輩制の遵守がそれである。
一方、欧米は、男性がスタンダードの社会であり、女性が男性に合わせている。すなわち、自立、自分らしさや個性の重視、個人行動の重視がそれである。
非スタンダードの女性が、スタンダードの男性並みになるための運動が欧米フェミニズムであり、それが日本に直輸入されているのである。
本来なら、欧米フェミニズムは、自ら女社会の特徴を分析して、世界の女社会化＝日本化を目指すべきであった。
もしも、世界で女権拡張セミナーみたいなのが開かれるとしたら、日本の女性たち、特にお母さんや姑が、欧米や世界の女性たちの先

生、教授になるべきである。
そこで何を教えるかであるが、例えば、。
・自分の子供を掴んで離さないノウハウ、母子連合体（母子ユニオン）を作って、子供、特に息子を自分の操り人形、ロボットとするノウハウ
・夫を子供から遠ざけ、子供を夫に渡さないノウハウ
・夫に家計管理の権限を渡さないノウハウ
・姑として、家族全体を支配するノウハウ
が考えられる。
（初出2012年5月）

女性人権侵害、抑圧の欧米と18禁ゲーム規制

最近、イギリス辺りの人権団体が、日本のソフトウェア会社が作ったレイプを主題とする18禁ゲーム（エロゲー）を人権侵害であるとして非難し、それに敏感に反応した日本側が、ソフト制作の自主規制を始めたようだ。
しかし、実際のところ、イギリスを初めとする欧米（というか詳しくは西欧と北米。）は、社会、国家レベルで、女性の人権侵害、抑圧をやっているのである。
どういうことかと言えば、欧米は、気体的でドライな社会であり、個人行動、相互のバラバラな独立と自由の確保を何よりも重視するのであるが、実際のところそれらは、女性の持つ集団指向、相互の一体感や同調性の確保を重視する液体的でウェットな本質をことごとく否定し、消し去ろうとすることにつながっているのである。
女性のジメジメ、ドロドロ、ウェットな本質的性格を社会、国家レベルで否定することは、そのまま女性本来の性質の否定と、女性への男性的性格の強制につながり、それゆえ女性の人権を、社会の根本で否定、侵害、抑圧していることになる。
イギリスとか女王がトップではないかという声が聞こえてきそうだが、実際のところ、欧米の女性は、本来持っているはずのウェットな性質を殺され、ドライな男性にひたすら合わせて生きる、無害だがあまり役に立たない只の置物であり、男性の専制下で働く家政婦か、所有物、ペットみたいに扱われているのではないだろうか。その実態を巧みにレディーファーストで覆い隠しているのだこと。
一方、ウェットな村社会日本では、表向きは男社会ということになっているが、実際は、母親や専業主婦の立場の女性が好き放題に活躍しており、男性（息子、夫）を尻に敷いて支配していること。息子を操縦する教育ママの存在や、妻が小遣いを夫に渡す制度とか代表的である。

普段女性に抑えられている日本男性としては、例えゲームの上だけでもいいから、女性を思いのままに支配したいと思って、エロゲーを購入してきたのである。それに応えてきたのが女性レイプ性暴力のソフトを作ったソフト会社である。
女らしさを社会の根本で否定、抑圧している、いわば女性への男性性の押し付けという性暴力を国家、社会レベルで行っている欧米社会は、その本質面で女性の人権を侵害しており、その社会の産物である欧米の人権団体も、本来女流日本のソフト会社に女性人権侵害のケチを付けられる立場にはいない。しかるに、欧米に頭の上がらない日本の政府やその配下のソフト会社の機関は、欧米人権団体に言われるままにエロゲー規制をなしくずしで始めてしまった。これは問題だと思う。
（初出2009年6月）

母子分離、母子一体・癒着とフェミニズム

これまで女性の力を封印してきた欧米社会は、女権拡張、フェミニズムの後進国であり、日本や東アジア諸国がフェミニズム先進国である。
子供が母親の元を去って行く、母親から独立する母子分離型社会（欧米）は、女性の力が弱い女権拡張、フェミニズムの後進国である。自由、独立、自立といった男性の特質が生かされる社会だからである。
一方、母子融合、母子癒着が起きていて、子の母への永久的、永続的な依存や甘えが見られる母子一体型社会（日本～東アジア）は、女性の力の強い、女権拡張、フェミニズムの先進国である。甘え、一体化、同調といった女性の特質が生かされる社会だからである。
母子一体性の強制は、女の子に対しては自然だが、男の子に対しては不自然である。それは、他者からの分離独立を指向する男性性を殺すことにつながるからである。
（初出2011年8月）

男性模倣型フェミニズムと女性独自型フェミニズム

女性が力を取り戻そうとする時、既にある男性の力のあり方を真似るのが、欧米の（、および欧米直輸入の日本の）男性模倣型フェミニズムであること。要するに、男性と同様、経済的自立、自由の獲得を目指すのであること。
一 方、女性本来の力のあり方を指向するのが、女性独自型フェミニズムである。要するに、職場を女性的雰囲気（相互一体感の重視、

団体行動の重視、職場への全人格的没入の重視、下位者の上位者への全人格的服従の重要視・・・）で固め、男性と共働きで、男性と同様に昇進しつつ、家庭において、我が子の全人格や家計管理の権限を奪取し、その状態を維持することを 目指すのであること。伝統的な日本女性は、この戦略で成功しており、男性を支配下に置いている。伝統的な日本女性は、フェミニズムの成功例なのである。
（初出2011年8月）

姑のフェミニズムと、嫁のフェミニズム

日本のフェミニズムには、少なくとも次の2種類が考えられる。
それは、姑のフェミニズムと、嫁のフェミニズムである。
姑のフェミニズムは、従来の伝統的日本村社会の現状をそのまま追認する形で、日本の家庭やひいては社会全体への姑の立場の女性による支配の維持を主張するものである。この立場では、母と息子の間の強力な連合の維持を図る。
嫁のフェミニズムは、嫁の姑からの自立を主張し、姑とその息子との間の連合関係の切断と、嫁とその母親との連合の強化を新たに図る。
従来の、良妻賢母の考え方は、家庭をベースとした女性の成員管理権限の強化と、自分の子どもの独占的制御、支配の強化を主張するものであり、姑のフェミニズムに該当すると考えられる。
一方、戦前～戦後に欧米から導入されたフェミニズムは、嫁のフェミニズムに該当すると考えられる。表面的には、男性（夫）からの女性（妻）の解放を主張しているが、実際は、夫を出汁にして、姑に対する嫁の立場の向上、強化、逆転を狙っていると見なせる。
良妻賢母主義は、従来、日本のフェミニストたちによって、女性を家の中に閉じ込める、家父長制的で前近代的な考え方であり、打破すべきであるとされてきた。
これは、日本のフェミニストたちが手本とした欧米社会の女性について言えば、至極真っ当であり、確かに打破すべきであると言える。それは、欧米の女性たちは、家庭内で家計管理や子育てといった主権を夫や父親に押さえられて持つことができず、それゆえ、家の外に出口、活路を見出そうとするのが順当であると考えられるためである。
しかし、伝統的な日本の女性に関して言えば、良妻賢母の型にはまる女性が一番強力で恐ろしい存在である。それは、彼女たちが、家庭内で家計管理や子育てといった主権を完全に掌握し、かつ、夫をその状態で女性に心理的に依存させることに成功しているからである。

ただし、この良妻賢母主義はどちらかと言えば、姑寄りの考え方である。嫁は、ずっと夫の家に入って姑の支配を一方的に受け続けなければならず、とても耐えられないので、家庭の外にはけ口を求める必要がある。そこに女性の家庭からの自立を掲げる欧米フェミニズムが来たので、それに嫁の立場の女性が一斉に飛びついたというのが、戦後日本のフェミニズム受容であったと言える。
同じ女性の家庭からの自立と言っても、欧米の女性の場合は、支配者である夫からの自立がメインである。一方、日本の女性の場合は、実質支配者である姑からの自立がメインであり、夫からの自立はおまけというか、夫は姑の子分なので姑の手前従うけれど、親玉の姑を倒してしまえば、姑の子分の夫は自ずと自分にすり寄ってくる弱い存在だと予め計算していると言える。女社会においては、家庭や学校、会社等の集団への加入順序に基づく先輩後輩の絶対的な上下支配関係が存在し、後輩や新入りに当たる嫁は、先輩である姑を批判できないという不文律というか掟が存在している。それゆえ、嫁は姑を表向き批判することができず、批判の対象として、姑の後ろ盾はあるものの、より弱体な夫にターゲットをすり替えて批判していると考えられる。
それゆえ、従来の日本のフェミニズムは、以下の点でもう一度検証しなおす必要がある。すなわち、表向きは女性の男性からの解放を目指していたが、実際は、結婚相手の男性の母親である姑からの嫁の解放、女性の女性からの解放を目指していたのではないかということである。
日本のフェミニズムの主張は、建前は、女性の独立、生活の経済的自立であったが、実際は、姑の息のかからないところで自活できる、経済的に自立できることで、姑の支配からの独立であったのではないだろうか。
女性の就業機会を男性並みに権利として確保しようとする男女雇用機会均等法にしても、嫁が、姑の支配する夫の実家から出ていっても経済的に生活していけること、すなわち嫁の姑からの経済的独立、自立を確保するのが真の目標だったのではないだろうか。
あるいは、妻が自分の姓を夫に合わせなくて済むようにする夫婦別姓にしても、「嫁」概念、存在そのものの解消を目指していた節がある。なぜなら、嫁は、姑による支配、姑への服従を前提とした存在であり、嫁の立場の女性としては、そもそも夫の家に入らない、嫁入りしないことで、姑の立場の女性が自分を支配するのを阻止できるからである。
子育てとかの男女共同参画にしても、嫁が姑の世話にならずに、姑の支配下に入らずに、自分たち夫婦だけで生きていく、子育てをすることを、実際には目指しているのではないだろうか。

日本の男性、夫は、その母親である姑に支配されるとともに、姑と一心同体であり、そのままでは嫁である自分ではなく、姑の側に付いてしまう。そこで、日本のフェミニストが男性を批判する真の目的は、男性が実母である姑の側に付くことをマザコンだとして批判し、男性を実母である姑から遠ざけることで、嫁である自分と夫との間の「夫婦カプセル」が、姑の影響下にまとめて入るのを排除し、夫との関係を妻である自分が独占することである。そして、夫婦カプセルにおいて、妻である自分が、家計管理や子育てとかでの実質的な支配権、主導権を握ることである。そのためには、姑の息子である夫を姑から切り離して自分の側に付ける必要がある。欧米産のフェミニズムは、それを実現するための方便として、嫁の立場の女性によって利用されたのである。
一方、伝統的な日本の女性の間には、嫁姑順送りの思想みたいなのが存在し、姑に酷い目にあわされた嫁は、自分が姑の立場になったら嫁に同じ酷いことをする、という負の連鎖が無限連鎖になっていると言える。これは、嫁の姑からの自立が起きることでストップする。
欧米フェミニズムの導入により、嫁の姑からの自立が起きた結果、姑に酷い目にあわされ、嫁には自立されて、姑としての影響力、支配力を行使できない、損をしている、かわいそうな？世代の姑が生まれていると言える。これが、男女共同参画時代以降の日本の姑である。
戦後日本のフェミニズムは、姑の既得権益を切り崩す嫁のフェミニズムであった。それは、実質、女同士の戦いであった。見かけは、男社会批判であったが、実際は、「姑社会」批判であった。今までの日本は、見かけは男性たちの支配する男社会に見えるが、実は、その男性たちがことごとくその母親たちによって支配されている「姑社会」であったと言える。そして、欧米フェミニズムの導入による、表面的な妻の夫からの自立の主張を隠れ蓑にした、妻の、姑が支配する夫の実家からの自立により、姑社会が消滅しつつあると言える。嫁の立場の日本女性による男性批判は、男性が姑の子分、一員であり、そうした男性を批判することが姑に一矢報いることにもつながっていたと言える。
これはまた、従来の嫁の立場の女性が、姑の支配下にある夫の実家に入ろうとしないことで嫁概念の弱体化を招いている。すなわち、妻による「夫の姑からの切り離し」作戦が進行しており、それは夫婦単位の見かけ上の強化、見かけ上の夫婦関係のカプセル化の進行となって現れている。この妻による「夫の姑からの切り離し」は、実際は、妻とその実家との結びつきの強化につながる。従来、妻は夫の家に嫁入りするに当たって、実家との縁を表面上切らざるを得

なかった。それは、例えば、嫁入り衣装が真っ白であることで、結婚する女性が、いったん自分自身を白紙状態に戻して、夫の実家に新入りする気持ちを表現している点に表れているのである。それを切らなくてよくなりつつあるのであること。
これは、妻と妻の実家が、夫を支配することに結びついていると言える。すなわち、姑のバックアップが無くなった結果、夫の立場が弱体化し、その結果、入婿と大して変わらない状態に実質的に追い込まれているのである。
嫁入りの実質的な消滅が、日本社会では本格的に起きようとしているか、既に起きている。姑による嫁とその夫の支配から、妻と妻の母による夫の支配（と姑の疎外）への移行が起きていると言える。
これは、日本男性の草食男子化とも関連していると言える。日本の特に若い男性が、女性に対してとかく覇気が無いとされるようになっているのは、男性が結婚すると、実母である姑のメンタル面でのバックアップが期待できなくなりつつあることが理由として挙げられる。従来あった姑という支えに頼れなくなった男性が、嫁というか、同世代の結婚対象の女性全般に対して弱くなってきているのである。
息子を嫁に取られた、姑の実権を失った、いわば「姑未満」の女性たちが大量に生まれつつある。彼女たちは、夫に先立たれて一人になると、「おひとり様」と呼ばれる存在になる。それは、一生結婚しなかったハイミスの女性と同様の存在である。しかし同じ「おひとり様」でもハイミスと違うのは、ハイミスが姑にも嫁にもならなかったのに対して、姑未満の女性は、嫁にさせられ、姑にはなれなかったという点である。ハイミスよりも姑未満の女性の方が損をしているのである。それはどういうことかと言えば、ハイミスは、そもそも結婚しなかったため、嫁として姑の支配を受けずに済んでいるのに対して、姑未満は、嫁として姑の支配を一方的に嫌々ながらに受け続け、そのうっぷんを次の世代の嫁に対して晴らすことが出来ず、負の体験、感情を一方的に貯めこむことになっているからである。姑になれなかった嫁としての姑未満の女性は、負け組なのである。
こうした「おひとり様」は、姑による嫁支配の順送りを断ち切るために、一時的に生じた過渡的な現象であると考えられる。すなわち、妻とその実母による支配の強化への移行をさせるための一時的な「つなぎ」現象であり、将来的には消滅すると考えられる。
良妻賢母主義を、嫁の立場から見ると、「良妻」が姑の息子である夫への奉仕、「賢母」が姑の監視を気にしながらの子育て、として嫁である妻には捉えられ、いずれも夫の実家、姑の影響下にあるので嫌だとして、嫁の立場のフェミニズム、「嫁のフェミニズム」か

らは批判の対象になるのである。
すなわち、嫁が、姑が支配する夫の実家に一方的に閉じ込められた、同化を強制された感覚が、嫁に取っては嫌なのである。
嫁の立場の女性は、良妻賢母主義の批判によって、見かけ上、男性、夫をひたすら攻撃しているが、実際は、男性、夫の実母である姑を叩いて、姑からの自立、自由を確保するのが、真の目的である。これは、女同士の戦いというか、姑と嫁、嫁の実家との戦い、勢力争いである。
実際のところ、良妻賢母主義にも新旧が存在し、古い良妻賢母主義から、新たな良妻賢母主義への移行が生じているのではないかと考えられる。新たな良妻賢母主義においては、「良妻」は、妻は、家計管理権限の掌握等により夫を実質支配しつつ、見かけは対等を装って良い妻を演じることを指し、「賢母」は、姑の影響力をシャットアウトした状態で、子供を自分の思いのままに操縦するかたちで子育てすることを指す。すなわち「嫁のフェミニズム」の具現化であること。
一方、伝統的な旧良妻賢母主義は、姑が、嫁の立場にある女性に対して、もう一度勢力を盛り返すのに使われるであろう。すなわち、「姑のフェミニズム」の具現化であること。
日本の男性にとっては、姑＝実母による支配から、妻および妻の実母による支配へと、自分の支配者が変わったことになる。男性に取っては、引き続き女性による支配下に置かれていることに変りなく、その点、日本男性解放の視点は引き続き必要である。
また、男性に取っては、姑＝実母の権力の傘を着て、妻に対して威張ることが難しくなった点、家庭内での地位の低下につながっている。ちなみに、この夫による妻への威張りは、夫婦別姓が実現することで実質的に不可能になる。日本男性が夫婦別姓に消極的なケースが多いのは、妻への実母（姑）の影響力の行使が出来なくなることに伴う自分自身の（特に妻に対する）影響力や地位の低下が予期されるためであると思われる。
では、当初の目的を達成したところの「嫁のフェミニズム」は、この先消滅するのであろうか？と言えば、無くならないであろう。それは、男性を見かけ上支配者ということにして置かないと、女性が支配責任を取らされることにつながってしまうので、自らの保身のため責任追及から逃げたい女性側からは、引き続きニーズがあると言えるからである。
（初出2011年5月）

日本社会の母性を無視する日本フェミニズム

従来の日本のフェミニズムでは、なぜ日本社会に存在する強い母性を無視してきたのであろうか？。
それは、彼らにとって、強い母親が、必ずしもプラスの肯定的な価値を持つ存在ではなく、かえって、疎ましい、憎たらしい、苦手である、とマイナスに感じられているからではないだろうか。
女性である自分たちも、自分たちと同性である母親や母性が充満した既存の日本社会が不愉快な代物であると、彼らが心の奥底で認識している可能性がある。
「日本の母」という強大で鬱陶しい存在に支配されているという、その事実から、一時的に目を背けたい、逃げたい、という気持ちが、彼らが日本社会における強大な母性の存在を無視する原動力になっているのではなかろうか？要するに彼らは、「母から逃げたい」のだ。
こうした想定される原因からは、次のようなことが言える。彼ら（というか彼女ら）は、支配者である母に屈する点、日本男性と立場が同じである。母性型伝統型フェミニズムを推進するには、自分の母による、自分への支配を受け入れなければいけないのだが、それが心理的に受け入れがたいというのがあるのではないだろうか。
あるいは、母と娘との女同士の支配従属関係が嫌らしい面があるということである。すなわち、同性同士なので、お互い手の内の見える者同士であり、そこに自ずと煩わしい駆け引きが生じる可能性があるのだ。
むしろ、既存の日本男性たちの方が、母親とは異性の互いに引き付けあう関係にあることを利用して、かえって強い母性を受け入れ、母親に対して肯定的に甘えているとも言える。
日本の既存フェミニストら（上野千鶴子氏とか）は、強い父性の家父長制を前提とした議論にすり替えることで、日本社会を母性が支配しているという現実からの逃避を図っていると言える。本当は、日本は母性が強い、家父長制は当てはまらないという現実に戻らないといけない。
現実逃避は、お父さんに強くなってほしいという願望の現れでもあると言える。実母との濃厚で息の詰まりそうな支配従属の人間関係の間に割って入って、自分を楽にして欲しいという、精神的なカタルシスを求めていること。要するに、日本の（特に女性の）フェミニストは、心の奥底でこっそり隠れて、父性待望論者なのではないだろうか。母性型フェミニズムの発現を無意識のうちに遠ざけてきたのではないだろうか。日本社会に伝統的な強い母性に基づく母性型フェミニズムという考え方を、無意識で知らず知らずのうちに避けているのではないかと考えられるのである。
こう考えると、今まで日本男性解放にとって敵とみなされる存在で

あった、既存日本フェミニストたちが、実は、実母からの解放を指向するという点では、味方、同志になる可能性があるのである。
この可能性が有効であるとすれば、既存の女権拡張、男権拡張の党派を超えるかたちで、そうした無意識的行動に身を投じている自分たちを見つめ直す、大局的、客観的、鳥瞰的な視点が、フェミニズムとマスキュリズム、女性学と男性学同士の価値ある、不毛でない戦いのために、あるいは両者の有効な発展のために、必要なのではないだろうか。
（初出2011年10月）

強力な父性の存在が前提の日本フェミニズム。

日本のフェミニズムの「日本社会は家父長制」だとする主張は、日本社会に、明確で強力な父性が存在することが前提となる。
社会に強い父性が存在しないと、そもそも家父長制は成立しない。
それゆえ家父長制を前提とする、上野千鶴子氏等の主張する日本フェミニズムも成立しない。
日本の父性は具体的にどういったものなのか、彼ら日本のフェミニストたちは答えられるのであろうか？というのも、かつてのグスタフ・フォス「日本の父へ」の著作に見る如く、日本の父性は実は、母性に押されて弱体で、明確な形で存在しないと見るべきだからである。日本の男性、父親は、「母、姑の番犬、飼い犬」状態なのではないだろうか。
社会に強い父性が前提となる点が、既存の、父性が十分強い欧米社会の理論を直輸入している日本フェミニズムのネックであり、根本的なウィークポイントであると言える。日本社会＝家父長制の前提が崩れると、今まで積み上げてきた理論や社会運動の全体が崩壊するからである。
日本社会に、強い父性は存在しない、幻であるのではないか？それゆえ、強い父性の存在を前提とした既存日本フェミニズムはそもそも成立しない、できない、未来は無いのではないか？。
その点、強い母性の存在を前提とした日本オリジナルの伝統的母性型フェミニズムへの転換を行い、世界中へ大声で宣伝することが必要であると言える。
日本のフェミニズムは、いい加減、輸入学問からの脱却が必要である。日本社会の真の姿を、借り物の理論に頼らず自ら納得の行くかたちで考えぬいて、示せないといけないと思われること。欧米の学説をいっぱい勉強して知っているだけではダメで、輸入理論を日本社会に機械的に当てはめるだけの今までのやり方を根本的に変える必要がある。

（初出2011年10月）

母になる責任逃れとフェミニズム

日本においては、母になる責任から逃げたい女性たちが、フェミニズムを主張している面があると考えられる。
要するに、子育て、子供の教育に対して自分に降りかかる重圧、母親として自分の子供をちゃんと育て上げないといけないという重圧から逃げるために、母となること、母であることを否定しようとするのであること。女性にありがちな責任逃れの傾向がそこには見られる。
（初出2012年07月）

「永遠の娘」状態でいたい現状日本のフェミニストたち

現在の日本の女性学、フェミニズムにおいては、現状の女性の立場を故意に否定的に捉え、そこからの脱却を図ろうとする偏りがある。日本女性の現状の立場を、母権社会のヒロインとして肯定的に捉えるように改める必要がある。
このように現状の女性の立場を否定的に捉えるのは、彼ら（彼女ら）が、永遠の娘状態への回帰を心の底で望んでいるからである。すなわち、結婚せずにキャリアウーマンであろうとしたり、子供を邪魔者扱いしたり、大人の女性が持つ母としての役割全般を否定するのは、大人の母になることを避けて、子供の娘に回帰しようとする心の現われである。
日本男性が実現している「永遠の息子」状態への回帰の反対である。日本女性は伝統的に「永遠の母」状態にあるのであり、それが心の重荷（子供を支える負担、責任を負いたくないこと。）と感じる女性たちが、母性を否定する現状の女性学、フェミニズムに入り浸っていると言える。要するに、欧米の女性みたいに「永遠の娘」状態でいたいこと（その方が楽だ。）と考えるのであること。いつまでも子供でいたいのである。欧米男性は「永遠の父」状態にあると考えられるため、「永遠の娘」状態でいたい一部の日本女性たちは、自分たちもそうした頼れる強い父が欲しいと考え、そうした父の存在を、あたかも幻想、ファンタジーのように仮定して、虚構、砂上の楼閣の家父長制を日本社会に実現すべく奮闘しているのだと言える。
(初出2012年04月)

ドライ・フェミニズム（父性的フェミニズム）から、ウェット・フェミニズム（母性的フェミニズム）へ

欧米のフェミニズムは、女性を男性より劣った存在と見做し、女性が男性並みになること、女性が男性に合わせること、女性の男性化を目指してきた。その点、父性、男性的価値観の影響下にあり、父性的フェミニズム、ドライ・フェミニズムと呼べること。日本の従来のフェミニズムは、このドライ・フェミニズムを踏襲したものである。
日本のフェミニズムは、今後より発言力を増したいと思うなら、日本社会の実態に合わせる形で、日本社会における女性を男性より優位の優れた存在と見做し、男性を、母性の力で女性好みに、女性的価値観に合うように調教すること、男性が女性に合わせること、男性の女性化を目指す、母性的フェミニズム、ウェット・フェミニズムの道を取るべきである。
（初出2011年3月）

日本における欧米フェミニズム導入の真の理由

今まで日本社会の母性による支配という現実は、日本人に受け入れられて来なかった。日本は家父長制の国であるとされ、女権拡張のフェミニズムがひたすら導入されてきたのである。
それはなぜなのであろうか？。
日本は、明治維新以来、社会の欧米化路線を突っ走ってきた。それは、旧宗主国の中国、韓国との立場を逆転するために、中国、韓国より強く先進的な欧米の権威に積極的に染まり、欧米社会の一員となることが必須だったからである。
日本社会における姑による家庭支配、社会における母性の氾濫という現実を認めると、日本社会への、女性は弱い、女性解放が必要であるとする欧米理論の当てはめがうまく行かなくなり、自分たち日本が欧米社会の一員であると言えなくなってしまう。その結果、日本社会の欧米化は進まなくなり、欧米社会から異質扱いされると共に、再び、のしてきた中国、韓国の属国になってしまう。
それでは困ると考えた日本社会の為政者に当たる立場の人たちは、日本社会の母性による支配という現実を直視することを封印し、日本社会に欧米のフェミニズムをひたすら導入する道を選んできたと考えられる。日本政府の男女共同参画社会構想とか、その極致であり、日本の女性学者たちは、日本社会における母権の強さに目を背けて、政府の御用学者として、日本社会の欧米化と、それに伴う中国、韓国といった旧宗主国による日本再支配の回避の一翼を担って

きたと言える。
（初出2012年2月）

日本のフェミニズム、男女共同参画運動と、専業主婦への妬みこと。

日本のフェミニズムとか男女共同参画社会実現を巡っての運動は、表面上は、女性の社会進出促進を掲げているが、実際のところは、。
・経済的に余裕が無くて外で働かざるを得ない立場の女性が、働かずに家でのうのうと暮らせる身分の専業主婦に対して妬みを持って、その座から引きずり降ろそうとする運動なのではないか？。
・育児、家事がこなせない、あるいは、子育てをする母性が不足した、専業主婦になるだけの器量に劣る女性が、社会進出でその劣勢を挽回しようとする運動なのではないか？。
難攻不落の専業主婦帝国への、外野からの攻撃、がその実態なのではないだろうか？。
（初出2014年11月）

母性型フェミニズム、ないし伝統型フェミニズムと日本社会

日本社会で、母性、母親の力が強いと考え、それを女権拡張に活用しようとする考え方は、「母性型フェミニズム」というように呼べる。
母性型フェミニズムは、母性が社会を支配する現状をそのまま維持、発展させることで女権拡張を図ろうとするものであり、伝統的な母権社会をそのまま活かそうとする点、「伝統型フェミニズム」というように呼ぶことも出来る。
伝統型、母性型フェミニズムは、いわば、姑のフェミニズム、お袋さんのフェミニズム、お母さんのフェミニズムなのである。
こうした母性型、伝統型フェミニズムの現状維持、発展の行き方は、欧米社会において女性の力が弱い現状を破壊しようとするラディカル・フェミニズムとは明らかに違うものである。
また、伝統的な母権社会は、個人の自由や、個人のバラバラな意見陳述よりも、全体の一体感、調和、和合、周囲に合わせることを重

視する。その点、そうした伝統的な母権社会に基づく母性型、伝統型フェミニズムは、個人の自由独立を目指すリベラル・フェミニズムとも一線を画す。
母性型、伝統型フェミニズムは、従来の欧米産のフェミニズムには無かった新しいパターンの女権拡張の行き方として捉えられるのである。
（初出2011年9月）

今後の世界のフェミニズムに必要なもの

空気が読めないと、他の人を批判する場合、その空気にも、男性的な空気と、女性的な空気が存在することを考えに入れるべきである。
男の空気は、欧米的な雰囲気であり、殺伐、戦闘、自由、個人の自立、客観、科学、立体三次元といった、気体的でドライな雰囲気である。
女の空気は、一体・仲良し、調和、相互依存、排他、足の引っ張り合い、不自由、陰湿、非科学、平面二次元といった、液体的でウェットな雰囲気である。
女の本質は、不自由である。
女性性は、集団主義、束縛・規制主義をその本質とするものであり、個人主義、自由主義の欧米社会の根幹を破壊する威力を秘めている。
しかるに、欧米フェミニストは、「自立」「自由」「解放」といった、男性的なキーワードを、女性に対して当てはめようとしている。
欧米フェミニストたちは、個人主義、自由主義といったドライな男社会、男性的な価値観に縛られ、父性に囚われたまま、女性性に反した言説を行っている。
日本のフェミニストは、日本の女性が伝統的に保持している、女性性本来の、安全第一を指向する集団主義、護送船団主義、相互の心理的、情緒的一体融合化を指向する世界を実現することが、本当の女性解放、女権強化に結びつくことを、欧米フェミニストに対して主張すべき、教えてあげるべきであった。
しかし、日本のフェミニストたちは、それに気づかず、男性的価値観に縛られた欧米フェミニズムを日本社会に直輸入する誤りを犯した。
欧米フェミニズムの日本社会への直輸入によって、逆に日本社会に男性的価値観を注入してしまい、日本社会の女性性を弱めて、真の女権拡張に反する結果となったこと。

なぜ、日本のフェミニストたちは、誤りに気づかなかったか？それは、自分たちが本来拡張すべき、女社会、女性心理、母性的価値観がどのような実態を持つものであるかについての十分な考察、知見に欠けていたからである。
今後は、日本社会の中にその原型が存在する、女社会や、母性的価値観の実態をより明らかにして、それらの拡張を目指すことが、世界のフェミニズムにとって必要である（日本男性解放の視点からは望ましくないが。）こと。
日本のフェミニズムから世界のフェミニズムへの発信の流れが必要である。日本の大企業、中央官庁の幹部の母（専業主婦）や、日本農村の姑を、最強の女性として世界的にモデルにすべきであること。
（初出2011年3月）

マザコン社会の世界的拡張

日本の伝統的な村社会は、母や姑が支配する社会である。子供たちは、息子も娘も、母に対する依存心や甘えの意識を強く持っており、その点、日本村社会はマザコン社会と呼べる。このマザコン社会を全世界に向けて拡張していくことを、世界のフェミニズムは目指すべきである。日本～東アジアのフェミニストはその旗振り役をすべきである。
（初出2016年11月）

資料文書編

ドライ・ウェットな性格、態度のまとめ

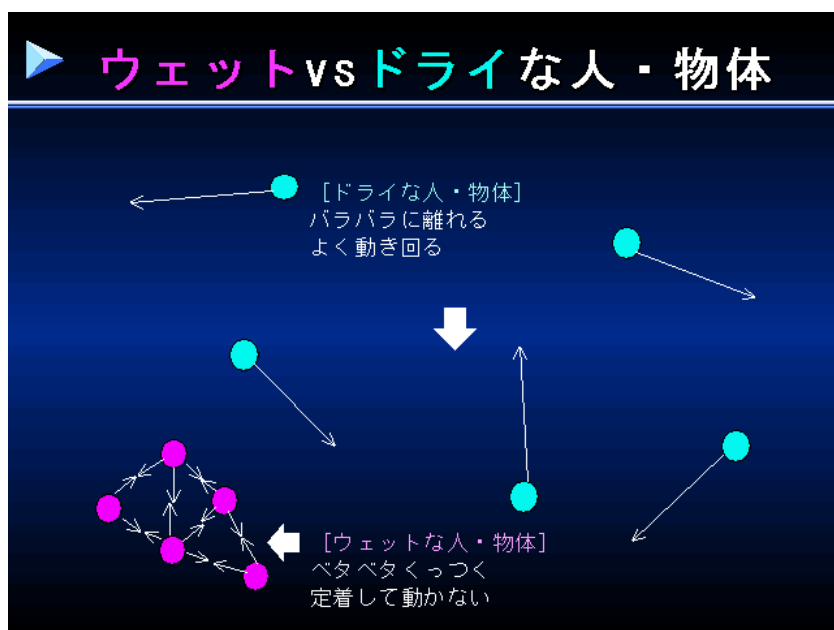
ドライないしウェットな性格、態度は、以下の表に書かれているようにまとめることができる。

	ウェット	ドライ
〔Ａ〕	〔心理的近接指向〕	

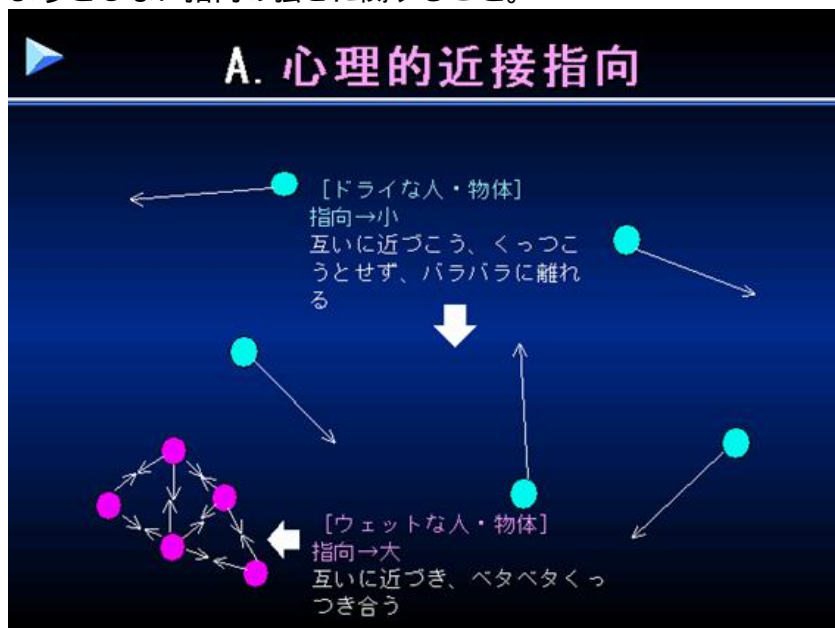
〔Ａ１〕	〔他者との心理的位置の同一・共通化〕	
[A1.1]	集団主義 互いに集まり、まとまって動こうとすること。	個人主義 互いに一人ずつ単独・個別にバラバラに動こうとすること。
[A1.2]	密集指向 互いに狭い領域に密集すること。	広域分散指向 互いに広い領域に散らばること。
[A1.3]	画一（同質）指向 互いを画一的な枠にはめようとすること。	多様性の尊重（異質指向） 互いの多様性を重んじること。
[A1.4]	同調指向 取る行動を互いに合わせようとすること。	反同調指向 取る行動を互いに合わせようとしないこと。
[A1.5]	主流指向（権威主義） 自分の取る意見について（すでに認められたこと。）	非主流指向（反権威主義） 自分の取る意見について少数派で構わないとすること。
〔Ａ２〕	〔他者との関係・縁故の構築〕	
[A2.1]	関係指向 他者との間	非関係指向 他者との間

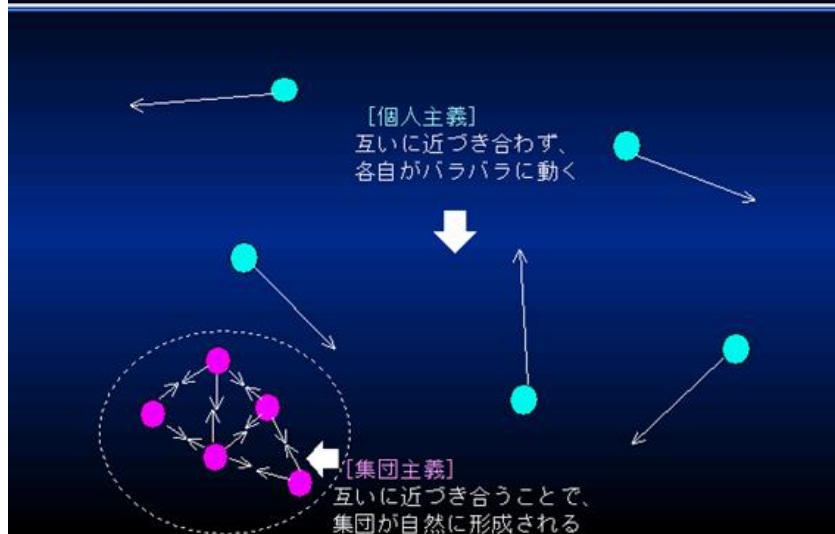
	に積極的に人間関係を持とうとすること。	であまり人間関係を持とうとしないこと。
[A2.2]	縁故指向 既に結び付き（縁故）のある他者との関係を優先すること。	非縁故指向 他者との関係を持つ上で既存の縁故の有無を問わないこと。
〔Ａ３〕	〔行動決定の自由〕	
[A3.1]	規制主義 互いに行動を規制し合うこと。	自由主義 互いに自由に行動しようとすること。（動き回ろうとすること。）
〔Ａ４〕	〔行動の自己決定〕	
[A4.1]	相互依存指向 互いに依存し合うこと。（互いにもたれ合うこと。）	独立（自立）指向 互いに独立・自立して行動すること。
[A4.2]	他律指向 自分の意思を自分だけでは決めず、周囲に決定を任せる。	自律指向 自分で自分の意思を決められること。
〔Ａ５〕	〔プライバシーの確保〕	
[A5.1]	反プライバ	プライバ

	シー 互いのプライバシーを重んじないこと。	シー尊重 互いのプライバシーを重んじること。
〔Ａ６〕	〔行動の明快さや合理性の確保〕	
[A6.1]	あいまい指向 自分の取る意見がが率直・明快でない。	明快（反あいまい）指向 自分の取る意見が率直・明快である。
[A6.2]	非合理指向 物事に対して心情的に割り切ることができず、合理的でない。	合理指向 物事に対して心情的に割り切って、合理的に行動すること。
〔Ａ７〕	〔集団の開放性の確保〕	
[A7.1]	閉鎖指向 閉鎖的な集団にいるのを好むこと。	開放指向 開放的な集団にいるのを好むこと。
〔Ｂ〕	〔心理的運動・活動・移動指向〕	
〔Ｂ１〕	〔動的エネルギー・移動性の確保〕	
[B1.1]	静的指向 自発的に動き回ろうとしないこ	動的指向 自発的に動き回ろうとすること。

	と。	
[B1.2]	定着指向 今いる土地や組織に定着しようとすること。	非定着（移動・拡散）指向 今いる土地や組織に定着せず絶えず移動しようとすること。
[B1.3]	前例指向 自分が今までいた領域にとどまろうとする。	独創指向 未知の領域に進もうとすること。

以下では、上記整理結果をもとに、具体的にどのような人間の行動様式が、ドライ・ウェットさと関連があるかについて、詳細に説明する。ドライ・ウェットな行動様式の詳細な内容を、それらがどの

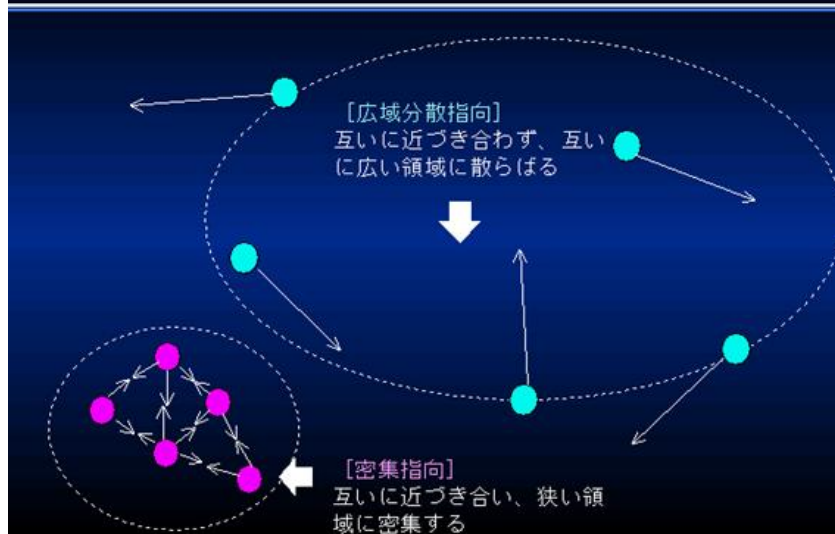
ように活動・移動性の有無、心理的に近接する指向の強弱によって説明できるかも含め、一通り述べる。

●Ａ．心理的近接指向（ウェット）－非近接指向（ドライ）他者と心理的に近づくこと。（距離を縮めること。）、くっついて、離れようとしない指向の強さに関すること。

◎Ａ１．他者との心理的位置の同一・共通化（ウェット）－相違・差異化（ドライ）心理的に他者のいるところへ行こう・集まろうとするかどうかについての次元が存在する。すなわち、他者と心理的に近接するためには、他者と同じところ（心理的位置）を占める必要があり、そのために人々は集団を作ったり、密集したり、同調行動を取ったりする。

○Ａ１．１　集団主義（ウェット）－個人主義（ドライ）

A1.1	ドライ = 個人主義	ウェット = 集団主義
定義	互いに一人ずつ単独・個別にバラバラに動こうとすること。	互いに集まり、まとまって動こうとすること。
No.	[例↓]	[例↓]
1	単独・ひとりで行動するのを好むこと。	集団・団体で行動するのを好むこと。
2	他者からの分離・独立を好むこと。	他者との一体化・融合を好むこと。
3	自分個人の利益を優先すること。	自分の属する集団の利益を（個人の利益よりも。）
4	ひとりで他者とは別の道を歩むのを好む。	ひとりで他者とは別の道を歩むのを好まない。

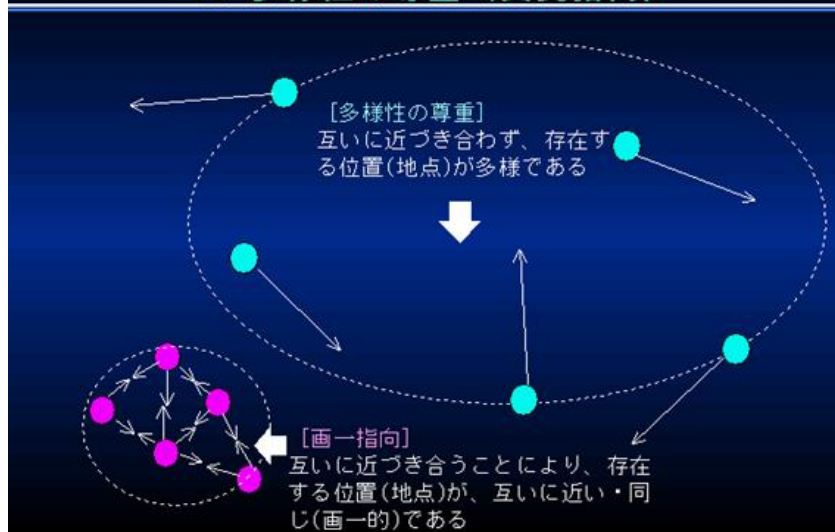
[説明]
各個人に、心理的な引力、他者へと心理的に近接しようとする考えが働いている状態では、個人同士は、互いにくっつき合うことで、互いにまとまりを作り、一つに集まることを好むこと。心理的に互いに接近し合うことで、各人が一つの集団・団体の中で、互いに心理的にくっついて一体化し、融合することになる。いったんくっつ

き合って集団を作ると、その中で互いに引き合い、まとまり合う力が働いて、みんな一緒にいようとする。集団を作って互いでひとまとまりでいる状態を維持しようとし、集団を割ろうとする力を否定しようとすること。こうした集団内では、人々を集団に引き止める力（集団凝集性）が働いており、集団・団体でい続けようとし、集団全体の動きを、自分個人の動きよりも重要視するようになる。これは、集団全体の利益を、自分個人のそれよりも、優先しようとすることにつながる。中にいる個人が外に独りで出ようとすること。（脱退しようとすること。）それと反対方向に力が働いて、集団の中に引き戻そうとする。このように、互いに集まり、まとまって動こうとすることを、集団主義と呼ぶならば、集団主義は、互いに心理的に近接しひとまとまりになることを指向する点、ウェットな行動様式と言える。
一方、各個人に、他者へと近接しようとする考えがあまり働かないと、個人同士は、互いに近づき合って集まることなく、互いにバラバラに離れたままでいようとする。互いに一人ずつ個別にバラバラに動こうとすること。したがって、集団・団体は、目的がない限り自然には発生しない。いったんできた集団を割ることも平気である。個々人は、周囲からの引力を気にせずに、単独（ひとり）で自由に動き回ること。（自分自身の動きや進行方向を決定すること。）ことができ、周囲の他者とは別の道を突き進むことができる。その点で、自分個人の動きや利益を優先することが可能である。集団外に抜け出そうとするときに、周囲の他者から、それを引き止めようとする引力が働かないので、簡単に脱退できる。このように、互いに一人ずつ単独・個別にバラバラに存在しようとしたり動こうとすることを、個人主義と呼ぶならば、個人主義は、互いに離れて、心理的に近接することを指向しない点、ドライな行動様式と言える。

○Ａ１．２　密集指向（ウェット）- 広域分散指向（ドライ）

A1.2	ドライ = 広域分散指向	ウェット = 密集指向
定義	互いに広い領域に散らばること。	互いに狭い領域に密集すること。
No.	[例↓]	[例↓]
1	広い空間に分散していようとすること。	狭い空間に密集していようとすること。
2	一人ずつ個室にいるのを好むこと。	多人数で大部屋にいるのを好むこと。
3	ものの見方が客観的である。	客観的でないこと。
4	ものごとを見る視野が広い。	ものごとを見る視野が狭い。

[説明]
各個人に、他者へと心理的に近接しようとする考えが働いている状態では、各人は互いに近づき、くっつき合うことで、相手との距離がなくなる方向に進む。相 互に隔てのない方向へと近接することで、互いに、大部屋のように、隔てのない、狭い空間に、互いにひとまとまりになって密集するようになること。この場合、互 いに狭い範囲内でものごとを見ることになり、視野が狭くなる。あるいは、互いの間に十分な距離をとって眺めることができないため、客

観性に欠けることにな る。互いにより高い密度でまとまることを指向するため、権限などがどんどん皆が集まる中央に集中すること。（中央集権。）それらが、周辺に広がって行こうとしないこと。このよう に互いの距離を小さくする指向は、密集指向という言葉でまとめることができ、ウェットな行動様式と言える。
一方、各個人が他者へと心理的に近づこうとする度合いが小さい場合、互いに近づき合ってまとまり合うことが少ない分、より低い密度で広い空間内に、互いに分散して（距離を大きく取って、離れて）存在すること。仮に分布可能な領域が狭い場合、人々は、個室にいること、すなわち、壁やドアによって、他者のいる空間から隔離されること。（他者のいる場所からの距離を大きく取ること。）そうしたことを指向すること。広い領域に分散しているため、一度に広い範囲のものごとを見ることができ、視野が広い。互いの間に十分な距離をとって眺めることができるため、ものの見方に客観性がある。互いにより低い密度で周辺に広がっていくことを指向するため、権限などがどんどん地方に分散していくこと。（地方分権。）このように、互いに距離を大きくとって、分散して分布することへの指向は、広域分散指向という言葉でまとめることができ、ドライな行動様式と言える。

○Ａ１．３　画一（同質）指向（ウェット）‐多様性の尊重（異質指向）（ドライ）

A1.3	ドライ＝多様性の尊重（異質指向）	ウェット＝画一（同質）指向
定義	互いの多様性を重んじること。	互いを画一的な枠にはめようとすること。
No.	[例↓]	[例↓]
1	横並びであろうとしないこと。	周囲の他人と横並びであろうとすること。
2	自分とは異なる意見を持つ人に対して寛容である。	自分とは異なる意見を持つ人に対して寛容でない。
3	人々の多様性を認めること。	人々を画一的な枠にはめようとすること。

[説明]
各個人に、他者へと心理的に近づこうとする考えが働いている場合、心理的に近接しようとすることで、互いに心理的に同じところ。（位置・場所）に集中しているようにしようとすること。互いに存在する位置を同じか共通にしようとすること。物理的・心理的に互いに同一の位置を集中して占めようとすることで、互いに画一的な状態で横並びすることになること。存在位置が画一化した状態でひとまとまりになるため、そこから一人別の位置に行こうとする

ことをしないこと。（存在位置の点で個性的あろうとすることをしないこと。）（没個性的であること。）また、画一的な自分たちの中で個性的になろうとする個人の存在を認めないこと。（自分たちとは別の位置を占めようとする個人の存在を認めないこと。）その個人を、自分たちのいる位置へ引っ張り込もうとすること。（異なる意見の持ち主に対して寛容でないこと。）このように、互いに心理的に同一の存在位置にいることを指向することは、画一（同質）指向という言葉でまとめることができ、ウェットな行動様式と言える。皆が同じ心理的存在位置を取ることは、その位置に皆が密集することであり、その点、密集指向とも関係がある。
一方、各個人が他者へと心理的に近接しようとする度合いが小さい場合、人々は相互に引き付け、まとまり合う度合いが少なく、存在する位置が、互いにバラバラに離れていることを許容すること。（多様であることを許容すること。）空間内での分布のはずれ値が多いこと。（分布の幅が大きいこと。）互いに相手とは異なる独自の位置に存在する、という思いから、自分とは異なる意見の持ち主の存在に対して寛容である。このように心理的にバラバラ・多様な位置を占めることを指向することは、多様性の尊重ないし異質指向という言葉でまとめることができ、ドライな行動様式と言える。各自が互いに離れた別々の心理的存在位置にいようとすることは、各自の居場所が心理的に広く分散していると言え、広域分散指向とも関係がある。

○Ａ１．４　同調指向（ウェット）-反同調指向（ドライ）

A1.4	ドライ＝反同調指向	ウェット＝同調指向
定義	取る行動を互いに合わせようとしないこと。	取る行動を互いに合わせようとすること。
No.	[例↓]	[例↓]
1	周囲の皆と違ったことをしようとすること。	周囲の皆と同じことをしようとすること。
2	他人の真似をするのを好まないこと。	他人の真似をするのを好むこと。
3	個性的であろうとすること。	没個性的であろうとすること。

[説明]
自分の行動や進行方向を周囲の他者に合わせようとすること。（互いに同じにしようとすること。）同調への指向。それは、周囲の他者と心理的な位置を同じくしようとして、近づき合うことを意味する。同じ心理的位置を共有する仲間の数がより多く集まることで、その心理的位置における人口密度が高まる。それは、個人間に心理的引力が働いて、その結果、同一の心理的位置に各人が密集したことを指す。周囲の他者と同じことをしようとすること。（周囲の他者の真似をすること。）それは、心理的に互いに同質化して近づこうとすることを意味する。（それは、同一の位置を占めようとする

ことを意味する。）意見の同じ者だけでまとまろうとするのも、相互の心理的同質性を確保して、心理的に同じ位置を持つことで、互いに一体・融合化しようとする姿勢の現れである。一人だけ孤立するのを避けて没個性的であろうとするのも同じ行動様式である。こうした指向の持ち主は、だれかと一緒にいないと不安で仕方がない。孤独に耐えられないこと。これらの行動様式は、いずれも、心理面引力を働かせて、互いにひとまとまりになって心理的に同じところにいようとする動機を含んでいる。このように、周囲の他者と行動を同調させることへの指向、すなわち同調指向は、周囲の他者と互いに心理的に同一の位置を保持することにつながり、ウェットな行動様式と言える。
各自が他者へと心理的に近接しようとする度合いが小さい環境下では、個人は、心理面で、互いにひとまとまりになろうとする引力から自由になって、互いに別々の、違った、独自の、個性的な位置を確保することが可能である。周囲の他者と心理的位置を共有する方向への引力が働かないので、行動を周囲の他者に合わせようとすることがない（周囲の皆と違ったことをする、他人の真似をしないこと。周囲からの孤立を恐れないこと。）このように、周囲の他者に行動を同調させないことへの指向（反同調指向）は、周囲の他者と心理的な近接を行おうとしない点、ドライな行動様式と言える。

○Ａ１．５　主流指向（権威主義）（ウェット）-非主流指向（反権威主義）（ドライ）

[例]

A1.5	ドライ＝非主流指向（反権威主義）	ウェット＝主流指向（権威主義）
定義	自分の取る意見について主流でなくて構わないとすること。	自分の取る意見について（すでに認められたこと。）
No.	[例↓]	[例↓]
1	少数派に属するので構わないとすること。	主流派の一員でいようとすること。
2		
3	ブランドにこだわらないこと。	物を購入するときブランドにこだわること。

[説明]
主流とは、相対的により多数の人々が既に集まっている方の集団のことである。そうした主流を指向するのは、皆が既に大勢集まっているところ（メジャーなところ）に自分も行ってその仲間に加わろうとすることを意味する。そうした、既に人数がたくさんいる多数派・主流派と一緒になろうとする主流、メジャー指向は、心理的には、既に人々が沢山密集している位置と、自分のいる位置を合わせよう、同じにしようとすることになり、より大勢と互いに近接し、

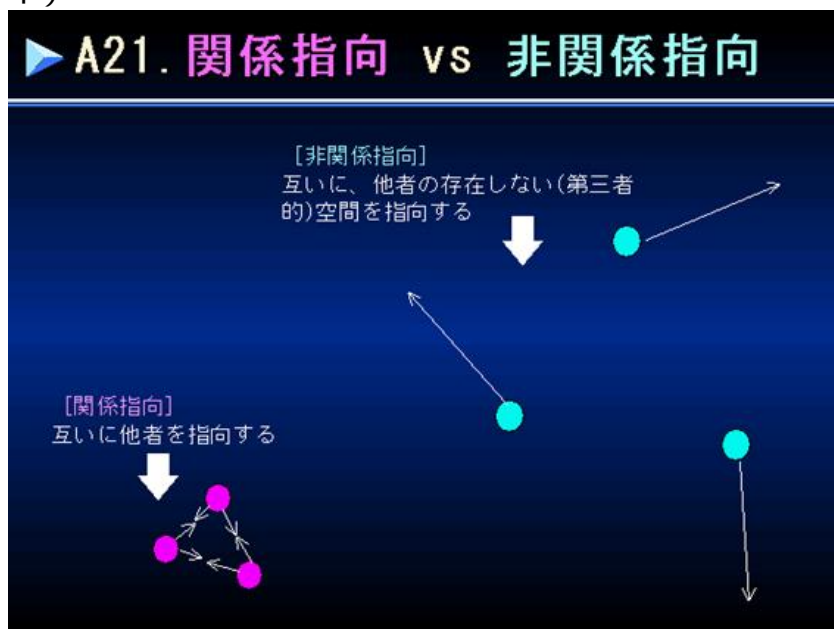
くっつこうとする点、ウェットな行動と言える。
権威ある者（例えば、有名大学医学部の教授や、高級ブランド品のデザイナー）は、その周囲に既に心理的追従者が沢山集まっており、その存在を既に揺るぎないものとした多数派（主流派）の中での中心人物として位置づけられること。そういう意味で、権威ある者のいる辺りは、最も心理的な人口密度が高い。権威を信じることは、心理的な高人口密度の中に参加できることを約束するものであり、権威あるとされる者のいうことを信じたり、後追いをしやすいこと（権威ある商品ブランドに対する信仰など）は、心理的距離空間内において沢山人が集まっている人口密度の高いところに自分も行きたい、密集したいと考えやすいことを指し、互いに集まり合うという、心理的引力を行使することにつながる点、主流指向の一形態であり、ウェットな行動様式と言える。

主流を指向しないこと。（非主流であろう、マイナー指向であろうとすること。）それは、少数派で構わないという行動様式である。人があまり集まっていない、閑散とした方に行こうとすることである。閑散としたところは、人口密度の低い、人々があまりおらず、互いに離れているところを指し、そうしたところに行くことを指向する、非主流、マイナー指向の行動様式は、ドライな行動様式であると言える。
権威を信じないことは、権威に引き寄せられた多数派（主流派）の人々の中に進んで入ろうとしないことであり、あえて主流に入らない、集まろうとしないで、独自の道を歩もうとする行動様式であること。心理的距離空間内において、他者が密集しているところ（権威ある者や彼らが作った商品のあるところ）に集まろうとしない、距離を取ろうとする行動であり、その点、非主流指向の一形態であると言えること。これは、ドライな行動様式である。

(追記) なお、身分との関係については、上流階級が、その社会の中でより主流の重要な位置を占めており、一方下層階級は、マイナーな、目立たない非主流の地位に追いやられている。
上流階級を指向すること。（例えば、上流階級の文化を自分も真似ようとする高級指向の行動。）それは、社会的主流派に属しようとする、すなわち、皆が憧れ行きたがる、集まりたがる社会的位置に自分も行こうとする行動であり、その点ウェットであると言える。
また、身分の上下にうるさくこだわり区別する態度は、自分が社会的に偉い＝権威がある、主流であるかどうかにこだわることであり、主流派の価値観に染まっていることを示す。その点、主流指向

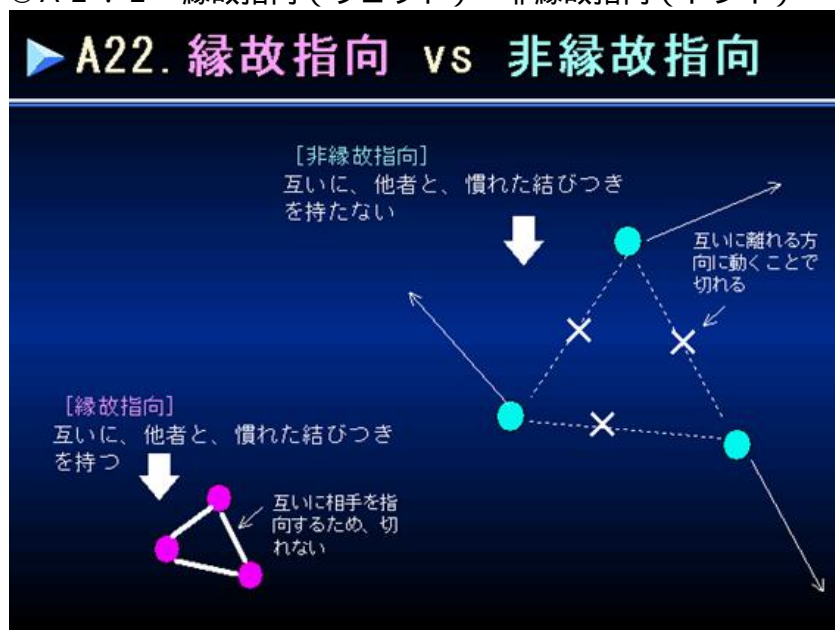
であり、ウェットであると言えること。
こうした身分の上下を区別することへの指向の強さと、当人が実際に属している身分の高さとは、必ずしも一致しないと見られる。例えば、日本において、「お上」= 官公庁の権威に対して恭順する態度を取る下層階級の庶民は、「お上」=「官」という組織が持つ、主流の価値を無批判に受け入れ、それに合わせようとしている点、例え、その所属が非主流であっても、主流指向であり、ウェットである。

◎A２．他者との関係・縁故の構築（ウェット） - 非構築（ドライ）他者との間に関係・縁故を積極的に築こうとするかどうかについての次元が存在する。互いに心理的引力によって他者を指向する者同士が、互いに指向し合った他者と新たに心理的に結合・接続した状態をそのまま維持することで、縁故を作り出す。

○A２．１ 関係・接続指向（ウェット）- 非関係・切断指向（ドライ）

A2.1	ドライ = 非関係・切断指向	ウェット = 関係・接続指向
定義	他者との間であまり人間関係を持とうとしないこと。（関係を切ろうとすること。）	他者との間に積極的に人間関係を持とう、つながろうとすること。
No.	[例↓]	[例↓]
1	他人との触れ合いを好まないこと。	他人との触れ合いを好むこと。
2	周囲の他者に良い印象を与えようとは特に気にしない。	周囲の他者に良い印象を与えようといつも気にすること。
3	人付き合いのあり方がよそよそしい。	人付き合いのあり方が親密である。
4	自分の内面を他者に開示したがらないこと。	自分の内面を他者に開示したがること。

[説明]
各個人に、他者へと心理的に近接しようとする考えが働いている状態では、個人は互いに自分が他者を引力によって自分のもとへと引き寄せる、あるいは他者に近づくことで、互いに他者を指向することになる。すなわち、他者と互いに引き付け合い、近づき合う関係に入ることを重視するようになること。（人間関係そのものを重視すること。）相互に引き付け合うことで、互いに他者と十分な近さまで近づきあうことで、触れ合うようになることを好み、その結果、相互の関係は親密なものとなる。互いに近い距離にいる、同じ位置を共有するようになり、心理的な面からは互いに共感し合う状態になる。自分と他者とが、互いに引き付け合って心理的・物理的に一体化することを望みやすくなること。（愛という言葉を使うのを好むこと。）互いに心理的に近い存在になろうとするために、周囲の他者に気に入られようとしたり、よい印象を与えようと気にしたりすること。あるいは、自分の内面を他者に対して積極的に開示して、互いに相手と関心を共有しようとすること。（そのことで心理的に同じ位置を占めよう、心理的に近づこうとすること。）このように相手との関係を積極的に築こうとすること。（結合、接続しよう、つながろうこと。）それは、関係指向ないし接続指向という言葉でまとめることができ、ウェットな行動様式と言える。関係指向は、他の人間を直接の指向対象とすることから、人間指向ということもできる。

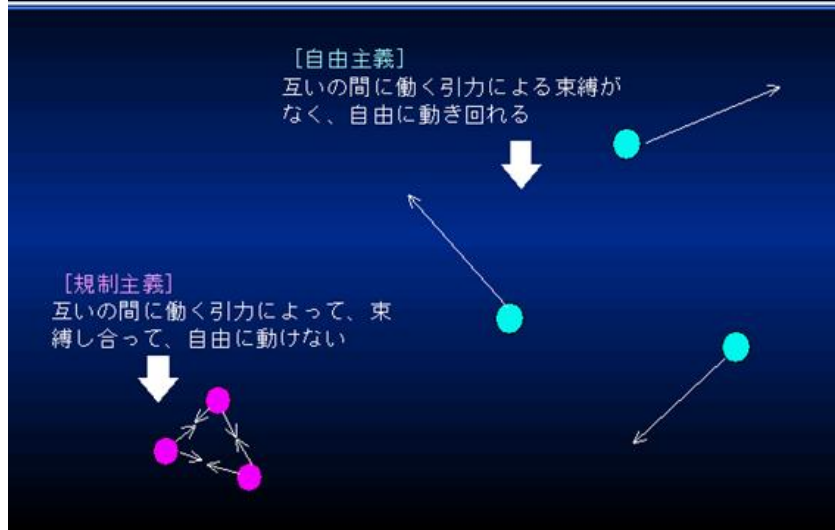
各個人が、周囲の他者と心理的に近づこうとしない状態では、互いを引力によって引き寄せ、近づき合う、互いに他者（人間）を指向するという契機に欠けること。その点で、人間関係を何かの手段としてしかみないこと。相互に引き付け合って近づくことがないため、他人との触れ合いを好まず、人付き合いのあり方がよそよそしい。互いに心理的にバラバラな位置にいるので、互いに共感し合うことが少ないし、相互間の配慮も少ない（足りないこと。）こと。互いに相手と関心を共有しようということがないため、自分の内面を相手に開示したがらないし、相手にあえて気に入られようとすることもない。自分たち人間とはかけ離れた、無機物を指向する。このように、互いに心理的に離れたままでいようとして、他者との関係を築くことを指向しないこと。（ないし、相手との関係を切る、断つことを指向すること。）それは、非関係指向ないし切断指向という言葉でまとめることができ、ドライな行動様式と言える。

○Ａ２．２　縁故指向（ウェット）－非縁故指向（ドライ）

A2.2 定義	ドライ＝非縁故指向 他者との関係を持つ上で既存の縁故の有無を問わないこと。	ウェット＝縁故指向 既に結び付き（縁故）のある他者との関係を優先すること。

No.	[例↓]	[例↓]
1	縁故（コネ）を重んじないこと。	人付き合いで縁故（コネ）を重んじること。
2	親分子分関係を好まないこと。	人付き合いで親分子分関係を好むこと。

[説明]
個人同士が互いに心理的な引力によって、くっつき合うこと。（心理的に一体化し合うこと。）その状態になるのを繰り返すことによって、人と人との間の結合 connection自体に慣れが生じること。（結びついた状態が日常化し、癒着が生じること。）人間同士が互いに慣れた結びつきを持って、互いに引力を及ぼしている状態が「縁故がある」ことになる、と考えられる。相互に心理的に近づくおかげで人間同士が強い紐帯、癒着を持つに至ることが可能となる。相互間の引力によって互いに結びついていることが当然となった人間同士の関係は、血縁関係で結ばれた家族同様のレベルまで深まることもしばしばであり、そのときには、家族的な雰囲気を現すようになる、と考えられること。（実の親子と擬制する親分子分関係など。）このように相互間の強い結合が日常化・長期化することを指向するのは、縁故指向という言葉でまとめることができ、ウェットな行動様式と言える。
各自の持つ、他者にくっつこうとする引力が小さいと、他者との結合connectionが生まれにくく、縁故ができにくい。人間同士の紐帯、癒着が弱い。あるいは、人付き合いのレベルが浅く、家族的でない。相互間の結合が生じにくい状態を指向するのは、非縁故指向という言葉でまとめることができ、ドライな行動様式と言える。

◎Ａ３．行動決定の自由（ドライ）-不自由（ウェット）自分の思った方向に自由に行くことができるかどうかについての次元が存在する。互いの間に心理的に近接しようとする引力が働いていると、その引力がしがらみとなって、人々は心理的に自由に動けなくなる。

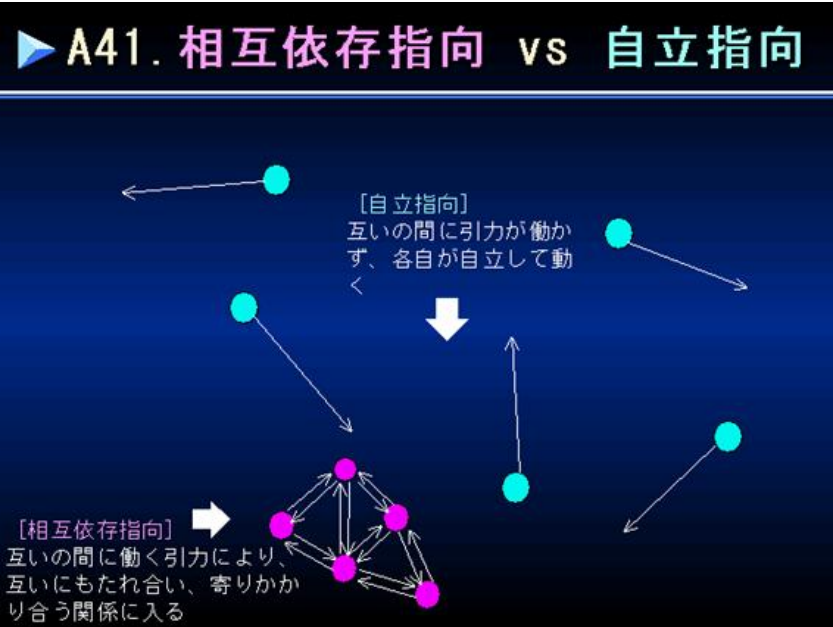
○Ａ３．１　規制主義（ウェット）-自由主義（ドライ）

A3.1	ドライ＝自由主義	ウェット＝規制主義
定義	互いに自由に行動しようとすること。（動き回ろうとすること。）	互いに行動を規制し合うこと。
No.	[例↓]	[例↓]
1	行動の自由を規制されることを好まないこと。	行動の自由を規制されることを好むこと。
2	互いに自由に行動することを許すこと。	互いに相手の行動を牽制し合うこと。（足を引っ張り合うこと。）
3	互いに束縛しあうのを好まないこと。	互いに束縛しあうのを好むこと。
4	抜け駆けを許すこと。	集団内で一人だけの抜け駆けを許さないこと。
5	失敗を犯した本人のみの責任とすること。	一人の犯した失敗でも周囲の仲間との連帯責任とする。

[説明]

各個人が他者に対して心理的に近づこうとして働かせる引力が大きいと、その引力がしがらみとなって、各人は、自分の当初進みたいと思う方向へ向かって、自由に動き回ることができなくなる。心理的引力は、個人同士の互いの動きを、互いに近づき合って、牽制・束縛・拘束し合うこと。（足を引っ張り合うこと。）そうした方向に向かわせること。こうした相互の動きを縛り合う人間同士の引力が働いた状態が、「規制」がある状態である。人間関係において、互いの間に引力が働いていると、それが人間同士の自由な行動を抑え込む力となって（しがらみとなって）、身動きが取れなくなる。個人同士の間に引力が働いている状態では、一人が周囲から外れた行動を起こそうとすると、周囲の他者からの、相手が一人離れて行くことを許さない、一緒にくっついたままでいようとする引力によって、その行動を規制される。これが、足の引っ張り合いや、しがらみがある、行動の自由がない、と行動を起こした本人に感じられるもととなる。 心理的引力の存在する状態で、一人が行動を起こすと、引力が働いているため、周囲の他者がついでに引っ張られてしまうなど影響が広く及ぶため、行動を起こした結果（例えば失敗）についての責任は、行動を起こした本人一人のみに限定されず、周囲の皆の連帯責任と見なすことになる。こうした状況では、個人が単独で自由行動を完遂するのは不可能である。そのため、周囲の他者が同意しない限り行動を起こさない、といった方策が取られることになる。 心理的引力がある集団内では、一人だけの抜け駆けができなくなる。一人が抜け駆けしようとすると、引力が、抜け駆けしようとする本人と周囲の他者との間に働いて、周囲の幾人かもそれにつられて動いてしまったり、周囲の他者が抜け駆けしようとする本人に対して、自分たちの中に引き戻そうとする力を働かせようとするためである。一人だけで動こうとしても、周囲の他者との間に働く、複数の互いの近さを維持しようとする心理的引力がしがらみとなって、自由に動けない。 このように互いの動きを規制し合う状態を指向することは、規制主義という言葉でまとめることができ、ウェットな行動様式と言える。
一方、個人が他者に対して働かせる心理的引力が小さいと、個人同士は、互いに近づき合って、束縛・牽制し合うことがあまりない（人間関係のしがらみがなく、自由に身動きできる。）こと。自分がある方向に動こうとしたときに、互いに引力で相手の足を引っ張り合うことなく、だれにも規制されずに自由に動き回ることができる。一人一人が、互いに周囲の状況から独立して（抜け駆けしてなど）、自由に自分の行きたい方向へと、常に進むことができること。（互いに自由に行動することを許すこと。）行動を起こした結果に対する責任は、行動した本人にのみ限定することが可能であ

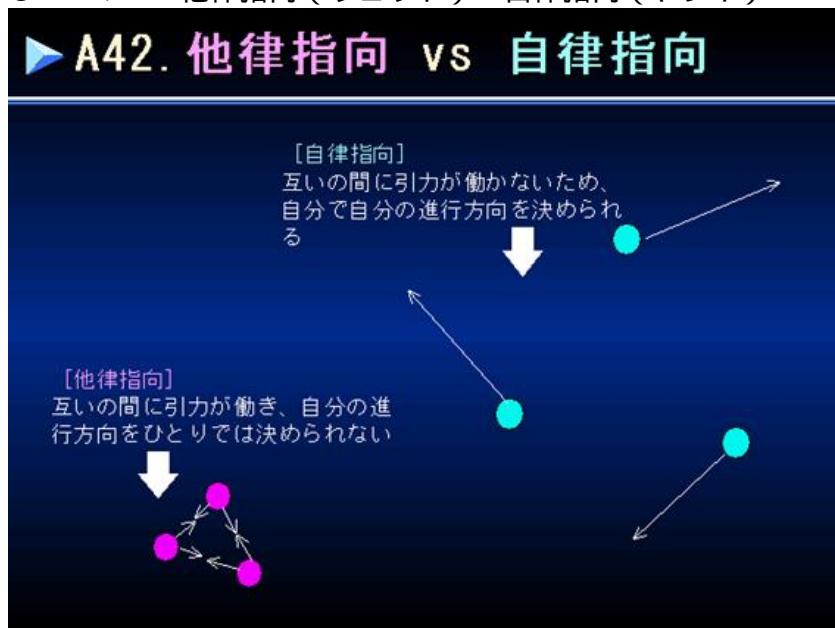
る。このように互いに自由に動き回れる状態を指向することは、自由主義という言葉でまとめることができ、ドライな行動様式と言える。

◎Ａ４．行動の自己決定（ドライ）－非決定（ウェット）自分の行動の決定が自分だけでできるかどうか（他者の意向に沿う必要があるかどうか。）についての次元が存在する。心理的な引力が働いていると、互いに自分の行動が自分一人では決められず、周囲の他者の動向次第になってくる。

○Ａ４．１　相互依存指向（ウェット）－独立・自立指向（ドライ）

A4.1	ドライ＝独立・自立指向	ウェット＝相互依存指向
定義	互いに独立・自立して行動すること。	互いに依存し合うこと。（もたれ合うこと。）

No.	[例↓]	[例↓]
1	互いに自立しているのを好むこと。	人付き合いで互いにもたれあうのを好むこと。
2	独立心が強い。	依頼心が強い。
3	甘えを嫌うこと。	互いに甘えあおうとすること。
4	派閥を作るのを嫌うこと。	派閥を作りたがること。

[説明]
各個人が周囲の他者に対して心理的に近づこうとしている状態では、互いに引き付け、くっつき合うことで、互いに相手に寄りかかりあう、すなわち、相互にもたれ合う関係になる。心理的引力が強いと、自分の行動が相互に相手の行動次第で決まるようになる。自分の行動が相手の動きに依存する。自分のあり方を決めるのに、相手へ心理的に寄りかかる度合いが増える。相互に寄りかかりあうことで、互いに相手の状態に依存し合うことになること。互いに、相手に寄りすがろうと することになり、その点依頼心（甘え）が強くなる。言い換えれば、心理的引力が強いと、自分の行動が相互に相手の行動次第で決まるようになる。その点、自 分の行動が相手の動きに依存する。すなわち、行動が相互依存的になる。また、自分のあり方を決める相手へと心理的に寄り掛かる度合いが増えて、依頼心が強 くなることになる。これは、各自が互いに依存し合う状態で、ひとまとまりになること。（＝派閥を作ること。）これは、外部に対して、一つにまとまった自分たちの勢力をアピー ルしようとすることにもつながる。このような相互にもたれ合う関係への指向は、相互依存指向という言葉でまとめることができ、心理的引力に基づく指向であ ることから、ウェットな行動様式と言える。
一方、各個人が周囲の他者に対して心理的に近づこう、心理的引力を行使しようとしない場合、個人が自分の動きを決定するのに、周囲の他者の動きの影響を受けることが少なくなり、自分のことは自分で決定して行動できること。（周囲の他者に行動を依存しないで済むこと。周囲の他者に自分の行動を決定される度合いが少ないこと。）その点、周囲の他者からは独立・自立している。互いに寄りかかり合うことがなく、依頼心（甘え）は少ない。こうした独立・自立への指向は、心理的引力が弱く、互いに無関係に動き回る場合に顕著となることから、ドライな行動様式と言える。

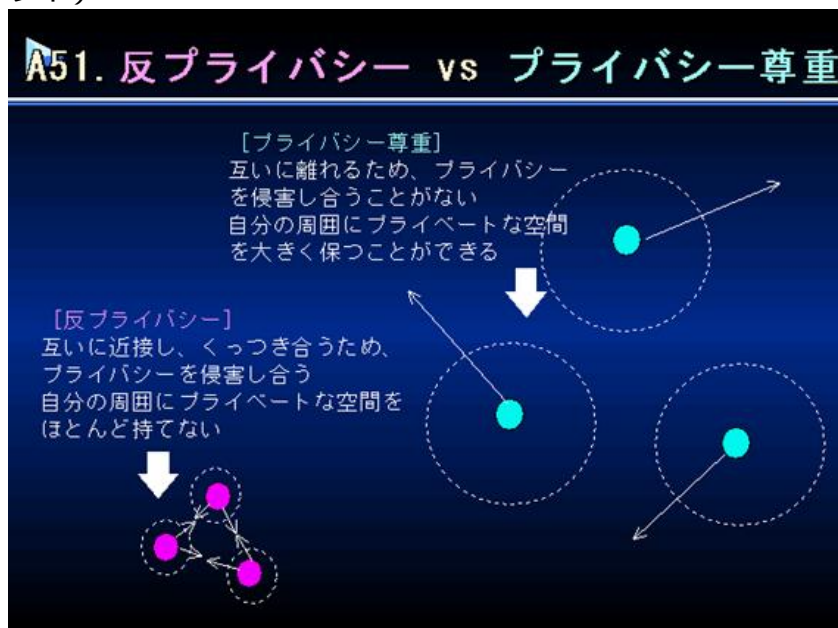
○Ａ４．２　他律指向（ウェット）－自律指向（ドライ）

A4.2	ドライ＝自律指向	ウェット＝他律指向
定義	自分で自分の意思を決められること。	自分の意思を自分だけでは決められず、周囲に決定を任せる。
No.	[例↓]	[例↓]
1	自分の意見を持っていること。	
2	周囲の流行に振り回されないこと。（左右されないこと。）	周囲の流行に振り回されること。
3	自分の今後の進路を自分一人で決められること。	決められないこと。（周囲の影響を受けること。）

[説明]
他者と互いに心理的に近接しようとする引力の只中にいる個人は、自分の行動や進行方向を、周囲の他者によって決定されることを指向すること。（ないし、せざるを得ないこと。）引力の働いている

状態では、各人が周囲の他者からの相手を自分から離れようとさせない引力の影響。（牽制など）を受けて、自分の動く方向を好む好まざるとにかかわらず変える必要に迫られること。（自主性が保てないこと。）自分の進路は、自分の周囲に存在する他者由来の引力との兼ね合いで決まり、自分一人だけで決めることはできない。その意味で、周囲の他者による影響が大きい。すなわち、自分の動きが単独独立で決まらず、周囲との文脈によって決定される「文脈依存的」な行動を取ることになる。
周囲の流行に振り回されるということは、周囲から発せられる心理的な引力に引かれるままに動くことであること。（例えば、友人による「私は既に○○したわ。あなたも○○しない？。（そうすることで私と一緒にならない？）」といった勧誘。）引力は、その中にいる個人に対して、起こす行動における主体性の欠如した、周囲の意見に左右されやすい（自分の意見を持っていないこと。）状態を引き起こすこと。このように、周囲の他者からの引力に自分の行動や進行方向を任せ、預けたこと。そうした状態になるのを指向することは、他律指向と言う言葉でまとめることができ、ウェットな行動様式と言える。
一方、他者との間における心理的近接の度合いが小さい場合、各人は、自分の行動や進行方向を、周囲の他者からの引力に影響されず、自分一人で決定することができること。（自主性を保てること。）自分の動く方向を、周囲の他者の動きに合わせて変える必要がない。周囲の動向（流行など）に振り回されず、自分の意見を持ち続けることが可能である。自分の行動・進行方向を周囲の他者からの引力に影響されずに一人で決めることができる状態を指向することは、自律指向という言葉でまとめることができ、ドライな行動様式と言える。

◎Ａ５．プライバシーの確保（ドライ）－不確保（ウェット）自分の私事を秘密にすることができるかどうかについての次元が存在する。他者に対して心理的近接を試みることは、その分他者および自己のプライベートな領域を侵害する可能性を絶えずはらんでいる。（他者に近づく分、自分の状態が他者に丸見えになる。）こと。また、相手との距離を近く保とうとする心理的引力の働いている状態では、互いに他者に対して何らかの行動を起こすことで、反作用として、他者から、他者自身が何を考えていたかフィードバッ

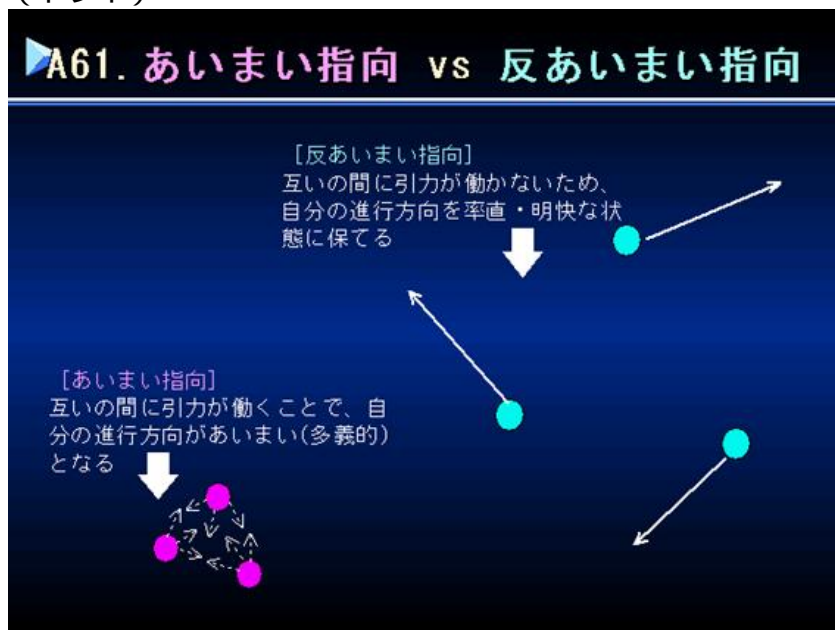
クを得ることができ、互いのプライバシーは侵害される。

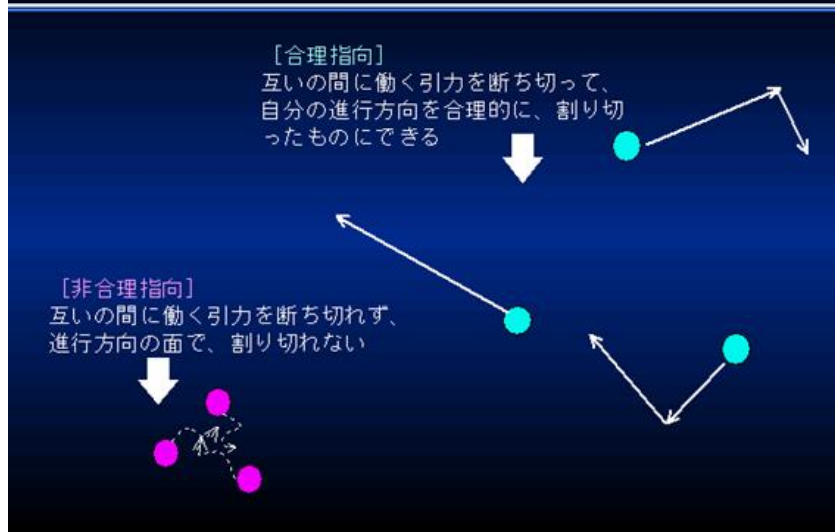
○Ａ５．１　反プライバシー（ウェット）-プライバシー尊重（ドライ）

A5.1	ドライ＝プライバシー尊重	ウェット＝反プライバシー
定義	互いのプライバシーを重んじること。	互いのプライバシーを重んじないこと。
No.	[例↓]	[例↓]
1	他人のプライバシーには干渉しない。	他人のプライバシーに介入したがること。
2	互いに監視しあうのを好まないこと。	互いに監視しあうのを好むこと。
3	他人のうわさ話をするのを好まないこと。	他人のうわさ話をするのを好むこと。
4	当局への密告を好まないこと。	当局への密告を好むこと。
5	自分が他人にどう見られるかを気にしない。	自分が他人にどう見られるかを気にする。
6	化粧をするのを好まないこと。	化粧をするのを好むこと。

[説明]
他者と心理的に近づくことによって、頻繁にくっつき合い、接触し合うことは、互いのプライベートな空間への絶え間ない侵入を引き起こすことにつながり、他者（ないし自己）のプライバシーへの干渉（私事への介入）に結びつくこと。他人のうわさ話をするのを好む、ないし当局に他人の動向を密告しようとすることは、自分が（話や密告の種となること。）他者のことを監視し、他者のプライバシーに介入するのを好むことを示すこと。 自分が他人にどう見られるかを気にするのは、周囲の他者からのまなざしによる牽制・監視を通じて、互いに何をしているか、互いに自分から離れて何か変なことを起こしはしないかを気にする、互いのプライベートな領域に侵入し合うこと。（プライバシーに介入し合うこと。）そうした引力の存在を感じるからであること。化粧をしたり、容姿、服飾に気をつかうのは、そうした他者による、自分のことをを牽制する視線の存在を予め意識して、自分の外観（顔や服装）を他者に効果的に映るように（他者を逆に牽制する形で）コントロールすることであること。こうした化粧、服飾行動は、他者の視線を一身に集めることで、他者を心理的に自分の身の回りに近づけ、積極的にプライバシーを放棄することにつながる。見栄を張るのも、他者に自分がよく見えるように、自分の見た目をつくろうことであり、他者の視線による牽制を前提とした行動である。 こうした相互監視・相互牽制によるプライバシーへの干渉が起きやすいことは、互いの間に心理的引力が働いていることと相関関係にあり、ウェットな行動様式であると言える。
一方、他者に心理的に近づく度合いが小さい場合。互いにくっつき合うこと。（接触し合うこと。）そうしたことがないため、互いのプライベートな空間へと侵入を引き起こすことがなくなり、プライバシーが尊重された状態が保たれる。この状態では、互いに視線の送り合いやうわさ話、密告などで、相手を監視・牽制し合う、といったことがなくなる。こうした状態を好むのは、心理的引力を働かせようとしない点、ドライな行動様式であると言える。

◎Ａ６．行動の明快さや合理性の確保（ドライ）－不確保（ウェット）自分の行動に明快さや合理性を保つことができるかどうかにつ

いての次元が存在する。個人が、当初単独で明快・合理的に行動しようと思っても、周囲から引力という名の横やりが入ったり、周囲の人々の動向が気になると、行動はいつのまにかあいまいで非合理的なものになってしまう。

○Ａ６．１　あいまい指向（ウェット）－反あいまい（明快）指向（ドライ）

A6.1	ドライ＝反あいまい（明快）指向	ウェット＝あいまい指向
定義	自分の取る意見が率直・明快である。	自分の取る意見がが率直・明快でない。
No.	[例↓]	[例↓]
1	物の言い方が率直である。	遠回し・婉曲であること。
2	物事の白黒をはっきりさせようとすること。	あいまいなままにとどめようとすること。
3	自分の今後の進路をはっきりさせようとすること。	あいまいなままにとどめようとすること。

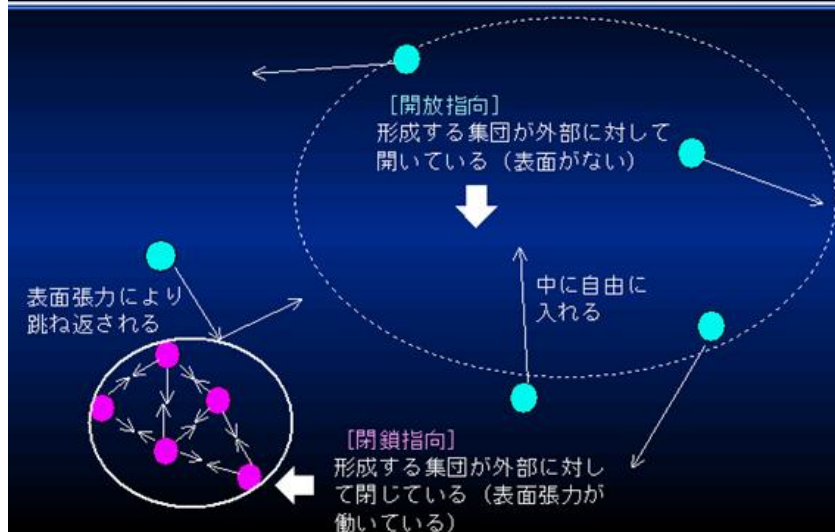
○Ａ６．２　非合理指向（ウェット）－合理指向（ドライ）

A.6.2	ドライ＝合理指向	ウェット＝非合理指向
定義	物事に対して心情的に割り切って、合理的に行動すること。	物事に対して心情的に割り切ることができず、合理的でない。
No.	[例↓]	[例↓]
1	考え方が合理的である。	非合理的であること。
2	考え方が科学的である。	非科学的であること。
3	宗教を信じないこと。	宗教を信じること。

[説明]
ある個人が特定の方向に進もうとしたとき、自分の周囲の多方面から引力を受けると、その影響で、進行方向があいまいとなる。すなわち、心理的引力が働く対人関係においては、当初明確な意図を持って動こうとしたとしても、周囲の他者からの引力による介入・調整の繰り返しにより、いつしか進行方向があいまい、不明瞭（玉虫色）となること。物の言い方も、率直さに欠けた遠回し・婉曲なものになる。 また、他者との相互間に引力が働く環境下では、周囲の他者からの、相互の近さを保とうとする引力による介入を断ち切れず、割り切った行動を取れないため、自分のいったん決めた方向に向かってまっすぐ進むことができず、合理的な論理や計画が、曲

げられてしまう。進む方向が、その場の周囲からの引力の働く方向（雰囲気）に絶えず影響されて、一時の感情にまかせて、気まぐれにアトランダムに変わってしまうため、自分で論理的な方針を組み立てることができず、合理的な方向へと進んでいくことができない。 このように、人が周囲に対してあいまい・非合理的な行動様式を取ることは、心理的引力がもたらすところのウェットさに基づく。

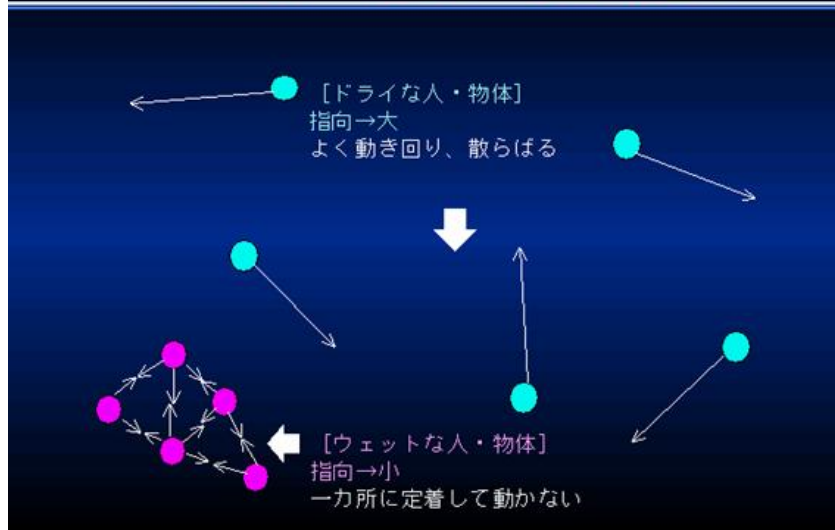
他者との間に働く心理的引力が少ない状態では、個人の動き（例えば、今後の進路を含む。）が、周囲の他者からの引力による干渉を受けて曲がることがないので、まっすぐ（率直）・はっきり（明快）な状態を続けることが容易である。当初明確な意図を持って動こうとしたとき、周囲の他者からの心理的引力による介入・調整がないので、進行方向がはっきりした、明確な状態を続けることができること。（あいまいさが生じないこと。）物を言うに当たって、的に向かってずばり直球を投げ込むように、率直さを保てること。また、他者との間に心理的引力が働かない状態では、周囲の他者からの引力による介入から自由になることができ、割り切った行動を取れるため、自分のいったん決めた方向に向かってまっすぐ進むことができ、合理的な論理や計画が、曲げられることなく貫徹可能である。進む方向が、引力に影響されることがないため、自分で論理的な方針を組み立てることが可能であり、合理的な方向へと進んでいくことができる。 このように、人が周囲に対して明確な、あいまいでない、合理的・論理的な行動様式を取ることは、心理的引力から自由なドライさに基づく。

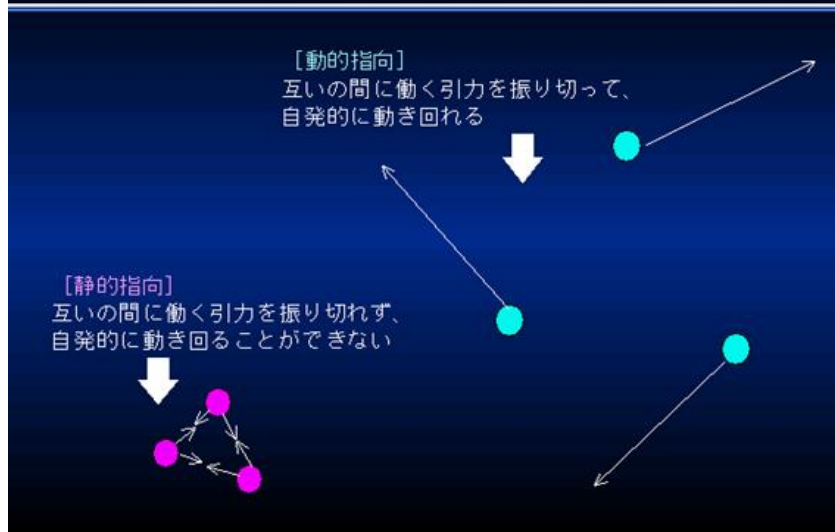
◎Ａ７．集団の開放性の確保（ドライ） - 不確保（ウェット） 集団の表面を閉じようとする力（表面張力）が働いているかどうかについての次元が存在する。集団内部に互いに引き付け合ってまとまろうとする力（集団凝集性）が強ければ、集団は外部に対して門戸を閉ざすこととなる。

○Ａ７．１　閉鎖指向（ウェット） - 開放指向（ドライ）

A7.1	ドライ = 開放指向	ウェット = 閉鎖指向
定義	開放的な集団にいるのを好むこと。	閉鎖的な集団にいるのを好むこと。
No.	[例↓]	[例↓]
1	開放的な人間関係を好むこと。	閉鎖的な人間関係を好むこと。
2	身内・外の区別にこだわらないこと。	人付き合いで身内・外の区別にこだわること。
3	集団外のことにも関心を持つ。	自分の属する集団内のことにしか関心がない。
4	仲間内以外の人も受け入れる。	付き合いで仲間内以外の人を排除すること。

[説明]
各個人が他者に近づこうとする心理的引力がある状態では、各人の間に、互いに距離を縮める方向へとスクラムを組み、自分の属する集団の表面積を互いに手を取り合ってできるだけ小さくしようする力が対人関係において働いており、他者は形成済の集団の表面から中に入ることができない。こうした力は、1)外部の者を中に入れよ

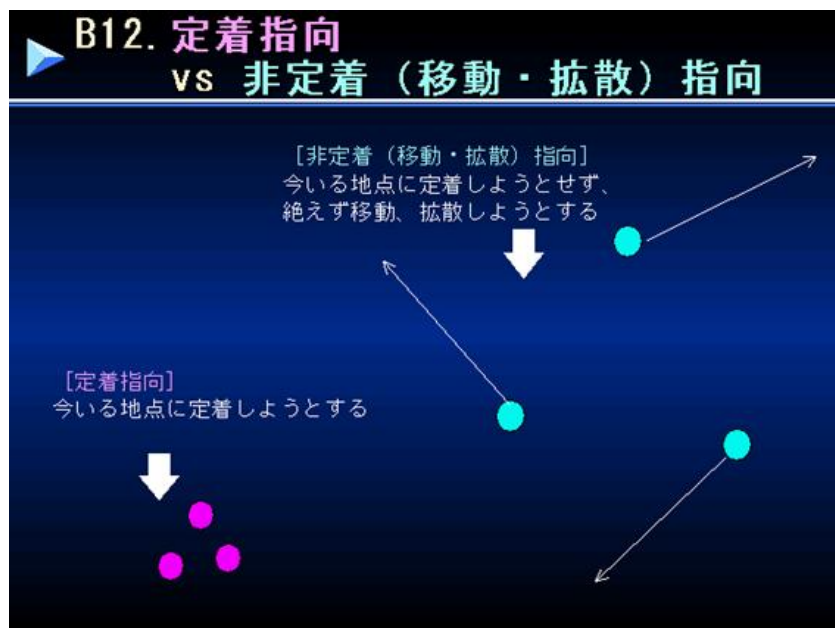
うとしない、2)集団内の仲間が表面から外に出ようとすると中に引きずり込もうとするものであり、物理的液体における「表面張力」に相当する。こうした状態では、人々は閉鎖的な対人関係を好み、自分が属する集団・仲間内の相手としか付き合おうとしないこと。（自分の属する集団内のことにしか関心がないこと。）こうした表面張力のような力が働いている閉鎖指向は、心理的引力に基づくウェットな行動様式であると言える。
他者に近づこうとする心理的引力がない状態では、集団の表面部分～内部の各人が互いに手を取り合って結託し、よそ者を入れようとしない表面張力のようなものは、対人関係において存在せず、形成済の集団の表面から中に入ることが容易に可能である（外部の者に対して中が開放されている。集団内の仲間が表面から外に出るのも自由である。）こと。開放的な対人関係を好み、自分が属する集団・仲間外の相手とも付き合おうとすること。（自分の属する集団外のことにも関心を持つこと。）こうした表面張力が存在しない開放指向は、心理的引力とは無縁のドライな行動様式であると言える。

●Ｂ．心理的運動・活動・移動・流動指向（ドライ）- 静止・非活動・定着・定住指向（ウェット）あちこち活発に動き回ろう、移動しようとする指向の強さに関すること。

◎Ｂ１．動的エネルギー・移動性の確保（ドライ） - 不確保（ウェット）心理的な運動エネルギーが大きいかどうかについての次元が存在する。自分から進んで積極的に動き回ろう、拡散しようとする心理的な運動エネルギーが大きいと、他者からの心理的な引っ張りや牽制から自由になれる。

○Ｂ１．１　静的指向（ウェット）- 動的指向（ドライ）

B1.1	ドライ＝動的指向	ウェット＝静的指向
定義	よく動き回ろうとすること。	動き回ろうとしないこと。
No.	[例↓]	[例↓]
1	動作がすばやい。	動作がゆっくりである。
2	物事の決定のテンポが速い。	テンポがゆっくりである。
3	行動が積極的である。	行動が消極的である。

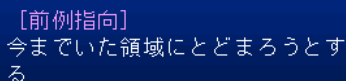
[説明]
もしも、各人の自分から進んで自発的に積極的に動き回ろうとする活動性（運動エネルギー）が、相対的に小さい（速度がゆっくりである。）と、当人はその場に静止してとどまることになり、人と人との間の心理的引力を振り切って動き回ることができにくい。運動エネルギーが小さくて、対人間に働く心理的引力に囚われがちな静的状態への指向（静的指向）は、ウェットな行動様式と言える。
一方、各人の、自分から進んで自発的に積極的に動き回ろうとする、活動性（運動エネルギー）が、気体分子同様、相対的に大きい（速い）と、当人はその場に静止することなく動き回ることになり、個人間の心理的引力を振り切るだけの運動エネルギーにあふれ

ている。このように、運動エネルギーが大きくて、対人間に働く心理的引力に囚われない動的状態への指向は、動的指向という言葉でまとめられ、ドライな行動様式と言える。

○Ｂ１．２　定着指向（ウェット）－非定着（移動・拡散）指向（ドライ）

B1.2	ドライ＝非定着（移動・拡散）指向	ウェット＝定着指向
定義	今いる土地や組織に定着せず絶えず移動しようとすること。	今いる土地や組織に定着しようとすること。
No.	[例↓]	[例↓]
1	絶えず移動すること。（遊牧）生活を好むこと。	一カ所に定住すること。（農耕）生活を好むこと。
2	人事が流動的なのを好む。	人事が停滞しているのを好む。
3	短期的契約関係を好むこと。	長期にわたる取引関係を作るのを好むこと。
4	常に新分野へと拡散し	いつまでも今までいた

ようとすること。	分野にとどまろうとする。

[説明]
自分から進んで動こうとする運動エネルギーに欠けていて、かつ、心理的引力の只中で、自分がある方向に移動しようとすると必ずそれに対する引き戻しの力がかかる状態では、個人は、いつまでも既存の、今まで、自分がその場所に存在したり、その中に所属していた、集団などの対人関係（組織）の中に、外に拡散することができずに、現状維持のままとどまり続けること。（定着、定住し続けること。）人間関係が固定的（人事が停滞的。）だったり、相手との取引関係が長期にわたるようになる。これは、定着指向という言葉でまとめられる。
自分から進んで動こうとする運動エネルギーに満ちていて、心理的引力が小さい状態では、個人は、自由に、今までいた場所や、所属していた集団を離れて、一カ所に定着することなく、新しい境地へと絶えず動き回ることが可能である。この状態では、人間関係は、流動的な（短期契約的で、すぐ切れやすい）ものとなり、短期間で次々所属する組織を変わることになること。これは非定着指向という言葉でまとめられる。

○Ｂ１．３　前例指向（ウェット）‐独創指向（ドライ）

B1.3	ドライ = 独創指向	ウェット = 前例指向
定義	誰も行ったことのない未知の領域に進もうとする。	自分が今までいた領域にとどまろうとする。
No.	[例↓]	[例↓]
1	行動の基準を新規の独創的なアイデアに求めること。	行動の基準を既存のしきたり・前例に求めること。
2	前人未踏のことにもあえて挑戦する。	前例があることだけをしようとする。
3	現状を変革するのを好むこと。	現状をそのまま追認するのを好むこと。

[説明]
今までいたところに、いつまでも、居続けようとすること。（一カ所に定住・定着すること。）そうした状況下では、個人は、新境地（新分野）への移動・拡散性が欠如していること。（冒険しようとしないこと。）そうした状況下では、行動の基準を、従来から存在するしきたりや前例に求めること。しきたりや前例は、定住先で生活するために従来必要であった知識の蓄積であり、その有効性に関してチェックを行わないこと。（それは、今までと同じ環境下に居

続けるのであれば不要であること。）そうして、それを、無批判にそのまま受け入れることになること。（現状の追認を好むこと。）新天地へ積極的に出ようとする姿勢が欠如しているため、自分のアイデンティティ確立を、既に定評のある、前例に当たる知識や方法との、暗記に よる一体化を行うことで果たす。しきたり・前例に関する知識の暗記量で人間の価値を推し量ろうとすること。（心の中での前例蓄積量や質によって人間の価値が決まること。）人間関係を、前例を沢山蓄積している先輩と、蓄積量が少ない後輩との差別によって把握する、年功序列が常識化する。年功序列で上位の人間が、下位の人間を、ただそれだけの理由で支配する、先輩後輩関係を重視しようとする。これは、前例指向という言葉でまとめられる。
今までいたところから絶えず動き回ろうとする状況下では、個人は、新境地（新分野）への移動・拡散性にあふれていること。（冒険したがる、前人未踏のことに挑戦したがること。）そうした状況下では、行動の基準を、従来にない新規の独創的なアイデアに求めること。しきたりや前例の暗記よりも、新たな知識の創造や、現状の変革を重んじる。こうした行動様式は、独創指向という言葉でまとめられる。

上記のうち、静的・定着・前例指向の行動様式は、ウェットな感覚を与える液体分子群（水など）において、コップなど、ふたのない容器に入れておいても、いつまでもその中にいて、外に拡散していくことがない（蒸発は、気体分子になることで初めて可能になる。）現象と、同様であると考えられ、ウェットな行動様式と言えること。
一方、動的・非定着・独創指向の行動様式は、ドライな感覚を与える気体分子群（空気など）において、いったん容器に閉じ込めておいた状態でふたを取ると、すぐに外に拡散してそこからいなくなってしまう現象と同様であると考えられ、ドライな行動様式と言えること。

上記の今回整理した内容から、性格、行動様式などにおけるドライ・ウェットさの概念が、集団主義・個人主義、自由主義・規制主義、プライバシー尊重の有無など、これまで個別にバラバラに議論されてきた、社会学、心理学や政治学上の様々な概念をまとめ、関連づける上位概念として、今後より有望視、重要視されるようになることが予想される。

例えば、行動様式や文化の分類について、上位概念としてのドライ・ウェットさを導入することで、従来は別々に捉えられてきた集団主義 - 個人主義、規制主義 - 自由主義の概念が互いに「集団主義と規制主義とは、どちらもウェットである」、「個人主義と自由主義とは、どちらもドライである」のようにリンク付けて捉えられるようになる。そして、このことから、例えば、「個人主義と自由主義とは (両方ともドライでありこと。) 互いに関連し合って同時に起こる、見られる」、「アメリカのような個人主義の国 (人) は、同時に自由主義の国 (人) である」ということが言えるようになる。
つまり、今回抽出した、集団主義 - 個人主義、規制主義 - 自由主義といった、様々なドライ・ウェットな性格・行動様式は、互いに独立・バラバラに発生するのではなく、ドライに属するもの同士 (個人主義、自由主義、プライバシー尊重・・・) 、ウェットに属するもの同士 (集団主義、規制主義、反プライバシー・・・) 、互いに関連し合って同時並行的に発生する、観察されるものであると言えること。

抽出した行動様式のドライ・ウェットさについての確認
上記の抽出した行動様式が本当にドライ・ウェットと感じられるかどうかについて、個別の行動様式項目毎に「この行動様式は、ウェット・ドライのどちらに感じられますか？」と尋ねるweb質問紙調査を1999年5～7月にかけて、1質問項目当たり約200名の回答者という規模で行い、当方の上記の考え方がほぼ正しいことを確認した。
web質問紙調査 (確認用) 手順、web質問紙調査 (確認用) 結果数値は、著者による湿度感覚と気体、液体に関する他著作を参照されたい。

まとめ
上記結果から、
(1)ドライな行動様式の人は、対人関係において、運動・活動性が高く、相手へと近接しようとする指向が弱い人である。
(2)ウェットな行動様式の人は、対人関係において、運動・活動性が低く、相手へと近接しようとする指向が強い人である とまとめられる。

分かりやすく言い換えれば、対人関係で、互いに他者とベタベタくっつき合って動かないのが好きな人がウェットで、他者とバラバラに離れて活発に動き回るのが好きな人がドライということになる。要約すれば、「相互離散・移動＝ドライ、相互近接・定着＝ウェット」ということになること。
人間が、対人関係の中で他者に与えるドライ・ウェットな感覚は、運動エネルギーの大小や、引力・粘着力（分子間力相当）の強弱という点で、それぞれ気体・液体分子や、乾いた・湿った物体一般が人間にもたらす感覚（ドライさ・ウェットさ）と、本質的に同じ起源を持つ、と考えられること。

ドライ・ウェット（湿度）知覚の法則

分析対象（群）の動きのパターンを、以下のパターンDと、パターンWとに区別すること。
Dは、ドライ＝Dry(乾いた。）、Wは、ウェット＝Wet(湿った。）の頭文字であること。
パターンD、パターンWの動きを、動画で示したものを巻末図表中に設けていること。
(動画は、元は、パターンWは液体分子運動、パターンDは気体分子運動のコンピュータシミュレーションから作成したものである。）

[法則]
人間は、。
(1)パターンDに出会う、当たる、触れると、ドライ(Dry、乾いたこと。）と感じること。
(2)パターンWに出会う、当たる、触れると、ウェット(Wet、湿ったこと。）と感じること。
パターンD、パターンWは、分子群、物体群の動き～人間関係に共通に当てはまる、普遍的なパターンである。
パターンD、パターンWの特徴を、言葉で表現すると、以下のようになること。

分析視点	パターンW	パターンD
１．	近接	離散
(1)近づきこと。	くっつくこと。近づくこと。	サラリと離れること。離反すること。
(2)つながり	連続すること。つなが	（関係を）切断するこ

	ること。癒着すること。	と。
(3)着床	付くこと。粘着すること。	はがれること。
(4)まとわりつきこと。	まとわりつくこと。なつくこと。	別れること。
(5)集合	集まること。密度が高い。	散ること。密度が低い。
(6)一つ	一体・融合化すること。一つになること。	バラバラであること。互いに独立していること。
(7)同じ	同じであること。	違うこと。別の途を歩むこと。
２．	低速	高速
(1)速度	ゆっくりであること。	速いこと。
例	液体分子運動。 つきたての餅。	気体分子運動。 シリカゲルの粒、ビー玉。

分析対象の（知覚されること。）湿度は、パターンDに近づくに従って低く（ドライに）なり、パターンWに近づくに従って高く（ウェットに）なること。
対象の動く速度は、パターンDに近づくほど高く、パターンWに近づくほど低い。 対象の動く方向は、パターンDに近づくほど互いに引力が働かず離れ離れになり、パターンWに近づくほど互いに引力が働くため、近づき、くっつく。
よって、分析対象の（知覚されること。）湿度は、 ・対象の動く速度が、高速で動くほど低く、低速で動くほど高くなる。 ・対象の動く方向が、離れるほど低く、近づく～くっつくほど高くなる。
人間の皮膚触覚、視聴覚での物体知覚において、 パターンD（互いにバラバラに離れて、くっつかず、個別に散らばり、高速で動くこと。）の分子群～物体群が肌に当たる（接触すること。）、見える、耳で存在を確かめられると、ドライに感じられること。 パターンW（互いにくっついて離れず、高密度、集団で分布し、低速で動くこと。）の分子群～物体群が肌に当たる（接触すること。）、見える、耳で存在を確かめられると、ウェットに感じられること。
人間が、人付き合いの中で、パターンDの人間関係（互いにバラバラに離散、自立して、別々に自由に高速で動き回ること。）に当たる（接触すること。）と、心の内部でドライに感じられること。パ

ターンWの人間関係（互いにくっつき一体化して離れない、一緒に低速で動くこと。）に当たる（接触すること。）と、心の内部でウェットに感じられること。
パターンDとパターンWは、それが、皮膚触覚、視覚、対人関係・心理的距離知覚といった異なるモードの知覚で生起した場合においても、神経系内の共通のパターン認識野（パターンDとパターンWを判別する分野）を活性化させ、湿度判定出力をもたらすと言えること。

自然環境のドライ・ウェットさと、社会のドライ・ウェットさとの関連

-農業（遊牧・農耕）の視点から-

1999.1-2005.8

ここでは、環境のドライ・ウェットさと、社会や対人関係におけるドライ・ウェットさとの関連を、主に、農業のあり方を軸に考察した結果についてまとめる。
なぜ、農業のあり方を考察の軸に選んだかの理由であるが、農業は、。
(1)その遂行において、直接自然環境と接する、その意味で、自然環境の影響が大きい産業である。これは、例えば、穀物や野菜、牧草の栽培において、気温の寒暖、降水量、風速などの影響をもろに受ける点に現れている。

(2)食糧の確保という、人間の生活を支える上で最も基本的と考えられる産業であること。人間社会の基盤・土台部分を形成し、社会風土の方向性を決定する上で影響力が大きい。これは、例えば、日本社会では、農業と直接関係のない分野（例えば厚生・労働）の官庁・会社組織などにおいても、農業村落の特質である「村社会的」という形容が広く使われる点に現れている。
自然環境のドライ・ウェットさがその社会にもたらす影響を考える上では、自然環境との関わりが大きく、かつ社会全体に対する影響

力が大きい産業である農業分野における社会関係のドライ・ウェットさについて、その社会を代表して考察すればよいのではないかと考えられる。

農業は、全世界的観点から見ると、遊牧（牧畜）と農耕に２分されること。
遊牧（牧畜）は、馬や牛、羊などの動物（家畜）と共に、動物の食物（牧草）や水などを求めてあちらこちらを移動し、その生産物（乳、肉、皮など）を得て生活すること。移動可能な動物と一緒に生活する分、その生活は動的、身軽である。自らが移動できなくなるような物資の蓄積を好まず、物資の流動（フロー）を指向すること。
農耕は、穀物（稲、麦など）、野菜、果物など、植物を栽培して、その生産物（実、種など）を得て生活すること。一つの場所に生えたまま移動することのできない植物と一緒に生活する分、その生活は静的、身重であり、一カ所に定着して動かず（不動）、物資、財産を蓄積（ストック）すること（物持ち）を指向すること。
遊牧（牧畜）は、砂漠、ステップ地帯のような、雨の比較的少ない、ドライな自然環境で行われる。　農耕は、モンスーン地帯のように、（植物が育つのに必要な。）雨が沢山降る、水の豊かなウェットな自然環境で行われる。

農業の分類	自然環境	生活をともにする 生物の種類	生活パターンと 地理の関係	物資の扱い	機動性
遊牧（牧畜）	乾燥（ドライ、気体）	動物	移動（動的）	流動（フロー重視）	大（身軽）
農耕	湿潤（ウェット、液体）	植物	不動・定着（静的）	蓄積（ストック重視）	小（身重）

1999.5～7にかけて行ったWWWを用いて行ったアンケート調査結果においては、態度のドライ・ウェットさについては、遊牧＝ドライ、農耕＝ウェットという回答結果が出た（回答者数約200名）こ

と。

番号	項目内容（仮説＝ドライ）	-ドライ-	どちらでもない。	-ドライ-	項目内容（仮説＝ウェット）	-Z得点-	有意
B10	遊牧生活を好むこと。	62.727	20.909	16.364	農耕生活を好むこと。	7.733	0.01

上記の表から、農耕社会における対人関係がウェットで、遊牧社会における対人関係がドライである、と言えることが分かった。
なぜ、農耕社会の対人関係がウェットとなり、遊牧社会における対人関係がドライと感じられるか？についての考えられる説明は以下の通りである。
〔集団主義・同調指向（農耕）-個人主義・非同調指向（遊牧）〕
農耕は、稲作における田植えや稲刈り作業のように、周囲の皆と同じ作業を団体・集団一斉に行う必要があり、周囲との集団としての一体性、同調性、協調性が求められる。したがってウェットであること。 遊牧は、各自が個々にバラバラな違う方向に馬や牛を連れて行って放牧を行う農業であり、単独・独自行動が多く、周囲との同調性は求められない。したがってドライであること。
〔定着・縁故指向（農耕）-非定着・非縁故指向（遊牧）〕 農耕は、一カ所に定住する定着指向の農業であり、固定した地縁関係が築かれやすく、したがってウェットである。 遊牧は、一カ所に定住せずあちこち動き回る非定着指向の農業であり、相互の関係は切れやすく、したがってドライである。
〔関係指向（農耕）-非関係指向（遊牧）〕 農耕は、定住した近所同士が毎日顔を突き合わせる関係にあり、対立しても顔を合わせるはめに陥る。そこで、同じ場所に住んでいる者同士、なるべく互いに仲良くしよう、対立しないようにしようとして、良好な人間関係（和合状態）の構築・維持に心を砕くこと。その点、ウェットであること。 遊牧は、今日互いに近い場所にいても、明日はバラバラに離れて別々の場所に行く。意見が対立し仲が悪くなっても、互いに別々の場所に移動して離れてしまえばそれで互いに顔を合わせることなく済んでしまう。したがって、良好な人間関係（和合状態）の維持にはさほど関心がなく、その点ドライである。
〔規制主義（農耕）-自由主義（遊牧）〕 農耕は、稲作における農業水利のように、携わる人間同士の相互監視・牽制が不可欠である

（例えば、稲作社会において、各人が用水を勝手に自分の田んぼにたくさん引かないように互いに見張ることなど。）こと。その意味で規制主義的であり、したがってウェットであること。 遊牧は、広大な草原を、他者に束縛されずに、自由に動き回る。その意味で自由主義的であり、したがってドライであること。
〔相互依存指向（農耕）- 自立指向（遊牧）〕農耕は、稲作における農業水利のように、携わる人間同士が互いに依存し合う。一方が沢山水を取ると、他方の取る水が少なくなる。あるいは、農耕においては、水路、道路の維持や収穫作業のように、独力では作業が不可能で、互いに助け合う形の集団作業が必要となる。その意味で、相互依存指向といえ、対人関係としてはウェットである。 遊牧は、携わる人間同士が、互いに一人で自立して動かなければならない。彼らは、広い草原をただ独りで馬に乗って走り回り、放牧作業を自力でこなすことが求められる。その意味で自立指向といえ、対人関係としてはドライである。
〔密集指向（農耕）- 広域分散指向（遊牧）〕農耕は、集約的農業であり、少ない面積の土地に集中的に人的・物的資源を投入する。それに携わる人間が住む地域は、人口密度が高い。したがって、密集（過密）指向といえ、対人関係としてはウェットである。 遊牧は、粗放的農業であり、広い面積の土地に、分布する人はわずかである。それに携わる人間が住む地域は、人口密度が低い。したがって、広域分散指向といえ、対人関係としてはドライである。
以上の説明は、以下の表のようにまとめられる。

農業方式	自然環境	対人関係
農耕	ウェット、液体（モンスーン）	ウェット、液体的（定着・縁故、関係、集団・同調、規制、相互依存、密集）
遊牧	ドライ、気体（砂漠、草原）	ドライ、気体的（非定着・非縁故、非関係、個人・非同調、自由、自立、広域分散）

したがって、自然環境のドライ・ウェットさと、対人関係のドライ・ウェットさは、正の相関関係にある、と言えそうである。
要するに、乾いた砂漠、草原の民（ユダヤ、アラブといった遊牧の民）はドライであり、植物の豊かに生える肥沃なオアシスの農耕の民、緑の民（東アジア、東南アジアの稲作農耕民など）はウェットである、ということになる。砂漠ほどは乾いていないが、農耕に全面的に頼れるほど植物が生育しない土地に住んでいて、家畜に頼りながら半分定住、半分移動の生活をしている牧畜・酪農の民（西欧

など）は、両者の中間ということになるのかも知れない。
以上の図式からは、日本は、典型的な稲作農耕民族であり、ウェットな類型に入る。一方、欧米は、遊牧系に近い牧畜の民であり、比較的ドライな類型に入る。
この点、世界の各民族の民族性がドライか、ウェットかを判断する上で、その民族が農耕民か、遊牧・牧畜民かをまず知ることが有効であると言える。
本当に以上のように言えるかどうか、を確認するには、世界各地（乾燥・湿潤両方）の社会を回って、対人関係が乾燥地帯でドライ、湿潤地帯でウェットであることを、フィールドワークで確認する必要があることは、言うまでもない。

男性・女性、どちらの性格がよりウェット（ドライ）か？

以下では、男女の間の対人行動面における性差を、ウェット対ドライの次元から説明する。

１．
対人感覚の「ウェットさ」に関しては、従来から、「女性的」なものと、関連があるとされてきた。例えば、〔芳賀綏1979〕においては、日本人の特徴として、「おだやかで、きめ細かく、『ウェット』で、『女性的』で、内気な」（強調筆者）といったものをあげており、上記の表現では、ウェットさと女性性との間に関係があるように示されている。しかし、芳賀は、ウェットさと女性性との間の相関について、実証データをもとに割り出したという訳ではなく、あくまでも漠然とした印象の形でしか、捉えていない。
そこで、「女性的」=「ウェット」（「男性的」=「ドライ」）という図式が実際に成り立つかどうかを確かめるために、当調査において抽出した対人関係パターンを、男女の行動面での性差に関する、主要な学説と照合し、表にまとめた（学説抽出に当たっては、

〔間宮1979〕〔Mitchell 1981〕〔皆本1986〕などを主に参考にした。）こと。

〔男女の行動面での性差と、対人感覚のドライ・ウェットさとの関連：まとめの表〕

表中、文字列の赤色は、ウェットさ、青色は、ドライさを表しています。 全て、女性→ウェット、男性→ドライ、という結びつきとなっています。（逆のパターンは、見つかりませんでした。）

なお、表中の「→B20 互いに集まる.....」といった表記は、表中の記述内容に対応する、ドライ・ウェットな性格・態度とは何かに関するアンケート回答項目を示しています。

〔１〕個人主義 - 集団主義	出典
男性は特定の理由で集まるが、女性は単に集まるために集まる→B20 互いに集まること自体を好む/何か目的がないと集まらない。	Mitchell 1981
女子社員の多い職場では、必ずといってよいほど、いくつかのグループができる。女性は、とくに、集団を好み、楽しむようだ。	影山1968
女性は、心身ごと人や事と融合して一体化する傾向があり、愛情や感情移入を示しやすい→A14 他者との一体化・融合を好む。	間宮1979
女性は、全体の中に自分を調和させる(埋没させる)行為に快感を味わう→A14 他者との一体化・融合を好む。	皆本1986
男性的な権力の使い方は、個人を重視し、個人の功績を賞賛し、個人を集団から分離するのに対して、女性的な権力の使い方は、集団の幸福と他人との関係を促進する。	Bakan 1966

〔２〕自立指向 - 相互依存指向

〔３〕広域分散指向 - 密集指向

女子は、細部に着目するような認知の速さや、手先の器用さに優れるのに対して、男子は、細部よりも、全体に着目して物事を考える。 間宮1979

男性は、他人との距離を、女性の場合より大きく取りたがるのに対して、女性は、人の物理的接近に対して、男性より寛容(肯定的)である。 Mitchell1981

男性は密集した状態を女性よりも不快に感じる→A3 広い空間に分散。 Deaux 1976

女性は、（男性のような）個人と個人との二元的対置が困難である。 間宮1979

女性は、ものごとを客観的に見ないで、問題を人間対人間の感情の問題に置き換える。 影山1968

女性は、中心へ密集する傾向を持ち、男性は周辺へ分散する傾向を持つ→A3 狭い空間に密集/広い空間に分散、F24 中央集権/地方分権。 Mitchell 1981

男性は孤独に耐え、転任による独居も、女性ほどには痛痒を感じない。 間宮1979

〔４〕多様性の尊重 - 画一指向

男児の方が、自由が多く、行動が型にはまることが少ない、予測しがたい。 Mitchell 1981

女子は、男子に比べて、カテゴリーの規準から逸脱する幅が少ないし、カテゴリーが狭い→B17 画一的な枠にはめようとする。 Wallach1959

〔５〕非人間指向 - 人間指向

男性は、原料、物体、機械的問題、あるいは抽象的概念のようなことを取り扱う職業の追求に心を奪われる...(のに対して。) 女性の世界は、..はるかにもっぱら人々の世界であり、他者の願望や期待に非常に敏感である。女性は、他者を判断する際、男性よりも、感知力がある。 Newcomb1965

男子は、物事を直接的に研究し、操作するのに対して、女子では事物よりも人間の声や顔など対人関係に引かれ..対人的交流に適合した言語機能がよく発達する→E27 人間関係そのものを重視。 間宮1979

男子の描くモチーフは車・飛行機など..無機物であるのに対して、女子の描く主役は有機物である。...女性画には擬人化が多い。 皆本1986

〔６〕非縁故指向 - 縁故指向

〔７〕自由主義 - 規制主義

上司が、女性に注意する時は、一方的にあなたが間違っていますというよりは、自分にも責任があるような言い方をすれば非常に効果が上がる。 影山1968

〔８〕自律指向 - 他律指向

女性は、自我が自律的でなく、他人との関係によって維持される。 Mitchell 1981

女性は、自主的な判断や自信をもって決断することを躊躇する→C38 取る行動に自主性がある/ 間宮1979

ない。
女性は、他者の期待や願望に非常に敏感である→A23 周囲の意見に左右されやすい。 Newcomb1965
男子は、学習活動に対する自我関与の程度が高いのに対して、女子は、課題の成否よりも、成績に対する (親や教師など周囲の他者の) 要求水準や、(周囲との)対人比較に裏付けられた意欲が高い→A23 周囲の意見に左右されやすい。 間宮1979

〔 9 〕反同調指向 - 同調指向
女性は、まわりへの気兼ねから、本心とは違った意思表示をしたり、しばしば本心とは逆の行動様式を取る→B9 行動を周囲の人々に合わせようとする。 影山1968
女子は、仲間との適合性が高く、周囲との判断の不調和にもそれに同調して自己の判断を変えるか、不調和に耐えて友人関係を維持するの対して、男子は、自己の判断に固執し、仲のよい友人でも同調できにくいし、不調和のままに耐えることも不得手である。 間宮1979
男性は、自己表現を尊ぶが、他者との協調的表現に関心が乏しいのに対して、女性は、自己主張より、他者との調和、他者への奉仕に大きな価値を感じる。 皆本1986
女性は男性に比べて同調性が高く、同情的であるし、影響力の強い人間に同一化しやすい→C34 周囲に同調したがる。 Schwarz1949
使う言語の文法的な特徴が標準からはずれていることについて..女は男よりはるかに気にしやすい。 Trudgill 1974

〔１０〕反権威主義 - 権威主義
女子の方が、自己防衛のためにお 間宮1979
となの権威を援用しようとする。
女の方が男よりも標準変種や威信 Trudgill 1974
を持つと見なされている訛りに近
い形の言葉を使う…権威ある特徴
の発音を使う率が、社会階級を考
慮に入れても、女は男よりはるか
に高い….女は男より「良い」(正
しい)形の発音を使う率が高い。

〔１１〕プライバシー尊重 - 反プ
ライバシー

〔１２〕反あいまい指向 - あいま
い指向
女性は、男性に比べ、退嬰的で、 間宮1979
明確な態度を表明しない →A9 物
の言い方が率直/遠回し。
女子は、万遍なく全教科を習得し 間宮1979
ようとする。(筆者注：教科に対
する指向が不明確である。)それ
に対して、男子は、得意な教科に
エネルギーを集中し、不得意・退
屈な教科には力を抜く。(
男性は原色を使い、中間色を避け 皆本1986
るが、女性は多く使う→A22 物事
の白黒をはっきりさせる/あいま
いにとどめようとする。
男性画は、特定の色やモチーフに 皆本1986
関心を集中し、他を切り捨てる。
(筆者注：色に対する指向が明確
である。)それに対して、女性の
色使いは、特定色に偏るのを避け
て、どの色も均等に使う。この色

を使ったから、あの色も使わね
ば、と考える。（

〔１３〕合理指向 - 非合理指向

〔１４〕動的指向 - 静的指向
女性は、男性のような強い自己主 皆本1986
張を好まない→C14 自己主張。

〔１５〕非定着指向 - 定着指向
女児画の中心は、男児画より低め 皆本1986
に位置することが多く、どっしり
とした安定感がある。女の子は、
高いものへの興味が希薄である。
乗り物類を描く女子は、男子に比 皆本1986
べ非常に少ない→A11 一カ所に定
着して動かない。

〔１６〕独創指向 - 前例指向
新しい道具に出会った時、男子は 皆本1986
好奇心で目が輝きうれしい様子を
示すのに対して、女子は恐怖心を
示して尻込みする。
女子の方が多くの種類の事象に恐 Goldstein 1959
怖反応を示す→D37 冒険しようと
しない。
女子は失敗に当面すると、解決の Hermatz 1962
仕方がでたらめになり、課題場面
から逃避する傾向が、男子より目
立つ。
女子は以前成功した課題に戻る頻 Crandall 1960
度が男子より多く、男子は以前失
敗した課題に戻る頻度が女子より
多い→D37 冒険しようとしない。
男子は、攻撃性を、反社会的・破 間宮1979

壊的な行動の形で表現するのに対して、女子は、合社会的(規則を楯にする)・非破壊的(口先・態度のみ)な行動の形で表現する。女性は、反社会的行動が、男性に比べて少ない。
男性は現状を変えることを望んでいるのに対し、女性は男性が変えた現状に依存するが、自ら現状を変えることには消極的である。 皆本1986
女子の方が環境に適応し、規則を遵守する→F30 現状を変革/追認。 間宮1979

〔１７〕開放指向 - 閉鎖指向
女子の方が、排他的閉鎖的派閥を作りやすい。 間宮1979

〔参考にした文献〕
（注）？？？？マークの付いた文献は、文献抽出で用いた〔間宮1979〕で、データが省略されているため、詳細データが分からなかったものである。
Bakan, D. The duality of human existence. Chicago: Rand-McNally. 1966.
Crandall, V. J., & Robson, S. (1960). Children's repetition choices in an intellectual achievement situation following success and failure. Journal of Genetic Psychology, 1960, 97, 161-168.(間宮1979 p178参照)
Deaux,K.: The Behavior of Women and Men , Monterey, California: Brooks/Cole, 1976
Goldstein, MJ (1959). The relationship between coping and avoiding behavior and response to fear-arousing propaganda. Journal of Abnormal and Social Psychology, 1959, 58, 247-252.(対処的・回避的行動と恐怖を誘発する宣伝に対する反応との関係)
Hermatz,M.C. : ？？？？（間宮1979 p178参照) , 1962 影山裕子 :

女性の能力開発, 日本経営出版会 , 1968 間宮武 : 性差心理学 , 金子書房 , 1979 皆本二三江 : 絵が語る男女の性差 , 東京書籍 , 1986。
Mitchell,G. : Human Sex Differences - A Primatologist's Perspective , Van Nostrand Reinhold Company, 1981 (鎮目恭夫訳 : 男と女の性差 サルと人間の比較 , 紀伊国屋書店 , 1983)
Newcomb,T.M.,Turner,R.H.,Converse,P.E. : Social Psycholgy:The Study of Human Interaction, New York: Holt,Rinehart and Winston, 1965 (古畑和孝訳 : 社会心理学 人間の相互作用の研究 ,岩波書店 ,1973)
Schwarz, O, 1949 The psychology of sex / by Oswald Schwarz Penguin, Harmondsworth, Middlesex.
Trudgill,P.:Sociolinguistics: An Introduction, Penguin Books, 1974(土田滋訳 : 言語と社会, 岩波書店, 1975)
Wallach M. A., & Caron A. J. (1959). "Attribute criteriality and sex-linked conservatism as determinants of psychological similarity. Journal of Abnormal and Social Psychology, 59, 43-50(心理的類似性の決定因としての帰属的規準性と性別関連の保守性)
Wright,F.: The effects of style and sex of consultants and sex of members in self-study groups , Small Group Behavior, 1976, 7 , p433-456
その結果、以上の表が示すように、従来の学説で取り上げられてきた対人関係と性差との関連は、ほとんど、。
(1)女性的 = 「 ウェット (互いに引き付け合い、牽制・束縛しあう力である、相互間引力が大きい。)
(2)男性的 = 「 ドライ (分子間力相当の相互間引力が小さい。)
を示していることが、判明した。
(1)女性の行動様式は、 (分子間力の大きい) 液体分子運動パターンに似ていること。
(2)男性の行動様式は、 (分子間力の小さい) 気体分子運動パターンに似ていること。
ということになること。
確認のため、どちらがドライないしウェットか、1999.5 ~ 7の、性格・態度のドライ・ウェットさを尋ねるアンケート調査の中で回答してもらったところ、以下のように、「 男性的 = ドライ 」を選んだ人の割合が、「 女性的 = ドライ 」を選んだ人の割合より、有意に多かった。

番号	項目内容（ 仮説 = ドライ ）	-ドライ-	どちらで もない。	-ドライ-	項目内容（ 仮説 = ウェッ	- Z 得点-	有意

C12	男性的であること。	46.154	24.434	29.412	ト）考え方が女性的である。	2.863	0.01

こうした両者のウェット/ドライの違いが出る原因としては、女性と男性との、生物学的貴重性の違いが関係していると推定される。生物学的により貴重な女性は、自分自身の保身のために、よりウェットな行動を取ると考えられる。 ウェットな行動を取ることが、なぜ生物学的に貴重な存在の、自己保身のために有効か、についての詳細な理由については、以下の表を参照されたい。

［行動のウェットさと生物学的貴重性（まとめの表）］

	ウェット	生物学的貴重性との関連
1	集団主義	一人でいるより、みんなと一緒に集まっていた方が、危険が迫ったときに、一人ではできないことを力を合わせて行うことができて、安心である。
2	相互依存指向	互いに頼りあったほうが、危険に合ったとき、互いの力を借りることができて、対処しやすい。
3	密集指向	分散しているよりも、一つのところに皆で集まっていた方が、皆一緒という感じが持てて、安心感がある。
4	画一指向	皆と同じ行動をすることで、周囲の中で一人だけ浮いてしまうことがなくなるようにして、周囲と同類となることで、周囲からの援助が受けやすくなるようになる。 周囲の皆が取る行動を、皆が

		やっているから、多分正しいのだろう、きっと安全なのだろうと、模倣学習の対象に加え、追随することができる。行動の手本を、労せずして手に入れられること。
5	人間指向	-
6	縁故指向	人間関係を、予め安心だと分かっているもののみに絞ることで、自分の保身のために、より効果的に活用することができる。
7	規制主義	-
8	他律指向	自分の行動を周囲まかせにすることで、自分からは、行動が失敗したときの責任を、積極的に負わなくて済むようにする。
9	同調指向	周囲の皆（大勢）がすることに合わせる方が、数の論理を頼みにすることができ、より安全なのだと感じて、安心できる。互いに周囲の皆と行動を合わせる方が、大勢の中の一員として振る舞うことができて、自我が拡大して、気分が大きくなり、危険に立ち向かう

		だけの勇気が得られるように感じる。
10	権威主義	周囲の皆が従うところの、安全性を権威ある者によって保証された行動様式に、自らも従うことで、自らの保身を確かなものにしようとする。
11	反プライバシー	-
12	あいまい指向	自分の言っていたことを不明瞭にして、いろいろな向きに取ることができるようにしておくことで、失敗して責任追求があったときに、「自分は本当はそうは言っていなかったのだ」として、逃げ易くする。
13	非合理指向	-
14	静的指向	（安全が分かっているところで。）あまり動かずじっとしていた方が、動き回って危険な領域に入る心配がなく、保身に有利である。
15	定着指向	既に安全だと分かっている場所にずっといつづけることで、新たな場所への移動に伴う新たな危険の発生を防ぐこと。

16	前例指向	既に安全が保証されたことだけを選んで行うようにして、未知のことを行うことによって起きる予測不能な危険を、避ける。
17	閉鎖指向	安全がすでに保証された仲間とだけ一緒にいることで、危険・有害かも知れない外部からのよそものの侵入を防ぐ。

２．
上記の、男性・女性の性差と、ドライ・ウェットさとの関連、すなわち、「女性的」=「ウェット」、「男性的」=「ドライ」が、果たして、実際に人々にその通りと感じられているかどうかを検証するためのアンケート調査を行った。
[調査方法]「2つ対にして並べた文章で示された態度のうち、どちらが、より「女々しい」ですか？」と質問する、アンケートページを、インターネットのWebページ検索エンジンに登録し、回答者を募った。
アンケートの項目は、1999.5～7に調査して、有意にドライ（ウェット）と感じられたアンケート項目全体から、（原則としてZ得点5.00以上を得た)40程度の項目を、分類毎にまんべんなく抜き出したものを採用したこと。
回答期間は、2000.4.中旬であった。
[結果]
回答者総数は約200名であった。男女比はほぼ40:60で若干女性の方が多かった。年令は、10～20代だけで、全体のほぼ90%を占め、圧倒的に若いといえる。
結果としては、。
ドライ・ウェットさを示す各態度項目について、各々「より女々しい」「より女々しくない」という判定を下した被験者の割合が、・

「ウェット」な方を、有意な差（水準1%）で「女々しい」とした項目→65.8%(27/41)・「ドライ」な方を、有意な差（水準1%）で「女々しい」とした項目→2%(1/41)
・有意な差（水準1%）がない項目→31.7%(13/41)。
となり、「ウェット」な方を、有意な差（水準1%）で「女々しい」とした項目が、全体の65%を占め、より多かった。逆の項目は、ほとんどなかった。
結論としては、「女々しさ（女らしさ）」と「ウェット・ドライさ」との関連については、回答結果を見る限りでは、現代の若い日本人男女の間では、「女々しさ（女らしさ）」=「ウェット」と捉えられている、と言えること。
こうした結果は、１.における、「女性的」=「ウェット」とする文献調査の結果と合致している。

日本人は、ドライかウェットか？。

以下では、日本人の対人関係における特徴（国民性）を、ウェット対ドライの次元から説明すること。

１．
対人感覚のドライ・ウェットさのうち、特にウェットさに関しては、従来から、日本人の性格・態度の特徴を表す、とされてきた。例えば、〔芳賀綏1979〕においては、日本人像のアウトラインとして、「おだやかで、きめ細かく、『ウェットで』（強調筆者）、女性的で、内気な」といったように、その中にウェットさを含めて考えていること。あるいは、〔吉井博明1997〕においては、日本人のコミュニケーションのあり方の特質について、直接対面によるコミュニケーションの重視の現れを示すものとして、「ウェット」という言葉を用いている。
そこで、こうした見方が果たして正しいかどうか、当調査において抽出した対人関係パターンを、従来提唱されてきた、日本人の伝統的な国民性を現すとされる、主要な学説と照合した（学説抽出に当

たっては、〔南1994〕〔青木1990〕などを参考にした。）こと。
その結果、以下の表が示すように、従来の学説で取り上げられてきた日本人の対人関係における特徴は、ほとんど「ウェットさ」を示している。したがって、日本人の 伝統的な対人関係は、基本的にはウェットである、と捉えることができそうことが分かった。言い換えれば、「日本人の伝統的な行動様式は、（分子間力の大きい）液体分子運動パターンに似ている」ということになること。
また、以下の、日本人の国民性として列挙した文献データベース表は、内容的に十分網羅的である(日本人の対人関係上の特徴の大半をカヴァーしていること。)ことが考えられ、したがって、従来の日本人の国民性とされているものの大半を、「ウェット」というひとことで要約することができることになる。
〔伝統的な日本人論とウェットさとの関連：まとめの表〕
各論が発表された年代順にまとめてあります。　項目の赤色は、ウェットさを表しています。

番号	項目	研究者名	要旨	抽出した次元(ウェット)	対応する欧米文化	抽出した次元・欧米（ドライ）
(1)	恥の文化	R.Benedic (1946)	自己の行動に対する世評に気を配ること。他人の判断を基準にして自己の行動の指針を定めること。	反プライバシー、他律指向(他者の目を気にすること。)	自分の行動の指針を定めるのに、自分自身の判断を基準にすること。(罪の文化)	プライバシー、自律指向
(2)	家族的構成	川島武宣(1948)	権威による支配。個人的行動の欠如。自主的な批判・反省を許さない社会規	権威主義、集団主義、規制主義、同調指向、縁故指向、閉鎖指向	権威への反逆。個人的行動の重視。自主的批判、反省の許可。家族的一体感の欠	反権威主義、個人主義、自由主義、反同調指向、非縁故指向、開放指向

			範。親分子分的結合の家族的雰囲気と、対外的な敵対意識。		如と、対外的な開放意識。	
(3)	終身雇用、年功序列 (日本的経営)	J.C.Abegglen (1958)	会社と従業員との間に終身的な関係がある。	定着指向（組織内定住）、前例指向	会社と従業員の関係が、契約的、一時的である。	移動指向、独創指向
(4)	タテ社会	中根千枝 (1967)	「場」と「集団の一体感」によって生れた日本の社会集団は、その組織の性格を、親子関係に擬せられる「タテ」性に求める。	閉鎖指向、縁故指向、集団主義、非合理指向	組織が水平方向、フラットである。	開放指向、非縁故指向、個人主義、合理指向
(5)	静的育児	Caudill,W., Weinstein, H.(1969)	日本の母親は、子供と身体的接触を多くし、子供があまり身体を動かさず、環境に対して受動的であるよう	静的指向、相互依存指向、密集指向	母親は、子供と身体的接触を少なくし、子供が身体を動かし、環境に対して能動的であるように、子供を動	動的指向、自立指向、広域分散指向

			に、子供を静かにさせる。		的にさせる。（動的育児）こと。	
(6)	中央集権	辻清明 (1969)	中央集権的官僚制の強い拘束の前に、近代的な地方自治が完全に窒息せしめられていた歴史を持つ。	密集指向（中央への権限の一極集中）	地方分権的であること。権限が地方に移譲されていること。（地方分権。）	広域分散指向（権限の地方分散）
(7)	同調競争	石田雄 (1970)	所属集団に支配的な価値指向と行動様式に従うこと。他人と同じ行動を取ること。	同調主義（大勢順応）、画一主義（横並び）	他人とは別行動を取ること。（非同調。）	非同調指向、多様性の尊重
(8)	甘え	土居健郎 (1971)	日本人は、成人した後も、「母子」間での気持ちの上での緊密な結びつきと同じような情緒的安定を求め続けて行く。	相互依存指向、集団主義（一体感）	母子間の結びつきが薄い。母親に対して情緒的安定を求めないこと。（甘えの欠如。）	自立指向、個人主義

(9)	間人主義	木村敏(1972)・濱口恵俊(1977)	対人面での相互依存、相互信頼、対人関係の本質視、という特徴を持つこと。	人間指向（人間関係そのものを重視）	対人面で、相互自立を重んじ、対人関係を単なる手段として見ること。（個人主義。）	非人間指向（物質指向）
(10)	他律的	荒木博之(1973)	ムラ的構造の中にあって、個人がその個性を喪失し、集団の意志によってその行動が決定されて行く。	他律指向	個人が個性を維持し、集団の中においても、個人の意志によって行動を決定すること。（自律的。）	自律指向
(11)	集団主義	間宏(1973)	個人と集団の関係で、集団の利害を個人のそれに優先させること。個人と集団が対立する関係ではなくて、一体の関係になるのが望ましい。	集団主義	個人の利害を、集団のそれに優先させること。（個人主義。）	個人主義
(12)	母性原理	河合隼雄	「包含す	人間指向	母子の一	非人間指

		(1976)	る」機能で示され、すべてのものを絶対的な平等性をもって包み込む、母子一体という原理を基礎に持つこと。	（ふれあいこと。）、集団主義（一体感）	体感が薄い。開放的な父性原理で動くこと。（父性原理。）	向、個人主義
(13)	大部屋オフィス	林周二(1984)	日本のオフィス空間では、大部屋に多数の社員が机を向かい合わせに並べてがやがやと働いているのに比べて、欧米では社員は個室で働いている。	密集指向、反プライバシー（相互監視）	社員が大部屋ではなく、個室で働くこと。（個室オフィス。）	広域分散指向、プライバシー尊重
(14)	権威主義、独創性の欠如	西澤潤一(1986)	欧米の権威者の説をあたかも自分の体験のように思い込み、批判したりすると過剰に反応	権威主義（欧米学説に追随したがること。）、前例指向（自分からは未知の領域に	既存の権威秩序に反抗し、破壊し、新たな独創的知見を生み出そうとすること。危ない橋	反権威主義、独創指向

			すること。欧米の独創技術を自らは危ない橋を渡らずに拾い上げて集中的に実用化する。	は進もうとしない。）	を進んで渡ること。	
(15)	相互協調的自己	Markus,H.R.& 北山忍 (1991)	自己を相互に協調し、依存した存在とすること。	相互依存指向、人間指向	自己を相互に独立し、自立した存在とすること。（相互独立的自己。）	自立指向、非人間指向
(16)	直接対面	吉井博明 (1997)	対面コミュニケーションに過重に依存する文化を持ち、集中が集中を呼ぶ体質を内在させている。	密集指向（物理的に至近距離）、人間指向（親密さ）、反プライバシー（視線）	対面コミュニケーションを偏重しないこと。	広域分散指向、非人間指向
（その他）						
	根回し		交渉などをうまく成立させるために、関係	縁故指向、規制主義	交渉時、予め関係方面に話をせず、直接交渉	非縁故指向、自由主義

	方面に予め話し合いをしておくこと。		を行うこと。	
談合	互いに相手の動きを、相手が自由な行動（安い入札価格の提示競争）を取らないように、牽制し合って、相互の取る動き（入札価格）を事前の話し合いで決めてしまうこと。	規制主義（自由競争を抑制）、同調指向（相談仲間を作ること。）	互いに事前の話し合いをせずに、自分の取る行動を自由に決めること。	自由主義、非同調指向
政府による規制	政府が、行政指導などで、業界の動きを牽制・拘束する。	規制主義	政府が、業界の動きをあまり牽制、拘束しない。	自由主義
ＮＯと言えないこと。	互いに相手に配慮して、相手の言うことを拒絶することができない。	人間指向（気に入られようとすること。）、集団主義（相互批判を許容	相手の言うことを、きっぱり拒絶すること。	非人間指向、個人主義

しないこ
と。）

〔日本人の伝統的国民性:文献調査結果の詳細〕
以下は、日本人の伝統的な国民性が、ウェットであることを示している、既存の日本人の国民性に関する文献の、大まかな一覧です。文献の順序は、発表が古い順に並べてあります。 記述は、(1)文献の著者名、題名などの書誌データ、(2)ウェットさに関連する部分の要約、(3)筆者によるアンケート調査項目との関連の仕方についての情報、から成っています。

1.〔恥の文化〕
(書誌)Benedict,R. The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture, Boston Houghton Mifflin, 1948 長谷川松治訳「菊と刀 - 日本文化の型」社会思想社1948
(要旨) 日本文化は、恥の文化に属する。

(アンケート項目との関連)↓
反プライバシー
B24 自分が他人にどう見られるかを気にする。
他律指向

人間指向
E18 周囲の他者に気に入られようとすること。
E22 周囲の他者によい印象を与えようといつも気にすること。

2.〔家族的〕
(書誌) 川島武宣 日本社会の家族的構成 1948 日本評論社
(要旨) 日本の社会は、家族および家族的結合から成り立っており、そこで支配する家族原理は民主主義の原理とは対立的のものである。
1 「権威」による支配と、権威への無条件的服従 → 権威主義
2 個人的行動の欠如とそれに由来するところの個人的責任感の欠如 → 集団主義、規制主義
3 一切の自主的な批判・反省を許さぬという社会規範。
4 親分子分的結合の家族的雰囲気と、その外に対する敵対的意識との対立。「セクショナリズム」こと。 → 縁故指向、同調指向、閉

鎖指向 であること。
(アンケート項目との関連)↓
権威主義

E15 人付き合いで相手の身分・格式を重んじること。
集団主義
A1 集団・団体で行動するのを好むこと。
D29 ひとりで他者とは別の道を歩むのを好まない。
B22 集団内での相互批判を好まないこと。
規制主義
B15 一人の犯した失敗でも周囲の仲間との連帯責任とする。
縁故指向
C24 人付き合いの雰囲気が家族的である。
B14 人付き合いで親分子分関係を好むこと。
同調指向
E36 意見の同じ者だけでまとまろうとすること。
閉鎖指向
B21 人付き合いで身内・外の区別にこだわること。
D33 自分が属する集団内の人々としか付き合おうとしない。

3.〔 終身雇用、年功序列 〕
(書誌)Abegglen, J.C.,The Japanese Factory:Aspects of Its Social Organization, Free Press 1958 占部都美 監訳 「 日本の経営 」 ダイヤモンド社 1960
(要旨) 日本とアメリカの工場組織を比較したときに直ちに気づく決定的な相違点は、日本における会社と従業員との間の終身的関係である (終身雇用) こと。
従業員の給与は主として入社時の教育程度と勤続年数・家族数によって決まり、仕事の種類と仕事をした結果に基づく部分はほんの少しである (年功序列 (賃金))。→前例指向
(アンケート項目との関連)↓ 定着指向
D15 一つの組織 (職場など) に長期間所属しつづけるのを好むこと。 (組織内定住。) 前例指向
E12 年功序列を重んじること。

4.〔 タテ社会 〕

(書誌) 中根千枝 タテ社会の人間関係 講談社 1967
(要旨) 日本では、個人が社会に向かって自分を位置づけるとき、自分のもつ資格よりも「場」を重視する。自分の属する職場、会社、官庁、学校などを「ウチの」と呼び、一定の契約 (雇用上の) 関係を結んでいる企業体であるという、自分にとっての客体としての認識ではなく、「私の、またわれわれ の会社」が主体として認識されている。
「イエ」は、「居住」(共同生活) あるいは「経営体」という枠の設定によって構成される社会集団の一つであり、そこでは「場」が重要性を持つ。「場」という枠による機能集団の構成原理こそ、「イエ」において、全く血のつながりのない他人を後継者・相続者として位置づけて疑問が生じない根拠である。
資格が異なるものが成員として含まれる日本の社会集団においては、集団のまとまりを強める働きをするのが、一つの枠内の成員に一体感をもたせる働きかけと、集団内の個々人を結ぶ内部組織を生成させて、それを強化させることである。それが、「われわれ」という集団意識の強調であり、「ウチ」と「ソト」を区別する意識とそれに伴う情緒的な結束感が生れる。
「場」と「集団の一体感」によって生れた日本の社会集団は、その組織の性格を、親子関係に擬せられる「タテ」性に求める。
集団原理を支配する強い情緒的一体感が見いだされる → 集団主義。
「タテ社会」性が、日本人の「批判精神の欠如」、「論理性の欠如」を生じさせている→ 集団主義、非合理指向。
(アンケート項目との関連)↓
集団主義
A14 他者との一体化・融合を好むこと。
B22 集団内での相互批判を好まないこと。
閉鎖指向
B21 人付き合いで身内・外の区別にこだわること。
縁故指向
B14 人付き合いで親分子分関係を好むこと。
非合理指向
C6 考え方が非合理的である。

5.〔静的育児〕
(書誌)Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969

(要旨) アメリカの母親は、子供の自己主張を明らかにし、母親とは違う存在であることを気づかせ、子供をより独立的にさせてゆく必要があると考えている..日本の母親は、子供との間の相互依存的な関係を発展させ、他人に依存的で従順な子供になることを期待している。
アメリカの母親は、子供に対して声をかけ、活発に働きかけることで関係を持ち、子供がより身体を動かし、環境に働きかけていく事を期待している..日本の母親は、子供と身体接触を多くし、子供があまり身体を動かさず、環境に対して受動的であるように、子供を静かにさせる傾向にある。
→相互依存指向、静的指向、密集指向
(アンケート項目との関連)↓
相互依存指向
D32 互いに依存しあおうとすること。
密集指向
E35 他者と肌と肌が触れ合うのを好む。
静的指向
F36 静止しているものを好むこと。

6.〔 中央集権 〕
(書誌) 辻清明 新版 日本官僚制の研究 東京大学出版会 1969
(要旨) わが国は、地方自治法を制定するまでの数十年間、前近代的な中央集権的官僚制の強い拘束の前に、近代的な地方自治が完全に窒息せしめられていた。
地方自治法の問題の所在について...「 権力的統制 」の強い残映をうかがうことができる。
第一..中央官庁による多元的拘束であること。地方自治体に対する主たる監督権を掌握していた内務省の支配は廃棄せられたのであるが、同時にその他の官庁はいずれも多岐的な地方機関を保有増設し、地方団体の自主的機能を阻害しているとともに、さらにこれらに対して煩瑣な中央的拘束を加えている。
第二..人事権を通してなされる官僚制的拘束であること。従来の地方官吏は警察官を除いて地方吏員に切り換えられたのであり、したがって人事権は地方団体長に所属している。しかしながら、そのことは極めて形式的であり、今後依然として地方吏員の任免・転任などの実権を中央官庁が掌握していく危険ははなはだ大きい。現在、副知事や助役をはじめとして地方団体の幹部級が、ほとんど従来の内務官吏によって充当されていることは、これを裏書きする。

→密集指向
(アンケート項目との関連)↓
密集指向
F24 中央集権を好むこと。

7.〔同調競争〕
(書誌) 石田 雄 日本の政治文化 -同調と競争- 東京大学出版会 1970
(要旨) 同調と競争の複合..日本の歴史的発展の連続と変化を統一的に説明する上で最も便宜だと考えられる...この視角によって日本の急速な発展とそれに伴う困難とを同時に説明できる。同調。所属集団に支配的な価値指向と行動様式にしたがうこと、すなわち他人と同じ行動を取ること。集団内の強い同調が集団外のものに対する対抗意識を強め、あるいは逆に外からの脅威が集団内の同調を強めるという関係は日本近代のナショナリズムに最もよく示されている。集団内の競争と同調との結びつき....競争と同調との相互補完と相互加速の関係....忠誠競争(同調の中の競争)の結果が忠誠の度合いをいよいよ強め、それによってより強い同調性をもたらし、逆に今度はそのような同調性の中で、より激しい忠誠競争が行われる...。
→同調指向
(アンケート項目との関連)↓
同調指向
B9 行動を周囲の人々に合わせようとすること。
C8 周囲の皆と同じことをしようとすること。
C34 周囲に同調したがること。
E38 主流派の一員でいようとすること。

8.〔甘え〕
(書誌1)土居健郎 「甘え」の構造 弘文堂 1971
(要旨) 日本人は、「母子」間の気持ちの上での緊密な結びつきを、生れてから「社会化」の過程において経験する。 日本人は、成人した後も、家庭の内外で、母親依存と同じような情緒的な安定を求め続けてゆく。 甘えの心理は、人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとすることである。

甘えの精神は、非論理的で閉鎖的....甘えの「他人依存性」。
→非合理指向、閉鎖指向、相互依存指向
(アンケート項目との関連)↓
相互依存指向
B2 互いに甘え合おうとすること。
A2 人付き合いで互いにもたれ合うのを好むこと。
A15 依頼心が強い。
集団主義
A14 他者との一体化・融合を好むこと。
非合理指向
C6 考え方が非合理的である。
閉鎖指向 閉鎖的な人間関係を好むこと。

9.〔間人主義〕
(書誌1)木村敏 人と人との間 弘文堂 1972
(要旨) 日本人が「自己」を意識して言う、「自分」とは、西洋人の場合と違い、確たる個人主体の「自我」ではなく、恒常的に確立された主体ではない。
selfとは、...結局のところは自己の独自性、自己の実質であって、...selfと言われるゆえんは、それが恒常的に同一性と連続性を保ち続けている点にある。
日本語で言う「自分」は、自分自身の外部に、具体的には自分と相手との間にそのつど見いだされ、そこからの分け前としてその都度獲得されてくる現実性である。
日本的なものの見方、考え方においては、自分が誰であるのか、相手が誰であるのかは、自分と相手との間の人間的関係の例から決定されてくる。
→ 人間指向
(アンケート項目との関連)↓
人間指向
E27 人間関係そのものを重視すること。
(書誌2)浜口恵俊 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社 1977
(要旨) 日本人の特性である「間人主義」は、個人主義の、自己中心主義、自己依拠主義、対人関係の手段視、という特徴に対して、相互依存主義、相互信頼主義、対人関係の本質視、という特徴を持つ。
(アンケート項目との関連)↓
相互依存主義

D32 互いに依存しあおうとすること。
人間指向
E27 人間関係そのものを重視すること。

10.〔他律的〕
(書誌) 荒木博之 日本人の行動様式 -他律と集団の論理- 講談社
1973
(要旨) ムラ的構造のなかにあって、個人がその個性を喪失し、集団の意志によってその行動が決定されてゆく他律的人間になりおおせていく 他律的精神構造が、日本人の行動様式決定の動かすべからざる要因として働いてきた。
→他律指向、同調指向
(アンケート項目との関連)↓
他律指向

E20 自分の今後の進路を自分一人で決められないこと。
同調指向
E30 没個性的であろうとすること。
B9 行動を周囲の人々に合わせようとすること。

11.〔集団主義〕

(書誌1)間宏,日本的経営 - 集団主義の功罪,日本経済新聞社,1973

(要旨) 集団主義とは、個人と集団との関係で、集団の利害を個人のそれに優先させる集団中心 (集団優先) の考え方であること。あるいはそれに道徳的意味が加わって、そうするのが「望ましい」とか「善いことだ」ところ考え方である。
集団主義の下で、個人と集団との「望ましい」あり方は、個人と集団とが対立する関係ではなくて、一体の関係になることである。ここから、西欧の観念から見て、個人の未確立の状態がでてくる。だが、集団主義の理想から言えば、個人と集団、もっと抽象的にいえば個と全体とは、対立・協調の関係にあるのではなく、融合・一体

の関係にあるのが望ましい。個人（利害）即集団（利害）であり、集団（利害）即個人（利害）であること。

(書誌2)Triandis H.C., Individualism & Collectivism, Westview Press, 1995
(要旨）集団主義とは、互いに近接的にリンクされ、自分自身を、1つかそれ以上の集団（家族、会社、...)の一部であるとみなす個人からなる社会類型のことであること。
1)自己の定義が、集団主義では、相互依存的であるのに対して、個人主義では、独立的である。
2)個人と集団の目標が、集団主義では、近接しているのに対して、個人主義では、そうではない。
3)集団主義社会における社会的行動の多くは、規範、義務によって導き出されるのに対し、個人主義では、個人の態度や欲求、権利や契約によって導き出される。
4)人間関係を強調することを、たとえそれが不利益な場合でも、重視するのが、集団主義社会である。個人主義社会では、人間関係の維持が生み出すのが、利益か不利益かを、理性的に分析することを重視する。
日本では、...全体の25％が、水平的集団主義（内集団の凝集性や一体感を重んじること。）、50％が、垂直的集団主義（内集団のために尽くし、内集団の利益のために自己を犠牲にする、とともに、不平等性や上下方向の階層を受け入れること。）であること。水平的集団主義が高いのは、日本では、他者と違う態度を取ることが、悪いことである、と考えられているからである。垂直的集団主義が高いのは、日本では、権威や上下関係についての感覚が強いからと考えられる。

12.〔母性原理〕
(書誌）河合隼雄 母性社会日本の病理 中央公論社 1976
(要旨）母性原理は、「包含する」機能で示され、すべてのものを絶対的な平等性をもって包み込む。それは、母子一体というのが根本原理である。→人間指向（ふれあいこと。）、集団主義（一体感）
一方、父性原理は、「切断する」機能に特性があり、主体と客体、善と悪、上と下などに分類する。
日本社会は、母性原理を基礎に持った「永遠の少年」型社会といえる。

(アンケート項目との関連)↓ 集団主義
A14 他者との一体化・融合を好むこと。
B1 互いにくっつき合おうとすること。
人間指向
B3 他人との触れ合いを好むこと。
C10 人付き合いのあり方が親密である。

13.〔大部屋オフィス〕
(書誌) 林 周二 経営と文化 中央公論社 1984
(要旨) 開場前の図書館口の人の列や、バスを待つ行列などを観察すると、日本人の場合には、人と人との間合いが狭く、いささか押せ押せ的に並んでいるのに、西欧人の場合には、列を作る人の間合いがかなり広い。
西洋人の場合、一人の個人の周辺の空間距離が日本人の場合より一般に広く、個人住居でも一人一部屋で住む傾向がある。
企業オフィスでも、欧米について調査してみると、社員一人当たりのオフィス面積は、日本の二倍近くある。日本の役所や会社のオフィス空間は、管理職は別として、いわゆる大部屋に多勢のヒラ社員が机を向かい合わせに並べて、がやがやと働いている。これに対し、西欧の会社を訪ねるとヒラの人たちでも概して一人か二人が一部屋にこもって働いているし、米国でも、社員は一人ずつブースみたいな空間を構えている。
欧米の会社では、社員の一人一人が、ヒラに至るまでそのような隔離空間で、自分に与えられた仕事義務だけにひたすら従事し、それを果たし終えれば、隣りの仲間がどんなに忙しかろうが、どんどん帰る習慣である...逆に、日本のように、ホワイトカラーの職場集団の、仕事を通じての一体感づくりが大事にされるところでは、大部屋空間法式が向いている... →密集指向。
(アンケート項目との関連)↓
密集指向
A16 多人数で大部屋にいるのを好むこと。
E32 互いに一緒にいるのを好むこと。

14.〔独創性の欠如〕
(書誌) 西澤潤一 独創は闘いにあり プレジデント社 1986。

(要旨)(日本の科学者は、。) 自分の目で確認し、実験をやって納得しようという、あるいはそういう研究発表をあるがままに受け止めようという、最低限の自然科学技術者としての基本的姿勢に欠けて...その代わりに本 (定説) に頼る姿勢が極めて濃厚である。なまじっか、権威者が書いている形になっているから、ありがたくも本当のことのように、読み手のほうは思い込んでしまう。多くの人は、欧米の権威者の説だということで、あたかも自分の体験のように思い込み、批判したりすると過剰に反応する。時には、本人以上に強烈なしっぺ返しをしたりする。欧米の知性に、それだけ寄り掛かっているが故かも知れないが、まことに不健全な話である。
欧米は、種子の段階から金を投入し、独創技術を根気よく育てようとしている。それだけ真の独創性の難しさを熟知し、敬意を払っているからであること。ひるがえって日本は、官民共に危ない橋を渡ろうとせずに、欧米でうまくいっているかどうかを探り、工業化途上の大事なものを拾い上げて来て集中的に実用化し、改良の努力を傾ける。
(アンケート項目との関連)↓
権威主義

前例指向
D37 冒険しようとしないこと。
C30 前例のあることだけをしようとすること。

15.〔相互協調的自己〕
(書誌)Markus H.R.,Kitayama,S., Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review, 98, pp224-253 1991
(要旨) 日本をはじめとする東洋文化で優勢な、相互協調的自己観によれば、自己とは他の人や周りのことごとと結びついて高次の社会的ユニットの構成要素となる本質的に関係志向的実体である。
(アンケート項目との関連)↓
集団主義
B1 互いにくっつき合おうとすること。
人間指向
B3 他人との触れ合いを好むこと。
相互依存指向
A2 人付き合いで互いにもたれあうのを好むこと。
D32 互いに依存しあおうとすること。

16.〔直接対面〕
(書誌) 吉井博明 情報化と現代社会[改訂版] 1997 北樹出版
(要旨) 組織にとって重要度の高い情報は、不確実性が高く、多義性も高い、しかも外部環境情報であるため、最もリッチで、シンボリックな意味伝達能力の高いメディア＝対面コミュニケーションに依存せざるを得ず、これが立地を最も規定していることがわかる。
情報通信メディアの発展は、皮肉なことに、情報通信メディアにのりにくい情報の希少性と価値を一層高め、情報中心地へのオフィス立地を促進しているのである。
複雑、かつ高度な相互依存の網の目で結ばれている日本の組織は、ウェットな対面コミュニケーションに過重に依存する文化を持っているのであり、日本社会は、全体として、集中が集中を呼ぶ体質（集中体質）を内在させているといえようこと。
→密集指向
→人間指向(親密さ)、反プライバシー(視線)
もちろん、圧倒的な技術力を持ち、政府の規制や系列の制約を受けない組織が多ければ、このようなウェットな対面コミュニケーションへの依存度は低下し、集中の必要性が少なくなるのは言うまでもない。
(アンケート項目との関連)↓
密集指向
F24 中央集権を好むこと。
A3 狭い空間に密集していようとすること。
人間指向
C10 人付き合いのあり方が親密である。
反プライバシー
D27 互いに視線を送り合うのを好むこと。
B7 互いに監視し合うのを好むこと。

〔その他の、日本文化と関係の深い概念について〕
以上の文献以外で指摘されて来た、日本文化と関係の深い、ウェットさを表していると考えられる概念を、以下にいくつか列挙しましたこと。説明は、なぜウェットと言えるかについて書かれています。
〔根回し〕

(説明) 交渉などをうまく成立させるために、関係方面に予め話し合いをしておくことを指す「 根回し 」は、予め存在する縁故関係をたどって、そのネットワークの中にいる各人の了解を取り付けようとする行為である。各人が、関係を生成する相互間引力の只中にいることを、話し合いの機会を持つことで、再確認させる意味合いを持ち、根源的には、縁故関係とそのもとになる相互間引力の存在が前提となる行為である。
→縁故指向
相互間引力のある状態では、何か自分のやりたいことがある場合に、根回しが必須になる。相互間引力が働いている只中にいる状態で、何か新たに行動を起こそうとする個人は、事前に周囲に、自分はこれからこういうことをします、ということについて了解を取る、ないし根回しを行っておかないと、後で、本人の行動が周囲の他者をあらぬ方向へ (相互間引力の働きで) 振り回したこと。(あるいは、逆に、周囲が本人を、自由に動けないように、相互間引力によって拘束しようとしたこと。) そのことで、互いに不本意な思いをすること。(互いの行動を非難し合うことなど) そうしたことにつながること。
→規制主義
〔 接待 〕
(説明) 接待は、元々あまり近くなかった存在の者同士のうちの一方が他方に対して、より心理的に近づこうとして (相手に近づいてもらおうとして) 、食事などの供与をすることを指し、その点で、相互間引力がより強く働く状態に持ち込もうとする態度の現れと言える。
→縁故指向
〔 談合 〕
(説明) 官公庁の入札などの際に見られる談合は、互いに相手の動きを、相手が自由な行動 (各自が自由に安い入札価格を提示し合って競争するなど。) を取らないように牽制し合って、取る動き (特定の誰かが、高めの入札価格を提示すること。) を事前の話し合い (相互拘束) で決めてしまう点で、相互間引力の産物であること。
→規制主義
〔 公私混同 〕
(説明) 公共物と自分のものとを混同することが、公私の区別が「 あいまい 」となることに結びつく。
→あいまい指向

こうした、従来、日本的とされる対人関係の上での特徴は、決して、日本だけに特殊なものではなく、より一般的には、農耕、とくに高温多湿な東アジアに広く分布する稲作社会(集約的農業型社会)での対人関係上の特徴へと拡張して捉えることができそうに思われる。この点の根拠については、筆者による環境のドライ・ウェットさとの照合についての記述を参考にしていただきたい。
現状では、研究者の関心が、日本対欧米という視点にしばられて、日本以外の東アジアの社会のあり方に対して向いていないため、日本の対人関係上の特徴を、(本当は東アジア稲作社会に共通であるのに)日本に特殊的と思い込みやすいのではあるまいか?。

〔参考文献〕

青木保 「日本文化論」の変容 -戦後日本の文化とアイデンティティー- 中央公論社 1990 芳賀綏 日本人の表現心理 中央公論社 1979 南博 日本人論 - 明治から今日まで 岩波書店 1994 吉井博明 情報化と現代社会 北樹出版 1996

1-2.
上記文献調査結果である、「日本的=ウェット」を確認するため、いくつかアンケート調査を行ったこと。
(1)日本とアメリカと、どちらがよりドライ/ウェットかと、1999.5~7に行った、「ドライ・ウェットな性格・態度は何か」を調べるアンケート内で尋ねたところ、「アメリカがよりドライである。(日本がよりウェットである。)」との回答があった割合が、その逆よりも、やや多かった(ただし、有意水準0.01には届いていない。)こと。

番号	項目内容(仮説=ドライ)	-回答=ドライ-	どちらでもない。	-回答=ドライ-	項目内容(仮説=ウェット)	-Z得点-	有意
C32	アメリカ的であるこ	44.796	21.719	33.484	考え方が日本的であ	1.901	0.05

と。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　る。
(2)日本的、東アジア的（＝韓国・台湾、フィリピン...的）、および欧米的な性格・態度が、それぞれどの程度ドライ／ウェットと考えられるかについて検証するアンケート調査を2000.10に行った。
アンケートは、より日本的、東アジア的、欧米的な態度が、とてもドライ～とてもウェットの5段階評価でどのレベルに当てはまるかを、回答してもらう形で行った。
その結果、「欧米的＝ドライ」、「東アジア的（＝韓国、台湾、フィリピン....的）＝ウェット」、「日本的＝ウェット」という傾向が確認された。（

ドライ・ウェットな対人行動と気体・液体分子運動との関連について

2008年1月　初出
2006年12月頃、気体、液体の分子運動のドライ、ウェットさの測定を、気体分子運動でドライと感じる度合いがウェットと感じる度合いを上回るか、液体分子運動でウェットと感じる度合いがドライと感じる度合いを上回るかを確認する作業を行った。
すなわち、インターネット利用者（研究参加者）に気体，液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて，各分子の動きを人の動きと見立てた場合それぞれどの程度ドライ，ウェットと感じるか調べることにしたこと。
・方法

[データ収集方法]　インターネットのwebサイトで回答を収集したこと。回答のカウントに当たっては，同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため，回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし，同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに，cookieを利用して複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究参加者]　回答を得た研究参加者の総数は206名（男性102名，女性104名）であったこと。性別情報は，回答時に性別選択欄を

webページにラジオボタンで設け，選択入力してもらうことで得た。

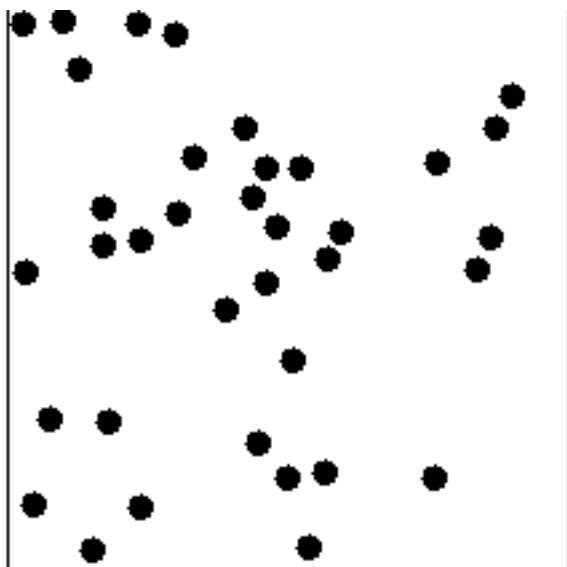
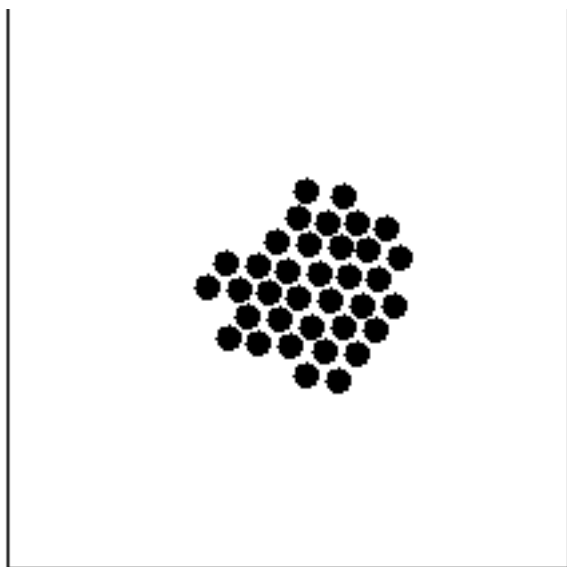
[調査時期]　調査時期は，2006年12月4日から9日の6日間であった。

[刺激映像]　刺激は，Ar(アルゴン。）の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを，池内(2002)のwebサイトより入手し，液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように，絶対温度20度（液体）と300度（気体）のそれぞれの分子運動を表すように調整したこと。プログラムが表示した気体，液体各分子運動のムービーを，パソコン上でキャプチャし，各々30秒間のwindows media video形式のムービーに加工して，webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。

[質問項目]　上記各ムービーについて「これは，人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格がどの程度ドライ，ウェットに感じられるか5段階評価して下さい。」として，ドライ，ウェットそれぞれ別々に回答させたこと。段階は，「感じない(0) - 少し感じる(1) - やや感じる(2) - かなり感じる(3) - とても感じる(4)」とした。

[手続き]　各ムービーは，一度に1個ずつ，順番をランダムにして呈示し，ムービー毎に回答させるようにした。また，研究参加者のコンピュータ環境に対応しつつ，刺激提示の条件を揃えるために，「再生回数は可能な限り2回まででお願いします」の旨，断り書きを付けて，読んでもらった。なお，実験操作のデブリーフィングとして，回答が完了した時点で，「実はこれは，気体，液体分子運動のシミュレーションムービーでした。」という断り書きを画面上に呈示したこと。
・結果
気体，液体分子運動パターンが，人の性格としてそれぞれドライおよびウェットと感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable 1に示した通りである。 見せたムービーの種類別にドライ，ウェットに感じた度合いの違いを見るため，対応のあるt検定を行ったこと。結果はTable 2の通りである。

・図表
Figure.1 気体，液体分子運動パターン分子運動シミュレーション

ムービー（研究参加者に見せたもの）

気体分子運動

液体分子運動

Table.1

刺激種類	ドライ	ウェット

液体分子運動	0.85 (1.17)	2.09 (1.50)
気体分子運動	1.60 (1.46)	1.15 (1.24)

（かっこ内は標準偏差)。

Table.2

比較対象	t検定結果	有意水準
液体ウェット液体ドライ	t(205)＝8.74	p ＜.01
気体ドライ - 気体ウェット	t(205)＝3.21	p ＜.01
気体ドライ - 液体ドライ	t(205)＝6.32	p ＜.01
液体ウェット気体ウェット	t(205)＝8.25	p ＜.01

以上の結果により，気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させるとドライな性格と認知され，一方，液体分子運動はウェットな性格と認知されることが分かった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティはドライに，液体分子運動パターンと同様に振る舞う人ではウェットに感じられると考えられる。

男性的，女性的なパーソナリティの認知と気体，液体分子運動パターンとの関係

2008.04 初出

要約 人間のパーソナリティ認知の男性的，女性的と，物質の気体，液体の人間に与える感覚のドライ，ウェットさの間の関連を明らかにするため，webでの調査を行ったこと。気体・液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者201名に対して見せて，各ムービーで，粒子の動きが個人の対人行動としてどの程度男性的，女性的に感じられるかを評価してもらった。その結果，気体分子運動パターンは人々の動きとして男性的，液体分子運動パターンは女性的と感じられることが分かった。

課題

実際に研究参加者に気体，液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて，各分子の動きを人の動きと見立てた場合それぞれどの程度男性的，女性的と感じるか調べることにしたこと。

方法

[データ収集方法]　インターネットのwebサイトで回答を収集したこと。回答のカウントに当たっては，同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため，回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし，同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに，cookieを利用して複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者]　回答を得た研究参加者の総数は201名（男性105名，女性96名）であったこと。性別情報は，回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け，選択入力してもらうことで得た。
[調査時期]　調査時期は，2007年8月21日から8月31日の11日間であった。

[刺激映像]　刺激は，Ar(アルゴン。）の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを，池内(2002)のwebサイトより入手し，液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように，絶対温度20度（液体）と300度（気体）のそれぞれの分子運動を表すように調整したこと。プログラムが表示した気体，液体各分子運動のムービーを，パソコン上でキャプチャし，各々30秒間のwindows media video形式のムービーに加工して，webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は，Figure 1の通りである。

[質問項目]　上記各ムービーについて「これは，人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格がどの程度男性的，女性的に感じられるか5段階評価して下さい。」として，男性的，女性的それぞれ別々に回答させたこと。段階は，「感じない (0)」から「とても感じる(4)」の5段階とした。

[手続き]　各ムービーは，一度に1個ずつ，順番をランダムにして呈示し，ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないとしにくいため，各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお，実験操作のデブリーフィングとして，回答が完了した時点で，「実はこれは，気体，液体分子運動のシミュレーションムービーでした。」という断り書きを画面上に呈示したこと。

結果

気体，液体分子運動パターンが，人の性格としてそれぞれ男性的および女性的と感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable 1に示した通りである。

見せたムービーの種類別に男性的，女性的に感じた度合いの違いを見るため，対応ありの平均値の差のt検定（両側）を行った(n＝201)。結果はTable 2の通りである。

液体の分子運動を見たとき，男性的，女性的と感じる度合いについては，女性的と感じる度合いの数値が，男性的と感じる度合いよりも，有意に高かった(t(200)＝5.42,p＜.01)。。

気体の分子運動を見たとき，男性的，女性的と感じる度合いについては，男性的と感じる度合いの数値が，女性的と感じる度合いよりも，有意に高かった(t(200)＝6.84,p＜.01)。。

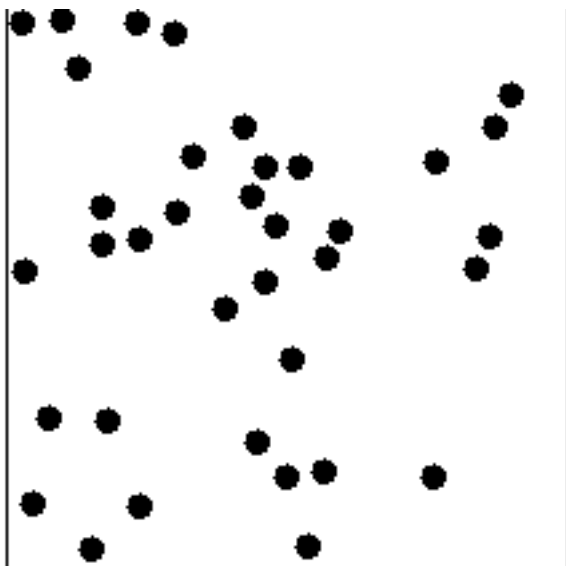
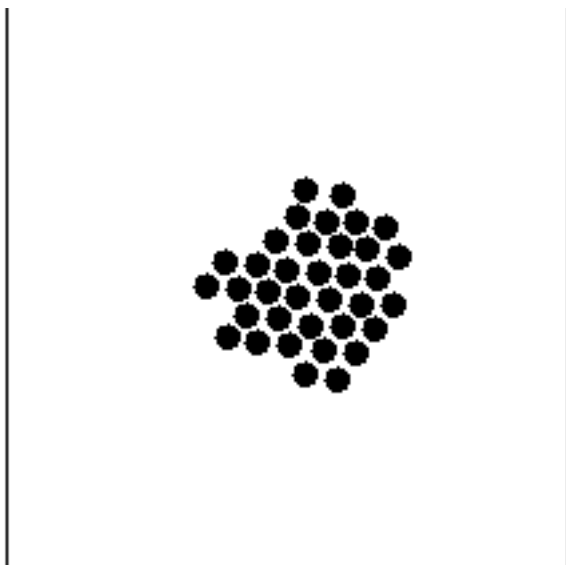
気体と液体とではどちらをより男性的と感じるかについては，気体分子運動パターンを男性的に感じる度合いが，液体分子運動パターンを男性的に感じる度合いよりも有意に高かった(t(200)＝7.47,p＜.01)。。

気体と液体とではどちらをより女性的と感じるかについては，液体分子運動パターンを女性的に感じる度合いが，気体分子運動パターンを女性的に感じる度合いよりも有意に高かった(t(200)＝6.29,p＜.01)。。

考察

以上の結果により，気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると男性的な性格と認知され，一方，液体分子運動は女性的な性格と認知されることがわかった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは男性的に，液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では女性的に感じられると考えられる。

図表

Figure.1 気体，液体分子運動パターン 分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）

気体分子運動

液体分子運動

Table.1 気体，液体分子運動ムービーへのアメリカ的・日本的評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	男性的	女性的
液体分子運動	0.67	1.35
	(1.10)	(1.37)
気体分子運動	1.49	0.65
	(1.41)	(1.13)

n＝201

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応ありこと。）

比較対象	t検定
液体女性的 - 液体男性的	t(200)＝5.42**
気体男性的 - 気体女性的	t(200)＝6.84**
気体男性的 - 液体男性的	t(200)＝7.47**
液体女性的 - 気体女性的	t(200)＝6.29**

** p ＜ .01

父性的， 母性的なパーソナリティの認知と気体，液体分子運動パターンとの関係

2012.07初出
父性的、母性的パーソナリティと、気体、液体分子運動パターンとの関係について、詳しく説明していますこと。父性的 パーソナリティと気体分子運動、母性的パーソナリティと液体分子運動が相関します。

要約 人間のパーソナリティ認知の父性的，母性的と，物質の気体，液体の人間に与える感覚のドライ，ウエットさの間の関連を明らかにするため，webでの調査を行ったこと。気体・液体分子運動パターンをコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者201名に対して見せて，各ムービーで，粒子の動きが個人の対人行動としてどの程度、父性的、母性的に感じられるかを評価してもらった。その結果，気体分子運動パターンは人々の動きとして父性的，液体分子運動パターンは母性的と感じられることが分かった。

課題

実際に研究参加者に気体，液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて，各分子の動きを人の動きと見立てた場合それぞれどの程度父性的，母性的と感じるか調べることにしたこと。

方法

[データ収集方法]インターネットのwebサイトで回答を収集したこと。回答のカウントに当たっては，同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため，回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし，同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに，cookieを利用して複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者]回答を得た研究参加者の総数は201名（男性105名，女性96名）であったこと。性別情報は，回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け，選択入力してもらうことで得た。
[調査時期]調査時期は，2007年8月21日から8月31日の11日間であった。

[刺激映像]刺激は，Ar(アルゴン。）の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを，池内満(2002)のwebサイトより入手し，液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように，絶対温度20度（液体）と300度（気体）のそれぞれの分子運動を表すように調整したこと。プログラムが表示した気体，液体各分子運動のムービーを，パソコン上でキャプチャし，各々30秒間のwindowsmediavideo形式のムービーに加工して，webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は，Figure1の通りである。

[質問項目]上記各ムービーについて「これは，人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格がどの程度父性的，母性的に感じられるか5段階評価して下さい。」として，父性的，母性的それぞれ別々に回答させたこと。段階は，「感じない(0)」から「とても感じる(4)」の5段階とした。

[手続き]各ムービーは，一度に1個ずつ，順番をランダムにして呈

示し，ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないとしにくいため，各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお，実験操作のデブリーフィングとして，回答が完了した時点で，「実はこれは，気体，液体分子運動のシミュレーションムービーでした。」という断り書きを画面上に呈示したこと。

結果

気体，液体分子運動パターンが，人の性格としてそれぞれ父性的および母性的と感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable1に示した通りである。

見せたムービーの種類別に父性的，母性的に感じた度合いの違いを見るため，対応ありの平均値の差のt検 定（両側）を行った(n＝201)。結果はTable2の通りである。

液体の分子運動を見たとき，父性的，母性的と感じる度合いについては，母性的と感じる度合いの数値が，父性的と感じる度合いよりも，有意に高かった($t(200)=5.67, p<.01$)。。

気体の分子運動を見たとき，父性的，母性的と感じる度合いについては，父性的と感じる度合いの数値が，母性的と感じる度合いよりも，有意に高かった($t(200)=4.96, p<.01$)。。

気体と液体とではどちらをより父性的と感じるかについては，気体分子運動パターンを父性的に感じる度合いが，液体分子運動パターンを父性的に感じる度合いよりも有意に高かった($t(200)=4.28, p<.01$)。。

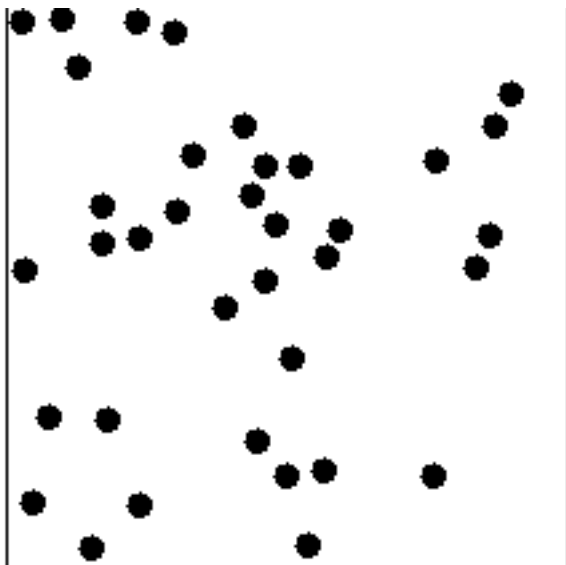
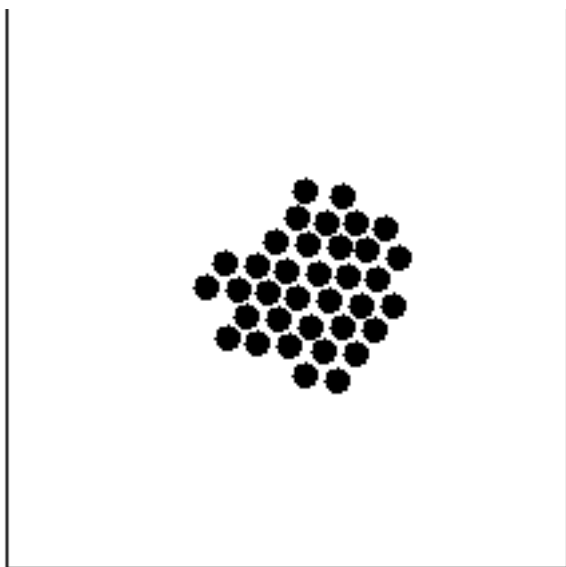
気体と液体とではどちらをより母性的と感じるかについては，液体分子運動パターンを母性的に感じる度合いが，気体分子運動パターンを母性的に感じる度合いよりも有意に高かった($t(200)=6.82, p<.01$)。。

考察

以上の結果により，気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させると父性的な性格と認知され，一方，液体分子運動は母性的な性格と認知されることがわかった。気体分子運動パターンと同様に振る舞う人のパーソナリティは父性的に，液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では母性的に感じられると考えられる。

図表

Figure.1気体，液体分子運動パターン 分子運動シミュレーション

ムービー（研究参加者に見せたもの）

気体分子運動

液体分子運動

Table.1気体，液体分子運動ムービーへの父性的・母性的評価値の平

均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	父性的	母性的
液体分子運動	0.37	0.90
	(0.81)	(1.20)
気体分子運動	0.76	0.31
	(1.18)	(0.73)

n＝201

Table.2条件間の平均値の差の比較結果（対応ありこと。）

比較対象	t検定
液体母性的 - 液体父性的	$t(200)=5.67^{**}$
気体父性的 - 気体母性的	$t(200)=4.96^{**}$
気体父性的 - 液体父性的	$t(200)=4.28^{**}$
液体母性的 - 気体母性的	$t(200)=6.82^{**}$

$^{**}p<.01$

アメリカ的，日本的なパーソナリティの認知と気体，液体分子運動パターンとの関係

2008.04 初出

要約 人間のパーソナリティ認知のアメリカ的，日本的と，物質の気体，液体の人間に与える感覚のドライ，ウェットさの間の関連を明らかにするため，webでの調査を行ったこと。気体・液体分子群の運動をコンピュータシミュレートした2つのムービーを研究参加者201名に対して見せて，各ムービーで，粒子の動きが個人の対人行動としてどの程度アメリカ的，日本的に感じられるかを評価してもらった。その結果，気体分子運動パターンは人々の動きとしてアメリカ的，液体分子運動パターンは日本的と感じられることが分かっ

た。

目的
実際に日本人の研究参加者に気体，液体の分子運動シミュレーションムービーを見せて，各分子の動きを人の動きと見立てた場合それぞれどの程度欧米的，日本的と感じるか調べることにしたこと。その際，「欧米的」という言葉は，「欧米」がカバーする地球上の地域が広範囲，多種多様にわたるため，人々が捉えるパーソナリティ上のイメージが分散し，統合して捉えにくい可能性がある。そこで，今回研究参加者を日本人としたこともあり，日本人にとって，欧米地域の中で，太平洋戦争後の日本占領以来，最も身近で親しみのある，パーソナリティの具体的イメージが沸きやすいと考えられる北米のアメリカ合衆国を代表例として採用し，「アメリカ的」「日本的」のそれぞれを調べることにした。
方法

[データ収集方法]　インターネットのwebサイトで回答を収集したこと。回答のカウントに当たっては，同じ研究参加者が複数回回答する可能性に対応するため，回答時に同一のIPアドレスの持ち主は同一の回答者であると見なし，同一のIPアドレスの複数回答は最新の1個の回答のみを有効と見なすとともに，cookieを利用して複数回の回答を受付けないように設定した。

[研究対象者]　回答を得た研究参加者の総数は201名（男性105名，女性96名）であったこと。性別情報は，回答時に性別選択欄をwebページにラジオボタンで設け，選択入力してもらうことで得た。

[調査時期]　調査時期は，2007年8月21日から8月31日の11日間であった。

[刺激映像]　刺激は，Ar(アルゴン。）の分子運動パターンをシミュレートするJavaプログラムを，池内(2002)のwebサイトより入手し，液体と気体それぞれの分子運動を最も明確に示すように，絶対温度20度（液体）と300度（気体）のそれぞれの分子運動を表すように調整したこと。プログラムが表示した気体，液体各分子運動のムービーを，パソコン上でキャプチャし，各々30秒間のwindows media video形式のムービーに加工して，webサイト上で研究参加者のパソコンから再生可能とした。各ムービーの静止画は，Figure 1の通りである。

[質問項目]　上記各ムービーについて「これは，人々の動きを早送りで再生したものです。一つ一つの粒々が一人一人の人間を表しています。このムービーにおける人々の性格がどの程度アメリカ的，日本的に感じられるか5段階評価して下さい。」として，アメリカ的，日本的それぞれ別々に回答させたこと。段階は，「感じない(0)」から「とても感じる(4)」の5段階とした。

[手続き]　各ムービーは，一度に1個ずつ，順番をランダムにして呈示し，ムービー毎に回答させるようにした。回答はムービーが実際に動いているのを見ながらでないと行いにくいため，各ムービーは回答中エンドレスで流れるようにした。なお，実験操作のデブリーフィングとして，回答が完了した時点で，「実はこれは，気体，液体分子運動のシミュレーションムービーでした。」という断り書きを画面上に呈示したこと。
結果
気体，液体分子運動パターンが，人の性格としてそれぞれアメリカ的および日本的と感じられた度合いの評定値の平均値と標準偏差はTable 1に示した通りである。
見せたムービーの種類別にアメリカ的，日本的に感じた度合いの違いを見るため，対応のあるt検定を行ったこと。結果はTable 2の通りである。
液体の分子運動を見たとき，アメリカ的，日本的と感じる度合いについては，日本的と感じる度合いの数値が，アメリカ的と感じる度合いよりも，有意に高かった($t(200)=10.20, p<.01$)。。
気体の分子運動を見たとき，アメリカ的，日本的と感じる度合いについては，アメリカ的と感じる度合いの数値が，日本的と感じる度合いよりも，有意に高かった($t(200)=3.54, p<.01$)。。
気体と液体とではどちらをよりアメリカ的と感じるかについては，気体分子運動パターンをアメリカ的に感じる度合いが，液体分子運動パターンをアメリカ的に感じる度合いよりも有意に高かった
($t(200)=7.81, p<.01$)。。
気体と液体とではどちらをより日本的と感じるかについては，液体分子運動パターンを日本的に感じる度合いが，気体分子運動パターンを日本的に感じる度合いよりも有意に高かった
($t(200)=7.15, p<.01$)。。

考察
以上の結果により，気体分子運動のシミュレーションを人に見立てて観察させるとアメリカ的な性格と認知され，一方，液体分子運動は日本的な性格と認知されることがわかった。気体分子運動パター

ンと同様に振る舞う人のパーソナリティはアメリカ的に，液体分子運動パターンと同様に振る舞う人では日本的に感じられると考えられる。
このことから，気体と液体それぞれの分子運動のパターンと，パーソナリティの認知におけるアメリカ的，日本的という印象との間に，なんらかのつながりが存在することが推測される。しかし，なぜこうしたつながりが生じるかの理由は，現状ではよく分からず，さらなる研究が必要である。
また，今回の研究結果では，アメリカ的，日本的なパーソナリティについて日本人の研究参加者が持つ印象を単に尋ねたに過ぎず，その印象が，アメリカ人，日本人のパーソナリティの実際のあり方にそのまま即していると考えるのは早計と考えられる。実際の対人関係においてアメリカ人のパーソナリティが気体的で日本人のそれが液体的であることを示す研究が別途必要である。
また，今回の結果は，あくまで日本人サイドの見方であり，視点に偏りが見られる。より偏りのない客観的な視点を得るには，日本人の研究参加者だけでなく，アメリカ人の研究参加者を別途募って，アメリカ人から見た印象がどうなっているかを別途確認する必要がある。
また，欧米的，日本的パーソナリティの比較という当初の研究目的からは，今後は，今回の研究では対象から除外された，アメリカ以外の西欧，北欧等のヨーロッパ各地域と日本との比較等も必要となってくると考えられる。

図表

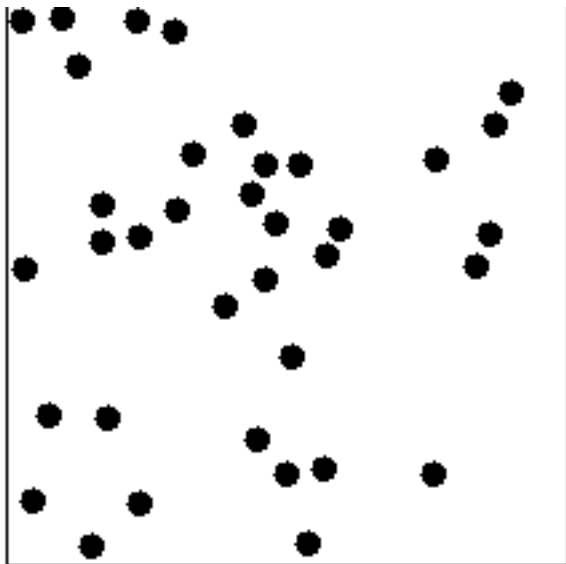
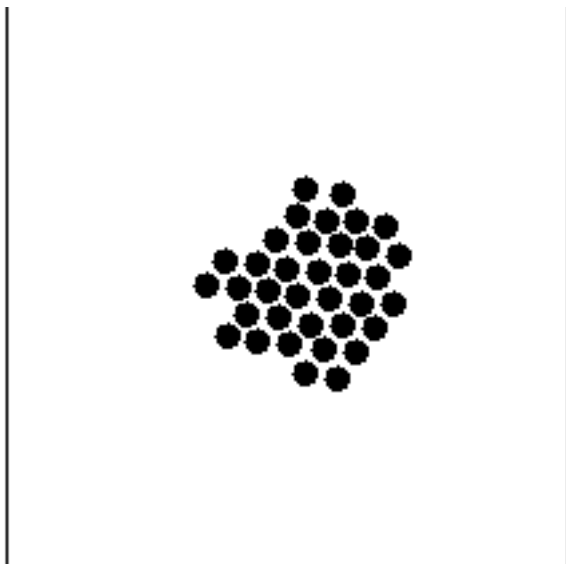
Figure.1 気体，液体分子運動パターン 分子運動シミュレーションムービー（研究参加者に見せたもの）
気体分子運動

液体分子運動

Table.1 気体，液体分子運動ムービーへのアメリカ的・日本的評価値の平均値と標準偏差（かっこ内）

刺激種類	アメリカ的	日本的
液体分子運動	0.47	1.71
	(0.94)	(1.45)
気体分子運動	1.35	0.90

	(1.43)	(1.26)

n＝201

Table.2 条件間の平均値の差の比較結果（対応ありこと。）

比較対象	t検定
液体日本的 - 液体アメリカ的	t(200)＝10.20**
気体アメリカ的 - 気体日本的	t(200)＝3.54**
気体アメリカ的 - 液体アメリカ的	t(200)＝7.81**
液体日本的 - 気体日本的	t(200)＝7.15**

** p ＜ .01

女社会、男社会

2008.04 大塚いわおこと。

	女社会	男社会
タイプ	リキッドタイプ（液体的）	ガスタイプ（気体的）
感覚		
支配者	姑、母、お局	父
優勢な地域	日本的、東アジア的（中国、韓国・・・）	アメリカ的、西欧的
1	保身preservation	
101	保身、安全の重視	危険への対峙
	互いに自分のことが一番大切である。軍事的に守られるのを好むこと。危険を冒さない、冒険しないこと。取る態度が退嬰的である。	自分自身より大切な存在が他にいる。それを守るのを自己の使命とすること。危険に直面し、対決すること。
102	前例、しきたり、暗記の重視、保守性	探検、独創性の重視、革新性
	その通りにやれば大丈夫、無難と分かっている前例、しきたりが確	うまく行くかどうか分からない、前例のない事柄に挑戦して、失敗

	立されたことしかしようとしない。物の見方が保守的である。前例、しきたり通りに行動すること。既存知識を細かいところまで暗記するのを重視すること。	を重ねながら、新たな前例に当たる知見を作り上げること。物の見方が革新的である。
103	減点主義	加点主義vs直接的な欠点修正要求
	相手のマイナス点、あら探しを粘着的に延々とするのを好むこと。相手を褒めないこと。いつまでも陰口、悪口を言う。建設的でないこと。	相手の長所を積極的に褒めること。建設的であること。相手の欠点を、単刀直入に直接的に批判、攻撃して、修正されたら、あっさり余所へ行くこと。
104	決定、責任の回避	決定、責任の不可避
	決定を先送りすること。意思決定を集団で行うことで、個人での責任を回避すること。	決定を先送りせず、リアルタイムで決定すること。単独で意思決定を行うため、責任が回避できない。
2	一体性oneness	
201	相互一体性の重視	相互独立性の重視
	互いに一つになる、融合するのを好むこと。互いの一体感を重視すること。仲良し集団を作るのを好むこと。相手が自分と肌に合うかどうかを気にする。意見の割れを避けようとすること。満場一致を好むこと。	互いにバラバラに独立するのを好むこと。意見の割れを当たり前と考え、多数決を好むこと。
202	依存	自立
	自分一人だけで自立するのが不安で、誰か周囲に支えてもらいたいと考える。周囲に助	自分一人で自立するのを理想とし、周囲に助けを求めないこと。

	け、庇護を求めること。	
203	包含の重視、「袋」指向、枠内、制限指向	解放の重視、開放性、枠からの飛び出し、打破指向
	相手を包み込む、相手に包み込まれる感覚を好むこと。「袋」の中にいるのを好むこと。決められた枠内に止まる、枠を守る、制限するのを好むこと。	包まれていた、閉じ込められていたところから解放されるのを好むこと。オープンなのを好むこと。決められた枠からはみ出す、飛び出る、枠を破るのを好むこと。
204	全人的支配、従属	支配の部分性、自由の残存
	親分子分関係のように、相手を全人格的に包み込んで支配したり、全人格的に従属するのを好むこと。	相手を支配するが、全人格を支配するのではなく、相手のコアの部分には、自由を残す。
205	相手の人格制御	相手の道具、手段的制御
	教育などで、相手教師の人格、人柄そのものを慕って付いて行こう、相手子供の人格そのものをコントロールしよう、しつけようとすること。他人を中傷する時に、相手の人格（性格とか）を攻撃すること。	教育などで、相手の人格そのものには手を付けず、相手を専ら効果的な学習のための道具、手段として効果的に利用し、あるいは具体的な指示、教示を与える対象として冷静に目視しようとする。他人を中傷する時に、相手の能力の欠如、意見の誤りを客観的に攻撃すること。
206	所属の重視（所属主義）	本人個人、フリー、自由の重視
	人を見る時に、その人がどの集団、団体に属しているかを重視す	人を見るときに、本人の所属ではなく、本人個人そのものを直視の

	る。	対象とする。どこにも従属せず、自主独立の自由であることを重視する。
207	つながり、コミュニケーション、縁故、コネの重視	初対面、別れ、切断前提の付き合い、契約の重視
	人とのつながり、コミュニケーションを重視すること。人を判断する時に、その人が自分とどういうつながりがあるか、どういうコネを持っているかを重視する。採用とかで自分とつながりのない他者をシャットアウトすること。一見さんお断り。	人を判断する時に、その人自身の能力、利益を生み出す力を重視すること。能力のあると思った人は、初対面でコネがなくても採用する。用件が済んだら、さっさと別れて、関係を切る。関係が切れることを前提とした契約を重視する。
208	妬み、足の引っ張り合いこと。	自他の区別・割り切り、ライバルへの攻撃
	自分と関わりのある、かつて自分と同等以下で、その後自分より上等になった、なろうとする他者のことを妬んで、互いに足を引っ張ること。自分は自分、他人は他人と割り切ることができない。	自分は自分、他人は他人と区別し、割り切る。自分の利益、築いた立場を浸食しようとするライバルを敵視して、攻撃、ダメージを加えようとすること。
209	近接、粘着、くっつきこと。	離反、距離感、はがれこと。
	人間関係が、相手に近づきくっつくのを好む結果、粘着的になり、愛憎にまみれた、ベタベタ、ドロドロしたものになる。	人間関係が、相手とあまりベタベタくっつかずにはがれる、距離を保った、あっさりしたそっけないものとなる。
3	集団group	
301	集団、団体行動の重視	個人行動の重視（個人

	（集団主義） 集団で行動する、群れるのを好むこと。相手に連れ立って一緒に付いていく、つるむのを好むこと。	主義） 個人単位で行動するのを好むこと。周囲と別行動を取っても咎められない。
302	同調、協調、調和、和合の重視、個性の一定枠内での許容 意見を周囲や相手に合わせるのを好むこと。物事を相手と一緒に共同でするのを好むこと。個性の重視とは、一定枠内に止まりながら、その枠内で最大限目立とうとすることである。	独自判断、違和感、反対の許容、個性の重視 意見を周囲に合わせずに独自の判断をしたり、周囲と反対の意見を述べて平気であること。個性として許容すること。
303	流行、トレンドへの追従 皆が追随する最新、最先端の流行を身につけようとする。その時々のトレンドに乗っていこうとすること。	自己流、独自性の貫徹 周囲の動向にお構いなく、自分流を貫くのを好むこと。各自が、自分は独自の最先端の位置に付けているのだと、自分自身に言い聞かせる。
304	仲間外れ、浮きの存在といじめ 集団の調和を乱す浮いた存在の人を、よってたかって仲間外れにして、いじめること。	バラバラ、単独行動 各自が、勝手にバラバラな方向に単独行動を取り、反対する者同士攻撃を加え合う。仲間は一時的な存在であり、別れることが前提である。全員が浮いている。
305	非競争、護送船団主義、談合 自由競争を好まず、互	自由競争、能力主義、成果主義 互いに自由競争で、自

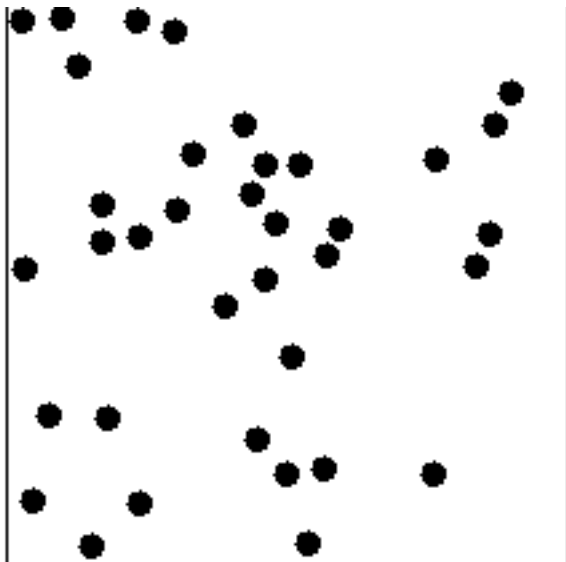
	いに一体となって、一緒に進もうとすること。競争のない年功序列、先輩後輩制、談合を好むこと。	分の持つ能力を最大限に発揮して、自分が成果を上げて生き残り、他者を蹴落とそうとする。
4	人間human、有機organic	
401	人間指向、有機指向 人間、対人関係そのものに対して関心、注意が行きやすい。無機質な機械や岩石（宇宙）とかにあまり興味がない。	機械、無機指向 冷たい機械や岩石（宇宙）とかに興味を持つこと。人間も、客観的な冷たい距離を置いた観察対象となる。
402	相互監視、密告、牽制 互いに周囲の他者が何をやっているかに関心が行き、盛んに首を突っ込んで、監視、牽制しようとする。	プライバシーの重視 互いに、他者に踏み込まれない独自領域を確保することに熱心であること。
403	噂、陰口指向 他人の陰口やうわさ話を流すのを好むこと。	自己主張 他人ではなく自分自身の主義主張を、周囲に向かって宣伝するのを好む。
404	恥の重視 周囲の他人の目を盛んに気にして、恥ずかしがること。自分が他人にどう思われているかを気にする。他人にどう見られるかを気にすること。	恥知らず 他人の目に無関心であること。人目を気にせずに、自分のやりたいことに邁進すること。
405	媚び、化粧、服飾指向 周囲の他人によく思われようとすること。周囲に盛んに媚を売ること。演技をすること。自分が周囲によく見えるように、自分を飾る	自己評価の重視 周囲の他者ではなく、自分自身で自己を客観的に見つめなおし、自己評価を良くして行こうとする。

	化粧や服飾に注意が行く。	
406	関係保持的配慮、気づきこと。	制御的配慮、気づきこと。
	互いに、相手が、何か自分に注目してほしいというサイン（メール、ブログ書き込み等）を自分に対して送っているかどうかに常に神経を配り、リアルタイムで相手に注目していますよとすぐ返事を返すことで、相手の被注目欲求を満足させ、良好な対人関係を保持しようとすること。	対象となる人（部下とか）や物（乗り物とか）が、自分にとって道具、手段として自分に最高の利益をもたらすように適切に動作、行動しているかどうかに常に神経を配り、リアルタイムでコントロール、軌道修正する。
5	条件condition	
501	好条件、温室指向	悪条件（寒暑）の受容
	条件のよい温室の中に止まるのを好むこと。ぬるま湯を好むこと。	条件の悪い所に放り出されるのを受容して、それに何とか適応していくこと。
502	内部指向、「奥」指向、内外の区別（「膜内」指向）	代表指向、外部露出
	より環境の安定した内側に止まる、奥にいるのを好むこと。（奥様でいることを好むこと。）「袋」の中にいるのを好むこと。集団の内と外を区別すること。内外を隔てる膜がある。	代表として、対外的に露出するのを許容すること。寒暑変動の激しい、厳しい環境の外部に出ること。集団の内と外をあまり区別しないこと。
503	内輪指向、閉鎖、排他性	開放性、オープンさ
	気心の知れた親しい仲間内、身内だけで結束	誰にでも平等に開かれた空間の存在を大切に

	し、外部の人間に対して冷たい態度を取ること。ひそひそ話、内輪話を好むこと。	すること。外部の人間と親しくすること。初めて来た人も、古くからの人と同様に受け入れる。
504	集団ベースのセキュリティ重視	個人ベースのセキュリティ重視
	集団の中に変な人が入ってこないように、集団への加入条件を厳しくすること。（入試を難しくして、なかなか入れなくすること。）集団内部ではセキュリティがなあなあになって緩くなりがち。	新たに近づいてくる人物が危険かも知れないので、その場合排除、自身を護衛できるように、銃の所持とか、個人単位でのセキュリティを重視する。
6	感情emotion	
601	感情、情緒的、主観的対応	論理的、客観的対応
	相手に対して、冷静に割り切ることができず、情緒、感情を露にして対応する。思わず涙をこぼすこと。ドロドロした愛憎の世界を好むこと。相手を好き嫌いで判断すること。相手を客観的に突き放すことができない。	相手に対して、冷静、客観的に割り切って対処すること。情緒、感情を露にせず、論理、理性で攻めきろうとすること。相手を金銭勘定のような損得、コストと利益で判断すること。相手を冷たく突き放すこと。
602	生肌・粘膜的対応	「よろい」着用による対応
	感覚的な肌合い、肌触りや粘膜（口、鼻等）への働きかけを重視すること。自分自身の肌や粘膜の状態に敏感であること。相手が自分と肌に合うかどうかを気にする。	直接肌の感覚に訴えるのを回避して、肌を覆う固いよろいに身を包もうとすること。相手を判断するのに、肌への感覚を遮断すること。

603	第六感による総合的判定	要素還元による判定
	物事を判定するのに、個別の要素に分けるのではなく、第六感を駆使して、一挙に総合的に判定する。	物事を判定するのに、個別の要素へと還元して、部分的判定を積み上ることで、全体の判定につなげるのを好むこと。
7	植物plant	
701	低重心、定住、定着指向、植物的	高重心、浮上、移動、動物的
	大地、一カ所にどっしりと根や腰を下ろした状態を好むこと。重心が低い。腰が重い。定住、定着を好むこと。農耕植物栽培に従事すること。農耕民的であること。	重心が高く、ふわふわ浮いてあちこち移動する、根無し草のようなフリーな状態を好む。動物、家畜の飼育に従事すること。遊牧民、牧畜民的であること。

付録図表

※ご注意
以下のシミュレーション動画の原作者および著作権保有者は、池内満さんです。
池内さんのwebサイト　http://mike1336.web.fc2.com/
気体分子運動パターン　動画

液体分子運動パターン　動画

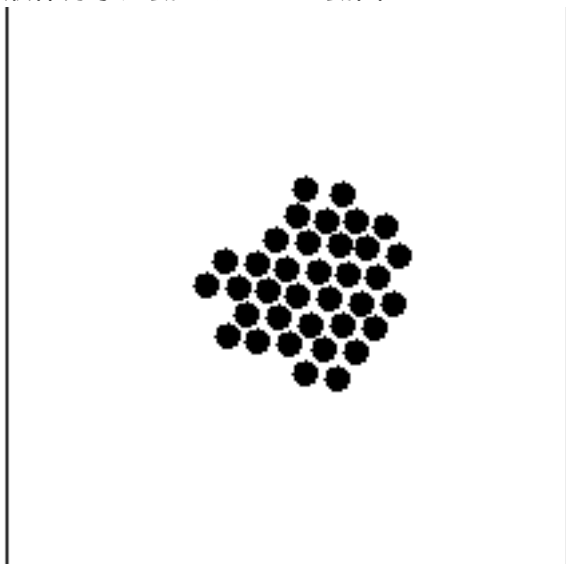
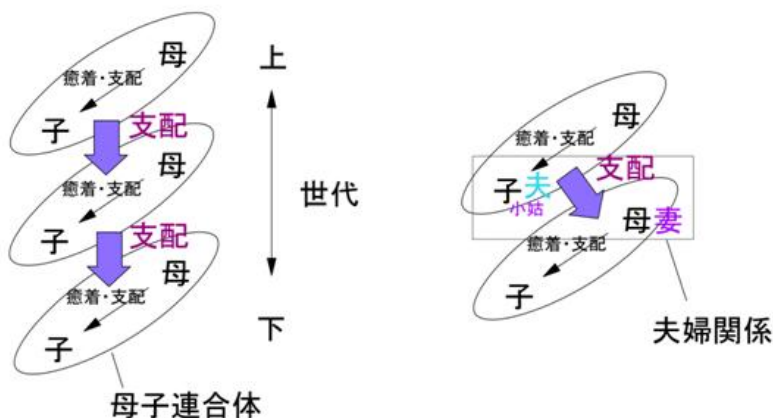
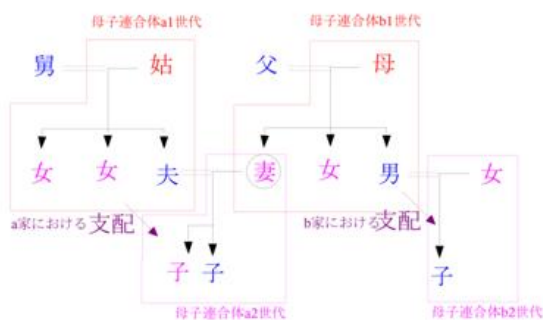



図　日本家族における母子連合体の斜め重層構造

左図は、a家の第２世代の妻（○印）（＝同時にb家の第１世代に属する）を中心に眺めた図である。

母子関係にある＝母子連合体を形成している者同士が実線と矢印で結ばれている。

a家の第１世代母子連合体がa1、第２世代がa2であり、第１世代母子連合体a1が第２世代a2を支配している。

b家の第１世代母子連合体がb1、第２世代がb2であり、第１世代母子連合体b1が第２世代b2を支配している。

図　母子連合体重層構造の家系図による説明

母が、人型の湿布（あるいは、おんぶお化け）のように、相手＝息子の背中にべったりと貼り付く。

母の薬効成分＝母性、女性性がじわじわと相手＝息子の体にしみ出して、貼り付いた相手＝息子の中枢を乗っ取り、支配する。

貼り付かれた息子は、貼り付いた母の操縦下、支配下に置かれ、操りロボットと化す。

人間湿布（息子＝男性に貼り付く日本の母）

私の書籍についての関連情報。

参考文献。

＝＝ 男女の性差。
/ 総説。

Bakan, D. The duality of human existence . Chicago: Rand-McNally. 1966.
Crandall, V. J., & Robson, S. (1960). Children's repetition choices in an intellectual achievement situation following success and failure. Journal of Genetic Psychology, 1960, 97, 161-168.(間宮1979 p178 参照)
Deaux,K.: The Behavior of Women and Men, Monterey, California: Brooks/Cole, 1976
Goldstein, MJ (1959). The relationship between coping and avoiding behavior and response to fear-arousing propaganda. Journal of Abnormal and Social Psychology, 1959, 58, 247-252.(対処的・回避的行動と恐怖を誘発する宣伝に対する反応との関係)
影山裕子 : 女性の能力開発, 日本経営出版会, 1968
間宮武 : 性差心理学, 金子書房, 1979
皆本二三江 : 絵が語る男女の性差, 東京書籍, 1986
村中 兼松 (著), 性度心理学―男らしさ・女らしさの心理 (1974年) , 帝国地方行政学会, 1974/1/1
Mitchell,G. : Human Sex Differences - A Primatologist's Perspective, Van Nostrand Reinhold Company, 1981 (鎮目恭夫訳 : 男と女の性差 サルと人間の比較, 紀伊国屋書店, 1983)
Newcomb,T.M.,Turner,R.H.,Converse,P.E. : Social Psycholgy:The Study of Human Interaction, New York: Holt,Rinehart and Winston, 1965 (古畑和孝訳 : 社会心理学 人間の相互作用の研究,岩波書店,1973)
Sarason, I.G., Harmatz, M.G., Sex differences and experimental conditions in serial learning. Journal of Personality and Social

Psychology., 1965, 1: 521-4.
Schwarz, O, 1949 The psychology of sex / by Oswald Schwarz Penguin, Harmondsworth, Middlesex.
Trudgill,P.:Sociolinguistics: An Introduction, Penguin Books, 1974(土田滋訳：言語と社会, 岩波書店, 1975)
Wallach M. A., & Caron A. J. (1959). "Attribute criteriality and sex-linked conservatism as determinants of psychological similarity. Journal of Abnormal and Social Psychology, 59, 43-50(心理的類似性の決定因としての帰属的規準性と性別関連の保守性)
Wright,F.: The effects of style and sex of consultants and sex of members in self-study groups, Small Group Behavior, 1976, 7, p433-456

東清和、小倉千加子(編) , ジェンダーの心理学, 早稲田大学出版部, 2000
宗方比佐子、佐野幸子、金井篤子(編), 女性が学ぶ社会心理学, 福村出版, 1996
諸井克英、中村雅彦、和田実, 親しさが伝わるコミュニケーション, 金子書房, 1999
D.Kimura, Sex And Cognition, MIT Press,Cambridge,Massachusetts, 1999. (野島久雄、三宅真季子、鈴木眞理子訳 (2001) 女の能力、男の能力 - 性差について科学者が答える - 新曜社)

E.Margolies,L.VGenevie, The Samson And Delilah Complex,Dodd,Mead &Company, Inc.,1986(近藤裕訳 サムソン＝デリラ・コンプレックス - 夫婦関係の心理学 - ,社会思想社,1987)

/ 各論。

// 男性単独。
E.モンテール (著), 岳野 慶作 (翻訳), 男性の心理—若い女性のために (心理学叢書) , 中央出版社, 1961/1/1
// 女性単独。
扇田 夏実 (著), 負け犬エンジニアのつぶやき～女性SE奮戦記, 技術評論社, 2004/7/6

// 男女間比較。

/// 1.能力における性差

//// 1.1 空間能力における性差

Collins,D.W. & Kimura,D.(1997) A large sex difference on a two-dimensional mental rotation task. Behavioral Neuroscience,111,845-849
Eals,M. & Silverman,I.(1994)The hunter-gatherer theory of spatial sex differences: proximate factors mediating the female advantage in recall of object arrays. Ethology & Sociobiology,15,95-105.
Galea,L.A.M. & Kimura,D.(1993) Sex differences in route learning. Personality & Individual Differences,14,53-65
Linn,M.C.,Petersen,A.C.(1985) Emergence and Characterization of Sex Differences in Spatial Ability : A Meta-Analysis. Child Development, 56, No.4, 1479-1498.
McBurney,D.H., Gaulin, S.J.C., Devineni,T. & Adams,C.(1997) Superior spatial memory of women: stronger evidence for the gathering hypothesis. Evolution & Human Behavior,18,165-174
Vandenberg,S.G. & Kuse,A.R.(1978) Mental rotations, a group test of three-dimensional spatial visualization. Perceptual & Motor Skills, 47,599-601
Watson,N.V. & Kimura,D.(1991)Nontrivial sex differences in throwing and intercepting: relation to psychometrically-defined spatial functions. Personality & Individual Differences,12,375-385

//// 1.2 数学的能力における性差

Bembow,C.P., Stanley,J.C.(1982) Consequences in high school and college of sex differences in mathematical reasoning ability : A Longtitudinal perspective. Am. Educ. Res. J. 19,598-622.
Engelhard,G.(1990) Gender differences in performance on mathematics items: evidence from USA and Thailand. Contemporary Educational Psychology,15,13-16
Hyde,J.S.,Fennema,E. & Lamon,S.J.(1990) Gender differences in mathematics performance: a meta-analysis. Psychological Bulletin,107,139-155.
Hyde,J.S.(1996) Half the human experience : The Psychology of woman. 5th ed., Lexington, Mass.: D.C.Heath.
Jensen,A.R.(1988)Sex differences in arithmetic computation and reasoning in prepubertal boys and girls. Behavioral & Brain Sciences,11,198-199
Low,R. & Over,R.(1993)Gender differences in solution of algebraic

word problems containing irrelevant information. Journal of Educational Psychology,85,331-339.
Stanley,J.C., Keating,D.P., Fox,L.H. (eds.)(1974) Mathematical talent: Discovery, description, and development. Johns Hopkins University Press, Baltimore.

//// 1.3 言語能力における性差

Bleecker,M.L.,Bolla-Wilson,K. & Meyers,D.A.,(1988)Age related sex differences in verbal memory. Journal of Clinical Psychology,44,403-411.
Bromley(1958) Some effects of age on short term learning and remembering. Journal of Gerontology,13,398-406.
Duggan,L.(1950)An experiment on immediate recall in secondary school children. British Journal of Psychology,40,149-154.
Harshman,R., Hampson,E. & Berenbaum,S.(1983) Individual differences in cognitive abilities and brain organization,Part I: sex and handedness differences in ability. Canadian Journal of Psychology,37,144-192.
Hyde,J.S. & Linn,M.C.(1988) Gender differences in verbal ablility:A Meta-analysis. Psychological Bulletin, 104, No.1,53-69.
Kimura,D.(1994)Body asymmetry and intellectual pattern. Personality & Individual Differences,17,53-60.
Kramer,J.H.,Delis,D.C. & Daniel,M.(1988) Sex differences in verbal learning. Journal of Clinical Psychology,44,907-915.
McGuinness,D.,Olson,A. & Chapman,J.(1990)Sex differences in incidental recall for words and pictures. Learning & Individual Differences,2,263-285.

//// 1.4 運動能力における性差

Denckla,M.B.(1974)Development of motor co-ordination in normal children. Developmental Medicine & Child Neurology,16,729-741.
Ingram,D.(1975)Motor asymmetries in young children. Neuropsychologia,13,95-102
Nicholson,K.G. & Kimura.D.(1996) Sex differences for speech and manual skill.Perceptual & Motor Skills,82,3-13.
Kimura,D. & Vanderwolf,C.H. (1970) The relation between hand preference and the performance of individual finger movements by left and right hands. Brain,93,769-774

Lomas,J. & Kimura, D.(1976) Intrahemispheric interaction between speaking and sequential manual activity.
Neuropsychologia,14,23-33.
Watson,N.V. & Kimura,D.(1991)Nontrivial sex differences in throwing and intercepting: relation to psychometrically-defined spatial functions. Personality & Individual Differences,12,375-385

//// 1.5 知覚能力における性差

Burg,A.(1966)Visual acuity as measured by dynamic and static tests. Journal of Applied Psychology,50,460-466.
Burg,A.(1968)Lateral visual field as related to age and sex. Journal of Applied Psychology,52,10-15.
Denckla,M.B. & Rudel,R.(1974) Rapid "automatized"naming of pictured objects,colors,letters and numbers by normal children. Cortex,10,186-202.
Dewar,R.(1967)Sex differences in the magnitude and practice decrement of th Muller-Lyer illusion. Psychonomic Science,9,345-346.
DuBois,P.H.(1939)The sex difference on the color naming test. American Journal of Psychology,52,380-382.
Ghent-Braine,L.(1961)Developmental changes in tactual thresholds on dominant and nondominant sides. Journal of Comparative & Physiological Psychology,54,670-673.
Ginsburg,N.,Jurenovskis,M. & Jamieson,J.(1982) Sex differences in critical flicker frequency. Perceptual & Motor Skills,54,1079-1082.
Hall,J.(1984)Nonverbal sex differences. Baltimore:Johns Hopkins.
McGuinness, D.(1972)Hearing: individual differences in perceiving. Perception,1,465-473.
Ligon,E.M.(1932)A genetic study of color naming and word reading. American Journal of Psychology,44,103-122.
Velle,W.(1987)Sex differences in sensory functions. Perspectives in Biology & Medicine,30,490-522.
Weinstein,S. & Sersen, E.A.(1961)Tactual sensitivity as a function of handedness and laterality. Journal of Comparative & Physiological Psychology,54,665-669.
Witkin,H.A.(1967)A cognitive style approach to cross-cultural research. International Journal of Psychology,2,233-250.

/// 2.パーソナリティの性差

Maccoby, E.E. & Jacklin, C.N.(1974) The Psychology of sex differences. Stanford,CA:Stanford University Press.

/// 3.社会的行動の性差

Brehm,J.W.(1966)A theory of psychological reactance. Academic Press.
Cacioppo,J.T. & Petty,R.E.(1980) Sex differences in influenceability:Toward specifying the underlying processes. Personality and Social Psychology Bulletin,6,651-656
Caldwell,M.A., & Peplau,L.A.(1982) Sex Differences in same-sex friendships. Sex Roles,8,721-732.
Chesler,M.A. & Barbarin,O.A.(1985) Difficulties iof providing help in crisis: Relationships between parents of children with cancer and their friends. Journal of Social Issues,40,113-134.
大坊郁夫(1988)異性間の関係崩壊についての認知的研究,日本社会心理学会第29回発表論文集,64.
Eagly,A.H.(1978) Sex differences in influenceability.Psychological Bulletin,85,86-116.
Eagly,A.H. & Carli,L.L.(1981) Sex of researchers and sex-typed communications as determinants of sex differences in influenceability:A meta-analysis of social influence studies. Psychological Bulletin,90,1-20.
Eagly,A.H. & Johnson,B.T.(1990) Gender and leadership style: A meta-analysis. Psychological Bulletin,108,233-256.
Hall,J.A.(1984) Nonverbal sex differences:Communication accuracy and expressive style. Baltimore:John Hopkins University Press.
Hays,R.B.(1984) The development and maintenance of friendship. Journal of Personal and Social Relationships,1,75-98.
Horner,M.S.(1968)Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situation. Unpublished Ph.D. thesis. University of Michigan.
Jourard,S.M.(1971) Self-disclosure:An experimental analysis of the transparent self. New York:Wiley & Sons, Inc.
Jourard,S.M & Lasakow,P.(1958) Some factors in self-disclosure. Journal of Abnormal and Social Psychology, 56, 91-98.
Latane',B. & Bidwell,L.D.(1977) Sex and affiliation in college cafeteria.Personality and Social Psychology Bulletin,3,571-574
松井豊(1990)青年の恋愛行動の構造,心理学評論,33,355-370.

Nemeth,C.J. Endicott,J. & Wachtler,J.(1976) From the '50s to the '70s:Women in jury deliberations,Sociometry,39,293-304.
Rands,M. & Levinger, G. (1979)Implicit theory of relationship: An intergenerational study. Journal of Personality and Social Psychology,37,645-661.
坂田桐子、黒川正流(1993) 地方自治体における職場のリーダーシップ機能の性差の研究-「上司の性別と部下の性別の組合せ」からの分析,産業・組織心理学研究,7,15-23.
総務庁青少年対策本部(1991) 現代の青少年 - 第 5 回青少年の連帯感などに関する調査報告書,大蔵省印刷局.
上野徳美(1994) 説得的コミュニケーションに対する被影響性の性差に関する研究,実験社会心理学研究,34,195-201
Winstead,B.A.(1986) Sex differences in same-sex friendships. In V.J.Derlega & B.A.Winstead(Eds.) Friendship and social interaction. New York:Springer-Verlag.Pp.81-99
Winstead,B.A., Derlega,V.J., Rose,S. (1997) Gender and Close Relationships. Thousand Oaks, California:Sage Publications.
山本真理子、松井豊、山成由紀子(1982) 認知された自己の諸側面の構造,教育心理学研究,30,64-68

＝＝ 世界の社会の分類。男女間における、優位性の比較。
/ 一般。
富永 健一 (著), 社会学原理, 岩波書店, 1986/12/18
岩井 弘融 (著), 社会学原論, 弘文堂, 1988/3/1

笠信太郎, ものの見方について, 1950, 河出書房
伊東俊太郎 (著) , 比較文明 UP選書 , 東京大学出版会, 1985/9/1

/ 気候。
和辻 哲郎 (著), 風土: 人間学的考察, 岩波書店, 1935
鈴木秀夫, 森林の思考・砂漠の思考, 1978, 日本放送出版協会
石田英一郎, 桃太郎の母 比較民族学的論集 , 法政大学出版局 , 1956
石田英一郎, 東西抄 - 日本・西洋・人間, 1967, 筑摩書房
松本 滋 (著), 父性的宗教 母性的宗教 (UP選書) , 東京大学出版会, 1987/1/1
ハンチントン (著), 間崎 万里 (翻訳), 気候と文明 (1938年) (岩波文庫) , 岩波書店, 1938
安田 喜憲 (著), 大地母神の時代―ヨーロッパからの発想 (角川選書)

, 角川書店, 1991/3/1
安田 喜憲 (著), 気候が文明を変える (岩波科学ライブラリー (7)) , 岩波書店, 1993/12/20

鈴木 秀夫 (著), 超越者と風土 , 原書房, 2004/1/1
鈴木 秀夫 (著), 森林の思考・砂漠の思考 (NHKブックス 312) , NHK出版1978/3/1
鈴木 秀夫 (著), 風土の構造, 原書房, 2004/12/1
梅棹 忠夫 (著), 文明の生態史観, 中央公論社, 1967

ラルフ・リントン (著), 清水 幾太郎 (翻訳), 犬養 康彦 (翻訳), 文化人類学入門 (現代社会科学叢書), 東京創元社, 1952/6/1
祖父江孝男『文化とパーソナリティ』弘文堂，1976
F.L.K.シュー (著), 作田 啓一 (翻訳), 浜口 恵俊 (翻訳), 比較文明社会論—クラン・カスト・クラブ・家元 (1971年), 培風館，1970．

J□J□バハオーフェン (著), 吉原 達也 (翻訳), 母権論序説 付・自叙伝, 創樹社, 1989/10/20

阿部 一, 家族システムの風土性, 東洋学園大学紀要 (19), 91-108, 2011-03

/ 移動性。

大築立志, 手の日本人、足の西欧人, 1989, 徳間書店
前村 奈央佳, 移動と定住に関する心理的特性の検討：異文化志向と定住志向の測定および関連性について, 関西学院大学先端社会研究所紀要, 6号 pp.109-124, 2011-10-31
浅川滋男, 東アジア漂海民と家船居住, 鳥取環境大学, 紀要, 創刊号, 2003.2 pp41-60

/ 食糧の確保の手段。

千葉徳爾, 農耕社会と牧畜社会, 山田英世 (編), 風土論序説 (比較思想・文化叢書) , 国書刊行会, 1978/3/1
大野 盛雄 (著), アフガニスタンの農村から—比較文化の視点と方法 (1971年) (岩波新書) , 岩波書店, 1971/9/20
梅棹 忠夫 (著), 狩猟と遊牧の世界—自然社会の進化, 講談社, 1976/6/1

志村博康 (著), 農業水利と国土, 東京大学出版会, 1987/11/1

/ 心理。
Triandis H.C., Individualism & Collectivism, Westview Press, 1995, (H.C. トリアンディス (著), Harry C. Triandis (原著), 神山 貴弥 (翻訳), 藤原 武弘 (翻訳), 個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化, 北大路書房, 2002/3/1)
Yamaguchi, S., Kuhlman, D. M., & Sugimori, S. (1995). Personality correlates of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures. Journal of Cross-Cultural Psychology, 26, 658-672
Markus H.R.,Kitayama,S., Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. Psychological Review, 98, pp224-253 1991

千々岩 英彰 (編集), 図解世界の色彩感情事典—世界初の色彩認知の調査と分析, 河出書房新社, 1999/1/1

＝＝ 男性優位社会。移動生活。遊牧と牧畜。気体。

/ 欧米諸国。全般。
星 翔一郎 (著), 国際文化教育センター (編集), 外資系企業 就職サクセスブック, ジャパンタイムズ, 1986/9/1

/ 西欧。
// 単独社会。
// 社会間比較。
西尾幹二, ヨーロッパの個人主義, 1969, 講談社
会田 雄次 (著), 『アーロン収容所：西欧ヒューマニズムの限界』中公新書, 中央公論社 1962年
池田 潔 (著), 自由と規律: イギリスの学校生活 (岩波新書) , 岩波書店, 1949/11/5

鯖田 豊之 (著), 肉食の思想—ヨーロッパ精神の再発見 (中公新書 92) , 中央公論社, 1966/1/1
八幡 和郎 (著), フランス式エリート育成法—ENA留学記 (中公新書 (725)) , 中央公論社, 1984/4/1
木村 治美 (著), 新交際考—日本とイギリス, 文藝春秋, 1979/11/1
森嶋 通夫 (著), イギリスと日本—その教育と経済 (岩波新書 黄版 29) , 岩波書店, 2003/1/21
/ アメリカ。

// 単独社会。
松浦秀明, 米国さらりーまん事情, 1981, 東洋経済新報社
Stewart, E.C., American Cultural Patterns A Cross-Cultural Perspectives, 1972, Inter-cultural Press (久米昭元訳, アメリカ人の思考法, 1982, 創元社)
吉原 真里 (著), Mari Yoshihara (著), アメリカの大学院で成功する方法―留学準備から就職まで (中公新書), 中央公論新社, 2004/1/1
リチャード・H. ロービア (著), Richard H. Rovere (原著), 宮地 健次郎 (翻訳), マッカーシズム (岩波文庫) , 岩波書店, 1984/1/17
G.キングスレイ ウォード (著), 城山 三郎 (翻訳), ビジネスマンの父より息子への30通の手紙, 新潮社, 1987/1/1
長沼英世, ニューヨークの憂鬱ー豊かさと快適さの裏側, 中央公論社, 1985
八木 宏典 (著), カリフォルニアの米産業, 東京大学出版会, 1992/7/1
// 社会間比較。
/ ユダヤ。
// 単独社会。
旧約聖書。
新約聖書。
中川 洋一郎, キリスト教・三位一体論の遊牧民的起源―イヌの《仲介者》化によるセム系一神教からの決別―, 経済学論纂 (中央大学) 第60巻第 5 ・ 6 合併号 (2020年 3 月) ,pp.431-461
トマス・ア・ケンピス (著), 大沢 章 (翻訳), 呉 茂一 (翻訳), キリストにならいて (岩波文庫) , 岩波書店, 1960/5/25
// 社会間比較。
/ 中東。
// 単独社会。
クルアーン。コーラン。
鷹木 恵子 U.A.E.地元アラブ人の日常生活にみる文化変化 : ドバイでの文化人類学的調査から http://id.nii.ac.jp/1509/00000892/
Syouwa63nenn
// 社会間比較。
後藤 明 (著), メッカ―イスラームの都市社会 (中公新書 1012) , 中央公論新社, 1991/3/1
片倉もとこ『「移動文化考」 イスラームの世界をたずねて 』日本経済新聞社、1995年
片倉もとこ『イスラームの日常世界』岩波新書 , 1991 .
牧野 信也 (著), アラブ的思考様式, 講談社, 1979/6/1
井筒 俊彦 (著), イスラーム文化－その根柢にあるもの , 岩波書店,

1981/12/1
/ モンゴル。
// 単独社会。
鯉渕 信一 (著), 騎馬民族の心―モンゴルの草原から (NHKブックス) , 日本放送出版協会, 1992/3/1
// 社会間比較。

＝＝ 女性優位社会。定住生活。農耕。液体。
/ 東アジア。
山口 勧 (編集), 社会心理学―アジア的視点から (放送大学教材) , 放送大学教育振興会, 1998/3/1
山口 勧 (編集), 社会心理学―アジアからのアプローチ, 東京大学出版会, 2003/5/31
石井 知章 (著), K□A□ウィットフォーゲルの東洋的社会論, 社会評論社, 2008/4/1
/ 日本。
// 単独社会。

/// 文献調査。
南博, 日本人論 - 明治から今日まで , 岩波書店, 1994
青木保, 「日本文化論」の変容-戦後日本の文化とアイデンティティー-, 中央公論社, 1990

/// 社会全般。
//// 著者が、日本人の場合。
浜口恵俊 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社 1977
阿部 謹也 (著), 「世間」とは何か (講談社現代新書) , 講談社, 1995/7/20
川島武宣, 日本社会の家族的構成, 1948, 学生書房

中根千枝, タテ社会の人間関係, 講談社, 1967
木村敏, 人と人との間, 弘文堂, 1972
山本七平 (著), 「空気」の研究, 文藝春秋, 1981/1/1
会田 雄次 (著), 日本人の意識構造 (講談社現代新書) , 講談社, 1972/10/25
石田英一郎, 日本文化論 筑摩書房 1969
荒木博之, 日本人の行動様式 -他律と集団の論理- , 講談社, 1973

吉井博明 情報化と現代社会[改訂版] 1997 北樹出版

//// 著者が、日本人以外の場合。
///// 欧米諸国からの視点。
Benedict,R., The Chrysanthemum and the Sword : Patterns of Japanese Culture, Boston Houghton Mifflin, 1948 (長谷川松治訳, 菊と刀 - 日本文化の型, 社会思想社, 1948)
Caudill,W., Weinstein,H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America, Psychiatry,32 1969
Clark,G.The Japanese Tribe:Origins of a Nation's Uniqueness, 1977(村松増美訳 日本人 - ユニークさの源泉 - , サイマル出版会 1977)
Ederer,G., Das Leise Laecheln Des Siegers, 1991, ECON Verlag(増田靖訳 勝者・日本の不思議な笑い, 1992 ダイヤモンド社)
Kenrick,D.M., Where Communism Works: The Success of Competitive-Communism In Japan,1988,Charles E. Tuttle Co., Inc., (ダグラス・M. ケンリック (著), 飯倉 健次 (翻訳), なぜ“共産主義”が日本で成功したのか, 講談社, 1991/11/1)
Reischauer,E.O., The Japanese Today: Change and Continuity,1988, Charles E. Tuttle Co. Inc.
W.A.グロータース (著), 柴田 武 (翻訳), 私は日本人になりたい—知りつくして愛した日本文化のオモテとウラ (グリーン・ブックス 56) , 大和出版, 1984/10/1

///// 東アジアからの視点。
李 御寧 (著), 「縮み」志向の日本人, 学生社, 1984/11/1

/// 心理。
安田三郎「閥について——日本社会論ノート(3)」(『現代社会学3』2巻1号所収・1975・講談社)
木村敏, 人と人との間 - 精神病理学的日本論, 1972, 弘文堂
丸山真男, 日本の思想, 1961, 岩波書店
統計数理研究所国民性調査委員会 (編集), 日本人の国民性〈第5〉戦後昭和期総集, 出光書店, 1992/4/1

/// コミュニケーション。
芳賀綏, 日本人の表現心理, 中央公論社, 1979

/// 歴史。
R.N.ベラー (著), 池田 昭 (翻訳), 徳川時代の宗教 (岩波文庫), 岩波書店, 1996/8/20
勝俣 鎮夫 (著), 一揆 (岩波新書) , 岩波書店, 1982/6/21
永原 慶二 (著), 日本の歴史〈10〉下克上の時代, 中央公論社, 1965年
戸部 良一 (著), 寺本 義也 (著), 鎌田 伸一 (著), 杉之尾 孝生 (著), 村井 友秀 (著), 野中 郁次郎 (著), 失敗の本質―日本軍の組織論的研究, ダイヤモンド社, 1984/5/1

/// 民俗。
宮本 常一 (著), 忘れられた日本人 (岩波文庫) , 岩波書店, 1984/5/16

/// 食糧の確保。
大内力 (著), 金沢夏樹 (著), 福武直 (著) , 日本の農業 UP選書, 東京大学出版会, 1970/3/1

/// 地域。
//// 村落。
中田 実 (編集), 坂井 達朗 (編集), 高橋 明善 (編集), 岩崎 信彦 (編集), 農村 (リーディングス日本の社会学) , 東京大学出版会, 1986/5/1
蓮見 音彦 (著), 苦悩する農村―国の政策と農村社会の変容, 有信堂高文社, 1990/7/1
福武直 (著) , 日本農村の社会問題 UP選書, 東京大学出版会, 1969/5/1
余田 博通 (編集), 松原 治郎 (編集), 農村社会学 (1968年) (社会学選書) , 川島書店, 1968/1/1
今井幸彦 編著, 日本の過疎地帯 (1968年) (岩波新書), 岩波書店, 1968-05

きだみのる (著), 気違い部落周游紀行 (冨山房百科文庫 31), 冨山房, 1981/1/30
きだ みのる (著), にっぽん部落 (1967年) (1967年) (岩波新書)

//// 都市。

鈴木広 高橋勇悦 篠原隆弘 編, リーディングス日本の社会学 7 都市, 東京大学出版会, 1985/11/1
倉沢 進 (著), 秋元 律郎 (著), 町内会と地域集団 (都市社会学研究叢書) , ミネルヴァ書房, 1990/9/1
佐藤 文明 (著), あなたの「町内会」総点検 [三訂増補版] —地域のトラブル対処法 (プロブレムQ&A), 緑風出版, 2010/12/1

//// エリア毎の特色。
京都新聞社 (編さん), 京男・京おんな, 京都新聞社, 1984/1/1
丹波 元 (著), こんなに違う京都人と大阪人と神戸人 (PHP文庫) , PHP研究所, 2003/3/1
サンライズ出版編集部 (編集), 近江商人に学ぶ, サンライズ出版, 2003/8/20

/// 血縁関係。
有賀 喜左衛門 (著), 日本の家族 (1965年) (日本歴史新書) , 至文堂, 1965/1/1
光吉 利之 (編集), 正岡 寛司 (編集), 松本 通晴 (編集), 伝統家族 (リーディングス 日本の社会学) , 東京大学出版会, 1986/8/1

/// 政治。
石田雄, 日本の政治文化 - 同調と競争, 1970, 東京大学出版会
京極純一, 日本の政治, 1983, 東京大学出版会

/// ルール。法律。
青柳文雄, 日本人の罪と罰, 1980, 第一法規出版
川島武宣, 日本人の法意識 (岩波新書 青版A-43) , 岩波書店, 1967/5/20

/// 行政。
辻清明 新版 日本官僚制の研究 東京大学出版会 1969
藤原 弘達 (著), 官僚の構造 (1974年) (講談社現代新書) , 講談社, 1974/1/1
井出嘉憲 (著), 日本官僚制と行政文化—日本行政国家論序説, 東京大学出版会, 1982/4/1
竹内 直一 (著), 日本の官僚—エリート集団の生態 (現代教養文庫) , 社会思想社, 1988/12/1
教育社 (編集), 官僚—便覧 (1980年) (教育社新書—行政機構シリーズ〈122〉), 教育社, 1980/3/1
加藤栄一, 日本人の行政—ウチのルール (自治選書), 第一法規出版,

1980/11/1
新藤 宗幸 (著), 技術官僚—その権力と病理 (岩波新書), 岩波書店, 2002/3/20
新藤 宗幸 (著), 行政指導—官庁と業界のあいだ (岩波新書) , 岩波書店, 1992/3/19

武藤 博己 (著), 入札改革—談合社会を変える (岩波新書) , 岩波書店, 2003/12/19

宮本政於, お役所の掟, 1993, 講談社

/// 経営。
間宏,日本的経営 - 集団主義の功罪,日本経済新聞社,1973
岩田龍子, 日本の経営組織, 1985, 講談社
高城 幸司 (著), 「課長」から始める 社内政治の教科書, ダイヤモンド社, 2014/10/31

/// 教育。
大槻 義彦 (著), 大学院のすすめ—進学を希望する人のための研究生活マニュアル, 東洋経済新報社, 2004/2/13
山岡栄市 (著), 人脈社会学—戦後日本社会学史 (御茶の水選書) , 御茶の水書房, 1983/7/1

/// スポーツ。
Whiting, R., The Chrysanthemum and the Bat 1977 Harper Mass Market Paperbacks (松井みどり訳, 菊とバット 1991 文藝春秋)

/// 性差。
//// 母性。母親。
Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969

河合隼雄, 母性社会日本の病理, 中央公論社 1976
佐々木 孝次 (著), 母親と日本人, 文藝春秋, 1985/1/1
小此木 啓吾 (著), 日本人の阿闍世コンプレックス, 中央公論社, 1982
斎藤学, 『「家族」という名の孤独』講談社 1995
山村賢明, 日本人と母—文化としての母の観念についての研究, 東洋

館出版社, 1971/1/1
土居健郎, 「甘え」の構造, 1971, 弘文堂

山下 悦子 (著), 高群逸枝論—「母」のアルケオロジー, 河出書房新社, 1988/3/1
山下 悦子 (著), マザコン文学論—呪縛としての「母」 (ノマド叢書) , 新曜社, 1991/10/1

中国新聞文化部 (編集), ダメ母に苦しめられて (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1999/1/1

加藤秀俊, 辛口教育論 第四回 衣食住をなくした家, 食農教育 200109, 農山漁村文化協会

//// 女性。
木下 律子 (著), 妻たちの企業戦争 (現代教養文庫) , 社会思想社, 1988/12/1
木下律子 (著), 王国の妻たち—企業城下町にて, 径書房, 1983/8/1
中国新聞文化部 (編集), 妻の王国—家庭内“校則”に縛られる夫たち (女のココロとカラダシリーズ), ネスコ, 1997/11/1

//// 男性。
中国新聞文化部 (編集), 長男物語—イエ、ハハ、ヨメに縛られて (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1998/7/1
中国新聞文化部 (編集), 男が語る離婚—破局のあとさき (女のココロとカラダシリーズ) , ネスコ, 1998/3/1

// 社会間比較。
/// 欧米諸国との比較。
山岸俊男, 信頼の構造, 1998, 東京大学出版会
松山幸雄「勉縮」のすすめ, 朝日新聞社, 1978
木村尚三郎, ヨーロッパとの対話, 1974, 日本経済新聞社
栗本 一男 (著), 国際化時代と日本人—異なるシステムへの対応 (NHKブックス 476) , 日本放送出版協会, 1985/3/1
/// 社会の特殊性。その有無についての検討。
高野陽太郎、纓坂英子, " 日本人の集団主義" と" アメリカ人の個人主義" -通説の再検討-心理学研究vol.68 No.4,pp312-327,1997
杉本良夫、ロス・マオア, 日本人は「日本的」か - 特殊論を超え多

元的分析へ - , 1982, 東洋経済新報社
/// 血縁関係。
増田光吉, アメリカの家族・日本の家族, 1969, 日本放送出版協会
中根千枝『家族を中心とする人間関係』講談社 , 1977
/// コミュニケーション。
山久瀬 洋二 (著), ジェイク・ロナルドソン (翻訳), 日本人が誤解される100の言動 100 Cross-Cultural Misunderstandings Between Japanese People and Foreigners【日英対訳】 (対訳ニッポン双書) , IBCパブリッシング, 2010/12/24
鈴木 孝夫 (著), ことばと文化 (岩波新書) , 岩波書店, 1973/5/21
/// 独創性。
西沢潤一, 独創は闘いにあり, 1986, プレジデント社
江崎玲於奈, アメリカと日本 - ニューヨークで考える, 1980, 読売新聞社
乾侑, 日本人と創造性, - 科学技術立国実現のために, 1982, 共立出版
S.K.ネトル、桜井邦朋, 独創が生まれない - 日本の知的風土と科学, 1989, 地人書館

/// 経営。
Abegglen, J.C.,The Japanese Factory:Aspects of Its Social Organization,Free Press 1958 (占部都美 監訳 「日本の経営」 ダイヤモンド社 1960)
林 周二, 経営と文化, 中央公論社, 1984
太田肇 (著) , 個人尊重の組織論, 企業と人の新しい関係 (中公新書) , 中央公論新社, 1996/2/25
/// 保育。
Caudill,W., Weinstein, H., Maternal Care and Infant Behavior in Japan and America Psychiatry,32 1969
/// 教育。
岡本 薫 (著), 新不思議の国の学校教育—日本人自身が気づいていないその特徴, 第一法規, 2004/11/1
宮智 宗七 (著), 帰国子女—逆カルチュア・ショックの波紋 (中公新書) 中央公論社, 1990/1/1
グレゴリー・クラーク (著), Gregory Clark (原著), なぜ日本の教育は変わらないのですか? , 東洋経済新報社, 2003/9/1
恒吉僚子, 人間形成の日米比較 - かくれたカリキュラム, 1992, 中央公論社
/// 性差。
//// 女性。

杉本 鉞子 (著), 大岩 美代 (翻訳), 武士の娘 (筑摩叢書 97) , 筑摩書房, 1967/10/1
//// 男性。
グスタフ・フォス (著), 日本の父へ, 新潮社, 1977/3/1
/ 韓国。
// 単独社会。
朴 泰赫 , 醜い韓国人, —われわれは「日帝支配」を叫びすぎる (カッパ・ブックス) 新書 – , 光文社, 1993/3/1
朴 承薫 (著), 韓国 スラングの世界, 東方書店, 1986/2/1
// 社会間比較。
コリアンワークス, 知れば知るほど理解が深まる「日本人と韓国人」なるほど事典—衣食住、言葉のニュアンスから人づきあいの習慣まで (PHP文庫) 文庫 – , PHP研究所, 2002/1/1
造事務所 , こんなに違うよ！ 日本人・韓国人・中国人 (PHP文庫), PHP研究所 (2010/9/30)
/ 中国。
// 単独社会。
/// 社会全般。
林 松濤 (著), 王 怡韡 (著), 舩山 明音 (著) , 日本人が知りたい中国人の当たり前, 中国語リーディング, 三修社, 2016/9/20
/// 心理。
園田茂人, 中国人の心理と行動, 2001, 日本放送出版協会
デイヴィッド・ツェ (著), 吉田 茂美 (著), 関係(グワンシ) 中国人との関係のつくりかた , ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2011/3/16
/// 歴史。
加藤 徹 (著), 西太后—大清帝国最後の光芒 (中公新書) 新書 – , 中央公論新社, 2005/9/1
宮崎 市定 (著), 科挙—中国の試験地獄 (中公新書 15) , 中央公論社, 1963/5/1
/// 血縁関係。
瀬川 昌久, 現代中国における宗族の再生と文化資源化 東北アジア研究 18 pp.81-97 2014-02-19
// 社会間比較。
邱 永漢 (著), 騙してもまだまだ騙せる日本人—君は中国人を知らなさすぎる, 実業之日本社, 1998/8/1
邱永漢 (著) , 中国人と日本人, 中央公論新社, 1993
/ ロシア。
// 単独社会。
/// 社会全般。

ヘドリック スミス (著), 飯田 健一 (翻訳), 新・ロシア人〈上〉, 日本放送出版協会, 1991/2/1
ヘドリック スミス (著), 飯田 健一 (翻訳), 新・ロシア人〈下〉, 日本放送出版協会, 1991/3/1
/// 歴史。
伊賀上 菜穂, 結婚儀礼に現れる帝政末期ロシア農民の親族関係：記述資料分析の試み スラヴ研究, 49, 179-212 2002
奥田 央, 1920年代ロシア農村の社会政治的構造（１）, 村ソヴェトと農民共同体, 東京大学, 経済学論集, 80 1-2, 2015-7 https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp › econ0800102
大矢 温, スラヴ派の共同体論における「ナショナル」意識 - 民族意識から国民意識への展開 - , 札幌法学 29 巻 1・2 合併号（2018）, pp.31-53
// 社会間比較。
/// 心理。
アレックス インケルス (著), Alex Inkeles (原著), 吉野 諒三 (翻訳), 国民性論—精神社会的展望, 出光書店, 2003/9/1
服部 祥子 (著), 精神科医の見たロシア人 (朝日選書 245), 朝日新聞社出版局, 1984/1/1
/// 民俗。
アレクサンドル・プラーソル, ロシアと日本：民俗文化のアーキタイプを比較して, 新潟国際情報大学情報文化学部紀要第10号、2007.
/// 血縁関係。
高木正道, ロシアの農民と中欧の農民, ——家族形態の比較——, 法経研究, 42巻1号 pp.1-38, 1993
/// 経営。
宮坂 純一, ロシアではモチベーションがどのような内容で教えられているのか, 社会科学雑誌』第 5 巻（2012年11月）—— 503-539
宮坂 純一, 日ロ企業文化比較考,『社会科学雑誌』第 18 巻（2017 年 9 月）——, pp.1-48
/// 性差。
Д.Х. Ибрагимова, Кто управляет деньгами в российских семьях?, Экономическая социология. Т. 13. № 3. Май 2012, pp22-56

/ 東南アジア。
// 単独社会。
丸杉孝之助, 東南アジアにおける農家畜産と農業経営, 熱帯農業, 19(1), 1975 pp.46-49
中川 剛 (著), 不思議のフィリピン—非近代社会の心理と行動 (NHK

ブックス) , 日本放送出版協会, 1986/11/1
// 社会間比較。

＝＝ 液体。
/ 液体の性質。液体の動き。
小野周 著, 温度とはなにか , 岩波書店、1971
小野 周 (著), 表面張力 (物理学one point 9), 共立出版, 1980/10/1
イーゲルスタッフ (著), 広池 和夫 (翻訳), 守田 徹 (翻訳), 液体論入門 (1971年) (物理学叢書) , 吉岡書店, 1971
上田 政文 (著), 湿度と蒸発―基礎から計測技術まで, コロナ社, 2000/1/1
稲松 照子 (著), 湿度のおはなし, 日本規格協会, 1997/8/1
伊勢村 寿三 (著), 水の話 (化学の話シリーズ (6)) , 培風館, 1984/12/1
力武常次 (著), 基礎からの物理 総合版 (チャート式シリーズ) , 数研出版, 数研出版, 1986/1/1
野村 祐次郎 (著), 小林 正光 (著), 基礎からの化学 総合版 (チャート式・シリーズ) , 数研出版, 1985/2/1
物理学辞典編集委員会 , 物理学辞典 改訂版 , 培風館, 1992
池内満, 分子のおもちゃ箱 , 2008年1 月19日 http://mike1336.web.fc2.com/ (2008年2月23日)
/ 液体の知覚。
大塚巌 (2008). ドライ、ウェットなパーソナリティの認知と気体、液体の運動パターンとの関係. パーソナリティ研究, 16, 250-252

＝＝ 生命。
/ 総論。
鈴木孝仁, 本川達雄, 鷲谷いづみ, チャート式シリーズ, 新生物 生物基礎・生物 新課程版, 数研出版, 2013/2/1
/ 遺伝子。
リチャード・ドーキンス【著】，日高敏隆，岸由二，羽田節子，垂水雄二【訳】, 利己的な遺伝子, 紀伊國屋書店, 1991/02/28
/ 精子。卵子。
緋田 研爾 (著), 精子と卵のソシオロジー―個体誕生へのドラマ (中公新書) 中央公論社, 1991/3/1
/ 神経系。
二木 宏明 (著), 脳と心理学―適応行動の生理心理学 (シリーズ脳の科学) , 朝倉書店, 1984/1/1

山鳥 重 (著), 神経心理学入門, 医学書院, 1985/1/1
伊藤 正男 (著), 脳の設計図 (自然選書) , 中央公論社, 1980/9/1
D.O.ヘッブ (著), 白井 常 (翻訳), 行動学入門―生物科学としての心理学 (1970年) , 紀伊国屋書店, 1970/1/1
// 知覚。
岩村 吉晃 (著), タッチ (神経心理学コレクション), 医学書院, 2001/4/1
松田 隆夫 (著), 知覚心理学の基礎, 培風館, 2000/7/1
// パーソナリティ。
Murray,H.A., 1938, Exploration in personality:A clinical and experimental study of fifty men of collegeage.
Schacter, S., 1959, The Psychology of affiliation.Stanford University press.
三隅三不二, 1978, リーダーシップの科学, 有斐閣
Fiedler,F.E., 1973, The trouble with leadership training is that it doesn't train leaders-by. Psychology Today Feb(山本憲久訳 1978 リーダーシップを解明する 岡堂哲雄編 現代のエスプリ131: グループ・ダイナミクス 至文堂).
Snyder,M., 1974, The self-monitoring of expssive behavior. Journal of Personality and Social Psychology, 30, 526-537.
Fenigstein, A., Scheier,M.F., & Buss,A.H., 1975, Public and private self-consciousness: Assessment and theory. Journal of Consulting and Clinical Psychology,43,522-527.
押見輝男, 自分を見つめる自分-自己フォーカスの社会心理学, サイエンス社, 1992
Wicklund, R.A., & Duval,S. 1971 Opinion change and performance facilitation as a result of objective self-awareness. Journal of Experimental Social Psychology,7,319-342.
Jourard, S.M. 1971, The transparent self, rev.ed.Van Nostrand Reinhold(岡堂哲雄訳 1974 透明なる自己 誠信書房).
Brehm, J.W.,1966, A Theory of psychological reactance. Academicpss.
Toennies, F.,1887, Gemeinshaft und Gesellshaft, Leipzig,(杉之原寿一訳 「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」 1957 岩波書店)
McCrae, R. R., Costa, P. T., Jr., 1987, Validation of the five-factor model of personality across instruments and observers., Journal of Personality and Social Psychology, 52, 81-90
Eysenck, H. J., 1953, The structure of human personality. New York: Wiley.
Edwards, A.L., 1953, The relationship between judged desirebility

of a trait and the plobability that the trait will be endowsed. Journal of Applied Psychology, 37,90-93
// 情報。
吉田 民人 (著), 情報と自己組織性の理論, 東京大学出版会, 1990/7/1
/ 社会性。
吉田 民人 (著), 主体性と所有構造の理論, 東京大学出版会, 1991/12/1

/ 人間以外の生命。
// 行動。
デティアー(著), ステラー(著), 日高敏隆(訳),小原嘉明(訳), 動物の行動 - 現代生物学入門7巻, 岩波書店, 1980/1/1
// 心理。
D.R.グリフィン (著), 桑原 万寿太郎 (翻訳), 動物に心があるか—心的体験の進化的連続性 (1979年) (岩波現代選書—NS〈507〉), 岩波書店, 1979年
// 文化。
J.T.ボナー (著), 八杉 貞雄 (翻訳), 動物は文化をもつか (1982年) (岩波現代選書—NS〈532〉) , 岩波書店, 1982/9/24
// 社会。
今西 錦司 (著), 私の霊長類学 (講談社学術文庫 80) , 講談社, 1976/11/1
今西錦司『私の自然観』講談社学術文庫 , 1990 (1966) .
河合雅雄 (著), ニホンザルの生態, 河出書房新社, 1976/1/1
伊谷純一郎 (著) , 高崎山のサル (講談社文庫), 講談社, 1973/6/26
伊谷純一郎 (著) , 霊長類社会の進化 (平凡社 自然叢書) 単行本 –, 平凡社, 1987/6/1
/ 無神論。
リチャード・ドーキンス (著), 垂水 雄二 (翻訳), 神は妄想である—宗教との決別, 早川書房, 2007/5/25

＝＝ 辞書。
新村出 (編著) ,広辞苑 - 第5版, 岩波書店, 1998
Stein, J., & Flexner, S. B. (Eds.), The Random House Thesaurus., Ballantine Books., 1992

＝＝ データ分析の方法。
田中敏 (2006). 実践心理データ解析 改訂版 新曜社
中野博幸, JavaScript-STAR , 2007年11月9日 http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/ (2008年2月25日)

私が執筆した全ての書籍。その一覧。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Sex Differences And Female Dominance
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 性别差异和女性主导地位
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Половые различия и женское превосходство
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 男女の性差と女性の優位性

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Female-Dominated Society Will Rule The World.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 女性主导的社会将统治世界
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Общество, в котором доминируют женщины, будет править миром.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 女性優位社会が、世界を支配する。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Mobile Life. Settled Life. The origins of social sex differences.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 移动生活。定居生活。社会性别差异的起源。
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Мобильная жизнь. Урегулированная жизнь. Истоки социальных различий по половому признаку.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 移動生活。定住生活。社会的性差の起源。

Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) The essence of life. The essence of human beings. The darkness of them.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 生命的本质。人类的本质。他们的黑暗。
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) Сущность жизни. Сущность человеческих существ. Их тьма.
Iwao Otsuka (Aug 12, 2020) 生命の本質。人間の本質。それらの暗黒性。

Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) On Atheism and the Salvation of the Soul. Live by neuroscience!
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) 论无神论与灵魂的救赎。靠神经科学生存！
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) Об атеизме и спасении души. Живи неврологией!
Iwao Otsuka (Aug 21, 2020) 無神論と魂の救済について。脳神経科学で生きよう！

Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) Dryness. Wetness. Sensation of humidity. Perception of humidity. Personality Humidity. Social Humidity.
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) 干性。湿气。湿度的感觉。对湿度的感知。性格湿度。社会湿度。
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) Сухость. Мокрота. Сенсация влажности. Восприятие влажности. Личностная влажность. Социальная влажность.
Iwao Otsuka (Aug 24, 2020) ドライさ。ウェットさ。湿度の感覚。湿度の知覚。性格の湿度。社会の湿度。

Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) Gases and liquids. Classification of behavior and society. Applications to life and humans.
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) 气体和液体。行为与社会的分类。在生活和人类中的应用。

Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) Газы и жидкости. Классификация поведения и общества. Применение к жизни и человеку.
Iwao Otsuka (Aug 26, 2020) 気体と液体。行動や社会の分類。生命や人間への応用。

Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) Elements of livability. Functionalism of life. Society as life.
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) 宜居的要素。生活的功能主义。社会即生活。
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) Элементы благоустроенности. Функциональность жизни. Общество как жизнь.
Iwao Otsuka (Sep 3, 2020) 生きやすさの素。生命の機能主義。生命としての社会。

Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) The laws of history. History as a system. History for life.
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) 历史的规律。历史是一个系统。历史的生命。
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) Законы истории. История как система. История на всю жизнь.
Iwao Otsuka (Sep 4, 2020) 歴史の法則。システムとしての歴史。生命にとっての歴史。

Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Social Theory of Maternal Authority. A Society of Strong Mothers. Japanese Society as a Case Study.
Iwao Otsuka (Sep 20, 2020) 母亲权威的社会理论。强势母亲的社会。以日本社会为个案研究。
Iwao Otsuka (Sep 20, 2020) Социальная теория материнства: Общество сильных матерей. Японское общество как пример.
Iwao Otsuka (Sep 15, 2020) 母権社会論 - 強い母の社会。事例としての日本社会。 -

Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Mechanisms of Japanese society. A society of acquired settled groups.
Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) 日本社会的机制。后天定居群体的社会。
Iwao Otsuka (Sep 21, 2020) Механизмы японского общества. Общество приобретенных оседлых групп.
Iwao Otsuka (Aug 28, 2020) 日本社会のメカニズム。後天的定住集団の社会。

Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) Inertial Society
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) 惯性社会（中文版本）
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) инерционное общество
Iwao Otsuka (Oct 25, 2020) 慣性社会（日本語版）

Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) Neurosociology
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) 神经社会学（中文版本）
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) Нейросоциология
Iwao Otsuka (Oct 27, 2020) 神経社会学（日本語版）

Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) From transportation-centric society to communication-centric society. The Progress of Transition.
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) 从以交通为中心的社会向以通信为中心的社会。转型的进展。
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) От общества, ориентированного на транспорт, к обществу, ориентированному на коммуникации. Прогресс переходного периода.
Iwao Otsuka (Oct 29, 2020) 交通中心社会から通信中心社会へ。移行の進展。

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) The Sociology of the Individual -The Elemental Reduction Approach.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 个人社会学 -元素还原法。

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Социология личности -Элементный подход к сокращению.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 個人の見える社会学　- 要素還元アプローチ -

Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Introduction Of A White Tax To Counter Discrimination Against Blacks.
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 引入白人税以打击对黑人的歧视
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) Введение белого налога для противодействия дискриминации черных
Iwao Otsuka (Nov 9, 2020) 黒人差別対策としての白人税導入

Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) Personality and sensation, perception. Light and dark. Warm and cold. Hard and soft. Loose and tight. Tense and relaxed.
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) 人格与感觉、知觉。明与暗。温暖与寒冷。硬和软。松与紧。紧张与放松。
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) Личность и ощущения, восприятие. Светлое и темное. Тепло и холодно. Твердый и мягкий. Свободный и тугой. Напряженный и расслабленный.
Iwao Otsuka (Nov 20, 2020) 性格と感覚、知覚。明暗。温冷。硬軟。緩さときつさ。緊張とリラックス。

Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) Motherhood and Fatherhood. Maternal and paternal authority. Parents and Power.
Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) 母性与父性。母权和父权。父母与权力。
Iwao Otsuka (Nov 21, 2020) Материнство и отцовство. Материнская и отцовская власть. Родители и власть.
Iwao Otsuka (Nov 22, 2020) 母性と父性。母権と父権。親と権力。

Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) Sex differences and sex discrimination.

They cannot be eliminated. Social mitigation and compensation for them.
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) 性别差异和性别歧视。它们无法消除。对它们进行社会缓解和补偿。
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) Половые различия и дискриминация по половому признаку. Они не могут быть устранены. Социальное смягчение и компенсация за них.
Iwao Otsuka (Dec 15, 2020) 男女の性差と性差別。それらは無くせない。それらへの社会的な緩和や補償。

Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) Mechanisms of acquired settled group societies. Female dominance.
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) 后天定居群体社会的机制。女性主导地位。
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) Механизмы обществ приобретенных оседлых групп. Доминирование женщин.
Iwao Otsuka (Dec 18, 2020) 後天的定住集団社会のメカニズム。女性の優位性。

Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) Ownership and non-ownership of resources. Their advantages and disadvantages.
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) 资源的所有权和非所有权。其利弊。
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) Владение и не владение ресурсами. Их преимущества и недостатки.
Iwao Otsuka (Dec 24, 2020) 資源の所有と非所有。その利点と欠点。

Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) Wealth and poverty. The emergence of economic disparity. Causes and solutions.
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) 财富与贫穷。经济差距的出现。原因和解决办法。
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) Благополучие и бедность. Появление экономического неравенства. Причины и решения.
Iwao Otsuka (Jan 3, 2021) 富裕と貧困。経済的格差の発生。その原

因と解消法。

Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) Social delinquents. A true delinquent. The difference between the two.
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) 社会不良分子。真正的不良分子。两者之间的区别。
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) Социальные преступники. Настоящий преступник. Разница между ними.
Iwao Otsuka (Jan 4, 2021) 社会的な不良者。真の不良者。両者の違い。

Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) How to enjoy game music videos.
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) 如何欣赏游戏音乐视频。
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) Как наслаждаться игровыми музыкальными клипами.
Iwao Otsuka (Jan 8, 2021) ゲーム音楽動画の楽しみ方。

Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) Life worth living. Fulfilling life. The source of them.
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) 值得生活的生活。充实的生活。他们的源头。
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) Жизнь, достойная жизни. Полноценная жизнь. Источник их.
Iwao Otsuka (Jan 17, 2021) 生きがい。充実した人生。それらの源。

私の書籍の内容。それらの自動翻訳のプロセスについて。

ご訪問ありがとうございます！

私は本の内容を頻繁に改訂しています。
そのため、読者の皆様には、随時サイトを訪れていただき、新刊や改訂版の書籍をダウンロードしていただくことをお勧めしています。

自動翻訳には以下のサービスを利用しています。

DeepL プロ
https://www.deepl.com/translator

本サービスは以下の会社が提供しています。

DeepL GmbH

私の本の原語は日本語です。
私の本の自動翻訳の順序は以下の通りです。
日本語→英語→中国語、ロシア語

どうぞお楽しみ下さい！

私の略歴。

私は、1964年に、日本の神奈川県で、生まれた。
私は、1989年に、東京大学文学部社会学科を卒業した。
私は、1989年度の日本の国家公務員採用試験のI種区分の、社会学の職種に、最終合格した。
私は、1992年度の日本の国家公務員採用試験のI種区分の、心理学の職種に、最終合格した。

私は、大学卒業後は、日系大手IT企業の研究所に勤務して、コンピュータのソフトウェアの試作業務に従事した。
私は、現在は、企業を退職して、執筆活動に専念中である。